
紅～転生者の話～

aoken

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅く転生者の話

【Nコード】

N9594J

【作者名】

aoken

【あらすじ】

どこにでもいる平凡ではあるが友達がひとりもない大学生である男が、ある日刺し殺されてしまう。刺され意識がなくなり死んでしまった主人公。そして、意識が戻り気がついたら見知らぬ夫婦の顔があった。どうやら物語や二次創作でよくある転生をしてしまったらしい。

注意事項

片山憲太郎著の作品『紅』の二次創作です

この小説を読むにあたって以下の注意事項を読んでください

- ・ 作者はまったくの素人で小説を書くのは初めてです
- ・ 転生者のオリジナル主人公がこの小説の主人公です
- ・ 原作キャラクターを私なりに表現していますので原作とイメージが合わなくなるかと思えます
- ・ 小説の更新ペースが遅いです

以上の注意事項を読んでそれでも読んであげましょうというお方

作者の駄文ですが少しでも楽しい時間に費やせたらいいなと思います

第巻話 ある男の最後

部屋の窓から外を覗いて見ると雪が降っている。

今日もまた、まる一日を部屋の中でただパソコンをしているだけで終わってしいそうだ。大学の後期試験が先週をさかえにおわり、試験期間中は単位をおとしてなるものかと勉強に時間を費やしていたのが懐かしくなる。いざ、試験がすべておわるとすることがなく、ただただ部屋にこもりディスプレイを前に現実逃避をしているダメな男が俺である。

大学生の春休みは長い。この長期休暇をつかってバイトに励んだり、友達と遊ぶのもいいだろう。だが、俺はバイトをしてはいないし一緒に遊ぶ友達もいないただの孤男。つまらない男だなと思いつつ部屋の隅に鎮座している冷蔵庫へと手を伸ばす。

「なんだ、空っぽじゃないか。しょうがないコンビニにでも行くか。」

ボタンと冷蔵庫の扉を閉め、クローゼットの中からダウンジャケットを取り出し羽織る。机に置いてあるアパートの鍵と財布、そして手袋を持って部屋から出る。

「うう…寒い。」

息を吐けば白い霧となって消えていき、周りを見れば白い雪がアスファルトの上に積り無機質な道を白く染め上げていた。俺はそんな見慣れた道をいちべつしコンビニへ向けて歩き始めた。

「ありがとうございます。」

コンビニでの買い物を終え、今しがた買ったばかりの暖かい缶コーヒーを袋から取り出し一口飲む。うん、おいしい。この寒さだ、一缶120円の缶コーヒーはとてもおいしく感じられた。さあ早く部屋に戻ってまたパソコンで二次小説でも読もう。そんなことを考えながら少し早歩きで来た道を戻るのがあった。

帰り道の途中向かい側から一人の人が歩いてきた。

「なんだあの人、様子がおかしいぞ。」

歩くにつれて向かい側からくる人との距離が縮む。その姿は全身黒ずくめで、男とも女ともとれるような体格。深く帽子をかぶり顔が見えない。その姿だけでも俺の危険信号があれは近づいてはいけないといっているのだが、ふと黒ずくめの手元に目をやるとなにやら月明かりに照らされて鈍く光るものがあった。

「刃物か？それにしたってずいぶんとでかいな。なんで刃物なんて持ってたんだ、あの人。」

独り言を言う。その瞬間、いつの間にか目の前には黒ずくめがいた。

「っ！？なんで」

すか。と言い終わる前に俺は意識を失った。

第壱話 ある男の最後（後書き）

いかがでしたでしょうか

まずは主人公が転生者なので死ぬところからはじめました

まだ紅の要素が出てないのでなんともいえませんが、初めて書く小説なのでこれでいいのかなと私なりに思っています。

感想おまちしています

第弐話 ある男の始まり

苦しい、くるしい、息ができない。俺は必死で酸素をもとめて大声で鳴いた。

「おぎゃー、おぎゃー！」

「冥理よくやった。元気な男子だ。」

「……はあ、…はあ、私の私達の赤ちゃん。」

「ああそうだな、私達の子だ。そして、これで夕乃がお姉ちゃんだな。」

「……お姉ちゃんですか。わたしがお姉ちゃん。」

夕乃は少し恥ずかしそうにうつむく。そして、父に質問した。

「あの、この子のお名前はきまっていますか。」

父は、ああと一言間を置いてこう言った。

「女子なら散鶴、男子なら弥彦と前から冥理と御父さんと相談して決めていた。だからこの子の名前は弥彦。そう、弥彦だ。」

「……弥彦、やひこ。うん、いいお名前ですね。」

夕乃はこれから自分の弟となる赤子、弥彦を暖かい目で見つめて頷いた。

「さあ、さっそく弥彦を御父さんと真九郎君に紹介しなくてはね。

冥理、本当にお疲れ様。あとはゆっくり休みなさい。」

父は冥理にそう優しく言うと言うと冥理は出産の疲れかゆっくりと目を閉じ眠りについた。

弥彦の誕生から6年の月日が流れた。その間に第三子である散鶴が生まれ、崩月の内弟子である紅真九郎は崩月の屋敷から離れ、駆け出しの揉め事処理屋兼高校生として独り暮らしを始めた。夕乃は真九郎と同じ学校である星領学園へと進学し真九郎の上級生である。ちなみに星領学園への進学を真九郎に薦めたのは夕乃である。

そして紅真九郎を中心とした物語が始まるうとしていた。

第弐話 ある男の始まり（後書き）

他の方の作品を読んで私の作品と比べてみると文章の短さが目立ちますね。

ほかにも文法的なものから文字の読みやすさ、私のは駄文すぎますね。

感想おまちしてます。

第参話 ある朝の一幕（前書き）

頑張つて文章を長く書いてみました

少しでも読んでくださる方の暇つぶしになればと思います

第参話 ある朝的一幕

布団の中、肌寒さを感じ目が覚めた。目を開き布団からもそもそもとゆっくり時間をかけて出る。まだ三月の初め、春が近いからといっても寒いのだ。まだ眠い目蓋を擦って考える。この世に生を受けてはや6年、俺は崩月弥彦として生まれ変わった。前世での突然の死、大学生だった頃の俺を記憶を精神を魂をこの新しい体である崩月弥彦に引き継いでいる。最初のころは驚いたものだ。死んだと思っただら見ず知らずの親子の子供として生まれ変わっていたのだから。まるで物語や二次創作である転生そのものである。だが、6年という月日は俺にこれは現実の話であると教えてくれた。

そこで思考をやめる。部屋にたて掛けてある時計に目をやる……。

「5時10分！？まずい遅刻だ……。」

俺は急いで布団を片付けて、子供らしいかわいい柄のはいったパジャマを脱ぎ胴着に着替える。合気道の胴着に近い服装で白晒し筒袖前合わせの上衣に、白晒しズボン状の股下こしたである。着替え終わったら急いで部屋から出て道場にむかう。

崩月家は都心から少し離れた住宅地の一角を占める古めかしい日本屋敷だ。広い敷地を囲む高い塀、そして立派な門構え、母屋の奥には道場がある。なんとも立派な家の佇まいだと改めて思う。そんなことを弥彦が考えている間に道場に着いた。

道場の中央には一人の男が正座をしていた。その姿は壮年で弥彦と同じ胴着を着て静かに静寂に佇んでいた。男の名は崩月法泉、崩月家の当主であり弥彦の祖父である。法泉は弥彦が着たのを察し厳格

な渋みのある声で言った。

「……遅刻だ、弥彦。」

「すみません。」

弥彦はすぐに謝罪した。

「まあいい、とつとと稽古始めるぞ。」

法泉は立ち上がり遅刻のことはもういいと言、言って稽古が始まった。

一時間近い時間の間に、弥彦は数え切れないほど殴られ、蹴られ、投げ飛ばされ、弥彦の体はもう限界だった。

「今朝は、これまで」

全身汗まみれでもう立ち上がれず道場の床に倒れこんでいる弥彦とは対照的に法泉は涼しい顔で言った。

「弥彦立て、朝飯を食いにいくぞ。だが弥彦は飯を食う前に井戸で汗を流してからな」

「……はあ……い」

弥彦は息たえたえに返事をしてゆっくりと息を整えてから静かに法泉を向かえに正座をしてお辞儀をした。

「ありがとうございます」

「ああ、ちゃんと汗を流して体の熱を冷ましてから居間に来いよ」
「じゃあな、と弥彦の手を振り法泉は道場から出て行った。

法泉が道場を退出するのを確認してから弥彦は再び床に倒れこんだ。

「法泉のお祖父ちゃん、強すぎ。まったく相手にならなかったな。
普段はただの遊び人のお祖父ちゃん なのに稽古が始まったらあれだもんな」

これには稽古を始めた当初は驚いたものだ。いつも女の人と遊んで

いるお祖父ちゃんが、いざ稽古になったら人が変わったように厳格な人になる。これは夕乃のお姉ちゃんにもいえることなのだ。稽古は2歳の頃から法泉のお祖父ちゃんと夕乃のお姉ちゃんを師匠として仰ぎ、弥彦にとっては兄弟子にあたる紅真九郎と一緒にしていた。

真九郎さんいわく、崩月家の人間はいざ戦いになると一切の情を挟まないらしい。これは崩月家の人間全てに当てはまる傾向であって、もちろん弥彦もだよ、と優しい笑顔で真九郎さんに言われたものだ。弥彦が稽古の時に無意識に意識の切り替えをしていることを気づいたのはこの真九郎の言葉があったからだ。だが、一度死んだ身である弥彦は前世では稽古はおろか運動が苦手な部屋に引きこもっていた男。稽古をしていてそんな意識を切り替えるような器用な真似ができるはずもないような、と弥彦は不思議に思っていた。

そもそもこの崩月弥彦の身体が以上だった。稽古を始めようと思っただのは真九郎と姉である夕乃の崩月流の稽古を見学してそのあり方が以上だったからだ。まるで漫画やアニメであるかのような武術に目を奪われた。俺もあんな風に強くなれたら…。

稽古が終わった後の姉に自分にもその武術を習わせてくれと頼んだ。最初に姉は驚いた表情をしたがすぐに稽古の時にように厳格な顔に戻り、弥彦にはまだはやいからだめです。といういつてんばりだった。それでも弥彦は引かず頼み込んだ。それを見かねた法泉が、ならおれが訓えてやる、という一言で姉も折れて真九郎と一緒に稽古に参加した。

そこまでやるのかといたくなるような厳しい稽古の日々だった、現在も厳しいのは変わりはないが。それから今に至るまでの4年間、弥彦にとっての地獄のような日々が始まりだった。保育園には行かず法泉の指示に従い、その全てを崩月流の修得に捧げた。

稽古で体中の骨を折られた、砕かれた、叩き潰された。何度も、何度も。内臓の位置さえ変わるような修業もした。常識を理性を限界をも超えさせる肉体改造。骨も、肉も崩月の力を使うのに適したものとかえていった。そんな厳しい稽古に耐えうる真九郎さんもそうだが、まだ幼い崩月弥彦の体を異常といわずしてなんとはいえまいだろう。

それとも、やはり異常な身体性能と戦闘技術を持つ崩月家という一族が異常なのだろうか。おそらくは後者なのだろうが、そのことについては家族には聞いていない。いや、聞けないというほうが正しいだろう。弥彦自身、聞くことが怖いのだ。自分たちの一族が化け物であって人間ではないといわれるのが怖いのだ。いくら精神年齢がもうすぐ30近くなるからといっても所詮は子供で前世は引きこもりの孤男。怖いものは怖いのだ。

さて、ずいぶん長いこと考え込んでしまった。汗と熱は十分に引いたが、汗が乾いてべたつくのでさっさと井戸にいつてこの不愉快なべたつきを流そう。弥彦は道場に一礼をして庭にある井戸に足をむけた。

庭に出て井戸水を汲み上げ、勢いよく頭から水をかけた。

「っ！！さすがに冷たいな。それに季節もまだ春にはなっていないし余計に冷たい」

弥彦は文句を一言つぶやくと水が滴る体をタオルで拭く。拭きおわったタオルを丁寧にたたみ縁側に上がり、居間に向かうために廊下を進んだ。

おいしそうな朝食の匂いが廊下に漂ってきた。今朝はご飯と味噌汁と納豆と、あとはなんだろう？そんな朝食の献立を匂いだけで当て

てみようとする自分に弥彦は少し恥ずかしくなつて苦笑し居間にたどり着いた。

「おはよう。弥彦」

「おはようございます。弥彦」

「おはよう。やひこお兄ちゃん」

三者三様の朝のあいさつがあつた。上から弥彦の母である崩月冥理、次が姉の崩月夕乃、そして最後が1つ年下の妹である崩月散鶴。居間にいない父は現在、海外に出張中である。

「おはよう。母さん、夕乃お姉ちゃん、散鶴。今朝は鮭か。うん、おいしそう」

三人にあいさつを返し、食事の席に着く。法泉の祖父の姿が見当たらない。

「あれ？お祖父ちゃんはまだきてないの？」

稽古が終わつた後、祖父は先に居間に向かつたはずなのだが祖父がいないので弥彦が尋ねた。

「お祖父ちゃんは、なんでもご近所の高橋さんに用があるとかいつて朝食も食べずに出ていったわよ。まあいつもの色恋沙汰でしょ」
「やれやれといった感じで冥理が苦笑して答えた。あの人は相変わらず元気な老人だなと弥彦はあらためて思い直し朝食を食べ始めた。

第参話 ある朝の一幕（後書き）

いかがでしたでしょうか

文章を長くしてみましたがいかが書いているこれは大変なものだと感じました

主人公の稽古を始めた動機、崩月家の異常なところ、朝の一幕

上記の点を中心に書いてみました

感想おまちします

第四話 ある男は妹を心配する（前書き）

小説を書くのは難しいです

片山さんの『紅』の世界観を壊さないように頑張ってはいるんですが
オリジナルキャラがいる時点で矛盾が生じてしまいます

第四話 ある男は妹を心配する

「うちそうさまでした」

弥彦は朝食を食べ終わると食器を片付け始めた。

台所で食器を洗っていた冥理が弥彦から食器を受け取り、弥彦に言った。

「弥彦、今日はお母さんの買い物に付き合ってもらいたいから準備しといてね」

「はあ〜い」

返事を返し、居間に戻るとテレビを前にニュースを見ている夕乃と散鶴がいる。

散鶴はニュースなどを見てもまだわからない年齢なのでつまらなそうだ。

夕乃の姿を見てみると星領学園の制服を着ている。あれ？今日は日曜日だから学園は休みなんじゃ…。

「夕乃お姉ちゃん、今日は学園は休みじゃないの？」

「確かに今日は日曜日で学園はお休みですよ。お休みなんですけど、来月にある入学式の準備を手伝ってほしいと生徒会の方にお願いされました、だから今日は準備のお手伝いをしに学園に行くんですよ」

なんとも人のいい姉である。休日に学校行事の準備を手伝うとは、弥彦には面倒で無理だ。

それにしても姉は一年生なのに生徒会に頼まれごとをされるほどの人材であることに弥彦はさすがは大和撫子だなと改めて思った。

「うふふ…。真九郎さんが高校生となる記念すべき入学式。そして、真九郎さんの学園生活…ああ！今から思うだけで楽しみです」

前言撤回。

「……………夕乃お姉ちゃん」

この真九郎さんへの溺愛すぎるほどの好意。真九郎はこの崩月家で八年間ほど内弟子兼居候兼家族として屋敷で一緒に暮らしていた。そのなかでも夕乃は真九郎のことを弟のように接し、今では真九郎を異性として愛している。その真九郎は中学を卒業すると同時に崩月の屋敷を出て一人暮らしを始めた。とはいってもそれはほんの二週間前からではあるが。

真九郎はなれない一人暮らしと高校の入学準備と、自分ではじめた仕事で忙しいらしい。

弥彦は真九郎がはじめた仕事については聞かされていないのでわからないが、なんの仕事だろうと中卒ですぐに自立しようとする真九郎に対して尊敬の念をおいている。前世ではただ流されるように中学、高校を卒業し大学に入学。大学に入学したものの何の為に自分はここに来たのだろうと考え、部屋に引きこもる日々が続く生活をしてきた。そんな自分と真九郎とを比べるだけでもおこがましいが、弥彦には真九郎はまぶしくみえるのだった。

洗い物が終わった冥理が台所から居間にやってきた。

「あら、夕乃に散鶴との留守番を頼もうと思っていたのだけど学園に用があるんじゃない無理ね。それじゃ、散鶴も一緒にわたし達とお買い物に行きましょう」

「ちづるも、やひこお兄ちゃんといく」

散鶴からの了承も取ったしこれでよし、といったふうに冥理が頷くと家族それぞれの準備に取り掛かるのだった。

崩月の屋敷は都心から少し離れたところにあるので買い物には車か電車を取り継いで行くことが多い。今回は買い物で荷物が多くなるそうなので冥理が車を運転する。車の後部座席に弥彦と散鶴を乗せて一行は都心へと向かう。弥彦は移動中で散鶴が飽きないように散鶴の遊び相手をしながら運転に集中する冥理に聞いた。

「今日はなにを買いに行くの？夕飯の材料は買うだろうけど、それなら俺は買い物に付き合う必要ないし。ねえ、なに？」

「弥彦の言うとおり夕飯の材料と、入学式で着るための服を買いに行くのよ」

入学式？誰の？真九郎さんのか、いやいや真九郎さんは制服だろうしな。と弥彦が自問自答してから再度質問する。

「お母さん、入学式って誰の？」

「もちろん！弥彦よ」

「……っえ！？俺？」

「弥彦、あなた今何歳？ちょうど小学校に通う歳よ。弥彦は稽古で忙しくて幼稚園に行かせることができなかったからね。さすがに小学校には行ってもらおうよ」

「……マジですか」

「マジよ」

そういえば俺は幼稚園行つてなかつたな、とすっかり弥彦は忘れていた。幼稚園のことなど考えてはいなかった、稽古で忙しかったのもあるだろうが中の人はもう二十歳は超えているのである。それに今更、幼稚園つて小学校つて……。そういえば散鶴は幼稚園に通っているな、と隣で行儀良く座っている妹に目をやる。

「散鶴。幼稚園はたのしいか？」

「……うん」

なんだその間は、しかも返事のはぎれが悪い。まさか…いじめられているのか！おいおい、兄としては見過ごせないぞ。そこで冥理が苦笑しながら弥彦に言った。

「幼稚園の先生から聞いたのだけど、散鶴は幼稚園では友達も作らずに一人で遊んでいるみたいなの」

「みたいなのつて、お母さんはそれでいいの！」

弥彦は声を大にして返事を返した。友達のいない辛さは弥彦はよく知っている。前世では彼も友達がいなかったのだから。幼いときに友達の土台を固めないとそのままずると友達がいない生活が続く。それが弥彦にはとても嫌だった。

「やひこお兄ちゃん、おかあさんをしからないで。ちづるがいけないの」

今にも泣き出しそうな散鶴が弥彦の服の袖を掴み、弱弱しい声で言った。それで我に返った弥彦が散鶴の頭をやさしく撫でながらすまなそうに言った。

「ごめんな、散鶴。お母さんを叱ってたわけじゃないんだ。馬鹿な

俺の八つ当たりだよ……。ごめんなさい、お母さん。急に熱くなって怒鳴ったりして」

ううん、いいのよ、と冥理が一言返し暗くなつた車内の空気を変えるように明るい声で弥彦と散鶴に頼みごとをした。

「さて、入学式でうちの自慢の弥彦がよその子に負けないぐらいかっこいいところよそ様にお披露目するんだから最高の服を選ばなくちゃね。散鶴、お母さんと一緒に弥彦の服を選ぶの手伝ってね！弥彦は着せ替え人形になつてもらうわよ」

「うん！ちづるにまかせなさい」

「頼もしいわね、散鶴」

弥彦をおいて盛り上がっているふたりに、やれやれと苦笑して。

「お手柔らかに頼みます」

としか弥彦は言えなかった。

第四話 ある男は妹を心配する（後書き）

いかがでしたでしょうか

妹がいない作者的には散鶴のような妹はグッドです

さて、主人公がまた小学生をする事態みたいですがいったい何組になるやら

日常パートをもっとうまく書ければな、と思う話でした
感想おまちしてます

第五話 ある男は事件に巻き込まれる（前書き）

今回の話は入学式とオリジナルヒロインの登場回です

文章を書いていて自分の思うようなものを書けない難しさを改めて感じました

この小説を読んでいた方が思いのほか多いみたいで驚きました

さすがは『紅』でしょうか

片山先生の世界観をなるべく壊さないように書くのを頑張りますのでなにとぞ、ご愛読をお願いします

第五話 ある男は事件に巻き込まれる

4月1日 早朝 6:10 崩月家道場

「…はあ、…はあ。ありがとうございます」

「ありがとうございます。どうだ弥彦、体の調子は」

毎日の日課である朝稽古を終え、今朝も師匠である祖父の法泉に叩きのめされた弥彦は虫の息だった。だが、この稽古をはじめめて4年間毎日叩きのめされるだけではなく、弥彦は確実に強くなっていた。

「はい、いたって好調です。最近はお祖父ちゃんに叩きのめされても疲労や体の痛みが日常生活に支障がないくらいに引くようになりました」

「そうか、さすがは冥理とあいつの息子だな。そして、おれの孫でもある。その調子で日々精進するんだ、いいな」

稽古が終わったからか法泉は普段の遊び人の表情にもどり笑顔で孫である弥彦の頭を大きな手で撫でた。撫でられた弥彦は恥ずかしくなり法泉の手を払うと

「お祖父ちゃん！俺はガキじゃないんだから頭を撫でるのはやめてくれ」

口では否定しているが弥彦は嬉しいのだ。そんな弥彦を見て法泉は

「なにを言っているんだ。お前はまだ餓鬼だよ、ああクソ餓鬼だ」

法泉は弥彦の恥ずかしがる姿を、わっはっはと笑いとばし道場の出

入り口に向かった。

出入り口付近で法泉はあることを思い出し振り返ると弥彦に言った。

「そういえば今日は弥彦の小学校の入学式だったか。弥彦、夜に大事な話がある。入学式で浮かれて帰りが遅くならないようにな」

そういつと法泉は道場から退出した。

道場にひとり残された弥彦は大事な話ってなんだろう、と考えるがすぐにやめた。そして

「俺が小学校の入学式で浮かれるかよ！中の人はもう二十歳過ぎだよー」

と弥彦以外誰もいない道場で弥彦は文句を言うのだった。

弥彦は庭にある井戸で桶に井戸水を汲み上げ頭から水を派手にかける。毎度思うが冷たい。

「……俺は今日からまた小学生か。なんだかな、うまくやっていけるだろうか。友達百人できるといいな」

友達百人は冗談として、友達がひとりでもできることを祈る外見は子供、中の人は大人の男子がそこにはいた。でも小学生の、しかも一年生が相手か…若い子の元気すぎるパワーに圧倒されそうだと弥彦は思った。さすがに前世では友達がいなくても今の俺ならきつと大丈夫だろうと確証のない期待を抱きながら濡れた体をタオルで拭き終わらせると家族と朝食の待つ居間に向かうのだった。

朝食を食べ終えた弥彦は居間のテレビでニュースを見ていた。

無表情でたんたとニュースを読み上げているニュースキャスター

から読み上げられるニュースはどれもひどいものだった。通り魔、殺人、強姦、児童誘拐。どれもこれも犯罪のものばかりである。弥彦は朝から気分の悪いものを見たとき少し不機嫌になった。いまの世の中はどうかやら正義よりも悪が強いらしい。警察が無能とはいわないが、これほどの犯罪が毎日のように起こっている現状をみると悪が強いとしかいえない、それも絶対的な強者。そんなことを弥彦が考えていると居間におめかしした冥理と散鶴がやってきた。二人の姿をみて弥彦は

「お母さんは相変わらず若く見えるよね、三人の子持ちとは思えないほどの外見だよ。特に今日みたいに着飾るとなおさらさ」

「ほめてくれるのは嬉しいけど、弥彦も早く着替えていらっしやい。そろそろ出発するわよ」

冥理にせかさされ弥彦は自室に着替えにいくところにする前に散鶴の近くによった

「散鶴、その服よく似合ってるぞ」

散鶴の頭を撫でながら弥彦が言うと散鶴は恥ずかしそうにうつむいた。

「まったく、弥彦は人をおだてるのがお上手ね。でも時間がないっていったでしょ。ほら、さっさと着替えてくる」

「はあ〜い」

そそくさと弥彦は居間から立ち去った。

弥彦の着替えが終わり準備が整うと冥理が運転する車に乗り小学校へと向かうのであった。

弥彦の通うこととなる小学校は公立校でどこにでもある普通の小学校だ。姉である夕乃の通う星領学園から百メートルほど離れたところに位置してある。星領学園も今日は入学式のように夕乃は生徒会からの頼まれごとがあるようで今朝から居なかった。星領学園の入学式には真九郎さんが新入生として入学するので夕乃は、はりきっていた。小学校の入学式と日時が被ってしまったから小学校の入学式には冥理と散鶴、高校の方には法泉が保護者として出席するようになっていいる。入学式が終わりしだい一度合流して真九郎と弥彦の記念写真を撮るそうだ。

弥彦達一行が小学校に着くと校門前は人ばかりでこったがえしていた。新入生とその保護者が集まるのだから当たり前か、と弥彦は考えてから人ごみの中へと進むのだった。どうやら一度、新入生と保護者を分けるようだ。新入生は教室へ、保護者は体育館へと誘導する教職員がいる。それを見た冥理は

「どうやら、ここでお別れみたいね。弥彦、わたしと散鶴は体育館に行くけど。しっかりやんなさいよ」

ばんばん、と弥彦の背中を叩く冥理。弥彦はわかってるよ、と一言返事を返すと教室のある校舎へと足をはこぶのだった。

校舎に入る前に自分が何組に割り当てられるのか知る必要があるな、と弥彦が考えているとその姿を見た教職員が弥彦に駆け寄ってきた。

「おはよう、君新入生だよ。クラス分けの受付が下駄箱前でやっているから一緒に行こうか」

そついうと弥彦の手をとり、教職員は下駄箱前へと案内するのであった。

クラス分けの受付で弥彦は名前を言うと、どうやら一年三組が弥彦のクラスになるようだ。教職員にひとりで教室まで行ける？と言われた弥彦は行けますよ、と返事を返す。えらいね、と教職員にほめられた弥彦は一礼すると自分に割り当てられた教室に向かうのだった。

一年三組と書かれたプレートがある教室前に辿り着くと弥彦は立ち止まる。

「落ち着け俺、人間関係は第一印象が大事だ。うん、そうだ……」

中の人は二十歳を超えているが久しぶりの小学校で弥彦は緊張していた。ひとり教室前でぶつぶつと呟く弥彦に急に後ろから声がした。

「なに教室前でひとり突っ立ってんのよ、邪魔」

弥彦に声をかけた人物は弥彦を押し退けて教室に入っていた。急なことで面をくらった弥彦は自分を押し退けた人物の後ろ姿を見た。ながれるような綺麗な長髪の黒髪、女子？

「ちょっと、待ってよ」

弥彦はあわてて教室へと入った。

新入生が全員集まった教室では担任となる菅原先生が自己紹介をしている。先生の自己紹介が終わると今度はみなさんに自己紹介をしてもらいましょう、と先生が言った。

名前の順でそれぞれ席を立ち、名前、趣味、軽く一言、といった無難な自己紹介が始まった。弥彦を押し退けた少女の番になり弥彦は少女に目をやった。

「わたしの名前は天王寺 奉莉、趣味は空手。よろしく」

なんともシンプルな自己紹介だと弥彦は苦笑し、空手が趣味なのか怒らせたら口より手が先にでてきそうだとひとりごちた。そんな弥彦と奉莉の目が合ったが、彼女は弥彦には興味なさそうにすぐに視線をはずした。そして数名の生徒の自己紹介をはさんで弥彦の順番がきた。弥彦はあわてて席から立ち上がり大きな声で

「俺の名前は崩月弥彦！趣味は稽古と漫画、気軽に下の名前で弥彦、と呼んでくれ」

ふうー緊張した、と内心では心臓ばくばくの弥彦は席に座る。大声で自己紹介したせいかクラス全員が驚いている様子だった。担任の菅原先生は弥彦君は元気がいいですね、と弥彦をほめるのだった。クラス全員の自己紹介も無事終わり、菅原先生の指示で体育館に移動しますよ、と言われ生徒は廊下に名前の順男子、女子二列に分かれて並ぶ。弥彦の隣には奉莉の姿があった。奉莉も自分の隣に弥彦がいることを気づくと弥彦に話しかけてきた。

「あんた、さっきの自己紹介で趣味は稽古とか言ってたけど…なんの稽古してんのよ」

ものおうじしない態度で弥彦に聞く奉莉。弥彦は少し考えてから

「うーん、武術かな」

「またずいぶんとアバウトな答えね。空手や柔道、合気道みたいなものでもやってるのかしら」

「まあ、そんな感じ」

ふーん、と胡散臭そうな表情で奉莉は弥彦から話をきりあげる。弥

彦はそういえば祖父である法泉が崩月流は我が家に伝わるケンカ殺法みてえなもんだな…、と弥彦の師匠である法泉は崩月流を表現していたことを思い出した。

体育館で行われた入学式は校長の長い式辞からはじまり、各教室の担当教師の紹介から退屈な話へと移り、入学式は午前十一時半過ぎにようやく閉幕した。生徒はまた教室に集められ担当教師からまた明日会いましょう、と一言もらい弥彦の入学式は終わった。弥彦は校門前で記念写真を真九郎達と合流して撮る予定があつたのでそそくさと校門に向かった。

校門前ではすでに新入生とその保護者でごったがえしていて、これでは合流は無理かな、と弥彦が諦めかけているとちようど校門からひとり出るところの奉莉を見付けた。

保護者の姿が見当たらないのでこれは俺と一緒にかな、と弥彦は思い奉莉に近寄った。

「つよ！お前もこんな人ごみじゃ親と合流できんわな。少し一緒に歩かないか」

弥彦の突然の登場に奉莉が驚いた顔をしたがすぐに表情を戻すと

「なんでわたしが今日会ったばかりの馬鹿と一緒に歩かないといけないのよ」

と弥彦にキツイ言葉をあびせた。

「馬鹿つてお前、そりゃひどいぞ。まあ、馬鹿かどうかは置いといて天王寺もこの人ごみや親とは合流できんだろ。この少し先に公園があるだろ、そこでたい焼きの販売車が来てるのを学校に来る前

に見たから一緒に食いにいかないか？もちろん、俺のおごりで」

たい焼きとおごり、という言葉に反応したのか奉莉は

「ふん、しょうがないわね。確かにこの人ごみじゃパパとママに会うのは無理そうね。あんたに付き合っただけ。勘違いしないでよね、しょうがなくよ」

なんともツンデレのテンプレのような言葉をいう奉莉に弥彦はやはり子供だなと苦笑しながら、行こうか、と奉莉を先導するように公園へと向かうのであった。

公園のベンチに奉莉を待たせ、たい焼きを両手に一個づつ持った弥彦が奉莉に片手に持ったたい焼きを差し出す。

「熱いから気をつけろよ」

「わかってるわよ」

奉莉はたい焼きを受け取ると、いただきます、と一言おいてから一口たい焼きをかじる。

「うん、おいしい」

その幸せそうな奉莉の表情を見て弥彦はよかったな、と言ってから自分の持っているたい焼きを食べ始める。

二人がたい焼きを食べ終わると、そろそろ校門も落ち着いてきた頃合いかな、と弥彦は考え

「そろそろ学校に戻ろうか」

「そうね、パパとママが心配しているだろうし戻りましょう。たい

焼き、ごちそうさま」

弥彦に軽くお礼を言うと奉莉はベンチから立ち上がり、弥彦と一緒に学校に戻るのだった。

その帰りの道中、弥彦は道に駐車してある不審な車に目が留まった。まあ、ただの路上駐車だろ、と車から視線を外し、不審車の横を通り過ぎようとしたとき不審車から突然複数の人間が降りてきた。それに驚いた弥彦と奉莉はなすすべもなく複数の人間に囲まれて車に押し込められた。

第五話 ある男は事件に巻き込まれる（後書き）

いかかでしたでしょうか

文章が今までで一番ながい話となりましたが読んでいて苦痛を感じ
ませんでしたでしょうか？

どうも長い文章になると駄目です…。

感想おまちします

第六話 ある男は少女を守る（前書き）

この回の話を読むにあたっての注意事項です

話の途中で性描写が含まれています。そういった描写がお嫌いな方は今回の話は避けて下さい。

R15タグを今回から入れさせてもらいました
それではご愛読のほうをよろしく願います

第六話 ある男は少女を守る

車に押し込まれて何分、何十分、何時間経つただろうか。

押し込まれて直ぐに目隠しと両手両足を丈夫な縄のようなもので縛られ、身動きの自由を奪われてしまった。口を開いて、声を出せば罵声のうえに殴られた。幸いにも弥彦の直ぐ隣に天王寺 奉莉がいることは確認できる。目隠しされた上でも彼女の震える体が確認できるのである。そんな彼女を弥彦は心配しているのだが、弥彦も今の状況が怖かった。

前世で犯罪なんて巻き込まれたのは自分が殺された瞬間ぐらいなもので、それっきりは普通の生活だったのだから……。だが、そんなこともいっていられる状況ではないことは頭では理解している、理解はしているが弥彦の内面が心が今の現状を怖がっているのだ。

車が停止した。どうやら、目的地に到着したらしい。両足に縛られていた拘束を外され、目隠しを外された。そこで弥彦は初めて自分を誘拐した犯人達を確認した。どいつも屈強な肉体を持つ大人の男。下品な笑みを顔に浮かべて奉莉を見ている。奉莉は悲鳴をあげようとするが直ぐに犯人のひとりに口をふさがれる。

「車から降りろ、よけいなことを考えてたら、ただじゃすまんぞ」

どすのきいた声で手元にナイフをちらつかせ弥彦と奉莉を脅す。

二人はそれに従うと車両から降りた。弥彦は自分達が連れてこられた場所がどこかわからないか回りを見渡す。どうやら海のある港まで連れてこられたようだ。これではどこかはわからないと弥彦は諦めた。二人を港近くにある大きな倉庫へと犯人達は誘導した。

重い大きな扉が開かれる、中には弥彦達の他にも誘拐してきたみられる子供が檻の中に複数人いた。子供達の様子はみな衰弱しているように弥彦にはみられた。

「ほら、とつとと中に入れ」

犯人達は弥彦と奉莉を子供達と同じ檻へと閉じ込めて、扉の鍵を閉めると倉庫の奥の方へと消えていった。犯人達が消えたことを確認すると弥彦は奉莉に近寄った。

「……………天王寺、大丈夫か」

大丈夫なわけがないのだが弥彦には奉莉にかけるいい言葉が見つからずこつこつしかかった。

「大丈夫じゃないわよ…。これからわたし達、どうなっちゃうの…」

「大丈夫だ、きっと俺達が行方不明になったことを両親が気がついて警察に連絡してるはずだ」

「警察の助けなんてくるわけじゃない！きっと、わたし達はこつこつ…」

それから先を言わせないように弥彦が

「それ以上言うな、大丈夫。きっと助けがくるさ」

と奉莉を励ますことしかできなかった。崩月の稽古でいくら外面を鍛えても内面の強さがともなわない自分の無力さに弥彦は悔しくて唇を噛みしめた。

弥彦たちが誘拐されて2日が経った。その間弥彦たちを捕らえてい

る檻越しに軽い食事と水を与えられ、6名の新しく誘拐してきた子供が檻に入れられた。

弥彦は檻の中で静かにうずくまって座っている奉莉に目を向けた。綺麗だった彼女の黒髪は荒れ、小さな手足は汚れ、今にも壊れてしまいそうな様子に弥彦は目を背けることしかできなかった。

食料の配給が終わると犯人の一味であるひとりの男が奉莉と弥彦を指を刺して指名した。

「そのガキとそこでうずくまってるガキ。出る」

突然の指名に弥彦は驚いたが直ぐに落ち着いて、うずくまっている奉莉の手を取り、出よう、と彼女に一声かけて立ち上がらせて檻から出るのだった。

男の後に無言で付いていく弥彦と奉莉。弥彦は奉莉の俯いた顔を覗く、不安で押しつぶされそうな表情をする奉莉をみて弥彦は繋いだ手をつよく握ることしかできなかった。

倉庫の奥にある扉の前に着くと

「入れ」

と中から声が聞こえ、弥彦たちを誘導した男は二人を扉の中へと押すと直ぐに扉を閉めた。

扉の中には複数の男達とその男達が囲むように、ひとりの、周りの男達とは比べ物にならないくらいの体格のでかい男がいた。

「そう怖がるな、すぐに終わる」

なにが、というまえに弥彦と手を繋いでいた奉莉をとりまきの男達が引き離した。

それに抵抗しようとした弥彦は顔を殴られ、両肩を二人の男に抑えられた。

「そう恐い顔をするなよ、少年。お前にはいいものをみせてやる」「いいものだって？こんな薄汚いところだなにをみせるつもりなんだよ！」

弥彦にはなんとなくわかっていた。こいつら奉莉を俺の前で犯すつもりだ、と。

弥彦の表情から悟ったのか体格のでかい男は薄汚い笑顔で

「察しがいいな少年。そうだよ、お前の目の前で愛しの彼女を壊してやるよ。感謝して欲しいな少年、私のはからいで彼女が壊れていく様をみることができのだから」

ハッハッハッハ、と耳障りな笑い声とともに弥彦に最悪な言葉を吐いた。

「そうだ、少年の名前を教えて欲しい。名も知らぬ男の前で少女を犯すのもつまらないからな」

「……………」

弥彦は今にも両肩を押さえつけいてる男を殺して、目の前にいる外道を殴りたい衝動にかられた。

黙っている弥彦がお気に召さないのか、弥彦の顔面に男は蹴りをはなつ。それでも黙っている弥彦に飽きたのか、興味が失せたのか、男は奉莉に近づいていった。

「やめて！こないで！」

男から逃げるように奉莉は床を這う。だが、部屋の隅へと追い詰められた奉莉はもう逃げられなかった。その様子をとりまきの男達が笑い、男が奉莉の着ている服に手をかけた。

「いやー！」

奉莉の必死の抵抗もむなしく、スカートとショーツを男にまるで獣が獲物をむさぼる様に脱がされた。とりまきの男達が奉莉の暴れる両手両足を押さえつける。

その状況を弥彦はただ見ていることしかできない。両肩を抑えられ身動きができない。

奉莉が男に犯される姿をこれ以上みるに耐えない弥彦は目を背けようとした。が、

「……………弥彦…たすけて…やだよ…弥彦…」

嗚咽をまじえて助けをもとめる奉莉の姿をみて弥彦の中にあるなにかが目覚めた。

奉莉を助けたい、彼女をあの外道どもから救いたい、と。

心の中にある封が解かれる。

「……………邪魔だ」

弥彦は自分の両肩を押さえ込んでいた男達をその腕力だけで吹き飛ばす。

骨を裂けるような激痛。右ひじの皮膚を内側からなにかが打ち破る。

打ち破ったそれは鬼の角。そこからあふれんばかりの力が全身を駆け巡る。体中の血液が沸騰する。込み上げてくる殺戮衝動。己にあふれる力を統率し眼前の敵を破壊する。敵は複数、救うはひとり。我に勝てぬ道理なし。

弥彦のあまりにも豹変に男達はつばをのむ。弥彦の姿をみて奉莉を犯そうとしていた男達の主犯格が弥彦の前に立ちはだかる。

「……その右腕に宿る角。お前、裏十三家の崩月の戦鬼か！」

裏十三家？崩月？戦鬼？今の俺にはそんなことはどうでもいい。

「そんなことは知らん。それよりもお前のような外道は俺がここで潰す」

そういうが早く、弥彦は男の懐に飛び込む。男はその素早さに驚くが瞬時に両腕を盾にしてガードの体制にはいる。弥彦の右拳が男のガードをくずして男の顎を砕く。

あまりの力の強力さに男は顎を砕かれ、意識を失う。その一部始終を固唾を吞んでみていた男の部下達が一斉に逃げ出す。

「ば、化け物だ」

「頭がやられた」

「死にたくない、助けてくれー」

逃げ出す部下を無視して弥彦は奉莉に駆け寄る。

「ごめんな、助けが遅くなった」

自分のまわりで何が起こったのかいまいち理解できず、床の上で放

心状態の奉莉の姿をみて弥彦は優しく抱きしめる。彼女の顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃだった。当たり前だ、犯される一歩手前の状態だったのだから、弥彦の助けで彼女の純潔は汚されずにすんだ。奉莉が落ち着くのを弥彦は待つと

「……弥彦、ありがとう」

「礼なんていらぬよ、天王寺。男が女を守るのは昔から決まってるだろ」

少しおどけて弥彦が言つと、奉莉のデコピンをもらった。

「っ痛、なんだよ突然」

おでこを擦りながら弥彦が頬をふくらます。

「……名前」

「名前？」

「そう、名前。助けてくれたお礼にわたしのこと、名前で呼ぶの許可してあげる」

弥彦は頬をあかく染める奉莉の表情をみて、苦笑しながら

「それは光栄だな、嬉しいことだ。これからもよろしく頼むよ、奉莉」

「それでいいのよ。弥彦」

奉莉も自分の名前を呼んでもらえて嬉しそうだった。

そういえば今の奉莉の姿はまずいな、と弥彦は思い出し部屋の床に落ちていであろう奉莉のスカートと下着を探す。目的の物はすぐ

に見つかり弥彦は奉莉から離れるとスカートと下着を回収して奉莉に差し出す。

「ほら、その…なんだ…」

弥彦から差し出された物に奉莉が気がつくのと、慌てて弥彦から奪い取ると

「あんたはあっち向いてなさい！」

「はい！すみませんでした」

弥彦はすぐに後ろを向き奉莉が着替え終わるのを待つ。

「…もういいわよ」

着替えを終えた奉莉の姿を確認すると弥彦はごめんな、と奉莉に謝罪した。

「本当はわたしの鉄拳制裁の刑だけど、助けてくれたし許してあげる」

鉄拳制裁の刑って…。そういえば奉莉の趣味は空手だったか、と弥彦は改めてこの子を怒らせるのはやめよう、と心に留めるのだった。

それじゃ外に出ようか、と弥彦の指示でまだ逃げ出した犯人達がいるかもしれないと注意しながら倉庫の出口へと弥彦は奉莉を守るかたちで先導する。

出口が近づくと檻に閉じ込められていた誘拐された子供達の姿がないことに弥彦は気がついた。これはもしか、と弥彦が奉莉の手をひいて出口へと駆け出す。

倉庫前は警察のパトカーと護送車両で埋め尽くされ、その中に制服姿の紅真九郎の姿があった。倉庫から出てきた弥彦達に真九郎が気がつくのと直ぐに駆け寄ってきた。

弥彦達の体の無事を確認してから真九郎は話をきりだした。

「二人とも無事みたいだな、ごめんな助けが遅れて」

「いえ、助けに来てくれると信じてましたよ。それより、逃げ出した犯人の一味はどうしたんですか」

弥彦の質問に真九郎はさも当然のように

「ああ、それなら全員俺がかたづけたよ」

あの人数をたつたひとりで片付けたのか…。さすがは真九郎さんだな、と弥彦は思った。

真九郎と弥彦が親しく会話しているので奉莉は弥彦に、知り合いかと耳もとで言った。

「そういえば紹介がまだだった。この人は紅真九郎さん、俺の兄弟子でお兄ちゃんみたいな人」

弥彦の簡単な紹介に奉莉はそうなんだ、と返事を返した。それをみた真九郎は

「弥彦の紹介だけじゃあれだから改めて。俺の名前は紅真九郎、弥彦の兄弟子で高校生。まだ駆け出しだけど揉め事処理屋だよ」

真九郎の自己紹介にあわてて奉莉は

「わたしの名前は天王寺奉莉です。弥彦とはクラスメイトです」
「へえ、弥彦のクラスメイトか。弥彦と仲良くしてあげてね」

頼んだよ、といったふうにな真九郎は奉莉に言っていると奉莉は、はい！と返事を返すのだった。

その後、警察の迅速な対応で犯人一味は逮捕。誘拐された子供達は無事に保護された。

弥彦と奉莉は警察の事情聴取を終えると、警官が運転するパトカーで家まで送られた。崩月の屋敷が見えてきた辺りで弥彦は警官にここで降りしてください、と一言いうとパトカーから降りる。

「じゃあ、また学校でな」

「うん、また学校で」

弥彦は奉莉に別れのあいさつを告げて、送ってもらった警官にお礼をいうと崩月の屋敷へと歩き出した。屋敷の前に人影があることに弥彦は気がつくや弥彦は駆け出した。

「おかえりなさい」

「ただいま」

弥彦を暖かい笑顔で受け入れる家族に弥彦は笑顔を返すと、弥彦の長かった事件の日々は幕を閉じた。

第六話 ある男は少女を守る（後書き）

いかがでしたでしょうか

主人公がやつと戦鬼化しました

裏十三家や崩月、戦鬼についての説明は次回以降の話ですつもりです

本家主人公の真九郎がやつとこさ登場しましたが、真九郎ぽさが伝わらない…。

自分の執筆能力のなさに考えられされる回でした

私の駄文をよんでいただいている方に感謝をば

感想おまちしてます

第七話 ある男の証（前書き）

今回の話は説明回です

それではご愛読おねがいします

第七話 ある男の証

児童誘拐事件の翌日の早朝、弥彦は自室の布団の中にいた。

目覚まし時計の目覚まし音に気づくと布団から手を伸ばし目覚ましを止めようとするが手が動かない。あれ？おかしいな、と弥彦は体を起き上がらせようとするが体が重くておもうように動かせない。これはいったいなんだ、新金の縛りか、と弥彦が試行錯誤していると部屋の入り口の襖が開いたことに弥彦は気がついた。

弥彦の部屋にやってきたのは祖父の法泉だった。その姿を確認した弥彦は法泉に助けをもとめる。

「おはようお祖父ちゃん。あの、体がうまく動かさなくて布団から出られないのだけど…。たすけてください」

そんな助けをもとめる孫の姿をみて法泉は目を細めると

「稽古の時間になっても道場に来ねえから何事かと思ってきてみたら…おめえ、弥彦。だらしねえぞ」

「そんなこといっても、体が動かないのだからどうしようもないでしょ！助けて、お祖父ちゃん！」

弥彦の助けをもとめる声を無視して法泉はふむ、と少し考え込むと

「…………お前、もしかして昨日の事件の時に戦鬼にでもなったか」

戦鬼？なんだそれは、そういえば昨日の事件の犯人がそんなことを言っていたような…………。

「お祖父ちゃんという戦鬼っていうのがなんだかしらないけど、昨

日の事件の犯人が崩月の戦鬼がどうか言っていたような」

弥彦の言葉に法泉は稽古時のような厳格な雰囲気になると

「それは真か、弥彦」

「……はい」

祖父の稽古時の雰囲気にあてられて弥彦も稽古時のような謙虚な姿勢になる

「真九郎から聞いた話では主犯格の大男は事件現場の一室で顎を砕かれ気絶していた、と聞いた。この男をやったのはお前か」

「……はい」

「では、弥彦。ひとつ聞くが、その男をやったときお前の体に異常はなかったか」

法泉の鋭く全てを見透かすような視線を弥彦は受けながら冷や汗を流しながら答える

「ありました。右腕のひじから角のようなものが……」

弥彦の答えを聞いて法泉はやはりか…、と一言呟くと

「今日は学校を休め、それから体が動かせるようになったらおれの部屋に來い」

そついで残すと法泉は弥彦の部屋から出て行くのだった。

法泉が部屋から出るのを布団に寝たままの状態の弥彦は首を動かして確認すると

ふうー、と大きくゆっくりと息を吐くと

「ああ、驚いた。お祖父ちゃん、ここで稽古モードになるのだから…。それにしてもお腹減ったな」

ぎゅるぎゅると、お腹の音が鳴ると、弥彦はぼつりと呟くのだった。そこに母親の冥理がお盆に朝食を盛って弥彦の部屋にやってきた。

「おはよう弥彦。学校の方にはわたしがお休みの連絡を入れたいから気にしなくていいわよ。ほら、朝食を持ってきたから食べさせてあげる」

「ありがとう、お母さん。それじゃ、遠慮なく」

冥理に手伝ってもらいながら弥彦は上半身を布団から起こすと、湯気が立ち上るおいしそうな朝食を冥理にあーん、と口に箸をもってきてもらいながら食べるのだった。朝食を食べ終え弥彦はごちそうさま、と一言冥理に言うときまだ自由のきかない体を横にして体の自由が戻るまで布団のなかで眠るのだった。

弥彦が目を覚ますと既に部屋の中は真っ暗で部屋の窓から月明かりが弥彦を照らしていた。

ふん、と勢いよく弥彦は布団から起き上がる。どうやらいつもどおりの好調な体に戻ったようだ。弥彦は念入りに体を動かして確認すると部屋から出て居間に行くため廊下を進む。居間に辿り着くとちよと夕飯が食べ終わったよう。で食器を片付けている夕乃の姿を見つけた。散鶴はテレビでアニメを鑑賞中、冥理は台所だろうか。

居間の入り口に突っ立っている弥彦に夕乃が気がつく

「あら、おはようございます弥彦。ああ違いますね、今はこんばんはですかね」

「こんばんは夕乃お姉ちゃん。お祖父ちゃんはどこにいるのかな」
姿のみえない法泉の所在を弥彦は質問する

「お祖父ちゃんなら今はお風呂の時間じゃないですかね」

もう風呂に入っちゃったか…入れ違いになったか、と弥彦が考えていると台所にいる冥理が居間に戻ってくると

「そろそろお風呂からお父さんが出た頃合じゃないかしら。ちょうどいいから弥彦。散鶴と一緒にお風呂に入ってきてちゃいなさい」

「でも、お祖父ちゃんから体が動くようになったら部屋にくるよう
に言われているのだけど……」

「いいのよ、お父さんにはわたしから言っとくから。それに寝汗で
びっしょりよ、弥彦」

冥理にいわれて弥彦は自分の着ているパジャマを確認すると確かに
寝汗でぬれていた。わかったよ、と弥彦は返事を返すとアニメに夢
中の散鶴に

「散鶴。一緒に風呂にいくぞ」

と弥彦は散鶴を抱きかかえると散鶴は名残惜しそうにまだ見ている
途中のテレビに視線を送ると

「わかった、ちづるもおふるはいる」

と弥彦にいう、散鶴はえらいね。と弥彦は散鶴の頭を撫でるとお風
呂に向かうのだった。

脱衣所で散鶴の服を脱がせるのを弥彦は手伝う。服を脱ぎ終えた散鶴を先に風呂場へと誘導する。散鶴が風呂場へ入ったのを確認すると弥彦も寝汗で濡れたパジャマを脱いで洗濯籠にパジャマを入れると風呂場へと入るのだった。

脱衣所と風呂場の境界にある扉を開けると弥彦の一面に湯気が立ち上る。弥彦は前世では風呂が好きだった。ひとり落ち着いた時間を周りから断絶した空間で体が心の芯から温まる風呂が好きだった。崩月家の風呂場は弥彦にとってとても特別なところ、一日の疲労を感傷を忘れさせてくれる場所。総ヒノキ作りの広く落ち着いた浴槽はまるで高級旅館のよう。弥彦は散鶴の頭と体を洗うのを手伝いながら自分も体も洗い流すとお湯のはった浴槽に体を沈めて祖父に話すことになるであろう昨日の事件のあらましを考えるのだった。

風呂から出た弥彦はまだ火照る体を少し時間をかけて縁側で冷ましてから法泉の待つ部屋におもむいた。弥彦は部屋の前に着くと襖越しに

「お祖父ちゃん、弥彦です」

と扉のノック代わりにいうと

「弥彦か、入れ」

法泉の入室の許可をもらい弥彦は襖を開き法泉の前まで移動し腰をおろし正座する。

法泉が話し始めるのを静かに待つと法泉は話しをきりだした。

「さて、まずは戦鬼について話す前に裏十三家について話す……」

裏十三家とは、近現代まで裏世界で勢力を持っていた十三の家系のこと。

ゆがみそら 歪空 落ちばな 斬島 円堂 崩月 虚村 豪我 師水 戒園 御巫
わくらは 病葉 亜城 星？

今ではその半数近くが廃業、あるいは断絶しているが、その勇名、悪名、凶名は未だに裏世界で影響力を残しているという。

「では次に、裏十三家と対を成す表御三家について」

表御三家とは、表世界で絶大な権力を握る三つの家系のこと。

くほういん 九鳳院 きりんづか 麒麟塚 こうがのみや 皇牙宮。

いずれも財閥、名家中の名家である。

「裏十三家は衰退している一途、対して表御三家は栄華を極めている。中には円堂のように表の権力と融和した家系もあるが……」

そこで一息、法泉は入れると厳しい表情で

「特に表御三家についてはなるべく関わることは禁じる」

「……なんで、ですか」

「表御三家とは色々要因縁があつてな、表御三家では我ら裏十三家を濁流、表を清流と称し、あちらも接触を禁じている」

「……………」

なんとも自分には想像もつかない話だな、と弥彦は考える。

「さて、最後に本題である我らの家系、崩月について話すでしょう」

崩月家とは裏十三家のひとつで激しい肉体改造で戦鬼の力を手に入れた一族。生まれながらにして右腕に力の源である角を宿している。

裏世界では殺しの家業で名を馳せていたが、法泉の代で廃業している。

戦鬼とは崩月家が幾代にもわたって激しい肉体改造を繰り返した果てに辿り着いた戦闘形態。右腕に宿る角を体外に露出させ、一時的に超人的な剛力を発揮する。しかし、極端に肉体を酷使するため自身に与えるダメージも計りしれなく、そのため厳しい訓練をして己の肉体をその負荷を耐えうるために鍛錬をしている。

法泉の説明を固唾を呑んで真剣に聞きに徹していた弥彦は法泉の説明を聞き終えると

「今まで俺が鍛錬していた崩月流の稽古は殺しの業だったのですか……」

「ああ、そうだ。だが、説明したとおり殺しの家業はおれの代で廃業しているが、その力と技は絶えさせはしない。これは代々、崩月という家系が伝えてきたものだからな」

自分が今までしていたことは人殺しの力と業であったことに弥彦は自己嫌悪した。その様子をみた法泉は

「なに、そう自己嫌悪する必要はない。弥彦、おめえはなんでも昨日の事件で犯人から女を守ったそうじゃねえか」

法泉の雰囲気がいっつものお祖父ちゃんにもどると弥彦を褒めた

「女のために力を使った。それもまだ戦鬼として目覚めていなかったってえのにその弾みで戦鬼に目覚めた！さすがは俺の弟子だ！」

法泉は落ち込む弥彦の頭をわしわし、と乱暴に撫でる。

「おめえはその歳で男になった。女のために命張れるようになったら、もう一人前よ。誇っていい」

法泉の言葉に弥彦は俯いた顔を上げて言った

「あのときは必死だったんだ……。目の前で入学式で会ったばかりの女の子が酷いめに遭わされていて俺は……」

嗚咽を交えて法泉に事件の当時を説明する弥彦を法泉は優しく、その大きな胸のなかで抱きしめる。

「それでいいんだ、弥彦。それでいいんだ」

弥彦が落ち着くのを法泉は抱きしめながら待つと泣き止んだ弥彦は法泉の胸から離れ

「みつともないところをお祖父ちゃんに見られちゃったな……」

まだ顔には涙の痕が残る顔で弥彦は、いまできる精一杯の笑顔ではにかむと再び法泉の前で正座した。

「そつだ、戦鬼になったおめえに位を授けねえとな」

位？と疑問する弥彦に法泉はそつだ、と一言間を置くと厳格な声で告げた

「崩月弥彦に崩月流甲特種第三級戦鬼の位を授ける」

「……崩月流甲特種第三級戦鬼」

「おめえが心でこれは引けねえ戦いだと思ったとき己の名と共にこ

の位を宣言しろ」

弥彦は目を輝かせて

「はい！崩月弥彦、ありがたく位を拝命いたします」

と言って弥彦は法泉に抱きつくのだった。

第七話 ある男の証（後書き）

いかかでしたでしょうか

弥彦の位の設定なのですが弥彦は一応崩月の直系なので甲特種としました

それで真九郎の二級よりひとつしたの三級にしようかと……。

弥彦が朝身動きが取れなかったのは初戦鬼化の後遺症ということでご感想おまちしてます

第八話 ある男は小学生（前書き）

小説の更新が遅くなり、真に申し訳ありませんでした
私の急な実家への帰省でごたごたしてしまいました

今月は更新のペースがとつても遅くなりますのでご了承承お願いしま
す

第八話 ある男は小学生

うららかな春の陽気が体を包み込むような感覚を感じさせる絶好の春日和の平日のある朝。弥彦は現在、小学校の教室、一年三組の自分の席で担任教師である菅原の朝の連絡事項を聞いていた。久しぶりに登校してきた弥彦の姿を菅原先生は確認するとよかった、と弥彦を気遣うようにあいさつをしてくれた。菅原先生の話が終わると一時間目の授業が始まる数分間の時間の利用して弥彦は教室にいる唯一の友達である奉莉に話でもしようと思いい席を立とうとしたがやめた。弥彦の視線の先には奉莉と談笑している数名の女子の姿を確認できたからだ。奉莉は弥彦と誘拐事件に巻き込まれ数日は入学式から学校に來れない状況だったのだが弥彦が休んでいた間に既にクラスに溶け込んでいる姿をみて弥彦はたいしたもんだなー、とひとりごちた。そして、チャイムが鳴ると授業が始まる。

弥彦にとっての約20年ぶりとなる小学生のそれも一年生の授業はひどく退屈だった。一時間目の算数から始まり、国語、社会、理科、どれも前世が大学生であった弥彦には今更のような授業であった。でも退屈な中でもこうやって初心にもどりーから始めるのもいいものなのかもしれないな…と考えるおされた弥彦であった。

四時間目の授業が終わると弥彦が待ちに待った給食の時間である。自分の机を近くにしているものと、くっ付けて向い合せになるような位置にして班となり、給食を食べるのである。弥彦は給食を受け取ると自分の席に戻り、向かい合わせで座っている状態なので隣にはまだ名の知らない男子がひとり、向かい側には名の知らない女子が2名いる。入学式初日に自己紹介が行われていたのだが弥彦はまったく彼らの名前を覚えてはいなかった。しかもまだ一言も会話をしたことがなくて、友達も奉莉のひとり、これは困ったな、と弥彦が考

えていると向かい側に座る女子のひとりがそんな弥彦を見かねてか会話をきりだした。

「…えっと、入学式以来だよ。学校に来てたのは、わたしの名前は日高 梓だよ」

いきなりの自己紹介に弥彦以外に様子を窺っていた班員のふたりも驚く。これは自分も自己紹介をせねばと弥彦も自己紹介をする。

「俺の名前は崩月弥彦、家庭の事情で入学式以降の今日まで休んだんだ」

へえ、と班員達が相槌をうつと梓以外のふたりも自己紹介を始めた。

「わたしの名前は林原 杏、崩月くんのごことは奉莉から話をきいていたから知ってるよ」

「僕の名前は藤村 大介、よろしくね」

よろしく、と弥彦はあいさつをして3人と会話をしながら給食を食べるのだった。

給食の時間が終わると昼休みとなった。弥彦がなにをしようかと考えていると班員である藤村に声をかけられた。

「これからグラウンドでサッカーするのだけど、崩月も一緒にやるかい？」

弥彦はサッカーなんてそういえば久し振りだな、それにクラスになじむきっかけになるだろうしやるか…と少し考えてから

「うん、よければ俺もまぜてくれないか」

「よし、じゃあグラウンドに行こう」

サッカーボールを抱える藤村を先頭にクラスの男子が教室をあとにする。その中に混じる弥彦を見つめている奉莉がいることに弥彦は気がつかなかった。

一言でいうと弥彦はサッカーが下手だった。サッカーだけではない球技自体が弥彦は前世から苦手なのである。ボールを蹴れば的外れなところへ飛んでいき、ドリブルも下手くそ。いつもいるポジションはディフェンスだった。そんなサッカーの下手な弥彦がいるチームのクラスメイトはブーイングの嵐、子供とは残酷である。すっかり落ち込んだ弥彦は途中で抜けると藤村に声をかけると、とぼとぼと哀愁を漂わせながら校舎にもどるのだった。

まだ時間のある昼休み、弥彦はどこにいこうか、ひとりでいれる場所はどこだろうか、と少し考えてからひらめいた。さっそくその足で校舎の階段を上ると立入禁止の札が立て掛けてある屋上へとつながる扉の前にたどり着いた。

「立ち入り禁止か、困ったな……。でもばれなきゃ平気だろ」

楽観的な考えで扉を開ける、鍵は掛っておらず素直に扉が開くと弥彦は頭上に広がる一面の青空に目を奪われた。

「学校の屋上なんて初めて来てみたけど絶景だな！これはすごいわ」
興奮気味でひとり喜んでみると弥彦の後ろにある屋上の扉が開いた。まずい、先生にばれたかな、と焦った弥彦は身を隠そうとしたが隠れられそうなく、諦めて扉を開いた主の姿を確認すると、

弥彦は胸をなでおろした。

「なんだ、奉莉じゃないか。驚かせないでくれよ」

「なんだ、じゃないわよ！杏があんたが屋上に向かうのを見たって
いうから心配して見に来てあげたのに」

どうやら奉莉はご立腹のようだ

「ごめんな、ちょっとサッカーでドジちゃって、ひとりになりたく
てさ」

「見てたわよ、あんた強いのにサッカーはすごく下手よね」

「改めて言われると傷つくな…奉莉は容赦がない」

なによ！と奉莉の正拳が弥彦にとぶがそれを軽く受け流して奉莉と
距離をとる

「いきなりなにすんだ！当たったら、痛いぞ」

「うるさい！本当に心配したんだから。朝はあいさつのひとつもし
ないし、あの事件の後、学校を休んだからなにかあったんじゃない
かって……」

急に暗い顔をしてしゅん、と落ち込む奉莉の様子を弥彦は覗うとば
つが悪そうに

「その後、学校を休んだのはちょっと体調が優れなかったから病欠
してた。朝はあいさつぐらいいはしようとしたさ…でも、奉莉は友達
と話してただろ、邪魔しちや悪いと思つてさ。それに奉莉の元気そ
うな姿を確認できたし俺は満足だった」

「なに言つてんのよ、弥彦のバカ！」

奉莉は納得のいく回答を得られたのか、いつもの元気な彼女に戻ると頬を赤く染めて弥彦を責め立てるとそこへ昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴る。

「ほら、チャイムが鳴ったぞ。教室に戻ろう」

「言われなくてもわかってるわよ、わたし先に行ってるからね！」

奉莉は弥彦をおいて先に階段を降りていく、その後ろ姿を弥彦は眼で追うと乙女の心は解らないな、とひとり苦笑すると授業が始まっているであろう教室へとゆっくりと戻るのだった。

今日の授業も全て終わり、下校の時間となった。弥彦は教室の窓から校門前を眺めると保護者と一緒に下校する生徒たちに気がついた。誘拐事件があつたのを受けて学校側は事件対策として生徒と保護者の集団下校を推奨した。ひとり保護者がくるのを待っている弥彦に気がついた奉莉が駆け寄る

「あんたのママもまだ来ないの？」

「うん？ああ、お母さんは来ないよ。代わりにお姉ちゃんが来る予定になってる」

「お姉ちゃん？」

「そう、お姉ちゃん。小学校の近くに高校があるだろ、星領学園ていうのだけど、そこにお姉ちゃんを通つてさ。……噂をすればなんとやら、真九郎さんも一緒にいるし」

はあ、と弥彦はため息を吐くと校門前で一見すればいちゃついている高校生のカップルがいるがそれは誤解であるのは弥彦にはわかっていて。教室でランドセルを背負うと奉莉と一緒に校門前へと向かう。弥彦に気がついた夕乃は真九郎の腕を組んで弥彦に近づく。

「迎えに来ましたよ弥彦、あら？そちらの女の子はどなたですか」

この子は…、と奉莉を紹介しようとするが奉莉が割って入る

「はじめまして、弥彦のお姉さん。わたしは天王寺 奉利といいます。弥彦のクラスメイトです」

「これはご丁寧に、わたしの名前は崩月 夕乃といいます。そこにいる弥彦の姉です。で、こちらはわたしの旦那さ……」

腕を組んでいる真九郎を前面に押しして自分の旦那だと言おうとする夕乃を真九郎は止める。

「ゆ、夕乃さん！冗談はそのくらいにして、……奉莉ちゃんとは事件以来だよね」

「もう、殿方はどつしりと構えていればいいのです。あら？真九郎さんと奉莉ちゃんはお知り合いですか」

「はい、事件の時に助けていただきました。その時に」

そうでしたか、と夕乃は頷くと真九郎に詰め寄る。

「まさかとは思いますが、真九郎さん奉莉ちゃんに……」
「そんなことはしてませんよ、夕乃さん」

いらぬ誤解を否定する真九郎の姿を横で苦笑しながら見ていた弥彦に奉莉が聞いた

「いつもあんな感じなの？夕乃さん」

「ああ、そうだよ。お姉ちゃんは真九郎さんが好きだからね、昔からあんな感じかな」

あたふたしている真九郎とそれを責めたてる夕乃のふたりの姿を見て弥彦はやれやれ、といった感じで奉莉に説明した。その後、奉莉の母親が迎えにきた。弥彦に事件のことで奉莉を守ってくれてありがとう、とお礼を言っ て夕乃達に会釈すると奉莉と手を繋いで帰る後ろ姿を弥彦は見つめるのだった。

第八話 ある男は小学生（後書き）

いかがでしたでしょうか

すみません、文章も短く、書いていておかしいな、とは思っています
原作の紫が真九郎に預けられるのは11月からなので、当分はオリ
ジナルストーリーで土台を固めていくつもりです

私の駄文におつきあいいただいている方たちには本当に感謝して
います

よろしければ、そのままご愛読をお願いします

ご感想、ご指摘をお待ちしています

第九話 ある男は悩む（前書き）

更新が遅くなり大変申し訳ございません

私の話なのですが、電波的な彼女のDVDを購入しました。

幸福ゲームのお話です。時間の尺の都合で原作のところどころが省かれていましたが面白かったです。

それでは私の駄文ですが読んでくださる方の暇つぶしになることを願います

第九話 ある男は悩む

4月もあと数日で終わる頃になったある平日、天候は雨、場所は小学校の教室、時間は昼休み。教室内は外で遊べない生徒たちが集まって各々の遊びをしているのでとても騒がしかった。そんなクラスメイトたちの騒がしさに耐えきれず、教室を出ようとした弥彦に奉莉が声をかける。

「弥彦、ちよつと待ちなさい」

「ん？なんか用か」

「いいからこつちにくる」

弥彦の腕を奉莉は強引に掴むとそのままずると教室の一画まで移動する。なにごとかと弥彦が尋ねる前に周囲を見渡すとクラスの数名の男女達に囲まれていた。囲まれた弥彦は引きつる笑顔で奉莉に尋ねる。

「これはいったいどういうことかな？なんで俺、囲まれている？まさか…いじめか！」

「アホか」

すばーん、と弥彦の頭を奉莉が叩く

「じゃあ、いったいなんだよ。こんなに集まって」

「こつちやって集まっている理由は来週から始まるゴールデンウィークにみんなでどこかに遊びに行きましょう、てことを決めるため。人数合わせであんたも誘ってあげようとみんなと話し合ってたの！」

自分の知らぬ間にずいぶんと話が進んでいる、しかも俺は人数合わせかよ、と内心で呟く。まあ、クラスにあまり馴染まずにいる俺を思っていることなのだろうけど、ゴールドンウィークの間はたしか…。

「せっかくのお誘いなのだけど、断らせてもらおうよ」
「どうしてよ」

弥彦が自分たちの誘いを断らないだろうと思っていた奉莉は表情をくもらす。

「長い休みだろうと俺は稽古があるからな、だから誘ってくれたことは本当に嬉しい。でも、一緒には行けない」

弥彦には崩月家の一員として己を鍛えなければならぬ、戦鬼に目覚めたばかりでその力を使いこなすにはまだ弥彦には修練が足りないのだ。弥彦が学校に復帰した当初はクラスメイトからの遊びの誘いがいくつもあった。だが、弥彦は全ての誘いを断っていた。学校が終われば直ぐに家に帰り稽古をする、そんな弥彦は遊び付き合いの悪いやつとクラスメイト達からレッテルを貼られてしまった。そんな弥彦をまだこうして一緒に遊ぼうと誘ってくれるクラスメイトがいることに弥彦は嬉しかった。前世ではこんな経験はしたことがなかったのだから。

「稽古なんていつでもできるでしょ！ほら、最近オープンしたばかりの遊園地、知ってるでしょ。みんなで行こうって決めたの、弥彦も一緒に行こうよ」

「そういうわけにはいかないよ。だから、本当にごめん」
「……バカ。あんたを誘おうとしたわたしが馬鹿だったわ！もう知らない！」

奉莉の罵声を受けながら自分を誘ってくれたことの礼を集まっていたクラスメイトに改めて言う、奉莉にも言おうとするが執りあってくれない。そんなことをしている間に無情にも昼休みの終了を告げるチャイムが鳴るのだった。

今日の授業もすべて終わり下校の時間となる。弥彦は奉莉の席に視線をやると奉莉と目が合うが奉莉はすぐに視線を逸らすと赤いランドセルを背負い教室をあとにする。弥彦は教室の窓から母親と一緒に雨の中、傘をさしながら帰る奉莉の姿を見送ることしかできなかった。

学校から夕乃と一緒に帰宅すると弥彦はすぐに胴着に着替えて道場に向かった。いつものように祖父の法泉を相手に組手をする。身長差があるので弥彦の攻撃はどれも法泉の下半身しか当たらなかつた。上半身を狙おうものなら飛び上った弥彦の頭を素早く掴まれ床に叩きつけられた。低い姿勢で法泉は弥彦がくるのを待つ、弥彦は正面から法泉に立ち向かうが回り込まれ背中が、がら空きの状態で法泉の回し蹴りを脇腹にもらいその勢いで道場の壁に叩きつけられる。壁付近で嗚咽をまじえてうずくまる弥彦に法泉は近寄る

「無様だな、弥彦。いつも以上に無様だ」

「……返す、お言葉がありません」

「もういい、今日の稽古はここまでだ」

弥彦は床の上で仰向けになり道場の天井を眺める。今日はいつもの調子が出ない、学校であったことを気にしていない、といえば嘘になる。だが、しょせんは子供同士の些細な事で奉莉との仲が一時的に悪くなっただけ、明日にでもなればきつと……。きつとなんだというのだろう、彼女が今日の事を水に流し、友達としての仲に戻るだけだろうか。自分の事をクラスメイトにむりをいって誘ってくれた

のは彼女だろう。その親切心をないがしろにして断つた自分には確かに否がある。だが、俺は崩月の人間であつて事件の時に思い知つた。自分には誰かを守る力があるといえは慢心だろうか、崩月の殺しの業を殺しとして使うのではなく、誰かを守ること、せめて自分の助けられる範囲を守ることに俺は使いたい。それはお前のエゴだと自己満足だと内面の伴わない大人の青臭い正義心だと笑われるだろう。それでも、誰かが傷ついて泣いたり、理不尽な暴力や恐怖に屈することしかできないのは俺には我慢がならない。そのためにも俺にはこの稽古を休む訳にはいかない。強くなりたい、祖父の法泉より姉の夕乃より兄弟子の真九郎より誰よりも、強くありたい。

翌日からゴールデンウィークが始まる間、学校で奉莉と弥彦がお互いに言葉を交わしあふことはなかった。

ゴールデンウィーク初日、テレビを見れば行楽地に家族連れで遊びに出掛けるものや実家に帰省するもの、どれも楽しそうにテレビカメラに向かって笑顔を振りまいていた。朝食を食べ終えた弥彦は冥理にうちはどこかに出かけるのか、と尋ねた

「そうね、どこかに出かけるのもいいかもしれないわね。御父さんは近所の人たちと温泉旅行に出かけてしまったし、散鶴も家にいるだけじゃつまらないでしょうね。弥彦はどこか、行きたい場所ないの？」

「俺はどこかに行きたいとかはないよ。道場で稽古でもする」

「御父さんは旅行中で稽古相手がいないわよ」

「それをみとうして、既に夕乃お姉ちゃんに相手を頼んであるよ」

「あら、そうなの。でも、夕乃から聞いた話だと真九郎君と最近できたばかりの遊園地にデートに出かけると聞いていたのだけど」

「真九郎さんと？それは聞いてなかった…」

「せっかくの長期休暇なんだから毎日稽古つてわけにはいかないで

しよ。弥彦もお友達と一緒に遊びにいつてらっしゃい」
「……………」

冥理の何気ない言葉に返事を返すことができない。お友達と一緒に
か…、と弥彦が考えているとインターフォンが鳴り、思考が止まる。

「誰かしら。弥彦、お出迎えしてきて」

「はい」

稽古のことについては後で夕乃に相談すればいい、いまは来客を出
迎えなくてはいけないと思いを切り替え玄関へ向かう。

廊下を歩いていると玄関の方が騒がしいことに気がついた。既に弥
彦の他に出迎えに向かったものがあるようだ。いったい誰が…と思
い玄関に辿り着くとそこにいた人物は夕乃と散鶴、それに真九郎の
姿があった。どうやら来客は真九郎のようだ。

「いらっしゃい、真九郎さん」

「お邪魔しているよ、弥彦」

「今日は、どうしたんですか？真九郎さんがこの屋敷を出てから戻
ってきたのは初めてじゃないですか」

「夕乃さんのはからいで、ゴールデンウィーク中はこちらで過ごさ
せてもらうことになってさ。ちょうど仕事の方もひと段落してたし
ね。ほら、着替えやらの荷物もこんなにとくさん」

そついうと真九郎は弥彦に大きなスポーツバックをみせ、弥彦にそ
つと耳打ちする。

「夕乃さんから聞いたよ。稽古の方で調子が悪いだってね、なにか
悩みごとがあるなら後で俺が聞くよ」

耳打ちを終えると真九郎は弥彦から離れ、夕乃になんのお話ですかと問い詰められた真九郎は男同士のひみつですと苦笑しながら答えた。

この日は弥彦にとって、とても充実した一日だった。久しぶりに戻ってきた真九郎を相手に組手を行い、夕乃に投げ飛ばされ、真九郎と一緒に風呂に入り、真九郎の一人暮らしの生活の話を聞きながら夕食を家族と囲む。真九郎が戻ってきてくれたことで自分の気持ちがあんなにも楽になるとは思っていなかった弥彦は心の中で真九郎に感謝していた。

家族がみんな寝静まった頃、弥彦はそつと自室から抜けだすと廊下を歩き屋敷の庭を一望できる縁側に着くとゆつくりと縁に座る。月明かりが庭を照らし、朝や昼間にはないような景色をみせる日本庭園に弥彦は心を落ち着かせる。そこへ、廊下を歩く足音がしたので弥彦はそれに反応して視線をやる

「こんばんは、真九郎さん」

「こんばんは、弥彦。いったいこんな時間になにをしているんだ」

「えっと、俺って眠りが浅くてたまにこうやって部屋から出て縁側で黄昏ているんです」

へえ、と真九郎は相槌をうつと弥彦の隣に座る。その後はお互い一言も話さずゆつくりと時間が流れた。真九郎はまるで弥彦が悩みを打ち明けるのを待っているかのように庭園を見つめる。そんな真九郎の気遣いに弥彦は敵わないな、と苦笑して話をきりだす。

「……真九郎さん。すこし、俺の話を聞いてもらっていいですか」

かまわないよ、と真九郎が返事を返すと弥彦は助かりますと一言間をおいてからゆつくりと話だした。学校生活の事、友人の事、稽古

の事、誘拐事件で自分が感じた事、それから…。弥彦は真九郎に自分の悩みを全て話した、自分にはこんな悩みがあったのかと話しているうちに驚いた。そんな弥彦の悩みに親身になり相槌をうちながら聞く真九郎がいるからこそ弥彦は安心して悩みを打ち明けられた。弥彦の話すべて聞き終えた真九郎は一度空を仰ぎ月を見つめると、…なるほどね、と間をおく。

そこからは真九郎の身の上話だった。自分は幼い頃に無差別テロに巻き込まれて家族を失い死のうと思ったこと、その後幼馴染の家に引き取られたこと、引き取られた先の幼馴染もその両親もとても優しかったこと、そして弥彦と同じように幼馴染と共に誘拐事件に巻き込まれたこと、その事件で揉め事処理屋である柔沢紅香に助けられたこと、紅香に弟子入りしようとしたこと、紅香の紹介で崩月家に入門したこと。真九郎から語られる話は今の今まで弥彦には聞かされたことのない話しかなかった。どうして自分の身の上話をしたのかと真九郎に弥彦が尋ねた。

「弥彦には俺のことを知ってもらいたかったからかな」

「でも、そんな真九郎さんの話を聞かせても俺はどうしたらいいのか……」

「そうだよな、弥彦の悩み相談を聞いていたら、いつの間にか俺の身の上話だもんな。でも、今の弥彦の見てみると崩月の家に住居しだした頃の自分が重なって見えてさ」

「俺とですか」

「そう、その頃は厳しい稽古に慣れてなくてね。骨が折れたり砕かれたりと肉体がまだ軟弱だった。そのつどの激痛に耐えながら頑張れたのは強くなりたい、生きるために確かな力が必要だと思っていたから、だから努力できた血反吐を吐いても。でも、結局はそれは…いや、なんでもない」

真九郎さんは最後についていたなを言いたかったのだろう

「弥彦が奉莉ちゃんともう一度、話合えばきっと仲直りできる。崩月の力も俺なんか直ぐに追い越して使いこなせるくらい強くなれるさ」

「はい！直ぐにでも真九郎さんを追い越してみせます。奉莉とだつて仲直りしてみます」

その意気だと真九郎は弥彦を励ますと空は明るくなり始めていてスズメが新しい一日の始まりを告げていた。

第九話 ある男は悩む（後書き）

いかがでしたでしょうか

原作キャラクターの魅力を引き出そうとしているのですが上手くはいきませんね

現在作者は紅と電波的な彼女を読み直していて、片山さんの世界観を壊さないようにと書いているのですが、ブレイクしまくりですね
感想おまちしてます

第十話 ある男の休日（前書き）

まだまだオリジナルのお話です

第十話 ある男の休日

ゴールデンウィークも残り二日となったある日。朝食を家族と真九郎で囲んでいたところに夕乃がふと思いついたかのように提案した。

「そういえば、連休中にどこにもお出かけをしていませんでしたね。稽古もいいですが、ここはせっかくの連休ですし最近できたばかりの遊園地にでもみんなでいきませんか」

そんなことを今頃しれつという夕乃に弥彦はただ真九郎とデートをする口実がほしただけなのはわかっている。ここは夕乃をたてるところだろうと思いついた夕乃の提案に賛同する。

「それ、いいね！俺は行きたいな、遊園地。散鶴も行きたいよな、遊園地」

さらに賛同を得ようと弥彦はそれとなく妹である散鶴に話をふる

「うん！いきたい！ちづる、ずっとお家にいてつまらなかつたもん」
「そうね、せっかくの連休を無駄にはしたくないしいいかもね。わたしは賛成」

ついでに冥理の了解も得ることができた、あとは真九郎だけだ。弥彦は期待を込めた眼差しで真九郎に視線をおくる。

「俺はかまいませんよ。その遊園地にはすこし興味がありましたから」

いい機会ですしね、と真九郎は笑顔で応えてくれた。これでよし、

と机の下で小さく握り拳でガッツポーズをする姉と弟がそこにはいた。

そんなこんなで、朝食を終えると善は急げということで各々遊園地に出かける準備をすると冥理が運転する車へと乗り込むのだった。崩月の屋敷から遊園地までのドライブはそれは賑やかだった。助手席に弥彦が乗り、後部座席には夕乃と真九郎、真九郎の膝の上にはほくほく顔で笑顔の散鶴がちょこんと座っている状態だった。散鶴の特等席に夕乃が羨ましがり「帰りはわたしもいいですよね」と真九郎に迫る一場面があったり、連休の影響での渋滞のせいで散鶴のトイレが我慢を超えそうになったり、弥彦が事前にネットで調べておいた遊園地の情報を自慢げに語りだしたりと渋滞待ちのストレスを気にさせないぐらいの賑やかなドライブだった。そんな賑やかなドライブのなか、遊園地に行くことを一番楽しみにしているのは自分ではないのかと気づいた弥彦は苦笑した。

弥彦たち一行が目指す遊園地は最近オープンしたばかりのもので雑誌やテレビにも紹介されるほどの有名な遊園地だった。その広大な敷地もさることながら、その敷地のなかには映画館やショッピングモール、数十もあるアトラクションの他にも動物園も兼ね備えていてイルカショーやふれあいサファリパーク、夜にはパレードのほかには花火を打ち上げるショーもあるそうだ。遊園地という枠を超えている感もいなめないが、その多種多様なものにユーザーは惹かれるのだろう。

遊園地に到着すると入口の窓口でチケットを大人一枚、学生二枚、こども二枚、合計五枚を購入する。チケットを機械に通してゲートを潜るとそこはこの国にはない異国情緒溢れる町並みが広がる。ここは遊園地なのか？と疑問を抱かざるえない情景に事前に調べていた弥彦でも驚いた。散鶴は「ほえー」とかわいらしい擬音で驚きを

表現しているようだ。園内での行動は弥彦と冥理と散鶴でグループとなり、夕乃と真九郎のペアとは別行動で園内を回ることにした。そのほうが夕乃にとっっているといいのだろうと弟なりに姉を思っでの配分である。散鶴がみんなと一緒に回りたいと駄々をこねたが弥彦がうまくなだめた。そんな一幕があった後、夕乃たちと別れて弥彦たちは園内を散策する。園内は人、人でごったがえしていて、これでは迷子になりそうだなと弥彦は察してまだ幼い散鶴の手を握り冥理の横を歩く。

午前中はアトラクションを中心に園内を回った。散鶴と一緒に乗れるような、お子様向けのアトラクションばかりではあったが、童心に還れるような時間を過ごすことができたので弥彦は満足だった。

時間はお昼。園内にあるファミリー向けのレストランで昼食にしようと思理からの提案があったので一行はレストランへと向かった。店内は弥彦たちのような子供連れの客でいっぱいであった。店員にゆったりと座れるファミリートイプの席に案内されると弥彦たちは一息つく。とりあえず、弥彦はドリンクバーを頼む。散鶴はお子様ランチ、冥理は和風ハンバーグセットを頼んだ。飲み物をとりにいってくと弥彦は席を立つとドリンクバーコーナーへと向かう。ドリンクバーコーナーにはお馴染みの炭酸飲料水やオレンジジュース、紅茶にお茶にコーヒーにお水、おしるこなんかもあった。おしるこは飲物じゃないだと内心でツツコミをいれる。手にはグラスを握りコーナー前でどれにしようか目移りして迷っている弥彦に後ろから聞き馴染んだ声が弥彦を急かす。

「ちょっと！いつまで迷ってんのよ、男ならさっさと決めなさい！」
「すみません、今決めますから…」

もうすこし待って下さい、と言おうと後ろを向くとそこには天王寺

奉莉がいた。

なんという偶然、ありえないだろ…と弥彦が考えている間に彼女は弥彦の持っていたグラスを奪い取るとドリンクバーの機械のボタンを押す。

「ちよつと待て！色々と言いたいことはあるが、いまなんのボタンを押したんだよ」

彼女は弥彦を無視、学校のことをまだ怒っているようだ。そのことについて改めて謝るのは後だ、と弥彦はおそろおそろるグラスの中身を確認するのがっかりした。

「……そうですか、おしるこですか」

なんともミスマッチ、洋風のグラス容器に日本のおしるこ、ついでに白玉がどろどろのあずきのなかで浮いてやがる。これは飲物ではない、断じて飲物ではない！なんてことをしてくれたんだ、この少女は平然と非道なことをやってのけた。ジト眼で無言の抗議の視線を彼女にやるとそんなことは知らんといった具合に彼女は自分のグラスにオレンジジュースを注ぐと弥彦を無視したまま席に戻ろうとしたので弥彦は彼女の腕を掴む。

「ちよつと待て奉莉！とりあえず俺の話聞いてくれ」

「あんたと話すことなんてないわよ！離してよ、この馬鹿！」

いくら話を聞いてくれと彼女に言ってもまともに執りあってくれない、それどころか二人の騒ぎを聞き付けてまわりはちよつとした野次馬状態だった。小さな子供同士の痴話喧嘩だと周りでは、はやしたてる。これではらちがあかないと弥彦が困っているとそこへ騒ぎを聞きつけた冥理が人ごみを押しのけて二人の腕を掴むと手早くそ

の場をあとにした。

無言で下を俯きだんまりの二人を席に着かせると冥理はことのあらましの説明を弥彦にもとめた。弥彦はドリンクバーでの出来事とそれだけでは説明が足りないので学校であったことも説明した。真剣な表情で冥理は説明を聞き終えると、溜息をひとつ吐いてから二人に話しかける。

「弥彦が学校でそんなことになっているなんて知らなかったわ。まったく、あなたは独りで悩みを抱え込んでわたしにはなんの相談もしないのだから…。奉莉ちゃんたちには悪いことをしたわね。うちの家柄で稽古のことについてはわたしも弥彦のことについては了承しているから、そのせいで学校生活に支障が出ていても見て見ぬふりをしていたの。本当にごめんなさい」

そういうと冥理は奉莉に頭をさげる。

「やめてください、ことのほったんはわたしの責任です！なにも弥彦のママが謝ることでは…」

「それでも、弥彦の自由を縛っていたのはわたしのせいよ」

「それは違うよ…お母さん。俺は好きで稽古をしていたんだ。誰かに強制されていたわけじゃない、俺は自分の意思で稽古をしていたんだよ。もう事件の二の舞はごめんだから…友達が泣く姿はもう見たくないから、誰よりも強くなる必要があるんだ」

弥彦は真剣な眼差しで自分の決意を告げる。それを聞いたふたりはなにも言えなかった。

冥理は自分の息子が崩月の家柄に縛り付けられているんじゃないかと思っていた。だがしかし、そんなもの関係ないと息子が自分に告

げている。奉莉は弥彦のことを誤解していた自分のことよりも稽古の方が大事だと思っていた。だけど弥彦はどうだ、自分が稽古をしているのは友達を守るためだと言っている。そうだ、事件で、あの地獄のような場所から自分を命がけで守ってくれたのは彼だ。そんな彼を自分が信じないでどうするのだ。

「ごめんなさい、弥彦。わたし……」

「別に気にしちやいなさ。学校で独りである俺が招いたことだろ、そんな俺を気の毒に思ってあの時は誘ってくれた。俺は嬉しかったよ、奉莉。感謝している」

弥彦は奉莉に頭をさげる。ふたりの様子を見て冥理はほほ笑むと

「どうやら、もう仲直りできたみたいね」

「もうおはなしはおわったの？」

ずっと椅子に座り、しゃべらずに我慢して話を聞いていた散鶴が会話に参加する。

「ああ、お話は終わったよ。静かに我慢して話を聞いてくれて、ありがとう散鶴」

「やひこお兄ちゃん！けんかはいけませんよ」

「わかりました、反省してます」

「よろしい」

弥彦を叱る妹の姿に冥理と奉莉がくすくすと笑う。まいったな、と弥彦が苦笑すると散鶴のお許しをいただくのに毎パフェでてをうつと散鶴は満足そうな笑顔で弥彦に「ゆるしてあげます」と告げるのだった。

その後、いつまでも席に戻ってこない奉莉をご両親が心配して奉莉を探していたので奉莉が慌てて両親に駆け寄り、ことのいきさつを冥理が説明することで難を得た。そして天王寺家と崩月家の保護者同士で世間話にはながさき、ずいぶん長い時間を現在進行形でレストランに拘束されている。それに飽きた散鶴はお昼寝タイム。これはこのままずっとレストランで井戸端会議かな、と弥彦が諦めかけていたとき両家の子供を代表して奉莉が話に割り込む。

「パパもママも弥彦のママも世間話はそのへんにして、そろそろ遊びに行かない？せつかくの遊園地なんですもの」

その言葉に両家の保護者達は、はっと気付くと今度は両家の保護者代表として冥理が話す。

「弥彦、奉莉ちゃんと一緒に園内を回ってきなさい。弥彦と奉莉ちゃんはしっかりしてるから迷子になることはないでしょうからね。お母さんたちはもう少しだけお話をしているから」

おいおいそれでいいのか、と弥彦が反論する前に奉莉は弥彦の腕を掴んで組むと

「それじゃ、行ってきます。なにかあったらわたしの携帯電話に連絡してね」

「ちよつとまで！俺まだ、昼飯おしるこしか喰ってねえ！」

「いつてらっしやーい！」×3

なんとモノリのいい奉莉のご両親と冥理の見送りうけて奉莉に引きずられるかたちでレストランから出る。なんともおかしな状況になったものだと弥彦が隣で腕を組んでいる奉莉に視線をおくるとそれに気づいた奉莉は少し不機嫌そうな表情で

「なによ、わたしと二人つきりじゃ不満だつていうの。あんたもレストランですつと暇するよりアトラクションに乗って遊んだほうがいいと思うでしょ？」

「いや、不満なんて微塵もないよ。たださ、なんていうか、その…」

「なによ、はつきりしなさいよ」

「……デートみたいだなっと思ってさ」

「デート!?!」

そういうと彼女は組んでいた腕を離して弥彦と距離をとる

「そんなに驚くなよ。ただ、なんとなく今の状況がそうかなと思っただけだ」

「な、な、なにを勘違いしているのかしら。わたしはただ暇そうにしてたあんたを誘ってあげただけなんだから! けっして、そんなやましいことなんて考えてなんかいないわよ!」

みるからに動揺する彼女の反応が楽しくて弥彦はさらにからかう

「なんだ、そうだったのか。てつきり俺はデートだと思っていたぞ。残念だ」

彼女の様子をみると、頭から湯気が出てきそうなくらい顔が真っ赤だった。それを見た弥彦は思う。自分がこんなに女性に対して冗談が言えている今の状況が楽しかった。相手は子供だが、女の子であることには変わらない。前世ではこんなことはありえなかったのだが、これも祖父である法泉の血が流れているせいかなっつとひとり納得していた。

その後は怒る奉莉をなだめながら園内を散策したりアトラクション

に乗ったりして時間を忘れるような楽しい時間を過ごすことができた。その道中で簡単な輪投げやボール投げや射的のような景品ありのレクリエーションスペースを弥彦が見つけると奉莉と手を繋いでゲームスペースへと向かう。ふたりの姿を見つけたゲームスペースの店員は威勢のいい声でゲームをやっていくのかい、と訊く。弥彦はそれに頷くと子供らしい無邪気な声で

「もちろん！このゲームコーナーで一番豪華な景品があるゲームはどれですか」

「それなら、あそこにあるパンチングマシンだろうな。聞いて驚くなよ坊主、豪華景品はなんと！海外の有名メーカーのお洒落なネツクレスだ！」

「おお！おじさん太っ腹だ！」

それに気を良くした威勢のいい店員が続ける

「そうだろそうだろ、だがなこの景品よりすごい景品がさっきまであったんだが、軟弱そうな彼氏と一言でいうと大和撫子みたいな綺麗な彼女のカップルが搔つ攫っていった！そりやすごかったぞ、いかに僕も草食系ですよって！彼氏がパンチングマシンで満点を取りやがった！」

「へ、へえー」

きつと姉さんと真九郎さん達だろうな、そのカップルは。苦笑しながら弥彦は相槌をうつ。

ふたりの会話に聞いていただけの奉莉が弥彦の耳元でささやく

「あんだ、もしかして満点狙っているじゃないでしょうね」

「そうだけど」

「無理よ！大人だって満点なんか難しいのに子供のあんだなんかに

…
「まあ、なるようになるさ」

そついうと弥彦は店員にゲームプレイ料金のお金を渡すと店員は

「坊主、彼女の前だからつてかつこつきたいのは俺にも分かるが、子供のお前さんじゃ満点は取れねえぞ」

弥彦の男のメンツを心配してか店員は忠告する

「大丈夫ですよ、それにケンカしていたからお詫びの品がちょうど欲しかったんです。おじさん、少しの間目をつぶってもらっていいですか」

「ああ、かまわねえが」

弥彦のお願いに店員は疑いもせず目をつむる。周囲の人の目を確認してから奉莉しか見ていないこと確認すると「店員さん、ごめんなさい」と内心で謝ると弥彦は気持ちを落ち着かせて感覚を研ぎ澄まして心の奥にあるスイッチを切り替える。一秒にも満たないわずかな時間で右腕の肘から皮膚を突き破り崩月の角を顕現させる。体中に力がみなぎる、肉体を活性化させるのと同時にパンチングマシンに剛腕から繰り出されるありつたけの剛力で正拳を繰り出す。ドーン、とまるでなにかが爆発するかのような音が辺りに響く。それに驚いた店員は目を見開くとまるで信じられないものをみるように点数が表示されるディスプレイと弥彦をみる。

「驚いた、すげえな坊主！満点だ、満点！ほれ、景品だ受け取りな」

ありがとうございます、と礼を言いながら景品を弥彦は受け取る。辺りを見回すと、なにごとか人と人が集まりだしていたので弥彦は奉

莉の手を握ると

「おじさん、ありがとね！」

「おう！また来な坊主と嬢ちゃん」

店員にあいさつをしてからその場を跡にした。

人のまばらな休憩スペースでふたりはベンチに座り、一息つく。弥彦は近くにあった飲料水販売所でジュースを二つ購入すると奉莉に片方渡す。

「ありがとう、ちょうど喉が渴いていたのよね」

「そりゃよかった。それじゃここで俺から奉莉にプレゼントだ」

弥彦は先ほどのゲームの戦利品である景品を奉莉に手渡す。綺麗にラッピングしてある景品の箱を奉莉は不思議そうに見つめる。

「これって、さっきのゲームで弥彦が獲った景品じゃない。わたしが貰ってもいいの？」

「もちろん、そのためにゲームで獲ったんだよ。ケンカのお詫びの品ということでき。ほら、開けてみて」

俺も見てみたいしね、と奉莉に箱を開けるように急かす。彼女は少し迷っているそぶりをみせていたが、それじゃ遠慮なくと弥彦に一言いうとラッピングされていた箱を開ける。

「おしゃれなネックレス！ありがとう弥彦」

「どういたしまして、せっかくだし着けてみなよ」

うん！と嬉しそうに彼女は頷くとネックレスを身に着ける。

「どうかな…似合ってるかな」

恥ずかしそうに俯く奉莉を観察する。まだ幼い彼女の幼さを残しながら、それでいて彼女の女の子としての気品が溢れるさせてくれていて普段でもかわいい彼女を更に映えさせてくれる。俺いい仕事したな、と弥彦は内心で自分を褒める。

「うん、似合っているしかわいいよ」

「か、か、か、かわいい!？」

奉莉はいまにも沸騰寸前の状態であたふたしている。そんな彼女の様子を微笑んでみている弥彦は気に入ってもらえてよかったとほっとしていた。そんな一幕の後、奉莉の持っていた携帯電話が鳴り、そろそろ時間も頃合いだから帰りましょうという連絡がはいる。連絡を受けてからふたりは両親たちと合流する。夕乃と真九郎もそれに合流して遊園地を退園する。帰り際に奉莉のご両親がネックレスの件と娘と一緒に過ごしてくれたことでお礼を弥彦に言っていると冥理は「青春ねえ」と弥彦をからかった。

そして各々の家族で帰りのあいさつをして別れた。楽しいことはあつという間に時間が過ぎるといのがそれはほんとだな、と今日の一日を振り返り思い出す。そんなことを帰りの車内で考えていると急に眠気が襲ってきたので弥彦は目をつぶると、こんな平和な一日もいいなと思いい眠りにつくのだった。

第十話 ある男の休日（後書き）

いかがでしたでしょうか

原作がいつから始まるんだよ！とお怒りになられている方

お前の駄文はつまらないんだよ！という方

すみません、お許してください

正直、あと何話後で原作の話に追い付くのか考えておりません

私は話を投稿してから次話の執筆を始めるのでいきあたりばったり
なのです

そんな作者の駄文に少しでもアドバイスをや指摘をしてくれるお方
ご感想おまちしています。あと祝十話目ですな

第十一話 ある男は謝罪する（前書き）

いつも以上の長文で、いつも以上に読みづらいついと思ひますが
どうか最後まで読んでいただけると嬉しいです

タグに電波的な彼女を追加しました

追加した理由は本文を読んでいただければわかると思ひます

第十一話 ある男は謝罪する

暦は春から夏へと変わるちょうどあいまいな6月の初夏である。天気は快晴。太陽がおしみもなく大地を照らす。異常気象さままの真夏日であるかのような気温のなか、小学校のグラウンドの片隅で額から流れる汗を拳で拭い担任教師である菅原先生の話に弥彦は体育座りの状態で耳をかたむける。周りを見渡せば自分と同じ様に半袖短パンの体育着を身に着け、体育座りで菅原の話聞くクラスメイトがいるのだが、その表情はいつもの元気いっぱいの子供らしいものではなく暑くて堪らないので早くしろといった感じだろうか。菅原が今回の体育授業の内容説明をおえると生徒たちを解散させる。

今回の授業内容はどうやら鉄棒らしい。せつせと鉄棒に取り組んでいるクラスメイトたちを横目に端の方で少し鉄棒の棒の位置が高いせいか誰も練習に使用していない鉄棒を見つけたので弥彦はその鉄棒の前に移動する。自分にも少々棒の位置が高いかな、と分析してからジャンプ。両手で棒をしっかりと握りしめる。地面には両足が届かずぶら下がり状態だといえはわかるだろうか。その状態で両腕に力を込める、上半身が棒より上の位置までくるように上がるとちょうど腰の位置に棒がきた。今度は下半身にまるで蹴り上がるように勢いをつける、その勢いに体をまかせて一回転。逆上がりのできあがりである。

「できた」と内心でガッツポーズする弥彦。本当は少々自信がなかったのだが、やってみればあっさりできた、これは日頃の稽古の賜物なのだろう。そんなことを鉄棒の棒の上で座って考えているとパチパチと拍手する菅原と数名のクラスメイトがいた。

「たいしたものですね、崩月くんは」

「すごいぞ！崩月」

「わたしたちに逆上がりの仕方、教えてほしいの！」

いつの間にか弥彦を囲んで褒めてくれたので、居心地が悪そうに苦笑しながら頭を掻く。

「まいったな。逆上がりひとつで褒めてもらえるとは…俺でよかつたら逆上がりの仕方、教えるよ」

そういうがはやく鉄棒から降りるとクラスメイトに手を引かれ、逆上がりができないという生徒にコツを教えながら指導する。そのなかに奉莉がいて弥彦が笑ってしまい彼女の鉄拳制裁をもらったのは秘密だ。

その後、体育の授業は終わり給食をはさんで昼休みとなった。いつものように図書室で時間を潰そうと思いい教室を出る。図書室は校舎内でも人があまり寄り付かず静かに読書をする環境があるので弥彦は重宝していた。図書室に入ると、今日も見知った顔の生徒がまばらに席に着き読書をしている。いつものようにたくさんある本棚から一冊の本を選び窓際の席に座る。そして、昼休みが終わるまで弥彦は図書室で読書をしていた。

一日の授業を終えると下校の時刻となった。誘拐事件の影響で学校側が対策として保護者との下校を促していたが、事件からの日を経つごとにその危機感が薄くなったためか今では事件前と同じように生徒だけで下校をさせている。まだちらほらと子供が心配な保護者の何名かは自分の子供と下校する姿がまだいくつかはある。さすがにずっとは保護者と下校させるのは厳しいと学校側が判断したのだ

ろうか。危機感が無くなってしまったのか、それとも保護者を考慮してか…まあどちらでもかまわないが、高校の授業が終わるまで姉を待つのも飽きていたし自分にはちょうどいいのだ。

自分のランドセルを背負うと弥彦は体育の授業の授業のおかげで顔見知りになったクラスメイトに別れのあいさつをすると教室を出た。下駄箱で自分の靴を取り出し、靴を履き終わると校舎を出て校門に向かう。

校門前にさしかかると見知った顔のふたりの少女がいることに弥彦は気がつく。ふたりの少女も弥彦に気がつくのと近寄ってきた。

「奉莉に林原さんか…。もう帰ったかと思っていただけ、俺になんか用か？」

「そうよ、あんたと一緒に帰ろうと思って校門前で待っていたの」

「それなら、教室で声をかけてくれればよかったのに」

「ああ、そういうえばそうね。うっかりしてたわ」

「うっかりってお前な…俺たちは一応同じクラスだぞ」

「まあまあ、弥彦くん。そんな小さいこと気にしないでさ、美少女ふたりと一緒に下校できるなんて幸せでしょ？こんなこと生きているうちに経験できるなんて君はしあわせだよ。ちなみに、弥彦くんと一緒に帰ろうと奉莉を誘ったのわたしなんだよ」

真顔で自分と奉莉を美少女と称す林原 杏に弥彦は怪訝そうな表情で彼女に対して考えを改めたほうがいいかなと思考するが、はためからみれば確かにふたりは美少女と称しても問題ないぐらい外見はかわいいと思う。弥彦の返事をまっけているのか、杏はにこにこ笑いながらこちらを見ている。

「そうだな、こんな経験は二度とないかもな。誘ってくれた林原さんには感謝しないとな」

「それじゃ、今日から毎日誘ってあげましょう！それと名前呼ぶ時は杏でいいよ。いつまでも林原さんじゃ他人行儀みたいで嫌だから」
「それじゃ、遠慮なく。杏と呼ばせてもらおうよ」
「うん！それでよろしい」

人懐っこそうな笑顔で杏は頷く。

三人とも電車通学なので駅に向かう。改札口で定期券を駅員に見せ改札を潜りホームで電車がくるのを待つ。三人とも帰る方角は同じで、弥彦の目的駅のひと駅前が奉莉、ひと駅先が杏の目的駅だと電車を待っている間の会話で訊いた。電車が到着すると三人は電車に乗り込む。車内は弥彦たちと同じように学校帰りの小学生がまばらにいたが椅子がちょうど三人分空いていたのでそのスペースに三人で座る。

電車の中というのはどうしても無言になってしまいがちである。いわゆる無言の暗黙の了解といえいいのだろうか。この一車両に何十人と乗っているのに会話のひとつもない状態の空間、外界とはまったく異なる異質的な感じが弥彦はきらいだった。ふと電車内でよくみかける広告欄に目をやると大々的な文字で『残虐的猟奇事件多発！警察は頭を抱える』と色鮮やかなゴシック調の文字で書かれているのに気がついた。週刊誌の見出しだろうかその横にはまるで血のような赤文字で強調するように『首無し殺人』『無差別耳削ぎ事件』『無差別連続通り魔殺人』などどれも最近ちまたを騒がせている事件の名前ばかりであった。どれもまだ犯人がまだ捕まっておらず、その状況を嘆いたその筋の専門家たちが警察は無能だとテレビのワイドショーなどでいっていたのを思い出した。

そこで思考してみる、犯人はなにを目的にこのような事件を起こしているのだろうか？自分の欲求を満たすため？なんとなく目的も無

しにとか？それとも宗教的な理由で？どれもこれも自分の身に起きたらたまったものではないのは事実だろう。犯人の思考など考えるだけで気分が悪くなる。広告欄をずっと見つめる弥彦に気がついた杏が声をかける

「こわいよねー。まだ、犯人が捕まってるんでないんだってね。いまもどこかで誰かが犠牲になってると思うと背筋がゾツとするよね。なんかこう、ぱぱつと事件を解決しちゃう正義の味方とかいないのかなー」

「正義の味方ねえ…。いるんだったら、さっさと事件を解決してもらいたいのはわたしも同意見ね」

あなたは どう思う？と奉莉は弥彦に尋ねる

「そうだなー。正義の味方という存在がいるかいないかでいったら、俺はいいと思うな。そんな都合のいいやつがいるんだったらとくに世の中平和になっているし、いまの世の中はどうみたって正義の味方より悪の手先の方が自由にそれも無差別に犯罪を犯している」「弥彦くんは夢がないねー。正義の味方！いたらかつこいいじゃん！きつといまはお休み中なんだよ、海外出張中！」

海外はこの国よりもっと犯罪が多いところがほとんどなんだけどな…と内心で呟くが口にしてしゃべるのは杏の夢を壊してしまう気がしたのでやめた。

帰宅して早々に稽古の準備をしていつものように法泉との組手。稽古を終えて庭にある井戸で汗を流していると縁側に母親である冥莉がやってきた。

「弥彦ー。愛しの奉莉ちゃんからの電話よ」
「……………いまいくよ」

冥理はうふふと上機嫌に笑って弥彦に「女の子を待たせてはダメよ」と一言いうと廊下を歩いていき視界から消えた。どうやら冥理は遊園地の一件で自分と奉莉の関係に誤解をしているらしいのだが、その誤解を説明するのめんどくさいので弥彦はだまっていた。伏せてある受話器を手に取ると耳元にあてる。

「もしもし、弥彦ですが」

「もしもし、わたしだけど。あんた、今週末の土日は暇？」

「なんだよ、急に。また、遊びの誘いか」

「違うわよ！わたしが空手を習っているのあんた知っていますでしょ」

「ああ、知っているがそれがどうしたんだよ」

「わたしが通っている空手道場の師範にあんたのこと話したの」

「それが土日になにか関係があるのか？」

「話を最後まで聞きなさいよ。そしたら、あんたを一度見てみたいって師範が興味を持つちゃったみたいでね。だからわたしと一緒に道場に来なさい！」

「無茶苦茶な誘いだな…。俺は空手道場の方には興味があるから行ってもいいけど、稽古があっ『行ってきていいわよー！』……………」

「あんたのママの許可も出だし、それじゃ詳しいことは学校で話すわ。また明日ね」

そついうと電話がきれた

「……………」

「あら？どうしたの弥彦。奉莉ちゃんからのデートのお誘いだったんでしょ」

「ソウデスネ」

「冷たいわねー。お母さんが会話の邪魔したから怒ってるの？もう、恥ずかしがっちゃって！かわいいんだから」

さすがにそろそろ誤解を解かないと面倒なので弁明をする

「お母さん、俺と奉莉はただの友達なんだって！お母さんが思っているような関係じゃないよ」

「そうなの？てつきり恋人さんかと思ってたわよ。弥彦もお父さんに似て奥手ね。わたしのときはおとうさんが……」

その後、眞理と父親のなれはじめ物語を自分に言い聞かせる母親に弥彦はやれやれとため息を吐いた。

翌日の小学校で奉莉と空手道場訪問の詳しい日時と集合場所を相談した。一応、持ち物に胴着を持ってくるように彼女に言われたのでそれに弥彦は了承した。

そして土曜日の休日、早朝。朝稽古は今日一日の稽古を休むと事前に法泉に言って許可貰っていたので中止。玄関先でスポーツバックの中に胴着とタオルと母親が用意してくれた水筒が入っていること確認すると弥彦は早朝の新鮮な空気を一息吸うと気持ち切り替えて駅へと歩きだした。

目的地の駅で奉莉と合流すると彼女の案内で道場にむかう。駅から徒歩20分といったところに人の活気がなく静かな住宅街から少し離れた土地にその道場があった。その佇まいは崩月家の道場に負けずとも劣らない年季の入った、それでいてこの道場のある空間だけはまわりとは空気が違うような錯覚をさせるものがある。道場からは内から外へと門下生たちが稽古に励んでいる声が聞こえてくる。さて、どんな人が師範をしているのだろうかと胸を高鳴らせている

弥彦を横目に奉莉は道場の裏手へと歩きだす。それに気づいた弥彦は慌てて彼女の後を追う。道場の裏手に周るとそこには小さな小屋が二棟。男女別の更衣室を兼ねた小屋だと奉莉から説明があった。ふたりは別々の小屋に入ると胴着に着替える。弥彦は着替え終えたところで小屋から出るとちょうど隣の小屋から空手衣姿の彼女も出てきた。彼女の長い黒髪は後ろで纏められポニーテールになっていた。いつもと違いひきしまった表情の彼女は雰囲気もまったくの別人に近いものの印象をうけた。

「ずいぶんと変わるもんだな、別人かと思ったよ」

「あんたもね、それにしてもあんたの胴着はうちのと違うのね」

「俺のはただ下が袴なくらいの違いだよ」

ふーんと彼女は興味が失せたのか弥彦に「いきましょ」と一言いうと弥彦を先導するように表の道場の入口を目指す。

道場内に入ると小さな子供から大人までの門下生が稽古に励んでいた。そのなかには奉莉のような少女たちが数名混じって稽古に励んでいる姿を弥彦は確認できた。見慣れない弥彦が道場に入ってきたので門下生の視線が集まっていたがそれを横目に奉莉の案内でこの道場の師範にあいさつをしに行く。道場で人一倍門下生に激をとばしている人物がいるのだがどうみても女性だった。あの女性がこの道場の師範なのだろうか。そんなことを思考しているうちに奉莉が女性に歩み寄りこちらを指さすとなにやら話している。すると女性が弥彦に近寄ると弥彦の目線に合うようにしゃがみこむ。

「やあ、初めまして。きみが噂の奉莉ちゃんがゾッコンの子かあー。

お名前は？」

「崩月 弥彦です」

「崩月？もしかして夕乃ちゃんの弟くんかな」

姉を知っている？女性の一言に弥彦は怪訝そうな表情をする。

「そうですが…どうして姉をご存じなんですか」

「いやー、私の家のご近所さんがお知り合いでね。その時に紹介してもらったの」

まさかこの人、真九郎さんが連休中に泊まりにきたときに訊いた五月雨荘の住人の……。

「あの一、もしかして武藤 環さんですか？」

「おろ？私のこと知ってるんだ」

「はい、真九郎さんから話で聞きました。なんでも個性豊かな人だと」

「へえー、真九郎くんともお知り合いなんだ。なるほどね」

この人が真九郎さんが住まう五月雨荘の工口魔人こと武藤 環さんか、真九郎さんの話では引越祝いに大量のアダルトビデオを贈ったり、下ネタの話が大好きで困った性格の持ち主だと聞いていたが第一印象は悪くはないな、顔立ちも整っていて綺麗な人のように思える。しかもこの道場の師範代だ。こんな人が工口魔人とは真九郎さんを疑うわけではないが信じられないな。

「それじゃあ弥彦くんは奉莉ちゃんと同じ年少組に混じって稽古に参加してもらおうか。弥彦くんは初心者ってわけじゃないでしょ、大丈夫だよな？」

「はい！今日はよろしくおねがいます」

「よろしい。じゃあ、年少組！私の周りに集合ー！」

環が大声で集合をかけると弥彦と歳が近い子供たちが環と弥彦を囲むように集まる。子供たちのひとりひとりの視線を一齐につける

とめると環が話をきりだす。

「今日一日この道場に体験入門する崩月 弥彦くんだよ。彼が稽古で困っていたりしたら助けてあげてね」

『はい!』

「うんうん、いいお返事だね。それじゃ、解散!」

環の合図に子供たちは元の位置に戻ると稽古の続きを行う。さて、自分はどうしたらよいものとさっそく困っていると、それを見かねたひとりの少女が弥彦に駆け寄る。

「お困りですか?崩月先輩」

「……先輩って俺のことか?」

「はい、あたしは年上の方には名前に先輩とお呼びしてます」

まだ小学一年生の自分のことを先輩などと呼んでくれる幼い少女。ということはこの子は妹の散鶴と同じくらいの年だということなのだろうか、そのわりにはしっかりした女の子の態度に弥彦は驚いた。

「悪いんだけど、空手は初めての経験でさ。なにをすればいいのかわからないんだ」

年下だろうがわからないことはわからないので素直に少女に助言を頼む。

「それでしたら、まずは正拳突きの実習からですかね。あたしが手本に先輩の前でやりますのでそれをまずは真似て下さい」

「わかった、よろしくおねがいます」

名の知らぬ少女のもと弥彦は正拳突きの実習を仰ぐ。ただの拳の突

きではあるが体の重心移動などを用いて上段・中段・下段突きと織り交ぜながらひたすらに拳を突く。拳を突くことに掛け声を発し気合いをいれる。

何回拳を突いただろうか？拳を突くペースを徐々に速め、額から汗が流れる。自分の正面で手本となるように拳を突く少女はいまだに疲れた表情をみせず、凛々しい顔で拳を突く。自分より年下の女の子なのにこれほどのスタミナと集中力、この子は他の子が休憩するなか弥彦のペースに合わせて拳を突く。自分の血が騒ぎ囁く「面白い」と、どつちがばてるのが早いか勝敗がつくまでこのまま続けようと弥彦が思っていた矢先に休憩していた奉莉が持っていたタオル投げると弥彦の頭に被さった。視界を失った弥彦は動きを止めると覆いかぶさるタオルを掴んで除けると奉莉にゆっくりと視線を移す。

「これから面白くなるところだったんだが、これじゃ俺の負けだ」
「なに言ってるのよ、あなたは！よく見なさいよ、光ちゃんはとっくに体力の限界だったのよ」

なにをいつているんだこいつは、彼女はまだ余裕があるはずだが？と奉莉からさつきまで一緒に拳を突いていた少女に視線を移すと少女はぐったりと床に倒れ伏していた。彼女を介抱するもうひとりの少女がこちらを鋭い眼差しで睨む。

「光ちゃんね、負けず嫌いな子なの。あんたに負けたくないからあんたがばてるまで一緒に正拳突きをしていたのじゃないか」
「……そうだったのか。すまなかった」
「わたしに謝ってどうすんのよ！光ちゃんに謝りなさい」

頭に冷えたタオルを乗せられてぐったりとした少女に弥彦は歩み寄ると

「すまなかつた。俺なんかの稽古に付きあわせてしまったが為に、調子に乗りすぎた」

頭を深く下げ少女に謝罪する。それを仰向きになり床で横になっている少女は一度頷くと

「……いえ、崩月先輩のせいではありませんよ。あたしがまだ未熟なだけですから」

ははは、と渴いた笑い声でそういうと少女はまだふらつく体を介抱していた少女の肩を借りて支えてもらいながら起き上る。

「あたしの名前は堕花 光といいます。崩月先輩は御強いんですね。あたしの完敗です」

『堕花』か……。裏十三家にそんな名前があるのを祖父から訊いたが同名なだけだろうか？

弥彦は少し考え込んでから間をおいて光の両眼をみる。

「……堕花、光。覚えたよ。でもこの不祥事のけじめを俺がつけなくてちゃ俺の気が済まない」

「それならあたしにひとつ貸、というのはどうでしょう」

「そんなことでいいのか」

「はい」

「わかった。なら、光ちゃんに俺から貸ひとつだ」

「はい！」

光は嬉しそうに笑顔で頷くと休憩時間も終わったようで子供たちが稽古を再開しだした。環が弥彦と光に休憩するように促すとこの場所では光が休めないと思ひ弥彦は光の肩を支えている少女の支えき

れない反対側の肩を支えてあげると道場の隅で休憩できるスペースがある。そのスペースまで彼女を移し床に座らせると弥彦も光の隣に座り一緒に休憩するのだった。

休憩の間は光と何気ない会話。彼女は自分には年上の姉がひとりいることを教えてくれた。姉のことを話す彼女はどこか嬉しそうにそして自慢げにみえた。弥彦も年の離れた姉と年下の妹がいることを彼女に話すと持参していた水筒の冥理が作ってくれた麦茶をちびちびと飲みながら稽古中の奉莉の姿を見つめていた。

朝一から始めた稽古はお昼をはさんで時刻は午後4時となった。稽古も終盤となり環が門下生たちに組手をするように指示をする。二人一組になりひとが入り混じるなか組手をさせるのだろうかと思っていたがどうやら違うようだ。環が組手をさせる人物をふたり選び、選ばれたものは道場の中央で実際の試合形式で組手をするようだ。その間、選ばれなかった門下生たちは道場のまわりで待機、つまり試合の見学である。もちろん審判は環だ。試合が淡々と進んで門下生が入れ違うなかついにその時がきた。環が宣言する。

「つぎは円ちゃん！相手は弥彦くん！さあ、いらっしやい」

場内がすこしざわつく、体験入門生のきたばかりの弥彦を組手に参加させるからだろうか？それとはなんか感じが違うような気がする。が気のせいだろう。弥彦は呼ばれたので立ち上がると隣に座る奉莉も立ち上がり道場の中央に移動しようとする弥彦を胴着の首根っこをつかんで止める。

「なんだよ、奉莉。これから試合があるから離してくれないか」

「いいからちよつと話を聞きなさい。あんたの相手の子はわたしの友達なの、あんたよりも強いかもしれないぐらい円は強い」

「へえ、それは楽しみだ」

「それでね、どうも稽古中のあんたは雰囲気がいつもと違うの。怖いよ…」

「……………」

「だからね、あんたが本気になつてあの腕から角が生えるやつになつたら、さすがに円でも、いえ師範の環さんでも死んじゃうかもしれない」

「それで？」

「だから、あの角のやつは使わないであげて、わたしからのお願い」
奉莉は真剣な眼差しで弥彦に願う彼女の姿に困惑した。俺は誰かを殺そうなんて思っちゃいない。ましてや戦鬼の力を試合で使うなんてもつてのほかだ。だが、彼女は俺に戦鬼の力を使うなと釘をさしている。大切な友達が俺に殺されるかもしれないからやめてくれと懇願している。子供は無邪気さゆえに人の気持ちの裏側を感じるといふが、そのなかで彼女は俺のなかの何を感じたのだろうか。

「安心しろ、あの力は使わないよ。あれはとっておきの秘密なんだ。例外として奉莉には俺が見せてはいるけどね。大丈夫、ただの子供同士の試合にあれば必要ないものだ」

できるだけ相手を和ませるような笑顔で彼女に言い聞かせると、道場の中央に歩み出る。
そこで待っていたのは光を介抱していたとき弥彦を睨みつけていたひとりの少女。
なるほど、彼女が円ちゃんか。円は弥彦をその鋭い眼差しで睨みつけてると宣言する。

「……………円堂 円。わたしはブロッコリーとあなたが嫌いなの」

「はあっ！？」

宣戦布告ともとれる彼女の発言に気を取られていた弥彦はとっさに後ろに跳ぶ。彼女の上段蹴りが鼻をかすめる、その隙を逃さない円は前進。腹部に正拳突きをいれる。

「かはっ」

息が止まる、後ろに飛ばされまいと両足に力を込めて踏ん張る。円は一步後ろに下がると一瞬の溜めのあと弥彦の脇腹にすい込まれるように回し蹴り。体が左に傾く、歯を食いしばり弥彦は拳を振るうが彼女に避けられる。円は弥彦と一定の距離をとると

「たいしたものね。タフさだけが取り柄なのかしら」

「……それはどうも」

円の攻撃には女の子とは思えないほどの重さがあるが、それでも幼い頃からの崩月の肉体改造で培ってきた弥彦の体は倒れることはない。それに相手は『円堂』だと名乗った。光と同じく同名だという可能性は捨てきれないが、自分は『崩月』この勝負負けるわけにはいかない。ここから反撃だ。弥彦は一度息を整えると円を見据える。あれは敵だ、倒すべきものだ、完膚なきままに。弥彦は円との間合いを詰めると円は上段蹴りで弥彦の頭を側面から襲う。それを頭を下げ避けるとそのまま突進、円の懐に今日の稽古で覚えた正拳突きをいれる。その鋭く重い一撃に円はよろめく、その隙を見逃さず下段蹴りで足を狙い円の体勢を崩す。さらに足を鞭のようにしならせて上段蹴りで頭から円を蹴りとばそうとするが環が割り込み弥彦の蹴りあげた足を片腕で止める。

「そこまで！弥彦くん、円ちゃん的首飛ばす気？いまの蹴りはヤバかったよ」

「まだ決着は着いちゃいませんよ！環さん、続きをさせてください」
「ダメよ、頭を冷やしなさい弥彦くん。これは殺し合いじゃないの、試合なの」

「俺はただ！」

ただ、なんだというのだろう。円にこの試合勝ちたかったただけだろうか？『円堂』という名前に過剰に反応してしまって自分を見失い彼女を殺す一歩手前まで気がつかなかった。環の仲裁がなければ彼女が犠牲になっていたかもしれないのに……。まわりを見れば門下生が俺を睨んでいる、居心地が悪い、胸が苦しくなる、まるで俺があんたらの敵みたいじゃないか。罪悪感が内から込み上げる、こんなはずじゃなかった。

「……すみませんでした。ただ、俺は試合中に円堂さんを殺そうなんて思ってたなんかいません。それだけは理解して下さい」

この道場にいる全員にむけた言い訳を残し道場から去る弥彦。円が何か言いたそうにしていたが弥彦はそれに気がつかなかった。

道場の外はすっかり闇に染まり静かな住宅街はまるでゴーストタウンのように不気味だった。そのなかをひとり私服に着替えた弥彦は駅に向かってとぼとぼ歩く。気分が優れない、あんなに大勢の人間から敵意のこもった視線をうけたのは初めての経験だった。あれはもう2度と経験はしたくない。それにしても暑い、熱帯夜みたいじゃないか。喉が渇く、水筒の中身は空っぽで水分を体が求める。そんななか道端にぼつんと古びた自販機を発見した弥彦はそこでジュースを買つと一口飲む。喉が潤い、この暑さを少しは和らげてくれた。

「にゃー」

にゃー？猫かな、と鳴き声がする後ろを振り返えってみれば闇に紛れるように一匹の黒猫がこちらを見ている。猫の首には小さな鈴のついた首輪がついていた、飼猫だろうか？

弥彦が猫に近寄りしゃがみこんで頭を撫でてやると、ごろごろと嬉しそうに鳴く。気持ち少し和らぐ気がした。いつまでもこうしていたいのは山々だが、帰りが遅くなるのはまずいので最後に黒猫を一撫でしてその場を弥彦は去った。

駅前に到着すると活気に溢れたネオンが広がりさつきまでいた住宅街との雰囲気の違いに弥彦は苦笑する。

「にゃー」

人が溢れ雑音だらけの駅前でその鳴き声ははつきりとよく聞こえた。

「またお前か」

さつき会った黒猫がどうやら着いてきてしまったらしい。足元で体を擦りつけ弥彦から離れようとしなない。それに困った弥彦は近くのコンビニでさば缶を購入。そしてまた住宅街の方向へと歩き始める。帰り道の途中で公園を見つけたのでそこでこの猫にさば缶を与えて夢中になっている内に走り去り電車に乗るという作戦だ。我ながらいい作戦じゃないかと考えているうちに公園に到着した。公園内には人は誰もおらず、電灯がベンチを照らす、ひとつだけ、なんとも寂しい気がしてやまないが弥彦はベンチに腰かけるとさつき購入したさば缶を開封して黒猫に与える。猫が夢中になっている隙にとつと帰ろうとベンチから立ち上がり走り去ろうかと思っていたが突

然、人の気配を後ろに感じたので振り返る。闇に紛れるように全身黒ずくめの服と黒い大きな帽子を被った女性がそこにはいた。

「えっと、どちら様でしょうか？」

「そこにいる猫の飼い主だよ」

そういうと女性はいつの間にか黒猫を腕の中で優しく包みこむように抱いてベンチに座る。

「ほら、立ってないで座りたまえ」

「はあ、では失礼します」

さつきまで帰ろうとしていた弥彦だが、この黒ずくめの女性が気になるのでとりあえず彼女の指示に従う。

「この猫の名前はダビデといってな、私の大切なものなんだ」

「そうなんですか」

「少年。君には大切なものはあるかな？」

「大切なものですか……」

「そう、大切なもの。それは家族、友人、恋人、愛情、資産、生命、思い出、平和、希望、欲望、力、思い入れのある品でもなんでもかまわない。なにかひとつみつけてみれば自分の視野がひろがるものさ」

「……………」

大切なものか、改めて考えてもみなかった。自分にはあるのだろうか？

「さて、そろそろ私は御暇しよう。君の『きつかけとなるもの』が近づいているのでね。また縁があれば会おう、少年」

そういうと彼女はベンチから立ち上がると夜の闇に溶け込むように静かに消えていった。

不思議な人だったが、あの人の言葉には大切な意味があるのかもしれない。不思議な余韻を残して闇に消えていった女性に弥彦はきつと近いうちにまた会うことができそうな気がした。

さて、俺も家に帰ろうとベンチから立ち上がり公園の出口を目指して歩き出す。駅に向かう途中の帰り道、弥彦の後ろから走り駆け寄る人物が三人。それに気づいた弥彦は歩みを止める。その人物たちは奉莉に光それに円堂 円だった。

「なんだ、三人して走って着やがって。徒競争の練習でもしてんのか？」

走って息を切らしているものはおらず三人とも顔を伏せてだんまりだ。それを見かねた弥彦は苦笑すると

「道場の件で気に病むのはお前らのすることではないだろ。それは俺のすることだ。また後日にちゃんと環さんと門下生の人たち全員に謝りにいくさ。それでいいだろ？もちろん今ここで三人にも謝るごめんなさい、特に円堂さんには悪いことをした。謝っても許してもらえないことはないのだろうけど、これが俺の誠意だ」

三人娘の前で深く頭を下げ謝罪する。すると道場の件で一番の被害者の円が三人を代表するように話だす。

「頭をあげてくれない、崩月くん。当事者であるわたしはあなたのことを別に恨んだりしているわけじゃないから。むしろ、あなたとは友達になりたいと思っているの。最初は光をあそこまで追い込ん

だ男を潰してやるうかと思っていたのだけど結果として潰されたのはわたしのほう。男に試合で負けたのはあなたが初めてよ。もちろん子供限定だけどね。それでも、あなたの気が済まないというのなら光と同じように貸って事にしてもらいたいわ」

そういうと円はそのクールな顔からは想像もつかない幼いかわいらしい笑顔で微笑む。それに弥彦は一瞬見とれたが、頭を振るうと平常心を取り戻す。

「ああ、なら光ちゃんと同じく貸ってことで。それでいいのか、円堂さん？」

「それでいいわ、それと円堂『さん』はやめて、円でいいよ」

「そっか、ならこれからよろしくな。円」

「ええ、よろしく。弥彦」

なんとも心強い、いや肉体的にも腕っ節が強い少女が新しい俺の友達となった。

この道場の一件での少女たちの出会いが、あんなにも長い腐れ縁になるとはこのときの弥彦は思いもよらなかつた。

第十一話 ある男は謝罪する（後書き）

いかがでしたでしょうか

なんとというか風呂敷を広げすぎた感じがいなめせんね

原作では環が師範を務める道場に円と光という少女が通っている
しか書かれていませんが、私はその二人を電波に出てくる二人であ
るという独自設定にさせてもらいました。

もし、このお話が続けば電波的な彼女までを予定しています

そこまで続けられればいいのですが…どうなんでしょう

私の駄文を一人でも読んでいただいている方がいる限りお話を続け
たいと思います

それと恐れ多くもお気に入り登録をしていただいている方

ありがとうございます、作者の励みになっていますので感想なども
書いていただけると嬉しいですよ

第十二話 ある男の友達と願ひ事（前書き）

日常の話題です

つまらないとは思いますがご愛読お願いします

第十二話 ある男の友達と願回事

現在は暦のうえでは7月。

旧暦では文月ともいうが、まあそんなことはどうでもいい。

太陽が朝から絶好調なぐらいサンサンと輝き登校中の弥彦を天高く頭上から照らす。

朝のニュースではちょうど海開きがとうだとか言っていたが、もうそんな季節か。

夏の到来を知らせるかのように蝉が木々や電柱の柱にしがみ付いてミンミンと元気よく鳴いている。

やつらは何年もの間を土の中で過ごし、そして夏の間の一月ほどを地表に這い上がり、己の生を賭けて子孫を残すために鳴き、そして死ぬのである。

なんとも単純明快でシンプルでそれでいて、儂い人生。いや、虫生か。

そんなことを考えながら額に汗を流し、その小さな体には相応しい黒いランドセルを背負いながらとぼとぼと歩いていると突然、後方から声をかけられる。

「おっはよー！今日も暑いよねー。こんな日には冷房の効いた部屋でアイスをお腹いっぱいになるくらいまで食べてみたいよね。ちなみに、わたしはスイカバーが好きなの。あの黒い粒粒の種みたいなのが好きなのよねー。だけどメロン味のは嫌いな、粒粒がないから物足りないのよね」

「朝から元気なやつだな、まったく。冷房の効いた部屋でアイスをたらふく食ったら腹壊すだろうが。ちなみに俺はメロン味のやつは好物だけだな」

えー、信じられない。と、いつの間にか弥彦の隣で連れ添うように歩く少女は林原 杏。

タンクトップにショートパンツという少々肌の露出度が高い服装に短めなショートカットの髪型。ひと目見ただけでは男の子かと思わせるようなその服装は元気いっぱいな容姿の彼女に相応しい。

「今日は奉莉と一緒にじゃないんだな。いつも二人で登校しているから気になったんだが」

「奉莉はあそこ」

杏はさつきまで歩いてきた道を指差す。

彼女の指差す先を見つめると鬼の形相で全速力でこちらに駆け走る天王寺 奉莉がいた。

「な、なんか様子がおかしくないか、俺には奉莉が怒っているように見えるんだが。もしかしなくても杏！おまえの仕業だな！」

そついうが早く杏は弥彦の腕を掴むと走り出す。

急なことに頭がパニック状態になり彼女のなすがままに手を引かれた弥彦も走り出す。

「説明は後でね！とにかく今は戦略的撤退だあー！」

「ちよっ！おまえ、なんで俺まで走らにゃならんだー！」

すぐ後ろにはいつの間にか距離を詰めていた奉莉がそこにはいた。

「待ちなさいーい！！杏。今日という今日こそは許さないんだからねー！」

「ハハハハ！さらばだあー！奉莉くん！」

「いいから！杏、俺の手を放せよー！！」

その後、三人の逃亡劇は小学校の校門前まで続いた。

そして、奉莉が後ろから追いつき杏となぜか弥彦も御用となった。

さすがの弥彦も太陽が照りつけるなかの全力疾走は精神面で体には堪えた。

そして、なぜ奉莉が杏を怒りながら追いかけていたかというところの原因は杏にあった。

ことのあらましはこうだ。

いつもどおりの朝、ふたりは小学校最寄りの駅でいつもどおりに合流。

そして事件が起きた。

杏が奉莉のスカートをめくったのだ。

それも通勤通学の人であふれる駅前の公衆の面前で。

さすがの奉莉もそれにキレて杏に鉄拳制裁。

しかし、それを杏はなんなく避けると全速力で逃亡。

そして昼休みの今に至るといっわけだ。

ことのあらましを床に正座させられた杏と公衆の面前で羞恥を晒されて怒っている奉莉から訊くと弥彦はため息を吐く。

「杏、おまえは昭和のませた男子か」

「ひどいなー。わたしは平成生まれのぴちぴちの麗しい乙女ですよ」

「そういう意味でいったわけではないのだが」

「わたしなりの奉莉へのスキンシップだよ。それに、弥彦くんは気にならないのかなー」

「なにが？」

「奉莉のぱんつ」

場の雰囲気は凍る。俯いているせいで奉莉の表情が見えんが、これはまずい。

落ち着け俺、こういふときは焦ったら負けだ。

「そ、そ、そんなもん。俺は興味がない！」

「うっそだー。いまちょっと動揺したでしょ、知りたい？」

こいつは…ヤブヘビになりそうな予感がする。

蛇が出て来る前に話を終わらせようと弥彦は杏を止める。

「やめるー！それ以上言うな！」

弥彦の言うことも聞かずに杏は続ける。

「かわいいクマさんの柄が入った白地のぱんつでしたー。えへへ」

「……………」

「……………」

おわった、なにもかもがおわった、色々な意味で奉莉の肩が震えている。

「……………あの、奉莉さん？どうかしましたか」

様子がおかしい奉莉に弥彦が尋ねる。

「……………ばか」

「えっ？」

「杏のバカーっ！なんでよりもよって弥彦の前で言つものよ！もう杏、あんたとは絶交よ！」

奉莉は杏を怒鳴りつけると教室から出て行った。それを杏と弥彦は黙って見送る。

「あはは、ちょっとやりすぎたかな」

しっばい、しっばいと杏は弥彦の隣で話す。それを横目に弥彦はやれやれとため息を再度吐くと少し考えてから杏に話しかける。

「そうだな、今回の件はおまえが悪い。あいつはまだ女の子なんだ、内面がまだ脆くデリケートだ。もちろん、杏もな。おまえは元気なのはいいが、少し自重しろ。自分がされたら嫌なことを他人にしてはならないと昔のえらい人が言ってたしな。そして、相手を尊重してあげなきゃな」

わかったか？と弥彦は杏に言い聞かせる。

すると杏は自分に思うところがあつたのか、それとも弥彦の話を理解したのか、一度頷く。

「……反省してます」

「よろしい、それじゃあ奉莉の後を辿るとしようか」

「弥彦くんは奉莉がどこに向かったの知ってるの？」

杏の疑問にまあねと弥彦は返事を返し、続ける。

「こういうときは大体あそこと相場が決まっている」

「あそこ？」

「そうだ。杏は教室で待機な、お前が一緒だと今の奉莉は話を聞いてくれそうにないからな」

「わかった。わたしはここで待ってるよ。奉莉のことをお願いね」

まかせろ、と弥彦は頷くと時間が惜しいので急ぎ足で奉莉がいるであろう場所へと向かう。

階段を上り、立ち入り禁止の札が立て掛けてある屋上へと続く扉を開くと、そこに彼女はいた。

ひとり弥彦に背を向けるかたちで立ち尽くしている奉莉の姿を確認。後姿だけで彼女の表情は窺えないが肩が上下に震えている。声を押し殺し泣いているのだろうか？

弥彦はゆっくりと歩み寄ると、なるべく優しく話しかける。

「急に教室から出て行くもんだから驚いたよ。こつやってふたりに屋上にいるのも久しぶりだな。あのときはおまえが俺を心配して屋上に来てくれたけどな」

「……………」

奉莉の震える肩が止まる。それを見た弥彦は話を続ける。

「今回はあの時とは立場が逆だ。なぜ俺がお前を追って屋上まで来たのか理解できるか？」

彼女はこちらを振り向きむくと、その瞳には涙が浮かんでいた。

「……………そんなの、知らないわよ」

「まあいいや、さっきのことでお前が杏に怒っているのはわかる。確かに杏は奉莉に心にもないことをしてかした。だが、絶交とはひどいんじゃないか？」

「あんたは杏の味方をする気なの！？杏はわたしにひどいことをしたし、あんたの前で余計なことを言った！そんな杏をわたしは許さ

ない」

奉莉は弥彦を睨みつける。

「杏は反省している。お前が落ち着いたらでいいから二人で仲直りしよう。だから…」

「だから？だからなによ！あんたにはわたしはわたしの気持は分からないでしょう！」

奉莉は一步下がると、一瞬腰を下げ、力を片足に溜めると上段蹴り。弥彦はあえて避けずに蹴りを受ける。

顎の下から上に突き上げるかのような蹴りを受けて弥彦は宙を舞う。そのまま受身をとらずに屋上の床に仰向けに倒れる。青空がきれいだ。

奉莉といい、円といい、光ちゃんが通っている道場の少女たちは普通の子供という規格を軽く凌駕しているんじゃないかと改めて思う。床に倒れた状態で顎が外れてないか確認。

うん、大丈夫。崩月流の稽古は伊達じゃないな。

ゆっくりと服についた土埃を払いながら起き上がり、再び奉莉の正面に立つ。

「相変わらず怒るとすぐ鉄拳制裁か。いまのは効いたよ、円の時と同じくらいな。さて、はつきりと言わせてもらうが俺にはおまえの気持はわからん。自分以外の他人が気持を共有するなんてできるわけがない。『私にはあなたの気持がわかる』なんていうやつは、とんだ大嘘吐き野郎だ。そんなもの幻想や妄想の類でしかないのにな。

でもな、そういう意味では俺もその類のやつらに当てはまるんだな、これが」

奉莉は弥彦の話を静かに聞いている。落ち着いたのか襲ってくる様子はない。

「けどな、友達ってというのが大切だっていうのは理解できるだろ？学校なんて閉鎖的な集団生活を強勢されるところだと特にな。俺はそれで失敗しているから特に友達関係には人一倍敏感でな。それで、数少ない心を許せる友達が喧嘩をしているならそれを止めたい」「それってただ、自分の価値観をわたしに押し付けているだけじゃないの？」

「そう捉えてもらって結構だが、生憎俺は自分の周りで起こった揉め事には自ら首を突っ込むようにしている」

「初耳ね」

「ああ、今言った。ただの他人ならどうでもいいが、奉莉と杏は俺にとって大切な友人だからな。その友人たちが喧嘩しているなら友人として喧嘩を仲裁したいと思うのは筋が通っているとは思うのだが、違うか？」

奉莉は弥彦の顔をじっと見つめるとなにか考えるような素振りを見せた。

すると考えがまとまったのか一度深いため息を吐くと

「あんたには敵わないわね。そこまで言われたら仲直りしないとわたくしが悪者みたいじゃないの」

「奉莉は悪者じゃなくて俺の大切な友達だが」
「はいはい、それはもういいわよ」

奉莉はやれやれといった感じで弥彦に言うのと彼の腕を掴み手を繋ぐ。なぜここで手を繋ぐ？と弥彦が疑問を抱いたが、奉莉の表情をみるとさっきまでの怒ったものとは一変して嬉しそうに笑っていたのでそのまま気にせず屋上から教室まで向かった。

教室では弥彦と奉莉の帰りを待つ杏が落ち着かないのか教室内をぐるぐると歩き回っているのを廊下側の入口からこっそりと教室を覗いて確認すると、その様子が可笑しかったのか奉莉が笑う。

教室の入り口付近の廊下からの奉莉の笑い声に杏が気がついたのか、教室から廊下に慌てて飛び出してきた。

慌てた杏は奉莉の姿を確認するとすこし気まずそうな表情をしながら奉莉の正面に立つ。

「あはは…は…、ごめんなさいっ！」

彼女は深く頭を下げ謝罪する。そして頭の位置を再び奉莉と向き合う位置に戻すと少し早口に話を続ける。

「奉莉がさ、教室から飛び出していった後にね、弥彦くんに諭されてね。わたしは奉莉の気持ちも考えずにひどいことをしたって反省したの。だからね、もうあんなことはしないから許して下さい！」

そういうとまた彼女は頭を下げ謝罪する。

こんどは奉莉の言葉を待っているのか下げた頭を戻さない。
それをただ無言で見つめる奉莉をふたりからすこし離れた位置から
弥彦は傍観する。

さて、奉莉は杏の気持ちを受け止めてどうするのだろうか？
まあ、決まっているのだけど…と弥彦は内心で呟き、奉莉の出方を
窺う。

奉莉は目の前で頭を下げた状態の杏の頭を右拳でコツンと叩く。
叩かれた杏は一瞬ビクついたが奉莉はそれにかまわずに話だす。

「ゆるしてあげる」

「……………」

数秒の間の後、杏は頭を上げすかさず奉莉に抱きつく。

「まつりいいい！」

「きゃっ!?!」

突然抱きつかれた奉莉は顔を真っ赤にして慌てている。

その様子が可笑しくて弥彦が笑うと奉莉は弥彦に助けをもとめる。

「ちょっと！笑ってないで助けないさいよ！」

「なんでさ？そのままでもいいだろう。なあ、杏？」

ちよつと奉莉に対して意地悪に接する。

「うん！仲直りの印だもん！離さないよ」

「もうあなたの気持はじゅーぶんっにわかったから、離しなさいよ」

抱きつかれているのを離せと言っている奉莉だが、その表情は杏と仲治りできたのを喜んでいるように弥彦には見えた。

奉莉と杏が無事仲直りを終え、そのまま午後からの授業を受ける。授業内容は七月の行事である七夕に向けてのレクリエーションであった。菅原教諭の七夕についての説明、それから生徒たちに折り紙を長方形に切った短冊を配り終えると

「さて、みなさん。いま配った短冊に自分の願い事を書いて下さいね。なるべくこの授業中に短冊は提出してください。提出した短冊は後日、七夕当日に昇降口前に飾ります。わかりましたか？」

『はい』

菅原の指示に従い生徒たちは各々の願い事を込めて短冊に書きつづる。弥彦はその様子を横目に自分の机の上に置いてある一枚の短冊を腕を組んでみつめる。

七夕か：そういえば毎年、崩月家で七月七日には七夕を祝っていたな。

そのときは散鶴がはしゃいで、まだ字が書けないのに冥理に助けてもらいながら短冊に『しんくろうおにいちゃんのおよめさんになりたいです』と書いていたものだ。

もちろん姉の夕乃の願い事は『真九郎さんと婚姻』なんとも姉妹揃

つて真九郎さんの花嫁を夢見ているとは崩月家の男としては苦笑しかないのだが、かくいう弥彦も真九郎は大好きなのだった。

真九郎は人を引き付ける魅力がある。きっと将来人望の厚い最高の揉め事処理屋になるだろう。兄弟子だからといって鼻屑しているわけじゃない。

「……真九郎さんに、揉め事処理屋か」

誰にも聞こえないような小さい声で弥彦は呟く。

『揉め事処理屋』警察では対処できない犯罪やトラブルを、あらゆる手段を駆使して解決する民間業者。知名度とその実力によって依頼される仕事の落差が激しく、上は国際的犯罪者の捕縛、権力者の護衛から、下は落書きの掃除、犬の預かり委託などまで、ピンキリで多様な層が存在する。その中でも裏世界では超一流の揉め事処理屋と知られる女性がいる。その名は『柔沢 紅香』尋常ではない戦闘力を誇り数多の犯罪組織を潰してきた。その結果、裏世界では彼女には莫大な懸賞金が懸っている。そして、真九郎さんを幼い頃誘拐事件から救ったのは彼女だ。

真九郎が泊まりにきていた時に紅香の話聞き、興味を持った弥彦は祖父の法泉に紅香について一度訊いたことがある。その時のことは忘れない、法泉は弥彦に「あいつに関わることは許さん」とただ一言で一蹴した。そう言われれば弥彦は黙ることしかできなかった。……柔沢紅香、いつたいどんな人物なのだろうか？ 弥彦の興味は尽きない。

自分が揉め事処理屋となれば、その行き着く先で紅香に会えるだろうか？

ありえない、仮に出会ったところで自分は何がしたいのか明確にできない時点で詰んでいるようなもの。

それに己は『裏十三家 崩月』現在当主代行として姉の夕乃が務めているがそれもいつまで続けるのかわからない。法泉は夕乃と真九郎が結ばれて崩月家を継ぐことを望んでいるようだが、それは夕乃だけではなく孫である弥彦にもいえること。いつか法泉から「崩月はお前が継げ」と宣告される日がくるかもしれない。

揉め事処理屋には興味があるが、きつと自分の天職とはならないだろう。どちらかというところ殺し屋か戦闘屋のどちらかが自分にはいいところだろう。そんなものになるつもりはないが。

七夕の話からずいぶん逸れた、短冊に願い事を書かないとな。さて、何を願おうか？

二度目の生を謳歌している今の自分には願い事など思いもつかないが、前の人生になくて今の人生にあるものなんてどうだろうか？ 決めた、これにしよう。弥彦は夢中になって鉛筆を動かし短冊に願いを書く。

『大切な友達を失いませんように』

この願いが叶いますようにと弥彦は短冊に願いを込めるのだった。

第十二話 ある男の友達と願い事（後書き）

まず最初に感謝を

ハレルンさんご感想ありがとうございます

作者の励みとなりますのでよかったですらまたご感想をお願いします

一週間後ぐらいに更新を予定していましたが執筆が終わったので更新してみました

さて、この話の目的としては林原 杏という少女の性格や様子付けをしてみたり揉め事処理屋の説明を入れてみたりと説明回？でした弥彦さんの周りで事件を起こしてみたいものですが難しいですもう少しだけ日常編が続くと思われませんがそこはご勘弁をお願いします

それでは次回話もよろしくお願いします

第十三話 ある男は懇願する（前書き）

日常の話が続きます

話の途中で弥彦くんが思考に耽る個所がありますが、あまり深い意味はありませんので気分を害さないようにお願いします

第十三話 ある男は懇願する

時刻は早朝の4時50分。眠い目を擦りながら布団から起き上がる。いったん大きく背伸びをして、部屋の窓を開ける。そして、早朝の新鮮な空気を胸一杯に吸い込むと眠気が覚め、あたまが覚醒する。目が覚めたところでパジャマを脱ぎ胴着に着替え終えると自室を出て道場に向かう。その途中で屋敷の居間の前を通りかかると既に台所で母親の冥理が朝食の準備をしているのを確認することができた。いつもながら、毎朝当たり前のように早朝から朝食の準備に取り掛かる母親には感謝してもきれない。廊下から台所にいる冥理に弥彦は声を掛ける。

「おはよう、お母さん」

弥彦のあいさつに冥理は笑顔で応えてくれる。

「おはよう、弥彦。今朝も早いね。お父さんならいつもどおり道場に居るわよ」

「うん、わかっているよ。それじゃ、稽古に励んできます」

「頑張ってるっしょい。おいしい朝食を作って待ってるから」
「はい！」

弥彦は元気良く返事を返すと祖父の待つ道場へと廊下を歩く。

道場内ではいつもどおり祖父の法泉がひとりで待っていた。ここに来ると無意識のうちに気持ち切り替わる。長い間ここで稽古をしていたせいだろうか？自分にはなぜだかわからない。法泉は弥彦が来たことを確認すると弥彦に歩み寄る。

「おはよう、弥彦。さっそく稽古を始めるぞ」

いつもどおり稽古のはじめに言うこと口にしてから弥彦の正面に自然体で立ち、弥彦が掴みかかってくるのを待つ。しかし、弥彦はその場で留まり法泉の視線に合わせるように目を合わせてから話だす。今朝は重要な事を祖父に打ち明けるのだ。

「稽古の前に俺の話を読んでいただけませんか」

弥彦の言葉に法泉は目を細めると無言で一度頷く。法泉の許可を得た、一度弥彦は呼吸をして間を置く。

「ありがとうございます。話というのは、先月一度だけ体験入門を行った町道場の件です」

「……………」

法泉は無言、話を続けろという意思表示だと弥彦はうけとり話を続ける。

「今まで迷っていたのですが…、俺はその町道場に入門したいです」
「ならん」

法泉は弥彦の頼みを一言で一蹴した。そして雰囲気から怒っているのがわかる。こんな祖父の姿を見るのは久方ぶりだった。

「娘の頼みで一日だけならと許可を出したが、まさかその道場に入門したいと孫に言われるとは思わなかった。弥彦、お前は崩月の者、そして崩月流をお前に叩き込んだのはこの俺だ。それを理解しているのか？」

「はい」

「それなのに他の流派を学びたい？」

「はい」

「お前は何も理解などしていない。お前は崩月の直系、そして崩月流を継ぐ者。そんな男が何故他の流派の門を叩く？」

弥彦は法泉の言葉に黙り込む。確かに自分は崩月の者で崩月流を祖父である法泉に直々に叩き込んでもらっている身。他の流派の門を叩くなどお門違いも甚だしいこと。法泉が断るのも無理はない。しかし、弥彦にはどうしても入門したい理由がある。弥彦は俯いた顔をあげて法泉を正面から見る。

「気になるものが町道場に通っております。ですから……」

それを聞いた法泉はさらに表情を歪める。

「だから、なんだ。もし、友達が通っているから自分も通ってみたいなどと思っているなら、そのふざけた考えをもう二度と持たぬようにお前を叩き潰すぞ」

今まで感じたことのない殺気を含ませた法泉の言葉に弥彦は冷汗を流し、足が震える。怖い、でもここで法泉から目を離したらもう二度とこの話は無いことになるような気がして弥彦は法泉を睨みつける。

「ほう、そこで俺を睨むか。覚悟は出来ているようだな、弥彦。話してみる、お前の気になるものとやらを」

法泉の殺気が消えた、それでも現在の置かれた立場が良くなったわけではない。

弥彦は床にゆっくりと腰を降ろして正座をすると震える体を落ち着

かせ、自分のむねのうちを法泉に伝える。

「町道場には《円堂》《墮花》の名をもつ年の近い少女がふたりおりました。ただ、同名の可能性が捨てきれませんが俺は彼女たちは裏十三家の者だと思えます。まだ幼いのに卓越した武術と精神力、彼女たちには驚かされました。そして…俺を《崩月》としりながらも友達になってくれた。俺は嬉しかったんです、円堂の者を殺す一歩手前まで追い込んだというのにあちらから友達になってほしいと言われた。それと彼女たちには『貸』があります、それをまだ返すことが出来ていません。ですので、どうか町道場入門することに許可をこの俺に下さい！」

腰を折り頭を床に擦り付くように下げ土下座する。これで駄目なら、甘んじて法泉の裁きを受けよう。

「ただの友達の為だというなら今ここでお前を潰していたが、《円堂》と《墮花》の者と友となり、しかもその者たちに貸があるときたか……」

法泉はなにか深く考えているようだが、その表情は窺えない。弥彦は頭を下げたまま法泉の裁きがくだるのを待つ。

「…………く、く、くあ、はははは！随分とおもしれえことになってやがるじゃねえか、弥彦！なんでそれを俺にすぐに言わねえ！《円堂》と《墮花》の娘と友達になっただ！俺でも裏十三家の女にはまだ手を出してないぞ」

法泉の様子が一変して、日常のいつもの弥彦たちのお爺ちゃん的那样となる。

「面を上げる、弥彦」

弥彦は頭を上げると法泉と視線を合わせる。

「町道場の件は条件付きでなら許可してやる」

まさかの、入門許可に弥彦は気持ち上がり興奮気味に法泉に有無を訊く。

「ホントですか！それで、その条件とはなんですか」

「そう焦るんじゃないやねえ、条件は3つだ。ひとつ、道場に通うのは週一。ふたつ、大会に出ることを禁ずる。みつつ、町道場で揉め事は一切無用。以上の三個条だ、おめえにこれが守れるか？」

予想以上になんてことのない三個条。週一でも町道場に通えるのなら弥彦には喜ばしいこと、大会に出ることを禁じるのは表に名の知れる大会で《崩月》の名が出るのを避ける為だろうか？そして、町道場での揉め事は一切無用なのは当たり前だが、これが弥彦には一番守ることが厳しいことかもしれない。だが、ここで「守れません」とは言えない。俺はあそこに通ってみたいのだ、まだ『貸』を返してないからな。

「はい！守ります」

「なら許可してやる。せつかく他の業を学ぶんだ、他の流派の業を盗んで己のものにしてみせろ。だがな、崩月流を疎かにしていいとは言っているわけじゃないやねえ。今日の稽古から錬度を更に上げるから覚悟しとけ、弥彦」

「はい、わかっています」

「ならよし！おめえとの話に随分と時間を費やしたちったから、とつと朝稽古を始めるぞ」

「よろしくお願いします」

弥彦の稽古前のあいさつを合図として稽古が始まった。

町道場に通う許可を得た弥彦は心弾む気持ちで小学校に登校して教室に到着するやいなや奉莉にこのことを報告する。

「聞いてくれ、奉莉！町道場に通えることになったぞ、週一だけだな」

弥彦からの報告を聞いた奉莉の表情は同門の仲間が増えるのを喜んでいるように見える。

「わたしはいつかあんたが入門するんじゃないかと思ってたわよ。べ、別にあんたが同門になるからって嬉しくなんかないわよ」

なんだ嬉しくないのか、すこし落ち込む。

「まあ、そういうことだから来週ぐらいから入門する予定だ。円と光ちゃんとは先月以来会ってないから忘れられてないか少し心配だけどな」

「忘れているわけないじゃないの、あんたはわたしたちの友達よ。それに円と光はきつと喜ぶわ。おない年でわたしたちより強い男子がいないから、ちょうどいい組手の相手が欲しかったの」

相も変わらず彼女たちは御強いみたいだ。まさか円はともかくとして奉莉と光ちゃんもその域に達していたとは驚きだ。

「おまえら…：どんだけ強者に飢えているんだよ」

弥彦は正直な感想を言う。

「武人だからね、当然でしょ？」

どこか誇らしげに奉莉は自らを武人と称した。なるほどね、と弥彦は一度頷くと、率直に自分の思っていることを口にしてみた。

「三人とも俺からしたらどっちかという武人とみせかけて蓋を開けてみれば、ただのかわいい女の子たちなんだけどな」

「……………」

急に奉莉が黙り込む。心配になり弥彦は奉莉に尋ねる。

「どうかしたか？」

「なんでもないわよっ！」

そういうと奉莉は自分の席へと戻っていった。もしかして、かわいい女の子って言われて恥ずかしくなったのか？俺からしたらもう娘みたいなものだからな、正直な感想を言ったまでなんだが、今後は自重しよう。そう思っていると始業のチャイムが授業の始まりを告げる。弥彦は慌てて自分の席に着くと菅原教諭の話に耳を傾けた。

一日の授業が終わると帰りのSHRで菅原教諭が連絡事項について生徒たちに話していると話の内容が突然、学校の事柄から隣町で起こったある事件に触れた。

「これは昨夜起きた悲しい事件の話です。隣町にある小学校の生徒が屋上から飛び降り自殺しました。その生徒が飛び降り自殺に至っ

てしまった原因は現在、まだわかっておりません。しかし、先生はこう考えています。その子には何か辛いことがあったのかもしれない、まわりの人間に助けを求めずにその悩みを抱えたまま死んでしまったのかもしれない……。それで、先生がなにを言いたいかというのと、そんな状態に陥る前に他人を頼ってください。友達でもいい、みなさんのお父さんお母さんでもいい、先生だって構いません。自分の内側にある悩みをかかえて自滅してしまうよりまわりの人間を頼りにしてみてください。きつと、あなたたちの助けになります」

そして、話の最後に名の知らぬ生徒の為に黙祷を捧げた。

黙祷をしている間、弥彦は目蓋を閉じて思考に耽る。じさつ、自殺か：若いのに想い切った事をする。始まったばかりの生に見切りをつけて自ら命を絶つか、それとも……。いいや、止そう。死んだ者のことを考えるのはあまりいい気がしない。それが赤の他人であることも。

それと菅原教諭の考えは一般の教師らしいものだった。まるで教師のマニユアルがあるのなら自殺の項目にでも書いてあるかのような印象を受けた。その考え方がいけないことなのかと訊かれれば「いえ、間違っています」と一般大衆は答えるだろう。だが、俺はどうだろうか？ 答えは単純明快で簡単「どうだっていい」だ。自殺した子は可哀そうだと哀れもう、だがそれは建前であって本心ではない。そしてその本心が「どうだっていい」ということだ。

例えば、これを訊いた人権保護団体はお前は冷徹だと人間ではないと憤怒するものだろうか？ あいつらは人の不幸を餌にしないと活動できない偽善事業だからな、人の命など平等ではない。この国にいる一人の人間の命は重かるう、しかし紛争や飢餓で苦しむ国では命の価値など軽いものだ。思考が逸れた、この思考は気持ちが悪い、人の命の価値観など人間の造りし神達にでも任せておけばいいのだ。

思考を切り替えると既に黙禱が終わり、いつの間にかSHRもちょうど終わりを告げた。

その翌日、小学校は一学期最後の日を迎える終業式。つまり小学生の自分たちからすれば夏休みの前夜祭みたいなもの、はしゃぐクラスメイトたちを余所に弥彦の気持は冷めていた。なんてことのないこと、終業式などこれで何回目だっただろうか？クラスメイトたちは自分とは違い初めての終業式そして夏休み、それが相まっていつも以上に教室が騒がしかった。

終業式が終わると菅原教諭が夏休みの課題や心得などが書かれたプリントを生徒たちに配布して「また二学期に会いましょうね」という言葉で一学期最後のSHRをしめた。

今日は短縮授業、いつもより早く授業がおわり午前中には下校となった、のだが教室には多くの生徒たちが残っている。弥彦は耳を澄ましてクラスメイトたちの会話に耳を傾ける。

……どうやら夏休みの計画を友達同士で決めているようだ。そりゃそうか、夏休みなど遊びに費やすもの、特に子供は…と言いたいところだがそれが自分にも当てはまるのかはわからない。きつと、稽古だけの日々になるだろう。しかし、それでも構わないと思っっている。そうだ、法泉にお願いして稽古に休暇を求めるのもいいかもしれない。そして、姉と一緒に真九郎さんが住まう五月雨荘に訪れてみたいな、その他にも子供らしく遊んでみるのもいいかもしれない。円と光ちゃん、それに奉莉を誘ってGWに行った遊園地に行ってみるのもいいかもしれない。あ、駄目だ。男女比が1：3になってあまりにも不自然だ、彼女たちに申し訳がない、それなら……。

そう考えている内に意外にも「なんだ、あるじゃないか。俺にも夏

休みの予定が」と考えてしまう自分に苦笑した。

いつものように奉莉と杏のふたりと一緒に下校した。下校中に彼女たちから夏休みの予定を訊かれたが、そのことについては曖昧に答えた。夏休みはまだ始まってもない、彼女たちとはいつでも会える、それに遊びに誘ってもらえるのは嬉しいことだ、そう思うと弥彦は笑みをこぼした。

翌日、夏休み初日。驚いたことに朝から祖父の法泉は屋敷には居なかった。前日になにも知らされていなかった弥彦はいつものように朝稽古のために道場に向かうと待っているはずの法泉がいないことに気づき、そのことを冥理に尋ねると彼女はこう言った。

「お父さんなら居ないわよ。暮会所のお仲間と熱海へ温泉旅行ですって、いいわよねー」

弥彦は絶句した、そんなこと俺は訊いていない。

「今朝早くにね、電話があってその旅行のお誘いだって言って飛び出していったわ。お父さんには困ったものよ」

冥理は苦笑しながら相変わらずの自らの父親を愚痴る。あの人はいつたい俺の稽古をどうするつもりなのだろう。

「お、お母さん！お祖父ちゃんはいつ帰ってくるの？」

「そうねー、一週間くらいは帰ってこないかもね」

一週間、長いような短いような期間の間、俺の稽古は休暇か。しかし、姉か真九郎さんに稽古の相手を頼むのはどうだろう？

「夕乃お姉ちゃんは今日も学校なの？」
「そうね、あと一週間ほどはあるんじゃないかしら？ほら、夕乃は学校で引っ張りだこみたいだから終業式が終わっても忙しいんじゃないかしら」

稽古の相手を姉に頼むのは難しそうだ、あとで本人が起きてきたら一応訊いてみよう。

姉から訊いた結果をいうと、「稽古の相手ですか？わたしは構いませんけど、学校の方が当分は忙しいのでそちらの用が済んだら相手をしてあげますよ、弥彦」というもの。

真九郎さんについても訊くと、「真九郎さんですか？お仕事の方が忙しいみたいで稽古の相手は無理だと思いますよ。あっ、そうだ聞いて下さいよ、弥彦。真九郎さんったら最近わたしに対して冷たいんです。それに、羨ましいことに真九郎さんと同じクラスに村上さんという方がいるのですが……」その後真九郎さんについての姉の愚痴を聞かされるはめになり参ったものだ。

とりあえず、姉と真九郎さんは自分との稽古は当分は無理だということがわかった。

まさかの丸一日暇という状況に陥ってしまった弥彦は暇の事この上ないので弥彦と同じく絶賛夏休み中の妹の散鶴と一緒に遊んだり、アニメを鑑賞したりと久しぶりに兄らしく妹に接した。小学校に通うようになってから散鶴とはあまり遊んであげられなかったので散鶴は弥彦と遊んでもらえていつも以上に嬉しそうな表情で兄を慕ってくれた。そんな様子をみて弥彦は「俺は妹寄りのシスターコンプレックスなのかもしれない」と考えた。

第十三話 ある男は懇願する（後書き）

いかがでしたでしょうか？

相変わらずオチがひどいですよね、わかってます

自分に文章力がないのが悔しいです

前回の話は少し改行を意識してみたのですが、また元に戻しました
よろしければご感想をお待ちしています作者の励みになります

第十四話 ある男は怒る（前書き）

オリジナルの日常話ですが、遂に事件発生です

第十四話 ある男は怒る

夏休みに入り7月があつという間に過ぎゆき、気がつけば8月を迎えていた。その間に祖父の法泉は熱海旅行から帰宅、弥彦は環が師範を務める町道場に約一月ぶりに訪れ、週一ではあるが入門をしたいと懇願した。そのことに環は快く承諾すると弥彦の町道場の入門が決定した。

そして、今日は週に一度の町道場を訪れる日。夏休みに入ってから今日を含めて2回目の訪問だ。

弥彦は町道場の最寄の駅で奉莉と円、それに光と合流。そして、四人揃って道場に向かう道中で弥彦は三人娘からこんなことを聞かされた。

「八月に入ったし、いよいよ再来週には大会よね」

奉莉がふとそんなことを言う。

「なんだ、大会があるのか？」

弥彦は大会のことなど知らなかったので三人娘に疑問をなげかける。すると光が応えてくれた。

「八月の中旬に全日本空手道選手権大会があるんですよ。その大会には奉莉先輩と円先輩が出場するんです。もちろん、あたしも出場します！」

胸を張り、自慢げに話す光に弥彦はその姿がすこし可笑しくて微笑む。妹の散鶴と光の年が近いせいか、どうも二人を重ねて見てしま

「そりゃ、すごいな。改めて三人の凄さが分かった気がする」

素直に弥彦は驚いた。もしかしたらこの三人娘は全国で敵なしなのではないだろうか？

弥彦の反応が嬉しかったのか、嬉しそうに光は話を続ける。

「去年の大会では円先輩が優勝！奉莉先輩が準優勝したんです。あたしは入賞出来ませんでしたけど、今回は入賞してみせるんです！お姉ちゃんが応援に来てくれるから……だから、今日の稽古では弥彦先輩に組手の相手をお願いしたいです」

思ったとおり優勝に準優勝ときた。以外にも光が入賞していないことに驚いたが光ならきつと入賞できるだろう。彼女の助力になるなら組手の相手になる。姉妹がいる身としては大好きな姉の前で頑張る姿を見せたいという気持ちはわかるつもりだ。

「俺なんかでいいなら喜んで相手になるよ、環さんに頼んでみる」「本当ですか！ありがとうございます！弥彦先輩！」

よほど嬉しかったのか、ぴよんぴよんと喜びを表現するかのようになり飛び跳ねる光。ここまで喜ばれるとこちらも嬉しく思う。すると今まで黙っていた円が話に乗ってきた。

「わたしの相手もよろしく、弥彦。あなたはちょうどいい組手の相手なの」

「ああ、わかった。相手になるよ」

円にも組手の相手を頼まれた。円との相手は自分にとっても、いい経験になる。こちらもねがったりかなったりなので了承する。そこ

へ奉莉が弥彦に詰め寄る。

「ちよつと、弥彦！二人の相手をするならもちろん、わたしともするわよね？」

今度は奉莉から組手相手の誘いだ。それも拳で脅しながらのお誘いだ。こんなことをされたら断るといふ選択肢はない。

「もちろんだ！だからその振り上げた拳をおさめてくれないか？正直洒落にならん」

「ならいいのよ」

彼女は笑顔で拳をおさめると弥彦から離れる。弥彦はほっと一息つく隣を歩く円に話しかける。

「まったく、組手の相手をしてほしいと奉莉には素直に頼んでほしいのだが。そうは思わないか？」

「ふふ、あれは奉莉なりの照れ隠しよ。彼女は素直に表現することが苦手だからあややって辛くあたるの。あなたが彼女に気に入られている証拠よ」

「女の子というのは難儀だな……」

円の奉理に対するよくわからない女心を説かれた弥彦は視線を頭上にならずし快晴の青空を見つめた。

三人娘との約束どおり、環に懇願して弥彦は組手の相手を三人とさせてもらえることとなった。その時、環は弥彦ににやにやと笑みを浮かべながら話しかける。

「弥彦くんってばモテモテじゃない！奉莉ちゃん一本かと思つてたけど、円ちゃんとまさかの年下、光ちゃんがいるとは思わなかったよー。こりゃー道場始まつて以来の修羅場になる予感！私も交ざっちゃおうかなー、弥彦くんは年上のお姉さんなんてどうかな？好き？嫌い？」

この人はいったいなにを言っているんだ？冗談で言っているのか、それとも本気なのがまつたくわからない。そして弥彦は一応、当たり前障りなく返事を返す。

「環さんみたいな綺麗なお姉さんは好きですよ」

するとその言葉をどう受け取ったのかはわからないが環は「嬉しいこと言ってくれるね」と弥彦の頭を撫でると、この会話は終わった。その後、弥彦は奉莉、円、光の組手の相手を休憩を挟みながら行った。この三人を相手にすると気が抜けないが全力は出していない。

『心は熱く、頭は冷静に』を心掛け三人娘をあしらった。組手の結果は弥彦の3勝0敗、つまり三人全員に勝利した。いくら稽古といえど負けるのは男として悔しいので三人には悪いが勝ちを頂いた。三人娘は負けたことで悔しがる素振りを見せず、どこか満足そうな表情で弥彦に組手の相手になってくれたことに礼を言った。弥彦もその礼に応えて来週も組手の相手になることを約束した。

そして稽古が終わる頃には外は暗闇に包まれて満月が綺麗な夜となっていた。

道場から最寄駅までの帰り道の道中、弥彦はふと頭上を見上げる。そこには綺麗な月、満月には不思議な力があるとも、満月の夜には犯罪が増えるとも言われているが本当なのだろうか？月には見えざる力があつて人間の人体に影響を与え、それに興奮した人間が犯罪

を犯すなんてどうだろう、まるで童話に出てくる狼男のように。突拍子もない考えではあるが調べてみる価値はあるかもしれない。もちろん、そんなこと俺は調べない。俺は学者ではないし、ただの小学生。だが、自分が犯罪に巻き込まれるようなら全力で抵抗しよう、俺を巻き込んだことを犯人が後悔するぐらいに、きつと面し……

「ちょっと、弥彦！聞いているの！？」

突然、弥彦の思考を遮るように奉莉が声をかけた。

「な、なんだ。俺がどうかしたのか？」

弥彦は奉莉の話など聞いてはいなかったので慌てて聞き返す。

「まったく、もう。ちゃんとわたしたちの話聞きなさいよね！」

「ああ、悪かった。で、話っているのは？」

「わたしたちが出場する試合にあんたが応援に来るのか、来ないのかっていう話よ」

なんだ、試合の応援の話か……。試合に自分は出場することは許されていないが、試合の応援・観戦ぐらいはきつと法泉は許してくれるだろう。

「応援には行かせてもらうよ、三人の活躍を観てみたいしな」

「絶対応援に来るの！約束よ！破ったらただじゃおかないからね！」

「絶対応援に行くさ、約束する」

妙に弥彦が応援に来るように念をおす奉莉に疑問を持ったが、そもそも全日本のそれも友達が出場する試合を観戦しないという選択肢はもとから弥彦にはなかったので彼女に言われなくても試合を観戦

するつもりだった。

駅舎に到着すると円と光は上り方面の電車に乗車するので下り方面の電車に乗車する弥彦と奉莉とはこの駅でお別れだ。

「さよなら、奉莉。あまり弥彦を困らせてはダメよ。それから弥彦、あなたとの組手は楽しかったわ。またお願いね」

「円、それどういう意味よ！」

「さよなら！奉莉先輩に弥彦先輩！」

「二人とも気を付けて帰れよ」

別れのあいさつを済ませ、電車に乗車する円と光を見送る。二人の乗った電車が駅のホームから動き出し最後尾の車両が見えなくなるまで弥彦と奉莉は見送った。そして二人が乗車する電車が到着するとそれに乗り込み帰路につく。そして先に奉莉が下校の時と同じように弥彦の目的駅のひと駅前で下車する。

「弥彦！約束、覚えているでしょうね？」

「覚えてるよ、応援だろ？まかせとけ」

「よかった、絶対よ。…それじゃあね、弥彦」

「気を付けて帰れよ」

別れのあいさつを済ますと発車合図のBGMが駅ホームに鳴り響く。弥彦の目の前をゆつくりと音を鳴らしながらドアが閉まる。一枚のドアという壁を挟んで奉莉と対峙し電車が発車する。その瞬間、弥彦にむかって奉莉が口を動かしながら喋っているように見えたがドア越しの状態ではなにを言っているのかは確かめようがなかった。

その後、3分もせずに目的駅に到着、数名の乗車客が下車するなか弥彦も電車を降りる。駅舎に設置された時計に目をやると時計の針

は午後7時46分を示していた。思ったより遅くなった、早く帰ろう。駅舎から出ていく人ごみに紛れるように弥彦は屋敷を目指す。真夏の夜には相応しい熱帯夜で生温い風が肌にまとわりつくように帰りの道中の歩く弥彦の頬を掠る。気分が滅入る、後ろを振り返れば誰もいない。周りに耳を澄ませば何も聴こえない。頭上を見上げれば満月を隠すように雲が邪魔をする。なにかがおかしい、まるでこの住宅地一帯が無人のような、突然別の世界に迷い込んでしまったような感覚がする。すると、数十メートル先にあるT字路に一台の車が止まるのが視えた。その車両からは誰一人として降りてくる様子はない。ただ、静止している。なんだあの車は？弥彦は不審に思いその場で立ち止まる。どうする？そのまま直進して帰るか、周りを道をして時間を潰してから帰るか。また誘拐されたときのようになり車から複数の人間を降りてきて連れ去られるんじゃないだろうか？弥彦は結論を出す。どのみち車が止まっているT字路を通らないと屋敷には帰れない。「決めた、このまま直進する」と弥彦が決心して歩み始めた瞬間、車は急発進。視界から消えた。すると世界がまるで時間を取り戻したかのようにどこからか犬が吠える鳴き声が聞こえ、満月を邪魔していた雲が流れ、月光が住宅地を照らす。弥彦はやれやれと張り巡らせた緊張感を解き溜息を吐く。

「なんだ、あれは……」

弥彦の視線の先にあるT字路になにかがあつた。いや、あれは人か？住宅の壁を背中にして道路に座りこんでいる少女がひとり、だが様子がおかしい。

弥彦は気になり駆け足で少女の元へ駆け寄るとその異常に気がついた、気付かされた。

その少女にはあるべきものが無かつた。体の一部のあるべきものが無かつた。それは『耳』だ。少女には両耳がなかつた。少女の長い黒髪が彼女の耳部を隠しているが少女の頬を伝うように血が流れる。

「血が…おい！生きているか!？」

弥彦は俯く少女の肩を揺らし、すぐさまスポーツバッグからタオルを取り出すと少女の片耳にあてようとした時、少女の顔を見てしまった。

見覚えのある少女の顔に弥彦は頭を振るう。ありえない、なぜこの子がこんなことに…。

早く救急車を…、ちくしょう携帯を持たされてない！

「ちくしょう！おい、死ぬんじゃねえぞ！」

意識のない少女を背負うと弥彦は咄嗟の機転で近くある一軒の住宅のベルを鳴らす。

頼む、早く出てくれ、早く出てくれ！早く出てくれ！！早く出てくれ！！！！

弥彦の願いが通じたのか壮年の優しそうな男性が家の扉から出てきた。すぐに弥彦は男性に駆け寄ると喉が枯れるほど同じ言葉を繰り返す。

「お願いします！救急車を呼んでください！今すぐに、どうかお願いします！」

男性は弥彦たちの様子がただ事ではないことを理解するとすぐに連絡をとりつくろってくれた。弥彦は背負った少女と共に男性宅に救急車が来る間あがらせてもらい男性の妻らしき女性からタオルを貸してもらい少女の両耳部分から流れる血が止まるようにタオルを耳に当て続けることしかできなく、その間少女が意識を取り戻すことはなかった。

しばらくすると救急車が到着。手早い動きで少女を救急隊員が救急車に搬送すると弥彦は連絡に協力してくれた壮年の夫婦にお礼を述べると少女のことが心配なので一緒に救急車に乗せてもらい急いで病院へと向かった。

向かった病院先で少女はすぐに救急治療室に運ばれ弥彦は治療室前で待たされることとなった。弥彦は待っている間に病院に設置された公衆電話から家に連絡をした。病院からの連絡を受けたのか少女の両親が顔を真っ青にしながら慌てて治療室前までやってきた。医師の話では少女の命には別状はないが彼女の聴覚は二度と戻らないとのこと。少女の両親は医師からの詳しい説明を受けると父親は呆然と立ち尽くし、母親は床に泣き崩れた。弥彦はそんな少女の両親姿にいたたまれずにいられず、自分の不甲斐無さに病院の壁を拳で叩いた。

しばらくしてから母親の冥理がやってきて弥彦に何があったのか詳しく問い詰めた。

弥彦からの説明を一通り訊き終えた冥理はこう言った。

「あなたの話を訊くと女の子の耳を削ぎ落とした犯人は十中八九その怪しい車両に乗っていた者でしょうね。でも、なぜ女の子をあなたの前で降ろしたのか疑問が残るわね。《崩月》に恨みのある者の仕業なら真っ先に弥彦を含むわたしたちを狙う筈なのだけどわたしたちには傷一つない。その代わりに関係のない女の子が傷ついた……」

「関係なくはないよ、お母さん」

弥彦の言葉に反応した冥理は疑問で返す。

「どうということなの？弥彦」

「襲われた女の子は俺のクラスメイト、俺の隣の席に座っていた日

高 梓。大切な友達だよ」

「……………」

黙り込む冥理。すると弥彦は己の中にあるありとあらえる負の感情を表に出すかのような表情で口を開く。

「…………許さない。俺は彼女をあんなめにあわせた犯人が許せない。犯人を捕まえて彼女の前で同じ目に遭わせた後で殺す」

「落ち付きなさい弥彦！あなたの怒る気持ちもわかる。でも、殺しはいけない。家の稼業はお父さんの代で終わったこと、あなたの手を血で染めることは許さないわよ」

冥理は自分の息子が道を踏み外そうとしないように彼の考えを否定する。

「それじゃあ！どうしろって言うんだよ！」

弥彦の叫びが病院内に木霊した。

「だから落ち着きなさいと言っているでしょ！頭を冷やしなさい弥彦。確かにあなたには犯人を殺すことはできるでしょう。でも、そんなことをして梓ちゃんが好きと思っっているなら大間違いよ」

「お母さんは簡単に言うけどね、俺の怒りは……………」

弥彦の抑えきれない怒りがスイッチとなり右腕の肘から鋭利な角が具現しようとする。

「そこまでだ、弥彦。冥理に怒りをぶつけても意味がないことは賢いおめえなら理解できるだろ？」

そこへ突然、祖父の法泉が登場。

「お父さん……」

「お祖父ちゃん……」

法泉の突然の登場に冥理と弥彦は驚く。法泉はゆつくりと二人に歩み寄る。

「まったく、ここは病院だというのに騒がしくするなというのがわからないのか？冥理、おめえは下がれ。弥彦とは俺が話す」

「……わかりました。弥彦のことはお父さんに任せます」

そついうと冥理は離れると横長のイスに腰掛ける。

「話は訊かせてもらった。弥彦、おめえはどうしてえんだ？」

「犯人を梓の前に引きずってでも連れてきて、耳を削ぎ落とし、殺す」

梓がどんな思いで耳を削ぎ落とされたかと思うと自分に抑えきれない殺意が湧いてくる。

「なんとも穏やかじゃねえな、それでおめえの気は晴れるのか？」

「はい」

自分の気を晴らす為に犯人を殺すわけじゃない。日高 梓、彼女の為なんだ……。

「そうか……なら、おめえは犯人が誰か判っているってのか？」

「それは……、わかりません」

痛いところを指摘された……そのことに今頃気づかされた自分に嫌気

がさす。

「それじゃあ、どうするってんだ。犯人を当てもなく探すってのか？」

「……………」

「頭を冷やせ弥彦。そんなこといつものおめえならすぐに考え付くことだろうが」

「……………」

「それにおめえは《崩月》の戦鬼と俺が認めはしたがまだ子供だ。子供に事件の犯人を探させようなんて思う親はいねえよ。わかるだろ？」

「……………」

法泉に言い返せない、子を思う親の気持ちは思っているだけでは伝わらない。だが、ここまで言われてしまえば親の気持ちを蔑にはできない。

「今日の出直すぞ。おめえも一度頭を冷やして寝れば自分が如何に愚かなことをしようとしているのか理解できるはずだ。それでも無理ってんなら俺のところに来な」

そついうと法泉は踵を返し冥理に車を出すように指示をする。弥彦は先導する二人の後を黙って歩くことしかできなかつた。

翌日の早朝、弥彦は朝稽古があるので重い足取りで道場に向かう。道場には法泉が待っていた。

「おはよう、弥彦。今朝は来ないかと思っていたが来たようだな」

「おはようございます、昨日はみっともないところをおみせしまし

た…」

弥彦は謝罪の意味を込めて頭を下げる。

「別に気にしちやいなえよ。とりあえず、おめえの考えを訊かせてもらってから稽古を始める」

自分の考え…その答えは昨日の夜から変わらない。

「俺は犯人を捕まえたいです」

はつきりと法泉に聞こえる声で弥彦は自分の考えを伝えた。

「そうか…なら、朝飯を食い終えたら俺の部屋に來い。これで話は終わりだ、稽古を始めるぞ」

法泉は話を切り上げるといつものように二人で稽古始めた。

稽古を終えると居間で家族揃って冥理が作った朝食を食べる。いつもは会話を交えて家族円満で朝食を囲むのだが、今朝は空気が違った。誰一人として会話をするものはいなく黙々と朝食に箸をのばす。すると、テレビ画面に見覚えのある風景が映りだした。昨日の夜、弥彦が日高 梓を発見した丁字路だ。次に映像はあの夜、救急車に連絡をとってくれた壮年の夫婦のインタビューに切り替わる。それが終わると今度は梓が運ばれた病院前での実況中継、アナウンサーが梓の現状を淡々と説明している。まるで昨日の夜あった出来事の紙芝居でも見させられているような気分になった。今度は中継が終わると映像はニュースのスタジオに戻り、この事件について再度説明をしている。なぜここまで大々的にマスコミがこの事件を取り上

げているのか弥彦には分からなかった。だが、ニュースキャスターの一言に弥彦の疑問はすぐに取り払われた。

『無差別耳削ぎ事件』この事件の被害者は老若男女問わず、その犠牲者数は30人近いものとなっている。被害者は薬物で殺された後に『両耳』を削ぎ落とされ、その死体は突然街中で発見されるという。しかし考えてほしい、日高 梓は両耳を確かに削ぎ落されているが彼女は生きている。一連の場合だと彼女が殺されていないければおかしいはず、なぜ犯人は彼女を生かしたのか？彼女の耳を奪ったのにどうして？そしてどうして俺の前で彼女を発見させた？模倣犯という可能性は？犯人の意図がまったく読めない…。

「やひこお兄ちゃん！」

「うっ！？」

突然自分のことを呼ばれたので驚いて食べていたものが喉に詰まった。

「げほっ、げほっ、なんだ突然に」

「きょうはちづるとあそぶ約束してるよね？」

「約束？そんなのしてたかな…、そんなことより今日はお祖父ちゃんとの話に一段落ついたら梓の様子を見に病院に行きたいんだが」

「だめー！ちづるとあそぶの！」

遊ぶことを絶対に譲らない散鶴。弥彦は妹の相手の代わりに家族にお願いする。

「参ったな…お母さん、散鶴のことお願いできない？」

「残念だけど今日は出掛ける予定があるから無理よ」

冥理は駄目か…、なら夕乃はどうだろうか。

「夕乃お姉ちゃんは？」

「わたしはお祖父ちゃんの代わりに会合に出席しなければならぬので今日一日は居ませんよ。それに、梓ちゃんのお見舞いなら今日はやめて明日にしなさい。マスコミの皆様は弥彦が質問攻めで、もみくちゃにされますよ」

笑顔でさらっとひどいことを言う。すると法泉が弥彦に訊く。

「弥彦、俺には訊かないのか？」

「お祖父ちゃんは俺との話が終わったら、どうせ暮会所に行くですよ。しょうがない今日は屋敷で大人しく散鶴の相手をしよう」

やったー！と散鶴が喜ぶと弥彦はやれやれと溜息を吐き、まだ途中だった食事に戻った。

朝食後、弥彦は法泉の部屋を訪れると法泉から一枚のメモを受け取った。弥彦はメモの内容に目を通すと法泉に訊いた。

「これは？」

「信頼のおける情報屋の居所と名前だ」

「情報屋ですか？」

法泉は一度頷く。

「そうだ、そいつに訊けば大抵のことはわかる。おめえの知りてえ犯人の情報から裏世界の情報までな…。さて、俺がおめえにしてやるのはここまでだ。後は自分の身ひとつでやってみな。おめえはこ

れで裏世界のほんの一部を垣間見ることなる。それでも身を退かねえんだろ？」

「もちろんです」

弥彦の一切の迷いのない返事に法泉は苦笑する。

「おめえのまわりの女は苦労するな、まあこれも女の為だ。事件を解決できなくても悔やむ必要はない、誰もおめえを責めることはない。あと、これが一番大事なことだ…」

法泉は弥彦を見据える。

「死ぬことは許さねえぞ、弥彦。それを頭に入れとけ、わかったな」

「はい！死ぬつもりなどもとから俺にはありません」

弥彦は法泉から貰った大事なメモをポケットに入れると部屋をあとにする。

法泉の部屋を弥彦が退出した後、しばらくしてから夕乃が部屋を訪れる。

「お祖父ちゃん、どういいうつもりですか」

「なんだ、聞いていたのか。盗み聞きは感心しないぞ、夕乃」

夕乃はその表情こそは普通ではあるが、弟の為に怒っていることは法泉には理解できる。

「話をはぐらかさないで下さい。例の事件に弥彦を巻き込ませてどうしようっていうんですか。あの事件には『悪宇商会』が絡んでいるのはご存じでしょう。弥彦を亡きものにするつもりですか」

「大丈夫だ。仮に弥彦が犯人に辿り着いてもあいつの身に危険はな

い。保険を掛けておいている」
「保険ですか……」

そくだ、と法泉は頷く。その頃、弥彦は散鶴と約束どおり一緒に遊んでいた。自分に保険が掛けられていることを知らずに、弥彦は散鶴と遊んでいる最中も頭のなかでは事件のこと梓のこと情報屋のことを考えていて散鶴と楽しんで遊ぶような余裕はなかった。

第十四話 ある男は怒る（後書き）

いかがでしたでしょうか？

会話の多い話で人物の描写が細かく表現できなくて悔しいです

この回で出てきた『無差別耳削ぎ事件』は電波的な彼女のDVDを鑑賞してて、そこから戴きました。

日高 梓というキャラクターについては、ほんのちょっとしか触れていませんでしたが今回事件の被害者という形で再登場させてもらいました。

普通に彼女を登場させてあげたかったです、そこはご勘弁を。

相変わらず読みづらい文章と文法だと思えますが、読んでいただいている方の暇つぶしになればいいなと思います。

ご感想やダメ出しなどお待ちしています

第十五話 ある男は悪魔の誘いによる（前書き）

短いですけど読んでくださる方の暇つぶしになればいいなと思います
感想お待ちしてます

第十五話 ある男は悪魔の誘いにのる

『無差別耳削ぎ事件』の被害者に日高 梓が新たに加わった日から二日が経った。

マスコミの報道で犯人は捕まったという吉報があるはずもなく、弥彦は未だに捕まらない犯人にふつつつと冷め切らない殺意を抱く。今日は昨日、祖父から預かった情報屋のメモを頼りに情報屋を訪ねた後、日高 梓が入院する病院へと見舞いにいく予定だ。

電車から下車し、初めて訪れる駅舎を抜けると大きな繁華街へと出た。

視界に写るのは活気の溢れる街並み、聴覚に訴えかけるのは騒がしい店頭からのBGMと人々の騒がしい声、嗅覚を刺激するのは薄汚れた空気、ざわつくビル風を肌にかけて不快感、弥彦は片手にメモを携えて目的地へと歩みを進める。

繁華街を抜けるとそこには一軒のラーメン屋、名前は『風味亭』その概観から老舗だということが窺える。弥彦は店の前で歩みを止めるとメモに書かれた住所がここであるか確認する。メモにも『風味亭』と書かれている、ここで間違いないようだ。

「へい、らっしやい！」

弥彦はおもむろに店の暖簾を潜ると威勢のいい店員のあいさつとラーメンの食欲をそそるいい匂いが弥彦を出迎えてくれた。

店内を見渡すと満員御礼で弥彦が座れるような空席はなかった。店の入り口で立ち尽くす弥彦に歳若い店の従業員が声を掛ける。

「いらっしやい、今日はきみひとりなのかな？」

「そうです、祖父の紹介でこの店を訪れました。このお店に『村上銀子』さんという方がいらつしやると御聞きしたのですが、ご存知ありませんか」

弥彦の子供らしからぬ丁寧な対応に従業員は一瞬驚く、そして彼女は眼鏡越しに眼を細めて弥彦を観る。

「きみの探している『村上 銀子』はあたしよ」

突然の事実には弥彦は面食らう。

祖父が紹介した情報屋がまさかこんなに若い女性だったとは思ってもしなかつた。

どうみても姉と真九郎さんぐらいの高校生ぐらいの歳の方だろうか。

「単刀直入に言います。あなたに依ら…」

「ちよつと待ちなさい」

彼女に依頼を頼もうと話をもち掛けたら話を中断された。

「その話は後にしてちょうだい、きみにはこちらから色々と言きたいことがあるけど今はお店の営業中なの。とりあえず、ラーメンでも食べていったら？」

「わかりました、それじゃあ味噌ラーメンをひとつ下さい」

「注文を承りました。そちらのカウンター席でお待ち下さい」

彼女は注文を承ると店の奥へと消えていった。

弥彦は空席となったひとり用のカウンター席に着席すると一息つく。弥彦の視線の席はカウンター席向かいの厨房、厨房内では頭にタオルを巻いた店長らしき人物が従業員に大きな声で指示をだしている。忙しそうだな、と思いながら冷水の入ったコップに口をつけ渴いた

喉を潤した。

数分後、村上銀子がお盆の上にラーメンを載せて厨房からやってきた。

「お待ちどうさま、味噌ラーメンです」

彼女は弥彦のテーブルに味噌ラーメンを置くと、忙しそうに他のテーブルへと注文を取りにまわる。

弥彦の目の前には湯気を立ち昇らせ、おいしそうな味噌ラーメンがある。

情報屋に依頼にきたのになぜラーメンを食べることになったのか疑問に思うところではあるが目の前にあるラーメンを見ていたらそんなことはどうでもよくなった。

味噌ラーメンを食べ終え、席を立つ。

お勘定を机のうえに置き、店内を忙しく往復する村上銀子の様子を眺める。どうやら彼女に依頼を頼むのは無理そうだと諦めて店をあとにしようとしたとき銀子が弥彦に駆け寄る。

「ごめんね、今は忙しくてきみの話を聞けそうにないの。うちの店が閉店してからなら話を聞けるんだけど、どうする？」

「いいですよ、また出直します。今日は他に拠る所があるんで」

「そう、それならきみの名前だけでも教えてもらえないかしら」

「いいですよ、俺の名前は崩月弥彦です。今日はご馳走様でした、また来ます」

弥彦の名前を聞いたとたん村上銀子のクールな表情が崩れ、一瞬の間、少し敵意のある表情に変わったのを弥彦は見逃さなかった。情報屋ともなれば裏十三家のことなど知っていることだろう。《崩月》の名を聞いて彼女の警戒心に触れたのだろうか。そして弥彦は

村上銀子の返事も聞かずに店の暖簾を潜り外へと出た。

犯人への情報は一旦保留として、とりあえず日高梓の見舞いに行こうと弥彦は目的地のある病院へと歩み始めた。病院に向かう途中にあった花屋で見舞いのために色鮮やかな花を購入する。

病院前に到着すると案の定、複数のマスコミが居た。事件の被害者である日高梓のことをネタにするためにここで待機しているのだろう。彼らを横目に病院の入り口の自動ドアを抜ける。

診察の受付場にいる看護婦に日高梓が居る病室を訊く。看護婦は怪訝そうな顔をしたが彼女のクラスメイトだと弥彦が言っていると快く彼女の病室を教えてくれた。

病院の階段を上り日高梓が入院する病室前へと到着した。病室前に掛けられたネームプレートには彼女の名前ひとつだけ、どうやら個室らしい。病室の扉を軽くノックする。

「どうぞ、入ってください」

と病室内から返事が返ってきたので弥彦は「失礼します」と一言申してから病室の扉をゆっくりとスライドした。

病室内に入ると病室内には日高梓の母親、ベッドの上には日高梓、そして天王寺奉莉と林原杏が居た。

病室の窓は開けられ心地のよい風が弥彦の髪を揺らす。見舞いの花を梓の母親に手渡すと「ありがとね」とお礼を述べられた後に梓の母親は花瓶と弥彦から貰った花を持って病室から出て行った。弥彦はそれを見送ると視線をベッドの上で腰掛ける梓にむけた。

彼女の両耳が無くなったというのに無邪気に見舞いに来た弥彦に笑顔を見せると

「き、て、く、れ、て、あ、り、が、と、う」

とゆつくりと弥彦にはつきりと伝わるように礼を言った。

聴覚を失った彼女はしゃべることが壊滅的に難しい。それでも弥彦には彼女が礼を言っていることはちゃんと伝わった。その後、筆談を交えて梓との会話をしてから弥彦は病室から出るとそれに続いて奉莉と杏も付いてきた。病院の廊下に設置されたベンチに腰掛ける
と弥彦は彼女たちに話しかける。

「お前達も来ていたんだな」

「当たり前じゃない、梓とは友達よ。見舞いに来ないほうがおかしいわ」

奉莉の発言に杏が頷くと

「弥彦くんもきつと来てくれると思ってたんだ。まさか、梓の見舞い中に来ると思っただけだね」
「偶然ってやつだよ」

弥彦は即答するとベンチから立ちあがる。

「それじゃあ、俺は帰るわ。お前らも暗くなる前に家に帰れよ、危険だからな」

「もう帰っちゃうの?」

杏が弥彦を引き止める。

「ああ、この後、人と会う約束をしているからな。またな」

弥彦は二人に背を向けて手を振ると廊下を歩き出す。

「ちょっと待ちなさい!あんだ、なにか隠し事してない?」

今度は奉莉が弥彦を引き止めた。

「隠し事？そんなものないよ。急にどうしたんだ？奉莉らしくもない」

「あんたの様子が少し変だったから言ってみただけよ。あんたのこ
とだから梓をあんな目にあわせた犯人を捕まえる気なんじゃないか
と思ったのだけど気のせいみたいね……」

「……ああ、犯人探しは警察に任せるさ。今度こそ、さよならだ。
気をつけて帰れよ」

そういうと弥彦は踵をかえし病院をあとにする。

病院をあとにしてから弥彦は再び村上銀子のもとへと向かう。

時刻はまだ15時、『楓味亭』が閉店となるにはまだ早すぎる。

再び繁華街に戻ってきた弥彦は人ごみから逃れるように繁華街をあ
とにすると団地が広がる区画まで来てしまった。そして団地の間に
ある小さな公園を見つけると公園のベンチに腰掛けた。

公園内は団地民の子供と思われる小さな少年と少女が滑り台を滑つ
たり、ブランコを漕いだりと公園内で遊んでいる。見慣れない子供
である弥彦がいることに少年たちは気になってちらちらとこちらの
様子を窺っているように見えてくるが弥彦は気にせず、団地の狭い隙
間から見える空を仰いだ。

辺りはすっかりと暗くなり公園内には弥彦ひとり、腕時計で時間を
確認すればいい頃合だったのでベンチから立ち上がる。ふと人の視
線を感じた弥彦は周囲を見渡す。

「気のせいか？誰かに見られている気がするんだが……」

団地は静まり返り、公園内には弥彦ひとり。その後しばらく様子を
観ていたがなんにも起こらなかった。

再び『風味亭』を訪れると店の前で村上銀子が待っていた。

彼女は弥彦が来たことを確認すると、「ついてきて」と一言いうと店の裏口にある玄関を通り、店の二階へと上り、とある一室に案内された。

部屋内はごく一般的な様子で特に目立つようなものはなく、しいていえば壁一面を占める大きな本棚に著作名が五十音順に並べられた本。隣のラックには、本棚と同じくアーティスト名のアルファベット順に並んだCD。この部屋の主が几帳面であることが窺える。そして勉強机の上に一台のノートパソコンがありスクリーンセーバーが作動した液晶画面には熱帯魚がゆらゆらと泳いでいた。

「ここはあたしの部屋よ。とりあえず、そこにあるベットの上面でも腰掛けて」

村上銀子の指示どおりに弥彦はベットの端に腰掛けた。彼女は勉強机の前にある椅子に着席するとノートパソコンを操作する。

「さて、崩月弥彦くんだったかしら。裏十三家である《崩月》があなたになんの用かしら？」

「情報屋であるあなたに依頼をお願いしたい」

「依頼ね…、どんな依頼かしら？」

「『無差別耳削ぎ事件』についての情報、極端に言えばその犯人の情報が欲しい」

「……その依頼を頼む理由を訊いてもいいかしら」

「クラスメイトが事件の犠牲になった。事件の犯人をこの手で捕まえない」

「そう、最近ニュースで騒がれている女の子が犠牲者ね。少し待ちなさい」

そうとうと彼女はノートパソコンを操作する。
しばらくするとパソコンを操作する彼女の手が止まる。作業が終わったようだ。

「あなた、この事件に関わるのはやめなさい」

「は？いったいどういうことですか」

突然の提示に弥彦は戸惑う。

「詳しくは言えないわ。言い忘れていたけど、あなた情報の依頼料金を払えるのかしら？」

「依頼料金？」

「そうよ、あたしは情報屋。無料で情報を提供することはできないわ。そうね…この情報はこのくらいの料金かしら」

そうとうと彼女は電卓を指先で叩き、弥彦に見せた。その額の大きさに弥彦は驚く。

「こんなに払えません！なんですか、この額は！？」

「あら？そんなに驚くことかしら。《崩月》ともなればはした金でしよ。違うかしら？」

「くっ…」

確かに《崩月》なら払えるだろう。だが、法泉は情報屋の場所を提示はしてくれたがその情報料金までは提供していない。法泉は言った「この先はおめえの身ひとつでなんとかしてみせろ」と。だから崩月弥彦にはこの情報料金は払うことはできない。

「情報料金が払えないならこの情報は教えることができないわ。依頼の話は以上かしら」

「待つて下さい！せめてさっきの忠告の意味を教えてください！」

弥彦の必死さに同情したのか村上銀子はしぶしぶと口を開いた。

「はあ、仕方ないわね。あなたはこの事件に深く関与している、だからこの事件からは手を引きなさい。子供であるあなたが何とかできる問題じゃない。関わればあなたの身の安全は保障できない、良くて大怪我、悪ければ死よ」

「なんだよ…それ。俺が事件に深く関わっている？なら、なおさら犯人を捕まえなくちゃならないじゃないか！犯人の情報を教えて下さいよ！」

「もう晚いわ、帰りなさい。これ以上なにを言われても教えることはできない」

「俺のせいで梓が犠牲になったかもしれないのに…なんでだよ…あと一歩なのに…」

弥彦の願いは無常にも受け流され、これ以上彼女に頼んでも相手にしてもらえなかった。弥彦は悔しさで唇をかみ締めるとこれまでにならないほどの自分の力不足を痛感した。

なんてことだ、結局自分にはなにもできないじゃないか、絶対に犯人を捕まえてやる、だと。笑わせる、自分はただの無力な子供なのだ、生まれ変わったとしても友達の敵も討てずただ嘆くことしかできない。

なんて、無様。

楓味亭からの帰り道、弥彦は己に絶望した。

元から自分には無理なこと、いくら身体と業を鍛えたところで肝心の心と頭が役不足なのだ。

生まれ変わってから出来た初めての大切な友達が犠牲となっているのに自分にはいったいなにができたのだろうか…。

「そこで暗い顔をしている崩月弥彦くん。すこしわたしとお話しませんか？」

自分の名前を呼ばれてふと後ろを振り返るとそこには見知らぬ女性
がいた。その風貌は真夏だというのにサイズの大きい厚手のコート
と頭にはニット帽。そしてサイズの大きい眼鏡をしたどことなくや
ぼったい感じの女性だ。歳は二十代前半くらいだろうか。

「どちらさまですか？あなたとは初対面のはずなんですけど…どうし
て俺の名前を知っているんですか？」

さっきまで落ち込んでいた弥彦は気持ちを切り替え目の前の女性を
警戒する。

「どうも初めまして。悪宇商会から参りました、ルーシー・メイと
申します」

そういうと彼女は弥彦に一枚の名刺を差し出す。

簡素な名刺だ。電話番号と『悪宇商会 人事部副部長 ルーシー・
メイ』という表記のみのものだ。

弥彦は受け取った名刺と彼女を見比べると

「悪宇商会…聞いたことないな。それで、その悪宇商会の人事部副
部長さんが俺になんの御用ですか」

「お話の前に移動しましょうか、ここでは少々こころもたない。車
をあちらで待たせていますからお乗りになつてください」

「なにいつてんですか、あなたは。知らない人に付いていつてはい
けないと先生にいわれているので俺はこれで失礼します」

ルーシーの提案を拒否して弥彦が踵を返し帰ろうとすると

「『無差別耳削ぎ事件』の犯人を知りたくないですか？」

まるで悪魔のささやきのような今の弥彦にとっては魔法の一言を彼女は言った。

「あなたは犯人を知っている、と言いたいんですか」

「そうです、わたしたちと一緒にご同行願えれば犯人の情報を御教えします。大丈夫ですよ、なにも、あなたに危害は加えません。少々、あなたとお話をしたいただけですから」

彼女は営業スマイルで弥彦に微笑みかける。

ルーシーの魅力的な提案に弥彦の心が揺れる。今はどうしても犯人へと繋がる情報が欲しい。そう思うと

「わかりました、あなたの言葉を信じましょう。もし、俺に危害を加えるような真似をするようなら全力で抵抗したのちに帰らせてもらいます」

「疑い深いのはいいことです。けれども決して我が社はあなたには危害は加えませんよ、安心して下さい。それでは参りましょうか」

彼女に案内されるがままに弥彦は黒塗りの高級車に乗車するのだった。

第十五話 ある男は悪魔の誘いによる（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なんというか原作キャラクターが二人も出てくると「ああ、紅だな」と思って落ちて着く私がいます。

話の展開から事件の予測がつきそうですがそこは私の文章力の無さを呪います

この時期は新生活の準備と不安などでお忙しくなるとは思いますが、その忙しいなかで私の駄文が一息つくときにお役に立てればな、と思います

悪宇商会についての説明は次回の話でしますので原作未読の方はそこで補完してください。

ご感想お待ちしております

第十六話 ある男と悪宇商会（前書き）

おまたせしました

相変わらずの駄文ですが読んでいただける方の暇つぶしになればと思います

第十六話 ある男と悪宇商会

車窓から眺める景色が左から右へと通り過ぎていく。

悪宇商会所属人事部副部長ルーシー・メイの言葉に誘われて車に乗ったのはいいものの、弥彦を載せた車は繁華街を離れて住宅地をひた走る。

そして移動中の車内の無言を打ち破るようにルーシーが弥彦に話かける。

「弥彦くんは我が社のことをご存知ないとおっしゃっていましたが、この機会に我が社の説明をしましょうか。車内ではどうせ暇でしょう?」

いつのまにか自分のことを名前で呼ぶルーシーに弥彦は怪訝そうな表情をする。

「『悪宇商会』でしたっけ?名前からしていい組織とは思えません
が、ぜひ説明お願いします」

一時の付き合いだ、相手の情報は少しでも欲しい。

「それ、よく言われるんですよ。『悪宇商会』という名前が宜しくないのはわたしも常々思います。お客様にはまず、第一印象が大事なのでこの名前ではそこで躓いてしまう。もっと別の名前の横文字でカッコいい名前だと印象がだいぶ変わらと思うのですが、うちの社長が融通の利かない人で…。話が逸れました、すみません。では、我が社の説明をさせていただきます……」

会社の名前で印象が良からうが悪からうが裏社会で暗躍するような

組織は弥彦自身には関わりたくないものだが、これも犯人の情報を
知るためだ。

ルーシーの説明を聞きながら弥彦は頭のなかで彼女の話をもとめる。

『悪宇商会』とは裏社会では最大手の人材派遣会社。戦闘屋、殺し
屋など多様な人材を揃えており、依頼に応じて適した者を送り込む
ことで報酬を得る。その業務活動にポリシーはなく、依頼であれば
犯罪の助長にも、犯罪の解決にも協力する。その顧客には政治家、
財界人などの富裕層から一般市民などの一般層まで多種多様。
つまり金さえだせば顧客の望む人材を派遣して仕事を提供するとい
うもの。護衛の依頼から殺しの依頼、誘拐された子供の奪取まで善
悪関係なく完璧に遂行する。

予想どおりとはいわないが、大体弥彦が考えていた組織の構図と一
致した。

顧客の依頼であればどんなこともする非合法的組織『悪宇商会』

こんな大きな組織が裏社会にあるとは裏世界に縁遠い一般民は誰も
思いもしないだろう。

ルーシーの説明を聞き終えた弥彦は自分の思った疑問を彼女になげ
かける。

「だいたいあなたが所属する組織についてのことは理解しました。

ですが、気になることがひとつだけ。何故裏社会の派遣会社の、し
かも人事部副部長の方が俺に誘いを持ち掛けたのか…まさかとは思
いますけどスカウトですか？」

「そのとおりですよ、弥彦くん。我が社はあなたが欲しい」

ルーシーの直接的な物言いに弥彦は困惑する。

まさかと思っていたことが的中した。

冗談ではない、裏社会の組織に所属するなんてごめんだ。

「念のために言っておきますが、俺はまだ子供ですよ。裏社会にまわさせるような仕事を子供がこなせるとは思えませんかね」

裏社会の仕事なんてものはろくなものではないだろう。

人を殺すか人を守るかの二択にひとつだ。

強い者が生き、弱い者が死ぬ。

この世で一番シンプルな弱肉強食の世界の縮図。

弥彦の疑問を嘲笑うかのようにルーシーはコートのポケットから革の手帳を取り出すと弥彦が如何にして素晴らしいのか説明する。

「ご謙遜を、弥彦くんは充分にこちらの世界でやっていきますよ。あなたについての報告書を読みました。これは4月始めの頃の話になりますが、あなたは我が社の社員に戦闘の結果、勝利を収めています。我が社はあなたのお力を高く評価します。せひとも我が社に来て頂きたいのです」

ルーシーは『悪宇商会』所属の社員が弥彦に負けたというのに、それを恨んでいるわけでもなく、組織の依頼を邪魔した弥彦を貶める様子もない。

むしろ嬉しそうに、しかも弥彦の力を評価しスカウトをする始末。

「なんだって？」

ルーシーの言葉に弥彦は耳を疑った、そして記憶を4月の始めに遡らせる。

彼女は言った4月始め頃に弥彦が悪宇商会所属の社員に戦闘の結果勝利したと、そんなことを弥彦がしたのは一度しかない。

「あんたたちがあの事件と関わっていたのか！あの事件でどれだけ

の子供が犠牲になったと思っっているんだ！」

思い出すだけで胸糞が悪くなる、4月の始めといえば弥彦と奉莉が誘拐された児童誘拐事件。

あの事件に悪宇商会が関わっているとは思っているはずがなかった。それはそうだ、弥彦が悪宇商会を認知したのは今現在なのだから。自分の目の前にあの事件に関わっていた組織の人物がいると思うと弥彦は怒りを抑えきれず目の前にいるルーシーの胸倉を掴み攻め立てると彼女は笑った。

無知な弥彦を笑っているのか、その表情は愉快そうだ。

「弥彦くん、落ち着いてください。先ほど説明しましたが、我が社は必要な場所に最適な人材を派遣する会社組織です。それがたとえ犯罪を助長されようともです」

そんなことは先ほどの説明で訊いた。

自分が訊きたいのはそういうことではない。

弥彦の思いとは裏腹にルーシーは続ける。

「もう一度言います。我が社は犯罪に協力します。ですが、犯罪の解決にも協力します。誰かを貶めることもあれば、誰かを救うこともある。善悪の区別なく、お客様の望む条件に最適な人材を派遣する。それが我が社の仕事なのです」

悪宇商会はただ誘拐組織の依頼である護衛を派遣しただけ、頼まれたからやった。だから自分たちは悪くはないと関係はないといったのだろう。

だが、あの事件で弥彦が巻き込まれる前に捕まった子供はどうなった？

奴隷や玩具として売り飛ばされ、もう二度と帰ってくることはない。

それに助かった子供達は心に深い傷を負った、それは奉莉でさえ当てはまる事実だ。

「それじゃあ、あの事件で犠牲になった子供たちを返せよ」

そんなことを言ったところで犠牲になった子供が帰ってこないのは理解していた、だが目の前にあの事件に関与していたやつがいる。

「それは我が社への依頼ですか？ 売り飛ばされた子供たちを奪取することは可能ですが、残念ですがもう手遅れでしょう。それでも子供たちの肉片を持ち帰ってきてほしいというのであれば…おっと、到着したようですね」

まだ話の途中だというのに無常にも車は目的地に到着した。

目的地は住宅街の端に建つ老朽化したビル。

夜遅くだというのにビルの窓は灯りひとつも灯ってはいなかった。

「おいおいの話は後ほどにして、ご案内します」

ルーシーはそういうと車を降りてビルの中へと弥彦を案内する。ビルの中は真っ暗な闇が広がっていた。人っ子一人いないようなビルに案内していったいなにをするのだろうか、と疑問に思いながらも暗闇のなかルーシーのあとを続く。

階段を上り二階に差し掛かると通路を塞ぐように二人組みの見るからに物騒な男が立っていた。

二人組は弥彦を睨みつけると弥彦も二人組を睨み返す。するとルーシーが

「こちらの方は本日のお客様です。ですので、道を開けてください」

と言うと、二人組みは慌てて二階へ続く道を開けふたりを通した。二階に到着すると弥彦はその光景に目を疑った。

ただの廃ビルかと思っていたが実際はカジノ場だったのだから。スロットマシーンにギャンブルテーブルが整然と並べられ、床にはふかふかな赤い絨毯が敷いてある。

カジノ内の空気は最悪で強いアルコールの匂いとタバコの匂いが鼻を刺激する。

見るからに裕福そうな雰囲気客が酒を片手に賭博を楽しみ、怒声や笑い声が店内に響く。

ルーシーは弥彦をカジノ場の奥にある一室へと案内した。

室内はカジノの騒音から遮断されたように静かで空気も淀んではない。

二人以上座れるんじゃないかと思うような大きなソファに弥彦は腰を降ろすとテーブルを挟んだ向かいの席にルーシーが座る。

二人が着席するとカジノのボーイが飲み物をテーブルの上に二つ置いた。

「どうぞお飲みになってください。喉が渴いたでしょう？安心してください、未成年の弥彦くんにはお酒などではなくジュースですから」

弥彦は無言でグラスに入った飲み物に口をつける。

喉をするつと通るような爽やかな喉越しで確かに美味しかった。

「おいしいでしょ？ノンアルコールのカクテルなんですけどわたしのお気に入りです…」

ルーシーが飲み物についての説明を始めようとするので弥彦はこれ以上話を先伸ばされても時間の無駄なので話しを急かす。

車内で話したことについても、犯人についても訊かなくてはならな

いの中から。

「さっさと用件を済ませたいのですが、ルーシーさん」

「わかっていますよ、『無差別耳削ぎ事件』の犯人について、でしたよね？ちよつとお待ちを」

彼女は部屋にボーイを呼びつけ、耳打ちするとボーイが部屋から出て行った。

しばらく待つと再び先ほどのボーイが部屋に戻ってきてルーシーに書類を手渡した。

手渡された書類をルーシーは机の上に置くと弥彦は書類を受け取り、書類の内容を確認する。

「これは？」

「我が社への依頼状ですよ。『無差別耳削ぎ事件』の犯人を殺して欲しいと事件の被害者の遺族からのね。我が社はこういったように事件の被害者の遺族から犯人を殺して欲しいという依頼がたびたびあります。簡単にいうと警察では解決できないものを我が社が解決し、ついでに犯人も始末しましょう、ということですよ」

警察の手の負えない事件を『悪宇商会』が依頼として受け持ち、犯人を殺すというのか。

確かに被害者の遺族からしたら犯人は憎むべき相手。

たとえ捕まったとしても判決で死刑になる事件は数少ない。

それなら『悪宇商会』のような裏組織に依頼を頼み、確実に犯人を始末してもらったほうが断然良いのだろう。不思議とビジネスとしてなりたつ。

だが、弥彦が知りたいのは犯人の情報であって、依頼状ではない。

「話がみえませんか、俺は事件の犯人の情報が知りたいと言ったは

ずですが…これはただのあなた方への依頼じゃないですか」

弥彦の言葉にニヤリとルーシーは笑みを弥彦に見せると

「確かにこの依頼は我が社に依頼されたものですが、弥彦くんは犯人を捕まえたいと思っただけじゃありません。しかし、我が社に犯人を始末して欲しいと依頼が入った。これでは弥彦くんが犯人を捕まえる前に犯人が始末されているという状況になります」

いちいち言われなくても判ることをルーシーは確認するように弥彦に話す。

痺れを切らした弥彦は話を急がす。

「煩わしいですね、なにが言いたいんですか」

弥彦の言葉を待っていました、といわんばかりにルーシーは笑みを浮かべた。

彼女の胡散臭い笑みが弥彦の気にいちいち触れる。

「弥彦くんに我が社の社員としてこの依頼をお願いしたいということとです。あなたの希望どおり事件の犯人はあなたの手で始末され、我が社も新しい社員の確保と依頼が完了できるというメリットができます。どうでしょうか？」

ルーシーは真剣な眼差しで弥彦を見つめる。

犯人の情報が訊けるときいて彼女に付いてきたがそれは間違いだったようだ。

彼女の提案どおり、弥彦が『悪宇商会』に所属してこの依頼である犯人を始末すれば商会側は新しい社員として弥彦を確保し、そして依頼も達成できるといって一石二鳥で満足だろう。

弥彦も日高梓から耳を奪った犯人を自らの手で殺すことができこちら側にもメリットがある。

しかしだ、弥彦自身は犯人を捕まえることを望んでいても、犯人を殺すことは望んではいない。

それに『悪宇商会』に所属するなどこちらから願ひ下げだ。

「残念ですが、俺は『悪宇商会』に所属するつもりはありません。だいたい、俺は犯人を殺したいのではなくて捕まえたいんですよ。この話は無かったことにしてください」

「……えっ？」

弥彦の言葉にルーシーの笑みが凍りついた、まさか断られるとは思ってもよらなかったのだろう。

だが弥彦には『選ぶ』という権利がある、自分の前で提示された選択肢は自分で決める。

弥彦はルーシーの提案を拒否するとソファから立ち上がり帰ろうと扉にノブに手を掛けるがそれをルーシーの言葉が邪魔をする。

「弥彦くん、あなたは自分がどんな存在なのかわかっていない。あの『崩月』の直系でありながらあなたは人を殺したくないという。これほど可笑しい話はないですよ。あなたが今まで学んできた崩月流の業は代々、人間を壊すため、殺すための業のほずです。殺しの家系である『崩月』が人を殺すことに躊躇してどうするんですか？ あなたなら友達の仇が討てます！ あなたは原石です。あなたには才能がある、その才能を我が社で経験と一緒に培い、最高の殺し屋として業界で名を馳せることができます」

最高の殺し屋か、そんなものになるつもりはない。

自ら望んで裏社会に関わるのは本当は嫌なのだ、目の前で自分を引き止めるルーシーのようなやつがいたり、圧倒的な力で弱い者をね

じ伏せるようなやつが裏世界にはごろごろいるのだろう。

だが、そんな理不尽なような世界になぜ足を突っ込んでいるのか？
答えは単純で重要なこと、それは大切な友達の為。

弱い自分を支えてくれるのは、今の自分があるのは、まわりのおかげ！
家族、友人、兄弟子、この三つのどれかが欠けてはいけない。

弥彦は扉の前で振り返るとルーシーを睨み付けながら一步前へ出る。

「あなたに《崩月》のことでやかくいわれる筋合いは無い。崩月流の業は後の代に伝えるためにあるもの、むやみに人を殺すためにあるわけじゃない。殺しの家業は祖父の代で終わったんだ。それに、なぜあなたが俺の友達が事件の犠牲になっていることを知っている？」

さらに弥彦はルーシーとの間合いを詰めて彼女を萎縮させる。

「えっと、それは…あなたの報告書に載っていたので…」

さっきまで饒舌だった言葉の勢いがなくなり、歯切れが悪く答える。
ルーシーの様子に弥彦は自分が考えていることに確信をもった。

彼女は嘘を言っている、それも崩月弥彦を嵌めるための嘘を。

そして弥彦は自分の導いた考えをルーシーに突きつける。

「おかしいと思ったんですよ、この事件。『無差別耳削ぎ事件』の犯人は必ず被害者を殺していた。けれども俺の友達である日高梓は殺さなかった。彼女の耳は奪ったのにも関わらずにだ。しかも、彼女を発見したのは俺だった。あの時、あの不審車両に乗っていたのはおそらく悪宇商会の人間でしょう。そして、俺が事件の犯人を捜していることを承知で事件の犯人の情報を餌に『悪宇商会』に勧誘して所属させようとした、というところですか。間違っていますか？
ルーシー・メイさん」

弥彦の話に黙って聞くルーシーの様子は落ち着いたものだった。彼女はグラスに残ったカクテルを飲み乾すとコートポケットから革の手帳を取り出した。手帳を開くと、弥彦に視線を移し、口を開いた。

「崩月弥彦くん、見事な推理でした。その歳で大したものですね、さすがは《崩月》といったところですか。弥彦くんの仰ったことは概ね当たりですよ。確かにこの事件、我が社があなたを確実に手に入れるためのものでした。あなたのご友人の少女を『無差別耳削ぎ事件』の犯人を装って襲い、少女をあなたに発見させた。そして、ご友人を襲った犯人を恨んだあなたの前に犯人の情報という餌を与えて、我が社にあなたを組み入れる、という計画だったんですが、全部パーですね。やはり、あの時少女を殺しておけばよかった。そうすれば弥彦くんがこの計画に気づくことがなかったかもしれない。この反省を機に次からは生かさずに殺すようにしましょう」

淡々と弥彦に計画を打ち明けるルーシーは自分たちが犯した罪の意識がないようだ。

友達の耳を奪っておいてその態度はないだろう、と弥彦の怒りが頂点に達する。

「ふざけるな！次なんかあるわけないだろ！あんたたちが犯した事は許せることじゃない。しかも、俺が欲しいがために梓の耳を奪ったというのか！どこまで腐ってんだよ、この外道が！彼女がいまどんな状況なのか知っているのか？」

「いいえ、存じていませんね」

「梓の聴覚は失ったんだよ！もう二度と彼女は音を聴くことができない、一生だ。まだ梓は小さい子供なんだぞ！彼女の未来を奪った罪はあんたにないのかよ！」

「ありませんよ、そんなことより計画がパーになってしまいました
が、我が社があなたを欲していることには変わりはありません。ど
うですか？我が社に入社してみませんか？」

なんて女なんだ、ルーシー・メイ。

自分たちが犯した罪より会社の利益を優先する、これが『悪宇商会』
の人事部副部长か。

「断る！これから俺はあんたを捕まえて警察に突き出す。刑務所で
自分の犯した罪を悔い改めろ」

弥彦の言葉にルーシーはおおいに笑った、腹を抱えて笑った。

弥彦にはルーシーがこんなにも笑う理由が思いつかない。

そしてルーシーはまるで哀れむように弥彦にこう言った。

「わたしを警察に突き出すですって？無理ですよ、弥彦くん。仮に
わたしを警察に突き出したところでなんになるんです？わたしが日
高梓を襲ったという証拠はありませんし、なにより警察には『悪宇
商会』所属のものを捕まえられない。我が社は裏と表の権力にコネ
がある、捕まったところで直ぐに釈放ですよ。それにあなたは自分
の力を過信し過ぎている。そこはまだ子供ですね」

ここにきて自分が相手にしている『悪宇商会』の権力の強さに愕然
とした。

表の世界で正義と信じていた警察がすでに悪に屈している事実
に弥彦は悔しさと悲しみで目の前の景色が涙で歪む。

ルーシーはソファアールから立ち上がると扉を開いて部屋の外へと向か
う。

弥彦も彼女の後を追って部屋を退出すると、カジノの様子が一変し
ていた。

人がひとりも居ないのだ、あの騒がしかった客達の怒声と笑い声が嘘だったかのようにカジノは静まり返っていた。

そしてカジノの中心に立つのはルーシーと、その横に弥彦の見知らぬ少女。

「わたしをどうしても捕まえたいというのであれば彼女と戦ってください。そして勝ってください。弥彦くん、あなたはわたしが提示した依頼を拒否した時点で我が社はあなたを殺さなくてはなりません。暗殺の依頼を訊いて、そのまま帰すことはできません。理由は情報の漏洩に繋がるためです。彼女との戦闘で勝てばわたしを煮るなり焼くなり好きにしてもらってかまいませんよ、しかし彼女との戦闘での負けはあなたの死を意味します」

弥彦は黙ってルーシーの言葉に耳を傾ける。

ルーシーの話を要約すれば殺し合いをしろ、というもの。

勝てば弥彦の願いどおりルーシーを確保できる、けれども負けることは弥彦の死を意味する。

依頼を受ける受けないに関係なく、自分は誰かを殺さなくてはいけないという選択肢しか残されていない。

弥彦はルーシーの横で佇む少女に視線を移した。

最初に目に留まったのは茶色の髪を結ぶ黒いリボン。顔にはまだ幼さが残り、十代前半の少女だと思われる。少女は眠たげな眼差しで弥彦を見つめている。

一見すればただの女の子のように思えるが彼女は『悪宇商会』所属の社員であることには変わりない、気乗りはしないがこの茶番をやるしかないのか。

するとルーシーが少女に何かを手渡した、その瞬間少女の雰囲気が変わり代わる。

「くっただらねえ！久しぶりに帰国してみれば、くだらねえ仕事かよ

！」

荒々しげに口を開いたのはルーシーではなく、さっきまで眠たそうにしていた大人しそうな少女。さっきの少女と違うものは雰囲気とルーシーから渡された一本の鋭利なナイフ。まるで少年のような口調で文句を言うときらぎらとした血が飢えた獣のような悪意のある眼差しで弥彦を観察する。

「なんだよ、ただの餓鬼じゃねえか。オレがなんであんな餓鬼を相手にしなきゃならねえんだよ！訊いてんのか！ルーシー・メイ！」
「訊いていますよ、切彦くん。これも仕事です、ちゃんと報酬は色をつけて払いますから我慢してください」

ルーシーの言葉に切彦と呼ばれた少女は「ちっ」と舌打ちするとナイフを片手でしっかりと握り、腕をだらりと下げたまま歩き出す少女。

「めんどくせえけど、仕事じゃ仕方ないな。ただ殺すだけじゃ可哀想だからな、一撃でその首落としてやるよ！」

一瞬の間に間合いを詰められ弥彦、自分の首元を狙ってナイフが襲い掛かる。

弥彦はそれを身を引いて避けると、後ろへおおきく後退した。まるで死神が鎌を振り下ろしたかのような一撃、弥彦が避けられたのは少女が首を狙うと宣言したからだ。でなければ今の一撃で弥彦の首は飛んでいた。

「へえ、驚いたな。今のを避けるとは思わなかった。てめえ、ただの餓鬼じゃなかったんだな。これは少し楽しめそうだなっ！」

そういうと少女は弥彦に再び襲い掛かる。

弥彦は少女の間合いに入りまいとスロットマシンやギャンブルテーブルを盾に立ち回る。

弥彦が盾にした壁をもともせず少女は片手に持ったナイフで切り刻む。

「ちよろちよると逃げるだけかよ、少しは抵抗してみせろよ！これじゃあ、ワンサイドゲームでつまんねえよ！」

「……………」

弥彦が黙っているのが気に食わないのか、少女はまるで笑い話をするように弥彦に話かける。

「良いこと教えてやるよ。オレが帰国してから初めての仕事は確か、ためえぐらいの年の女の子の耳を切ってやったことだったかな？つまんねえ仕事だった、殺さずに耳だけ切って生かしておけと言われてな、確かあの女の子はためえのお友達なんだろ？」

少女は侮蔑のこもった笑みを弥彦に見せる。

「耳を切ってやった時、大声で泣いていたっけな。『痛いよ、痛いよ』てな！うるせえから耳の他にも手と足でも切ってやるうかと……」

「……………黙れ」

「なんだと？」

「黙れって言ったんだよ！この糞アマ野郎がっ！」

弥彦はスロットマシンを担ぎ上げると少女に向かって投げつけた。投げられたスロットマシンは少女の手前で真つ二つに切り分けられる。

「お前か、梓の耳を奪った野郎は。その罪、死んで償え」

怒りと憎しみをを力に転じて弥彦は己が持つ、最高の力を具現化させる。

右腕の肘から現れた鋭利な角を象徴とする《崩月》の戦鬼たる証を目の前に居る外道に見せ付ける。

体中に力が湧き上がる。殺戮衝動が湧き上がる。敵はひとり、もう我慢できない、殺す。

「……なるほどねえ。やっぱりただの餓鬼じゃなかったか」

少女の口元には侮蔑のこもった笑みはもうない。

少女の瞳に写る崩月弥彦を正しく敵として認めた。

「おまえ、《崩月》の戦鬼だったのか。うちの祖父さんや親父から話には聞いたことはあるが。これが本物。ルーシーがスカウトするわけだな。おもしれえ」

少女は弥彦から視線を逸らすと壁際に佇むルーシーに向けた。

「おい！ルーシー！そこにある物を投げて、オレに渡せ」

少女の指示に従いルーシーは壁に立てかけてあつた長い筒状のケースを少女に投げ渡した。

弥彦は拳を構えて少女との間合いを少しずつ詰める。

弥彦の様子に少女は笑みを浮かべる、満面の笑みだ。これから始まる本当の殺し合いが楽しみで仕方ないような、そんな笑み。

「今日はいいい日だ！久しぶりに、すっげーワクワクするぜ！てめえもそう思うだろ？だが、《崩月》の戦鬼にこのナイフでは駄目だ。

てめえを殺すにはこれじゃ足りない。殺しきれない」

そういうと少女は手に持ったナイフを無造作に投げ捨てると、ルーシーから受け取った筒状のケースを開いた。そこから出てきたのは一振りの日本刀。

指で刃をゆつくりと撫でると嬉しそうに笑う。

「『虎徹』名前ぐらい知っているだろ？ 贗作が多い物だがこれは本物だ。最上大業物の一振り。鬼退治には申し分ないだろ？」

ただのナイフでさえ彼女が持てばとんでもない凶器となりうるのに、今度は日本刀、それも名刀ときた。

「さあ、楽しもう。てめえを殺してやる。オレを殺してみせろ」

少女は刀を構えずに先ほどと同じようにだらりと腕をたらす。これが彼女の構えなのだろう。

そして、この戦いは弥彦には一步も引けない戦い。法泉は言っていた、どうしても引けねえ戦いがあつたらあの名前を名乗り上げると、今がその時なのではないだろうか。

カジノ場は静まり返り、対峙する二人はどちらが合図したわけでもなく名乗りあげる。

「崩月流甲特種第三級戦鬼、崩月弥彦！」

「《斬島》第六十六代目切彦！」

さあ殺し合いの始まりだ、相手は自分と同じく裏十三家の《斬島》相手にとって不足は無い。

第十六話 ある男と悪宇商会（後書き）

いかがでしたでしょうか？

なんというかご都合主義、強引なこじ付けで話が進んでいますが、そこは目を瞑って下さい。

勢いあまって《ギロチン》こと斬島切彦ちゃんを出演させてしまいました。ですが、どうでしょうか？

このお話の盛り上がる起爆剤として登場させてみましたが、なんとなくか逆効果で白けてしまいそうです。

原作キャラクターのイメージがどんどんとかけ離れていく感じがなるともいえませんが読んでいて苦痛を感じるのではないのでしょうか？そこんところをご感想などで指摘してくれると大変、助かります。

いよいよリアルでは4月に入りましたがみなさんはいかがお過ごしでしょうか。

作者は単位が不足しているのを知らされて軽い鬱です。

これを読んでいただいているお方の新生活に幸あれ！

第十七話 ある男は敗北し気づく(前書き)

長い駄文ですが全部読んでくれている方がいることを信じてます
ご感想お待ちしております

第十七話 ある男は敗北し気づく

「崩月流甲特種第三級戦鬼、崩月弥彦！」

「《斬島》第六十六代目切彦！」

ふたりが名乗り上げるのと同時に動いたのは切彦だった。

切彦は弥彦の正面をただ真っ直ぐに突進。

二人の間に壁になるような物はなく、一瞬の間に二人の距離は零に近づいた。

切彦のだらりと下げた腕、手に持った名刀『虎徹』こてつを無造作に下から上へと振り上げた。

まさに神速と呼ぶに相応しい彼女の刀の太刀筋、あまりの速さに弥彦は咄嗟に右腕を前に出し彼女の太刀を防ぐ。

幸か不幸か、偶然にも弥彦の右肘にある鋭利な角に彼女の太刀が合わさった。

きーン、というまるで金属と金属がぶつかり合ったかのような反響音がカジノ場に響くと同時に切彦の太刀の衝撃を押さえきれずに弥彦は後ろに吹き飛ばされた。

「うわっ！」

吹き飛ばされた弥彦はそのまま背後にあった壁に衝突、受身も取れずに衝撃をもちに受けた弥彦はその場で蹲る。

殴られたり、蹴られたり、潰されたり、トラックで轢かれようが崩月の修業で養ってきた弥彦の肉体はびくともしない自信があった、だが切彦の今の太刀は弥彦の肉体に痛手を負わせるほどに強力だった。

これがプロの殺し屋、これが《斬島》、今の一撃で自分と切彦にある実力の差に愕然とした。

天賦の才で振るう切彦の太刀筋は弥彦の目に捉えることができなかつた。

そして蹲る弥彦に追い討ちを掛けるように切彦の刃が弥彦を襲う。立ち上がる余裕は無いので床を転がるかたちで弥彦は切彦の追撃を避ける。

「ちっ」という切彦の舌打ちが聞こえたような気がしたが、弥彦はそれを無視して気持ちを落ち着かせ、素早く立ち上がる。

切彦はまだ死なない弥彦を愉快そうに笑みを浮かべて睨みつける。

「てめえのお得意の《崩月》流の業はどうした？戦鬼の剛力から繰り出される一撃はとんでもねえ、て親父から話で聞いてはいたんだがな…。威勢がよかつたのは最初だけだな」

殺し合いのなかだというのに切彦が弥彦に話しかける。

これは好機として弥彦は思考をフルに活用して現在の状況の打開策を見つげるために時間稼ぎとして切彦の話に合わせる。

「あんたの間合いが広すぎて、俺があんたの懐に飛び込んだ時には自分の首が飛んでる。その刀捨てて素手で殺り合うなら話は違うんだがな…」

弥彦のいうとおり切彦の間合いが出鱈目に広すぎるのだ。

切彦の腕の長さや手に持った刀の長さで、ゆうに子供の弥彦の身長以上ある。

子供の弥彦が切彦に一撃与えるには最低でも彼女の懐に潜らなければならぬ。

そして懐に潜り込む前には神速で振るわれる刀で既に弥彦の首が飛んでいるということ、なんて不利な状況だ。だが、弥彦にも勝機はある。

切彦に一撃でも当てることができれば状況は一変するだろう。

《崩月》の戦鬼たる、人間とは桁違いの剛力から繰り出される武術の業。

切彦は身体能力は高いもののその体は頑丈ではないはずだ、きつと致死傷になる。

「はあ？誰が《崩月》の戦鬼相手に素手で勝負を挑むんだよ、アホか。てめえも知ってたんだろ、うちの《斬島》は刃物専門だって事」

冗談で言ったのだが、切彦は律儀にも返事を返してくれた。

弥彦は記憶を遡り、《斬島》についての詳細な情報を思い出す。

『斬島家』裏十三家のひとつで一族の者は刃物を扱うことにかけては攻撃面でも防御面でも超人的に優れており、剣術を一切学ばずにしても容易く剣豪を惨殺するほどの実力をもつ。一族に共通の特徴として、刃物を持つと気分が高揚し、普段とはまるで別人のような言動と身体能力を発揮する、と祖父である法泉から弥彦は話には聞いてはいた。

「《斬島》についてはお祖父ちゃんからの話では聞いてはいたけど、実物を見るのは初めてだ。まさか、これほどとは…あんだ、刃物持った瞬間に化けすぎ」

「それはお生憎様だぜ。オレも実物を見るのは初めてだ。……おつと、つい話しに夢中になっちまった。殺り合ってたんの、忘れてたぜ。裏の歴史で《崩月》と《斬島》の決闘はそうそうあるもんじゃねえよ。続きをやるうぜエ！」

そついうが早く切彦は弥彦に襲い掛かる。

弥彦は切彦との会話をしている間に考えていた作戦を実行させるためすぐさま後退。そしてビルの壁をその拳でぶち抜いた。

「せいっ！」

弥彦の気合を込めた掛け声と共に繰り出された自慢の拳でビルの壁は砕かれ、砕かれたコンクリートで出来た壁の向こうには非常階段。弥彦はカジノ場から非常階段に移動すると階段を駆け上がる。

弥彦の突然の敵前逃亡に切彦は一瞬、呆気に取られた。だが、その思考は一瞬のもの、獲物が逃げたと怒りを露にして切彦が叫ぶ。

「てめえ、逃げんのかっ！待ちやがれ！」

すぐさま弥彦の後を追う切彦。

弥彦は切彦の怒声を無視して真っ暗の闇に染まる階段を上り、上の階を目指して階段を駆け上がる。

暗闇に目が慣れ始めて、くつきりと弥彦の視界に世界が映りだす。無人の廃ビルは弥彦の予想どおり二階のカジノフロア以外の階のフロアは改装した様子はなく手付かずのまままで放置され、荒れ果てていた。

事務机がところせましと並べられているところをみると以前は商社ビルだったのだろう。

弥彦はその中から一台の机の下に潜り込み、息を潜める。

ここで切彦を待ち伏せて不意を突き、彼女の懐に潜り勝負を決める作戦だ。

さほど時間が経たずに切彦が弥彦の隠れるフロアにやってきた。

「居るんだろ、出て来いよ！この腰抜けエ！かくれんぼをしたくてオレはこの依頼を受けたんじゃないやねぞ！オレが憎いんだろ？殺したいんだろ？最初の覇気はどうしたよオ！」

「……………」

切彦の怒声に返ってきたのは無言の沈黙での返事。

弥彦は身を潜めて、切彦の出方を窺う。

梓の耳を奪った切彦は憎い、殺したいぐらいに。現に殺し合いをしている。

でも、ここで出て行ったらもう切彦を討てるチャンスは無いに等しい。

正面から立ち向かうのが無理なら背後からの不意打ちでしか勝機がみえない。

プロの殺し屋、それも《斬島》を相手にしてまだ死んでいない自分は賞賛に値する人間だろうか？

今まで培ってきた《崩月》の稽古はこういう時の為にしていたはずなのに、いざ戦闘となれば足が竦み、切彦の殺気に圧倒され、成す術も無く身を潜めている。

情けない、これでいいはずがない、これは自分にとって引けない戦いではなかったのか？

これでいいはずはないんだ、崩月弥彦。

弥彦が自分の呼び応えに応じないと判断した切彦は事務用の椅子を蹴り上げた。

「せつかく《崩月》の戦鬼と殺り合えると思ったのにこれだ。オレをがっかりさせないでくれよ、崩月弥彦！」

「……………」

いくら挑発しても一向に姿を見せる気配のない弥彦に切彦は厭きれる。

切彦は刀を鞘に納めると、まるで子供が与えられた玩具に興味を失せたかのようにつまらなそうな声でこう言った。

「はあ…もういい、やめだ。興が冷めた。話で聞いていた《崩月》の戦鬼がこんな腰抜け野郎だとは思わなかったぜ」

「……………」

「てめえの命は助けてやるよ。よかつたな、嬉しくて涙がでるだろ？…だがな、このオレに舐めた事をしたてめえには罰が必要だ。それも、とびっきりの罰が」

俺の命を助けるだと？それに罰だと？

弥彦が困惑しているとは知らずに切彦はフロア内を散歩でもするかのような軽い足取りで歩きでした。

「そつだなー、てめえの罰は……友達」

友達？

弥彦は切彦の言葉に耳を傾け、歩く切彦が近づいてくるのを待つ。

「オレが耳を切つてやった女の子はまだ死んでねえんだろ？耳が無くなったからって生きていることには変わりない」

まさか、こいつは…。

「そこで、だ。今から女の子の居場所に出向いてやって、止めを刺して来てやるよ。今度は耳じゃなくて首を刎ねてきてやるよオ！」
「やめるオ！」

切彦の言葉に弥彦は我慢できずに机の下から飛び出した。

ふたりの距離は5メートルとないほど近い距離、あと少しだけ弥彦が我慢することができれば切彦が弥彦の前を通り過ぎるのをやり過ごし後ろから不意打ちができたものを。

だが弥彦は我慢が出来なかった。

自分の命よりも友達のを差し出すような真似をする男にはなりたくなかった。

自分の目指すものは圧倒的な強者から理不尽な暴力や圧力に苦しむ

人々を救い、笑顔にさせることのできる人間。まるで、御伽噺に出てくる正義の味方。
ありもしないものに憧れるのは生まれ変わっても不変。
切彦の正面に出ることは弥彦にとって死への十三階段と同意義、だがそれを無視して拳を握る。

「見つけたア！」

切彦は今までになく最高の笑みを見せて弥彦を出迎える。
弥彦が飛び出してきた瞬間に鞘に納まっていた刀は一瞬で抜かれる、だがそのコンマゼロ秒にも満たない一瞬の内に弥彦は切彦の懐を捉えていた。

弥彦は自らの懐の下で溜めていた拳を怒りに任せて前に、憎むべき敵に、突き出した。

それを切彦は体を空中で捻らせゆらりと避けるとそのまま弥彦の突き出した左腕を切断した。

切断された腕が宙を舞い切断面からスプラッター映画のワンシーンのように血が撒き散らす。

全身から血の気が抜けていく、まるで真冬の雪山にいるかのように体の体温が下がる。

弥彦は両膝を床に着かせ、まるで他人事のような主観でそれを眺めた。

左肘から上が無くなっている。

床に視線を移せば動くことの無い、精巧な人形のような腕が転がっている。

あれはなんだ……俺の腕か？

「あ、あ、あう、うああア！！！！」

あまりの激痛に弥彦は叫び声を上げた。

法泉から痛覚を和らげる方法を学んでいたが、それでもこれはない。痛い、いたい、イタイ、瞳に涙を流し嗚咽を交えながら弥彦は泣いた。

泣き散らす弥彦の姿をニヤニヤと笑みを浮かべながら切彦が眺める。

「斬られるのは初めてか？これぐらいじゃあ《崩月》の戦鬼は死なねえよな。餓鬼の癖になかなかのもんだったが経験が足りなかったな、オレと殺り合うのは百年早えよ。残念だったな、崩月弥彦」

切彦は弥彦の首元に血の付いた刀の刃先をすつと静かに添えた。

首元にひんやりと無機質で冷たい死の感触が弥彦を包み込む。

自分に迫る死の気配、これが敗北。完敗だ、敵わなかった。

戦鬼になつての零距离からの全力の一撃を見事に避けられ、腕一本も奪われた。

そしてまもなく俺は切彦に止めを刺される。

梓の仇を討ちたいが為にここまで頑張つてはきたが、梓の耳を奪うきっかけになったのが自分のせいだと判明し、そして裏社会の大組織相手に殺し合い。

まるで自分が揉め事処理屋のように立ち振る舞い、失敗した、その結果がこれだ。

俺のせいで耳を奪われた梓にはなんて説明して謝ればいいのかのさか？

奉莉と杏は俺のせいで梓が耳を奪われたと知ったら、どんな顔をすのさか？

円と光ちゃんには貸を返せなかったな、無責任だって怒るかな？きつともう五人とは会うことはないだろう、また死ぬときはひとりになるのか。

人は死ぬ前に走馬灯を見るといふがそんなことはない。

弥彦に見えるのは自分を見下ろす斬島切彦だけ、そして考えるのは後悔の念だけだ。

後悔はあるが甘んじて死を受け入れよう、二度目の死だ、怖くはない、と弥彦が諦め覚悟を決めた。そのとき『死ぬことは許さねえぞ、弥彦。それを頭に入れとけ、わかったな』と法泉の言葉が脳裏を過ぎった。その瞬間、弥彦の涙で枯れた瞳に生気が宿り、活力が戻ってくる。

弥彦はまだ残っている右腕で首元に添え付けられた刀を払いのけると切彦の脇腹を蹴り上げた。突然の強襲、無防備だった切彦は弥彦の蹴りを受けて蹴り飛ばされる。

蹴り飛ばされた切彦は脇腹を片手で押さえながら床に刺した刀を支えに立ち上がるがよろめき、その顔は苦痛で歪む。

「俺はまだ死ねない、生きて帰ると約束したんだ。あんたに片腕を奪われてもまだ両足と右腕が健在だ。まだ闘える。経験の差なんて関係ない、俺はあんたを打倒する」

「……てめえっ」

切彦は刀を引き抜くと走り出した。狙いはもちろん弥彦の首。

「死ねっ！この死にぞこないが！」

「死ねるかっ！」

今度こそこれが最期の一撃、二人は己の持てる最大の力と技で相対する。

だが、そこに介入者が現れた。一発の銃声、それは弥彦に向けられたものではなく切彦に向けられたもの。切彦は弥彦との戦闘を切り上げると標的を銃を撃った主に変更した。

狙われた主は女性で口にタバコを銜え、ただ拳銃一丁のみを片手で構えて切彦に銃口を向けていた。ただそれだけなのにその人物から放たれる圧倒的な存在感、そして殺気の恐怖に弥彦は目を奪われる。あの銃口が自分に向けられでもしてみろ、逃げることはおるか生き

残るのも絶望的だ。そんな相手に切彦は臆することなく斬り込んだ。二人の攻防は例えるなら嵐。圧倒的な力と力のぶつかり合い、周囲にあった机は吹き飛ばされ、今にも廃ビルが崩れるんじゃないか、と思わせる。

二人の戦いに見惚れていた弥彦の背後にはいつの間にかひとりの人物がいた。

スラリとした体格に黒いスーツを着て不思議な雰囲気を漂わせる若い美人な女性がいた。

「これを」

女性は切彦に切断された左手を弥彦に手渡した。血が通っていない左手は冷たくて色白に変色していた。

「えっと、ありがとうございます。あなたは？」

左手を受け取ると弥彦は目の前にいる女性に尋ねた。

「犬塚弥生と申します。法泉様よりあなたの護衛を頼まれましたが駆け付けるのが遅れてしまいました。さあ、今のうちに退却しましょう」

お祖父ちゃんから俺に護衛を？

「ちょっと待て、護衛の件は後で訊くとして。まだ向こうでは斬島と俺を助けてくれた人が闘っている。あの人を置いていくわけにはいかないだろ」

自分と数メートル離れたところで死闘を繰りひろげている二人を弥彦は指で指して示した。

「紅香様なら大丈夫です。あなたを安全な所まで避難をさせたらそこで合流する手筈となっています。ここでただ立ち止まっている方が危険です、紅香様の邪魔になる」

弥生の言っていることはわかる、手負いの子供がどうこうできる問題ではない。護衛対象である弥彦を戦場から離脱させようとするのも理解できる。だが、これは俺自身が招いたことだ。はじめは自分でつけたい。

「俺も闘います。闘わせてください、これは俺の問題です。ですから、おね……」

お願いします、と言い終える前に弥彦は弥生の貫手を急所に受けて気絶した。

目を覚ますと弥彦は病室にいた。

ぼやける視界が徐々に鮮明になっていき自分がベットに仰向けになるように寝ていること、そしてまだ生きていることを確認した。切彦に切断された左手を見ればギブスと包帯で補強されていた。

あの戦闘の中、俺はどうやら気絶させられ強制的に病院に運び込まれたようだ。

首を動かし、周囲を見渡す。病室の窓は開けられており、蝉の鳴き声と共に心地よい風が弥彦の頬を撫でる。

すると病室にひとりの看護婦がやってきた。

ナース服のサイズが小さいのかスカートの丈は短く、そして胸が強調され目のやり場に困る格好をした綺麗な看護婦だった。彼女の胸にあったネームプレートには『とみ東西南』と書いてある。変わったな名前だな、と弥彦が考えていると

「あつ！目が覚めたのね。気分はどう？調子の悪いところとかない？」

軽い口調で弥彦に体調の不調がないか尋ねてきた。

「ええ、いまのところは大丈夫です。あの、俺をここに運んでくれた方はどちらに？」

「その人達なら、君をうちに運んですぐにどこかに行っちゃったわ。君の体調は良さそうだけど念のために先生を呼んでくるわね」

ちよつと待つててね、と弥彦に片目を閉じてウインクをして看護婦は病室から出て行った。

犬塚弥生に紅香様と呼ばれていた女性、結局助けくれたお礼も言えずに弥彦の前から姿を消した。

そつえば紅香なんて名前どこかで聞いたことがあるような気がするんだが気のせいだろうか？と弥彦が自問自答していると病室に医者らしき男が先ほどの看護婦と一緒にやってきた。

医者の頭には髪の毛が一本もなかったが、かわりに銃創の痕があった。戦場にもいたのだろうか？その頭に似つかわしいほどの強面の顔だった。霧困気が穏やかで恐怖を感じない。胸のネームプレートには『山浦銅太』とある。

「どつだ、調子の方は？どこか痛むか？」

「調子は良いですし、痛みはありません。えつと、あなたが俺の腕を繋げてくれたんですか？」

弥彦の質問に山浦は頷く。

「ああ、そつだ。一応、繋げはしたが当分の間はリハビリが必要になるだろう。それに耐えればまた以前のように使えるようになる」

「ありがとございました、山浦先生。左腕は諦めていたんですが、まさか治療していただけとは思っていませんでした。この恩は忘れません」

弥彦はベットのうえで上半身を起こし、深々と感謝の意を込めて頭を下げた。

「そんなことは止せ、医者が患者を助けるのは当たり前のことだ。医者は誰からも望まれる最高の職業だからな、患者が元気な姿を見せてくれればそれでいい。これで診察は終わりだ、安静にして寝てな。そのうち見舞いに客が来るだろうからな」

じゃあな、と弥彦に背を向け手を振り看護婦と共に山浦は病室をあとにした。

しばらくすると山浦の言っていたとおり弥彦に見舞いの客がきた。夕乃と真九郎だ。

真九郎はフルーツ盛りの籠を弥彦に見舞いの品だと見せると、さっそく見舞いの品をみんないただくことにした。

夕乃が果物ナイフでりんごの皮を剥き、食べやすい大きさに切り分けると弥彦に差し出した。それを弥彦は受け取り口に入れる。シャリシャリとした食感と口の中に程よく甘い味覚が広がった。

りんごを食べ終えると弥彦は事件の件で家族である夕乃に伝えることがあるので口を開いた。

「夕乃お姉ちゃんにはご心配をお掛けしました。お祖父ちゃん以外に黙って危険なことをしていたのはどうしても友達を巻き込んだ事件を自分の力で解決したかったからなんだ。その結果、片腕を切り落とされ、拳銃の果てには紅香さんと弥生さんに助けられた。俺は自分の力を過信し、裏世界の危険性をちっとも考えてはいなかった。その事を痛いほど思い知らされた。そして自分には帰りを待つてく

れている家族や友達、もちろん兄弟子である真九郎さんがいることを忘れていることを思い出させてくれた。本当に心配を掛けてすみませんでした」

弥彦は頭を下げ夕乃に謝罪する。弥彦の話を聞いた夕乃は弥彦を優しく包み込むように抱きつき自分の胸のなかで困惑している弥彦に優しく語りかけた。

「弥彦が無事で本当に良かった。あなたはわたしの弟なんです、弟の心配をしないような姉はどこにもいませんよ。今度またあなたがひとりで危険なことに関わろうとしたらわたしが止めますからね。もう二度とわたしたちに心配をかけるような行動は自重してくださいね。約束ですよ。弥彦」

夕乃は優しく微笑み弥彦の目を見つめて言った。

「約束するよ。夕乃お姉ちゃん」

弥彦は夕乃の言葉に頷くと夕乃はゆっくりと離れる。そして二人の会話を聞いていた真九郎が弥彦に話かけた。

「俺からも弥彦に約束をお願いしようかな。今回は紅香さんが弥彦を助けてくれたようだけど、もしまたなにかトラブルがあったら今度からは俺に言ってくれ、最優先で引き受けるよ。弥彦は弟みたいなもんだからな、ひとりで危険な橋を渡ろうとしないでくれな。約束だぞ」

そういうと真九郎は片手を差し出し小指を立てる。弥彦も真九郎のように小指を差し出し指を絡めると「指きりげんまん嘔吐いたら針千本のーます。指きった」と指きりのお決まりのフレーズをふた

りで口ずさみ約束を交わす。

そしてふと弥彦はあることを思い出した。約束、確か俺は事件に巻き込まれる前に奉莉と約束をしたはずだ。今日はいつだ？

「真九郎さん。今日の日付、わかりますか？」

「日付？今日は確か8月17日の土曜日だったはずだけど、どうかしたのか？」

弥彦は病室に設置された壁時計に目をやる。時刻はちょうど十二時を過ぎた頃だった。今からここを出れば間に合うだろうか。

「友達が空手の全国大会に出場するんでその応援を頼まれていたのを今の今まで忘れていて。まさかそれを思い出したのが大会当日だったとは…参ったな」

弥彦は右手で頭を掻きながら自分の不甲斐無さに呆れた。

奉莉に応援する、と約束したてまえその自分が病院のベッドで寝ていては彼女にあわす顔が無い。それに奉莉はやけに念をおして俺が応援にくることを言っていたからな、これで行かなければあとが怖い。

弥彦が困っているところをみて夕乃が声をかけた。

「そのことでしたら先週、弥彦が町道場の稽古を休んだのを心配した奉莉ちゃんから連絡があって、弥彦が入院中だと伝えたら『大会の応援は来なくていいわよ』と伝えてほしいと言伝を頼まれていますよ」

応援に来なくていいか…、奉莉の言葉どおり応援に行かずに今日は安静にしてベッドで休むべきだろうか。だが、約束はちゃんと守りたい。幸運にも大会当日に目が覚めたのだから。弥彦が黙り込んで

いるのを心配した真九郎はひとつの提案をした。

「さすがに弥彦が入院中じゃあ応援を頼めないよな。時間はお昼を過ぎた頃だし、そろそろ上位の選手がだいたい決まった頃なんじゃないかな。弥彦の友達がそれに残ってれば応援に間に合うかもな、今からここを出発すれば。弥彦はどうしたい？」

真九郎の提案に弥彦は迷うことなく即答した。

「応援に行きたいです」

「なら決まりだ。俺が連れて行ってやる」

真九郎の頼もしい言葉に弥彦は礼を言ってから腕に刺さった点滴針を抜きベットから起き上がり病室の床に素足を下ろす。ベットに腰を落ち着かせた状態から立ち上がるうとするが体がふらつきバランスがとれずにそのままベットに倒れこんだ。

「無茶ですよ、弥彦。まだあなたの体は本調子ではないんです。友達の応援は諦めてベットの上で安静にして下さい。真九郎さんも弥彦のことはいいですから」

夕乃が弥彦を制止して真九郎に断りをいれる。だが、真九郎は夕乃の言葉を無視して弥彦を背負う。

「夕乃さん。ここは弥彦の願いどおり連れて行ってやるのがいいはずです。大丈夫、俺が責任を持って送り届けますし、ちゃんと無事にここに戻ってきます」

「大丈夫だよ。夕乃お姉ちゃん。ちょっとふらつくだけだから」

真九郎に背負われながら弥彦は夕乃に自分は大丈夫だと友達の応援

に行きたいと訴えた。

弥彦の願いに夕乃は考え込むと二人を見据えて言った。

「……真九郎さん、弥彦のことお任せします。くれぐれも無茶をしないようにお願いします。もちろん、弥彦。あなたもですよ」

夕乃の許可が出た。弥彦と真九郎は夕乃の言葉に頷くと『いつてきます』とあいさつをして病室を出て行った。

弥彦は真九郎に背負われながら電車とタクシーを乗り継ぎ、『全日本空手道選手権大会会場』と書かれた立て看板が目印に入り口に掲げられたとても広い大会会場に到着した。

会場入り口の窓口で小学生の部がまだ試合中であることを確認するとさっそく会場に入ろうとしたが受付嬢に止められた。会場内は土足禁止であると言われスリッパを二人分手渡された。そして弥彦の姿勢好に「君、もしかして入院中だったの？」と受付嬢が質問をした。その質問に弥彦は「そうですよ、抜け出してきちゃいました」と笑顔で返事を返した。

そういえばここまで真九郎に背負われて来たが、改めて自分の格好を確認すると左腕にはギブスと包帯、服装は子供らしい柄の入ったパジャマ。そして素足にスリッパ装備ときた。これは目立つな、と苦笑して真九郎の背中から降りると会場内に足を踏み入れた。

「結構人が多いな。迷子にならないように気をつけるよ弥彦。ある意味これはお前の護衛の依頼みたいなものだしな」

「護衛ですか？そうですね、姉に俺のことを任されていますもんね真九郎さんは。よろしく頼みます」

「ああ、まかせろ。どんな奴からだって守ってやるさ」

そんな冗談交じりの会話に二人は笑う。

真九郎と手を繋ぎながら会場内を歩いていると見覚えのある人物を発見した。その人物はこちらに気がつくと手を大きく振り陽気な声でふたりの名前を呼んだ。

「おい、真九郎くん。弥彦くん。こっちこっち」

ふたりの名前を呼んだのは武藤環。弥彦の通う町道場の師範であると同時に真九郎の住まう五月雨壮、6号室の住人。意外な人物がいることに真九郎が驚き、環に尋ねた。

「環さんはどうしてここに？」

「うちの道場の練習生がこの大会に出場してんのよ。だからあたしはその応援。どうだ、すごいだろ！」

腰に手を当て胸を張り自慢げに環は言った。

「すごいのは環さんじゃなくて練習生の子達じゃないですか。もしかして弥彦が通っている町道場の師範って……」

「環さんですよ。あれ？真九郎さんには言ってますでしたっけ？」

真九郎の疑問に弥彦が答えた。

「聞いてなかったな。環さんが町道場で師範をしていたのは知ってはいたけどね」

「そうなんですか、と弥彦が相槌をうつと環が弥彦に話かける。

「弥彦くんが入院してる、て奉莉ちゃんから聞いて心配してたんだけど元気そうだね。その格好から察するに真九郎くんが弥彦くんを病院から連れ出して来たのかな？」

と言った後に「いけないんだー」「いいんです」「夕乃ちゃんが怒るよー」「許可貰いました」と真九郎との会話の受け答えがあったがそれに弥彦が割り込む。

「俺が真九郎さんに頼んでここまで運んできて貰いました。それよ
り、奉莉たちの試合の状況を教えてくれませんか？」

「奉莉ちゃんたち？あの子達なら順調に勝ち進んでるよ。うちで自慢の子達だからね。もうすぐ光ちゃんの試合が始まる頃かな。ほら、あそこで」

環は会場の中央を指で指し示し、弥彦は指先に視線をやるとそこには光が試合の対戦相手と対峙している姿があった。すぐ近くの向かい側の観覧席には道場の練習生たちとそれに混じって奉莉と円の姿も見える。

「俺も向こうの観覧席にいつて光ちゃんを応援してきます。いいですよね、真九郎さん？」

「ああ、いつておいで。俺はここで環さんと居るからさ」「いつてきます」

真九郎の許可を貰い向かい側の観覧席を目指して走る。スリッパが脱げそうになって邪魔なので素足になって走った。一分もしないうちに向かい側の観覧席に到着。弥彦が居ることと病院から直帰の格好に驚いた同門の練習生たちにあいさつをしながら弥彦は一番前の席に座る比較的仲の良い練習生の子に席を譲ってもらった。その子にありがとう、と礼を言い座る。突然の弥彦の来訪に奉莉と円、そして弥彦の見知らぬ少女が驚く。

「よう。久しぶりだな、元気してたか」

なにくわぬ顔であいさつして登場した弥彦に三者三様の返事が返ってきた。

「あんだ、なんでここにいのよ！」

「奉莉との約束を守ってくれたのね」

「どちらさまでしょうか？」

上から奉莉、円、見知らぬ少女だ。まずは自己紹介からかな、と思ったので弥彦は見知らぬ少女に自己紹介を始めた。

「はじめまして、俺の名前は崩月弥彦。ここで光ちゃんの応援をしているみんなと同じ同門の練習生だ。よろしく」

「あ、あの、わたしの名前は堕花雨といいます」

「堕花？てことは光ちゃんのお姉ちゃんか。光ちゃんの話で聞いた自慢のお姉ちゃんはお姉ちゃんのことだったのか。なるほどね」

活発的な光とは対照的に雨は物静かそうな少女だった。前髪が少々伸びているせいか彼女の瞳は髪が時折揺れるときの隙間でしか見えない。だが光と同じようにこの子も美少女のように思える。邪魔な前髪を逸らして彼女の素顔を一度見てみたいがその機会は今度お願いしよう。弥彦の反応に雨は首を傾げると「自慢？」と呟いた。

弥彦と雨がお互いに紹介が終わったのを見計らって奉莉が弥彦に話しかける。

「自己紹介はそのへんでいいかしら。さっきのわたしの質問に答えてもらおうよ」

「その話はあとでな、今は光ちゃんの応援中だろ？」

そうだったわね、と奉莉は視線を弥彦から試合中の光に移した。

その後、練習生みんなの応援と姉である雨が応援あつてか、いつもの稽古以上により動きをみせた光に軍配が上がり、光は試合に勝利した。試合が終わった後聞かされた話ではあるがなんとこの試合は三位決定戦だったようで光の試合はこれで終わりだそうだ。

それを聞いた弥彦は奉莉と円はどうしたのかと本人たちに訊くとまもなく決勝戦の試合で対戦すると聞かされて驚いた。あのときの話は本当だったらしい。彼女たちは全国で敵無し状態なのだと改めて思い知らされた。試合から帰ってきた光が弥彦のいることに驚き慌てふためいたが、ちょうどいい機会だったので練習生たちと奉莉たちそれに雨を含めた皆の前で弥彦は自分が入院した経緯とここに来た理由を話した。もちろん、悪宇商会などの裏社会のことは伏せて作り話ではあつたが皆疑問には思わず弥彦の話信じた。

本日の試合はいよいよ終盤。

全日本空手道選手権大会小学生女子の部決勝戦。天王寺奉莉 対 円堂円の試合が始まった。

弥彦はどちらを応援するべきか迷い、ただ二人の試合のいく未を見つめた。二人とも決勝戦という大舞台のなか、多くの観客が二人の試合に注目をしているのに緊張した素振りをみせずに堂々とした態度で組み手をしている。道場の稽古で奉莉と円が組み手をしているのを観たことがなかった弥彦は冷静に二人の試合を観察し分析した。若干ではあるがやはり円のほうが奉莉より強い。さすがは『円堂』といったところか。円に押され気味ではあるが一進一退の攻防で円と張り合う奉莉はたいしたものだ。だが、このままでは奉莉は勝てない。奉莉は円に対しては決定打に欠ける。だから退いては駄目だ、攻めて自ら円に隙を作らせるんだ。

「退くな！攻めろ！攻めるんだ、奉莉っ！」

静まり返った場内に弥彦の激励が木霊した。周囲にいた観客は皆、

弥彦を見たがそんなことは気にしない。弥彦はただ奉莉ひとりに視線を留める。弥彦の言葉を信じたのか、先ほどまで一進一退の攻防だった試合は奉莉が攻めだしたことで状況が一変した。

円に隙が出来たのだ。今しかない、決めるんだ奉莉、と弥彦が奉莉に思念を送る。その瞬間、奉莉の上段蹴りが円の側頭部にクリーンヒット。円が蹴り飛ばされ床に膝を着いた。

『一本！勝者、天王寺奉莉！』

主審の宣言と共に場内は大歓声と拍手喝采。決勝戦を戦い抜いたふたりを称えるように拍手が鳴り止まない。弥彦も二人を称え拍手をした。

決勝戦が終わり表彰式と閉会式を観客席からみていた弥彦はとても複雑な気持ちだった。自分がいるべきところは奉莉たちがいるところなのに俺は裏の世界の住人。表の世界の彼女たちは自分には眩し過ぎる、そしてとてつもない疎外感が弥彦を襲った。

空手衣から私服に着替えた奉莉たちを練習生たちと環そして雨と弥彦と真九郎が迎えた。

『優勝おめでとう』 『円ちゃんは惜しかったね』 『光ちゃんおめでとう』

練習生たちにもみくちやにされながら嬉しそうにする三人娘たちをすこし離れたところで弥彦は優しく微笑みながら眺めた。俺はあそこには入れない、入るべきではない。

「帰りましょう。真九郎さん」

「えっ？いいのか、弥彦は彼女たちと話さなくて」

「いいんですよ。俺は特に何もしてませんしね。彼女たちは自分の力でまわりに認められた。それだけがわかれば俺はいいんです」

「弥彦がいいなら帰ろうか。ほら背中に乗って」

すみません真九郎さん、と一言礼を言ってもそもそも弥彦は真九郎の背中に乗った。

帰ろうと真九郎が歩きだしたとき、環が呼び止めた。

「ちよつとー待ってよー。ふらりと先に帰らないでよ、まったく、もう」

「すみません環さん。で、用件は」

「あたしたちが乗ってきた貸しきりのマイクロバスと一緒に帰りましょう、ていうお誘いだよ。席もちょうど二席空いてるし、どうかなって。うちの子たちも喜ぶしさ。ねえ、いいアイデアでしょう？真九郎くんも弥彦くんも乗っていいこうよ」

環に提案に真九郎と弥彦はお互いに顔を見合わせ頷いた。

『よろしくお願いします』

「やったー。決まりだね。そんじゃあ、二名様ご案内しまーす！」

まるでバスガイドのような振る舞いで二人を駐車場に停車しているバスに案内する環。

既にバスの中には練習生たちが座っており、真九郎と弥彦が環と一緒に乗車してきたことになぜか喜んだ。その喜び具合に心配になった真九郎は環に尋ねた。

「あの、環さん。子供達がすごい喜んでいますが、これはいったい……」

「それはねー。これのせいだー！」

じゃーん、という効果音と共に真九郎に手渡されたチラシ。そのチラシを弥彦も背負われながらではあるが首を伸ばし覗き見る。

「なにになに…、時間無制限の飲み放題食べ放題のバイクングがなんとお一人様500円。お子様はお一人100円。（団体様のみ）」

「……は？」

弥彦がチラシの内容を読み上げ、真九郎が目が点となった。なんて良心的な値段の店なんだろうか。しかしよく見れば団体様の人数がちよつと真九郎と弥彦の二人とバスに乗車している子供達と環で規定を満たしている。まさか…。

「奉莉ちゃんたちの祝勝会を兼ねて、ごちになりまーす。真九郎くん！」

『ごちになりまーす！』

「えっ？俺？」

自分の身に何が起こっているのかわからずにいる真九郎をよそに弥彦はバス内の最後尾の五人掛け席にいる奉莉と視線が合った。その視線はこっちにこい、と言いたげだ。

「真九郎さん、降りますね」

「ああ、気をつけてな。……財布の中、大丈夫かな。はあ」

真九郎の深いため息と共に紅家の財政の難しさを漂わせる言葉が聞こえたような気がしたが弥彦は聞こえないフリをして真九郎の背中から降りるとバスの最後尾に移動する。そこに座っていたのは今回の立役者である奉莉、円、光そして、光の姉である雨だった。なんだこの席は、女子しかいないと理解した途端に弥彦は踵を返し、他に空いている席が無いか確認しようとしたがパジャマの首根っこを奉莉に引っ張られ「グエっ」と情けない声を出して弥彦は席の中央に座らされた。

左の窓際の席から円、奉莉、俺、雨、光の順番だ。こんな女子しかいないバスの座席に座るのは生まれてこのかた初めての経験だ。もちろん、生まれ変わる前も同様に。額に嫌な汗が流れる。バスがゆっくりと動き出した。それを合図に奉莉が口を開いた。

「あんだ、なんでわたしたちに一言も言わないで帰ろうとしたのよ。普通はおめでとつの一言ぐらい言ってもいいんじゃないかしら？」
「おめでとつ」

即答で返事を返した弥彦に怒っているのか奉莉の額がびくびくと小刻みに動く。

「いや、いまのは軽い冗談だって。流してくれ。おほん、では改めて。まずは光ちゃん」
「はいっ！」

急に自分の名前を呼ばれた光はその場で立ち上がった。その様子にバス内に笑い声が漏れる。姉である雨も光の行動に可笑しそうに笑う。光は顔を真っ赤にして席に座ると恥ずかしそうにそわそわして俯いた。

「相変わらず元気だな、光ちゃんは。三位入賞おめでとつ。お姉ちゃんの前でよく緊張せずに今までの稽古以上の動きで頑張ったな。そのことは賞賛に値する。すごかったよ。堕花さんも身内が頑張っている姿を見るのはいいものだったと思う。あとで光ちゃんを褒めてあげてほしい」
「あ、あ、ありがとうございます。弥彦先輩」

あ、囁んだな。光ちゃん。弥彦の言葉に雨は頷くと

「そうですね。光ちゃん、頑張っている姿はとてカッコよかったですよ。わたし、光ちゃんがこんなに頑張っているなんて思っていませんでした。大好きですよ、光ちゃん」

あう、とまた恥ずかしそうに俯く光を微笑ましく弥彦は眺めると視線を円に移した。

円も弥彦の視線に目を合わせてこちらを向いた。

「次は円かな。準優勝おめでとう、円。さすがは円堂円と言いたいような決勝戦での一進一退の攻防。奉莉の攻撃を途中まで寄せ付けずまるで舞踊を想わせるような動きだった。俺もつかつかしている」と円に追い越されそうだな、と今回の決勝戦を観ていて改めて思い知らされた。本当におめでとう」

「ありがとう」

そういうと円は視線を窓の方へ向けて黙った。たった一言の返事ではあつたがきつと喜んでくれているのだろう。そして今度は隣に座る奉莉に視線を合わせる。奉莉も弥彦の目を見る。

「最期だ。優勝おめでとう、奉莉。今回が初優勝なんだってな、すごいじゃないか。円との決勝戦、大したものだったよ。途中からの怒涛の連撃、あれは俺でも防ぎきれない自信はないな。自分のことを俺の前で武人と称していたが試合中の奉莉はまさに武人そのものだったよ。おまえの新たな一面を見たような気がする。見惚れたよ、試合中はね。その調子で勝った兜の緒を締めてまた優勝を目指して頑張っしてほしい。以上だ。優勝本当におめでとう」

弥彦の言葉に奉莉は瞳に涙を浮かべて震える唇で少し嗚咽交じりに言った。

「わたしが円に勝って優勝できたのは弥彦の応援があったからよ。試合の途中でわたしに弥彦が攻める、て大きな声で言ってくれた時、本当に心強かったし嬉しかった。あんな応援をされたら負けるもんか、て。絶対勝ってやる、て思うことが出来た。お礼を言わせてちょうだい。ありがとつ、弥彦」

奉莉の言葉に弥彦は照れて右手で頬を掻いた。

「やめろつて。恥ずかしいな。奉莉と約束しただろ？ 応援をしてやるつて。俺はただ約束を守っただけだ。その結果、奉莉が優勝したんだ。この優勝は奉莉自身の力だよ、誇っていい」

そつだろ？ と奉莉に笑みを見せながら弥彦は言った。奉莉は弥彦の言葉に「うんっ！」と頷くと子供らしい無邪気な笑みを見せた。そして環がバスの先頭部の席から立ち上がるところ言った。

「今日は奉莉ちゃんたちの祝勝会の予定だったけど変更します！」「えー！ー！！！」

「祝勝会改め、『奉莉ちゃんと弥彦くんのカップル誕生おめでとう！ これからも末永くお幸せに会』に変更します！」

『さんせー！ーい！！！！』

「ちよつと待て！ おまえらも『さんせーい』じゃなくて反対しろよ！ 奉莉以外に入賞した円と光ちゃんがいるんだぞ」

弥彦は立ち上がり、円と光。首を左右に振りふたりを見た。

「あたしは構いませんよ、弥彦先輩」

「わたしも環さんの提案に賛成」

まさかの両者の合意に弥彦はがっくりと肩を落とした。そして隣に

いる奉莉に言った。

「奉莉は嫌だよな。こんな両者の合意のない環さん主催の会は」

「えっ？その、えっと…わたしは別に反対はしないけど…」

こんな恥ずかしそうにする奉莉の姿を見るのは初めてだ。誰か反対してくれる人はいないのか？

「あ、えっと、わたしも環さんに賛成です」

弥彦の願いも空しく雨にまで合意されてしまった。残った人物はただひとり。

「真九郎さん！もちろん反対ですよ。俺、早く病院に帰らないと夕乃お姉ちゃんになんて言われるか……」

「諦めろ、弥彦。環さんはこういう人だから一度言い出したことはやめない。それにいいじゃないか、青春でさ」

「そんな、バカなー」

疲れた弥彦は席に着き腰を落ち着けると天井を仰いだ。

隣には恥ずかしそうに俯く奉莉。それを見て囁きたてる練習生の子供達。たぶん世界で一番賑やかな客を乗せたバスはバイキング会場へと向かう。きっとその会場も世界で一番賑やかになるのだろう。

その賑やかな会場の主役はきつと俺と奉莉。

しばらくはこの茶番に付き合おうとしよう、と弥彦は愉快で賑やかなバスの揺れに身を任せた。

第十七話 ある男は敗北し気づく（後書き）

如何でしたでしょうか？

切彦と戦闘していたらいつの間にか奉莉とカップルになっていた、という訳のわからない展開に作者も頭を悩ませました。

原作キャラクターに新たな人物が登場。その名は墮花雨。電波的な彼女の登場人物なのでそろそろ出演していただきたいなと思いついてもらいました。

あまりしゃべりませんでした。私は雪姫の次に雨が大好きです。更新のペースがどんどん落ちてきていますが、そこはご了承ください。けると助かります。

ご感想やご意見をお待ちしています。

第十八話 ある男の帰宅（前書き）

相変わらずの駄文ですが、ご愛読のほどをお願いいたします
ご感想お待ちしております

第十八話 ある男の帰宅

弥彦は病室のベットのの上にいた。

昨夜は武藤環主催の『奉莉ちゃんと弥彦くんのカップル誕生おめでとう！これからも末永くお幸せに会』という題目兼、空手大会で好成績を残した奉莉たちの祝勝会が行われた後、弥彦たちが病院に戻ってきたのは真夜中をとうに過ぎた時刻だった。

お互いに疲れた様子の真九郎と弥彦の二人が病室に戻ってみればそこには微笑んだ夕乃がひとりでいた。

「こんな時刻までなにをしていたのですか？」と夕乃に問い詰められ弥彦は「環さんが…」と説明をすると「また、あの方ですか…」と妙に納得したように夕乃は理解はしたが、その話とは別に子供がこんな時刻まで夜遊びするのは感心しないと真九郎と弥彦の二人は冷たい床に正座させられ夕乃の説教を聞かされた。

そんなことが昨夜あったせいかわかりませんが弥彦は心身共に不調で今日大人しくベットの上で安静にしていようと思っていたのだが、そこへ法泉が見舞いにやってきた。

「お祖父ちゃん……」

「元氣そうだな、弥彦。安心したぞ」

法泉は弥彦に労いの言葉を一言二言伝えてから病室に備え付けられた椅子に座った。

弥彦はベットから上半身を起こし法泉と話しやすいように腰を落ち着ける。

弥彦は法泉に色々伝えたい事があつたがうまく頭の中で整理出来ずに黙ってしまう。

そんな弥彦の様子に法泉は目を細めると厳格な雰囲気を見せて言

った。

「《斬島》と殺り合ったみてえだが、殺り合ってみておめえは何をどう思った」

法泉の質問に弥彦は考え込む。

切彦との死闘を経験した弥彦はあの地獄のような、自分の命が首の皮一枚で繋がっているような決闘を思い出す。今でも背筋が凍るような思いだ。弥彦は切彦に切断された左腕を右手で擦ると法泉を見据えてゆっくりと口を開いた。

「……完敗ですかね。自分の実力の浅はかさと裏世界のプロの殺し屋に対する恐怖心。他にもいろいろとありますが俺はまだあの域に達していない」

弥彦の答えを聞き「ふむ」と法泉は考えると弥彦を見据える。

「おめえが殺り合った相手は特別だな。《斬島》であり『切彦』を名乗るなら、紛れもなくおめえと同じ本家の直系だろうな。紅香の助けがあったとはいえ片腕だけの被害で済んだのは初めてのプロの殺し屋との実戦の戦績としてはまあまあだな」

「……まあまあですか」

法泉の批評に弥彦はその評価基準がいまいち理解できないので「まあまあ」という基準に喜べばいいのか、悲しむべきなのか判断がつかなかった。

《斬島》の本家相手に善戦ではなく、手も足も出ない遊びにもならなかった決闘を「まあまあ」と判断するのは過大評価もいいところだ。

今度切彦とまた闘うことがあったら果たして自分はいいつに勝てるのか、いや、生き残ることができるのだろうか。

「そう、落ち込むことはねえよ。《斬島》なんて大したことはねえ。おめえは俺の自慢の孫だ。俺よりも伸びるだろうさ」

わっはっは、と弥彦が落ち込んでいるのを一蹴するように法泉は笑った。

あの斬島を大したことはないと笑い飛ばす法泉が弥彦にはとても大きな存在にみえた。

俺もこの人のように強くなれる日があるのだろうか。強い人物といえど弥彦を切彦から助けにくれた人物を法泉に訊くのを忘れていたのでこの機会に訊こうと弥彦は法泉に訊いた。

「お祖父ちゃんが俺に護衛として送ってくれた人って、あの『柔沢紅香』だよ。どうして俺の護衛を紅香さんに依頼したの？」

切彦から弥彦を救ってくれた人物それは『柔沢紅香』。

裏世界で超一流の揉め事処理屋として名を馳せ、紅真九郎が目標とする人物。

ずいぶん前に紅香のことを真九郎から話では聞いていたのだが弥彦はそれを忘れていた。そして昨夜の祝勝会で再び真九郎に訊き紅香のことを思い出したのだ。

法泉は弥彦の質問に一瞬ではあるが眉を顰めたが「ああ、紅香のことか」と一言おくと

「おめえはどうせ無茶をしでかすだろうと思ってな。おめえの命が本当にやばいと思ったなら力づくでも連れて帰ってこいと紅香に依頼したんだよ。あいつとおめえをなるべく関わらせるもんじゃねえとは考えてはいたんだが、孫の命には代えられねえからな」

そうだったのか、と弥彦は法泉の話聞き入る。

その後も法泉の話を聞くと切彦は死んでおらず紅香の前から姿を消したそうだとか、悪宇商会との事後処理は紅香がけりをつけたとか、弥彦の尻ぬぐいを紅香が肩代わりしてくれたことなどを話された。

弥彦の命を助けてくれただけに留まらずに事後処理までしてくれるとは、さすがは柔沢紅香。超一流の揉め事処理屋がなせる所業か、と弥彦が思いきや法泉は弥彦の護衛以外の依頼は紅香にしていなないと弥彦に伝えた。それを聞いた弥彦は驚いた。

何故、紅香は法泉の依頼以上の働きをしたのかは法泉にも分からないうこと。「おめえ、紅香となにかあつたんじゃねえのか」と法泉が弥彦に尋ねたが弥彦本人も紅香がそこまでして弥彦に肩入れする理由は思いつかなかった。「わかりません」としか答えることができなかった。

その後、弥彦との話を終えた法泉は席を立つと弥彦に言った。

「明日で退院できるように手続きをしないと。その程度の怪我なら動けるだろうからな。左腕の感覚を早いうちに取り戻してみせろ。おめえなら朝飯前だ」

法泉の言葉に弥彦は顔をしかめる。その程度の怪我は朝飯前か、無茶を言ってくれる。だが、法泉が言うことは間違うことはないし、弥彦にとって絶対の命令だ。それに自分でも出来る気がしてならない。

「やってみます」

弥彦はただ一言。肯定の意味をこめて法泉に言うと法泉は「明日、迎えに来る。じゃあな」と弥彦に別れのあいさつをして病室から退出した。法泉と入れ違いになるように看護婦の東西南がやってくる

と「リハビリの時間ですよー」とにこやかに弥彦に言う。弥彦はその言葉に頷き、南の指示に従い左腕のリハビリを開始した。

ギブスと包帯で固定された左腕をその束縛から解放する。

最初に弥彦の目に付いたのは左肘にある痛々しい縫い傷痕。これは愚かな自分が招いた闘いの痕。今後はこの傷痕を見るたびにあの切彦との闘いを思い出すのだろうか。弥彦は右手の指先で傷痕を撫でるように擦ると大きく深呼吸をして意識を集中させ神経を左腕に集める。ゆっくりと指一本一本に神経を張り詰めらせ音楽のリズムを刻むように指を動かしてみせた。

「すごーい！もうこんなに動かせるなんて信じられなーい！」

東西南は弥彦が軽快に動かす指を見て驚いた表情を見せた。

弥彦はそんな南の様子に苦笑すると指先以外にも左腕の調子をひとつひとつ確認するかのようには動かす。一通りの動作を確認してから弥彦は大きく息を吐くと額に流れる汗をパジャマの袖で拭う。

「驚いたわー。君がこんなにも早くに回復するなんて、未だに信じられないけどね。その調子ならもうギブスはいらさないわね。あとで先生に診察をお願いして、詳しい診断は先生に任せましょうか」

「お願いします」

そんな会話の後、他愛のない世間話をしながら南の腕のマッサージを弥彦は心地よく受け筋肉をほぐし、最初で最期のリハビリの時間は終わった。その後、時刻はお昼となり病室に運ばれてきた昼食である病院食をひとりでもそもそと食べていた弥彦に来客があった。来客の姿を確認した弥彦は笑顔で病室に来客を迎え入れると昼食の箸を止める。

「こんにちは。弥彦先輩」

「こんにちは。弥彦くん」

弥彦への来客は堕花姉妹。雨と光の仲良し姉妹だ。昨夜の祝勝会以来の早い再会に弥彦は嬉しく思う。雨とは昨日の試合会場での出会いが初対面だったので、その後にあった祝勝会で光から聞かされていた雨の話を交えながら談笑し仲良くなり、お互いに名前で呼ぶことに了承した。

「いらっしやい。何もないとこるけど、ゆっくりしていつてくれ」

お邪魔します、と二人は律儀にあいさつを言う。椅子に腰掛けた。そんな二人の様子に弥彦は「よくできた子達だな」と内心でごちると、昨日真九郎から見舞いの品として頂いたフルーツ盛りのあまりではあるが林檎が残っていたのを思い出し籠からひとつ取り出すと見舞いに来てくれた二人に振舞おうと果物ナイフで林檎の皮を剥こうとしたが光に止められた。

「あたしがやりますよ。先輩は左腕を怪我していますし、片手では危ないですから」

「光ちゃんが？心遣いは嬉しいが、このとおり左腕は動くし、ナイフで指先を切るようなことがあるから危ないよ？」

弥彦は左腕を二人の前で動かし回復したことを見せると光の提案をやんわりと断る。

「大丈夫です！あたし、お母さんのお料理をよく手伝うんで林檎の

皮むきくらい余裕で出来ます」

「光ちゃんに任せてもらえないでしょうか、弥彦くん。光ちゃんの言っていることは本当ですから」

自信満々に胸を張り、自分に任せると言う光。そして光にやらせて欲しいと頼む、雨。

二人の言葉に弥彦は迷ったが「じゃあ、まかせるよ」と光に林檎と果物ナイフを手渡した。

弥彦から受け取った林檎を果物ナイフで器用に切り分けていく光に弥彦は目を見張る。そして小皿の上には見事なウサギを模った林檎が載せられた。

「器用なもんだなー。すごいな、光ちゃん。よく出来るね」

弥彦に褒められた光はえへへ、と嬉しそうに笑うと小皿を手に取り弥彦に差し出した。

「どうぞ、食べてください。先輩の為に切ったんですから、一番最初に先輩に食べて貰いたいです」

嬉しいことを言ってくれるな、光ちゃんは…。

弥彦は小皿から可愛らしいウサギを模った林檎を手にとると「いただきます」と一言、光に言ってから口に林檎を入れる。

「うん、おいしいよ。ありがとね、光ちゃん。せっかくだからふたりも林檎食べなよ。おいしいよ」

「どういたしまして。お姉ちゃんも食べよ」

「うん。いただきます」

三人で切り分けられた林檎をしゃりしゃりと食べ分けた。

林檎を食べ終えた後は堕花姉妹には悪いが弥彦は昼食の途中だったので食事をしながらその後の他愛のない会話に交じらせてもらった。やはり食事はひとりで食べるのは味気ない。気の許せる家族や友人と会話を交えながら食べるほうが何倍にも美味しく感じられる。

三人の会話から堕花姉妹はこれから家族で光の入賞祝いに外食に出かけるらしく、大事な家族団欒の約束があるなか、ご両親に頼んで弥彦の見舞いにきてくれたことを聞かされた弥彦は堕花姉妹に心から感謝し、頭を下げた。

「そんなこととはつい知らず、見舞いに来てくれたとは。本当にありがとう。俺のことはいいから家族で食事を楽しんできてくれ。外でご両親が待っているんだろ？」

「そうですけど、気にしないでください。あたしたちが好きで来たわけですし、先輩が気に病むことではないですよ」

光は当然のことだと弥彦に言うが、弥彦はそれはいけないと促す。

「そうは言ってもだな。俺は明日には退院するし、このとおり元気だ。家族の時間を割くのはこれくらいにして今日はもう帰ったほうがいい」

二人が見舞いに来てくれたことは素直に嬉しい。だが、家族との予定があるならそちらを優先するべきだと思う。弥彦の心情を察してか雨が動きだした。

「わかりました。行きましよう、光ちゃん」

「お、お姉ちゃん。ちょっと待ってよー」

そういうと雨は立ち上がり、光の手と自分の手を繋ぐと光を引つ張るよう病室の出入り口に向かつて歩きだした。

雨は出入り口前で立ち止り、振りかえると弥彦に一礼。

「さようなら、弥彦くん。お体はお大事にしてください」

淡々とした無機質な口調で弥彦に別れのあいさつを言った。彼女の長い前髪のせいで、瞳は見えなかったが少し雨の様子がおかしいのは弥彦と光には理解できた。

「さよならー弥彦先輩。また道場で会いましょうねー」

雨にずると引かれながら光は手を振り病室から出ていく姿を弥彦は黙って見送った。

静まり返った病室にひとり残された弥彦はベットに横になると天井を見上げ、思いに耽る。雨の様子が少し変だったのは彼女たちの善意を弥彦が蔑ろにして帰ることを促したことを怒っていたからなのだろうか。それともあれは弥彦の勘違いの見間違いののだろうか。

考えれば考えるほどよく分からなくなる。雨との付き合いはまだ二日という短い期間だ。ただの俺の勘違いだといいいのだが、と弥彦が思いをめぐらせていると山浦と東西南が弥彦の病室を訪れた。南が昼前の弥彦の願いどおりに山浦に診察をお願いしてくれたようだ。山浦は弥彦の左腕を診察すると南の時のように驚いた。

「たまげた体だな。たったの一週間寝込んでいただけで腕の神経がくつつきやがった。なに食ったらこんな体になる。リハビリの必要

がなさそうだが、一応錠剤の薬と薬品を塗りこんだ湿布を明日の退院の際におまえに持たせよう。……どうした、暗い顔してなんか悩み事か？」

弥彦の顔色が優れないことに気がついた山浦は弥彦に診察のついでとばかりに尋ねた。

「あー。なんていうか……」

曖昧な返事を返す弥彦に山浦は目を細めると

「おれはカウンセラーじゃないからな。悩み事なら隣にいる南に相談しな」

山浦の隣でカルテを書いている南を山浦は顎を引いてくいくいと動かして示した。

「なにににー。お姉さんに相談？」

自分の名前を呼ばれた南は弥彦に顔を近づけると興味深そうに言った。

「顔が近いですって！東西さん！悩みってほどのことじゃないんですいいです」

「堅苦つしいなー。南お姉さんでいいよ。ほらほらー、お姉さんに相談してみな。青少年の悩みぐらいはぱっと解決しちゃうからさ」

なんでも面白おかしくしようとする南の様子に武藤環に近いものを弥彦は感じた。どっちかというと俺の方が精神年齢では南より年齢

が高い気がするが、そこは置いておいて自称お姉さんに弥彦は相談してみようと思った。

「実はですね……」

弥彦の話をふむふむと真剣な眼差しで聞き、話を聞き終えた南は一変して大笑い。南の様子に弥彦は相談する相手を間違えたかな、と思った。

「君はさ、その子のが好きなの？」

唐突な南の質問に弥彦は「えっ？」と聞き返してしまったが南の表情は真剣だ。

百面相のようになると表情が変わる南。弥彦は南に問われた質問の意味を確認する。

「南さんのいう『好き』ていうのはlikeですか、loveですか」

「もちろん。loveよ」

即答で返事を返された。

俺は墮花雨のことをそういつた目線では見てはいない。友達として自分は見ているつもりだ。会ったばかりの人間を愛していると思えるほど自分はロマンチックな男ではない。

「……likeの方です。友達として雨のことは好きですよ」

「なら話は簡単よ。気になるなら本人に直接訊けばいいのよ」

なんだよ、それは。がくつと弥彦は力が抜けた気がした。なんていうか一番当たり前の回答だと思う。本人に直接訊けばこの悩みは晴れる。当たり前だ。

ふと弥彦は違う答えを言ったらどう南が答えるつもりだったのか気になった。

「あの、もし俺がloveの方だったらなんていうつもりだったんですか」

「えー。ひ・み・つ」

人差し指を唇の前で立て、いたずらっぽい笑みを浮かべジェスチャーを交えながら弥彦に南は言った。南の様子に弥彦は落胆と溜息。

なんなんだろうか、この人は。俺をおちよくっているのか、俺が一喜一憂する反応を楽しんでいるのか。どっちなんだろうか。

弥彦は「もういいです」と南に言うところの話は終了。ふたりのやりとりを見ていた山浦は苦笑すると弥彦に「まあ、がんばりな」と言い弥彦の肩をぽんと叩き南を連れて病室から退出した。

雨のことは気になるが今度会ったときにも訊けばいいこと、きっと些細なことか自分の勘違いに違いない。弥彦はそう自己完結させることで考えをまとめ、おもむろにテレビの電源を入れると小さな画面に映る娯楽にいつときの時間を忘れるのだった。

翌日の早朝、昨日の約束どおり法泉が弥彦を迎えに来た。

弥彦は荷物をまとめ病室から退出すると自分を治療してくれた山浦と南にお礼のあいさつをしてから病院をあとにした。タクシーに乗り崩月の屋敷前まで移動。法泉と共に屋敷の門を潜ると玄関先では冥理と夕乃、そして散鶴がふたりの帰りを迎えてくれた。

約二週間ぶりに帰ってきた息子を冥理は抱き上げると瞳に涙を浮かべて喜んだ。

弥彦は冥理の様子を黙ってみていたが自分が仕出かしたことの大きさを改めて思い知らされた。母親がこんなにも心配して息子の帰りを待っていたのだ。これで反省せず謝らないという選択肢はまったくない。

弥彦は冥理が自分のことを抱き上げる中、冥理の耳もとで「ごめんなさい」と小さな声で謝った。弥彦の謝罪に冥理は頷くと「いいのよ、無事に帰って来てくれたんですもの」と微笑んで弥彦の頭を撫でた。

冥理は弥彦をゆっくりと降ろすと、散鶴が弥彦に抱きついた。「おかえりなさい。やひこおにいちゃん」と無邪気に笑みを浮かべ小さな体で弥彦を包み込む。自分のことを見上げる散鶴を弥彦は頭を撫でてやると気持ち良さそうに目を細める散鶴に「ただいま。散鶴」と言ってからそのまま視線を隣でこちらを見ている夕乃に合わせる。「ただいま。夕乃お姉ちゃん」と言った。夕乃は「おかえりなさい。弥彦」と微笑んで応えてくれた。

玄関先で家族に迎えられた後、弥彦は久しぶりの我が家に「ただいま」と一歩足を踏み入れた。

第十八話 ある男の帰宅（後書き）

如何でしたでしょうか。

夏休み編もそろそろ終わりを告げたいところですが次回の話で終わらせてみる予定でいます。

原作開始までもうしばらくお待ちください。

人物の心理描写や行動、言葉の言い回し方など未熟なところがありますがなんとか話として読んでいただける程度にはなっていると
思います（作者の独断）

私の駄文を読んでいただいている方をお願い事がございます。

一言でもいいので感想のほうを書いていただけると、今後の展開の方針が私としても決めやすいのでどうか感想のほどをお願いします。

第十九話 ある男の苦悩（前書き）

おまたせしました

相変わらずの駄文ですがご愛読お願いします

第十九話 ある男の苦悩

9月1日の早朝、場所は崩月の屋敷。

まだ、残暑の残り香を漂わせるように頬を生温い風が撫で、蝉の鳴き声が聞こえ、空は真つ蒼の雲ひとつ無い快晴。

屋敷の庭にある井戸から水を桶に入れゆつくりと汲み上げる。

桶に溜まった水面を覗けばそこには頬に腫れた痣を残す弥彦の顔が写る。そんな自分の情けない顔を見て深い溜息と疲労感。

早朝にある朝稽古で今朝、法泉にこつ酷くやられた証である痣を手で撫でる。

「……痛い」

誰かに言うわけでもなく、ただ自分が今感じたことを口にだして呟く。

呟いたところでこの痛みが退くわけではないのだが人間は内に内包する感情を口にだしていうものだと思っている。でないとなにかが壊れてしまいそうな気がするから。

桶に溜まった水を勢いよく頭から被ると稽古の汗を流す。

まだ夏でよかった、この残暑を思わせる気温のなか浴びる冷たい水は心地がいい。秋が近づけば肌寒い中、冷水を被らなくてはいけない。時期にそうなるのだが、せめて夏がまだ終わらない間はこの一時の休憩を心地よいと思いたい。

「やひこお兄ちゃん。あさごはんだよー！」

五月蠅い蝉の鳴き声に負けなくらいの大きな声。弥彦を呼ぶのは妹の散鶴。

人前では恥ずかしがりやの妹は家族の前だといつも元気いっぱい

天真爛漫のひとりの女の娘。今日は幼稚園の始業式があるのでその姿は幼稚園の制服を着ていた。

気が付けば夏休みは昨日で終わりを告げ、今日から新学期。夏休みの宿題に追われる作業も無く、久しぶりに学校に通えることが弥彦はほんの少しだけ嬉しかった。

弥彦は散鶴の呼び掛けに応えるように振り返る。振り返った弥彦の顔を見た散鶴はちよつと驚いたようできりくりとした綺麗な瞳をぱちぱちと瞬またたかせる。

散鶴の反応に弥彦は頭を掻き「参ったな」と呟く。痣の痛みがあつてか、ぎこちない笑みを作つてこちらの様子を窺う散鶴に言う。

「もう少し待つてくれないか。すぐに体を拭いてからいくからさ。

……ハクシヨンっ！」

大きなクシャミをしてから鼻を吸すすると一瞬の寒気。夏風邪でもひいたのかな、と自分の体調を心配してみたがそんなものは不要だと思考をやめた。

いそいそと肩にタオルを掛け、濡れた髪から滴れる水を手の甲で拭う。

弥彦が体を拭いているところをジツと見つめていた散鶴は縁側からぴよんと小さくジャンプして降りてみせると弥彦に駆け寄った。

「やひこお兄ちゃん…お祖父ちゃんにいじめられたの？」

自分のことを心配そうに見上げながら上目遣いに両手の拳をぎゅつと握り散鶴は弥彦に問うた。

自分は妹に心配されるほどにひどい顔をしているのだろうか。情けない姿を妹に見せてしまった、と思つた弥彦は兄の威厳を保とうというわけではないが自分のことを見上げる妹に心配はかけまいと笑みを作るとしゃがみ込み視線を散鶴に合わせてから優しく語りかけ

るよつに言つ。

「そんなことないよ、散鶴。お祖父ちゃんはいつだって優しいだろ。この怪我はたいしたことない。だから散鶴が気にすることじゃない。……だけど、心配してくれてありがとな」

人を思いやる気持ち。現在の人間社会で不足しているもの。とつても大事なもの。散鶴は幼いながらその気持ちを人一倍持っている。人の気持ちに敏感で恥ずかしがりやな妹ではあるがこういった一面を持っていることに弥彦はとても羨ましく思う。それは自分にとつて欠けているもの。

弥彦は散鶴の頭に手を載せ優しく撫でてやると気持ち良さそうに目を細めて無邪気に微笑む散鶴。

崩月流の稽古はすごく優しいのに激しくスパルタの二面性を持つものだと真九郎が言っていたことを思い出した弥彦はあながち間違ではないな、と内心で苦笑。だが、その稽古があったおかげで現在の自分がある。肉体は戦鬼の力に耐えうるものになったが、内心が心が貧弱だ。心のあり方についてはいくら鍛えたり考えたりしたところでもどうにもならない。それは自分が成長することにつれて強くなると信じたい。

「やひこお兄ちゃんがいじめられたら、ちづるはかなしいの。だから、つらいことがあったらちづるにそうだんしてね」

散鶴は胸を張り、両手を腰に添え弥彦を見上げながら笑顔で言った。どうして崩月の女性はこうも強くて優しくして相手を安心させるようなことを笑顔で言うのだろうか。弥彦は散鶴の言葉に自分の心の奥底にあるシコリが少し和らいだような気がした。

「……ありがとう、散鶴。まだ俺は平気だから大丈夫だよ」

なら心配いらねえ、と散鶴は満足そうな顔をした。額を滴れる水をタオルで拭き終えた弥彦は散鶴と手を繋ぐと家族が待つ居間へと向かうのだった。

朝食を食べ終えた弥彦は左腕の傷痕を隠すために長袖のＴシャツを着た。傷痕のことで色々と言われると説明に面倒だからだ。それに弥彦自身もこの傷はあまり人目に晒したくないというかけなしのプライドがあったからかもしれない。登校の準備を自室で済ませると玄関で待っていた夕乃と一緒に崩月の屋敷の門を潜った。

今日は小学校の二学期始めの始業式。

夏休み明けで肌を日焼けで小麦色に焦がす小学生の集団が弥彦の横を元気いっぱい走って追い抜いていく。その姿を目で捉えた弥彦は「子供はやっぱり元気が一番だよな」とすこし大人の目線から子供たちを観察しながら駅から小学校までゆっくりと歩いた。小学校の校舎に到着した弥彦は下駄箱に靴を入れ上履きに履き替えているとそこにちょうど通りかかった担任の菅原が弥彦にあいさつをした。

「おはようございます。弥彦くん。ちゃんと夏休みの宿題はやってきましたか？」

ちよつと悪戯つぽい笑みで尋ねる菅原先生。

自分が前世で子供の頃はよく宿題をやり忘れて先生に怒られたものだ。だが、さすがに二度目の人生ともなると夏休みの宿題は最初の一週間以内に終わらせ、休みの間はずっと修行に明け暮れる生活をしていった。

「もちろんですよ。やってきてあります。先生は教室の方にはもう顔を出したんですか？」

「ええ。つい先ほどにね。みなさん集まってきましたよ」

「梓は来ていますか？」

弥彦の質問に菅原の雰囲気は少し暗くなるのが弥彦にはわかった。だが菅原は自分の生徒に心配は掛けさせまいと直ぐに明るい表情に戻った。

「来ていますよ。ですが彼女は……いや、この話はHRにしましょう」

彼女は両耳を失っています、とでも言いたかったのだろうか。菅原はひとりの生徒に大事なことでも話すかのように真剣な表情で話を続ける。

「弥彦さんに頼みごとがあります。実は梓さんは現在とても辛い状況にあります。私は彼女の先生として、そしてひとりの大人として彼女を助けたいと思っています。ですが、私ひとりでは彼女を助けることは出来ない。私は彼女の周りを支えることはできません。ですがメンタル面、心のなかまでは私では助けることができない。彼女は私ではなく家族でもなく友達、それもとても大切な誰かに助けてもらいたがっている気がするんです」

「……大切な誰か、ですか」

「そうです。今の話は梓さんの保護者の方から聞いた話と私の憶測を希望的観測でまとめてみただけですが、信じて欲しい。そして私は弥彦くんこそが彼女の大切な誰かだと思っています」

「俺が梓の大切な誰か、ですか？」

ありえないと思った。あつてはならないと思った。

もし菅原の言うことが本当であるならそれは嬉しい。だが自分にはその資格はない。

「先ほど言いかけたことですが梓さんは今日をもって転校することが決まっています。梓さんは始業式を前に転校をする予定だったのですが本人の希望がありまして転校を今日まで先延ばしにしていました。それが何故だかわかりますか？」

……言うな。言わないでくれ。

心の中で弥彦は声にならない願いを叫んだ。これ以上聞いたらせつかく心の奥に閉じ込めていたものが溢れ出してしまふ。だが、菅原は話を続ける。

「それは弥彦さんに最期のお別れを、お礼を言いたいからですよ。彼女は弥彦くんのことか……」

「失礼しますっ」

弥彦は菅原が言葉を全て言い終える前に駆け出した。聞きたくなかった、梓にとつて自分がそんなにも大切な存在であるなんて嘘であつてほしいと思った。自分が彼女の未来の選択肢を奪ったのだ。彼女の耳を奪ったのだ。そんな男がどうやって梓の心の支えになることができる。

弥彦は無我夢中で走った。周りの視線を気にせず廊下を階段を駆け上がり屋上を目指して。

あそこには誰もいない。今の自分の気持ちを落ち着かせるには絶好の場所だ。こんな状態で梓の前に顔は出すことはできない。いや、

梓は今日で転校する。このまま屋上で身を潜めて梓と会わないというのはどうだろうか。

そうすればこの嫌な気持ちも忘れ、梓のことも忘れ、また心機一転してやり直せばいい。うん、そうしよう。そんなことを考えてから勢い良く屋上の扉を開けた。

案の定、屋上には人はおらずただ強い風が弥彦を正面から押した。まるで逃げるなどでも言っているかのように。弥彦は風に逆らいそのまま直進。床に腰を下ろし体育座りで蹲すくまった。

今は誰にも会いたくない。話も聞きたくない。ひとりにして欲しいとただ自暴自棄になつて身も心も塞ぎ込んだ。

始業と終業を告げるチャイムが何回も鳴ったが弥彦はそれを無視した。

どれほどの時間が経つたのだろうか。とつくに太陽は傾き夕日となつて弥彦の視線の先に落ちていく。

始業式はとつくに終わりを告げてクラスメイトたちや奉莉に杏そして梓は帰つただろうか。そんなことを弥彦が身を縮ませ考えていると屋上の扉が開かれた。扉を開いたのは天王寺奉莉と日高梓の二人特に会いたくない人物がいつぺんに遣つて来た。

弥彦は立ち上がるとその場で立ち止る。怖くて足を踏み出せない。足が震え、視線が宙を彷徨さまよう、この場から逃げ出したい衝動に駆られる。ここに居たくないという拒絶。

そんな弥彦にお構い無しに奉莉と梓は近寄つてきた。一步、そしてまた一步と二人が近づくにつれて身体の震えが止まらなくなる。

自分はいったい何故こんなにも二人を拒絶しているのだろうか。菅原の話を真に受けて自分の罪悪感に押し潰されそうになつてそれで屋上に逃げ込んだはずだ。二人を拒絶する理由、それは嘘を吐いていることか？それとも自分には背負いきれない罪の重さから友達として二人と向かい合うことができない嫌悪感からか。

最初に口を開いたのは奉莉。

「探したわよ。こんなところで震えてないで教室に戻りましょう」

「嫌だ」

「なんですって?」

「俺のことは放っておいてくれ。おまえたちは帰……」

ばちーん。屋上に響く甲高い音。

弥彦は帰れと言おうとしたが奉莉に頬をビンタされた。奉莉の行動に梓は口元に手を当て驚いている。何故俺がビンタされなくてはならないとビンタされた弥彦はギロリと奉莉を睨みつけたが彼女は怯まずにもう一発ビンタ。二度のビンタにさすがの弥彦も奉莉の行動にキレた。

「いったいなんのつもりだ。天王寺奉莉!」

「いい加減にしなさいよ!あんだ、なにふざけた事やってんのよ!」

「ふざけているのはお前の方だろうが!」

「わたしがいつふざけたっていうのよ!始業式にも梓のお別れ会にも出ないで、こんなところにひとりで居た男がよくふざけてないと言えるわね!」

「黙れ!俺の気持ちなんて子供のお前にはわからねえよ!」

「あんたも子供でしょうが!大人ぶってひとりで悩みを抱え込んで自暴自棄になってるだけじゃない!それはただの駄々っ子よ!」

我慢の限界だった。弥彦は拳を振り上げ奉莉に目掛けて振るった。だが、奉莉は弥彦の拳を難なく払うと弥彦の顎の下から突き上げるように垂直に足を蹴り上げた。鋭く重い一撃。下から上へと突き上げる衝撃に弥彦は耐え切れず宙に浮き自由落下で床に落ちた。弥彦の無様な姿に奉莉は侮蔑ぶへつのこもった目で弥彦を見据える。

「女に暴力を振るうつもり？あんだ、そこまで落ちたのね。わたしの知っている崩月弥彦はそんなことは絶対しない。梓、下がってなさい。この男の腐った根性を根元から潰してやるから」

「ハハハハハハッ！」

大口を開けて愉快そうに口元を歪めながら弥彦は笑った。

「なにが可笑しいのよ」

「よく言うよ。俺から一本取ったくらいで調子に乗りやがって…。死にたいのか？」

殺気のこもった視線。そして初めて見る弥彦の豹変。場の雰囲気にあてられた梓はその場で身動きが出来ずに今にも泣き出しそうな顔で奉莉の背後に隠れる。怯える梓とは逆に奉莉は堂々とした態度で弥彦を正面から睨みつける。

「あなたにはわたしは殺せない。あなたは弱いからね。しかも臆病者で愚かな男」

鼻で笑う奉莉。その一言で弥彦のスイッチが完全に入った。

「吼えたな、天王寺。その体、壊してやる」

両足に力を溜めてからの跳躍。奉莉と梓を軽く飛び越え着地。まさか自分たちを飛び越えて背後に回るとは思わなかった奉莉と梓は弥彦の異常な身体能力に驚く。弥彦は着地と共に速攻。奉莉の急所である鳩尾みぞおちを狙いにつけ拳を叩き込む。躊躇ためらいはない。弥彦の拳が鳩尾に届く前に奉莉は素早く的確に拳をガードを試みさせた。だがその衝撃を殺しきれずに後ろに吹き飛ばされフェンスに叩き付けられた。ずるずるとフェンスに背中を預け床に座り込む奉莉。弥彦は止めを刺そうとそのまま突進。

だが、その直線上の道に梓が飛び込んだ。

「だめ……!!!」

「退け！」

「だめ！」

「退けよ！」

「だめ！」

小さい体をいっばいに広げ、弥彦の前で立ち往生する梓。瞳には大粒の涙を浮かべ、弥彦の形相に体を震わせ、嗚咽を交えながらも抵抗してみせた。梓の抵抗する姿に弥彦の行き場の無い怒りが霧のようにすうっと消えていく。頭が冷え、思考がクリアになる。そして自分の犯したことの重大さに気づかされた。

……奉莉になんてことをしてしまったんだ。

怒りに身を任せ、友達を傷つけてしまった。それも奉莉を相手に。あまりの事態に弥彦はただただその場で立ち尽くしてしまった。

状況は最悪。奉莉は怪我を負い。梓は泣き崩れ大声で泣き。弥彦は

自分が犯したことに理性と思考が追いつかず、ただ立ち尽くすだけ。そんな状況に駆けつけたものがいた。担任の菅原だ。放課後、奉莉たちと共に弥彦のことを探していた菅原は梓の鳴き声を聴きつけ屋上に駆けつけた。

屋上に到着した菅原はその惨状に顔を真っ青にして他の教員たちを屋上に呼び応援を呼びつけた。

教員たちの素早い対応で奉莉は保健室へ梓と弥彦は職員室へと運ばれた。

弥彦を待っていたのは職員たちからの事情聴取。いったい屋上でなにがあったのかと、しゃべれない梓の代わりに当事者である弥彦に追求があった。

弥彦は屋上であったことを洗い浚い話した。自分が奉莉に暴力を振るったこと梓の仲介がなければ奉莉を殺していたかもしれないこと弥彦の話聞いた菅原は信じられないと弥彦に再び問い質したが弥彦は否定することはなく全て事実だと説明した。

警察を呼んだ方がいいのではとひとりの教師が提案したが校長がその提案を破棄した。小学校で起きた生徒間の不祥事を大事にしたいからだろうか。菅原は複雑そうな顔をして弥彦のことを見ていたが弥彦はただ下を俯き、大人たちが自分にいったいどのような罰を与えるのか考えていた。

今回の件の当事者である弥彦と奉莉と梓の保護者が緊急連絡で呼び出され菅原から説明を受けていた。崩月家の代表として来たのは真理だった。菅原の説明を聞きながら時折、弥彦のことを見ていたがその表情はどこか悲しそうだった。

菅原の説明を聞き終えた保護者達は弥彦のことについては言及しないということに決定を下した。奉理の保護者は弥彦が奉理を誘拐事件から助けたことを引き合いに出しこの件は不問とすると言った。

梓に関しても弥彦が怪我をした梓を一番に見つけ直ぐに救急車に連絡してくれたことを引き合いに出しこの件は不問とすると言った。

二組の両親の異例の不問の決定に真理は深く頭を下げ謝罪とお礼を

述べた。自分の親が息子の犯した罪で頭を下げる光景に弥彦は言葉では言い表せないほど嫌な気分になった。その後、弥彦も頭を下げ謝罪をして冥理と共に崩月の屋敷へと帰った。

屋敷に到着してからのことはよく覚えていない。冥理と夕乃から色々と話された気がしたがどれも曖昧に頷き聞き流した。法泉とは顔すら会わずことはなかった。散鶴は弥彦の様子にただ黙って口を噤んだ。

そんなことは昨日の話で時間は待つてはくれなかった。日付は9月2日。自室で一睡も出来なかった弥彦は毎日の習慣となっている朝稽古に参加するため胴着に着替えて母屋の裏にある道場に足をはこんだ。

道場内にはいつもどおり法泉が居たがその様子はいつもと違う。

「座れ」

有無も言わずにただ一言。法泉の命令。弥彦はそれに従うと道場の床に腰を下ろし正座をして法泉を正面から見つめる。

「昨日の件は冥理から聞いた。弥彦」

「はい」

「お前を破門とする。以上だ」

そついうと法泉は腰を上げ立ち上がり弥彦の横を通り過ぎる。

破門、それはもう崩月流の稽古をしないということ。それは祖父の信頼を裏切ったということ。弥彦は膝の上で拳を握り締め、涙を流した。声を押し殺し肩を震わせ泣いた。

「待つて、下さい……」

震える声で勢威いっぱい出せる声の大きさを法泉を呼び止める。弥彦の呼びかけに法泉は立ち止りはしたが振り返ることはない。弥彦は拳で涙を拭い気持ちを落ち着かせ息を吐いた。

「崩月法泉。祖父であり、師匠でもあるあなたに訊きたいことがあります」

「……言ってみる」

「俺にあなたは崩月の家系は人殺しの家系だと説明してくれたことを覚えていますか。殺しの家業はあなたの代で引退したと。ですが、今まで崩月の一族が殺してきた人達の想いや業を背負っているあなたはそのことを悔やんだことはありませんか」

罪の意識を問う質問。今の自分が悩んでいることに近いことを祖父に訊いておきたかった。弥彦の言葉に法泉は振り返り、威厳の満ちた声と態度で言った。

「悔やんだことなどない」

「何故です」

「そんなことをいちいち悔やんでなどいられんからだ。己の心を殺し、人を殺す。それを何代にも渡ってやってきた。殺しに躊躇、同情、感傷はいらない。お前にはもう必要のない言葉だがな」

考え方が生き方が既に達観している。人を殺したくらいでは揺らぐことの無い強い精神。崩月の当主としての極致。裏の世界で生きる

者として当然のことなのだろう。

「あなたが羨ましい。少女の耳を奪ったことをそのように達観することができればどれほど楽か……。だけど俺はそんな考えには至れない」

「悔やんでいるのか、弥彦」

哀れみの言葉で弥彦を問い質す。

「そうですね。子供ひとりの未来の選択肢を奪い、自分だけがのうと生きていられるほど俺は強くない。そのことを悔やみ嫌悪し誰にも話せずに悩んだ。これは俺が背負う罪だと考えた。だけど、いざ本人を前にしてみれば自分の中にあるものが溢れ出して逃げ出してしまった。苦しかった、怖かった、助けてもらいたかった。でもね、俺の情けないかけなしのプライドが邪魔をするんですよ。自分でなんとかしてみようって。他人の力など要らないと。その結果、友達を拒絶して怪我を負わせてしまった。彼女たちは俺を助けようとしてくれた。俺に手を差し伸べてくれた。だけど俺が踏みこじった」

悔やんでいるに決まっている。どうしていつも自分を律することが出来ずに犠牲を出してしまうのだろうか。それならいつそのこと友達など作らずに独りでいたほうがどれほど気が楽だっただろう。表と裏の世界は違う。自分は表の世界で馴染めるような人間ではないということなのか。溢れ出す涙が止まらない。今まで溜め込んできたものがダムが決壊するように激流となって流れ出す。

「俺はどうしたらいいのかわからないですよ。このまま罪を背負って生きていけばいいのか。それとも罪を悔やんで死ぬべきなのか。」

あなたならどうしますか」

「知らん、自分で考えろ」

冷たい言葉で弥彦を突き放す法泉。だが弥彦は食い下がらない。自分の居場所はここにしかない。自分に出来ることなどたかが知れている。それならここは退けない。もう後がないのだから。

「もう一度、俺に崩月流を訓えて下さい。お願いします」

「何故？」

「強くなるために」

「何故？」

「独りで生きていくために」

「何故？」

「裏世界（うら）が俺のいるべき場所だから」

「それは日常から逸脱し友達を切り捨てるということか？」

「違います。あなたは先ほど言いました『己の心を殺し、人を殺す』と。自分の心を殺し生きていくためです」

法泉は目を細め弥彦を見据える。弥彦と問答したことをもう一度考えてから決を下す。

「破門は取り消しだ。お前がそこまで言うのなら稽古をつけてやる。ただし、二度目はないぞ。その時は崩月の名を名乗ることさえ許さん。最悪の場合死ぬと思え」

「わかっております」

「それから学校の事はお前の責任だ。その責任は自分で片付ける」

「……わかりました」

学校での不始末はまだ許されたわけではない。保護者と教師たちは不問としたが本人たちがまだ納得したわけではないのだから。

既に転校した梓には謝罪することは無理だろう。せめて奉莉にだけは謝罪しておこう。それから彼女達との縁を切ったほうがいいのかもれない。

結局はひとりになる。孤独か孤高かそれとも愚者か。どれになっても構うものか。もう二度と同じ過ちは繰り返さないと決めたのだから。そのためなら独りになる。

再び独りになつたらいつたい自分に何をもちたらずのか。

今の弥彦には想像もつかなかった。

第十九話 ある男の苦悩（後書き）

如何でしたでしょうか。

弥彦の心の弱さや欠点を重点的において話を書いてみました。

ですが、話の内容がぐちゃぐちゃでとても読めたものではないと思います。

すみませんでした。

今後はこのように話が滅々でさらに酷くなる気がしてなりません。

不安を抱きながらですが次回の話でまた読んでくれると嬉しいです。

ご感想お待ちしております

第二十話 ある男の家族（前書き）

おまたせいたしました。

相変わらずの駄文ですがご愛読をお願いします。

ご感想お待ちしています。

第二十話 ある男の家族

9月2日の早朝。

法泉から破門の件を取り消された後、弥彦は法泉に今日の朝稽古は休止にしてくれるように頼んだ。

昨日の一件で謝罪すべき人間がいる。奉莉たちはそうだが、自分のことを叱ってくれた冥理と夕乃の二人にも謝罪したい。昨日はただ二人の話を聞き流していたに過ぎないのだから。そのことを法泉に説明すると快く頷き了承した。

道場から母屋にある居間に移動する。廊下を進むにつれて朝餉あさけのいい匂いがする。いつものように冥理が早朝から朝ご飯の準備を台所でしているようだ。

朝餉のいい匂いに反応してお腹が鳴った。そういえば昨日は夕食を食べなかったな、と昨日の自分の行動に叱責した。

そうこうしているうちに台所に到着した弥彦は料理中の冥理の後ろ姿を見つめる。こういふときはなんて言えばいいのだろうか。喉から声がなかなか出ない。ただ棒のように立ち尽くす弥彦の姿に気が付いた冥理は弥彦に声を掛けた。それも昨日のことなどはもう忘れてと言わんばかりの音色の声と笑顔で。

「おはよう。弥彦。朝の稽古はもう終わったのかしら？いつもより随分と早いようだけど…。どうしたのよ、そんなところで突っ立って。ほら、暇なら朝食の準備を手伝ってもらえないかしら？」

「あっ……うん」

謝罪をしにきたのにその謝罪の言葉を喉の奥に引っ込ませてしまった。冥理の様子がいつものように爛々としている。

もっとうん、怒って口も利いてくれないかと思っていたのだが自分

の思い違いだったらしい。冥理に促されるままに弥彦も朝食の準備を手伝う。

「お母さん。何を手伝えばいいの？」

「そうねー。一通りの下拵ひたしはしてあるから…そうだったわ。卵！冷蔵庫から卵を取り出して割った卵をボールの中に入れて掻き混ぜてちょうだい」

「わかった」

弥彦は冥理の指示どおり冷蔵庫から卵を取り出しステンレス製のキッチン調理場にコンコンと卵を打ちつけ輝ひびをいれてからボールの上で卵を割る。それから箸を巧みに使い掻き混ぜる。その間に冥理はフライパンを熱し油を敷きバターと味醂みりんを加える。弥彦が手伝う前に刻んでおいた、ほうれん草をフライパンに加え、さっと炒める。

「卵を入れてちょうだい」

「わかった」

弥彦は溶いた卵の入ったボールをフライパンの上で円を描くようにゆっくりと入れた。その間に冥理も絶えず箸を動かし炒める。そして最期に醤油を加えて味付けし完成。

「できた。名づけて『ほうれん草と卵の炒めもの』。どう？いいと思わない？」

「うーん。美味しそうだし、いいんじゃないかな」

「でしょ。さて、後は焼き魚とお味噌汁を器に移して運ぶだけね」

「最期まで手伝うよ」

「ありがとう」

器に朝食を盛り付け居間にある黒檀のテーブルへと運ぶ。こうやって朝食の準備を手伝ったのは随分と久しぶりかもしれない。朝稽古を始めてから朝食の準備は冥理に任せっぱなしだった。朝稽古も大変だが朝食の準備も大変だ。今度からは稽古と折り合いをつけて冥理の手伝いをしたほうがいいのかもしれない。

朝食の準備が終わった二人は居間でお茶を飲みながら、家族がやってくるのを待つ。

弥彦はテーブルを挟んだ冥理の向かい側の席に腰を下ろして冥理に話しかける。

「お母さん。いつもありがとう」

「何よ、唐突に。これくらい主婦なら当たり前前の範疇よ」

当然のことだと冥理は言う。

「それでも、こうやって毎日ご飯を作ってくれるのはすごいことだし大変なことだと思うから……ありがとう」

弥彦は一度頭を下げ感謝を表した。そして顔を上げ冥理の瞳を見つめ、話を続ける。

「昨日のことは本当に申し訳ありませんでした。俺のせいでお母さんたちには心配や迷惑を掛けてしまいました。俺が生きている内は

苦勞を掛けると思います、負担を掛けると思います。そのことでお母さんたちに迷惑が掛からないように今後は自分を律することに努めますので、どうか許して下さい」

弥彦は床に擦りつくぐらいに頭を下げた。いま自分が出来る誠意を眞理に表すにはこれぐらいのことしかできない。あとは自身の行動で誠意を見せるつもりだ。

弥彦の頭を下げる姿に眞理は一瞬、呆気に取られた。そして溜息。それは自分に呆れてしまっ言葉もないという表れなのだろうか。

「……まったく、もう」

眞理はそう呟くと腰を上げ弥彦に近寄り、弥彦を後ろから抱きしめた。温かくて優しい感触。母親の温もり。弥彦は眞理に身を任せる。

「わたしは別に迷惑だなんて一言も言っていないし、思ってもいないわよ。確かに昨日の件は人様に迷惑をお掛けしてしまったのはいただけないけど、わたしは弥彦のことを責めるつもりはないわ。昨日だって夕乃と一緒に話したでしょ？あなたは上の空だったから覚えていないでしょうけどね」

世話の焼ける息子よね、と眞理は苦笑したがどこか嬉しそうだった。両手で優しく弥彦を包み込む眞理は少しだけ更に優しく弥彦を包み込み、話を続ける。

「もうひとりで悩むのはやめなさい。あなたは独りではないの。わたしがいるし夕乃もいる。お父さんに散鶴もいる。出張中だけど旦那だっている。みんなあなたのことが好きだし大切な存在なのよ。家族の絆って目には見えないけどみんなと繋がっているの。あなたが悩めばみんなが悩む。あなたが喜べばみんなが喜ぶ。そうやって

一喜一憂するように繋がっている。だから、あなたは大切な家族なのよ」

弥彦の頬を一筋の涙が流れる。今までひとりで悩んでいたことが馬鹿らしくなる。こんなにも近くに自分のことを大切に思い、親身になってくれる家族がいる。

自分はどこかで崩月家という人間との関わりに壁を挟んで接していたのかもしれない。もうこちらの世界に生まれて七年も経った。この長い年月を一緒に過ごしてくれた人達を家族といわないでなんといえはいいのだろう。もう既に自分が生まれた時から『家族』なのだから。

弥彦は冥理の胸の中で泣いた。悲しみの涙ではない嬉しいから流す涙だ。

……もう迷わない。

すうと弥彦は冥理の胸から離れると涙を拭う。いつまでも泣いているわけにはいかない。弥彦の気持ちの変化に気が付いたのか冥理は穏やかに微笑み、弥彦を見つめる。

「いい顔になったわね。それでこそわたしの息子。でも涙の痕が残ってるわよ。顔を洗ってらっしゃい」

微笑みながら冥理は弥彦に促す。弥彦は耳の裏まで顔を真っ赤にして俯くと早足で居間から退出した。

洗面所で顔を洗い、鏡に映る自分の顔を確認する。所々に傷が残るがいつもより若干ではあるが凛々しくなったような気がした。両手で頬を叩き気合を入れる。

心機一転。気持ちを切り替える。今日から自分は変わるのだと。

「おはようございます。弥彦。今朝も早いですね」

洗面所にやってきたのは夕乃。少々寝癖の残る長い黒髪。服装はパジャマと見れば起きてきたばかりと容易に想像がつく。それでも優雅に凜々しく見えるのは崩月夕乃だからか。どんな時でも我が姉はまるで大和撫子のような。弥彦は内心で夕乃に感嘆すると昨日の件の謝罪をしようと口を開いた。

「おはよう。夕乃お姉ちゃん。実は昨日の……」

「待って下さい」

「はいっ」

話を切り出したところで夕乃の「待った」が入った。じーっと弥彦の顔を見つめる夕乃。口元に人差し指を近づけなにか思考をするように黙りこむ。

「あ、あの、夕乃お姉ちゃん？」

弥彦の戸惑いの言葉に夕乃は微笑みを返し「理解しました」と一言、前置きを言いうと口を開いた。

「どうやら悩み事は吹っ切れたようですね。昨日の弥彦の様子から心配はしていたんですけど、わたしの出番はなかったみたいです。今日の弥彦からは迷いが感じられません。今朝に何があったのかは詮索しませんが、あなたはわたしの弟であること、わたしは弥彦の姉であるということをしっかりと心に留めておいてください。いいですね？」

「はい。留めておきます」

よろしい、と夕乃は笑顔で頷く。文武両道、容姿端麗、どこにも隙のない姉の夕乃は弥彦の自慢の姉だ。この姉にしては出来損ないの弟であることが恥ずかしくなるが、こうやって自分のことを心配し理解してくれる夕乃に弥彦は心底感謝している。いつかこの姉にして、この弟ありといわしめるような弟でありたいと思う。そんなことを思いつつ弥彦は洗面所をあとにした。

居間に戻ると法泉が上座に座り、新聞を読んでいた。弥彦はそれを横目にゆっくりと席に着き腰を落ち着ける。

廊下から二つの足音。冥理が散鶴を起こしてきたようで眠たげな眼を擦り欠伸を漏らす散鶴の様子に弥彦は苦笑。

「おはよう。散鶴。昨日は夜更かしでもしていたのか？」

「してないよー。ちづるはいい子だから直ぐに寝たもん」

本人はそうはいうが眠たそうだ。まさか…と思い弥彦は散鶴に尋ねる。

「もしかして俺のこと心配してくれていたのか？」

「……うん」

弥彦の質問に散鶴は正直に頷いて答えた。

本当に優しい子なんだなと改めて認識した弥彦は散鶴の優しさに微笑んだ。

弥彦はすぐさま立ち上がり散鶴に近寄る。散鶴の視線に合うようにしゃがみ込み話しかけた。その様子を法泉と冥理は黙って見守る。

「すまなかったな、散鶴。もう俺のことはいいんだ。大切な事に気付いたから」

「ほんとうに?」

「ああ。本当だ。嘘じゃない」

弥彦の瞳を、真意を確認するようにまじまじと見つめる散鶴は弥彦の言葉が嘘ではないと理解したのか頷く。どうやら信じてもらえたようだ。弥彦は胸を撫で下ろす。だがまだ話は終わりじゃないと散鶴が弥彦に片手の小指を立てて、弥彦に差し出した。弥彦は差し出された指に自分の指を絡める。散鶴はきつと約束をしたいのだろう。

「ちづるとの約束おぼえてる?」

「悩みごとがあつたり、俺がいじめられたら相談しろってやつだろ?もちろん覚えてるよ」

「約束やぶつたら、めっ!だよ」

「……善処します」

「ぜんしょ?」

善処の意味を知らない散鶴は首を傾げた。善処するとはその場しのぎの約束。無責任なもの。妹との大事な約束にそれは必要のない言葉。弥彦は慌てて訂正した。

「いや、違った。絶対守るよ」

「よろしく」

散鶴にも分かりやすく、誓いをたてた。そのことを理解した散鶴は満足そうに頷いた。

その一部始終を見ていた法泉と冥理は兄妹の立場が逆転している様に笑った。優しい笑みで。そこへ制服に身を包み身だしなみを整えた夕乃が居間にやってきた。居間の雰囲気は穏やかでいて楽しそうなものを感じ取った夕乃は居間にいる家族に質問する。

「なにやら楽しそうですね。なにがあつたんですか？」

夕乃の言葉に四人は顔を見合わせ笑い合う。そのなかで弥彦だけは恥ずかしそうに俯いたがこの雰囲気は嫌じゃなかった。むしろ心地が良かった。

「ほら、みんなが揃ったことだし朝食にしましょう」

冥理がそう促すと各人それぞれの席に付くと目の前で両手を合わせてこう言った『いただきます』と。

朝食を食べ終えた弥彦は身支度を整えてからランドセルを背負い自室をあとにする。今日はいつにも増して気持ちが良い。昨日の自分が嘘のように。軽い足取りで玄関で靴を履くと「いつてきまーす」と元気にあいさつを告げてから屋敷の門を潜った。

小学校の最寄駅の改札口を抜ける。人混みに紛れるように駅舎を抜けようとしたが弥彦はある人物を見つけってしまったので足が止まった。

弥彦の視線の先には赤いランでセルを背負い、まるで誰か探しているかのように目を巡らせる天王寺奉莉がいた。

弥彦が来たことを奉莉が気づきこちらに歩み寄る。その足取りは軽く健康そのものだった。昨日、奉莉に怪我を負わせたことを心配し

ていた弥彦は奉莉の身体の調子は大丈夫なのかと歩み寄る奉莉の姿を観察して様子を窺う。外傷は無さそうではあるが顔が怒っていることから不機嫌であるのは確かだと思った。

「おはよう。弥彦。今日は学校には来ないと思っていたわ。あれだけのことを仕出かしてのこのこと登校してくるなんて、いい度胸ね」

弥彦の瞳を鋭く睨みつけ、今にも殴りかかりそうな喧嘩腰の気配をみせる奉莉。憤りが収まらないようだ。弥彦は奉莉の様子に自分が犯したことの重大さを改めて認識してから彼女に頭を下げた。

「昨日のことはすまなかった。奉莉に暴力を振るい、止めを刺す一歩手前まで追いこんでしまったことは本当に悪いことしたと反省している。奉莉のご両親の許しがなければ今頃俺は警察のお世話になっていただろう。だがこれは奉莉の親が俺を許ただけであって奉莉本人の気持ちとは別だ。俺を許してくれ、なんて言わない。金輪際関わるなと言うなら従おう。縁を切ろうと言うなら従おう。ただ俺はもう一度、奉莉との仲を戻したいと思っている。虫のいい話だと思つかもされない。だけど俺には奉莉が必要なんだ」

弥彦の言葉と態度に戸惑う奉莉。弥彦に反省の色が窺えなかったら一発殴るつもりでいたのに、こんなこと言われたら反則じゃない、と俯き顔を伏せる。

「……なによ、それ。そんなこと言われたら、あんたのこと許さないとわたしが悪者みたいじゃないの。……いまの言葉、信じていいのよね？」

奉理の声が震えている。俯いているから顔は見えないが彼女の様子から泣いているかもしれないと弥彦は思った。

「ああ。信じてくれ。奉莉のことは二度と傷つけることはない。だが、奉莉を降り掛かる悪意からは守るよ。俺は頭は悪いから大人な考え方が出来ない。だけど腕っ節には自信がある。それは奉莉が一番理解してくれているはずだから」

人を守れない男は自分も守ることは出来ない。それが今の弥彦の心の指針。自分を律することも大事だけどその前に友達を守ることでも大事だと思うのだ。自分のこの命、二度目の人生は誰かの為に捧げたいと思う。
顔を伏せたまま震える声で奉莉はぼつりと話し出す。

「怖かったんだから……死んじゃうのかと思ったんだから……」

「……すまなかった」

弥彦の胸を両手で交互に叩く奉莉。やはり泣いていた。

「弥彦のあんな怖い様子は誘拐の時、わたしを助けてくれた時は安心して見ていられた。だけど、あの弥彦を正面から対峙してわたしを殺すつもりでわたしを睨みつける弥彦はもう二度と見たくないの……」

「すまなかった」

弥彦は両手を奉莉の肩に優しく乗せる。馴れ馴れしいことなのだろう。自分以外の人間が自分の身体に触れることはあまりいいものじゃない。だけど、自分が悩みや不安、苦痛や恐怖から逃れたいとき、人の温もりが欲しくなる。もし自分以外の人間にもそれが適応されるものならば、いまは奉莉を安心させ落ち着かせるために自分の両

手を添えよう。これはただの俺のお節介と謝罪の印。奉莉は弥彦の手を払うことなく弥彦の行為を許した。

二人の様子を遠巻きに駅の利用者たちが見ていたが、足を止めて何事かと二人に訊くような無粋な真似をする人間はいない。

朝の通勤時間に珍しいものが見れたと思った会社員。朝から小学生の男女が痴話喧嘩でもしたのかと思った駅員。朝から青春しているなど少し羨ましく思った学生。それは千差万別。人間の数だけ様々な思考の数がある。弥彦は周りを見回し自分達が目立っていることに気が付いたが、そんなものは知るかと無視。

今は奉莉が落ち着くまでこうしているのが善作だろう。弥彦は駅舎に掛けられた大きな時計に目をやって時間を確認した。時刻はとっくに朝のSHRの時間。今日は二人で遅刻だな、と苦笑しながら弥彦は遅刻の言い訳を頭のなかで考えるのだった。

結局、二人が登校してきた時間は一時間目の授業中だった。授業中の他のクラスに迷惑にならないように気を遣いながら廊下を静かに歩き、一年三組の前に到着。到着したのはいいのだが、どちらが先に教室の扉を開けるかで奉莉と口論になった。一応、周りに気を遣ってか声量は小さい。

「あんたが開けなさいよ」

「奉莉。いいことを教えてやる。……授業中の教室に入るのは勇気がいる」

弥彦は遠まわしに自分が教室の扉を開けるのが嫌だと言った。

「それはあんたが感じることでしょうが。わたしはそんなことは気にしないわ」

「じゃあ、お先にどうぞ。レディーファーストってやつだ。紳士的だろ？」

「レディーファーストって……あんたが都合のいい時にしか聞かない言葉よね。紳士的というか女々しい男っていうか。いや、違ったわ。器が小さい男かしら」

奉莉の自分に対する評価が著しく良くないことがわかった弥彦はちよつと落ち込んだ。天王寺奉莉という少女は自分の思ったことは、ハッキリと言う。正直に言う。そういうところが彼女に対して弥彦が一目おくところであるし好きなのところでもある。

「……おまえが俺のことを口頃からどう思っているのかがよくわかった。だが、このままでは話がお互いに平行線だ。そこでだ、ジャンケンで決めるのはどうだろう？」

「いいわよ。負けたほうが扉を開けるってことにしましょうか」

「心得た」

弥彦の提案に奉莉は了承した。勝負方法はジャンケン。敗者が扉を開ける。お互いに真剣勝負。二人は睨み合う。

『最初は、グー』

二人はお互いに片手の拳を差し出す。

『じゃーんけーん』

二人は拳を振り上げた。

『ぼんツ！』

運に身を任せ弥彦は拳を振り下ろした。

奉莉が出した手はチョキ。対して弥彦はパー。一瞬で勝負は決した。勝利の女神は奉莉に微笑んだようだ。

やったー、と奉莉は嬉しそうにVサインを作り弥彦に見せる。敗者の弥彦はがっくりと肩を落とし深い深い溜息。

「ほら、敗者は約束どおり扉を開けなさい」

「わかってるよ」

敗者は勝者に従うのみ。勝者の貫禄か、負けた弥彦を急かすように背中を押す奉莉。背中を押されながら重い足を前に前進させ、弥彦は渋々と教室の扉をゆっくりと開けた。

弥彦が教室の扉を開けた途端にクラスメイトたちから視線の集中砲火を受けた。

予想通り過ぎるクラスの反応に弥彦は引きつる笑顔で応え、教室に足を踏み入れる。奉莉は涼しい顔をして軽い足取りで弥彦の後に続いた。

珍しい人物の遅刻と随伴登校に教室内がざわついた。

「みなさん、授業中は静かにしましょうね。それから、奉莉さんに弥彦くん。遅刻をした理由は？」

菅原の注意に騒がしかったクラスメイトたちはしーんと静かになる。弥彦と奉莉はお互いに顔を見合わせ、アイコンタクトをした。

『寝坊です』

遅刻のベタな言い訳ではあったが弥彦にはこれくらいしか思いつかなかった。登校中に奉莉には遅刻理由は寝坊で押し切ろうと言っておいたのだ。息の揃った二人の言葉に怪訝そうに菅原は二人を見据えた。

「……まあ、いいでしょう。今後からは気をつけるように。席に着きなさい」

昨日の屋上で件の件を知っている菅原は二人が遅刻してきた理由を深く追求せずに二人に着席するように促した。弥彦はほっとして胸を撫で下ろすと自分の席に着席した。

その後は緩やかに時間が経ち、午前中の授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

給食の時間となったので弥彦は自分の机を班のクラスメイトの机と四角になるよう移動しようとしたが梓が転校してしまったので自分の目の前には誰もいなくなっていることに気が付いた。いまは誰も座ることのない椅子と机。日高梓が使用していた物。

結局、彼女には別れのあいさつも謝罪も出来なかつたな、と弥彦は考えつつも彼女の机を自分の班の机に移動させた。

給食を食べ終え、昼休みを挟み午後授業の始業を告げるチャイムが鳴った。五時間目の授業はLHR。菅原は教壇に立ちクラスに指示を出した。

「今日の授業は移動教室です。女子は視聴覚室に移動してもらって、男子はこのまま教室で待機してもらいます」

菅原の指示にひとりの男子生徒が手を挙げ質問した。

「先生。なんで男女別に教室を別けるんですか？」

弥彦も男子生徒の質問と同じことを考えていた。

「ああ、授業内容を言い忘れていましたね。今日の授業は特別講師の方を招いた、とても大事な授業……」

特別講師を招いただつて？弥彦はここでひとつの予想が頭の中に浮かんだ。小学校の授業で男女別、しかも特別講師を招くようなものといえはひとつしか思い浮かばない。

「性教育です」

菅原はいたって真面目に言った。よりもよつて二学期の最初に性教育の授業は必要ないだろうと弥彦は思ったのだが、それを口に出すのはやめた。

クラスの男子生徒の大多数は「性教育？」と頭に疑問符を浮かべ首を傾げる。それに対して女子も一部の人間を除き、男子と同様に首を傾げた。

「弥彦くん！今日の授業は性教育だつてさ！楽しみだねー」

悪戯っぽい笑みを浮かべて話かけてきたのは林原杏。どうやら俺をからかいたいみたいだ。

「お前な……わかつてて言ってるだろ？」

「もちろん！授業が終わったら、そっちの授業内容をこつそり教えてね。こつちのやつ教えてあげるから。交換でお話しようよ」

「断る」

「えー。ケチー」

不満そうに頬を膨らませる杏。こればかりは譲れない。弥彦は助けを求めるように奉莉に視線を送る。

「ほら、女子の連中が視聴覚室に移動を始めたぞ。置いていかれた
いのか？」

「杏！いつまでも弥彦と話してないではやく行くわよ」

弥彦の視線に気付いてくれた奉莉は弥彦に助け舟を出してくれた。
弥彦はそれに感謝する。だが、奉莉の言葉を無視して杏が話を続け
る。

「無垢な少年だった弥彦くんは今日という日をもってオオカミにな
ってしま……痛ッ」

奉莉は杏の頭を叩いた。杏は叩かれた頭を擦りながら「冗談だつて」
と奉莉に弁解すると奉莉に腕をしっかりとホルドされて引きずら
れながら二人は教室をあとにした。

性教育なんていつ以来だろうか。あれは確か、中学の頃に保健体育
の授業で習って以来だったと思う。

昨今の人間社会における性知識の低迷化。いまの世の中、インター
ネットという情報媒体を用いれば大抵のことは知ることが出来る。
それに伴って、悪意ある情報に踊らされた少年や少女たちが犯罪に
はしるようにもなってしまった。例えば、麻薬や銃器をネット上の
通販で手に入れたり、ホームセンターで必要な材料を買い漁り簡易
的な爆弾を造ることも可能となった。

なんとも世知辛い世の中になったものだ。と弥彦は考えつつ、教壇の
上で性について無垢な少年たちに教える保健の先生の話に耳を傾け
た。

五時間目の授業の終業のチャイムが鳴るのと同時にクラスの女子連
中が教室に戻って来た。幾人かの男子たちが無謀にも女子たちに「

どんなことを教わったの」と尋ねていたが、女子たちはみな顔を赤くして少し不機嫌そうにこう答えた。ただ一言「えっち」と。そんな様子を遠巻きに見ていた弥彦は子供の頃の自分の記憶を手繰り寄せながら、俺も同じ事言われたっけな、と思春期の少年少女の内情を考えつつ帰りの準備を整えていた。

「ただいまー、弥彦くん。男子の方はどんな感じだったか教えてよ」
教室に戻ってきて早々に杏は弥彦に先ほどの話の続きをしだした。

「断る、と言わなかったか？」

「だってさ。気になるじゃん。男女別で分かれるのって変だと思うでしょ」

「大人の事情ってやつだろ。先生も大変なんだよ」

適当な言い訳を言って弥彦は話をはぐらかす。むむむ、と唸る様に杏は考え込む。よほど男子の話された内容が気になるらしい。女子と話された内容にそれほど差異はないと思うだがなと弥彦は思った。杏は考えるのを諦め、隣に居た奉莉に話しを振る。

「奉莉だって弥彦くんたち男子の話、気になるでしょ？」

「き、気になるわけないじゃない」

頬を赤らめ、あたふたと慌てる奉莉。わかりやすいやつだな、と杏と弥彦は思った。

「ホントかなー？」

「本当よ！もうこの話は終わりにしましょう。帰りのSHRが始まるから」

そういつと奉莉はそそくさと自分の席に戻っていった。その様子をニヤニヤと笑みを作り杏が見送る。

「初心しんだよ、奉莉ほうりって。かわいいんだから」

「お前がませ過ぎなんだよ。もう少し恥じらいを心得るべきだと思うぞ。女の子だろ」

「恥らう乙女が弥彦くんの好きなタイプなの？」

「どうしたら俺の好みのタイプの話になるんだよ」

はあ、とため息を吐いた弥彦は少し考える。自分の好みのタイプか…。恋愛なんてものは一生縁のないものだと思うけど少しだけ話してみるか。弥彦は考えをまとめ杏の質問に答える。

「俺の好きなタイプは特にないよ。お互いに支えあえるような関係を築ければそれで構わないと思ってる。それが俺にとって一番重視することかな」

「それならさ。わたしは弥彦くんの支えになってるのかな？」

「さてね」

弥彦は曖昧に答えを濁す。杏は弥彦の答えに納得がいかないように頬を膨らませ無言の抗議。弥彦は杏の反応に苦笑する。そこへちよ

うとよく菅原が教室に戻ってきたので杏は弥彦から離れ自分の席に着いた。

自分はいろんな大勢の人達に支えられている。家族と友人と菅原先生に師範の環さん、それから兄弟子の真九郎さん。みんながみんな自分のなかでは大きな心の支えとなっている。しかし、自分はどうだろうか？誰かの支えてなれているのだろうか？自分だけが支えられて心の拠り所になっているだけなのかもしれない。

……いつまでも子供のままだな、俺は。情けない男だ。

自分を叱責する弥彦に菅原の話は弥彦の耳に届くことはなかった。

第二十話 ある男の家族（後書き）

如何でしたでしょうか。

家族の絆について書いてみたんですが、私が描くと安っぽい感じがしていたたまれないです。

話が上手くまとめられないのは相変わらずの駄文でご理解いただけると思います。

更新のペースをどんどん落ち込んでいますが、なるべく最低でも週一を目標としていますのでご了承をお願いします。

ご感想お待ちしております。

第二十一話 ある男のお遣い（前書き）

感想お待ちしています

第二十一話 ある男のお遣い

秋の訪れを告げるように緑で生い茂っていた木々は黄色や紅色などの秋色に葉を染め上げる。どこからともなく吹き付ける風は冷たく、ひしひしと季節は夏から秋へと替わりつつあるのだと身をもって教えてくれる。

小学校からの帰り道、弥彦は片手にアツアツの焼き芋を携えながらそんなことを思いつつ、とぼとぼと独りで歩いていった。

クラス担任の菅原から「帰り道で買い食いをしてはいけません！」と最近の帰りのSHRで耳にたこができるほど言われている。だが、今日のような冷たい風が吹き付けるような寒い日の下校中に移動販売の焼き芋屋を見つけてしまったのだから買い食いもしたくなる。

ちょうど昨日がお小遣い日であったので弥彦の小さな財布の懐には焼き芋を買うくらい余裕があった。

屋敷に着く前に食べ終えてしまおうと弥彦は芋を半分に折る。紫色の皮で包まれた芋の中身は見事な山吹色で温かな湯気を昇らせ、微かに香る甘い匂いに弥彦の食欲がそそられた。二つに分けた片方の芋を一口齧る。口の中に広がる甘味に弥彦は頬を緩ませながらはふと幸せそうに芋を食べる。

あつという間に芋を食べ終えた弥彦はまだ手に残る芋の温かさを名残惜しそうに握り締め、前方に見えてきた立派な門構えの崩月の屋敷に向けて前進した。

門を潜り、石畳を歩いて玄関に到着すると靴を脱ぎ、玄関を上がる。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

弥彦を出迎えてくれたのは眞理。エプロンを着ているところを見る

とどつやら夕食の準備をしているようだ。

「お母さん。お祖父ちゃんはある？」

「お父さんなら暮会所に顔を出しに行ってるわよ。最近ほぼ毎日よね」

「……やっぱりか」

法泉はここ最近、近所にある暮会所に通い詰めている。法泉曰く「いい女がいる」らしい。孫の稽古相手をそっちのけで色恋沙汰にはする法泉に弥彦は頭を抱えていた。そんな弥彦を励ますように冥理は言った。

「いい休息だと思えばいいのよ。あまり稽古に根を詰め過ぎても弥彦が体調を壊してしまえば意味がないからね。これもいい機会よ」

「そうなのかな。なんか釈然としないんだけど……まあいいか」

弥彦は稽古の件を一旦保留とすることで自分に妥協した。

冥理は夕食の準備があるので台所に戻る。戻り際に「居間に散鶴がいるから相手をしてあげてね。お兄ちゃん」と微笑みながら弥彦にお願いした。

弥彦は自室にランドセルを置くと思居間に向かう。居間では散鶴が床に絵本を広げ読んでいる最中だった。

「ただいま、散鶴。なに読んでんだ？」

「おかえりなさい。弥彦お兄ちゃん。えっとね、絵本！」

見ればわかるよ、と弥彦は思ったが口にはしない。

散鶴は先ほどまで読んでいた絵本の見開きのページを弥彦に見せた。子供の絵本らしくかわいいキャラクターと大きな文字が書かれた絵本であった。

「へえ。面白そうな絵本だな。俺も一緒に読ませてもらっていいか？」

「うん！」

散鶴は嬉しそうに頷くと弥彦に本を手渡した。弥彦は本を受け取りテーブルの上に本を置いて散鶴と一緒に読もうと思ったのだが散鶴は「違うの」とテーブルに置かれた本を手に取ると弥彦に床で胡坐あぐらをかいて座るように指示した。

弥彦は散鶴に促されるままに床に座る。そして散鶴は弥彦の足のの上に座ると満足そうな顔をしてから弥彦に再び本を手渡した。

「なあ、散鶴。この状態だと本が読みづらいんだけど……」

「ちづるはここから動くことができません」

「嘘だろ、それ。……しょうがないな、もう」

弥彦は渋々と散鶴が足のの上に座ることを了承してから絵本を開いた。本のタイトルは『防人まきもりの旅』罪を犯した防人が故郷の国を追われ、ひとり旅に出る。防人が行く先々の国で色々な人々と出会い、闘い、裏切られながらも防人は自分の犯した罪と向き合いながらも懸命に旅を続けるという話。

どこにでもありそうな話ではあるが児童が読む絵本としてはこの内容はどうかと思うのだが、弥彦が散鶴に読み聞かせてやると散鶴は

弥彦の胸に背を預けながら弥彦の話に時折、一喜一憂しながら耳を傾けていた。

こうやって本を読み聞かせるのは初めての経験だったのだが、散鶴の様子を見る限りどうやら好評のようだ。

最期のページまで読み終わると弥彦は僅かな達成感と高揚感に包まれた。子供の絵本にしては楽しめたし、妹に読み聞かせるのも悪くないと思った。

弥彦がそんなことを考えていると散鶴が弥彦にこう訊いた。

「さきもりは最期どうなったの？」

無垢な子供の純粋な疑問。確かにそれは気になるな、と弥彦も思った。だが、物語の最期は防人が自分の故郷の国に戻ろうとするところで終わってしまったので防人のその後はわからない。故郷の地を踏む前に国の兵士に捕まり処刑されてしまったのかもしれない。それとも隠居しながらその生涯を故郷で終えるのかもしれない。どちらも弥彦の想像ではあるが。

「きつと故郷に無事に戻って幸せに暮らすんじゃないかな……」

「ちづるもそうだったらいいなって思うの」

優しい子だな、と弥彦は思いつつ散鶴にこう提案する。

「なら物語の続きを散鶴が考えてみたらいいんじゃないかな。絵本を読むのもいいが、自分で物語を想像して描いてみるのも一興かもしれないよ」

「それ面白そう！ちづるやってみる」

そういうと散鶴は弥彦の足の上から離れ、どこからともなく真っ白なキャンパスと色とりどりのクレヨンを持ってくると無我夢中に絵を描き始めた。弥彦はその様子を隣に座り眺める。子供らしい抽象的な絵ではあるが何を描きたいのかという気持ちも伝わってくる。弥彦はキャンパスに描かれた人間らしきものを指差し訊いた。

「これは誰なんだ？」

「これはちづる！」

先ほど読み聞かせた話の続きを書いているわけではないのだな、と弥彦は思った。キャンパスに描かれている人物はちづるの他にもう一人いるので弥彦は再び訊いた。

「じゃあ、散鶴の隣にいるのは誰だ？」

「弥彦お兄ちゃん！」

弥彦はキャンパスに描かれた自分らしきものをまじまじと見つめる。散鶴のいう自分の手には剣らしき物が握られている。

「これが俺なのか……それでいったいどんな物語なんだ」

「ちづるとお兄ちゃんて悪い人たちをやっつけるお話なの！ちづるが魔法使いでお兄ちゃんが勇者なの！」

散鶴の頭の中に描かれている物語はいったいどうなっているのだろうと弥彦は興味があった。子供の想像力は時に大人を凌駕するようになり予想もつかないことを考える。自分も昔は持っていたのである。その力は今や自分の手に届かぬところにある。歳を重ねるにつれて

自然と現実に向き合わなければならぬ。それは避けては通れぬ現実。そんな現実から目を背け部屋に引きこもっていた前世の自分を思い出した弥彦は忌々しい記憶を消し去るように頭を振るうと気持ち切り替える。

「それはとんでもない設定だな。ドラゴンや魔王でも出てきそうだが物語が出来たら今度は散鶴が俺に読み聞かせてくれな」

「うん！……でも今日中に描ききれないかも」

「いったいどんな長編の物語を想像しているのだろうか。弥彦の興味が尽きない。」

「別に今日中に物語を書けなんて誰も言ってないよ。ゆっくりでいいんだ。何日だってかけてもいい。飽きたら止めたって構わない。散鶴が楽しければそれでいいんだから」

「わかった！」

散鶴はそういうとキャンパスを自分の世界の色に染める。その様子を弥彦は微笑ましく見ていた。そこへ台所から冥理が居間にやってくる。散鶴が絵を描くことに夢中になっているところを見て穏やかに笑う。

「あらあら。散鶴ったらお絵かきに夢中なのね。……ひとつお遣いを頼まれてくれないかしら弥彦。夕飯のおかずを作りすぎちゃったから真九郎くんのところへ届けに行ってきたらいいのだけど」

弥彦は冥理のお遣いの頼みに少し考えてから返答する。

「別にいいけど。夕乃お姉ちゃんが一緒じゃなくていいの?」

真九郎のことなら姉である夕乃が一緒である方がなにかと都合がいい。だが現在その姉は学校にいるはずだが。

「そうだったわね。それじゃあ夕乃が帰って来たら一緒に頼もうかしら」

「ただいま帰りました」

「……帰ってきたわね」

ちようどいい場合に夕乃が学校から帰ってきた。なんてタイミングのいい姉なんだろうか。

居間に顔を出した夕乃に冥理は話を振る。

「夕乃。ちようどいいところに来てくれたわね」

「ちようどいいところですか?」

夕乃は首を傾げ頭に疑問符を浮かべる。

「そうよ。夕食のおかずを真九郎くんに届けに行ってきてもらおうと弥彦にお願いしていたところなの。もちろん、夕乃も一緒に行くでしょ?」

真九郎という言葉にぴくりと肩を反応させる夕乃。そして弥彦の背後に素早く回りこむと弥彦の腕を掴み玄関に向かおうとする。

「もちろんです!さあ弥彦、今すぐ出発しますよ。真九郎さんに一

刻も早く温かい夕食を届けに行きましょう！」

「……その前にさ。まだお母さんから真九郎さんに届ける物を預かってないんだけど。手ぶらで真九郎さんのところへ行くつもり？」

「わ、わたしとしたことがつい先走ってしまいました……」

頬を赤く染め、恥ずかしそうに夕乃は俯いた。真九郎のことになると夕乃の気持ちがあがり、普段よりも乙女っぽさが倍以上に増す姉の姿に弥彦は苦笑した。

崩月夕乃は打ち所のないほどに完璧な人物だ。だが彼女には唯一ひとつだけ弱点がある。それは紅真九郎というひとりの男の存在だ。恋は盲目という言葉があるがまさにその言葉どおりに夕乃は真九郎のことになると容赦がなくなる。夕乃のなかでは真九郎の存在はとても大きいのだろう。真九郎本人は夕乃の気持ちに気付いていない様子で様々な夕乃からのアプローチを綺麗にスルーする鈍感スキルには感嘆の一言である。夕乃の弟としては是非とも姉の恋を成就させたいと思っている。

冥理から夕飯のおかずをタッパーに入れたものを預かると夕乃は流れるような足取りで玄関に向かう。弥彦も慌てて夕乃の後に続く。

「さあ行きましょか、弥彦。真九郎さんはきつとわたしに逢いたがっているはずですよ。殿方を待たせるのは女としては落第点ものですからね」

「……女性って大変なんだな。それは兎も角として。お母さんに散鶴。いつてきまーす！」

「いつてらっしやい。夕飯前には戻ってくるのよ」

「いつてらっしゃーい！」

散鶴は弥彦に向かって大きく手を振り二人を見送った。

外はすっかり暗くなり闇が世界を包み込んでいた。秋の日はつるべ落としてよくいうが本当に最近日は日が暮れるのが早い。弥彦と夕乃は電車に乗車して五月雨荘を目指した。

移動中の電車の車窓から見えるのはネオンの煌めく街の灯り。少し電車に乗って都心に向かえば二十四時間眠らない街が姿を現す。

疲れきった世の中で灯りの灯る賑やかな場所には人々がよく集まる。まるでそこにあるなにかを求めるように。車窓の景色が横に通り過ぎるのを眺めながら弥彦はそんなことを考えていた。

電車から下車するとそこは弥彦が初めて訪れる場所。下町のような雰囲気漂わせるような都会とは一味違った趣のある小さな街。

こんなところに真九郎は住んでいるのかと弥彦が思いつつ夕乃と手を繋ぎ歩きながら散策する。駅から徒歩十分程で目的地である五月雨荘前に到着した。

到着する前に銭湯を見つけた弥彦は今度、ひとりで行ってみようかなと思ったのは内緒だ。

弥彦は初めて訪れた五月雨荘の外観にどことなく近づきずらい印象を受けた。

広い敷地の中にひっそりと佇む古い二階建てのアパート。豊富な樹木に囲まれ周りとは一線を引くかのように只ならぬ雰囲気を感じた。

「弥彦は五月雨荘に来るのは初めてでしたね。ここは『不戦の約定』というものが結ばれている土地なんですよ」

「不戦の約定？」

聞き覚えのない単語に弥彦は聞き返す。

「不戦の約定というのは押し売りや宗教勧誘、いかなる戦闘行為も禁ずる。つまり絶対安全地帯ということですよ」

「へえ……それって裏世界の荒事にも適応されるの？」

「もちろんですよ」

「それはすごいな」

弥彦は素直に驚いた。現在の世の中、自宅に居ても強盗や殺人にあうことも珍しくない。絶対安全というものがどこにいても不可能だと思っていたのだが、その考えを改めたほうが良さそうだと弥彦は思った。

見た目はオンボロのアパートではあるが不戦の約定なるものがあるのなら自分も住んでみたい衝動に駆られたが、すぐに諦めた。裏世界の脅威から逃れることもできるアパートだ。そこに住まう住人も裏世界に縁のあるもの、訳ありのものが多くという可能性が高い。

実際に真九郎は裏十三家である《崩月》に組み込まれている。町道場で師範を務める武藤環もここに住んでいるはずだが、彼女が裏に繋がりがあるとは思えない、思いたくない。

無駄な詮索は止そう、と弥彦は思考を切り替え目の前にある五月雨荘を見つめる。

「そろそろ行きますよ。弥彦」

夕乃はそういつと弥彦を置いて古い石造りの門を通り五月雨荘の敷地に入る。弥彦も夕乃の後に続き敷地に足を踏み入れたが、入ったすぐの左側にある大きな樹木に目が惹かれた。

とんでもなく立派な形相の木でいつたい樹齢はいくつくらいなんだ

ろうと弥彦は足を止めてまじまじと見つめる。

「にゃー」

「なんだ？」

ふと頭上で猫の鳴き声が聞こえたので弥彦は視線を上に向ける。そこには太い枝に腰掛け幹に背を預けながら優雅に煙草の紫煙を昇らせる人物がいた。闇に紛れるように全身黒ずくめの女性。つばの広い黒い帽子に首にはドクロ首飾り。一見すれば魔女か未亡人のようなその風貌に弥彦は見覚えがあった。

「あなたは確か……」

「また逢ったな、少年。あの時とは違い、随分と成長したみたいじゃないか」

「にゃー」

不適な笑みを浮かべ黒猫の頭を撫でながら黒ずくめの女性は弥彦にあいさつをした。

……忘れるはずがない。

あれは確か俺が町道場を初めて訪れて組み手の試合で円堂円を殺す一歩手前まで追い込んでしまったことに罪悪感を抱き落ち込んでいた時の事だ。

帰り道の途中で突然現れて懐かれてしまった黒猫のダビデに餌を与えて離れてもらおうとしていた時に突然現れた不思議な雰囲気漂わせる黒ずくめの女性。

彼女が俺の相談にのってくれたおかげで俺にとって大事なものを気付けてくれるきっかけを作ってくれた。そして名も名乗らずに闇

に消えていった。
全てを思い出した弥彦は黒ずくめの女性を見上げるかたちで視線を
合わせる。

「あの時は本当にありがとうございました。あなたのおかげで俺は
きっかけを掴むことができました」

「そうか。それはよかった」

黒ずくめの女性は再び煙草を口に咥え紫煙をゆっくりと吐いた。膝
に黒猫のダビデを乗せて軽く撫でる。ダビデは気持ち良さそうに目
を細め「にゃあ」と鳴いた。

「あ、あの！あなたのお名前を俺に教えていただけませんか？」

「少年。人の名を訊くときはまず、自らの名を明かさなくてはなら
ない。それが礼儀だよ」

はっとした弥彦は慌てて言葉を訂正する。

「崩月弥彦といます」

弥彦の名前を聞いた黒ずくめの女性は目を細め弥彦を見下ろす。ま
るで弥彦を観察するかのようじっと無言で見つめた。弥彦は緊
張しながらも彼女の視線に応えるように見つめ返す。

「わたしの名は闇絵。こここの住民だよ」

「闇絵さん、ですか」

弥彦は闇絵の名を噛み締めるように呟く。妖艶な雰囲気の彼女に似合う名前ではあるが不思議な名前だな、と弥彦は思った。

「あ、あの……」

「そろそろ行かなくていいのか、少年？きみの連れは既に五月雨壮に入ってしまったているぞ」

「……あつ！忘れていた。真九郎さんへのお遣いの途中だったんだ。それじゃあ、失礼します。闇絵さん、それからダビデも」

「ああ。気をつけて行きたまえ」

「にゃー」

闇絵ともう少しだけ話してみたかったがお遣いの途中では話は別だ。名残惜しいが弥彦はひとり一匹に一礼すると駆け足で五月雨荘の入り口の扉を開いた。

一階の共同玄関で靴を脱ぎ、下駄箱は使えないので玄関の端に他の入居者の邪魔にならないように靴揃えて置いた。

真九郎の部屋の番号は確か5号室。1から3号室までが一階なのに對して4から6号室は二階にあるので弥彦は二階への階段を上がった。

床板が軋み、かなり老朽化しているのが窺えたのでこのアパートの管理体制は大丈夫なのかなと少し心配になったが無事に二階に上ることができた。

歩を進ませ曇りガラスに五号室と記されたドアの前に到着すると弥彦は扉を軽くノックした。

「どちらさん？」

部屋の中から男性の声。間違いなく真九郎の声だ。

「弥彦です」

手短に自分の名を告げると部屋の扉を真九郎が開いた。

「随分と遅かったな、弥彦。誰かと話していたのか？」

「はい。敷地の入り口前で闇絵さんと少し話をしていました」

弥彦の言葉に真九郎は少しだけ驚いた表情をした。

「へえ。闇絵さんと知り合いだったのか弥彦は。立ち話もあれだから早く中に入りなよ。ちょうど夕乃さんから夕食のおかずを頂いたところなんだ」

「それじゃあ、お邪魔します」

弥彦は真九郎に促されるままに部屋に入った。外観からは予想はついていたが案の定、真九郎の部屋は六畳一間。風呂無し。トイレは共用で廊下の端にあるのをここに来る前に確認できた。小さな台所はあるが、家具は最低限しか揃っておらず、年頃の男性の部屋としては寂しい感じがした。まあ自分の部屋も似たようなものだが、と弥彦は思った。

部屋に上がった弥彦を綺麗に背筋を伸ばし床に正座をした夕乃が迎えた。

「遅かったですね、弥彦。もう真九郎さんへは届け物をお渡ししたところですよ」

部屋の中央に置かれたちゃぶ台には冥理からの届け物である夕食のおかずが小皿に分けて置かれていた。

「ごめんなさい。ちょっと知り合いと話をしていたら遅れました」

「知り合いですか？」

「えっと、まあ……闇絵さんです」

先ほどの部屋を訪れたとき真九郎とした会話と同じ気がしたが、真九郎に話すとはわけが違う。姉である夕乃に闇絵と知り合いであるのは話ずらかった。なんとなくではあるが。

「そうですか……。弥彦は五月雨壮の住人に対して顔が広いみたいですね」

「たまたまだよ」

弥彦はなんとなく嫌な雰囲気を感じたので曖昧に返事を誤魔化す。そんな弥彦を夕乃はただ微笑みながら見つめる。

「二人も一緒に夕飯食べてく？」

エプロンを身に付け夕飯の準備の支度を始める真九郎は崩月姉弟に訊いた。

弥彦は夕乃に「どうするの？」と訊いたが夕乃は首を横に振るう。

「とてもありがたいお誘いですが、わたしたちはこれでおいとまさせていただきます」

夕乃は立ち上がりながら真九郎に言った。

「それじゃあ下まで見送るよ」

真九郎は台所のガスコンロの火と止めると手早くエプロンを取り外し折りたたんだ。その一連の様子を眺めていた弥彦はまるで主夫のようだなと思った。

夕乃と弥彦は真九郎と一緒に部屋をあとする。軋む階段を下り共同玄関で靴を履く。靴を履き終えた夕乃と弥彦は真九郎と向き合う。

「冥理さんにいつも夕飯のおかずありがとうございました、と伝えてもらえますか」

「かならず伝えますよ。それじゃあ、失礼します。真九郎さん」

「さよなら。真九郎さん」

「気をつけて帰ってね。夕乃さん、弥彦」

共同玄関で真九郎に見送られながら五月雨仕をあとにする夕乃と弥彦。弥彦は帰り際に闇絵が腰掛けていた大樹の枝を見てみたがそこにはすでに誰も居なかった。その代わりに微かに煙草の匂いが冷たい風にのって弥彦の鼻をかすめた。

第二十一話 ある男のお遣い（後書き）

如何でしたでしょうか？

目立った展開もなく短い話ですみません。

次回の話ぐらいで原作沿いの話を始めたいと思っています。

ご感想お待ちしています。

追伸

私の駄文にお気に入り登録をしていただいている方。本当にありがとうございます。とうございませう。登録者がひとり増えたり減ったりする様をみて私は一喜一憂しております。片山先生の世界観をお世辞にも再現できるとはいえませんが私の駄文に今後ともお付き合いのほどをお願いいたします。

第二十二話 波乱の予感（前書き）

サブタイを「ある男」で括るのをやめました。
さて、ようやく原作『紅』編スタートです！

第二十二話 波乱の予感

暦は霜月、つまり十一月。空を覆い尽くすのは灰色の厚い雲。今にも雪でも降るのではないのかと思わせるような天候の寒空の下、弥彦は小学校の外周を走っていた。

今週末に行われるマラソン大会に向けて、生徒が長距離を走れるように体育の授業を用いてマラソン大会の予行演習をしているのだ。先月の末から行われている体育の授業を用いた長距離走。生徒の間では「疲れるから嫌」とか「長距離走は苦手」だとか不平不満が所々で言われている。

寒空の下、なにが楽しくてマラソンなんかをしなければならぬのか？なにかの罰ゲームか？と生徒達は思っているのだろう。

その気持ちはわからないではないが、これも学校行事のひとつだし、今後あと6年間小学校を卒業するまでは年に一回のイベントとして毎年マラソン大会がやってくる。

苦手意識を持つのは構わないが初年度から走ることに躓つまづいてなどいられないと思わなければ今後の自分の首を絞めることになる。そんなことを思いつつ弥彦は足を動かし走ることに集中した。

外周を走り終えたものは小学校の校門から校庭に戻りグラウンドを歩きながら一周することになっている。

最初に校庭に戻って来た人物は弥彦だった。誰も居ない校庭を歩きながら息を整え一周すると後続の生徒達が来ないのかと校門に目を向ける。

……誰も来ない。

どうやら早く着き過ぎたようだな、と弥彦は苦笑して空を仰ぎ、息を吐いた。吐いた息は白い霧となり空に向かって消えていった。

弥彦にとってマラソンは朝飯前の運動以前の問題だった。崩月で培われた稽古で鍛え上げた肉体と身体能力。

常人の人間を遥かに超えるそれはもはや小学生のマラソンなどではぬるくて話にもならない。

フルマラソンでさえ弥彦が本気になれば世界新記録を軽くたたきだす自信があつた。

持久力は大事な力。《崩月》の戦鬼の力は著しく体力を消耗する。剛力に耐えうる頑丈な身体がまず土台として一番に必要。その次に体力、持久力が必要なのだ。

例えるならジェットエンジンを載せた燃費がものすごく悪い機体。瞬間の爆発的なエネルギーでとんでもない馬力を出すが、その分燃費が悪いので直ぐにガス欠になってしまう。

そのガス欠を克服するためにはやはり馬鹿みたいな機体に合う身体と体力が必要なのだ。

強すぎる力にはそれなりの代償がある。使わないに越したことは無いが、今の弥彦には戦鬼の力は戦闘でのアドバンテージとして必要不可欠なのだ。

そうこうしているうちに後続の生徒達が続々と現れだした。

皆、まだ慣れない長距離走に悪戦苦闘し、苦しそうな表情をしながら校庭のグラウンドに辿り着くと倒れこむようにしてその場に座り込むものがいれば、乱れる息を整えるように大きく深呼吸をしながらグラウンドを歩くものがいた。

グラウンドを歩いている生徒のなかで奉莉と杏の姿を見つけた弥彦は二人に駆け寄った。

「お疲れ様。二人とも早かったな、校庭に戻って来た女子達の中で一番と二番じゃないか」

「……クラスで一番の男が言うത്嫌味に聞こえるわね。あんた、一人で独走だったじゃない。どんな体力してんのよ……」

「よいい、どん！でみんなと一緒に走り始めたところから弥彦くんが直ぐに見えなくなるところまで離されちゃったからね。あれには驚いたよー」

「ははは……はあ」

まだ疲れた様子の奉莉がうな垂れるように弥彦に話す。杏は奉莉とは対象的に疲れた様子はなく、いつもどおりの明るい口調で弥彦に話した。

弥彦はなんと言い訳すればいいのかがわからず、乾いた笑いでその場を誤魔化する。

「弥彦くんならマラソン大会で一位になれるんじゃないかな、きっと。学年で一番、学校で一番も夢じゃないよね！」

「弥彦ならフルマラソンでも一番になりそうな気がしてやまないわ。本当に出鱈目な男よね、あんたって。運動が出来て、勉強も出来て、空手だとわたしや円が勝てない男。神様はなんでこんな冴えない男に贅沢すぎるほどの力を与えたのかしら？」

「人をもちあげといて、冴えない男って……」

「あんたは暗いのよ、根暗なの。もっと、こつ杏みたいに明るい顔をして笑いなさい。そうすればもう少しは周りから慕われるわよ」

ビシッと弥彦の顔に向けて奉莉は指を指し示した。確かに奉莉の言うことにも一理あるのかもしれない。

「弥彦くん。笑顔だよ！え、が、おー！」

杏は輝かしいほどの笑顔をまるで手本にしてくれ、と言わんばかりに弥彦に向ける。早くお前の笑みを見せてみるという雰囲気は弥彦は応えてみせる。

「こ、こっか？」

ぎこちない笑みを作り弥彦は二人に笑みを見せた。すると奉莉は不満そうな顔をして弥彦の顔をぺたぺたと手で掴み、弥彦の笑みを矯正するように頬を引っ張る。

「なんか違うわね……もつと自然に笑えないのかしら」

「あー！わたしもやりたい！」

弥彦の笑顔矯正に杏も加わり、弥彦の顔を二人でいじくりまわす。

「ちょっと！まっ！イタ、イタい……！」

「こっか、こっかええのか……」

「スケベ親父みたいよね、杏って……」

「そのの三人！集合してください！」

『はい！』

クラス担任の菅原の指示に奉莉と杏は手を止めて返事を返すと、直ぐに回れ右をすると弥彦を置いてクラスが集合しているところへと駆け出す。

「おい！お前ら、俺を置いていくなよ！」

情けない罵声を走り去る二人にあびせ、弥彦も直ぐに二人の後を追った。

その日の放課後、空を紅い夕日が照らすなか弥彦はまだ痛む頬を擦りながら奉莉と杏と一緒に下校していた。

「お前らは限度というものを知らんのか。危うく、俺の頬がずっと垂れっ放しになるところだったぞ」

「大げさな男ね。ちょっとからかっただけじゃない」

「弥彦くんの顔を弄ってて、一番面白がってたのは奉莉だけどね」

「余計なことを言わないでよ、杏！」

「ごめんなさい！」

「待ちなさい！」

杏は奉莉から逃げるように駆け出した。逃げ出す杏を追うように奉莉も駆け出す。置いてけぼりをくらった弥彦は追いかけてこをする二人を見つめながら「お前ら俺の話の聞けよ」と呟いたが弥彦の言葉が二人に届くことは無かった。

それから数日後のマラソン大会の日。

天気は快晴、絶好のマラソン日和と言っても過言ではないような早朝から弥彦は朝の稽古を今日だけは法泉に頼んで組み手からランニ

ングにしてもらった。

崩月の屋敷の広い外周を軽くながして走りながら自分の体調を確認する。ランニングを終えた弥彦は屋敷に戻り井戸で汗を流すと居間に戻った。

居間に戻ると朝食を先に食べ終えた妹の散鶴が少し興奮気味に落ち着かない様子で居間のなかをうるちよろしていた。

「どうしたんだ、散鶴のやつは……」

「今日は幼稚園の遠足なのよ。昨日の夜から楽しみで落ち着かない様子だったでしょ？気付かなかったのかしら」

冥理が台所から顔を出すと散鶴の遠足の為に作ったお弁当を持ちながら居間にやってきた。

台所では姉の夕乃がなにかをしている後姿がちらつと見えた。なにをしているのか少し気になったが弥彦は自分の席に着くと朝食をもそもそと食べ始める。

「そつえば昨日から散鶴のやつはそわそわしてたっけ……」

「妹の微かな変化にも気付いてあげないとお兄ちゃん失格よ、弥彦」

冥理は手作り弁当を子供用の可愛らしいリュックサックに入れながら弥彦を窘める。

「手厳しいな、お母さんは……」

「お兄ちゃんなんだから当然のことよ。ほら、台所で立つあなたのお姉ちゃんの夕乃を見なさい。あの子があなたのお手本よ」

冥理に促され、弥彦は台所に目をやるとエプロン姿で鼻歌交じりに上機嫌でお弁当を作る夕乃がそこにはいた。きっと真九郎の為に愛情を込めて作っているのだろう。

「……お手本ね」

弥彦はそう呟くとまだ温かい味噌汁を一口啜った。

確かに夕乃であればこれ以上にならない手本となるだろう。自分が夕乃のようにお淑やかで才色兼備なところを想像してみたが、ありえない現実に弥彦は直ぐに思考をやめた。

朝食を食べ終えた弥彦は食器を片付けると体育着を入れた運動袋とランドセルを背負い崩月の屋敷をあとにした。

今日はマラソン大会なので一時間目から全校集会のように校庭に生徒たちを集めて準備体操をしてから学年ごとにスタートをきる手筈となっている。

早朝は快晴だったが弥彦が小学校に到着する頃には天気が崩れ始め、どんよりとした曇り空となった。

このまま雨でも降って、大会が途中中止するのかもしれないと準備体操をしながら弥彦は空を仰いだ。

結局のところ、天候は曇り空のまままで雨が降ることはなく無事にマラソン大会は行われてそして終了した。

弥彦の大会の成績は学年一位という輝かしいものだった。

弥彦としては一位で当然という気持ちがあったのだが、クラスメイトたちから自分を称えるような言葉をいくつも貰ったので弥彦はとても嬉しかった。

それが一時的な賞賛の気持ちであつても人から褒められるのは悪い気がしない。たまには人から褒められても罰はあたらないだろう。

少しだけ幸せの余韻を残しながらいつもどおり弥彦は奉莉と杏の二人と一緒に下校した。

翌日の早朝、朝稽古の時間帯に夕乃の姿が居間にあつた。

制服姿に身を包み、手には学生鞆と食材の詰まったスーパーのビニール袋。

こんな早朝からどこかに出かけるのかと思つた弥彦は夕乃に話しかけた。

「おはよう、夕乃お姉ちゃん。その手に持つた荷物はどうしたの？」

「おはようございます、弥彦。この荷物は真九郎さんに届けるものですよ」

「こんな早朝から？」

「そうです。食材を届けるついでにわたしの手料理を真九郎さんに食べていただくと思ひまして。これから五月雨荘に行くところです」

健気で一途な人だな、まったく。夕乃に愛しく思われる真九郎がとても羨ましく思う。

「へえ。まるで通い妻みたいだね、お姉ちゃん」

「これはわたしと真九郎さんの『将来』への布石です。わたしの手料理を真九郎さんにいっぱい食べてもらい、わたしの手料理無しでは生きていけないくらいに真九郎さんを骨抜きにしちゃいます！」

高らかにそう宣言すると夕乃は荷物を持ちつつ軽い足取りで玄関へと向かった。

弥彦は夕乃を見送ると朝稽古のために法泉が待っているであろう道

場へと向かった。

時刻は夕方の放課後、小学校の授業を終えた弥彦は奉莉と杏と一緒に下校していた。冷たい吹き付ける風に乗って落ち葉が空を舞う。秋を通り越して冬にでもなったんじゃないかと考えてしまいそうな凍てつく寒さに弥彦は身を縮ませる。

子供は風の子という言葉があるがさすがにこの寒さは許容の範囲外だと弥彦は思った。

「そつえば秋と言えば食欲の秋と芸術の秋があるけど弥彦くんはどっち派？」

奉莉と談笑していた杏が弥彦に話しかけた。弥彦は杏の質問に少し考えてから返答する。

「そりやもちろん、食欲の秋だな。俺には芸術はわからないからな。それなら美味しい思いが出来て腹が膨れる方がいい」

杏は弥彦の回答にうんうんと首を頷かせながら納得する。

「松茸、秋刀魚、サツマイモ、茄子……」

まるでお経のように杏が口々に秋の旬である食材の名を唱える。じゅるり、と涎よだれを拭う音が聞こえたのは気のせいだ、たぶん。それを呆れるように弥彦が見つめたため息をひとつ。

「ちなみに奉莉はどっち派なんだ？」

「わたしもあんた達と同じ食欲の秋ね」

「へえ、意外だな。てつきり奉莉のことだから芸術の秋の方だと思
ってた」

「芸術もいいけど、やっぱり美味しい物には敵わないわよ。キャン
パスに筆で絵を描くより、甘いお菓子を作った方がいいもの。乙女
は甘いものには弱いからね」

最期の言葉が本音か、女性は甘いものには本当に弱いらしい。

「奉莉はお菓子が作れるのか？」

「ええ、作れるわよ。趣味みたいなものね。ママと一緒に学校が休
みの日とかに作ってるわ。それで今度、町道場のみんなに何か作っ
て持っていこうかと思ってるの」

「それは楽しみだ。きっと環さんが嬉しくて奉莉に抱きついて頼ず
りして『おかわり！』とか言いそうだな」

「……環さんならありえるわね」

弥彦と奉莉は環の姿を想像して苦笑した。

その後、電車に乗り三人は各々の駅で降りると「また明日、学校で
と別れた。」

学校から帰宅した弥彦は屋敷に法泉の姿が見えないのでまた暮会所
に行っているのだろうと稽古は諦めて、大人しく宿題を片付けるこ
とにした。

30分足らずで宿題を終えた弥彦は自室から居間に移動してお茶を
飲みながら冥理と散鶴と一緒にテレビを見て時間を潰した。

しばらくすると夕乃が帰宅。夕乃は居間に顔を出し流れるような動

きで畳の上で綺麗に正座をして寛いでいた弥彦たちの輪に混じると
こう言った。

「ただいま帰りました。突然ですが、今日は我が家に真九郎さんを
招待しました」

真九郎が来ると聞いて「やったー」と散鶴が喜んだ。

「あらあら、それじゃあ夕飯は真九郎くん分も作らなくちゃね」

「真九郎さんが家に来るのは久しぶりだな」

久しぶりの真九郎の帰宅。居間の雰囲気がいつ以上に明るくなっ
た気がした。だが、夕乃の顔は真九郎が来るといふのに優れない。

「……それと真九郎さん以外にもうひとり、我が家に招待しました」

「真九郎さん以外にもうひとり？」

五月雨荘の住人でもやってくるのだろうか？真九郎と一緒に他の誰
かが来ることは初めてだ。弥彦はいったい誰が来るのか興味がい
た。

「お母さんも弥彦も落ち着いて聞いてくださいね」

真剣な表情で夕乃は前置きを一言、息をすうと吸い込み口を開いた。

「《九鳳院》のお方が我が家にやってきます」

居間の雰囲気が一変する。空気が重苦しくなる。冥理は難しそうな
顔をして顰める。

夕乃はいまなんと言った？聞き間違いなのではないかと弥彦は夕乃に訊き直す。

「夕乃お姉ちゃん言葉に《九鳳院》て単語があっただけど気のせいだよね？」

「いいえ、弥彦。気のせいではありません。あの《九鳳院》の方が今日、我が家に真九郎さんと一緒に来ます」

「そんな莫迦な……」

啞然として開いた口が塞がらない。

古くから表世界で絶大な権力を握る《表御三家》のひとつの家系《九鳳院》この国の大財閥にして絶大な権力を有する家系。

だがしかし、表世界の名家中の名家である九鳳院が我が家にやってくるのはありえないことだ。

我が家は《裏十三家》のひとつ《崩月》裏世界の中で誰もが敬意し畏怖すべき存在。

表御三家では、表を清流、裏を濁流と称し、接触を禁じていると法泉から話を聞いたことを思い出した。

それと同時に弥彦自身も表御三家の連中とは接触を禁ずると法泉に釘を刺されていることも思い出した。

「なんだって真九郎さんと九鳳院のやつが一緒にいるんだよ……」

苦虫を潰すように弥彦が呟く。

「今朝、真九郎さんの部屋を訪ねた時に真九郎さんと九鳳院の方が一緒に寝泊りしているところでした……」

弥彦の疑問に夕乃はすらすらと答える。それを聞いた弥彦は信じられないと頭を抱えた。夕乃は話を続ける。

「真九郎さんは、なんでも仕事の依頼で九鳳院の方を護衛するように頼まれたようです」

護衛の依頼として真九郎に頼むのは正解だと思った。真九郎の住まう場所は『不戦の約定』が結ばれた絶対安全地帯である五月雨荘。真九郎がもし息絶えても護衛対象である九鳳院が五月雨荘に居る限り身の安全は確約されたものだから。それだというのに弥彦には納得がいかない。

「誰がそんな出鱈目で胡散臭い依頼を真九郎さんにしたの？」

この弥彦の質問には夕乃はとても複雑そうな顔をして答える。

「柔沢紅香さんです」

夕乃の表情から紅香のことをあまりよく思っていないことがよく理解できた。

そして今度こそ弥彦は本気で頭が痛くなってきたて頭を抱えた。

柔沢紅香といえば超一流の揉め事処理屋。

真九郎が憧れ目標とする人物であると同時に命の恩人。

そのような人物から依頼されれば真九郎は断るわけにもいかないだろう。

弥彦自身も悪宇商会の一件で柔沢紅香に助けられている。

一言も話すことはなかったが遠目で見ただけで紅香の人柄は理解できたつもりだ。

拳銃一丁で《斬島》本家の殺し屋と対等、否、それ以上の戦闘を繰り広げた化け物みたいな女性。あの時の事を思い出すだけで肝が冷

える。

夕乃と弥彦の会話を黙って聞いていた冥理がおもむろに口を開いた。「紅香さんならしょうがないわね。我が家の事情を考慮しているとは思っけど、真九郎くんがうちの人間だと承知して九鳳院の方を預けたのだから、それ相応の理由があるのでしょうか。それにうちは相手が九鳳院であろうと誰であろうと歓迎する。そういう家風でしょう?」

冥理は一息つくようにお茶を一口啜る。夕乃は冥理の意見に肯定するように頷くと真九郎を迎え入れる準備があるとかで席を外した。冥理はお茶を飲み終えた器を片付けると「お父さんに一応、連絡しときましようか」と廊下にある受話器を手に取り法泉に連絡を入れる。

居間に残された弥彦はひとり落ち着かなかった。夕乃は九鳳院が来るとは言ったが、それが男なのか女なのか、弥彦は聞いていない。訊きそびれた。

世界屈指の大財閥の人物だ。きっと漫画みたいにスーツかドレスを着て金ぴかな装飾を付けているに違いない、と偏った偏見の想像を巡らせる。すると散鶴が弥彦の肩をつんつんと突いた。

「ねえ、弥彦お兄ちゃん。くほういんってなに?」

まだ幼い散鶴は裏世界の事情を理解していないので先ほどの話を聞いていても理解できなかったのだろう。

弥彦はどう説明したものかと考えてからこう言った。

「うーん。簡単に説明するともものすごいお金持ちで偉い人たちのことかな……」

「ほえー。じゃあ真九郎お兄ちゃんは執事さんのお仕事をしているの？」

「そうだね。執事とはちよつと違うけど、主を守るということは同じだね。さて、真九郎さんの主はいつたいどんな人なんだろうな……」

また弥彦は想像を巡らせる。散鶴は少し悩むように口元に指を当て、ぼつりと呟いた。

「……お姫様だったらいいのにな」

お姫様？お嬢様じゃなくてお姫様なのかと、どちらでいいような疑問を抱いた。

「なんで、散鶴はお姫様がいいんだ？」

「お姫様はね、王子様と結婚して幸せに暮らすの。ちづるもいつかは王子様が迎えに来て結婚できるようにお姫様とお話したいの」

随分と話が飛躍しているが幼い少女が抱く夢としては許容の範囲内だろう。

それがいつかは夢が夢であると気付くときがきてしまうのが辛いところではあるが幼いうちは夢をみるのもいいだろう。

弥彦は夢見る乙女のために一肌脱いでみようと思った。

「真九郎さんが来るまでの間、お姫様ごっこでもしてみるか散鶴？」

「うん！お姫様ごっこしてみたい」

唐突すぎるかと思ったが散鶴は少し興奮気味に弥彦の提案に頷いた。ノリのいい妹でよかったと弥彦は胸を撫で下ろす。

「じゃあ決まりだ。散鶴がお姫様で俺が姫様の付き人、まあ執事だな。おほんっ……散鶴姫様。わたしめになんなりとご命令を下さいますし」

咳払いをしてから芝居がかった口調で弥彦は散鶴に一礼。気分は幼い姫に忠義を尽くす執事。それに散鶴はたいへん満足な顔をして目を輝かせる。

「喉が乾いたから飲み物を持ってきてもらいたいので、爺や」

「かしこまりました。少々お待ちを……」

散鶴姫から命令をもらった弥彦はそそくさと台所に向かうと冷蔵庫を開けジュースを取り出すとグラスにジュースを注ぐ。お盆の上にグラスを置くと居間に戻りテーブルの上に静かに置いた。

「姫様、お飲み物でございます」

「ありがとうございます、爺や」

俺は爺やなのね、と弥彦は苦笑する。散鶴は満足そうなのでよかったですと安心。真九郎が屋敷を訪れるまでの間、散鶴とお姫様ごっこを続けた。

しばらくすると玄関から「お邪魔します」という声が聞こえたので弥彦はごっこ遊びをやめると散鶴の背中を軽くぼんぼんと叩いた。

「真九郎さんが来たみたいだ。お出迎えを頼むよ、散鶴」

「わかった！」

そういうと散鶴は軽い足取りで玄関に向かって走り去った。弥彦はテーブルの上に置かれたグラスやお菓子を片付けながら真九郎と九鳳院を迎える準備をする。

「さてさて……鬼がでるか蛇がでるか。どちらに転んでも嫌だな……」

まだ見ぬ九鳳院に弥彦は思いを馳せた。

第二十二話 波乱の予感（後書き）

如何でしたでしょうか？

二十二話目にしてようやく原作の頭が見え始めました。

次回の話以降から色々と動き出すと思います。

長い長いプロローグはようやく終わり私自身ほっとしております。

相変わらずの駄文ではありますが今後とも生暖かい目でご愛読お願いいたします。

第二十三話 崩月と九鳳院の娘（前書き）

感想お待ちしています

第二十三話 崩月と九鳳院の娘

崩月の屋敷にある居間で弥彦は黒檀の大きなテーブルを濡れ布巾で綺麗に拭いていた。先ほどまで妹の散鶴とお姫様ごつこをしていたのでテーブルの上はグラスの水滴やお菓子のおぼれ滓かすで汚れてしまっていた。来客を迎え入れる前に粗相の無いようにとテーブルを綺麗にしているのだ。

母親の冥理は台所で夕飯の準備をしている。今日は真九郎の他に九鳳院が屋敷を訪れるのでいつもより多くのおかずと量で二人を出迎えるようだ。

台所から漂ってくる匂いから察するに肉じゃがや焼き魚などの和食系が今夜の献立なのだろう。その良い匂いに誘われて弥彦のお腹がぐう、と鳴った。

散鶴はというと玄関で真九郎と九鳳院の出迎えをしている。真九郎を出迎える準備があるとかで先に居間から出て行った姉の夕乃もきつと散鶴と一緒に真九郎を出迎えているはずだ。

ちょうどテーブルを綺麗に拭き終えたところで廊下から軽い足音が二つ、弥彦の耳に聞こえてきた。

ひとりは散鶴だろうがもうひとりはわからない。となると、自然と九鳳院の者の足音となる。

夕乃と真九郎はどうしたのだろうか、と弥彦が心配していると居間に戻って来た散鶴が勢い良く弥彦に駆け寄って来た。

弥彦は散鶴を優しく胸で受け止めると胸の中で蹲る妹を見下ろす。

「どうした散鶴、お客様は一緒じゃないのか？」

「……ちづる、むらさきちゃん苦手」

「むらさきちゃん？」

ムスツとした表情で散鶴が弥彦にぼつりと呟く。むらさきちゃんとはいったい誰のことだろうと弥彦が首を傾げ疑問を浮かべる。

「ほう、ここが《崩月》の棲家すまかの居間か。悪くない」

弥彦の聞き覚えの無い声が廊下から聞こえた。

居間に自分たち以外の人間の声が聞こえたので弥彦は声が出た方に目を向けた。

そこに居たのは堂々とした態度で胸の前で腕を組み、大きくて鋭い瞳で居間を見据えるひとりの幼い少女。年齢は今の自分と同じ歳くらいだろうか。

長い髪、細い手足、薄い唇、白い肌、少女の全てにまるで童話や御伽噺に出てくるような王族の気品を感じさせる。

少女愛好の趣味など微塵も無い弥彦でさえ、その整い過ぎるほどの少女の容姿に目を奪われた。

少女の服装は男物らしきTシャツと半ズボンを身につけ、その上からジャンパーを羽織ったもの。

これでドレスなど着ていたら、絵本から抜け出てきたお姫様だと言われてもきつと弥彦は信じていただろう。

幼い少女は弥彦の胸の中で蹲る散鶴を「ふんっ」と鼻を鳴らし一瞥いちへつすると、その鋭い瞳に敵意を込めながら弥彦を睨みつける。

少女に睨まれた弥彦はたじたじになるも、こちらも少女をちゃんと見据え、口を開く。

「初めまして。俺の名前は、崩月弥彦。ここにいる散鶴の兄だよ」

まだ弥彦の胸から離れることのない妹を指で示しながら弥彦は自己紹介した。

弥彦の名前を聞いた少女は敵意の籠もった視線を一瞬和らげると「

おまえが弥彦か……」と小さな声で呟いた。
どうやら少女は自分のことを知っているみたいだ。いったい誰から聞いたのだろう。真九郎か夕乃からだと思うがここは一旦保留しよう。

少女は小さな胸を張り、顎を上げ、腰に手を当てながら堂々とした態度で弥彦にこう言った。

「わたしは、九鳳院紫だ」

居間中に響くような綺麗でそれでいて威厳のある声。幼い少女から発せられるものでは断じてないそれは弥彦の耳に強く残る。

初対面の人間に対して横柄な態度と堂々とした物言い。まだ幼いというのに人格が既に形成されている。さすがは《九鳳院》といったところだろうか。

「よろしく、紫ちゃん」

九鳳院紫と名乗った少女は弥彦に名前を呼ばれて顔を顰める。
なにか粗相でもしてかしたか？と弥彦は心配になる。

「ちゃんはやめろ、わたしのことは呼び捨てで良いぞ」

「そうか、なら紫と呼ばせてもらうよ。俺のことも弥彦でいい」

自分の心配がいらぬものであったことに弥彦は胸を撫で下ろす。
弥彦が呼び捨てに紫の名前を呼んだことに納得したのか紫は「うむ」と頷いた。

よく出来た子だな、と内心で感心しながら弥彦は視線を紫から自分の胸の下に向ける。

「ほら散鶴、いつまでそうしているんだ。お客様の前だぞ、離れるんだ」

「……わかった」

渋々といった感じで散鶴は弥彦の胸から離れる。それから紫のことをちらちらと落ち着きのない様子で視線を送る散鶴。

その視線に気が付いた紫はうっとうしそうに「なんだ、わたしに何か言いたいことでもあるのか」と散鶴の様子に痺れを切らし少しイヤついた様子で散鶴を睨む。紫に睨まれ、すっかり萎縮してしまった散鶴は弥彦の背後に隠れてしまった。

自分の背後で服の裾を小さな手でしっかりと握り、紫のことを弥彦の体を壁にしながらかおっかなびつくりに見つめる散鶴。

それを正面から堂々と見据える九鳳院紫。両者の間には既に目に見えない防衛線が引かれているようだ。

……やれやれ、これは大変だな。

弥彦は背後に隠れる散鶴とそれを睨みつける紫に挟まれながら天井を見上げた。

居間にいるのに立ち話も変な話なので弥彦は紫を居間で寛いでもらえるように案内する。弥彦の言動のひとつひとつに警戒を崩さない紫の様子に弥彦はまいったな、と苦笑。

《崩月》という濁流たる穢れに敵意を示し緊張を緩めない紫。《表御三家》にここまで警戒され、嫌われる《裏十三家》のひとつ《崩月》たる自分の家系に弥彦はため息を吐く。

紫は畳の上でちょこんと背筋を伸ばし、夕乃にも負けずとも劣らない綺麗な正座をして大人しく静かに座る。紫から微妙な距離間を保ち散鶴も座る。

なんとも居た堪れない居間の空気に弥彦は台所に一旦避難する。台所では夕食の準備中の冥理が居間から台所に逃げ込んできた弥彦を呆れた様子で迎え入れた。手に持っていたおたまを置き、冥理は前屈みに姿勢を崩すと小さな声で弥彦の耳もとで話す。

「……お客様が来ているっていうのに台所に逃げてきてどうするのよ、弥彦」

「なんていうか、今までに感じたことのないプレッシャーを感じるんだよお母さん」

情けない弥彦の言葉を聞いた冥理は「まったく、もう」とため息を吐くとゆっくり立ち上がり台所にあるテーブルの上にお盆を置き、更にその上に三人分のジュースとお菓子を載せる。

「これを持って、居間に戻りなさい」

「了解」

弥彦は冥理から渋々お盆を受け取ると台所から居間に移動する。

居間に戻った弥彦を迎えたのは不機嫌そうな紫と落ち着かない様子の散鶴。

ふたりは会話をすることはないようだ、それもそうか、妹の散鶴は大の人見知りで恥かしがり屋の少女。家族以外とは話すことはないのだから。

さすがに九鳳院の娘と二人っきりの相席は散鶴には酷過ぎたかと弥彦は反省。

テーブルの上にお盆を載せるとジュースを紫と散鶴の最寄にコトンと置いた。紫は差し出されたジュースが注いであるグラスを訝るいぶかように見つめる。

散鶴は喉が渴いていたのかグラスを小さな両手でしっかりと持つとストローを口に咥え、一気飲みでもするかのように、物凄い勢いでグラスの中のジュースが散鶴の喉の中に消えていく。

ジュースを飲み干してしまった散鶴はすっかり空になったグラスを手に持ったまま席を立つと、飲み物のおかわりを貰いに台所に消えた。

その間、紫は弥彦から差し出されたグラスにさえ手を触れずに黙ったまま正座をして佇む。喉が渴いていないのだろうか、それともジューズなんて庶民の飲み物は天下の九鳳院の口には合わないものだから飲まないのだろうか。不思議に思った弥彦は紫に尋ねた。

「紫はジュースを飲まないのか？」

「……毒が入っているかもしれないから、わたしは遠慮させてもらう」

弥彦の予想を斜め上にいく紫の回答。こればかりには弥彦は黙ることしかできない。本当に信用無いんだな、崩月つちづきつて。

紫がここまで徹底的に警戒する理由は察するが、正面からこうキツパリと言われるのはあまり快くない。

「毒なんて物、入ってるわけないだろう。紫は表御三家の九鳳院だろうが真九郎さんがうちに連れて来た大切な客人だ。客人にそんなふざけた真似はしない」

弥彦の言葉と表情を吟味するように紫はじーっと弥彦を見つめた。そしておもむろにテーブルに置かれたグラスを手に取るとストローに口を咥えジュースを一口飲んだ。その様子にホッとする弥彦。

「……わかってくれたか」

「すまなかつた。おまえの言葉には嘘偽りはない。わたしの無礼を許せ」

「いいよ、気にしちやいないからさ」

「……やはり、おまえは変わった奴だな。《崩月》だというのに……」

少しだけ表情を綻ばせ紫は弥彦を見つめる。俺ってそんなに変わった男だろうか、と弥彦は自分を見つめ直すがよくわからなかった。ふと先ほどの紫との自己紹介のことを思い出した弥彦は紫に尋ねる。

「最初に自己紹介したときから気になってたんだけど、紫は俺のことを前から知っているみたいだけど、誰から俺のこと訊いたの？」

「なんだ、そんなことを知りたいのか」

お菓子を頬張りながら紫は意外そうな顔をして言った。

正直に言えば、なぜ真九郎に護衛の依頼を頼んだのか、九鳳院家のことなどを詳しく訊きたいところではある。だが、余計な詮索は裏世界では無用。

「ちょっと気になったからな。真九郎さんから聞いたのか？それとも夕乃お姉ちゃん？」

紫はどちらも違つと首を横に振る。

ならいつたい誰なんだ？九鳳院の娘に崩月家の長男のことを教えるなど無意味のような気がしてやまない。

「わたしが真九郎のところを訪れる前に柔沢紅香からおまえのことを話で聞いたのだ」

「紅香さんからだって？」

そうだ、と紫は肯定。予想外の人物の名前に弥彦は驚いた。自分と紅香の接点は夏休みの悪夢、悪宇商会との一件だけ。あの時は為す術もなく斬島切彦に殺されかけたとき紅香が颯爽と戦闘に介入し、戦場から弥彦を救ってくれた。

法泉に護衛の依頼として頼まれていたものだとしても、この恩は一生忘れるはずはない。

「おまえのことを紅香は『手にかかる息子のような子供だ』とわたしに話してくれた」

「あの柔沢紅香が俺のことを息子のようだ、か……」

「紅香から話を聞いて崩月弥彦という男がどんなものか気になったな。そんな時に五月雨荘に夕乃が現れ、真九郎とわたしを崩月の屋敷へと招待してくれた。これはおまえに一目会ういい機会だと思っ てわたしはここに来た。まあ《崩月》の棲家に興味があったという ほうが大きかったかもしれないがな」

「なるほどな」

紫の説明で弥彦の疑問は曇りをひとつも残さずに解消した。

紅香のことに關しては信じられない、という気持ちとあの柔沢紅香に息子のようだ、と云わしめた喜びの気持ちとで半々な状態だ。

弥彦は残り少ない残量のジュースをストローでズズズと吸い込むと空になったグラスをお盆に置き、壁に立てかけてある置時計に視

線をやる。

紫が居間を訪れて約三十分ほど。夕乃と真九郎の姿が見えないのはきつと母屋の裏にある道場で二人つきりで稽古でもしているからだろう。

男女で二人つきりという言葉に胸が踊るものが多いだろうが、場所が崩月の道場そして相手がああ崩月夕乃とくればその気持ちの間違いだと身をもつて味わうだろう。

稽古は一時間ほどで終わると予想して、後三十分はあの二人はこちらに戻ってこない。

紫の話の相手は面白いものがあるが、弥彦の言葉のボキャブラリーが限界を超えそうであるから会話が弾まない。

散鶴は台所に行ったきりで戻ってくる様子はない。さて、どうしたものか、と弥彦が新聞のテレビ欄を広げ番組表をくまなくチェックする。

するとこの場を凌ぐことができる起死回生の一手が浮かんだ。

もう一度、弥彦は壁時計を見て時間を確認。始まるまで5分前といったところか。

ここは我が国自慢のサブカルチャー、大人から子供まで楽しむことのできるアニメに頼ろうと弥彦は居間に据え置かれているテレビをリモコンからの信号命令で起動させる。

テレビの画面に映るのは、どこかの化粧品会社のCM。それからいくつかの番組宣伝を挟むと画面はパツと切り替わり、軽快な音楽をスピーカーからながしながら子供向けのアニメが始まった。

その音楽に誘われるように台所から散鶴がひょっこりと顔を居間に覗かせる。いつも散鶴が観賞しているアニメであるので気になって我慢できないのだろう。

弥彦は散鶴を手招きすると散鶴は嬉しそうに台所から居間に戻ってくると弥彦の胡坐を掻いた膝の上に身を預け座った。

……またそれか。

絵本を読み聞かせたときと同じような体勢になったので弥彦は内心で愚痴を漏らす。でも、悪い気がしないのは崩月散鶴だからだろう。紫は弥彦たちを横目にテレビに映るアニメを興味深そうに見つめる。

「紫はアニメを見るのは初めてなのか？」

「いいや、初めてではない。真九郎の部屋で幾度か見たことがある」

「へえ、そうなのか。それならアニメは好きか？」

「どうだろうな……あまり見ることのなかったものだからな……」

まるで今まで下界とは異なる場所で生活でもしていたかのように遠い目をして紫は応えた。その儂げな紫の様子に弥彦はなにもいうことができなかった。

アニメもそろそろ終盤戦。現在の時刻的には夕乃たちが戻ってくる頃だろうと弥彦が思っていると、ちょうど廊下から少し疲労感を漂わせる真九郎が居間にやってきた。

よほど夕乃にこっぴどく絞られるだろう。ご愁傷さまです真九郎さん、と弥彦は内心で真九郎に手を合わせる。

真九郎が居間にやってきたことに気が付いた散鶴は弥彦の膝から勢い良く立ち上がると直ぐに真九郎に駆け寄る。

真九郎は散鶴を優しく受け止めると、抱き上げた。真九郎に抱き上げられた散鶴は嬉しそうに笑った。

その光景を横目に紫が「ふん、ガキだな」と嫉妬でもしているかのように呟くとつまらなさそうにストローを口に咥えるとジューズを飲む。

紫の子供らしい一面が観れた弥彦は「やっぱり、まだ甘えたい年頃

なんだな」と内心でひとりごちた。

弥彦がひとりそんなことを思っていると、台所から冥理となぜか巫女の袴姿の夕乃が姿をみせた。冥理は真九郎とあいさつを交わすと、足りない生活用品はないかと真九郎に尋ねたが真九郎は丁重に足りています、と答えた。

それから冥理は懐から小さな茶封筒を取り出すと真九郎に差し出した。真九郎は茶封筒を受け取らず慌てた様子で断った。たぶん封筒の中身は真九郎へのお小遣いだらう。

そして真九郎は何でも手伝います、と冥理たちに申し出たが殿方はお待ちくださいと丁重に断られた。散鶴も手伝いを希望したので真九郎は抱きかかえていた散鶴を床に下ろす。冥理たちの後を追って台所へと消えていった。

弥彦も手伝おうかと思つて迷つたが冥理と夕乃それから散鶴がいるのだから大丈夫だろうとひとり納得すると真九郎と会話をしている紫を見つめた。真九郎に放っておかれたのが不満のご様子で少々、機嫌が悪いようだ。

九鳳院の姫君のご機嫌取りは真九郎に任せるとしよう、と弥彦は紫の相手を真九郎に任せると席を立ち居間から退出する。

トイレで用を足すと手を洗い廊下を歩き居間に戻るところでちょうど今しがた帰宅した法泉と出くわした。法泉の片手には紙袋、暮会所の帰りになにか買つてきたようだ。

「おかえりなさい、お祖父ちゃん」

「おう、ただいま」

法泉とあいさつを交わした弥彦は一応、紫が屋敷を訪れていることを法泉に伝えた。

「その話は冥理からすでに聞いた。安心しろ、九鳳院の娘に荒事を

することはない。ところで弥彦、焼き芋食うか？」

法泉は手に持っていた紙袋から焼き芋を取り出すと弥彦に手渡した。ありがとう、と一言お礼を言ってからまだ温かい芋を受け取った弥彦は芋を半分に折ると綺麗な山吹色の芋を一口齧る。

焼き芋の甘い味を味わいながら弥彦は法泉と一緒に居間に戻った。居間に戻ると真九郎の直ぐ傍で警戒するように紫が正座をして佇んでいた。さすがにまだ崩月つづきへの警戒心を解いてはくれないか、と弥彦は焼き芋を頬張りながら床に腰を下ろした。

法泉は久しぶりに会う真九郎と挨拶を交わすと、真九郎の傍で警戒心を隠すことなく法泉を睨みつける紫の様子に微笑む。そして真九郎たちと向かい合うように床に腰を下ろすと紫がおもむるに口を開いた。

「……おまえが《崩月》の当主か？」

「そつだ。《崩月》現当主、崩月法泉」

さすがの九鳳院紫も法泉の気迫にたじろぐ。だが、直ぐに法泉は穏やかな表情で微笑んだ。

「お嬢ちゃん、焼き芋食うかい？」

紙袋から手ごろな大きさの芋をひとつ取り出すと、紫の前で折って見せた。紫は法泉から芋を手渡させるとすぐに口に入れようとしたが、何かに思い留まると芋を手に持ったままもぐもぐとひとり焼き芋を食べる弥彦を見た。

「食わないのか？この焼き芋、美味いぞ」

「……うむ」

なにを思って焼き芋を食べることに躊躇うのだろうか。やはりまた毒でも盛られているのではないかと警戒しているのだろうか。

「変なものなんて入っちゃいない。温かいうちに食べないと焼き芋じゃなくて冷やし芋になっちゃうぞ。まあ、一度冷ました芋も美味いだろうけど」

「そんなことは警戒していない。わたしは焼き芋というものが初めてなのだ。これは皮も食べられるものなのか？」

「ああ、食べるぞ。皮を剥いて食べてもいいけど、俺は皮付をお勧めする」

「そうなのか？おまえが勧めるといふのなら皮付を食べてみるとしよ」

紫は弥彦の言うとおりに焼き芋を皮ごと食べ始めた。もぐもぐと頬張り、「おお」と感嘆を漏らしながらまた芋を頬張る。芋を頬張る紫がどこにでもいるひとりの少女のようにみえた弥彦は微笑んだ。紫は食べる手を止めると法泉に礼を言う。

「美味しいな、ありがとう」

「なんのなんの」

法泉は大らかに笑い、真九郎にも焼き芋を手渡そうとしたが夕乃に見つかった。夕乃は法泉から焼き芋を取り上げる。

「ダメじゃない、お祖父ちゃん。夕食前よ?」

「ああ、すまんすまん。……で、おまえはなんで袴姿なんだ?」

「いいでしょ、別に」

「真九郎の趣味か」

「いいでしょ、別に」

弥彦も夕乃がなんで巫女の袴姿なのか、先ほどから物凄く気になっていたのだが夕乃はその答えを教えてくださいそうにない。そして法泉から弥彦へと夕乃の矛先が変わった。

「弥彦も夕食前に食べるのはダメですよ」

「善処します」

「お返事は?」

微笑みながらの夕乃から「わたし、怒ってますよ」のプレッシャー。こつなるとあとが怖いので弥彦はガクガクと首を縦に振り頷く。

「わ、わかりました」

「よろしい」

満足したように夕乃は踵を返し法泉から取り上げた焼き芋の紙袋を抱えて台所に消えた、かと思いきや夕乃は振り返り真九郎の顔を見つめると問うた。

「これ、似合ってますよね？」

「そうだね」

「ムラムラしますよね？」

「……うん、まあ」

「それじゃあ、まだ着てます」

真九郎に袴姿が似合っているといわれたことが嬉しいのか、それとも袴姿にムラムラされるのが嬉しいのか、どちらも弥彦にはよくわからないがタ乃はニツコリと微笑むと台所に消えた。

その後、黒檀の大きなテーブルの上には刺身や焼き魚、それから肉じゃがに豚汁などの和食系の夕食が色取り取りに並んだ。久しぶりに真九郎を交えた夕食の食卓。それから九鳳院の娘である紫まで一緒に囲む夕食の食卓は和やかに進んだ。

今は海外に出張中である我が家の大黒柱である父親の話や、たわいのない世間話から弥彦の小学校での話まで会話が弾んだ。紫は弥彦の小学校での話を興味深そうに「ふむふむ」と相槌をうちながら時折、弥彦に小学校のことについて質問をしたりしていた。

そんな和やかな夕食が一段落して、終わりテーブルに並ぶ食器を冥理とタ乃が後片付け始める。弥彦も片付けを手伝おうとしたがタ乃が「いいですよ」と制止した。

「弥彦、紫ちゃんとちーちゃん（散鶴）を連れてお風呂に入ってきてください」

「いやいや、紫と散鶴だけで風呂に入らせればいいじゃないか。俺はいいよ」

「いいから、入ってきなさい」

「はい」

有無を言わせない夕乃の様子から弥彦は紫たちと風呂に入ることに頷く。子供を席から外すところから推測するに、真九郎となにか重大な話でもするのだろう。一応、自分も既に裏世界そちらがわの人間のはずなんだけどな、と口には出さなかったが弥彦は渋々と夕乃の提案に納得する。

「紫、俺たちと一緒に風呂に入らないか？」

「風呂だと？」

「そう、風呂だ。どうだ、一緒に入らないか？」

紫は弥彦の提案に悩むように顎の下に手を添え、俯くように沈黙。そして俯いた顔を上げると真九郎を見た。真九郎は紫の視線を受け止めると口を開く。

「崩月家の風呂はすごいぞ」

「なにがすごいのだ？」

紫が真九郎の言葉に興味をしめす。

「全部、木でできてる」

「ほう、木でできた風呂か」

紫があともうひと押しで頷きそうなので夕乃が真九郎の言葉を補足する。

「今日はゆず湯ですよ」

「かんきつ類を浮かべた、木でできた風呂か……」

紫は弥彦のほうを一度ちらっと見ると好奇心に負けたのか「入ろう」と頷いた。紫と一緒に風呂に入る意思を見せたので、さっそく風呂場に案内しようと居間を出ようとしたところで弥彦たちを真九郎が止めた。

「紫、風呂上りには必ず、バスタオルを身体に巻くようにな」

「ま、良からう」

紫は承諾。そして、真九郎は弥彦に言った。

「弥彦、紫のこと頼んだぞ」

「わかりました」

弥彦は頷くと紫と散鶴を連れて居間から退出すると廊下を歩き風呂場に向かう。

脱衣所に着いた弥彦たちは各々服を脱ぎ、裸となる。一応、念のため弥彦は腰にタオルを巻いた。

……まさか自分が九鳳院の者と一緒に湯浴みするときがくるとは思

わなかったな、と弥彦の前でも堂々とした態度で恥らうことを見せない紫を見て思った。普通は家族以外の人間に自分の裸体を見せることは恥ずかしいと思うのだが紫は違うらしい。

服の脱ぎっぷりとそうだが、弥彦の前だというのにまるで恥じらいがない。むしろ、先ほどより堂々としているといってもいいだろう。

……よくわからないやつだな。

弥彦は風呂場の扉を開けると視界を湯気が遮った。しだいに湯気を消えだすと視界がはつきりとして風呂場に紫と散鶴を入れると扉を閉めた。

紫は風呂場を興味深そう見回すと感慨深そうに言った。

「ほう、ヒノキか……悪くない」

「そうだ、うちの風呂はヒノキ風呂だ。気に入ってもらえたか？」

「うむ」

「それはよかった」

紫はどうやら崩月つづの風呂を気に入ってくれたようだ。そのことに安心した弥彦は胸を撫で下ろすと腰を下ろし紫にも座るように指示。

「洗ってやるからここに座ってくれ」

「それくらい自分でできる。わたしを子供扱いするな」

「……すまなかった」

紫は弥彦からボディタオルを受け取ると自分で体を洗い始めた。その様子を横目に弥彦は散鶴の体と自分の身体を洗う。泡だらけの身体をシャワーで泡を洗い流すと、次に髪の毛を洗う。

紫は長い髪を洗うのに慣れていない様子だったので弥彦が「手伝おうか」と申し出たら「頼む」とお願いされた。最初からそういえばいいのに、と弥彦は微笑むと紫の長い髪を洗う。

紫と散鶴を洗い終えた弥彦は二人に湯船に浸かるように促す。二人は湯船に浸かると体の疲れを癒すように気持ち良さそうに目を細めた。弥彦はその間に自分の髪を洗う。髪を洗い終えた弥彦に紫が言った。

「おまえ、その左腕の傷痕はどうしたのだ？」

「ああ、これな」

弥彦は左腕を上げると自分の傷痕を見つめる。紫も不思議そうに弥彦の傷痕を見つめた。

「これは戦闘で負けた敗者の印だよ……」

斬島切彦との死闘を思い出すように自嘲気味に弥彦は答えた。

紫は弥彦の様子から察したのか、それ以上傷痕について詳しく問い詰めることはなかった。しばらくの間、三人で湯船に浸かり風呂を満喫してから紫の「出るぞ」という指示のもと弥彦たちは湯船から上がり風呂場から脱衣所に移動。

バスタオルを紫と散鶴に渡すと各々、濡れた体を拭いた。一通り身体を拭き終えた弥彦は紫に身体をバスタオルで巻くように真九郎の言伝どおりに指示すると「わかっておる」と紫は頷き、バスタオルを身体に巻いた。

紫の姿を真似るように散鶴も身体にバスタオルを巻くと脱衣所から

駆け足で出て行った。

「こら、散鶴！着替えはどうした」

弥彦は手に持った散鶴のパジャマと下着をどうしたものかため息を吐きながら一瞥する。

……いや、まてよ。紫の着替えはどうするんだ？

ここにきて浮かんできた疑問。ここは本人に訊くでしょう。

「紫、おまえ着替えを持ってきてるか？」

「そんなものはない」

「えっ？」

「わたしは着替えを持参した覚えはない」

「そつだよな、今日は崩月ちつきに泊まりじゃなくて夕食に誘われただけだもんな……」

「うむ」

紫は腰に手を当て頷いた。まいったな、と弥彦はパジャマに着替えながら思考する。

散鶴の服は小さいから無理だろうな、下着はサイズがギリギリといったところだろう。姉さんの子供の頃の物なら大丈夫だろうけど、普通残して置かないよな。

パジャマに着替え終わった弥彦は対応策が思いつかず、ここは夕乃

に指示を仰ごうと脱衣所から紫を連れて居間に移動した。

居間には案の定、散鶴が真九郎の腕の中に抱きつき嬉しそうにしていた。その様子を紫はバカにするように鼻で笑い「ふん、ガキめ」と不機嫌そうに言った。そして真九郎に命令するように声高らかに宣言。

「おい、真九郎。そろそろ帰るぞ。着替えを用意しろ」

「あ……」

真九郎は今しがたになって、紫の着替えがないことを思い出したようだ。やっぱりか、と弥彦は困った様子の真九郎を見つめると夕乃が助け舟をだした。

「ちょっと待っていてください。昔、わたしが着ていた物を引っ張り出してきますので」

そういうと夕乃は母屋の奥の部屋へと消えた。夕乃を待っている間に冥理から差し出された麦茶を紫が飲む。弥彦も麦茶を受け取りちびちびと火照った身体を冷ますように麦茶を飲む。

「紫、崩月家のご感想は？」

真九郎が紫にそんなことを訊いた。すると紫は

「恐れるに足らん。百聞は一見にしかず、というやつだ。書物や人から聞いた話からでは事実はわからんものだ。あいつのように、な」

「俺か？」

紫からの視線を受け取った弥彦は自分を指差して疑問符を浮かべる。

「……不思議な男だよ、おまえは。真九郎に近いものを感じる」

「それはいい意味で捉えていいのか？」

「さてな」

不敵な笑みを浮かべながら紫は笑った。やっぱりよくわからないやつだな、と弥彦は改めて思うと手に持ったグラスに注がれた麦茶を飲み干した。

しばらくすると夕乃が戻ってきて散鶴と紫を連れてまた部屋の奥に引込んだ。そして居間に三人で戻ってくると既に紫と散鶴の着替えは終わっていた。

戻って来た散鶴と紫はウトウトと眠い目を擦り大きな欠伸を漏らす。時計を見れば、いつもは散鶴が眠っている時刻。

真九郎は眠そうな紫を背負うと夕乃から紙袋に入れた子供用のパジャマ数着を受け取ると「ありがとう、夕乃さん」と礼を言い夕乃と一言二言会話をしていた。

その間弥彦は真九郎の背中でもうぐつすり寝息をたてる紫を見つめると「まるで真九郎と紫が兄妹みたいだな」と思った。

そして真九郎と紫を屋敷の門前まで夕乃と一緒に見送ると街灯と月明かりが照らす夜道を歩いていく真九郎の後ろ姿が見えなくなるまで門前で立ちつくした。

「……真九郎さん、大丈夫かな。九鳳院の護衛なんて危険が常に付き纏^{まと}うんじゃないのかな」

門前でぽつりと弥彦が呟いた。

「真九郎さんならきつと大丈夫ですよ。御強い殿方ですからね。心配は必要ありません」

夕乃はそういうと踵を返し門の中へと戻っていった。

「頑張つて下さいね、真九郎さん……」

弥彦の言葉は夜の寒空の下、夜風に乗って消えていった。

第二十三話 崩月と九鳳院の娘（後書き）

如何でしたでしょうか。

やっとこさ、九鳳院紫のご登場です。

ご感想お待ちしています。

第二十四話 疑惑（前書き）

「愛読お願いします」

第二十四話 疑惑

場所は弥彦が週末の一日だけ通うことを法泉から許された町道場。時折、窓格子から吹き付ける隙間風に乗ってどこからともなく枯れ葉が床に舞い落ちる。十一月の寒さを忘れさせるようなほどに、場内は稽古の熱気と怒号に包まれている。

そんなところで、額に薄っすらと汗を流しながら弥彦は稽古に没頭していた。ここ最近には空手の基礎的な型を師範である武藤環から教えてもらっている。教えてもらった型に合わせて流れる動きで一連の型を修める。

弥彦と同じ門下生であり友人でもある天王寺奉莉や円堂円、年下の若い少女である堕花光は、弥彦が現在練習中の型より更に複雑で高らかな技を組み合わせた型を練習している。

一糸乱れぬ、完璧な型の動作。見ているもの魅了させ、見惚れさせる彼女たちの姿に弥彦は目を奪われた。なんて無駄のない、流れるような動きだろうか。

それに比べて、俺がやっていることときたら……。

弥彦は自嘲するように溜め息を吐くと彼女達に嫉妬にも似たような感情が芽生えていることに対して自分に嫌気が差す。

どうも崩月弥彦という男は空手の型というものが苦手だ。既に決まっている一連の動きを拳の突きや蹴りを織り交ぜながらする型というものが自分の行動を制限し、やる気を削いでいる気がしてやまないのだ。

正直に言えば型を覚えるのが面倒くさい、不器用。そんなことを弥彦は友人である少女、天王寺奉莉に一度だけ言ったことがある。

そしたら彼女は怒りを視線に籠めるように弥彦をキツク睨みつけこと言った。

「あなた、自分が強いからって、あんまり調子に乗ったことはいうもんじゃないわよ。確かに空手でやることはあなたの崩月しえいで、稽古しているものに比べたら生温いものかもしれない。ただどね、その武術を限界まで修めようとしている人間がいるってことを覚えておきなさい、いいわね」

弥彦は奉莉のお叱りをあまんじて受けた後、自分が軽率な事を言った、とあとから反省した。

そんなことがあつたなと急に思い出しつつ、苦手意識が拭いきれることが未だに難しい、難題な型の練習を黙々と反復練習を繰り返すのだった。

その後、しばらくした後に環が「休憩ーっ！」と場内に響き渡るような大きな声でいうと稽古中の門下生たちは稽古の手を止め、各々自分の荷物を置いた場内の端に散らばると、タオルで額を流れる汗を拭き、水筒に入れた冷たい水で喉の渴きを潤す。

弥彦もその例外ではなく、自分のタオルと水筒を回収するとこの熱気に包まれた場内の空気からすこし外れようと考え、外の風にでも当たろうと場内をあとにした。

天候は曇り。どんよりとした曇り空がいまの自分の心境を表すように、弥彦の心もまた曇っていた。

場外に移動した弥彦は入り口にある小さな段差に腰を下ろす。首にタオルを掛け、水筒の付属コップを使わずに直接、冥理特製の麦茶を口の中に流し込む。勢い良く流れ込む麦茶は食道をすすると通り弥彦の乾いた喉を潤した。

人通りがまったくない道場前にある交通路をぼんやりと見つめると弥彦はついこの間のことを思い出す。

真九郎が連れてきた九鳳院紫のことだ。《表御三家》のなかでもひ

ときは突出した力を所有する《九鳳院》財閥。その九鳳院の子女が自分の兄弟子である紅真九郎の元で寝泊りを共にしているという。あの柔沢紅香から頼まれた護衛の依頼、どうみてもまだ駆け出し始めの揉め事処理屋である真九郎には荷の重すぎる依頼。

そのことが気になってしょうがない弥彦は祖父である法泉に内緒で法泉の部屋を無断で出入りをすることを繰り返し、本棚からある一冊の書物を見つけた。

テレビの時代劇や歴史の教科書の写真、または博物館でしか御目にかかれないような古めかしい和装本。

背表紙はなく、表紙には墨で書かれた現代の漢字の書体とは違う、なんとなく日本語かな、と理解できるような文字。本の中身は表紙と同じような書体の漢字と平仮名で書かれたものだった。

これは自分には解読は無理そうだ、と弥彦が諦めて本を元の場所に戻そうと片付けている途中で法泉に見つかった。

「おまえはいつたい、俺の部屋に無断でコソコソとなにをしているんだ」

と鬼のような形相で弥彦を叱る法泉に涙目になりながら弥彦は打ち明けた。

自分は九鳳院についての情報を探している、もしかしたら《崩月》の当主である法泉であれば九鳳院の情報が書かれた書物の一冊ぐらい所持しているだろう、と思ったのだと。

弥彦の言い分を聞いた法泉は「おまえってやつは……」と呆れた様子で弥彦から本をひよいつと奪い取ると本を片手に持ちつつ弥彦に言った。

「……で、おまえは、いつたい九鳳院のなにが知りてえんだ？」

無断で部屋の中を物色していた自分をもっと叱るものだと思って、

身構えていた弥彦は法泉のその一言で拍子抜け。身体力が抜けた弥彦はその場で正座をすると深々と腰を曲げ、頭を下げながら言った。

「……九鳳院の護衛、そして柔沢紅香の目的について、訊きたいのです」

「わるくない、直球な質問だな。して、それを聞いておめえはどうするんだ？」

「別に、どうもしません」

これは嘘。口からのでまかせ。弥彦は場合によっては真九郎を手助けするつもりでいる。弥彦の裏腹に気付いているのか、それとも気付いていないのか、法泉は弥彦を、目を細め見据える。

「真九郎がうちに連れてきた、九鳳院の娘が気になるから訊きたいんじゃないのか？」

「……そうです」

「なら、正直にそう言えばいい。無断で俺の部屋を荒らすような事をする必要はない。おめえはもう裏世界側（うらよび）の人間だ。一通りのことなら俺が教えてやるよ、他言は無用だがな」

「ありがとうございます」

弥彦は深々と法泉に頭を下げ、礼を述べる。そして顔を上げると法泉が持った和装本を見つめる。

弥彦の視線の先に気が付いた法泉は片手に持った和装本を弥彦に手

渡すと「読んでみる」と一言。そして、弥彦が見つけた和装本こそが表御三家と裏十三家について書かれたものだと説明。そのことに弥彦は目を見開き驚いた、が手に持った和装本は自分が読めないと一度諦めたもの。自分には古書を読み解く知識がない。弥彦は和装本を法泉に返す。「俺には読めません」と正直に白状。すると法泉は「そうだろうな」と愉快げに笑った。

弥彦は法泉が話し出すのを黙ってじっと待つ。あの天下の名家、九鳳院の情報だ。《崩月》に身を置いている自分としては大変興味深いし、自分の今後、すべきことを定める指針となる。法泉は一度、おほん、と咳払いをひとつしてから真剣な面持ちで話し出した。

「まずは護衛についてだな。九鳳院家の護衛は、近衛隊このえたいといわれる私兵集団が務めている」

「……近衛隊ですか？」

自分の聞きなれない単語に弥彦は聞き直す。

「そうだ。近衛隊はいわば、九鳳院に仕える軍隊のようなものだ。軍隊といっても自衛隊よりも性質たぶの悪いものでな、主である九鳳院の障害となる存在を圧倒的な武力をもって排除するようなやつらだ。まさに、九鳳院の私兵だといえよう」

「おっかないですね。私設の武装集団ですか……」

法泉は、そうだな、と弥彦の言葉に頷き、話を続ける。

「近衛隊とひとまとめにいつても、なかなかくえないところがあっ

てだな。どんな集団にも必ず、上の者と下の者がいるものだ。近衛隊の下っ端は銃火器で武装した者たちばかりでな、これくらいのもやつらならおめえでも難無く倒せる」

「……はあ。俺でも、ですか。それで、上の者は？」

「近衛隊の中でも突出した力と技を持つ集団を幹部クラスといつてな。こいつらは真の強者^{つわもの}は飛び道具を用いない、という独特の思想のもとに、銃火器を一切装備しないようなやつらだ。その顔ぶれは裏世界でも一流のやつらがほとんどでな。幹部クラスともなると、おめえが戦鬼になってようやく勝負になるか、ぐらいだな。まあ、おめえが幹部とやりあうことはまずないから安心しろ」

法泉は現在の弥彦の戦闘力の身の丈に合わせて冷静に分析した結論を弥彦に教える。

九鳳院のお膝元である近衛隊とはとんでもない集団なんだな、と弥彦は他人事のように感心した。有り余る力を所持しながらも九鳳院家という主を守る近衛隊。表の世界で最強といつてもいいだろう。でも。

……それなら、おかしくないか？

弥彦は自分の頭のなかで疑問を浮かべる。

近衛隊が主を守る防人だというのなら、紅真九郎に九鳳院紫の護衛を頼むのはおかしい。お門違いだ。理にかなわない。

軍隊のような武力を所持しているというのに、まだ駆け出し始めで無名の揉め事処理屋である真九郎に護衛を頼むのは腑に落ちない。

不自然だ。

弥彦のなにかに引っ掛るような表情で思考する姿を法泉は口元を綻ばせ見つめる。

「どうやら気付いた、みてえだな。近衛隊という護衛のプロ集団がいるにも関わらず、なぜ九鳳院紫は紅真九郎に護衛を依頼したのか。近衛隊に頼れない事情があるとするならば、なぜ柔沢紅香が真九郎の代わりに護衛を引き受けないのか。おめえの悩むところはそんなところだろう」

まさに弥彦が考えていたことを言い当てた法泉。弥彦は法泉の言葉に大きく頷く。

「そのとおりです。俺が紫の立場であつたのなら間違はなく自分が信用のおける近衛隊を頼ります。それがダメなら、超一流である揉め事処理屋の紅香さんを頼ります。だけど、真九郎さんには悪いですが、どこの馬の骨かもわからない新人の揉め事処理屋には護衛の依頼をすることは絶対にありません。だって、そんなのナンセンスだ」

「そこまで理解できているなら、おめえはこの一件、どう考える？」
まるで弥彦を試すように法泉は口元に笑みを浮かべながら尋ねる。
弥彦は頭を回転させ思考をフルに活用する。いま、考えられることはなんなのか。柔沢紅香の思惑とは目的とはなんなのか。

「……………誘拐、でしょうか。真九郎さんには護衛をして欲しいという偽りの依頼で紫を五月雨荘に預ける。その間に、紅香さんは次の段階へと行動を開始する。……………どうでしょうか？」

自分で考えたものが飛躍した考えであるのは充分に承知のうえだ。恐る恐る、弥彦は法泉の様子を窺うように顎を上げ、視線は法泉の目に留める。

弥彦の答えを聞いた法泉は先ほどのように呆れたような眼差しで弥彦を見据えると期待はずれだと溜め息。

「ついこの間のことをよく思い出せ、弥彦よ。おめえには、九鳳院のお嬢ちゃんが誘拐されているように見えたのか？うちで夕飯と風呂を一緒にしたのはおめえだろ。その目は節穴か？飾りか？」

と、もつともな指摘をひとつ。そして、孫の不甲斐無さに叱責。

弥彦は落胆する法泉の様子に顔を俯かせ、自分の考えの浅はかさと悔しさに唇を噛み締める。

屋敷に真九郎と一緒に訪問した紫の様子は崩月に警戒すること以外、いたって目立った、おかしな点はなかったはずだ。

もし、誘拐されているものであれば助けを求めるか、なにかしらの行動をおこすはず。弥彦の判断ではあるが九鳳院紫という少女は聡明で賢い少女だ。その彼女が誘拐された、と考えるのは不自然か。それに九鳳院の子女を誘拐するメリットが思いつかない。仮に誘拐だとしても、そのことを近衛隊が黙っているはずがない。

主を誘拐した不届き者を地の果てまでも追い詰めて、肉片も残すことなく始末することだろう。

どうみたってデメリットのほうが大きすぎる。九鳳院相手に戦争でも仕掛けるなら話は別ではあるが、さすがにそこまでぶっ飛んだ思考なんて柔沢紅香は持ち合わせていないだろう。

法泉は顎に蓄えた髭を手で撫でながら厳しい表情で弥彦を見据えてはおもむろに口を開く。

「紅香のやつは誘拐なんて卑劣で卑怯な真似はしねえよ。あいつは人様の事情を屁とも思わねえ、どうしようもないやつだがな、子供をくいものにする真似は絶対にしねえ」

紅香との古い付き合いからか、それとも勘か。法泉は紅香のことに

についてはそう断言した。

法泉のいうことはきつと正しいのだろう。柔沢紅香は誘拐なんて真似は絶対しない。だが、そう考えると弥彦の疑問が振り出しに戻ってしまう。

……なぜ、九鳳院紫は近衛隊を頼らずに紅真九郎に護衛を依頼したのか？

柔沢紅香と九鳳院紫との間でなにか密接なことがあるのは間違いない。それがいつたいたいなんなのか。紅真九郎を頼らずにはいられない。なにか。柔沢紅香の目的とはなんなのか。

どうも先ほどからの得ない考えばかり、自分にはおつむが足りないと思いきや知らされる。柔軟な発想と思考力、それから決断力が喉から手がでるほど欲しいものだ。

自分に無い物をねだってもしょうがないと弥彦は頭を切り替える。弥彦が黙ったままなので法泉は話を切り上げるようにこつ話を切り出した。

「紅香のやつ目的を知りたければ、九鳳院の闇を垣間見ることになる。九鳳院といえど輝かしい表舞台での姿があれば、その裏で公には公開することのない闇の姿が潜んでいる。九鳳院の裏の顔を知ることでおのずとおめえの求める答えが導き出せるかもしれんな」

答えが導けると聞いて弥彦は俯いた顔を上げると是非とも教えて欲しいと法泉に問い質す。

「九鳳院の闇、ですか。それはいつたいたいどんなものなんですか？」

「残念だが、おめえが知るにはまだ早いことだ。それにこれを知ったところでおめえが真九郎のことで首を突っ込むのがあきらかに目

に見える」

やはり俺の考えなどお見通しか、と弥彦は肩をすくめる。

「俺が真九郎さんに肩入れするのはなんの問題もないじゃないですか。彼は俺の兄弟子であるのと同時に俺にとつて大切な兄でもある。その兄を弟が手助けするのは悪いことなのですか」

「おめえが言う、手助けっていうものはいつも度が過ぎる。よく、夏休みでの一件を思い出せ、いったいおめえは何をすることができた？紅香の助けがなければ、今頃のおめえはあの世だよ。そのことはおめえが一番、身に沁みているはずだ」

悔しいが法泉の言っていることは認めざるおえない。しかし、好奇心や遊び半分の気持ち、ましてや青臭い正義心をかざしてむやみに首を突っ込む気ではない。純粋な気持ちで紅真九郎の手助けを申し出たいからこうして法泉にお願いしているのだ。

「しかし……！」

弥彦は法泉にくらいつく。自分の気持ちを法泉に認めてほしい一心で。

「真九郎のことはあいつ自身が解決するべきことだ。まがりなりに真九郎は崩月の内弟子である。真九郎は無数にある人生の選択のなかから自分の意思で揉め事処理屋になる道を、選択肢を選んだ。遅かれ早かれ、真九郎は自分の命の選択を握る瞬間がやってくる。それが紅香のやつからもたらされただけのはなしだ」

「やはり九鳳院と関わるのは危険なんじゃないですか！それなら俺

が真九郎さんの助けに！」

感情的になる弥彦とはよそに法泉は常に落ち着きをはらい弥彦を見据える。その眼差しはどこか出来ない孫を哀れんでいる気がした。

「くどいぞ、弥彦。まだ、わからんのか。貴様ではどうにもならんむやみにこの件に首を突っ込めば今度こそ、お前は亡き者になる。それに冥理たちと交わした約束を破るつもりか？」

「そんなつもりは……！」

冥理たちと交わした約束。それは弥彦自身の身の安全。危険なことをするのはやめてほしいという母親の息子を想う誓い。いまの弥彦を縛る足枷。

「わかつているのなら、愚かな考えはやめろ。おまえのような男はこの世界では早死にするだけだ。自分の気持ちを律する術は教えただぞ。常に気持ちを強く持て。物事に対して感情だけで動けば馬鹿をみるのはあきらかだ」

「……わかりました」

力なくうな垂れるように肩をおとし、弥彦は法泉の言葉に頷いた。自分が真九郎と紫の件に関われば、また夏休みの不祥事を繰り返すのだと、自分には為すべきことはないと冷たくて暗い現実が弥彦を立ち止らせる。そして弥彦の思考は深く暗い闇のなかへと吸い込まれる。

大人になれ、崩月弥彦。おまえはどうせ何も為さずに人生をただ怠惰におくるだけだ。

……そんなの嫌だ。二度目の人生だぞ。前世とは違う！俺は生まれ変わったんだ！最高の環境と最強の力がいまの俺にはあるんだ！

そんなのただの飾りだ。いくら身体を鍛えようが、おまえの本質は前世から変わらない。

現実から目を背け、自分の為すべき事も生きる目標も、なにもわかっていない。

余計な知識と力を手に入れたことで自分が強くなったとでもいうつもりか。それは錯覚だ。

おまえはただの弱虫で臆病で卑怯で自分の力を周囲に自慢して見せびらかしたいだけの子供だよ。

……そんなことは、ない。

なら、なぜ紅真九郎を手助けしたいなどと戯言を言った？

おまえが助けたい人間は真九郎じゃなくて本当は九鳳院紫なんじゃないのか？

あの少女のことが頭から離れないのだろう？

かわいいなんてもんじゃない。あの細い手足、長くてきめ細やかな漆黒の髪、薄い紅色の唇、何事にも捉われない真っ直ぐな瞳、幼くしてどんな女よりも極上な容姿。

あれを自分のものにしたいのだろう？さぞ、いい声で鳴いてくれるだろうな。

……違う！俺はそんな下種な考えなんてもっちゃいない！

なぜ、そう言いきれぬ。紫をひと目見た時からおまえは彼女に無意識のうちに惹かれていた。そして彼女と一緒に生活する真九郎を嫉ましく想っている。ほら、簡単な問題だ。おまえは九鳳院紫という

少女に惚れたんだよ。

……まさか、そんなわけあるもんか。俺は……

「……ただ、誰かの役に立ちたいだけ、なんだ」

背中を丸め、肩を落とし、弱弱しく身も心も萎縮してしまった弥彦は空を仰ぎながらぼつりと呟いた。

誰にも理解されなくても構わない。自分のおごりだと思われてもかまわない。それでも崩月弥彦は真九郎を手助けしたい。

真九郎の身に危険が迫るなら、その脅威から守るのが家族というものではないのか。

いくら感情を殺し、自分の気持ちを押さえこんでも、この気持ちは揺るがない。

この気持ちは失くしてはいけないものだ。ずっと自分のなかであり続ける。

「弥彦先輩。こんなところにいたんですか」

ふいに自分の名前を呼ばれたので後ろを振り返った。そこには墮花光が微笑みながら弥彦の背後に立っていた。

「ああ、光ちゃんか」

先ほどまでの沈んだ気持ちを振り払うとなるべく平静を保ちながら弥彦は光に声を掛けた。光は弥彦の隣に歩み寄りそつと弥彦の隣に腰を下ろす。

「こんなところにいると風邪ひいちゃいますよ。さつき奉莉先輩から道場のみんなについて手作りのお菓子を戴いたところなんです。奉

莉先輩、弥彦先輩のこと探していますよ」

あいつ、本当にお菓子を自作してきたんだな……。いつぞやの学校での帰り道、自分と交わした約束を奉莉が果たしたようだ。

器用でまめな奴だな、あいつは、と弥彦は口元を綻ばせた。

「それはいいことを聞いたな。もう少しだけここにいようかな」

おどけたように弥彦は言った。それに光は苦笑すると

「困った人ですね、弥彦先輩は。早く戻らないと環さんが全部のお菓子を食べちゃいますよ」

「ありえそうで恐いな、それ」

冗談でも武藤環なら本当のことになってしまいそうなので弥彦は重い腰を上げ、その場で立ち上がる。光は座ったまま弥彦を見上げる。

「そう思うなら早く戻りましょう。環さんの食欲は待つてはくれませんよ。奉莉先輩からお菓子を戴いた後はあたしと組み手の相手をお願いします」

「また俺が相手なのか。別に構わないけど……飽きないの？」

弥彦は光を見下ろしながら正直な質問をひとつ。

「飽きるなんてとんでもないです。弥彦先輩は週一でしか道場に顔を出してはくれませんし、とっても御強いですからあたしにはいい稽古になるんです」

光は慌てた様子で自分の顔の前で手を横に振る。

その様子に弥彦は自分はそんな大層な男じゃないんだけどな、と自嘲するように苦笑すると光を連れて場内へと戻った。

第二十四話 疑惑（後書き）

駄文ですみませんでした

第二十五話 予感（前書き）

とくにオチがあるわけではないですがご愛読お願いします
ご感想お待ちしてます

第二十五話 予感

外がもうすっかりと暗くなり、星空が見えないほどの真つ黒な雲が空を覆う。

道行く人がそくさと我が家に帰路するような、そんな時間帯に空手の稽古を終えた弥彦は道場の裏手にある小さな小屋の更衣室で稽古衣から私服に着替えていた。

長袖のジャケットの袖に腕を通し着替えを済ませるとスポーツバツグの紐を肩に掛け、小屋の外へと出る。扉を開けた途端に顔の頬を撫でるように冷たい夜風が弥彦の頬を撫でた。その冷たさに身震いすると、忘れ物はないか、落し物はないか、くまなく小屋内を見回す。

忘れ物はなさそうだと判断した弥彦は小屋の利用者は自分が最後だったので小屋の扉付近のフックに掛けてあつた鍵をそつと手に取ると扉をきちんと閉めたあとで鍵をかけた。

鍵をズボンのポケットに入れると弥彦は道場裏手から入り口のある表へ移動する。そこには寒空の下、律儀にも自分のことを待っていてくれた人影が4つ。

「遅いわよ！いつまで女の子を待たせるのよ、あんたは！」

弥彦に文句を言ったのは天王寺奉莉。

怒っているせいか、片足を地面にトントンと足踏みしていた。

文句を言いながらも自分のことをこうして待っていてくれるのは彼女の良心。心底、嬉しいことだ。

弥彦は自分のことを待っていてくれたお礼になにか温かいものでもごちそうしようと思った。

「わるいわるい。帰りに駅前のコンビニで肉まんでもおごるから許

してくれ。環さん、はい、これ」

弥彦はポケットに入れていた小屋の鍵を取り出すと武藤環に鍵を手渡す。

「はい、たしかに受け取ったよ。それでさ、弥彦くん、ちょうど小腹が空いてたところだからあたしも肉まん食べたいな」

弥彦から鍵を受け取った環は満面の笑みでそうおねだりした。

あんた、大学生だろ。小学生の俺に集^{たか}られても困るんだが、と弥彦は苦笑い。

だが、武藤環という人物の濃和な人柄のせいか、おごつてもいいかなと一瞬だけど頭をよぎる。

「ねえ、弥彦。わたしもあなたのおごりの内に入っているのかしら」
クールな口調で弥彦にそう訊いたのは円堂円。

いつも冷静沈着で常に平常心を怠らず、なかなか感情が読み取れない彼女だが、今は違う。

すこしだけではあるが弥彦に期待するような気持ちが読み取れた。

「もちろん、円にもおごるさ。待っているの、寒かったら？」

「そうね、寒くて凍えるところだったわ」

そっけない返事ではあったが彼女の口元が綻んでいるところを見ると嬉しいのかもしれない。円堂円という少女は弥彦が一目おくように随分と大人びた少女だ。

彼女の言動、しぐさ、ひとつとっても常に平常心。円堂円というひとりの人間を演じているといえればいいのだろうか。

強者は自分自身の感情を制御する術を知っている、そう法泉から教えられた。弥彦は改めて思う。円堂円という少女は強者だつわものと。

「あ、あの。あたしもいいんですか。弥彦先輩」

そわそわした様子ですこしだけ上目遣いで弥彦に訊いたのは墮花光。今日の稽古では彼女の組み手の相手を直接彼女からお願ねがいされたので快く引き受けた。

自分の相手は飽きないのかと彼女に訊いたが、そんなことはないと否定された。

週一しか道場に顔を見せることのない自分が珍しいから組み手の相手を頼まれるのかもしれないと思っていた。だが、「弥彦先輩はとつても強いです」と彼女に力説された。

弥彦自身そんな大層な男ではないと思っているのだが、この少女はそうは思っていないらしい。

墮花光という少女は表裏のない、どこまでも澄んだ真っ直ぐな瞳を持った少女だ。そんな彼女が自分のことを慕ってくれるのは光栄なことだが、彼女のなかにある崩月弥彦という男が錯覚だといつか気付くときが来るだろう。その時、彼女は自分にどんなことを思うのだろう。幻滅か、拒絶のどちらかだろうか。

「ああ。もちろんだよ、光ちゃん。遠慮なく肉まんをもらってくれ」

「ありがとうございますっ！」

光は弥彦にぺこりと頭を下げ礼を言つと嬉しそつに無邪気にはにかんだ。

そんなに嬉しそつにされると、こちらもおどるかいがあるものだ。弥彦は自然と笑顔になる。

光の笑顔が見れることができただけでも肉まんひとつでは味わえな

い損得勘定でおつりがくるくらいだ。もちろん、得な意味で。

「ねえー、あたしはー？」

弥彦から返事を貰ってない環は擦り寄るように弥彦の顔を覗きこむ。弥彦は環から一歩後ずさり思案するように顎に指を当てる。

環さんにはいつもお世話になってるし、別にいいか、と弥彦は自己完結すると

「今回だけですよ。環さんは大人なんですから」

「えへへー。ありがとう、弥彦くん」

子供のような人懐っこそうな笑顔を弥彦に見せると環は弥彦に礼を言った。

五月雨荘に住まう真九郎もこつやって環に色々とお願いされながら食事や洗濯、部屋の掃除をしているのだろうか。

環からお願いされるとNOとは断れない気がする。なんとというか世話の焼ける娘をもってしまった父親のような心境になるのだ。そんな歳ではないのだが。

そんなことを頭の片隅で考えながら弥彦は三人の女の子と一人の女性と一緒に道場の敷地をあとにした。

駅前に到着すると弥彦は四人に駅前の広場にあるベンチで待っていてもらうようお願いすると駆け足でコンビニへと向かった。

コンビニで熱々の肉まんを四個購入する。コンビニの店員から肉まんを入れたビニール袋を受け取ると冷めないうちに肉まんを食べてもらおうと思ったので、弥彦はまた駆け足で奉莉たちが待つところへと戻った。

「おかえりなさいっ！」

駅前の広場にあるベンチに腰掛けていた環は弥彦が戻ってくるたびに立ち上がり、まるで王国を救った英雄を迎え入れるように弥彦に駆け寄り力いっぱい抱きしめた。

正面からちょうど顔に環の胸が当たって弥彦は恥ずかしい気持ちと苦しい思いで声を上げた。

「ちょ、ちょっと！環さん！やめてくださいって！肉まんが潰れちゃいますよッ！」

「そりゃ大変だ！」

ひょいっと環は弥彦をその胸のなかから開放するとすぐに離れた。そして参ったように頭を掻くと

「いやー、ついノリと勢いで抱きついちゃった」

すまんすまん、と環は顔の前で手を合わせると弥彦に謝った。

どんなノリと勢いだよ、と弥彦は思ったが環のことだ、ここは深く考えないのが吉。

弥彦はコンビニのビニール袋から大きめな包み紙で包まれた肉まんをひとつ取り出すと環に手渡した。

「おお！これは！普通のサイズとは一味違う、大きな肉まんさんじゃないの！弥彦くん、太っ腹だね！」

「ちょうどコンビニのほうで肉まん限定のセールをしてたんでいつもの定価より安かったんですよ。普通のサイズだと物足りないかな、と思いまして大きめなの買ってきました。喜んでいただけただけでしょうで

よかったです」

「はりがとねー、はひこふん！」

もぐもぐと口いっぱい肉まんを頬張りながら環がしゃべったので、なにを言っているのか理解できなかったが、環には大好評のようなので良しとしよう。

環に肉まんを手渡し終わったので弥彦はベンチに座って談笑しながら佇む三人娘のもとへと歩み寄る。

「おまたせ、はい、肉まん。まだ熱いから気をつけてな」

弥彦は三人にそれぞれ肉まんを手渡すと三人は弥彦に礼を言いながら肉まんを受け取った。

すっかり空になったビニール袋を弥彦は細長く伸ばすと丸く縛り、そのまま片手で持った。

「あれ？あんだ、自分の分の肉まんはどうしたのよ？」

手ぶらの弥彦に気が付いた奉莉が訝るように言った。

奉莉と同じような視線で円が弥彦を見据え、光は肉まんを口に咥える一歩手前で留め弥彦を見た。

「自分の分は買ってないよ。これは俺のことを寒い中、待っていてくれた3人へのささやかなお礼なんだから当然だろ」

自分のことなど気にせず食べてくれとニュアンスを含めて弥彦は奉莉たちに言った。

だが、その答えが奉莉は納得いかない様子。彼女はおもむろに自分の持った肉まんを半分に千切ると片方を弥彦に手渡した。

「あんたも食べなさい」

ぶっきらぼうな口調で奉莉は弥彦に肉まんを食べるとすすめる。弥彦はそれを目を白黒させながら慌てて断る。

「い、いや。俺はいいから、奉莉が食べるって」

「いいから、もたもたしないで早く受け取りなさいよ」

がんとして譲らない奉莉の態度に弥彦は折れ、千切れた肉まんの半分を受け取った。

まだ温かい肉まんから食欲をそそる匂いが鼻を刺激し、湯気が空に向かって立ち昇る。

「ありがとう、奉莉。優しいんだな、お前って」

彼女の優しさに弥彦は自然と笑みがこぼれる。

「か、勘違いしないでよ。いくら弥彦のおごりだからって、あんた自身が肉まんを食べないとおかしいでしょ」

若干ではあるが頬を赤くして奉莉は弥彦の言葉を訂正。

その奉莉の様子を可笑しそうにフッと笑い、円が微笑む。

「初心うごころね」

「ち、違っわよ。そんなんじゃないわ」

慌てて奉莉は円の言葉を否定。

「照れちゃって。顔が赤くなってるわよ」

「誰が照れているもんですか」

奉莉はフンと鼻を鳴らし肉まんを一口齧る。照れた奉莉の様子に円はまた微笑んだ。

円が人をからかうなんて珍しいな、と弥彦はふたりの様子を見守る。

「あの、弥彦先輩！あたしの肉まんも、どうぞ召し上がってください」

突然、光が弥彦に半分に千切った肉まんを差し出した。

奉莉の真似をして弥彦のことを気遣ってくれているのだろう。

弥彦は静かに首を横に振り、光の差し出した手を引っ込ませる。

「ありがとね、光ちゃん。その気持ちだけ受け取らせてもらおうよ」

「そうですか……」

弥彦に丁重に断られた光はしゅんとして俯きながらぱくりと肉まんを一口齧る。

ちょっと悪いことしたかな、と罪悪感が弥彦の気持ちを揺らしたがここは我慢。

はふはふと熱そうではあるが美味しそうに肉まんを口に頬張り、幸せそうに眼元を和らげる奉莉、円、光の三人。

やはり子供は幸せそうにしている顔が一番だな、と弥彦は微笑み、奉莉たちが腰掛けるベンチの隣にあるベンチに腰掛けた。

奉莉から貰った肉まんを食べる。ジューシーな肉の味が口のなかで広がった。おいしい。

弥彦がひとりでベンチに座っているのを気にかけて環が弥彦に歩み寄る。

弥彦の隣に環が片手にまだ食べ欠けの肉まんを持ちつつ、口をもぐもぐさせながら腰掛けた。

子供のように肉まんを口いっぱい頬張る環の姿を苦笑しつつ、弥彦は人が早足で行き交う駅前賑わいに目を向ける。

どこもかしこも疲れたような顔をした人達ばかり、みんながみんな疲れている。世の中みんな疲れている。だが、それでも回り続ける我が国の社会、いまの世の中の歪。

どこかがおかしい。みんな変だ。この国は歪んでいる。

こんなことを考えているのは自分だけかもしれない。それはただの現実逃避か。また、無意識の内に自分は現実から目を背け逃げようとしているのか。

いま自分が抱えている悩みもそうだ。

まだ真九郎と紫のことについて、なにも解決しちやいない。

法泉はこの件に首を突っ込むなと警告したが自分は納得がいかない。ここは悩んで留まるどころでも逃げ出すところでも断じてない、進むべきだ、ひたすらに真っ直ぐに。

もう一度、法泉に相談してそれから母親の冥理、姉の夕乃にも相談してみよう。

もうひとりで悩むなんて馬鹿なことは金輪際やめると心に誓ったのだから。

「あーあ、ごちそうさまでした！とっても美味しかったよ、肉まん！本当にありがとね、弥彦くん」

肉まんをぺろりと平らげた環は満足そうにお腹を擦り弥彦に礼を言った。

「満足してただけてよかったです。環さんには空手の稽古でお世

話になってますからね。今日はそのことでほんのお礼ですよ」

「じゃあ、またおごってもらっちゃおうかなー」

「俺の財布の懐が寂しくならない程度に自重してくれるのなら、いつかまた機会があればそのときはよろこんで」

環は感極かんきわまったように瞳を潤ませ弥彦に抱きついた。

「もうー！弥彦くんたら優しいんだから！あたしを養う旦那さんになつて！」

「それは辞退します」

「即答ッ！あたしって魅力ないのかな……」

弥彦から離れた環は肩を落とし本気で落ち込む。

そんな環の姿に参ったな、と頭を掻き弥彦は環にこう提案。

「真九郎さん、なんて環さんの旦那さん候補にどうですか」

「真九郎くんかー。それはちょっと、あたしじゃ無理かも」

環らしくない弱気な発言。

「どうしてです？」

「うーん、だつてさ。真九郎くんの周りには、あたしに闇絵さん、夕乃ちゃんに銀子ちゃん、それから期待のニューフェイスの紫ちゃんがいるからね。これからもどんどん可愛い女の子と真九郎くんの

輪が広がる気がするんだよ。弥彦くんもそう思わない？」

「……否定はできませんね」

「だよー。それにさ、最近は紫ちゃんが特に真九郎くんにご熱心でね。真九郎くんと紫ちゃんの間で何があったのかは知らないけど、紫ちゃんが女の子から女っぽくなったというか不思議な感じがするんだよね」

紫から不思議な感じがする？

「いったいどういうことだろう。それに紫が女の子から女っぽくなっただって……」。

環の発言に弥彦は思案するように顎に指を当て、真剣に考える。

「あれ？もしかして弥彦くん、紫ちゃんのこと好きだったりする？」

弥彦の真剣に思案する姿になにをどう解釈して勘違いしたのか環がそんなこと場違いなことを言っただけだ。

「……面白い、「冗談ですね」

弥彦は環から視線を外し隣のベンチに腰掛ける奉莉に目を向けた。奉莉たちは肉まんを食べ終えたようで三人で楽しそうに談笑している。

弥彦の視線に気付いた奉莉が弥彦に「どうかした？」と会話を中断して訊いたが「いや、なんでもない」と弥彦が言うので「へんなやつね」と口を尖がらせた。

視線を環に戻し弥彦は自分の考えをはっきりと伝える。

「俺が九鳳院紫のことを好きになるなんて天地が引っくり返っても

ありえないですよ」

乾いた笑いと笑みを作りながら弥彦は答えた。

……本当にそうだろうか。

急に自分の発言に自信がなくなる。そして自分の心のなかを占めるのはもやもやとした不快感。

「まあ、いま話したことはあたしの主観だし。当の本人がどう思っているかなんてわからないからね。あまり深く考えないで気楽に楽しくあたしは真九郎くんと紫ちゃんを見守ろうと思っっているの。年上のお姉さんなんだしね」

あっけらかんとした、いつもの調子と口調で環は言った。そしておもむろに腰掛けていたベンチから立ち上がる。

「帰ろうか！時間も遅いし、みんなのご両親が心配するとまずいでしょ」

環の発言に三人娘は頷くとベンチから立ち上がり、各々弥彦に歩み寄った。それを弥彦はベンチに座りながら迎える。

「肉まん、ごちそうさまでした。とっても美味しかったです」

「ごちそうさま」

光と円が弥彦に礼を言った。そして奉莉は

「また、なにかおごってくれるなら暑いときでも寒いときでも弥彦のこと待っててあげる」

そう言うと奉莉は恥ずかしそうに視線を弥彦から逸らし、そそくさと駅舎に向かって歩きだした。奉莉の後を続くように円、光が歩きだす。

駅舎に向かう彼女たちの後ろ姿を眺めながら弥彦はベンチから立ち上がると、弥彦のことを待っていてくれた環の横へと歩み寄る。そして環と連れ添うように歩調を合わせて駅に向かう。その途中、ふと環が立ち止り横を歩く弥彦に尋ねた。

「ねえ、弥彦くん」

「なんですか、環さん」

弥彦も足を止める。

「今度さ、あたしの部屋に遊びに来なよ。今日みたいな週末の休日に来てもいいし、学校帰りに寄ってみてもいい。漫画にゲーム、遊ぶものいっぱいあるからさ」

急な環の遊びの誘い。別に環が自分を誘うのは怪訝に思いつもりはないが、環の部屋に招かれるのは初めてのことだ。無意識の内に弥彦は緊張した。

「嬉しいお誘いですけど、急にどうしたんですか」

「いやさー。最近、暇しててね。あたしの遊び相手がなくなってきた。弥彦くんならどうかナーって」

なんだ、ただの暇つぶしの相手が欲しかっただけかと弥彦は緊張を緩め、胸を撫で下ろす。

「そんなことならお安い御用ですよ。休日は稽古の方があって、平日の学校帰りに寄らせてもらいます」

「本当に!？」

「はい、本当です。俺ひとりで行くのもあれなんで、奉莉も誘ってもいいですか」

「いいよいいよ!奉莉ちゃんと一緒に来ても無問題!むしろ歓迎するよ!」

「それじゃあ、奉莉にも伝えておきます」

「よろしくね」

環は片手の手のひらをひらひらさせ、軽い足取りでスキップを織り交ぜながら駅舎の入り口へと消えていった。

環に置いていかれた弥彦は駆け足で環を追うように駅舎に向かった。駅舎に到着した弥彦は券売機で切符を購入する。改札機に切符を通し、改札を潜るとそこにはひとり胸の前で腕を組み不機嫌そうに仁王立ちする天王寺奉莉の姿があった。

また、彼女を待たせてしまったと弥彦は反省し、奉莉に駆け寄る。

「環さんに円、光ちゃんはもう帰ったのか？」

「さっきちょうど上の電車が来てたからそれに乗って先に帰ったわよ」

「そっか。また、待たせたみたいで悪いな、奉莉」

「いいわよ、別に気にしてないから。さあ、わたしたちも帰りましよう。いつもより帰りの時間が遅くなってるからパパとママが心配しちゃうわ」

「それは大変だ。急いで帰ろう！」

急に慌てだした弥彦を奉莉が呆れた顔で言った。

「なに言ってるのよ。次の電車が来るまで、まだ10分程あるわ。あんたが急いでもしょうがないでしょうが」

「言われてみればそうだな」

自分の恥ずかしいはやとちりを誤魔化すように弥彦はハハハと笑った。

「はあ……。あんたってどこか抜けてるわよね。おもにおつむ的な意味で」

「……俺もそう思う」

自分の改善すべきひとつの欠点だ。弥彦は声を小さくして奉莉の指摘に肯定。

「自覚してたんだ、意外ね、とはいうほどではないわね。あんた、妙に頭がきれるから当然か……」

「あの、俺のことはいいんでそろそろ駅のホームに行きませんか？」

奉莉の辛辣な言葉しんせつに落ち込んで耐え切れなくなってきた弥彦は奉莉

の言葉の続きを遮り駅のホームに移動することを提案。

「そうね、そろそろ電車も来るころだし行きましようか」

奉莉の自分への酷評が終わったと弥彦が胸を撫で下ろしホッとしていたのも束の間。

奉莉は弥彦の手を取り、しっかりと弥彦の手を握り繋ぎ堂々とした態度と足取りで駅舎のなかを進む。

「お、おい。俺はガキじゃないんだから自分で歩けるから手なんぞ繋がなくても……」

「わたしもあんたもガキでしょ。あんたの文句や苦情は一切受け付けないわ。いまはこれでいいのよ」

どこか満足そうに歯を見せ無邪気に笑う奉莉の様子に弥彦は言葉が続かなかった。

すっかり俺は奉莉の尻に敷かれているなど客観的に自分の現状を考察してみた。

だけど、その奉莉に手を引かれながらもどこか自分が安心している気がするのには気のせいだろうか。

駅舎をずんずんと手を繋ぎながら歩き、駅のホームに到着。ちょうど電車が駅のホームに滑り込むように到着。

奉莉は弥彦から繋いでいた手を離し電車に乗車、弥彦も奉莉の後に続き乗車した。車内は会社帰りのスーツを着たサラリーマンの大人が乗車率の八割を占めていた。席はどこも空いておらず、仕方なく弥彦は奉莉を庇うように乗車口の横付近に移動するとそこでふたりは身を落ち着かせる。

ここに来て弥彦は環との会話を思い出し、無言の電車内で目立たないように小声で奉莉に話かけた。

「奉莉に言い忘れていたけど環さんが是非とも家に遊びに来て
な」

「へえ。環さんの家が……、たしか一人暮らしだったけ」

弥彦の小声に合わせるように奉莉も小声で会話をする。

「そうそう。ほら、俺の兄弟子の真九郎さん。覚えているか？」

「ええ、もちろんよ。揉め事処理屋さんだったけ」

よく覚えているな、と弥彦が感心して一度頷くと話を続けた。

「そうだ。その真九郎さんが住んでいるアパートに環さんが住んで
てな。しかもお隣さん」

「それは、なんていうか、すごいわね。こつこつというって世間は狭い
つていうのかしら」

「うーん、どうだろうな。真九郎さんの場合はなるようになってなっ
た感じがするが……おっと、話が逸れた。それでな、俺は環さんの
ところに学校帰りに寄る事に決めているんだけど奉莉も一緒に行か
ないか？」

奉莉はすこしの間思索すると首を縦に頷かせた。

「いいわよ、わたしも行くわ。環さんの部屋には興味があるし、学
校帰りの寄り道も面白そうなもの」

奉莉は環の部屋と帰りの寄り道に好奇心がはたらき弥彦との五月雨
荘訪問に興味が湧いたようだ。

「奉莉が断らなくてよかったよ。あそこにひとりで行くのはなんて
いうか心細かったから奉莉と一緒にだと安心していける」

「どんなところに住んでんのよ、環さんは……」

『不戦の約定』が結ばれた絶対安全地帯だけど、とは言えない。
ここは無難に普通と言っておこう。

「普通のアパートさ、普通の」

普通というところを強調して弥彦は言った。

奉莉は怪訝そうに弥彦の顔をじーっと見つめていたが弥彦の真意が
掴めなかったのか諦めて視線を弥彦から外し、電車の窓から見える
夜景へと目を向けた。

弥彦も奉莉を真似るように視線を窓へと向けた。そこには暗闇のな
かまばらに光る住宅や街灯のひかりがぼつりぼつりと灯っていた。
どこか寂しそうな弱々しい灯かり。

昨今の犯罪事情では暗闇のなか襲われるという話はよく聞く。あの
暗闇のどこかに身を潜めるように今日の獲物を狙うように悪が存在
する、なんて思っていたのは夏休み前だけ。

悪宇商会の一件で弥彦は気付いたのだ、世の中には日の光を浴びて
いるなか堂々と悪事をはたらいている集団が、組織がいることを。
暗闇なんて関係ない、日の光なんて関係ない、すぐ身近なところで、
自分の手の届く範囲で悪が蔓延はびこっている。

そんな悪から自分は目の前にいるひとりの少女を守ることができる
だろうか？

身を挺たてして、この命を賭けて守れるだろうか。

そんなことがふと弥彦の頭を過ぎった。

第二十五話 予感（後書き）

如何でしたでしょうか。

いろいろとご不満な点がいたるところにあると思います。

謝ります、すみませんでした。

相変わらずの駄文ですがご愛読お願いします。

第二十六話 友達（前書き）

おまたせして申し訳ありません。

内容は相変わらずグダグダですがご愛読お願いします。

第二十六話 友達

平日の早朝、天候は灰色の厚い雲が空を覆う曇り空。真冬にでも季節が移り変わったかのような肌寒い気温。場所は崩月家の屋敷にある庭の井戸前。

朝稽古で流した汗を洗い流す為に弥彦は井戸から水を汲み上げ、汲み上げた水が入った桶を一切の躊躇ためらいなく頭から冷水を被る。その殺人的なまでの冷たさに一瞬ではあるが身震いすると身を引き締め、高鳴る心臓の鼓動をおさめるように大きく深く息を吐いた。

胸のなかを早朝の清々しい独特な空気が占める。眠気など微塵も感じさせないように頭が徐々に覚醒する。

今日も今日とて早朝から祖父の法泉に稽古でみっちりとしごかれた弥彦は疲労が溜まっていた。自分の身体にあるのはいたる箇所に残る青痣と擦り傷。それでも打撲や捻挫、ましてや骨を骨折するような怪我を負わなかったのだからまだマシなほうだ。酷いときには学校を休まずにはいられないほどに手酷く法泉に殴られ、蹴られ、潰され、投げ飛ばされるときだつてある。自分は確実に徐々にではあるが成長している。けれども、自分はまだまだ未熟。

法泉に言わせれば、まだ自分は赤子も同然らしい。いつになったら自分は一人前の崩月の戦鬼になれるのだろう。そんな物思いにふけながら弥彦はタオルで濡れた髪と身体を拭く。

今日は学校帰りに五月雨荘に寄る予定となつている。先日の空手道場からの帰り道で交わした武藤環との約束だ。彼女の許可を得て友人であり同門の天王寺奉莉の同伴の許可をもらっている。

だがしかし、先日は二つ返事で環との約束を快く取り付けたけれども、後からよくよく考えたことだが五月雨荘には《表御三家》である《九鳳院家》の子女、九鳳院紫が居ることをすっかりと忘れていたのだ。

弥彦としては紫と会えるのは別にいい、むしろ真九郎に護衛の依頼

を頼んだ理由を直接彼女から訊く良い機会を得たと考えたほうがいいだろう。

しかし、ただの一般人である天王寺奉莉が我が国を代表する大財閥の子女と顔合わせさせるのはあまり良いこととは思えない。

五月雨荘に在る間は《不戦の約定》がどんな魔の手よりも自分たちの身の絶対安全を確約してくれる。だが、それは五月雨荘の敷地から一歩出れば適応されないということだ。

それはつまり自分の身は自分で守れということ。九鳳院家の者と関わることで奉莉にいらぬ危険がおよぶ可能性が捨てきれないのだ。

九鳳院紫は誰かに狙われている。だから紅真九郎に、揉め事処理屋に護衛の依頼をお願いしたのだ。九鳳院家の私兵集団《近衛隊》を護衛としない理由はいまだにわからないままだが、このことは保留とする。

紫が五月雨荘に匿かくまわれていることは絶対の守秘すべきこと。五月雨荘に居る者や崩月家の者がそのことを口に出すことはない。だが、それは九鳳院紫が五月雨荘から一歩も外出せずに絶対にその御身を外の世界に露呈しなければの話。そんなことはありえない。

なぜなら、先日九鳳院紫は紅真九郎と一緒に崩月家を訪れてしまったのだ。つまり外に出たのだ。これは護衛中の身である紫をむやみに屋敷に招いた姉の夕乃の失態か。それとも外に出る危険性を考慮しなかった真九郎の失態か。なんて迂闊うかつな行動だろう。

裏世界の情報網は侮れない。裏の住人たちがどこに目を見張り、耳を潜めているかわからない。もし、偶然にも九鳳院紫が紅真九郎と並んで歩いている姿を目撃でもされていたら直ぐに紫の居場所など暴かれるだろう。そして、その九鳳院紫が匿かくまわれている五月雨荘にまだ幼いただの少女に過ぎない天王寺奉莉が訪れる。これは危険なことじゃないのか。最悪の場合、奉莉に危険が及ぶのではないのか。全ては仮定の考え。しかし、有り得なくはないひとつの可能性。

「……考えすぎなのかもしれないし、考えが足りないのかもしれないな

いな」

早朝の静まり返った空気の中、弥彦はひとりそう呟いた。自分の無い知恵を絞って考えた可能性。奉莉を危険な目に遭わせる可能性が少しでもあるなら、それを回避させるのが自分の役目ではないのか。否、彼女を守ると誓った自分の使命ではないのだろうか。

考えが思うように纏まらないまま弥彦は庭から縁側に上がると屋敷の廊下を歩き自室に向かった。自室で着替えを済ませ再び廊下を歩き居間に向かう。その間、弥彦の頭の中は奉莉を五月雨荘に連れていくべきか、いかないべきかで迷っていた。

居間に到着するとテーブルの上には朝食が並び、海外への出張中である父親を除き家族全員が揃っていた。弥彦はいつものように朝のあいさつを家族と交わすと自分の指定席に正座をして着席。弥彦が着席したところで家族は皆、両手を合わせ「いただきます」と言った。

弥彦はテレビのリモコンを操作してチャンネルを朝のニュース番組にあわせると、それを横目に見ながら朝食に箸をのばす。世の中は相変わらず陰惨で残酷な事件の数々が起こっているようだ。女兒ばかりを狙う連続強姦魔、自分の子供を性の捌け口として扱う父親、ホームレスを集団でリンチし^{なぶ}殺した中学生、都会のと真ん中でビルから飛び降りた集団自殺者達。どれもこれも気が滅入るようなものばかり。もし、神様とやらがいるのならこれはその神様の一種の戯れなのだろうか。もしそうなら、今すぐにやめてもらいたいものだ。明るい話題の無いニュースを感情のない機械的な発音で黙々とニュースキャスターが読み上げ、伝えると画面は切り替わり天気予報となった。天気予報では今日の夕方ごろから雨が降るらしい。この頃、太陽を拝んでいない気がするのは気のせいだろうか。最近の社会の歪さに太陽の奴も自分と同じように気が滅入っているに違いない。そんなくだらぬ妄想を考えてしまうほど今の弥彦は頭が働かなかった。

黙々と朝食を食べる弥彦にテーブルを挟んで向かい側の席に座る冥理が朝食の箸を止めると

「弥彦。今日はなにか予定はあるのかしら」

と弥彦に訊いた。弥彦は味噌汁を一口啜ると視線はテレビに向けたまま冥理の呼びかけに答える。

「うん。学校の帰りにさ、五月雨荘に寄る予定。ほら、俺の通っている町の空手道場の師範で真九郎さんの部屋のお隣に住んでいる武藤環さんの話を前に話したでしょ。環さんに部屋に遊びにおいでって、この間誘われたから遊びにお邪魔しようと思ってさ」

「……………武藤環さん？」

弥彦に返ってきた返事は冥理のものではなく冥理の隣で朝食を食べていた姉の夕乃のものであった。いつもよりも声量が低い気がしたが、そんなことはお構い無しに弥彦は漬物を口に含みもぐもぐとよく噛みながら夕乃に視線を合わせる。

「そうそう、武藤環さん。だから今日は帰りが遅くなるかもしれないんだ。夕飯前には帰れるだろうけど、一応遅くなりそうだったら家に連絡するよ」

「いけませんよ、弥彦。小学生のうちから学校帰りに寄り道するなんて悪い大人になってしまいますよ」

夕乃は、凜とした透き通る声で良い子の道を踏み外そうとしている弟を注意する。さすがにいくらか緩い家風の崩月家でも夕乃の前だと寄り道はダメらしい。

「いや、夕乃お姉ちゃん。もう環さんと約束しちゃったし、行ってもいいでしょ。それに寄り道したって悪い大人になるかどうかなんて別問題だしさ」

「いくら武藤環さんとの約束でも、いけないものはいけません。子供は寄り道せずにまっすぐに学校から家に帰るものです。それに弥彦はお祖父ちゃんとの稽古があるでしょうに。それをサボるつもりですか」

涼しい顔と口調ではあるが夕乃は怒っている。弥彦が寄り道することを断固として反対する夕乃。どうしてそこまで反対するのか弥彦にはわからなかった。五月雨荘にいる九鳳院紫のことを気にかけているのだろうか。それなら余計なお世話だ。

「そのことなら今朝の朝稽古の時にお祖父ちゃんから休みの許可を貰ったから平気だよ」

「……………本当ですか、お祖父ちゃん？」

夕乃は上座に静かに佇むように座り、朝食を食べていた法泉に真意を尋ねるように視線を送る。法泉は黙って一度だけ頷くと

「ああ、本当だ。今朝、弥彦から話を聞いて休みの許可をだした。……………夕乃よお、別に寄り道のひとつやふたつぐらい、いいじゃねえのか？おめえもちよくちよく真九郎のところに顔をだしているんだからよお」

思わぬところで弥彦の助け舟をだす法泉に弥彦は心の中で感謝した。法泉は遊びごとや色恋沙汰のことなどになると寛容な態度で何事も

許してくれる。それは法泉自身が自らの遊びごとや色恋沙汰に精をだしていることが原因かもしれないが。

「わたしはいいんです。そこに愛がありますから」

法泉の指摘に夕乃は究極の持論で自分の正当性を証明した。夕乃の言葉に冥理は「あらあら」と微笑み、法泉は「それなら早えとこ、孫の顔が見てえもんだ」と大いに笑い、妹の散鶴は「……あい？」と不思議そうに首を傾げ小さな声で呟いた。

恋する乙女はどんなものよりも強し。「愛があるから」なんていわれたら敵わないじゃないか、と弥彦は苦笑い。それでも崩月夕乃だからこそ、紅真九郎に対する気持ちの本物だからこそ堂々と後ろめたさなく言い切られると反論が難しいから困る。どうにかしてここは夕乃を崩さなければ、と弥彦は考える。

「夕乃お姉ちゃんがああは言うけどさ。お母さんは別に俺が寄り道しても怒らないし、いいよね？」

弥彦は考えた結果、冥理に助けをもとめることにした。適材適所というやつだ。自分が知る中で夕乃を崩せるのは法泉と冥理、あと父親しかいないのだから。冥理は弥彦の願いに思案してから口を開いた。

「遅くならない時間に帰ってくるならわたしは構わないわよ。それに環さんには弥彦がいつもお世話になっているから五月雨荘に行く前に駅前の商店街でケーキでも買って持って行きなさい。真九郎くんがうちに何度か土産で持ってきてくれた美味しいケーキ屋さんのケーキだからきつと喜んでもらえるでしょう。後でお金を弥彦に渡すわね」

冥理の寄り道許可が出たので弥彦は隠すようにテーブルの下で拳を握りガッツポーズ。

「決まったね。お母さんとお祖父ちゃんから許可も出だし、これで文句は無いでしょ。お姉ちゃん」

「仕方ありませんね。遅くならないうちに帰ってくるんですよ。くれぐれも、人様に迷惑の掛からないように周囲に気を配るのです。……わかってますね？」

やれやれ、といったふうに夕乃はまだ納得していない様子ではあるが弥彦が学校帰りに寄り道することに承諾。

「わかつているよ。心配しなくても大丈夫だって。……たぶんさ」
急に自信がなくなってきた。今更になって友人である天王寺奉莉も一緒に五月雨荘を訪れるなんて言えない。結局、奉莉のことを頭の隅で考えることを放棄して、夕乃に自分の寄り道を許してもらおうとやっきになってしまっていた。奉莉のことはどうしたものか。

「ケーキ、いいなあ……ちづるもたべたいな」

弥彦の隣に座っていた散鶴は弥彦の服の袖をくいくいと掴み、純粹に羨ましそうに散鶴が弥彦に視線を向け、おねだりするように言った。それを弥彦は困ったように眉をしか顰めると残念そうに口を開く。

「散鶴の分のケーキはないよ。残念だけど今回は諦めてもらえないか。また今度、買いにいこう。そうしような、散鶴」

「こんどじゃあダメなの……」

上目遣いで瞳を潤ませ弥彦を見上げる散鶴。妹には弥彦は弱い。弥彦は参ったな、と頭を掻く。そんな困っている弥彦を助けるように冥理が言った。

「弥彦。五月雨荘の帰り際にいいから、ちーちゃん（散鶴）の分のケーキも買ってきてちょうだい。わたしたら、ちーちゃんのことも考えておくべきだったわ」

「わかった。それで、散鶴はどんなケーキが食べたいんだ？」

「あのね。くだものがいーっぱい、のってるケーキが食べたいの！いちごにみかん、ぶどうにりんごにさくらんぼでしょ。それから…」

小さな両手の指を果物の名前を言うことにひとつ、またひとつと折り曲げて数える散鶴。どれだけ果物を載せたケーキが食べたいんだよ、と弥彦は苦笑。女の子、あるいは女性が甘いものをよく好む傾向があるのは既に奉莉と杏が証明しているので今更、弥彦が驚くことではない。

「はいはい、わかっているから全部言わんでも大丈夫だよ。いっぱい果物が載ったフルーツタルトでも帰り際に買ってくるよ。それでいいだろ散鶴？」

「うん！」

散鶴は満面の笑みで大きく頷いた。まったく、現金なやつだ。純粋な欲求に素直になれる子供の特権ともいえるが。

その後、朝食を食べ終えた弥彦は食器の後片付けを手伝った後、自

室に戻り登校の準備を整え済ませると再び居間に戻った。そして、冥理から土産代のお金を受け取り、それを失くさないように大事に自分の財布に仕舞うと、「いつてきます」と一言あいさつを冥理と交わしてから玄関にある傘立てから自分の傘を一本抜き取ると崩月の屋敷を後にして小学校へと向かった。

いつもどおり学校の最寄り駅で電車を下車すると通勤、通学の人々に混じるように駅舎を抜ける。駅から学校までの登校路、いつもはひとりで歩いている弥彦ではあったが今日は違った。弥彦の両隣を挟んで歩くように天王寺奉莉と林原杏がいる。

弥彦は奉莉に今日の五月雨荘訪問をやんわりと中止にしないかと話したのだが奉莉は「嫌よ。環さんとの約束だもの」と二言で弥彦の提案を一蹴した。そして弥彦たちの話を聞いていた杏が「あたしも連れて行って！」と言い出すしまつ。こればかりは弥彦は首を縦には頷かせなかった。

環は自分たちが通っている空手道場の師範だから同門ではない杏は遠慮してほしい、と杏の頼みを断る言い訳にしては筋が通っているようなことを言っ、杏には悪いが断らせてもらった。杏はとても悲しそうに「あたしだけ、はぶられた」と弥彦の背中をつんつんと手に持っていた傘の先で突きジト目で弥彦に抗議した。さすがに杏だけ仲間はずれはよくないと弥彦は考え、後日必ず埋め合せはすると杏と約束することで杏はしぶしぶと承諾した。

そんな一幕が朝の登校であったのだが、時間が過ぎるのは早いもので気が付けば下校の時刻。今にも雨が振りだしそうな天候のなか、帰りのHRを終えた弥彦は奉莉と杏と一緒に下校する。その途中、駅で杏と別れると奉莉と一緒に五月雨荘に向かう上り方面の列車に乗った。

五月雨荘の最寄り駅に着いた弥彦たちは電車を下車すると五月雨荘に向かう前に駅前にある人で賑わう商店街に寄った。商店街に寄った理由は環への土産を確保するため。意気揚々と弥彦は軽い足取り

で奉莉を連れ商店街に足を踏み入れたがお目当てのケーキ屋がどこにあるのかがわからなかった。適当にぶらつけば見つかるであろうと安易な考えが弥彦にはあったのだがどうやら自分はかなり方向音痴だったようだ。歩くこと10分。商店街の入り口に戻ってきてしまった弥彦は思考を放棄するように天を仰ぐ。相変わらずの天候で空は厚い雲が覆っていた。今にも雨が降りそうに。弥彦の無駄足に付き合わされている奉莉はイライラとした表情を表面に出し弥彦に言った。

「さつきからこの商店街をうろつろと歩いていたけど、いったいなんなの？環さんのところに早く行きましょよ」

「それがそうもいかないだよ。環さんのところに行く前にケーキ屋に寄ってケーキを土産に五月雨荘に行こうと思っていたんだが、肝心のケーキ屋が見つからなくて困っているんだよ。お母さんから駅前の商店街にあるって話を聞いてはいたんだけど、どうも見つからん」

「呆れたわね。それを早くわたしに言いなさいよ！どれだけあなたは方向音痴なのよ！あんたのせいで無駄な時間を過ごしちゃったじゃないの！」

腰に手を当てプンス力怒る奉莉。確かに時間を無駄に浪費してしまったのは自分の手違いだ。奉莉が怒るのも頷ける。

「いや、俺も自分がこんなに方向音痴だったとは知らなかったんだ。許してくれ」

「自覚無しだったなんて……もう最ッ低！わたしがそのケーキ屋さん見つけてあげるから名前を教えなさいよ」

痺れを切らした奉莉は自らケーキ屋を見つけると意気込み弥彦に詰め寄る。

「ああ、それなら……」

自分では打つ手無しだったので弥彦は冥理から聞かされた店の名前を奉莉に告げる。すると奉莉は「そのお店、わたし知っているわよ」と停滞する現状を打開する言葉を口にした。

「それは本当か!？」

「ええ、だって雑誌で紹介されている記事をわたし読んだもの」

「でかしたぞ、奉莉！ さっそく案内を頼むぞ」

次の行動は決まった。弥彦は全てを奉莉に任せるとぼんぼんと奉莉の肩を叩く。肩を叩かれた奉莉は軽く溜め息を吐く。

「結局そうなるのね。まあ、このままぶらぶらしていたら環さんのところに行く前に日が暮れちゃうからいいけどね」

「よろしく頼む。今は奉莉が頼りだ」

「はいはい。じゃあ、頼られましょうか。行くわよ」

奉莉に案内されるがままに弥彦は商店街を進む。すると何の苦労も無く商店街の中でひときわ賑わう一軒のケーキ屋を発見。こつもあつさりと見つけられると先ほどまでの自分の苦労はどこにやればいいのかのさうかと落ち込む。そんなことを頭の隅で考えつつ奉莉と共

に店の前へと歩み寄る。店の前ではソフトクリームを食べているランドセルを背負った小学生の集団がいた。どうやらケーキの他にもアイスなども店頭で売っているようだ。肌寒い天候と季節だということに冷たいソフトクリームを食べる子供の味覚が弥彦にはわからなかった。

「ここが、あんたが探していたお店よ」

「ありがとう奉莉。助かったよ」

「今度からは目的地をよく調べておきなさいよね！今度また同じことが起きたら鉄拳制裁なんだから！」

「心得た。肝に銘じておくよ。さて、店に入ろう。男ひとりで甘味処に入るのは勇気がいるからな、奉莉も入るだろ？」

「もちろんよ」

ソフトクリームを美味しそうに食べている自分達と同じ歳であろう小学生の集団を横目を通り過ぎるとケーキ屋の入り口にある自動ドアを潜り、店に入った。店内は明るい温かな照明が店内を照らし出し、清潔感溢れる店内の雰囲気は弥彦に好印象を与える。案の定、女性客が多かった。店の厨房との境界を挟むように接客スペースにはケーキを一定の温度で保存しているショーケースがあり、そのなかには色とりどりで豊富な種類のケーキたちが並んでいた。どれもこれもがこの店のパティシエが丹誠をこめて手作りした一品。甘いものをあまり好まない弥彦でも食べたくなるようなものばかり。

「えーっと、こんなにケーキの種類があると目移りして迷うな。環さんはどんなケーキが好みなのだろうか」

「環さんだからきつとなんでも喜んで食べるわよ。あまり難しく考えずに適当に選べばいいじゃないのかしら。このお店のケーキは雑誌に紹介されるくらいだし外れなんてものないはずよ」

弥彦はこの店のケーキを幾度か食べたことがある。真九郎が偶に屋敷を訪れるとき土産でいただいたのだ。どれも美味しいケーキなのは間違いないだろうがこの豊富な種類の中から数個を選ぶのは、情けない話だが優柔不断な自分にはいつまでたっても決められそうにない。ここは奉莉に頼るとしよう。

「なあ、奉莉。ここは奉莉にまかせるよ。女の子だし甘いもの好きだろ？奉莉の好きなものを選んでくれ」

「なんて他力本願な男なのかしら。あんたがそれでいいなら選ばせてもらうけど、後で文句や苦情はなしよ。わたしの好みで偏っちゃうし……」

少し自信なさげに言う奉莉。いつも自信満々の彼女にしては珍しい様子。

「そんなこと言うもんか。こちらがお願いしている身だからな」

「……それじゃあ、お言葉に甘えて選ばせてもらうわね」

「まかせるよ」

奉莉はショーケースに入ったケーキをよく吟味しながら時折、店員と会話を交えてケーキを数個選んだ。やはり自分が選ぶよりもいいものを選んでくれる。弥彦は奉莉にお礼を言うと店員にケーキの代

金を払い商品を受け取り奉莉と共に店をあとにした。

弥彦たちは人が溢れ活気付く商店街を抜け、すっかりと葉が枯れ落ちってしまった寂しい並木道を通り、歩いて十分もしないうちに五月雨荘前に到着した。弥彦が五月雨荘を訪れるのはこれで二度目。一度目に訪れた時となんら変わることの無い五月雨荘のまるで時間がかしいでいるような雰囲気を漂わせる佇まいに表情をけわしくして目を細め、眉を顰める。奉莉も五月雨荘の只ならぬ雰囲気を肌で感じるのか怪訝そうに五月雨荘を一瞥してから弥彦に尋ねた。

「ここがあんたの言っていた普通のアパート五月雨荘、ね……どこが普通なのかしら？」

普通という言葉を強調するように奉莉が言った。嘘はもう彼女には通じないだろう。弥彦は正直に奉莉に話す。

「すまない、謝らせてくれ。奉莉を騙すつもりはなかったんだ。ただ、ここは決して普通のアパートなんて優しい所じゃあない。けど、世界で一番安全な場所ではある」

「どづいことかしら？」

弥彦の言っている意味がよく理解できない奉莉は当たり前のように弥彦に問い質した。

「それは言葉のままの意味だよ。さあ、中に入ろう。環さんが首を長くしてお待ちだろうからさ」

「ちよつと！最後まで説明しなさいよ！」

弥彦に話をはぐらかされた奉莉は詰め寄る。

「帰り際には話すから今は我慢してくれ。別にとつてくわれるような場所じゃあない。少なくとも真九郎さんと環さんが住んでいる場所だ。この意味、分かるだろう？」

真九郎と環の名前を話のひきあいに出して奉莉をなだめる。奉莉は思案し、まだ納得していない様子だったが弥彦の瞳をまっすぐに見つめると、物事をうやむやにされるのを嫌う奉莉はこう言った。

「ぜーったい、後で教えなさいよね。そうじゃないと許さないんだからね！」

「ああ、わかっているよ。痛い思いは勘弁だからな。……行くぞ」

弥彦と奉莉はゆっくりと五月雨荘の敷地に足を踏み入れた。古い石造りの門を潜り、割と広い五月雨荘の敷地を共同玄関に向かって歩いてきたがその途中で弥彦が歩みを止めた。弥彦の視線の先にあるのは大きな大樹。急に足を止めた弥彦に奉莉は不思議そうに問うた。

「どうしたのよ、急に止まったりして。なにかが見えるのかしら？」

「……いや、なんでもない」

闇絵がもしかしたらいるかもしれないと淡い期待を胸に抱いていた弥彦だが生憎、五月雨荘の黒い魔女はそこにはいなかった。あるのは全ての葉が枯れ落ち、丸裸となった太い大樹の枝だけ。闇絵が吸っていた煙草の残り香もない。彼女の相棒である黒猫のダビデもいなかった。弥彦は後ろ髪をひかれるように名残惜しく大樹から視線を外し、歩みを進めた。

共同玄関で靴を脱ぎ、傘を傘立てに収納する。五月雨荘の一階は不気味と静まり返り、人の気配がまったく感じられなかった。まるで

お化け屋敷のような静けさに奉莉は不安になったのか弥彦の手を握り伏し目がちに俯いた。

「怖いかな？」

「……あのね、本当に環さんと真九郎さんが住んでいるところなのかって思っちゃって。予想以上に不気味だから足が^{すく}竦むの」

さすがの天王寺奉莉もまだ幼い子供。不安がる奉莉を元気づけようと弥彦は奉莉の手を握り返し、笑顔をみせる。

「安心しろ。一階は不気味でも二階に移動すればそんな気持ちも吹き飛ばさず。なんたって二階には優しい揉め事処理屋に飲んだ暮れの空手家、妖艶な魔女にわんぱくなお姫様がいるからな」

弥彦の冗談みたいな話に奉莉はすこしだけ安心したように笑う。

「なによ、それ。後半の二人に関しては御伽噺の登場人物みたいじゃないの。本当にそんな人達がここに住んでいるの？」

「ああ、いるさ。今回は会えるかどうかはわからないけどな」

「いまの言葉で一気にあんたの話が嘘くさくなったわね」

胡散臭そうに奉莉は弥彦に言った。

「信じるも信じないも奉莉しだいさ。ほら、二階に上がるぞ。その目で俺の話確かめてみればいい。きつと驚くぞ」

弥彦は悪戯っぽい笑みを浮かべて奉莉を先導するように階段を上が

る。階段を一段、また一段上がるたびに床が軋む。やっぱりここは立て直したほうがいいんじゃないかと思うくらい老朽化が酷い。奉莉も先ほどとは違う意味で不安になっているようだ。無事に二階に辿り着くと廊下を進み、一番奥にある部屋の前に到着。部屋の曇りガラスには6号室と記され、油性ペンかなにかで書かれたプレートには拙い字で『武藤』とあった。弥彦は奉莉を横で待たせると扉を軽くノックする。

「環さん。弥彦です。約束どおり奉莉と一緒に遊びに来ましたよ」

「はいはい！いま開けるよー！」

「えっ？」

間違いなく環の声が聞こえたのだが、その声は弥彦がいる正面の6号室の扉の向こう側からではなく隣の部屋。真九郎が住まう5号室から聞こえた。どたばたと騒がしい足音が廊下まで響き、バタンと勢いよく開け放たれた5号室の扉。

「あれ？確かに弥彦くんの声が聞こえたはずなんだけど誰もいない……弥彦くんの幽霊？」

「勝手に人を殺さないでくださいよ。こっちですよ、こっち」

弥彦は環のポケにツッコミを入れると自分の存在を環に伝える。5号室から廊下に出てきた環は6号室前で佇む弥彦と奉莉を発見する。環の姿は上下ジャージで頭には寝癖が残り、今日は外出していないことが窺える。ふらふらとした足取りで弥彦たちに歩み寄る環。微かにではあるが酒の匂いが香る。

「冗談だつて、弥彦くん。奉莉ちゃんもいらつしやーい！よく来てくれました！さあさあ、部屋の中に入って入って」

弥彦と奉莉の背を押しながら5号室、つまり真九郎の部屋に案内する環。そこは環さんの部屋じゃないだろ、と弥彦は口にだして言おうとしたがやめておいた。環に背中を押されるがままに弥彦と奉莉は5号室へとお邪魔する。

「お邪魔します」

弥彦と奉莉が口を揃えてそう言い部屋のなかに入る。部屋なかは中央に置かれたちゃぶ台の上にお菓子や缶ジュースと缶ビールが置かれ、部屋の床には環が飲み終えたものと思われる缶ビールの残骸が転がっていた。そして案の定、そこには九鳳院紫が居た。紫はちゃぶ台の横で腰を下ろし缶ジュースを飲みつつお菓子を食べていた。紫は弥彦が部屋を訪れたことにお菓子を食べる手を止め、驚いたような表情をしたがすぐにその表情引っ込ませる。

「久しいな、弥彦。おまえと会うのはわたしが崩月の屋敷を訪れたとき以来だな。あの時は世話になった」

「いいんだよ、別に。夕乃お姉ちゃんがおまえを誘ったことだからな」

「そうか。……それで、おまえの隣にいる子供は誰だ？」

紫は弥彦の隣で立っていた奉莉に向かって指を差して尋ねた。自分とどうみても同じ歳ぐらいにしか見えない紫に子供といわれた奉莉は眉を顰め、一步前になると紫を鋭く見据えて言った。

「人に名前を聞くときは最初に自ら名乗るものよ。そんなことも知らないのかしら」

棘のある奉莉の物言いに紫はムツとしてその場で立ち上がると声を大にして威風堂々とした態度で名乗り上げる。

「わたしは、九鳳院紫だ！ほら、名乗ったぞ。次はおまえの番だ、名を名乗れ」

「九鳳院ですって？九鳳院って、あの大財閥の九鳳院？」

奉莉は紫の話を無視して隣でふたりの様子を見守っていた弥彦に視線を向けると弥彦に尋ねた。弥彦は奉莉の視線を受け止め頷く。

「そうだ。奉莉の想像どおり、我が国の大財閥。名家中の名家である九鳳院家。その九鳳院家の子女が彼女さ」

「ここを訪れたときに言っていたお姫様って彼女のことだったのね」

「そうだよ」

「にわかには信じられないわね。あの九鳳院家の一族がこんなところにいるなんて……」

奉莉はそれ以上、弥彦に紫のことを詮索するようなことは尋ねず、弥彦から視線を外し再び紫を見据える。紫は奉莉に無視されて表情を怒らせ、イラついていた。子供は感情豊かなものだ。紫の感情の変化は顔を見ればよくわかる。弥彦は酒を片手に達観する環と一緒にふたりの様子を見守る。

「おい、おまえ！わたしの話を無視するな！無礼者めが！」

「ごめんなさい。紫ちゃんの名前があまりにも有名なものだったから、ついね」

「わたしをちゃんを付けて呼ぶのはやめろ！あと、いい加減、おまえも名乗れ！」

「悪かったわね、紫。わたしの名前は天王寺奉莉。そこにいる弥彦の友達よ」

奉莉は弥彦を指し示した。紫は弥彦をちらりと一瞥すると「ふんと鼻を鳴らす。なにか気に障るのだろうか。」

「天王寺奉莉だな。おまえの顔と名前、しかと記憶した。決して忘れんぞ」

「天下の九鳳院家にしがない庶民であるわたしの名前を覚えられるなんて光栄ね」

九鳳院紫を相手にまったく引け目をとらない奉莉の態度と器量。さすがに空手少女は肝が据わっている。ふたりは互いに鋭い睨み合いで対峙する。部屋の中は一触即発の空気で満ち満ちていた。ただの自己紹介だというのに、どうしてこうなった。弥彦は現状をなんとかしようとふたりの間に切り込みを入れる。

「おまえら自己紹介はそのへんにして、とりあえず座れ。……ああ、それとこれ、環さんにお土産です」

紫と奉莉は互いに視線を外すことなく、無言でその場に座る。弥彦

は環に駅前のケーキ屋で買ったケーキの入った箱を手渡す。環は「ありがとー！」と喜んでそれを受け取り、ちやぶ台の上に箱を置くと、さっそく箱を開ける。箱を開けた環は箱の中身をわくわくしながら上から覗き込む。

「うおッ！これは！ケーキじゃん！しかもこれ、駅前の美味しいとこのでしょ」

酒の勢いもあいまって、環は興奮気味に弥彦に聞いた。

「ご名答です。真九郎さんがよくうちに来るとき買ってきてくれるので、味は俺が保障します。ちなみにどのケーキにするか選んだのは奉莉なんですよ。ここに来る途中に店に寄って彼女に選んでもらいました」

「ありがとーう、奉莉ちゃん！あたしの好きなものばかりだよ。いいチョイスだね、グツジョブ！さっそくみんなで食べようよ」

環は奉莉にサムズアップをしてお礼を言い、ドタバタと部屋から抜け出すと自分の部屋に戻った。再び部屋に戻って来た時には両脇に缶ジュースと缶ビールがたくさん入ったダンボールの箱を挟み、その箱の上に器用に紙皿とプラスチック製のフォーク乗せて戻って来た。床にダンボール箱を置くと、紙皿とフォークを人数分ちやぶ台の上に配り置くと、一息つくように缶ビールを一本空け、環は喉を潤した。

「ぶっはー！やっぱり労働の後のビールは最高だね！それじゃあ、どのケーキにするかは早い者勝ちってことで……あたしは、これに決めたっ！」

ケーキの箱から一個のケーキを箱から紙皿に移し、環は床に胡坐を
？いて座った。まるで留まることをしらない嵐のような人だな、と
弥彦は思いつつ環のお言葉に甘えて自分もケーキを箱から一個選び
紙皿に移す。

「あーっ！それ、わたしが食べたかったやつなのに……」

とても残念そうに奉莉が弥彦に言った。奉莉の残念そうな様子を紫
が鼻で笑い、箱からケーキを取り出し紙皿に移した。奉莉も自分の
分のケーキを取り出す。弥彦はしょぼくれる奉莉の様子が気になっ
てしょうがなかったので、彼女にこう提案した。

「なあ奉莉。おまえの選んだやつと俺の選んだやつとで交換しない
か。まだ手は付けていないし、構わないだろう」

「弥彦！そんなやつに情けは無用だ。環は早い者勝ちと言ったのだ。
うかうかしていた奉莉自身が悪いのだぞ」

「そうはいうがな。やっぱり自分の好きなものを食べたいものだろ。
それにこのケーキは俺が奉莉に頼んで選んでもらったものなのだか
ら、奉莉が好きなものを食べる権利はあると思う」

弥彦がそう言うと、紫は「むむむ」と思案するように胸の前で腕を
組み、黙った。

「ほ、ほんとうにいいの？あんだ、それが食べたかったんじゃない
の」

遠慮がちに奉莉が言う。そんな奉莉の態度に弥彦は苦笑した。

「いいんだよ、別に。俺には好きなケーキとか拘こたわりが無いしさ。ほら、交換しよう」

弥彦はそそくさと奉莉のケーキと自分のケーキを交換した。自分のお目当てのケーキが食べれると、嬉しそうに奉莉は笑みを見せた。

「ありがとう、弥彦」

「どういたしまして」

弥彦と奉莉の一連の会話を黙ってケーキを食べながら紫は見つめていた。奉莉を鼻屑はなぢした自分を怒っているのか、と思ったがどうやら違うようだ。彼女の視線からは怒りの気配は窺えない。

「なにか気になることでもあったか？」

「おまえたちの仲がよいのでな。すこし、羨ましく思ったただけだ」

なんだそんなことか、と弥彦は安堵すると紫に尋ねる。

「奉莉とは友達だからな。友達と仲良くするのは当たり前だろ。紫にもいるだろ？友達のひとりやふたりぐらいさ」

「いや、いない。わたしには必要のないものだからな」

はつきりと紫は否定した。なんの躊躇もなく。悲しむこともなく。ましてや自嘲するようになく。本当に友達なんてものを必要としていないように。

「必要がないって、それはどういうことだ」

心なしか弥彦の気持ちが徐々に疑問から怒りに変わっていく。

「そのままの意味だ」

これ以上、話すことはないと言った紫は口を噤み、ケーキをぱくつく。しかし弥彦は食い下がらない。

「……それは《九鳳院家》の慣わしか」

弥彦は若干、声を低くして真剣な面持ちで言った。紫は弥彦に視線を合わすことなく無言。

「おまえのような子供に友達ひとりもできないような環境を《九鳳院家》が創ったのか」

また無言。

「うちに来たときにおまえは言ったよな。俺の話聞いて小学校とは興味深いところだなんて。それは、つまり学校にさえ通わせてもらえてないってことだろ」

無言。まるで弥彦は眼中にはない、といった風に。

「紫、おまえはいつたい。五月雨^{こい}荘に連れて来られる前はどついう生活をしていたんだ」

無言。紫はまた一口、ケーキを食べる。

「おまえは……!」

「弥彦ッ！」

見るに見かねた奉莉が弥彦の言葉を遮った。弥彦は「なんだ」と奉莉を鋭い瞳で睨む。

「あなた、紫のことを根掘り葉掘り聞いてどうすんのよ。紫が困っているじゃないの」

「俺はただ、紫が友達を必要ないとしないうつから気になって聞いていただけだ」

弥彦の言葉には怒気が含まれていた。自分はいったいなにに怒っているのだろう。

「それがどうして九鳳院家の話に繋がるのよ。話が飛躍しすぎじゃないの。それに紫はもう友達が必要ないなんて寂しいことは言えないわよ」

奉莉は胸を張り、ふふん、と得意げに言った。

「それはどういう意味だ」

先ほどまで口を嚙み、無言を貫いていた紫が口を挟んだ。それに奉莉は呆れたように小さく溜息を吐く。

「鈍いわね、紫は。気付かないの？」

「なんだと」

紫は目の端を吊り上げ、訝るように奉莉に目を向ける。本当に奉莉の言葉の意図を理解できていないようだ。

「あんたの目の前にいるじゃないの。ほら、わたしに弥彦。それに環さんまで。この部屋にいる人間はみんな、あんたの友達じゃないの」

当たり前でしょ？と最後に付け足し、奉莉が言った。その言葉に呆気にとられる紫。それは弥彦も同様だった。弥彦は九鳳院紫を友達とは違う角度で見っていた。友達とは違う、ましてや敵とも違う。真九郎の同居人としてみていた。それは他人行儀と同じ。

「わたしが、おまえたちと友達……」

「そうよ。もしかして、嫌だったかしら」

「い、いや。そんなことはない。むしろ、わたしは嬉しい」

紫は歯を剥きだしにして笑みを弥彦たちにみせた。子供らしい無邪気な笑み。彼女の無垢な笑みを見た弥彦は自分の愚かさに叱責した。九鳳院だろつが表御三家だろつが、そんなこと関係はない。紫は紫なのだ。

話がまとまりをみせはじめたところで静かに達観していた環が、むくりと、いつの間にか持っていた一升瓶の酒瓶を片手にその場によるめきながら、見ているこちらがはらはらするような足取りで無事に立ち上がりこつ言った。

「仲良きことは美しきかな！さて、みんなに年上のお姉さんとして威厳あるあたしから大事な一言！」

急にどうしたんだ、この飲んだ暮れは、と弥彦たちの心中が一致する。そんな弥彦たちにはお構い無しに、完全に酔っ払っている環がなんの前触れ無く、前のめりに倒れた。器用に酒瓶を胸の中に抱えて。床に環の顔面が当たる鈍い音がした。

「た、環さん！」

弥彦は慌てて環の容態を確認する。うつ伏せから仰向けに環を向き直すと弥彦の心配する気持ちは見事に消え去った。

「寝てるよ、この酔っ払い……」

見ているこちらが気持ちのいいくらい、清々しい寝顔で、ぐうすか大きなイビキを掻きながら環は眠っていた。なんて、ハチャメチャで出鱈目な人だろうか。環の寝顔を三人で覗き込んでいると紫が急になにかを思い出したかのように慌ててこう言った。

「いかん！真九郎のやつを迎えに行く時間だ。おい、環！起きろ、起きるのだ！わたしを真九郎のところまで連れて行ってくれ！」

ゆさゆさと環を揺する紫。だが、環が起きる気配は一向にない。気持良さそうに口から涎を垂らすしまつ。まるで、子供の寝顔だ。

「困ったぞ。環が一緒でなくては外を散歩することはできん。今日は夕方から雨が降るというのに、真九郎のやつに傘を届けなくてはいけないのに。どうしたものか……」

環が起きないことに見切りをつけた紫は顎に手の指を当て思案する。そんな紫に弥彦はこう提案。

「俺が真九郎さんのところまで連れて行ってやるつか？」

「本当か！い、いや、しかし……」

「護衛のことを気にしているなら心配はいらないぞ。これでも俺は《崩月家》の人間だからな。女の子のひとりぐらい守れるさ」

「そうか！では頼まれてくれるか、弥彦」

「もちろん」

快く弥彦は紫に頷いた。そして弥彦は奉莉に言う。

「と、いうわけだ。ちよつくら紫を真九郎さんのところまで送ってくるよ。奉莉も一緒に行くか？」

「わたしは環さんが心配だからここで留守番しているわ。そろそろ帰らなくちゃまずいんだけど、環さんが見ての通りだしね」

奉莉は環の寝顔を見ながら苦笑した。

「奉莉のご両親が心配しないか」

「大丈夫よ。あんなたちが真九郎さんを迎えに行っている間に携帯で連絡しておくから。たぶん、パパもママも許してくれるわ」

「そうか、すまないな。帰りは俺が家まで送るからご両親には心配いらないって伝えておいてくれ」

「うちに来るの！？そこまでしなくていいわよ、あんたの帰りが遅くなっちゃうじゃない」

妙に慌てた様子で奉莉は遠慮した。

「アホ。そんなこと気にしなくていいんだよ」

「弥彦！そろそろ出発するぞ。真九郎と入れ違いになってしまう」

すでに廊下に移動していた紫が弥彦を急かす。

「今行くよ。……それから最期に奉莉、俺が帰るまで念のために五月雨荘から一步も外に出るなよ」

「わかっているわよ。ここは世界で一番安全な場所なんですよ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべて奉莉は言った。

「その通りだ。それじゃあ、環さんのことよろしくな。紫を送ってきたら直ぐに帰ってくるから」

「いつてらっしゃい。気をつけてね」

「ああ。いつてきます」

弥彦は奉莉とあいさつを交わすと部屋から急ぎ足で退出する。紫を環の代わりに真九郎がいる星領学園まで送り届けなくてはならなくなった。紫の護衛をしつつ学園まで送り届ける。

難儀な大仕事だな、と弥彦は苦笑しつつ、傘立てから自分の傘を引き抜くと紫と一緒に五月雨荘を後にした。目指すは真九郎が通う星領学園。弥彦たちの行方に暗雲がたちこめるように天候は相変わらず灰色のままだった。

第二十六話 友達（後書き）

感想お待ちしています

第二十七話 忍び寄る影（前書き）

お待たせいたしました。

ご愛読をお願いいたします。

第二十七話 忍び寄る影

平日の夕時となると電車の乗車率なんてものは、そこそこのもので、ちらほらと学校帰りの学生の姿が車内で目立っていた。

ある学生は、友人とこれから都心の方にくりだして、夜遊びをする計画を楽しそうに話していたり、またある学生は参考書を片手に耳にはイヤホンを着けて勉強をしている。

いつも通り、普段と変わることの無い平和な車内。静かな車内では線路を走る電車の稼働音がよく響いていた。

そして現在、電車の椅子に腰を落ち着け、弥彦の席の隣に行儀よく座り時折、細い小さな両足をぱたぱたと交互に上下に落ち着かないようにぶらつかせる少女がひとりいた。

少女の名前は九鳳院紫。

天下の表御三家である九鳳院家の子女であるのと同時に、いまは弥彦にとっての護衛対象。

酒に酔いつぶれてしまった武藤環の代わりに、この少女を紅真九郎が通う星領学園まで送り届けなくてはならなくなったためだ。

紫が困っている様子を見るに見かねた弥彦が自ら、彼女の護衛を名乗り出たのである。

やっぱり、やめておくべきだったかな……。

急に弱音を吐きたくなってきた。護衛なんてものは弥彦にとっては生まれて初めての経験。

しかも、その初めての護衛対象が九鳳院家の者とくれば弥彦の緊張感には限界を超えそうだった。

友人である天王寺奉莉と紫の前では女の子ひとり守るくらい崩月家の人間として、たいしたことはない、と大見得をきってしまったが、やはり自重するべきだったと今更になって弥彦は後悔していた。

しかし、過ぎてしまったことは元には戻せない。

ここは腹を据えて、この少女を自分の身に代えても守りきるのが得

策か。

どうも自分の考えは後ろ向きだ。あれこれ悩んだところで、仕様が無いことだ。

緊張していて、いざというときに身体が動かなくては意味が無い。いまはもつと気楽に身構えるべき、と自分に言い聞かせ弥彦は紫に緊張を解すように気楽に話しかけた。

「紫は五月雨荘での生活には慣れたか？」

「うむ。あそこでの生活は、もうすっかり慣れたぞ。最初こそ、寝室や食堂、リビングがあつた狭い一室のなかに全部あることや、風呂が銭湯というところにあることには戸惑ったが、いまはなんら気にはならんしな。それに、真九郎の作る料理は美味しいのだ！」

さすがは大財閥の子女。

庶民が暮らす六畳一間のアパートの一室にはカルチャーショックがあつたことが窺えるが、すぐにその生活に馴染み、不満や文句を言わぬあたり、この九鳳院紫という少女は適応力がすごいのだろう。幼いのに立派なものだ。

「そうかそうか。真九郎さんの作る料理は美味しいか。そりゃあ、兄弟子が褒められるのは弟弟子として俺としても嬉しいし、夕乃お姉ちゃんもきつと喜ぶだろうな」

「なぜそこで夕乃のやつが喜ぶのだ？」

「なぜって、それは夕乃お姉ちゃんが真九郎さんに手取り足取り料理の仕方を教えたからさ。真九郎さんが五月雨荘で一人暮らしを始めるってんで、お姉ちゃんが料理の基礎を真九郎さんに叩き込んだんだ」

料理の練習を始めた頃の真九郎の姿がいまでも目に浮かぶように思
い出せる。

今でこそ、一人暮らしになんの不自由なく、色々な料理を作れるよ
うになった真九郎であるが、最初から料理ができたわけではないの
だ。

夕乃による『愛の料理教室』（夕乃談）によるワンツーマンの料理
修行によって、料理素人だった真九郎は料理ができるたくましい主
夫になったのだ。

そんなことを説明で付け足して紫に話すと、紫は頬を膨らませ不機
嫌そうな顔をした。

「わたしにだって、料理くらいできるぞ！聞いて驚くなよ、弥彦。
わたしは今朝、真九郎の為に、あいさい弁当というものを作ったの
だ！」

胸を張り誇らしげに紫は言った。

夕乃に対抗して冗談で言っているわけではないらしい。

弥彦は素直に驚いた。

「へえ、そりゃあすごいな。その歳で弁当を作れるなんてたいした
もんだよ。しかも、愛妻弁当ときたもんだ。それはそれは真九郎さ
んが羨ましいかぎりだな。で、いったいどんな弁当を作ったんだ？」

弥彦におだてられた紫は機嫌がよいのか、ふふん、と上機嫌に鼻を
鳴らす。

「冷蔵庫のなかにあったものをな、適当に選んで鍋で炒めたのだ！
真九郎のやつが、手伝うとしつこく言うものだから大変だったのだ
ぞ。あいさい弁当はひとりで愛をいっぱい込めて作るものだと環

のやつから借りた本に書いてあったのだ」

真九郎さん、お腹壊してないだろうな……。

上機嫌に真九郎のために弁当を作ったのだと語る紫に弥彦はここはひとつ、助言をすることに決めた。

今後の真九郎のお腹のためである。

「まあ、愛妻弁当に関してはあなたがち間違っていない解釈だと思う。が、その弁当が適当に食材を炒めたものだと、ちと愛妻弁当にしてはまずいんじゃないか？」

「どうしてだ？わたしが真九郎のことをたくさん、たくさん大好きな気持ちを含めて作った弁当だぞ。まずいはずがなかるう」

「そりゃあ、まずなによりも食べてくれる人のことを考えて作るの
は大切さ。その点に関しては、紫は間違っちゃいない。けどな、
適当に食材を炒めただけだと味気ないし、なにより美味しくない」

弥彦はきっぱりと正直に紫に言ってやった。

きっと紫は料理なんて作るのは初めての経験だったのだろう。

まだ幼い少女でしかない紫が最初から料理なんてものが出来るはず
がないのだから。

そんな彼女に、おまえの料理は美味しくない、と断言するのは酷過
ぎることだと思う。

だけど、弥彦は言った。

まさか、自分の丹精込めて作った料理が美味しくないと言われると
は思っていなかったのであろう紫は大きな瞳を瞬かせ、その表情が
悲しそうに曇った。

「……そうか。所詮、子供であるわたしが作った料理は美味しくな

いか……」

やはり言い過ぎたか、と弥彦は申し訳無さそうに頭を掻いた。どうして自分はこつも無神経なことを口からおめおめと出せるのだらう。

こつという神経の図太さが、知らず知らずに他人を、友人を傷つける。我に返った弥彦は、こついうときはなんて励ませばいいのだらうか、と思索した。

自分で紫を落ち込ませといて虫のいい話ではあるが、彼女が悲しむ顔はどこか胸が痛む。

子供が悲しむ姿は、どこか悲観的だ。まるで自分の心の奥底にある大事なものを自ら傷つけてしまったかのように。

弥彦が慎重に言葉を選んでみると、紫が曇った表情を一転させた。そして吹っ切れたように彼女は顔を弥彦の目と鼻の先にくっ付くのではないのか、というくらい近づけて興奮するように言った。

「お願いだ、弥彦！わたしに料理の仕方を教えてくれ！おまえの言ったことは正しい。ただの子供であるわたしの料理など美味しいはずがないのだ。それなら、美味しい料理が作れるようになればいいだけの話。だから弥彦、わたしに料理を教えてくれ！真九郎を喜ばせたいのだ、わたしの料理で……」

弥彦に懇願する紫の悲痛とも思えるような真剣な瞳には子供らしからぬ、光が宿っていた。

本当に真九郎の為だけに、彼を自分の力だけで喜ばせたいが為に、紫は真剣だった。

あまりにも真剣な紫の瞳に弥彦は気圧され、無意識の内に身を引いていた。

隣に座る学生に弥彦の背が当たり邪険そうな表情で学生が弥彦を見たので弥彦は慌てて「すみません」と謝り、溜息を小さく吐くと一

度立ち上がり、再び腰を落ち着かせると興奮止めやらぬ紫に向き合った。

「俺が料理できるとは一言もいってないだろうに……」

「おまえは料理ができないのか？」

期待するような眼差しを向ける紫の質問に弥彦の答えは詰まった。ここで出来ない、といえばなんとなくまた、自分の目の前で一生懸命になっている少女が悲しむのではないのかと頭のなかをよぎったのだ。

なにを迷っている？料理くらい教えるなんて弥彦にとっては朝飯前だろうに。

「……いや、多少は出来る」

自分の自信のなさの表れか。弥彦の言葉は小さな擦れた声だった。それでも紫は「やっぱりか」と、どこか安心したように頷く。

「なら、決まりだな。わたしはおまえに料理の教えをこいいたい」

「おいおい。なぜ俺なんだ？夕乃お姉ちゃんや、真九郎さんがいるだろうに」

弥彦の素直な疑問。

なぜ料理上手が身近にいるにもかかわらずに、自分に教えを請うのか？

紫はなんだそんなことか、という風に腕を胸の前で組むと弥彦を見据え、言った。

「なに、簡単なことだ。真九郎の為に作るのに、真九郎に教えて貰っては意味がなからう。夕乃のやつに教えてもらうのは論外だ。するとどうだ？おまえだけしかわたしが信用に値するもので料理ができるものがない」

「あー、なるほどな」

つまり、紫は夕乃に料理を覚えてもらうのは悔しいから嫌で、真九郎には自分が料理を練習中なのを隠しておきたい。すると残るのは弥彦だけ。幸いにして、弥彦も多少なりとも料理の心得をもっている。

最近、忘れがちだが、これでも前世では一人暮らし経験者なのだ。それに、最近は冥理の夕飯の手伝いを自ら進んでやっている。

簡単な料理なら、和食、洋食、中華などジャンルに問わず、弥彦には作る自信があった。

「紫のいいたいことはよくわかった。俺でよければ、おまえのために力になるう。俺の数少ない友達の頼みだからな。もちろん、真九郎さんにも夕乃お姉ちゃんにも内緒でさ。秘密の特訓だぞ」

弥彦が料理を覚えてくれると聞いて、紫は「やったー」と嬉しそうにはしゃいだ。

車内の乗客がはしゃぐ紫に、騒がしい子供を見るような鋭い視線を向けたので、弥彦は紫に「あまり騒ぐなよ」と耳もとで囁いた。

紫は慌てて両手で口を覆うようにつむぐと、先ほどとは違い、小声で弥彦に話す。

「ありがとう、弥彦。ではさっそくなんだが肉じゃが、というものの作り方を教えてくれ」

「なんで肉じゃがなんだ？」

ピンポイントな料理の品をご指名だったので弥彦は不思議そうに小声で尋ねた。

「良い嫁になるには肉じゃがを作れるようにならない、とこの前テレビで自称婚活のプロ、というものが言っておったのだ」

どんなプロだよ……。

世の中にはいろんなプロがいるもんだな、と弥彦は苦笑交じりに肯定の意味を込めて一度頷く。

「わかったよ。紫のために一肌脱ぐとしよう」

弥彦が紫に料理を教えることを約束すると、まるでタイミングを見計らったかのように電車は目的駅に到着した。

弥彦は紫を連れて電車を降りた。駅のホームから見上げる空は相変わらず、雨が降りそうなどんよりとした曇り空だった。

弥彦たちを乗せた電車が次の駅に向けて、駅のホームから出発する。電車を下車した客が、すっかり居なくなつたホームで弥彦は周囲に警戒する。

車内では密室で限られた空間だったので比較的安心して過ごせたが、駅ともなると話が違う。

夕時ともなると、広々とした駅舎内は人通りが激しく、まさに帰宅ラッシュささままだろう。

ここからが紫を守る護衛としての本番。

弥彦は気合を入れるように自分の頬を両手で勢いよく叩くと、胸に溜まつた緊張の空気を吐き出すようにゆっくりと息を吐いた。それを紫が呆れたような表情で見つめる。

「なにもそこまで気合をいれる必要もないだろうに……」

「そう思うなら、いまから大人しく五月雨荘に戻るか？」

「それは嫌だ。わたしのことを頼んだぞ、弥彦」

「ああ」

案の定、駅の改札口を抜けたところで帰宅を急ぐサラリーマンや学生たちの人混みに巻き込まれた。

道行く大人の人間に小さな子供である弥彦と紫は、駅舎を抜けるだけで何度かぶつかりそうなる危険が多々あったが、そこは紫の護衛を頼まれている弥彦が紫を人通りの少ない壁際を歩かせることで難無く回避した。

やっとの思いで駅舎を出る。護衛という慣れない事をしている弥彦は若干、頬に汗が流れていた。

それを心配そうに紫が見つめていたが、弥彦は「大丈夫」と一言。人通りが多いのは駅前だけに限ることだ。駅前を抜け、比較的人通りが少ない通学路に出れば弥彦にとってはいまよりずっと気楽で安心できる。

いつも登校で通っている駅前だというのに今日の弥彦には苦難の場所のように思えた。

周囲に細心の注意を払いながら、弥彦は紫と共に星領学園に向けて歩きだした。

通学路を歩いていると、ちらほらと真九郎や夕乃が通う星領学園の制服を身に着けた学生が駅に向かって歩いていた。その流れに逆らうように弥彦たちは学園を目指す。

もしかしたら、学校帰りの夕乃と鉢合わせるんじゃないのか、と弥彦が期待していたのだが、結局、学園前まで来ても会う事はなかった。

そのかわりに、校門からちょうど出てきた真九郎を見つけることが出来た。真九郎はこちらにはまだ気付いていない様子。

ここはひとつ驚かせてみるか、と弥彦が悪戯でもしようかと邪なことを考えていると紫が弥彦の手を引いて元気よく駆け出した。

成す術も無く、弥彦は紫に手を引かれながら一緒に走る。さすがに真九郎の目の前まで近付くと真九郎も紫と弥彦に気付いた。

「真九郎！」

元気よく、そして嬉しそうに、はしゃぎながら紫は真九郎の足に飛び付いた。

「……紫」

それを困った風ではなく、どこか複雑そうな面持ちの真九郎が見下ろす。

「お久しぶりです。真九郎さん」

「弥彦まで……いったいどうしてここに？」

「これを届けにきたのだ！」

紫が手に持っていた傘を真九郎に差し出すと真九郎は無言でそれを受け取った。

紫がわざわざ迎えに来ているのに真九郎の表情は晴れない。

……真九郎さんの様子、おかしくないか？

弥彦が真九郎に疑問を抱いたのは、ごく自然のこと。真九郎とは長い付き合いであるし、崩月流を法泉から学んだ者としても兄弟子と弟弟子という兄弟弟子の関係。

自分にとって兄にも近い存在である真九郎の些細な違和感を弟弟子である弥彦が見過ごすわけがなかった。

紫も真九郎の違和感に気付いているのか、不思議そうに真九郎を見上げながら首を傾げる。

「どうしたのだ？真九郎。わたしと弥彦が迎えに来たのだぞ。なにを悩んだような顔をしている？嬉しくないのか？」

まさか、五月雨荘から紫のことを真九郎に無断で連れ出したことを怒っているのではないのか？

そう思った途端に弥彦は真九郎にする言い訳を必死で考える。だが、真九郎が言った言葉は弥彦の考えとはまったく逆だった。

「……ああ、嬉しいよ。傘を持って来てくれて助かったよ。弥彦も紫をここまで送ってくれてありがとな」

「い、いえ。真九郎さんに喜んでもらえて俺も嬉しいですよ」

「うむ。わたしも真九郎が嬉しいなら、嬉しいぞ」

紫は真九郎と同じ気持ちを共有できることが嬉しいようだ。そんな紫の様子を弥彦は不思議に思った。

真九郎たちが崩月家の屋敷を訪れて、それほど日が経っているわけではないのだが、真九郎に対する紫の接し方が屋敷を訪れた時と現在とではだいぶ印象が違う。

真九郎のことを使用人のように命令して接していた紫が、今ではまるで恋人に甘えるように真九郎と接しているのだ。それに対する真九郎は娘を見守る父親といったところか。

たったの数日で、二人の関係が主従関係から対等な、むしろ紫が真九郎に好意を寄せている恋人関係に変化した、といっても過言では

ないのかもしれない。

環が以前、自分に話したことを思い出した。最近の紫は真九郎にご熱心であると。

それにしたってこの変化は弥彦にとっては予想の斜め上を通り過ぎている。

いったい二人の間になにがあつたのだろうか？

二人に直接、変化の理由を聞けばこの疑問は解決することなのだが、弥彦にはそれがなんだが無粋なことのような気がして聞くことは出来なかつた。

時が経てば、おのずとわかること。ふたりの関係が悪化するのではなく、むしろ好くなつたのだから、自分が詮索するべきではないのだろう。

上機嫌に、そして嬉しそうに頬を赤らめながら真九郎と話す紫を弥彦は穏やかな眼差しで見つめた。

学園からの帰路の途中、真九郎が駅前で夕飯を買つたためにスーパーに寄つてから帰るということで、弥彦は五月雨荘に奉莉を待たせているからと真九郎に断りを言つてから、駅前で真九郎と紫に別れの挨拶を交わし、ひとり五月雨荘に向けて商店街を通り抜けた。

商店街を抜けた後、人通りがまばらな並木道を淡々としながら歩き、目的地である五月雨荘の外観が見えてきたところで弥彦の歩みが止まつた。

その原因は弥彦の視線の先にあつた。

五月雨荘の石造りの門前に一台の車が止まっていた。

それもただの車ではない。見るからに富裕層が乗るような黒い漆黒の高級車。

それが弥彦の眼には五月雨荘の外観には、場違いなほどに存在感を主張する。

五月雨荘の住人の誰かが所有している車両だろうか？

それにしても随分と金の掛かつた車だな、と弥彦はなんとなく気に

留める程度に車両の横を通り抜けると五月雨荘の門を潜った。

共同玄関で靴を脱ぎ、軋む床板にはらはらしながら階段を上り二階の廊下に移動。

すっかりと暗くなってしまうた廊下を天井にある数本の蛍光灯が弱々しい光で照らす。

それでも薄暗い廊下は、どこかゲームで出てくる一種のダンジョンのような気さえした。

そんなことを考えつつ、弥彦は廊下を前進。ちょうど廊下の真ん中辺りに位置する5号室の部屋前に辿り着くと扉を軽くノックしてから開け、室内に入った。

「ただいま」

「おかえりなさい」

弥彦を迎え入れたのは天王寺奉莉。

五号室の部屋内は弥彦が紫を連れて出発する前に比べて随分と綺麗に片付けられていた。

床には環が飲み終えた缶ビールやお菓子の袋などのゴミは散らかっておらず、奉莉がひとりで掃除していたことが窺える。

その代わりに以前と変わらないものがたったひとつだけ。

酒瓶を胸のなかに抱えながら気持ち良さそうにいびきを掻きながら寝ている武藤環だけはそのままだった。

弥彦はそれを苦笑を交えながら横目に部屋の中央に置かれたちゃぶ台の横に移動すると奉莉と向かい合わせになるように腰を下ろす。

「部屋を掃除してくれたみたいだな、助かったよ。ありがとう、奉莉」

「いいのよ、お礼なんて。ここは真九郎さんの部屋なんでしょ？部

屋の主に無断で使用させてもらってにおいて、部屋が散らかっていたら真九郎さんに申し訳ないじゃない。当たり前前のことをしたまですよ」

奉莉は誇るようにでもなく、淡々とした口調で弥彦に言った。

弥彦はそんな彼女の飾らない態度に自然と笑みが漏れた。

心から彼女に感謝すると共に、そんな彼女が弥彦にとって誇らしく思えたからだ。

「おまえのそういうところ、好きだよ」

「なっ………！」

奉莉は呆気にとられたように眼を大きく見開き、口をぱくぱくさせ、今にも沸騰するのではないのかと頬を真っ赤に染めた。

彼女は弥彦の不意打ちにはめっぽう弱く、免疫がないのだ。慌てふためく奉莉をずっと眺めていたい衝動に弥彦は駆られたが、時間も遅いのでやめた。

彼女を家まで送り届けなくてはならないからである。

「奉莉のご両親も心配しているだろうし、そろそろ帰ろうか。約束どおり俺が家まで送っていくからさ」

「ありがとう……あのね、弥彦。もし、よかつたらでいいんだけど帰りはわたしの家で夕飯を食べていかない？家に電話したときママがあんたのこと誘いなさいって……」

奉莉は頬を赤らめ、少し上目遣いで弥彦の様子を窺うように見つめた。

家族でもない自分が、よそさまの夕食に誘われるとは弥彦としては至極光栄な話。

二つ返事でYESと答えたいところだが、弥彦は返事に詰まった。

「そりゃあ、嬉しいお誘いだけど……俺なんかが一緒にいいのか？」

「もちろんよ！遠慮することなんてないわ。むしろ、弥彦なら大歓迎よ。ママもパパも喜ぶし、わたしだって……」

「わたしだって？」

「なんでもないわ！ほら、そうと決まれば早く帰りましょう。今日は弥彦が来るから夕飯はご馳走にするってママが張りきっていたから、きつと美味しい料理が待っているわよ」

「それは楽しみだ。ご馳走になるわ」

奉莉に誤魔化されたような気がするが、美味しい料理ときいて弥彦の興味がそちらに移ったので弥彦は奉莉に追求することはなかった。弥彦は部屋を出る前に真九郎への置手紙をちゃぶ台の上に残し、床で熟睡する環に真九郎の部屋の押入れから拝借した毛布を優しくかけるとランドセルを背負い部屋を後にした。

共同玄関の扉を開くと、冷たい夜風が正面から吹きつけ、まるでこれ以上進んではいけないと警告するかのようには弥彦と奉莉の歩みを妨げる。

しかし、風が吹き付けたのも数秒間の間だけ。風が吹き付けるなど日常茶飯事のこと。

弥彦も奉莉も、ああ今日は風が強い日なんだな、というぐらいにしか気に留めない。

むしろいまの二人には、各々今晚の夕食が楽しみでしようがない、といった、ある意味子供らしい純粋な期待で胸がいっぱいだった。

奉莉は上機嫌に笑顔を絶やさず、鼻歌を口ずさむぐらい絶好調。弥彦も奉莉が上機嫌なのを微笑ましく見つめ、自然と気持ち穏やかになって笑ってしまう。

奉莉がスキップするとそれにあわせて彼女が背中に背負う赤いランドセルがびよん、と跳ねる。

まるで遠足前にはしゃぐ子供。自分の喜びを身体全体で表しているかのよう。

「そんなにはしゃぐと転んでもしらんぞ」

「大丈夫よ。わたし、強いもの！」

弥彦の注意もどこ吹く風、振り向きざまに弥彦に見せた奉莉の笑みは、屈託の無い無邪気な少女のもの。

子供は楽しいから笑う。悲しいから泣く。怖いから怯える。腹を立てたから怒る。嬉しいから喜ぶ。

なんとも当たり前で素直な喜怒哀楽の感情。人間である証拠。

それが大人になるにつれて素直に、自然にできなくなるというのだから、この世の中はどこか歪んでいるのだろうか。

悪が陰から世界を不安と恐怖で支配する。喜びも悲しみも怒りも快樂さえも、社会のヒエラルキー下層にいる者は自分の口当たりのいいものだけを摂取して満足している。それが現代社会の風潮。世の中の歪。

自分もそのなかに含まれているのだろうか？

自分は違うと信じたい。目の前にいる少女に対して自分が歪であり害悪であるなんて信じたくない。

そして、それが試されるときが向こうからやってきた。

五月雨荘前に止まる一台の漆黒の高級車。弥彦がなんとなく気に留めていただけの車。

車のドアが開きひとりの若い青年が地面に靴音を鳴らして降り立つ

た。
その青年のいでたちは高級そうな胸が開いたシャツとスーツ上下に革靴。その風貌は目鼻立ち、ファッションモデルでも通じる洗練された美しい顔かたち。
しかし、その瞳には狡猾で、あるのは自尊心といったものが窺える。そして青年は、驚く弥彦と奉莉の前にゆっくりと歩み出る。

「こんばんは」

青年から発せられた最初の一言は、なんのことはない、ただの挨拶。甘い声。

「……こんばんは」

それに奉莉が答えるが、弥彦がすぐさま奉莉の服を引っ張り自分の背の後ろに引き寄せる。

奉莉は弥彦の行動と表情にただ事ではない、と瞬時に察する。賢い少女だ。

自分が歓迎されていないと判断したのか青年は困ったように肩をすくめた。

弥彦は後ろにいる奉莉を気かけながら青年を睨みつけ、口を開いた。

「あなた、誰だ？」

青年は弥彦にあからさまな嫌悪感を表情に表すと、視線を弥彦から外し弥彦の後ろにいる奉莉に向けた。

その態度が弥彦の気に障る。無視された。まるで自分の存在を否定されているように。

弥彦はもう一度、青年に訊いた。

「おまえは誰だ！」

荒々しく、怒気を込めた弥彦の言葉。

「おまえはしゃべるな。耳が穢けがれる」

返ってきた返事はあきらかな拒絶と否定。

青年は始めから弥彦のことなど見ていなかった。それはなぜか？

「生憎と俺は《裏十三家》と話す舌は持ち合わせて無くてね」

《裏十三家》。青年は確かにそう言った。弥彦の聞き間違いではない。

つまり、この青年は……。

「まあ、名前ぐらいならいいか……」

青年はそう呟くと、「九鳳院 竜士」と名乗った。

紫と同じ《九鳳院》と。

第二十七話 忍び寄る影（後書き）

感想お待ちしています

第二十八話 壊れる日常（前書き）

ご愛読お願いいたします

第二十八話 壊れる日常

黒い漆黒の高級車から貫禄ある足取りで降り立った青年は驚く弥彦と奉莉をよそに歩み寄り、ふたりの前に躍り出るとその整った容姿に相応しいとても甘い声で挨拶を奉莉とだけ交わすのだった。

突然の見ず知らずの青年の登場に弥彦は訝しみ青年に名乗るように促すが青年は弥彦にあからさまな嫌悪感を表情に表わすと弥彦の言葉を無視するのだった。そして、青年の態度が気に障った弥彦は青年に再度名乗るように怒りを感情に言葉に込めて再度問い詰めた。すると青年は弥彦が裏十三家であることを見抜いていたのか、それとも承知であるのか、弥彦を穢れた者と称して弥彦が言葉を発することさえも許しはしないと警告した。

青年の棘のある言動に戸惑い、怯え、うろたえる弥彦。小さな身体から見上げる青年の威圧感に無意識の内に弥彦は冷や汗を頬に伝わせて一歩あとずさる。そんな弥彦の情緒不安定な様子を彼の背に守られるように奉莉が不安な面持ちで見ている。

青年は弥彦が自分に臆していると弥彦を鼻で笑い、胸の前で腕を組み鼻高々に弥彦を見下ろす。そして、青年は行動をおこした。

「改めて名乗るけど、俺は九鳳院竜士。そこにあるボロ小屋に俺の妹が居ると聞いてね。はるばる妹を迎えに来ただけど、君は知らないかな？」

九鳳院竜士と名乗った青年は弥彦に取った言動とは一変して優しい口調と人当たりの良い穏やかな表情で五月雨荘をボロ小屋と称して弥彦の背に隠れている奉莉に話しかけた。この質問は決して弥彦には訊いてはいない。その証拠に竜士は先ほど弥彦にしゃべるな、と警告して弥彦は居ないものと考えている。奉莉にだけ視線を合わせて彼女だけに話しかけているのだから。

「九鳳院、竜士？妹？それに裏十三家って……」

自分たちの目の前に突然現れ、弥彦を邪険にし、紫と同じく九鳳院の姓を名乗る青年の言葉に奉莉は戸惑い、困惑していた。

わからない、目の前にいる青年は本当に紫の兄なのだろうか？

わからない、なぜ弥彦はこんなにも怯えているのだろうか？

わからない、裏十三家とはなんなのだろうか？

わからない、弥彦の肘から角が生えてくると関係があるのだろうか？

ふつつつと無限にも湧き上がってくる疑問と疑惑。

子供のわたしにはわからない。教えてよ、弥彦。助けてよ、弥彦。

奉莉は弥彦の小刻みに震える両肩に自分の小さな両手を力強く添えると弥彦に助けを求めるために彼の肩を揺すった。

「弥彦！いつまで黙っているつもり！ねえ、あの人の言っていることは本当なの？裏十三家ってなんなの？ねえ、答えてよ！弥彦ッ！」

奉莉は自分でも驚くほどに激しくゆさゆさと弥彦の肩を揺らす。だが、弥彦は奉莉に振り返らない。ただ黙って顔を俯かせているだけだった。

「なんだ、君は知らないの？」

「なんのことをですか」

「なんのことって、そいつの家系のことだよ」

ふと、弥彦の両肩の震えが止まった。奉莉は弥彦の様子を不審に思いながらも弥彦の背中越しに顔を覗かせ竜士の顔を見上げる。そし

て、竜士は奉莉が無知なことに肩を竦め弥彦を指で指し示した。

「弥彦の家系がなんだっていうんですか」

「本当に知らないんだな、君は。一緒にいるものだから知っているものだと勘違いをしていたよ。……そうだな、うん。ここで遇ったのも何かの縁だろうしいい機会だから教えてあげるよ。そいつの家はね、裏十三家といって裏世界で人道に反する家業を営む十三の家系の集まりのひとつ《崩月》の一族の者だね。その穢れた血筋には人殺しの血が流れているんだよ。悪いことはいわない、そんなやつと一緒にいるのはやめたほうが身のためだ。いつか酷い目に遭わされるよ」

「……なによ、それ」

奉莉は弥彦の両肩から両手をだらりと力が抜けた様子で滑るように離れた。そして、後ろに一步二歩と力なく足をふらつかせながらあらずさる。それでも弥彦は振り返らない。いまだに黙って俯くままでその表情は見えない。否定してほしいと奉莉は弥彦に願った。竜士はふたりの様子を愉快そうに眺めると口元を歪める。

「ああそういえば、随分と小さい頃に古い書物で読んだっけな。《崩月》は身体から角が生える化け物だって……！」

とどめの一言。《化け物》。人間ではないもの。

奉莉はこの一言で竜士の言葉が真実だと確信した。

弥彦の右肘から角のような鋭利なものが生えることは4月の誘拐事件の際にはじめて知ったことだ。このことは自分と弥彦だけの絶対他言無用の秘密。誰にも言えないこと。なぜなら、人間の身体から角が生えるなんて誰かに言ったところで信じる者がいるはずがない。

子供の戯言を信じるほど大人は知識、価値観、判断力がないわけではないのだから。

弥彦の身体の異常は認知していた。だけれど、それが奉莉には怖いとは思えなかった。

それはなぜか？

奉莉にとって崩月弥彦という存在は根暗で男の癖に女々しくて不器用で優柔不断で嘘を吐くのが下手で小学校のクラスでもあまり目立つような少年ではないけれど、角のこと以外に自分だけは知っていることがあるからだ。

弥彦がわたしの為に命をはって誘拐犯から助けてくれたこと。

弥彦がわたしの強引なお願ひにも関わらずに町道場で一緒に組み手をしてくれること。

弥彦がわたしのことが自分には必要だつて泣いていたわたしの肩に手を置いて慰めてくれたこと。

ほかにもたくさん……たくさん……あるのに……それなのに……。奉莉の弥彦との思い出という足場が音をたてて崩れるような気がした。意識が遠退く。いつもの気丈な気持ちで奉莉は保てない。

弥彦の角の秘密を知っている竜士の言葉が急に現実味を帯びてきた。奉莉は目の前にいる崩月弥彦という存在が途端に怖くなった。怖くて、怖くて、堪らなかった。自分の目の前にいる同じ歳の小さな少年が、ずっと友達だと思っていた弥彦が人殺しの一族の人間だったなんて。否、《化け物》だったなんて……。

奉莉と弥彦との距離はたったの三步程度なのに奉莉には弥彦の背中がとても遠く感じられた。

「ところで、最初に俺の言った質問に答えてくれないかな？君の疑問には答えてあげたでしょ。あのさ、妹の九鳳院紫のことなんだけど知らないかな？」

「……紫、なら、今はいませんよ」

五月雨荘の古い石造りの門柱にもたれ掛かりながら息苦しそうに小さな擦れた声で奉莉が答えた。

「なんだ、紫の奴は留守か。じゃあ紫が戻ってくるまでに誘拐犯を捕まえるでしょう」

「誘拐犯？」

いったいなんのことだ、と奉莉は気力のない両眼で竜士を見上げた。

「そつだよ、誘拐犯。きみの目の前にいるでしょ」

「えっ？」

奉莉は息をのんだ。弥彦を化け物呼ばわりするかと思ったら今度は誘拐犯呼ばわりする竜士の言葉に奉莉は驚きで目をばちばちと瞬きさせる。驚く奉莉をよそに竜士はこの経緯を簡単に説明。

「実はね、紫は九鳳院家からある日突然に誘拐されてね。捜し回ったところ、つい先日紫の居場所がそのボロ小屋だってわかったところなんだ。だけど、誘拐犯は誰だかまだわからなくてね……」

竜士は一呼吸間をおいた。そして、告げる。

「ここにきて犯人を確信したよ。そいつだ」

竜士は顎を少しだけ上下に動かして弥彦を示した。弥彦は俯いた顔をゆっくりと上げると竜士の顔を見上げる。弥彦の瞳には涙が浮かび、頬を涙が伝った。

今日は信じられないことばかりが起きる、と奉莉は心身ともに疲弊しながらも弥彦の背中と竜士の顔に視線を交互に振り分ける。背中越しなので奉莉は弥彦が泣いていることには気付いていない。

「なんで、ですか？なんで紫を誘拐した犯人が弥彦なんですか」

納得のいかない奉莉は息苦しいことさえも忘れたように竜士に問いかけた。

「単純なことさ。紫が誘拐された隠れ家に、裏十三家の《崩月》が居た。それだけで理由としては十分だと思っけど？《九鳳院》相手にこんな大それたことをするぐらいだから、かなり名の知れた人間が関わっているだろうと勘づいてはいたんだけど、まさか《崩月》だったとはね。案外俺の勘も捨てたもんじゃないね。それじゃあ、さっそく犯人を捕まえないと、《鉄……！》」

「ちょっと、待って下さい！」

「ん、なんだい？」

誰かを呼ぼうとしていた竜士の言葉を遮り、奉莉が大声を上げた。それを竜士は気に障った様子はなく表情は穏やかなままだった。

「弥彦が紫のことを誘拐するなんてありえませんか！」

「どうして？」

竜士の当然の疑問の答えに奉莉は言葉に詰まった。

「だって、紫と弥彦は……その……」

「その？」

「……友達です、から」

「はあ？」

竜士は奉莉だけに見せていた穏やかな表情を崩すと、げんなりとした様子で深いため息を吐いた。

「君、名前は？」

「……天王寺、奉莉です」

「それじゃあ、奉莉ちゃんでもいいかな？訊き直して申し訳ないんだけど、誰と誰が友達だっていったのかな？」

「あなたの妹の紫と、そこにいる弥彦です」

竜士は気分を害した様子で苦笑すると弥彦を一瞥してから困ったように視線を巡らせ奉莉に留めた。

「へえ、紫の奴が《崩月》の小僧と友達、ね……。奉莉ちゃんも紫のやつと友達なのかな？」

「そ、そうですね」

「……」

長い沈黙。すると、竜士は奉莉を下から上まで値踏みするようにつゆ

つくりと時間をかけて隅々まで舐め回すように視線で捉えていた。竜士の異常な視線から背筋が凍るような危険を感じ取った奉莉は逃れようと足を動かそうとするが、足が震えてそれどころではなかった。足腰に力が入らず、背中に背負うランドセルの重みに身体が耐えられず、その場にくず折れるようにへたり込んだ。

奉莉はどうしたらいいのかわからず、その場でガタガタと震えが止まらない自分の小さな身体を竜士の視線から守るように本能に従うままに身を丸く縮めた。

この自分に纏わりつくような視線を知っている。例えるなら獣が、野獣が獲物を舌なめずりするような感覚。以前にも経験したことがある。そう、あれは4月の誘拐事件の際に誘拐犯に自分が押し倒されたときの感覚。挫折感、虚無感、崩壊感、失意、傷心、いずれでもない。そう、これは圧倒的なまでの絶望。助かる術がない終わりのなき永遠の恐怖。

あのときの忌まわしく、思い出したくもない記憶を呼び起こしてしまった奉莉の顔は涙と鼻水でグショグショになっていた。息がうまくできない、嗚咽が混じる。

誰か、たすけて……。

絶望の淵から救いを求めるように声にならない助けを奉莉は求めた。

「……奉莉」

ふと、奉莉の耳に聞こえた声。それは、弱々しく擦れてひどく頼り無いものではあったが奉莉にとってはとても安らぎを感じさせてくれるものだった。

「ごめんな、ずっと俺の家のこと黙っていて。そのうち絶対自分の口から話そうとは思っていたんだけど。ほら、俺って色々たらしめないところがあるだろ？それに弱虫だろ？今だって、ほら。足が震えて怖がっているんだよな。男なのに怖気づいて、笑っちゃうだ

る？」

弥彦は無理をして気丈に振る舞おうとした。その様子はとても滑稽なものだった。竜士は弥彦を笑い蔑んだ。

「俺の家つてさ、《九鳳院》とすーっごく仲が悪いんだよ。まあ昔っから代々続く腐れ縁というか、因縁というか、しがらみというか俺が紫を誘拐した犯人だつて疑われるのも無理もないんだよな。それにさつきご丁寧に《崩月》について紫のお兄さんが教えてくれただろ。……あれさ、全部本当のことなんだ」

弥彦は震える声で、涙を瞳にこらえて、ぼつりぼつりと時折、息に詰まりながら言葉を紡いだ。出来うる限り、竜士を見据えて。

「怖いよな、人殺しの家系なんて。怖いよな、化け物なんて。だけど、全部本当のことなんだよ。俺はさ、崩月うちのことを奉莉おまえに話したらどうなるのかを想像するのが堪らなく怖かった。……だって、人殺しだぞ！化け物だぞ！そんなの怖いに決まっているじゃないか！……奉莉おまえの姿を見なくてもわかる。もうお前は俺を友達として見てくれない。俺を人殺しの一族の《化け物》として見ているんだつてー！」

弥彦は喉が哽れるほどに叫んだ。瞳に溜まった涙は留まることを知らずに流れ出す。弥彦の豹変に竜士は冷ややかに失笑するだけだった。奉莉も弥彦もお互いに涙と鼻水で顔を濡らす。奉莉は恐怖で涙し、弥彦は心の痛みに涙した。お互いにまだ幼い子供の二人の感情の波は激しく荒れる。

子供の戯言に付き合っではいられない、と泣きじゃくる奉莉に問いかけを続けるのは無理だと判断した竜士は弥彦に仕方なく問いかけた。

「おい、《崩月》。紫をどこに連れて行ったんだ？」

「……俺は誘拐犯なんかじゃない。九鳳院紫は、誘拐なんてされて
いない」

もつと、たくさん奉莉に大事なことを話すことがあるはずなのに弥彦は頬を伝う涙を腕でゴシゴシと力強く拭くと弥彦は背中に背負うランドセルを乱暴に地面に投げ投げ身軽になった。弥彦の後ろにはまだ息苦しそうに嗚咽を交えて泣きじゃくる奉莉が地面にへたり込んでいた。

「……なんだって？」

「紫は俺の友達だ。友達を誘拐なんてするかよ」

この青年。九鳳院竜士は危険だ。弥彦の目は竜士が奉莉を卑しい目で見ていたことをずっと捉えていた。下卑た笑みを浮かべて奉莉を泣かせた。この男は同じ《九鳳院》の姓を名乗る紫とは大違いのなんだひとでなしだ。こんな奴が紫の兄とは到底信じられない。こんな男が表御三家の天下の《九鳳院》に属する者であるはずがない。

「おいおい、子供の泣きごとの次はいまさら申し開きかよ。俺が《崩月》の言葉を信じていても思っているのか？ 仮に、それが本当のことだとしても、そんなことはどっちでも構いやしないんだよ。俺はそのボロ小屋から早急に紫を連れ戻さないと親父たちが海外に行っている間に問題を起したって俺の管理能力が疑わちまうし、親父にどやされるのは俺なんだぞ！」

竜士は怒りにまかせて弥彦の腹を蹴り上げようと足を振り上げたが

弥彦は素早く後ろにステップを踏み後退することで竜士の脚を避けた。

「おい、《崩月》！紫の奴はどこにいるんだよ！」

弥彦に追撃しようとした竜士は前進。脚をがむしゃらに動かし弥彦を蹴り飛ばそうとしたり手を伸ばし弥彦を捕まえようとするが、その動きはまるでチンピラのような素人。崩月流を修めている弥彦には容易く避けられる。

「いまはいないと奉莉が言っただろ！」

「じゃあどこにいるか答える！」

「知っていても教えるかよ！」

「ふざけるのもいいかげんにしろよ、このクソガキがッ！《鉄腕》、出て来い！」

竜士が叫んだ。すると、一陣の黒いつむじ風が弥彦と竜士の間に割って入った。否、それはつむじ風などではない。それは大柄で一目見ただけでわかる鋼のように鍛えられた筋肉質の肉体を持つ黒人。もう十一月の寒い季節だというのにアロハシャツを着用して、目元には黒いサングラスを掛けて真っ白な歯を？き出しにして笑っていた。

突然に颯爽と現れた第三者の来襲。弥彦がまごついている隙に黒人は両拳を握り構えた。そして、弥彦は気付いた。黒人のアロハシャツの袖から伸びる腕が、黒光りする鋼鉄だと。それは間違いなく戦闘用の義手。人間を壊すためだけの物。まさに《鉄腕》と呼ぶに相応しいもの。弥彦の背筋が凍りついた。黒人の異形な姿にこいつは

プロの戦闘屋だと認識したからだ。弥彦は《鉄腕》から逃げようと足を動かそうとするが両足が震えあがり、自分の意識に反して弥彦はその場で立ち尽くす。こんな時に、と弥彦は内心で舌打ち。自分の身長は何倍もありそうな巨体の《鉄腕》を見上げるだけで弥彦には為す術がなかった。

「Good evening」

鉄腕の戦闘用義手が、鋼鉄の拳が弥彦の頭を掴むのと同時に弥彦は視野を失い頭に尋常ではない激痛を感じた。アイアンクローをされた状態の弥彦の身体は地面から浮いた。《鉄腕》のとてもない拳の圧力でギリギリと弥彦の頭は締め付けられる。頭が割れそうだった。意識が遠退く。宙吊りにされた弥彦の両脚は力なく風に揺れる。

「いやっ！離して！触らないで……！」

弥彦の耳に奉莉の悲鳴が聞こえた。間違いなく奉莉の声だ。それも誰かが奉莉に危害を加えている。奉莉の危機。奉莉が危険。弥彦は頭の激痛に歯を食いしばり耐えながら《鉄腕》の腕から逃れようと両足でがむしゃらに《鉄腕》の身体を絶え間なく蹴り続けた。だが、《鉄腕》の身体は彼の鋼鉄の義手のようにまるでビクともしなかった。

「坊っちゃん、崩月弥彦が暴れ出したんですが黙らせていいですかい？この小僧はちょっと面倒な子供なんですよね」

流暢な日本語で《鉄腕》は主人である九鳳院竜士に弥彦の処罰を提言。その間にも奉莉の悲鳴が、弥彦に助けを求める声が弥彦の耳に無情にも入ってくる。興奮した様子の竜士は《鉄腕》に命令する。

「好きにしる」

「へーい」

気だるそうな生返事を返すと《鉄腕》は弥彦を自分の顔の傍に近づけると弥彦の耳元で息をひそめるように小声で囁いた。

「小僧。以前、悪宇うち商会の《ギロチン》から決闘して生き延びたんだってな。おまえは知らないだろうが、裏の業界じゃあ有名なんだよ、おまえは。目立つのはいいが、子供のお遊びを続けていると今みたいに痛い目に遭うだけだ。……ああ、それからおまえに悪宇うち商会の最高顧問ボスから言伝メッセージがひとつ。『気に入った』だそうだ」

弥彦は意識が朦朧もろろとするなか《鉄腕》の言葉に耳を傾けた。《鉄腕》は弥彦に言いたいことは全て伝え終わったのか弥彦の頭を握る拳こぶしに更に圧力を込める。弥彦の苦痛におののく声が路上にこだまする。そして、《鉄腕》は自分の全体重と筋力とを弥彦を掴む拳こぶしに込めると弥彦ごと地面に吸い込まれるように鋼鉄の拳を打ちつけた。

ドンッ！とまるで爆弾が爆発でもしたような衝撃音が空気を、地面を揺らす。コンクリートの路上は《鉄腕》の拳の衝撃に耐えきれず、打ちつけた拳を中心に亀裂が四方八方に生じた。その異常なまでの衝撃を弥彦は為す術なく、悲鳴のひとつも上げる間もなく頭ひとつの一身だけに受け止めていた。弥彦の頭がその衝撃で四散するようになり脳みそをぶちまけなかったのは《崩月》の頑丈な身体のおかげか。しかし、頭に致死傷の傷を流血を残しながら弥彦の身体は限界を超えた衝撃に耐えきれず痙攣を繰り返した。脳みそが負担を超えた激痛に弥彦の意識を強制的に途絶えさせ身体の痙攣も止まる。

「……弥彦ッ！」

弥彦が《鉄腕》に叩きつけられる一部始終を竜士に身体をまさぐられながら見せられていた奉莉はもはや涙は枯れ果てて喉は水を求めるように干からびていた。

弥彦が悪い奴らに負けた。認めたくなかった。この現実を認めたくなかった。絶体絶命の状況下におかれていた幼い少女である奉莉にとって唯一の希望であった弥彦が負けた。

……わたしのせいだ。

わたしが、弥彦のことを拒絶したからだ。弥彦は紫やわたしを守るうと身を呈して悪い奴と闘ってくれたのに。いつだって、わたしや他の誰かの為に自分を犠牲にしてまでも闘ってくれていたのに。

なにが、人殺しの一族だ。なにが、化け物だ。そんなもの崩月弥彦という少年の在り方になんどの関係がある。

彼は彼。弥彦は弥彦なのだ。わたしが、天王寺奉莉が崩月弥彦を認めないでどうする。

林原杏でもない。円堂円でもない。堕花雨でもない。堕花光でもない。武藤環でもない。他の誰でもない。わたしが、天王寺奉莉が崩月弥彦を一番に理解しているはずじゃないのか。

だって、わたしは彼が崩月弥彦のことが……

地面に放心状態でへたり込む奉莉から竜士は離れると《鉄腕》に二度目の命令を下す。

「《鉄腕》、この小娘を大人しくさせて車に乗せておけ。暴れるよ
うなら腕か脚を折っても構わない」

「へーい」

《鉄腕》は奉莉に近寄ると人形のように動かない奉莉を片手で軽々と持ち上げる。奉莉は一切の抵抗をする素振りを見せずに、ただ虚ろな瞳で地面に死んだようにうつ伏せる弥彦の姿が車に乗って見えなくなるまで弥彦を見つめるのだった。

奉莉を乗車させた《鉄腕》は再び弥彦を鋼鉄の腕で逃げられないように宙吊りにする。弥彦の意識は途絶えている。一寸たりとも動く気配はない。《鉄腕》の鋼鉄の指から腕へと弥彦の頭から流れ出る血がゆっくりと伝う。

「それで《崩月》の小僧はどうするんです?」

「ああ、忘れていた。そいつは死んでいるのか」

「いえ、まだ息はあります」

「へえ、驚いたな。《鉄腕》の拳に耐えるなんて子供の癖に本当に化け物なんだな。俺も鬼じゃない。そいつの命は助けてやるさ」

「で、どうするんです?」

「命以外のすべてを奪え。二度と《九鳳院》に楯突くことがないように徹底的にな」

「へーい」

《鉄腕》が主人である竜士の命令を実行しようとする。弥彦の四肢を、眼を鼻を耳を髪の毛の一本たりさえも命以外のすべてを壊し奪おうとしようとすると同時に

『弥彦ッ!』

弥彦の名を呼ぶ声。それは紅真九郎と九鳳院紫のふたりの声。夕飯の買い物帰りのふたりは五月雨荘への招かれざる客に各々、違う反応をしめした。

紫は竜士の姿に怯え、表情を強張らせて震えあがった。真九郎は地面に夕飯の食材の入ったビニール袋置くと戦闘用の鋼鉄の義手から《鉄腕》をプロの壊し屋と判断した。

「ああ、やっと戻ってきたのか、紫」

竜士は大きく両手を広げて、躍り出るように優雅にゆったりと真九郎と紫に歩み寄る。しかし、竜士の歩みを真九郎が紫の前に出ることで遮るように立ち塞がった。

「おまえら、いったい何者なんだ。弥彦になにをしゃがった！」

真九郎は血祭りにあげられた弥彦の姿を見て頭に血が上り怒りに身を任せて竜士を片手で払いのけると《鉄腕》から弥彦を奪取するべく突進。竜士は地面に激しく尻もちをつかされると苦痛に口を歪める。《鉄腕》へと勇敢にも突進する真九郎の背中を憎悪を込めた眼で睨みつけた。そして、自分に無礼をはたらいた者への罰を下せと従者に命令する。

「《鉄腕》、その無礼者をぶっ飛ばせえ！」

「Yes , Master !」

第二十八話 壊れる日常（後書き）

二か月以上に及び、小説を更新を怠り申し訳ございませんでした。長期間休載していたからその分、良い話を書けたわけではなく。相変わらずの駄文で本当に申し訳ございません。感想など心よりお待ち申し上げます。

第二十九話 五月雨荘（前書き）

ご愛読お願いします

第二十九話 五月雨荘

九鳳院竜士の命令が《鉄腕》に下る。主人の勅命に従者はただ満面の笑みを真つ白な歯を口元に浮かべて喜んだ。これから始まる殺戮を楽しむように。

彼を《鉄腕》と云わしめる鋼鉄の戦闘用の義手が鈍く不気味に黒光る。

巨体の黒人。鍛え抜かれた鋼鉄の筋肉の鎧。戦闘用の鋼鉄の義手。

真九郎が挑まんとしている相手はプロの戦闘屋。人間を壊すことに特化した存在。裏世界の獣。

銃器を所持したヤクザや暴力団、街の不良チンピラ相手に揉め事処理屋として相手をした経験はあったが、プロの戦闘屋を相手にするのは真九郎にとって初めての实战。

裏稼業の事情や噂などは仕事上の基礎知識として真九郎は知っていた。だが、知識があるだけで実戦経験がない。

俺なんかが戦える相手なのか

《鉄腕》に向かって突進しながら拳に力を込めて全力で駆ける真九郎の意識は妙に落ち着いていた。

頭から血を流しまるで死んでいる様子で意識を失くしている弥彦の姿を見た途端に真九郎は怒りに我を忘れていたはず。

だが、初めてのプロの戦闘屋との実戦に真九郎の気持ちいが怖気づいて思考が自分の意識とは反対に危険信号を発信して冷静に相手の危険性を訴えている。

あれは駄目だ。お前では勝てない。死ぬつもりか、と。

真九郎は揉め事処理屋という特殊な仕事上から命の危険に晒されることは多々あった。その仕事の経験上から目の前の相手の力量を瞬時に判断した真九郎の無意識が命の危険を訴える。

それが、なんだ

頭の中の思考を真九郎は振り払うように黙らせる。

崩月弥彦は大切な弟。もうひとつの家族。自分の家族を無差別テロで失った真九郎。天涯孤独の紅真九郎にとって弥彦は命を賭けて守るのに値する存在。

真九郎の駆け出した脚は止まることを知らず、振り上げた拳は下ろすことを知らず。真九郎は弥彦を助けるために《鉄腕》と対峙する。崩月流はケンカ殺法。先手必勝は上策の手段。師匠である崩月法泉の訓えどおりに真九郎から《鉄腕》に仕掛けた。

突進の助走を活かしたままに《鉄腕》の顔面を拳で殴る。だいの人、普通の人間ならこの一撃で失神するか脳が衝撃で揺れて立てなかつたのかどちらかである。

しかし《鉄腕》はビクともしなかった。失神するどころか身体が倒れもしない。傾くことさえない。

だが《鉄腕》が眼元にかけていた黒いサングラスは粉々に砕け散り《鉄腕》の視界を一瞬ではあるが奪う。

隙がしろうじた《鉄腕》に真九郎はたて続けに《鉄腕》の顎に向けて拳底を突き上げる。

またもや《鉄腕》はビクとも動かない。まるで壁を押しているかのように真九郎の力が分散され突き上げた拳は《鉄腕》の顎を抜くことはなかった。

「まるでなっていない」

ぼつりと真九郎の耳もとに《鉄腕》が囁く。そして黒い巨体は片手で宙吊りにしていた弥彦の身体を鋼鉄の指から無造作に開放した。ドサツと力なく弥彦の身体がアスファルトに衝突。弥彦の落ちたアスファルトにはまるで抉られたような穴と亀裂が生じていた。

真九郎は視線を《鉄腕》から弥彦に向けた。そして不自然なほどに半壊している路上のアスファルトにも。

「小僧。パンチというのはこういうもんだ」

真九郎が弥彦から《鉄腕》に視線を戻したときにはもう既に遅かった。

真九郎が見たのは目の前に迫る鋼鉄の拳。黒光りする戦闘用の義手。鋼鉄の腕。真九郎を破壊する凶器。

《鉄腕》の拳は真九郎が知覚出来ない速さで真九郎の頭に叩き込まれた。その瞬間にドンツ！と衝撃が真九郎の頭に与えられた。

真九郎の脳は激しく揺さぶられ意識が途絶える。無意識の真九郎の身体は弧を描くように宙を彷徨い重力のなすままに冷たいアスファルトの地面に落下。

落下の衝撃で真九郎の意識が奇跡的に復活。しかし、《鉄腕》のパンチを貰った真九郎の身体は満身創痍。脳がまだ揺さぶられ視界が霞む。胃の中のものが逆流し地面に吐き出された。

吐き出されたものには赤く染まる血も混じり、その場で立ち上がるどころか口させも利かせることが真九郎には出来なかった。

たったの一撃。ただのパンチで身体の頑丈さだけは自信のある真九郎を倒れ伏させ戦闘力を意識を奪った。

これがプロの戦闘屋。まるで容赦、躊躇いのない一撃。地面に伏せる真九郎は悔しさに歯を噛み締め目線だけでもと《鉄腕》に向けた。

「なかなかしぶといじゃないか。まだ壊れないのか」

地面に倒れ伏せる真九郎を《鉄腕》の割れたサングラス越しの冷たい目が見下ろす。それは人間を幾人も殺してきた獣の瞳だった。

「し、真九郎おー！」

《鉄腕》に負けた真九郎に九鳳院紫が駆け寄る。ボロボロの真九郎の身体をどうすればいいのか、わからない紫はただただ真九郎の意識に呼びかけるように名前を叫び続けた。

真九郎は紫に心配はかけまいと笑顔を作ろうと努めてみたがうまくできなかった。それどころか余計に吐き気が増して気持ちが悪くなり吐かないようにするのに努めるのに必死だった。

紫と真九郎の様子に《鉄腕》は肩を竦めてから地面に落とした弥彦を回収すると主人の下に戻った。

「よっわいなーそいつ。ほんとうに弱すぎる。ただの苦学生じゃないか」

九鳳院竜士はケラケラと笑いながら真九郎たちが帰り際に寄ってきたスーパ―の袋の中身を物色しつつ、つまらなそうに話す。

「……うわ。なんだよこの食材は。安すぎだろ。こんなものを俺の紫に食わすなよな」

袋から値札の付いた食材を取り出すと物珍しそうに食材を観察してから竜士は自分の従者に食材を差し出した。

「食べるか？《鉄腕》」

「いいませんよ。坊ちゃん」

「あ、そう」

竜士は食材に興味を失くした様子で無造作に食材を地面に投げ捨てた。そして従者を横に従えて紫と真九郎に歩み寄る。

「紫。そんな奴は放っておいて帰るぞ。屋敷に」

竜士はまるで汚れた腫れ物を見るような目を見ると真九郎に向けて唾を吐き捨てた。竜士の吐いた唾が真九郎の顔についた。それを慌てて紫がハンカチで拭う。

「竜士兄様。おやめください」

「うるさいよ、おまえ。そいつはおまえをさらった誘拐犯の仲間だろ。殺さないだけありがたいと思って欲しいくらいだが」

「誘拐？それはいつたいたいなんのことですか」

「ああ？そりゃあ、おまえを《奥ノ院》から連れ出したやつらだよ。まあそれも、もう犯人がわかったからいいんだけどな。ついでに久しぶりに楽しめそうな収穫もあったし」

機嫌の良い竜士の様子に紫は不審に思いながらも《鉄腕》に担がれている崩月弥彦に目を向けた。

弥彦は頭から血を流し大怪我をしている様子。誘拐犯……まさかと思ひ紫は兄に尋ねる。

「その者はどうしたのですか」

「ああ、コイツな。おまえを誘拐した関係者だと俺は睨んでいてな。あの《崩月》に列なる子供だつて《鉄腕》が助言をくれたんだ。口が悪いんでちよつと躡けてやった」

躡けた、と楽しそうに饒舌する竜士に紫は背筋を凍らせる。

こちらで出来た初めての友人をこんな姿にしてしまったと紫は胸が締め付けられるような思いで弁解する。

「……竜士兄様、違います、違うんです」

「なにが違うんだ？」

「わたしは誘拐されたわけではないのです。自分の意思で《奥ノ院》から出てきました」

「はあ？なにを言っているんだ、紫」

上機嫌だった竜士の表情が曇る。紫はその見慣れた竜士の様子にだんだんと恐怖で震えだした。

「わ、わたしはどうしても《奥ノ院》から出たかったのです。そのわたしの願いをききとどける者がわたしに助力してくれました。あそこから出してやると」

「助力だと？」

「はい。わたしは自分の意思であそこから出ました。そして助力をしてくれた者は《崩月》とはなんの関わりのない者。その《崩月》の者は全く誘拐の件とは関係がないのです」

「そんな、莫迦な……！」

信じられない、といった表情を浮かべて竜士は叫んだ。紫は息をのむ。そして兄に全てを打ち明ける。

「……全ては、わたしの責任です。この者たちはわたしの大切な友人。そして……」

紫は愛おしい者を見つめる様子で真九郎の頭を撫でた。真九郎はそれに応えるように安心したように眼を細める。その様子に竜士は絶句した。そして、

「ハハハハハハハハハハッ！」

甲高い笑い声が空にこだまする。紫の言動が可笑しくて我慢が堪らない竜士はひとしきり笑い、肩で息をするように苦しそうに目から涙を浮かべた。

「こりゃあ、傑作だ。《崩月》の戯言だと思っていたがほんとうに紫と友人になっていやがるとはな。それに……」

竜士は真九郎にべつたりの紫を自らの手で突き放すと真九郎を思いつきり蹴り上げた。真九郎は苦痛に顔を歪ませながら地面を転がる。その様子に紫が真九郎に駆け寄りうとするが竜士が紫の長い黒髪を引っ張り遮る。髪を引かれ、紫は痛みにも耐えながらも竜士と対峙した。

「紫。《奥ノ院》を出てから随分と大事なことを忘れてるんじゃないのか？ええ、おい」

紫を威圧するように竜士は立ち塞がる。紫はその様子にうろたえ、怯え始めた。その様子に竜士は笑みを浮かべた。そして紫に確認するように質問を投げかける。

「紫。おまえは誰のものだ？」

「わ、わたしは……」

ガチガチと歯を震わせ、まるで寒さに凍える様子で紫は身を竦める。

「あの、小僧はなんだ？《崩月》とはなんだ？」

「それは、その……」

「九鳳院紫。おまえはいつたい誰のものだ？」

有無を言わせない竜士の問い掛け。紫は竜士に繰り返し問いかけられるとしだいに身体の震えを留め、子供らしからぬ能面のように表情を固めた。それはまるで生気の無い人形のように。竜士はその様子に満足そうに頷く。そして再度、紫に問いかけた。

「九鳳院紫。おまえはいつたい誰のものなんだ？」

「わたしは、九鳳院家の男性のものです」

「おまえは何のために生かされている？」

「九鳳院家のためです」

「おまえの喜びは？」

「九鳳院家の男性に御奉仕することです」

「おまえに自由は？」

「必要ありません」

「完璧じゃないか」

竜士の一問一答にスラスラと答えてみせる紫。それは傍から見ればひどくおかしい場面。

真九郎はその光景を意識が朦朧もろろとするなかでただ黙つて地にひれ伏し為す術なく聞き留めることしかできなかった。

「ちゃんと覚えているじゃないか紫。それでいいんだよ」

竜士は直立不動の人形のような様子で立ち尽くす紫の頭を愛おしい様子で優しく撫でる。それはお気に入りの物を大事に扱う主人のようだった。

「おまえが大事なことを忘れてなくて安心したよ。おまえは俺のものだから兄さんを心配させないでくれ」

「はい」

紫の返事に生氣はない。まるで機械がしゃべっているかのようだった。

竜士はおもむろに紫の頭を撫でていた手をゆっくりと名残惜しそうに離すと、その手で拳を握る。

「でもな、紫……」

慈悲深い竜士の表情が一転する。その表情は怒りで歪んでいた。そして竜士の様子に紫の能面な表情が恐怖で歪む。

「ちゃんとわかっているなら……なんで、こんなふざけた真似を
やがった！このクソガキがッ！」

竜士の振り上げた拳は紫の顔に当たりその衝撃で紫は軽々と宙を飛
び近くの民家の壁に衝突。壁に衝突したあと地面に落下。

ありえない光景に真九郎は目を見開き、紫を助けようと満身創痍の
身体に鞭を打ち地面を這いずりながらゆっくりと前進。

小さな少女の身体は痛みに耐えるように力なくゆらゆらとふらつき
ながら立ち上がった。

殴られた顔からは鼻血が流れ、綺麗な紫の顔は汚れていた。だが、
まだ彼女の両目には一点の光があった。

「……兄様。お願いがあります」

「うるせーよ」

「お願いします。どうか、真九郎と弥彦の二人をお見逃しください。
その者たちはわたしの……！」

「うるさいっていつてんだろ！」

つかつかと竜士は紫に早足で歩み寄ると無造作に脚で一撃。紫の腹
を蹴り上げた。紫はまるでサッカーボールのように弧を描き地面に
落下。地面を数回弾み、数回転してから留まる。

それでもなお小さな少女の身体は立ち上がり、傍若無人の兄に懇願
を続けた。それは紫にとって唯一できることでしかない。

「ふ、ふたりは本当に何も知らないし、誘拐の件とはまったくの無
関係なのです。だから……どうか御慈悲を……」

「しつげえんだよ。このクソガキ」

これが最後だと云わんばかりに竜士は紫を足蹴にする。それでもなお、紫は竜士の脚にしがみ付きふたりを助けて欲しいと懇願を続けた。

紫の様子を哀れに思ったのか、それとも遊び心か竜士は紫への暴力を一旦止めると紫を後ろから抱き寄せ下卑た笑みを浮かた。地面では這いつくばり紫に向けて前進する真九郎。《鉄腕》の肩に担がれる弥彦。ふたりの人間を見比べながら竜士は紫に囁く。

「あの小僧たちがそんなにも大切か？おまえ、その歳でふたりの男をたぶらかしていいご身分だな。なあ、紫」

「そのようなことは、ありません」

「そうかよ。しっかしなんだよ、この服は。男物じゃないか。俺がたくさん買ってやった服はどうしたんだ？女がそんな服を着るんじゃないよ。おまえの魅力が台無しだ」

これは、と紫が答えるより先に竜士の手が紫の服の下に潜り込み紫の胸を鷲掴みにした。

突然の竜士の行動に紫はなすすべなく身を任せることしかできない。そして、紫の表情が苦痛で歪む。紫の反応に竜士の下卑た笑みがより濃くなる。

「い、痛いです、おやめ、ください」

「なんだよ。愛しの兄様が触ってやっているんだ、喜べよ」

「やめて、ください。い、痛い……」

「はあー。なんだよ、その態度は。痛いとか、やめてとか俺の気が下がるようなことしか言えないのか、おまえ。こういう時は気持ちいいとか嬉しそうに喜べよ。おまえと比べたらまだ黙っている奉莉ちゃんのほうが可愛げがある」

「ま、奉莉ちゃん？」

「そつだ。おまえがここに来る前にすこしだけ可愛がってやった。おまえともお友達なんだろう？ なかなか俺好みの可愛い子じゃないか。ああいうお友達なら俺は大歓迎なんだがな」

奉莉のことを優々とした表情で愉快気に語る竜士。とても嫌な予感が紫を襲う。

「奉莉は、いま何処にいるんですか」

「ああ？ あの子なら車の中だよ。《崩月》の小僧が《鉄腕》に負けた途端に人形みたいに黙つちまいやがったからな。泣きもしなければ騒ぎもしない。抵抗しない子供をいたぶっても面白くないから、持ち帰ってから遊ぶさ」

「そんな……」

「そんな悲しい顔をするな。ほら、こっちを向け」

竜士は紫の頭を両手でしつかりと掴むと紫の顔を自分の方に向けさせた。そして無理やりにも紫の唇を奪おうと顔を近づける。

それを紫は断固拒否するように精一杯頭を振り自分の唇を奪われまいと竜士の行動を遮る。

自分の妹が接吻を拒む様子に竜士は「そうでなくちゃ、面白くない」と言い捨て紫を両手から開放。

竜士から開放された紫は安心するように深い息を吐いた。が、竜士の足蹴がまたもや紫を襲った。そして竜士は舌打ちすると従者に命令を下す。

「《鉄腕》、気が変わった。《崩月》の小僧から順に殺せ」

「へーい」

主人の命令に従者は従う。《鉄腕》は肩で担いでいた弥彦に止めを刺すために行動に移る。その動作を紫がなおも懇願して遮る。

「お待ちください！」

「なんだよ、いまいいところなんだぞ」

「お待ちください、竜士兄様……」

「《鉄腕》、ちょっと待て」

紫は地面に正座をして頭を擦りつける。その様子に竜士は《鉄腕》への命令を中断。一時の静寂。そして静寂を打ち破るように紫が叩頭したまま口を開いた。

「どうかお願いします。紅真九郎、崩月弥彦の両名をお見逃しください。どうか……」

「またそれか」

げんなりとした様子で竜士は溜息を吐くと土下座している紫をつまらなそうに見下ろす。

「まず、はっきりさせることがある。おまえを《奥ノ院》から連れ出した協力者は誰だ？」

「柔沢紅香です」

「柔沢かよ……あのばか強い女か。とんでもない黒幕だな。厄介な事になった」

竜士は頭を抱えると難しい顔をする。

「あの女は近衛隊に任せるとして、あとで親父に報告が必要だな」

「あ、あの……ふたりは……」

「そつ話を急ぐなよ。まだ俺の話は終わっちゃいない」

竜士は膝を曲げ、紫の顎に手を添えると紫の顔を自分に向けさせた。

「紫。もうこんなふざけた真似を繰り返さないよな？ いい子でいるよな？俺に逆らわないよな？」

「はい」

「俺の言うことなんでも、聞くよな？」

「はい」

「なら、おまえは俺の子を産め。あの兄貴でもなく、他の男でもなく、俺の子を産め」

紫は即答は出来なかった。竜士は紫の顎に添えた手を力強く握り、紫の視線を逸らすことを許さない。とても複雑な思いが紫の胸の中で渦巻きひとつの答えを導き出す。

「……産みます」

「ははっ！いいね、そうでなくちゃ。もちろん何人でも産むよな？」

「何人でも、産みます。竜士兄様がお望みであれば……」

「潔くてよろしい。九鳳院の男女関係はこうあるべきだよな。気に入ったよ、その素直な態度は合格だ」

紫が自分の望みに屈服した姿に竜士は満足する。長年の夢が野望が願いが欲望が叶うのだから。

「おまえの態度に免じて、ふたりを見逃してやるよ。どちらも誘拐の件と無関係ならいたしかたない」

「ほ、本当ですか？」

「《崩月》だけは別だ、といたいところだが……おまえに免じてな」

「あ、ありがとうございます。竜士兄様」

苦しみで表情が歪んでいた紫の顔が少しではあるが明るくなる。そ

の様子に竜土は苦笑すると《鉄腕》に命令。

「《鉄腕》、崩月の小僧を放してやれ」

「いいんですかい？」

「妹との約束だ。むげにはできない」

主人の命令に《鉄腕》は肩に担いでいた弥彦を地面に下ろす。《鉄腕》から開放された弥彦の様子にひとまず胸を撫で下ろす紫。だが、現状は最悪であるのには変わりはない。

弥彦は大怪我をして意識不明。真九郎は今にも飛び掛ってきそうな悲痛な表情をしながら地面を這いずり紫にすこしでも近付こうとしていた。

ふたりを助けたい。だが、いまの自分では兄からふたりを見逃してもらえただけで精一杯の結果。ふたりの命を先延ばしにさせるだけで現状は一向に良くなっていない。

「《崩月》は開放した。あの、真九郎とかいう小僧にも手を出さない。ほら、これでおまえとの約束は守られた。おまえも、俺との誓いを忘れるなよ。わかっているよな」

「……はい。竜土兄様」

竜土は紫を立ち上がらせると車に乗れと促した。それはもう真九郎と弥彦との断絶を意味する。

紫は車に乗る前にドアの前で立ち止り振り返る。その目は真九郎と弥彦に向いていた。最後にふたりに紫は別れの言葉を投げかける。

「ごめんな、真九郎。わたしのせいで、おまえにはいろいろと迷惑

をかけた……」

瞳に涙を浮かべ懺悔するように紫は真九郎に震える声で話した。

迷惑なんかじゃない！

真九郎は紫にそう叫びたかったがそれは声にすらならない。なんて無様な姿。これが揉め事処理屋か。否、ひとりの男としてひとりの少女ひとり守れない。

「弥彦、聞こえているか。ごめんな、わたしは友達にとんでもないことを仕出かしてしまった。奉莉はわたしがなんとかしてみせる。だから……」

「早く乗れ」

竜士が紫に乗車を急かし紫の言葉は最後までつむがれることはなかった。そして乗車した車内には案の定、友人である天王寺奉莉がひとり居た。

奉莉の様子はひどく人間味を失っていた。その様子に紫は奉莉にかける言葉が見つからずどうすることもできなかった。

紫の乗車したドアは閉められる。そして別のドアから竜士は乗車をしようと試みるがドアを開いてから立ち止った。

「《鉄腕》、そいつら殺すなよ。妹との約束だからな」

「それなら、坊ちゃん。どうするんです？」

「そつだなー。《崩月》については前に下した命令どおりに命以外の全てを奪え。ついでにそっちの苦学生にもな」

「ふたりともですかい？」

「そうだよ。それが終わり次第、俺の元に戻って来い。雇った護衛が主を守らないでどうする」

「へーい」

まかせたぞ、と竜士は《鉄腕》に命令すると乗車。そして竜士、紫、奉莉の三人を乗せた漆黒の車は静かに滑らかな動きで五月雨荘前より出発した。

三人を乗せた車が道を曲がり視界より消えたところで《鉄腕》は行動をおこす。

まずは、一番厄介な相手。崩月弥彦の始末から。年端も行かない小さな子供だろうとその身は裏世界で畏怖の象徴である裏十三家に列なる《崩月》の身。

だが、その身は先ほどの戦闘で意識不明の重態。取るに足らない相手と慢心して挑むにしても冷や汗が流れる。

「さて、どう料理をしようか……やはり、一撃で急所を狙い壊すか……」

「………待てよ」

これから始まる殺戮に間をさす声。《鉄腕》は心底機嫌が悪そうに声の主に目を向ける。

「小僧。おまえとの遊びは終わったんだ。これからあの《崩月》をこの手でかけられるっていうのに邪魔をするな」

「それは出来ない相談だな」

声の主は紅真九郎。いつの間にか、民家の壁を利用して身体を預けるように満身創痍の身体を立ち上がらせていた。

「悪いな。そいつは俺の弟みたいなもんでね。おまえのような男に殺させるわけにはいかない」

ふらふらの身体でなんとか気丈に振る舞い《鉄腕》を挑発する真九郎。それに《鉄腕》は溜息を吐くと視線だけでなく身体を真九郎に向けた。

「そこまで先に死にたいならしょうがない。主人の命に逆らうことになるがおまえからほふるとしよう」

「やってみろ。筋肉馬鹿」

「吼えたな、小僧。望みどおり殺してやる」

《鉄腕》は静かにその場でしゃがみ込む。そして脚のバネを十分に溜めてからの突進。ただ愚直なまでの真っ直ぐな直線の軌跡を描くようなタツクル。

まるで黒い鉄塊が襲ってくるような錯覚。重量級以上の体軀を活かした《鉄腕》のただのタツクル。だがそれはどんな硬い物体だろうが、その身に受ければ粉々に砕け散ることを意味する。

真九郎は震える足に心の中で鞭を打ち、《鉄腕》のタツクルを紙一重で横に飛び込むように避けた。そして、すぐに体制を整え弥彦に向かって全速力で駆け抜ける。

自分の攻撃を避けられた《鉄腕》はすぐさまその場で急停止。急旋回。また同じように真九郎に向けてその巨体を疾風のごとく駆ける。

直ぐ傍まで迫る《鉄腕》を無視し真九郎は弥彦を抱える。びつくりするほどに軽々と抱えられた弥彦の体に真九郎はすこしだけ驚くと一言「ごめんな」と弥彦に呟いた。

真九郎は弥彦を精一杯の力で投げる捨てる。弥彦は五月雨荘の入り口の石造りの門柱を軽く飛び越え五月雨荘の敷地内でその身を落下させた。

《鉄腕》は真九郎の突拍子も無い行動に眼を細めたが、その巨体は留まることを知らずにそのまま真九郎を突き飛ばした。

ありえない衝撃。ありえない質量の暴力。《鉄腕》のタツクルをその身に受けた真九郎は軽々と吹っ飛ばされ、その身も弥彦と同様に幸か不幸か五月雨荘の敷地内に落下。

「……………あつ…が、……………ぐあ……………」

血反吐を吐きながら真九郎は激痛に苦しむ声を上げ悶える。

死、ぬ

真九郎の視界は真つ暗に染まり、ひどく耳鳴りが響いた。命の危険。命の危機。真九郎のぐちゃぐちゃな思考はそのことだけは真九郎に訴える。

「まだ、生きてるのか？丈夫な身体だ……………」

真九郎が生きていることに感心したように《鉄腕》は五月雨荘の敷地に足を踏み入れる。そして地面に転がる死体とも思えるような状態のふたりに視線を配らせる。

「随分と手間取らせる。久しぶりに楽しめそうだ」

のしのと重い足取りで真九郎と弥彦に接近する《鉄腕》。

もう、駄目、か

真九郎は死を覚悟した。

「うわ、こりゃあひどいなー」

突然、現れた第三者の声。殺戮が始まっている現場で場違いなほどにひびくその呑気な声は五月雨荘の共同玄関の向こうから聞こえた。キィと扉が開く音が聞こえると扉の向こうから人影が姿を現す。

「B級映画もビックリの雰囲気じゃない。なにここ？」

どこかとぼけた雰囲気をかもちだしながら共同玄関の扉から出てきたのは五月雨荘の住人。武藤環。

その表情は酒のせいか頬は若干紅く染まり上下ジャージ姿のだからない格好。そして寝癖の残るぼさぼさの髪。

場違いにもほどがある人物の登場にも《鉄腕》は動じなかった。

「なんだ、貴様は」

「ただのしがない女子大生ですよ」

そういうと環は《鉄腕》を無視するように堂々とした態度で真九郎と弥彦を軽々と両肩に担ぎ回収する。その環の行動に《鉄腕》は額に青筋を立てる。

「なんのつもりだ、貴様」

「怪我人の手当てをしないといけないでしょ？だからこうやって運んでいるの」

「ふざけるなッ！」

《鉄腕》は環の言動に怒りを露にすると環に向かって速攻。自慢の鋼鉄の拳を振り上げ環に振り下ろす。しかし、《鉄腕》の拳を環は両肩にふたりの怪我人を担ぎながら軽々と避けた。

「あ、あつぶいなー」

《鉄腕》の猛攻が続く中、環はひよいひよいと身軽に攻撃を避ける。そして、環は《鉄腕》との距離を置くように後ろに大きく跳躍して地面に土煙を残すことなく着地。カランと下駄の音がした。

「義手の人。仕事だったのはわかるけど、このふたりを見逃してはくれませんか。この子達、あたしの弟分みたいなもんでして……見過ごせないんですよ」

「無理な相談だ」

「そこをなんとか。ここをひとまず退いてくれたら手土産にあたし秘蔵の自慢の焼酎あげますよ」

「そんなものはいらん。どうしても邪魔立てするのなら今度は本気でいくぞ」

「まいったなー。退いちゃくれませんか……」

環は苦笑しながらどこか嬉しそうに口元に笑みを浮かべ、ゆっくり

と地面に真九郎と弥彦を降ろす。そして好戦的な目と笑みを浮かべてどっしりと拳を握り構えた。

環と《鉄腕》何処となく似たような拳の構えをする両者は対峙する。両者とも飛び道具は無し。己の拳が唯一の武器。

静寂がふたりを包み込む。そして、環が動き出そうと脚を踏み出した瞬間に黒い小さな猫が両者の間に割って入った。「ダビデ」と環が小さな声で呟く。

「やめておきたまえ」

五月雨荘の門柱の傍に生える大きな大木からよく透き通った声が響いた。

「環、君らしくないな。少年たちに肩入れしたい気持ちはわかるが抑える」

環に警鐘を鳴らしたのは五月雨荘に住まう黒き魔女。闇絵。彼女はいつものように大木の枝に寄り添いどこか空虚を見据えながら煙草をゆったりと吸う。

「お隣さんとあたしの道場の子なんてほっとけないんですよ」

「だからといって協定違反はまずかろう。君はここから出てゆくつもりか」

闇絵は煙草の紫煙を漂わせながら気だるそうな視線を大木の上から《鉄腕》になげかける。

「その男。ここは不戦の約定が結ばれた土地、五月雨荘。血の気盛んな者、争いを望む者は、去れ」

《鉄腕》は無言で闇絵を見上げる。そしてやれやれと肩を竦め口を開いた。

「不戦の約定か。なんとも融通の利かないものだな」

溜息を大きく吐いた《鉄腕》は真九郎が弥彦を五月雨荘の敷地内に投げ込んだ意図をこの瞬間に解釈する。随分と味な真似をしてくれた、と真九郎に舌打ち。

「地の利がある。ルールがあるのなら仕方ないこと。だが、敷地から連れ出せば造作の無いこと。小僧たちはそうしたあとにゆっくりとなぶり殺すことにしよう」

不戦の約定の妥協案を口にする《鉄腕》に闇絵を眉をしかめると大木から優雅に地面に降り立った。闇絵に付き従うように彼女の相棒の黒猫ダビデが鳴き声を上げ寄り添う。

《鉄腕》の二手を挟むように環と闇絵が対峙した。そして環が目を細め拳を再び握り締め構える。

「できっこないよ。だって、二人と一匹が相手だもん」

「違いますよ、環さん」

ふと五月雨荘の入り口の門から声がした。それはとても頼もしい人物の声だ。環は満面の笑みを浮かべてその人物に大きく手を振り応える。闇絵はやれやれと肩を竦めた。

「わたし、崩月夕乃もお相手します」

力強い意思を帯びて現れたのは弥彦の姉。崩月夕乃。弟の危機に馳せ参じたのだ。

「これで、三人と一匹。どうします？義手の人」

意地悪そうな笑みを浮かべて環が《鉄腕》に好戦的な宣告。《鉄腕》は慌てることなく動じることなく、三人を見回し沈黙。しばらくの静寂が訪れた後、《鉄腕》はその場で踵を返し出口に向かう。五月雨荘の門前で夕乃と《鉄腕》が無言ですれちがう。夕乃は油断も隙も無く横目で《鉄腕》を睨みつける。《鉄腕》もまた横目で夕乃を睨み見据えてから五月雨荘の敷地より出て行った。

空はまるで真九郎と弥彦の心情を表すように泣き出した。

ふたりの悲しみを見透かしているように生温い雨粒がふたりの頬に当たる。

これから、どうすればいいのか。ふたりのやるべきことは山済みだが、行動をおこすにはしばしの休息が必要だ。

戦士に休息が必要なように満身創痍のふたりには、しばしの休息を……。

第二十九話 五月雨荘（後書き）

感想お待ちしております

第三十話 少年は鬼（前書き）

ご愛読のほどをお願い申し上げます

第三十話 少年は鬼

夜の闇は人の心を惑わし不安にさせる。

まるで闇に対抗するかの如くその地は夜だというのに暗闇ではなく光で輝いていた。

なぜなら、その地は都心でも屈指の高層ビル街。

ビルの窓ひとつひとつに蛍光灯の人工的な明かりが灯り夜の闇を掻き消すように人間の光で満ち満ちていた。

そして、有象無象の中にひととき大きく豪華で天にも届くが如くそびえ立つ建造物があった。

その名を《オベロン》

国内でも屈指の最高級ホテル。財界などの会合にも利用され、諸外国の政治家や王族も利用する由緒ある特権階級の人間に御用達の場所。

選ばれた人間しか利用できない、まさに聖域とも呼べる場所。

その最上階のスイートルーム。そこを利用する者はこのホテルが聖域なら神の頂だろうか。

街の明かりひとつひとつが照らし出す光は暗黒のなかで滲み出す地上の星たち。

その全てを一望できる頂はまさに天上人が住まう神の頂。

最上階のワンフロア全てが天上人の一室。足元の床には高級絨毯が敷かれ天上にはシャンデリア。

いくつもある部屋の扉。そのなかのひとつの扉の中は真っ暗な闇に包まれていた。

そこは寝室。贅沢のかぎりをつくした豪華な天蓋付きのベッドの上でひとりの少女が横たわっていた。

少女の服装はまるでおとぎ話に登場する『姫』のような、フリルをふんだんにあしらった純白のドレス。

少女の姿は見たものをひと目で見惚れさせるほどの容姿と雰囲気

その身にまとっていた。

ベットの上で長い艶やかな黒髪を持って余すように広げ、無造作に片手を滑らかな動作で天を掴むように大きく天井へと伸ばす。

ドレスの袖が擦れる音が寝室に響き何も無い虚無を小さな拳が握り締める。

握った拳を力なくベットの上に落下させると寝室の扉がゆっくりと開かれた。

扉の向こう側からやってきた者は精悍な顔つきの青年。湯上りなのかバスローブを身にまとい火照った朱色の頬を濡れた髪から水がたう。

青年の息は荒く興奮した様子。我慢ならないほどの自我の欲求を限界まで押さえつけ少女を血走った目でねめつける。

少女は青年に顔を向けると青年の様子にもこれから始まることへも興味が無さそうに視線を天井に移した。

青年が動いた。力強い足取りでベットに歩み寄る。そしてベット上で横たわる少女を上から覆いかぶさるように押し倒し、のしかかる少女の耳元できこえる青年の荒い息遣い。少女の顔や身体に垂れる青年の唾液。少女は何も言葉を発しない。青年になされるままに抵抗もしない。

青年から与えられるいままで感じたことの無い不思議な刺激に少女は吐息を漏らす。

人形のように生氣はないが心の奥底を見透かされている錯覚を相手に与える少女の瞳。その瞳は天井を写す。

心の奥底をドロドロとした不愉快な感情と刺激的な快楽にも似た感情とが渦巻き負の螺旋となる。

まるで生と死の狭間を彷徨う少女の心。その心が壊れぬように決壊すれすれの均衡状態を支えているのは少女の心の灯火であるひとりの少年がいたからだ。

その少年の名前は崩月弥彦だった。

身を焦がすような激痛に崩月弥彦は目を見開いた。まず最初に目に入ったのは闇。ゆっくりと時間をかけて現状を把握するのに思考を弥彦は要した。

闇に目が慣れはじめて弥彦は現在地を特定。見慣れた部屋の机や椅子の配置で安易に判断できた。場所は崩月邸の弥彦の自室。

布団で仰向けに横になる弥彦は頭を鈍器で殴られたような頭痛と吐き気に耐えられずに布団から飛び出すと自室を出て廊下をおぼつかない足取りで歩き屋敷の洗面所に向かった。

洗面台のなかに盛大に胃の中の不愉快なものを吐き出す。喉を焼くような痛みと目眩が弥彦を襲う。気持ちが悪い。記憶が曖昧になる。吐き出した汚物を水で洗い流し口元に付着した唾液や吐物について洗い流す。両手で水を救い上げ不愉快な体調を改めるために顔をゴシゴシと洗う。

冷たい冬場の水はいつも以上に冷徹に鋭く弥彦の思考を整いさせる。蛇口を止め、濡れた顔をタオルで拭くとふいに洗面台に設置された鏡に映る自分の頭に視線が止まる。

真っ白な包帯が頭の傷を隠すように巻かれ、弥彦の頭髮に紛れるように銀色の細長い針が数箇所刺さっていたのだ。

なんだ、これ？と頭に刺さる異物に弥彦が手を伸ばそうとした瞬間「待ちなさい」と弥彦の行動を制止する声が聞こえた。

伸ばした手を弥彦は引っ込めると声がした方に目を向けた。そこにいたのは姉である崩月夕乃だった。

「その針を取ってはいけません。それは弥彦の肉体を回復させるためにほどこしたものなんですから」

「なにそれ。こんな針を刺しただけで肉体が回復するものなの？」

弥彦の疑問に「そうですよ」と夕乃が頷いた。

この針はなんでも、肉体の新陳代謝を促進されるツボを刺したもので肉体にはかなりの負担にはなるがその分、肉体回復にはもってこないのだそうだ。

夕乃の丁寧な説明を聞きおえた弥彦は頭に刺さった針については一応納得。夕乃と共に洗面所を後にすると家族がいつも集う居間に移動した。

居間には既に母の冥理、祖父の法泉が茶を啜りながら待機していた。居間に妹の散鶴の姿がないことに疑問を感じた弥彦はふと壁に立て掛けられた時計に目をやった。

時刻はすでに午後十時を回ろうとしていた。この時間帯では幼い妹は就寝している頃合。散鶴がいないことに弥彦は納得すると畳の床に腰を下ろし胡坐を掻いた。

台所から夕乃が湯飲みにお茶を注ぎ自分の分と弥彦の分と急須をお盆に載せて居間に戻ってくると黒檀のテーブルにお盆を置き弥彦の前に湯飲みを置いて自分も腰をおろした。

居間はとても静かで時計の秒針が時を刻む音がよく響く。弥彦は湯飲みに手を伸ばしお茶を啜る。熱い熱湯が喉から食道へとよく通り弥彦のおぼろげな記憶を呼び覚ます。

ああ、そうだ。俺は奉莉を助けられなかったんだ。そして彼女を拒絶した。

プロの戦闘屋である《鉄腕》に不覚を取り成すすべも無く吊るし上げられ、血祭りにされ、奉莉の前で負けた。完膚なきままに。

彼女の最後の一声はなんだったか。化け物である自分への拒絶の声だっただろうか。それとも無様に戦闘で負けた自分を嘲笑うものだっただろうか。

《鉄腕》との戦闘で意識が朦朧としている中で奉莉は弥彦になんとも声をかけていたのだろうか。

「弥彦。ちょっといいかしら」

意気消沈する弥彦に冥理が声をかける。

「弥彦が五月雨荘からの帰りが遅かったときにね。天王寺奉莉ちゃんのご両親からうちに連絡があつたの。『うちの娘が帰ってこないんです！お宅の弥彦君と一緒に遊んでいたはずなんです！娘のことをご存知ありませんか！』って」

「……」

「わたし、そのこと聞いて驚いたわ。だって確か弥彦は五月雨荘に行くのはひとりだって言っていたわよね。奉莉ちゃんが一緒だなんて聞いていなかったし弥彦も帰ってきてなかったから親御さんには『わかりません』としか答えられなかったの」

「……」

「それでね、大急ぎで夕乃に五月雨荘まで弥彦を迎えに行かせてみたら帰ってきた弥彦の姿を見てまた驚いたわ。自分の息子が頭と身体に大怪我をして帰ってきたんだもの」

「……ごめんなさい」

「謝るのは後にしなさい。それじゃあ説明してちょうだい、五月雨荘でなにがあつたのかを。今度ばかりは弥彦、お説教だけじゃすませられないわよ」

有無を言わせない雰囲気が居間に漂い冥理の鋭い瞳と口調を一身に受け止めた弥彦はその小さな身体を更に小さくするように萎縮した。こんな母親の姿はいままで一度だって拝んだことが無いもの。事態は大事になり、その事態を防ぐことができなかつた弥彦に全ての

責任が回っている。

弥彦は助けにすぎるような怖気づいた様子で夕乃と法泉に目配りをする。

事の真相を真九郎から聞き及んでいるであろう夕乃は弥彦を哀しそうな表情で見つめる。法泉にいたっては厳しい表情で両腕を組み不出来な孫を見据えていた。

三者の異なる視線を受け止めて弥彦は大きく深呼吸。身体に巡る血流を意識しながら深く息を吐き平常心をとりもどす。

そしてまだ震える口で五月雨荘で起こった一件について懇切丁寧に自分の主観でしかないが家族に説明。

突然、表御三家の《九鳳院》が身内である九鳳院紫を取り戻しに五月雨荘を訪れたこと。その《九鳳院》に自分が紫を誘拐した犯人だと疑われたこと。プロの戦闘屋に負けたこと。そして天王寺奉莉を拒絶し彼女を危険な目に遭わせたこと。

事のしだいを順を追って記憶を思い出しながら説明してみるとどれもこれも全ての事象が自分に責任があることではないのか、と改めて弥彦は思った。

弥彦の説明に三人は耳を澄まし口を挟むことなく静かに聴くことに徹していた。

「　　ということがありました。俺は途中で意識を失ってしまっただから奉莉の所在や行方についてはわかりません」

五月雨荘の一件を説明し終えた弥彦は既に冷めてしまった湯飲みに手を伸ばし残りの湯を全部飲みほした。冷めた茶は渋みがよく効いていて味覚の乏しい子供の舌を持つ弥彦には苦かった。

弥彦の説明を付け加えるように夕乃が重傷の真九郎から聞いたことを補足する。紫を九鳳院家から誘拐したのは柔沢紅香。天王寺奉莉は九鳳院竜士に連れ去られた。

自分が意識を失っている間に事態がどんどん最悪へと道を踏み出し

ていたのだと、夕乃の説明を聞き及んだ弥彦は頭を抱え今後はどうするべきなのか思考した。

弥彦の空になった湯飲みに夕乃が急須を手に持ち湯を注ぐとする時間が経った急須の中身も冷めてしまったので「入れ替えてきませ」と一言いうとお盆に急須を置いて台所に向かって席をたった。

「随分と事が厄介なことになってやがる」

眉間にしわを寄せて珍しく溜息を吐きながら法泉が言った。

「紅香の奴、いつかとんでもねえことをしでかすと思っていたが《九鳳院》相手に喧嘩売るたあ本当の馬鹿だ。《九鳳院》の坊主に弥彦の友達が捕まったってえなるとこちらからは手出しはできねえな……」

法泉の言葉に弥彦は机を両手で叩くと身を乗り出した。

「なんでですか！」

「なんでって、わかんねえのか弥彦。《九鳳院》に手えだすってことは戦争するってことなんだよ」

「そんな、戦争だなんて大袈裟な」

「大袈裟なもんかよ。おめえ《九鳳院》の近衛隊について前話したよな。ありゃあ軍隊なんだ、そこらの軍隊と一緒にすんじゃねえぞ。裏世界でも近衛隊と張り合えるのは片手で数えるぐらいしかいねえぞ」

「それなら俺だって……！」

「甘いこと言ってるじゃねえよ。そりゃあおめえだつて弱くはねえことは師匠の俺が一番良く知っている。けどな、おめえじゃあ近衛隊の幹部一人とサシでやりあえるかどうか怪しいもんだ。相手は軍隊なんだよ、ひとりで軍隊なんて相手にできるかい」

「俺じゃあ駄目だつていうんなら、お祖父ちゃん！お祖父ちゃんなら奉莉のことを助けてくれるでしょ？」

なんて浅はかで愚かな願いだろうか。このときの弥彦には師匠である法泉なら奉莉を数多の近衛隊から救い出せるのではないのか、と思いついでいた。

その愚かな息子の願いに冥理が立ち上がると怒りの形相で弥彦に歩み寄ると弥彦の頬をひっぱ叩いた。

「なんて馬鹿なことを言うの！お父さんがもし奉莉ちゃんを助けにいったらわたしたち家族が危険に晒されるのよ。そんなこともわからないの、弥彦！」

冥理に母親に頬を叩かれた弥彦は頬の痛みではなく冥理に叩かれたことに目を白黒させて驚き、瞳に涙を浮かべて反論した。

「……なんでさ。お祖父ちゃんなら、法泉のお祖父ちゃんなら近衛隊なんてやつつけて奉莉を助けられるのに……！ どうして駄目なんだよ！」

「よく聞きなさい弥彦。仮にお父さんが奉莉ちゃんを助けることに成功したとしましょう。問題なのはそのあと、裏十三家の《崩月》が表御三家の《九鳳院》に仇なしたとわたしたち《崩月》を本気で潰しにくるわ」

「……ああ、そうか」

冥理の云わんとする意味を弥彦は理解する。

「わたしたち《崩月》が世界の裏側に逃げようときつと根絶やしにするまで追いかけてくるでしょうね。海外にいる夫、まだ幼い散鶴、戦う術がない二人から先にきつと殺されるわ。表の権力と裏の権力はお互いに均衡を保っているの。その均衡をわたしたちから壊したとき、その先にあるのは緩やかな衰退なんて優しいものじゃない」

冥理はそこで言葉をきると一息ついた。そして弥彦に息子に宣告する。

「尊厳を奪われ、家族を奪われ、自由を奪われ、命を奪われる。蹂躪されるが如く死しかないのよ」

母親の悲痛にもとれる言葉の意味をどれだけ弥彦が理解できたであろうか。

ただ殺されるだけでは生温い。裏世界には《崩月》を恨み嫉んでいる者たちがごまんという。捕まれば辱めに遭うだろう。身体は足の指先から髪の毛の一本までもがすべて奪われる。もしかしたら人体実験でもされるのかもしれない。

自分の家族がそんな地獄のような日々を歩むかもしれない可能性がゼロとは言い切れない。そんな現実を祖父である法泉に担がせようとする馬鹿な息子に冥理は諭そうとしたのだ。

「……冥理、そのへんにしてやれ。弥彦もまだ子供だ。感情だけで物事を考えて後先が見えないことだってある。弥彦、冥理が言いたいことは理解できたか？そういうこった。すまねえな」

「俺の方こそごめんなさい。奉莉のことばかり考えて家族にも危険が迫ることを考えてなかった」

「わかればいいってことよ。さて、これからどうしたもんかね……」

居間いる三人はこれからの成行きを模索する。息子が起こした不祥事は身内である家族が責を負うのが道理。奉莉の親御さんの気持ちを考えれば一刻も早く彼女を助け出したいところではあるがこちらからは手は出せない。

台所から急須にお湯を入れ替えた夕乃が居間に戻って来た。戻ってくるなり優雅な動作で家族全員の湯飲みにお湯を注ぎ足すとお盆に急須を置きゆつくりと落ち着いた様子で腰をおろした。

その様子がいつもどおりの姉のあるべき姿だったので弥彦は落ち着かない動向を鎮めるように熱々のお茶を一気に飲み干した。

すると不思議と身体が落ち着いた。お茶には人の心を静める効用でもあるのだろうか。そんなことを一瞬、弥彦の思考に過ぎったがすぐに今後の自分がするべきことについて思考する。

このままでいいはずがない。《九鳳院》からどうにかして奉莉を奪還せねばならない。どうしたらいいのだろうか。

誰も彼もが口を噤み居間には重苦しい空気が漂う。その空気を振り払うように夕乃が口を開いた。

「それで奉莉ちゃんの件についてはどうするんです？」

夕乃の結論を急かすような言葉に法泉が答える。

「この件は静観しかねえだろうよ。それに紅香のことだ。既に《九鳳院》の娘っ子が九鳳院家の手に戻ったことは承知だろう。あいつ

がなぜ《九鳳院》の娘っ子を誘拐したのかはわからねえがこのまま黙っているようなたまじゃねえよあの女は」

「それじゃあ……」

「紅香に任せるしかねえだろうな。やられたらやり返すようなあいつのことだ。また《九鳳院》の娘っ子を誘拐してついでに弥彦の友達も救っちゃまうだろうさ。誰かに頼るってのは俺の性分じゃねえが仕方ねえよ」

「せめて奉莉ちゃんがいる場所ぐらいはわからないものかしらね」

奉莉が居る場所。その言葉にピンときた弥彦は大慌てでその場を立ち上がると居間を飛び出し廊下を走り自室へと戻った。

部屋の入り口の襖を開け放ち慣れ親しんだ勉強机の引き出しへと弥彦は手を伸ばす。

引き出しの中には文房具や使うことのない子供の玩具などがしまわれていた。そして弥彦は目的の物を発見。それは一枚の小さな厚紙。夏休みの忌まわしい思い出と共に引き出しにずっと捨てることなく放置していた一枚の名刺。

その名刺の表面には電話番号と簡素な書体でこう書かれていた『悪宇商会 人事部副部長 ルーシー・メイ』と。

この名前の人物は野暮ったくて胡散臭くクロブチの大きな眼鏡をかけた女性だったはず。そして弥彦を言葉巧みに悪宇商会に入社させようと罠に誘い、友人である日高梓の耳を奪った憎い女。

今でも鮮明に思い出す。《ギロチン》の傍らに立つあの口元を愉快気に歪ませた女の顔を。

不愉快で胸が苦しくなる錯覚に弥彦は奥歯を噛み締め耐えた。いまはこの名刺だけが奉莉への道しるべとなる可能性をひめている。

悪宇商会。そうだ、悪宇商会なのだ。弥彦を血祭りにあげ九鳳院竜

士の護衛をしていたプロの戦闘屋《鉄腕》。この人物は自ら悪宇商会の所属だと弥彦にあの場で言ったのだ。意味深な言葉を弥彦の耳元で囁きながら。

九鳳院竜士の護衛をしている人物が悪宇商会の人間であるのなら社員は現在地ぐらい把握しているであろう本社。その人事部副部長ならばその情報を聞き出すのも容易いであろう。

これさえあれば奉莉の居場所を特定できる。歓喜にも似た感情が弥彦の全身を奮わせる。あとは行動あるのみ。

これから自分が行おうとすることはきつと家族は反対するだろう。これから自分が行おうとすることはきつと後悔するであろう。

だけど、これしか俺には出来ないから。こんなことでしか俺には奉莉を助けられないから

洋服ダンスの扉に手を伸ばし扉を開けた。中から冬場に着用する子供用の小さな黒いコートを取り出すと弥彦はコートの袖に腕を通した。

勉強机の上に置かれた一枚の名刺と小銭が入った小さな財布をコートのポケットに押し込むと自室の窓を開け放ち靴も履かずに素足のまま外に躍り出た。

深夜にも近い時刻。夜の崩月邸の庭に息を潜め小さな黒い影が夜風を切つて崩月邸の敷地を囲む高い塀をいとも簡単に跳躍で飛び越える。

月夜に闇が照らされ黒い影に月光が光を落とす。影は黒いコートを身にまといコートを夜風になびかせた少年だった。

少年の瞳は遠くをどこまでも遠くを真っ直ぐにみつめていた。そして少年は右肘の辺りから人間ではありえない異物を突出させていた。それは《鬼の角》人間ではない異形の魑魅魍魎ちみもつりょうたちに属する者の証。その角を少年は誇らしげに顯示するように月に見せ付ける。

俺は《戦鬼》だ。鬼は力のままに人間を、子供を女を搔つ攫う。誰にも邪魔なんてさせるものか

塀を飛び越え地面に着地と同時に少年はそのまま全力疾走で直進。月が雲に隠れ夜の闇が濃くなる。その夜の闇に少年は身を隠して深夜の住宅街からその身を隠した。獲物はひとりの少女。少女を守護する敵は強大。それでもやらないといけないのだ。

この身はあの少女の為に

第三十話 少年は鬼（後書き）

更新が大変遅れてしまって申し訳ありませんでした。

一応記念すべき三十話がこんな形で完成しましたがどうでしたでしょうか。

ご感想をお待ちしております。

第三十一話 選択の時（前書き）

愛読お願いします

第三十一話 選択の時

そこはとても静かで寂しくて温もりなど無い小さな憩いの場。野良犬の雄叫びさえ聞こえてこず、時間が止まっているかさえ錯覚させる場所だった。

昼時には遊具で遊ぶ子供たちのはしゃぐ声が、お昼の憩いの時間に集う主婦たちの井戸端会議の音が敷地内いっぱい聞こえてきていたたであるう遊戯場。

そこは住宅街の一角にぼつりと佇む小さな公園だった。

時刻は深夜、満天の星空とはいえないけれど何層にも重なった分厚い雲に邪魔されながらも懸命に小さな星ぼしがちらりと輝きを垣間見せるような寒空だった。

人肌が恋しそうに遊具の無人のブランコが夜風に揺れキイキイと独特な高音を鳴らし振り揺れた。突然鳴った音に驚き、両肩をビクツと反応させて周囲に視線をくばらせる小さな影がひとつ。

公園の敷地内中央に据えられた街灯がその小さな影に光を向けた。弱々しい人工の光に照らされた影の正体は子供だった。それもまだ幼くてあどけない顔と小さな体を持ち合わせた少年がひとり。

少年は子供用の黒いコートを羽織っており足元はこの冬の季節には厳しい素足の状態。彼の履いている長ズボンには所々に草木や砂埃が付着しており、彼の足にいたっては泥や砂で真っ黒だ。長い長い道を人工的に整備されていない道を歩んできたことが窺える。

少年はゆらりゆらりとおぼつかない足取りで公園のベンチに歩み寄り倒れるようにベンチに腰を降ろす。少年は安堵する様子で背もたれに背を預けコートのポケットから熱々の缶コーヒーを取り出す。取り出した缶をまずは両手でしっかりと持ち、かじかんで冷え切ってしまった両手を暖める。掌から腕を伝いじわじわとではあるが身体を優しく暖めてくれる缶コーヒーに心の中でお礼を言って少年は溜息を吐いた。吐いた息は白い霧となり何も無いところで消えた。

片手で熱々の缶コーヒーを持ち、舌を火傷しないようにちびちびと少年はコーヒーを飲みながら夜空を仰ぎ見ると先ほどまでのことを思い出す。

寝静まる深夜の住宅街を人外の身体能力にモノをいわせ、まるで鳥の羽のように軽くなった身体で夜風をきりながら少年は走っていた。少年はあるひとつの想いを胸に家族の待つ屋敷から飛び出すとある目的を達するだけだけにその小さな身体ひとつで走っていた。

決意を秘めた瞳に力を宿し、人々に化け物と呼称される人外の証、右肘から顕現された鋭利で分厚く太い戦鬼の角から身体全体に駆け巡る鬼の力を宿し住宅街を駆け抜け、夜の繁華街を駆け抜け、街の境を飛び越え、その強靱な脚力で疾走する。

まるで一陣の黒いつむじ風となった少年の主観は高速で移動するジェット機の如く景色が前方から後方へと観る間も無く高速で通り過ぎる。

駆け抜ける少年の視界の隅にちらりと映った長方形の縦長の箱を少年は見逃すことなく目に留めると両足をびたりと止めた。

視界に映った縦長の箱とは公衆電話ボックス。昨今は携帯電話が主流となつている現代ではあまり目にする事のなくなった文明の利器。まるで現代社会に忘れ去られたかのように道端にひとつ寂しそくに佇むそれを蛾が飛び交う街灯の光が灯していた。

電話ボックスの数メートル横には町内の掲示板が掲げられ『街内でこどもの誘拐事件多発！親御さんはお子さんから目を離さないように！』と大々的な手作りのポスターが貼つてあった。

その様子に少年はなんとも思わずにただ公衆電話を利用するために電話ボックスに歩み寄ると重い扉を押し開きボックス内に入った。扉がひとりでに閉まるとそこは無音の空間となる。深夜でたださえ静かだというのにボックス内はそれを更に増徴させるように外界の音を遮断した。

少年はコートのポケットから一枚の名刺と小銭の入った財布を取り出す。名刺に書かれた電話番号を両目にしっかりと焼付け記憶。そして財布から十円硬貨を数枚取り出す。

硬貨を握り締め少年はつま先を伸ばすと小さな背をできるだけ限界まで背伸びをして電話の硬貨投入口に硬貨を投入。電話のパネル表示ランプに真っ赤な数字が灯り電話が使用可能となる。そのまま背伸びした状態で11桁の電話のボタンを押す。

受話器を片耳にあて電話の呼び出し音に耳をすませること数秒。数回の呼び出し音の後に受話器の向こう側で相手が出てきた。

「人材派遣会社、悪宇商会でございます」

受話器越しに聞こえてくる人物の声は初対面の人間に対して安堵感を与えるような温かみのある口調と音量だった。

だが、その声の主をすでに承知済みの少年には怒りと憎しみが胸中で渦巻く。それを表に出さないように感情を押し殺し声を押し殺し少年は口を開いた。

「もしもし、夜分遅くに申し訳ありません。急ぎ用があったのでお電話させていただきました」

「……その声は、もしかして」

少年の声を聞いて驚いた様子で応答する電話の相手。

「弥彦。俺の名前は崩月弥彦です。お久しぶりですね……夏の、あの一件以来ですかね　ルーシー・メイさん」

そう。少年の名前は崩月弥彦。裏世界の権化、裏十三家の《崩月》に属し直系の男。

その名を聞いて電話越しでも愉快的様子のルーシーが笑いを押し殺して口元をほころばせた。

「ああ、やーっぱりそうでしたか！お久しぶりですね、弥彦くん。あなたから我が社にご連絡をいただけるとはこういう風の吹き回しですか？わたしはつきりもう我が社とはご縁がないのかと思っていたのに」

「そんなこと微塵も思っていないだろう、あんたは。俺の友達をあんな目に遭わせといて……！」

「あれ？まだあの件のことを根に持っていていらっしやる？弥彦君は恨みを根に持つタイプですか。あれはただの我が社なりのあなたの勧誘従業ですよ。あなたにとっても我が社にとってもタメになったはずですよ？」

「あんなことが俺のタメになってたまるかよ！」

受話器を床に叩きつける勢いで弥彦は叫んだ。

こいつはあの時からなんにも変わっちゃいない。人を人とも思わない最低のひとでなしだ。

「まあまあ落ち着いてください。そんなにカツカしてたらできるものもできなくなりますよ。それで、ただわたし個人に恨み辛みを言うただけにご連絡をくれたわけではないでしょ？ご用件はいつたいなんです？」

怒りに荒れ狂う弥彦とは対照的にルーシーは淡々と話を続ける。

弥彦は一度、受話器を台に置くと大きく深呼吸してから再び受話器を手に取った。

「長い前振りにはキライなので単刀直入に言います。悪^{あんた}宇商会
のところにいる《鉄腕》の現在の所在地を教えろ、今すぐに」

「は？」

「はあ？じゃあない。《鉄腕》の居場所を教えろと言った」

するとルーシーはクツクツと笑いを押し殺すことなく笑った。その
ふざけた態度に弥彦の怒りが増徴される。

「……なにが可笑的い」

「いやいや、弥彦君も案外バカなんだなーっと」

「へえ、俺がバカですか。それはいったいどうして？」

「世間知らずの間抜けで単なるバカだ、て言ったんですよ」

「おい、世間知らずの間抜けが増えてるぞ」

「ああ、これは失礼。それにしてもそんなくだらない理由でわたし
に連絡をくれたんですね。期待してしまっただじゃないですか」

「期待？何をだよ」

「わたしはてつきり弥彦君が我が社にどーしても入社したいので悪
宇商会最高顧問と取り合ってくれ、と言われるんじゃないかなー、
なんて期待があったんですよ」

「それは、ない」

「ですよ。まあそんなわたしの気持ちはどうでもいいんです。些細なことですから」

電話越しでルーシーは手帳を片手に崩月弥彦についての情報を即座に頭の中で整理する。そして彼の願いを受け入れるのに必要な手順、時間、行動を推測。そのあまりにも単純な答えに笑った。

「弥彦君。どうやらあなたの願いはわたしにかかればとーっても簡単に叶える事ができます」

「それで、俺の願いをあなたは快く叶えてくれるのか？」

そんなことは弥彦は微塵も欠片も期待していない。弥彦はルーシーが云わんとすることが既に予想できていた。

「残念ですがそれは無理です」

やっぱり。

「弥彦君の願いを叶えるには条件があります。それも簡単な条件が、すぐに解決できる条件があるんですよ」

もったいぶるルーシーに弥彦は先手を打った。条件はきっと等価交換。情報の受け渡しと。

「どうせ俺の悪宇商会への入社が条件でしょ」

あっさりと正解を言ってしまった弥彦にルーシーは苦笑する。

「ご察しがいいですね。そのとおりですよ弥彦君。あなたへの条件はただひとつ。あなたの悪宇商会への入社です」

「つくづくあなたのところの会社はしつこいですね」

嫌味をたつぷり言葉に含ませながら弥彦が言った。予想通りすぎる展開に辟易する。

「これは手厳しい指摘ですね。まあ正直に言いますとわたし個人としても弥彦君、あなたが欲しい。あなたの 《崩月》としての力がね」

「結局、それなんですな。あなた、裏十三家マニアでもやったらどうだ？」

ルーシーの《崩月》への執念にも似た固執に弥彦が指摘をする。するとルーシーの反応は笑い声だった。

「そつえば弥彦君にはまだ話していませんでしたな。実はわたし、裏十三家マニアなんですよ。ちょっとしたものですけどね」

ルーシーは弥彦に語った。自分は裏十三家が好きで、暇をみつければ、断絶した家の痕跡を調べたり、廃業した家の末裔を追ったり、古い記録に目を通したり、個人的な趣味でしていると。

あまり褒められないような人には言えない趣味らしく、裏十三家について嗅ぎ回ることは命の危険さえある危ない綱渡り作業だとも弥彦に語った。

「マニアだからそこまであなたがしつこいっていうことは理解しま

した。それで、俺があなたの条件を呑めば《鉄腕》の居場所を教えてくれるんですね？」

「条件を呑んでくれるんですか！」

自分の想像とは予想外の展開にルーシーは電話越しに驚きと興奮で反応。きつと身を乗り出ししているに違いない、と弥彦は姿の見えないルーシーの現状を予想する。

「もちろん、いいですよ。どんな条件がこようと返事はすでに決まっていますから。あなたの条件、呑みますよ」

「ほ、ほんとうですか！弥彦君、嘘なんてのは無しですよ。本当に我が社に入社してくれるんですね？」

「疑い深い人だな。本当に入社しますよ、あなたが《鉄腕》の居場所を教えてくれるのならね」

「す、素晴らしい！これで我が社の当社比がまた頭ひとつ抜きん出ることが出来ますよ！それに《崩月》が我が社に加入となる結果をわたしが作ったとなれば人事部副部長から部長に昇進できるかも知れません！これは給料上乘せですよ！」

興奮やめやらない様子のルーシーの鼻息は荒い。《崩月》が悪宇商会に加入することはそれだけ意味のある大事らしい。

弥彦本人の気持ちとしてはルーシーがどれほど昇進しようが喜ぼうがまったく意味がないのだ。

自分もまた悪宇商会の事業のように誰かを傷つけ、誰かに傷つけられることをよしとすることを望んでいる。

仕方が無いのだ。これは天王寺奉莉を《九鳳院》から奪還するため

の布石でしかない。そのためだけに自分の身を一生、裏の世界に置くとしても構わない。

もとより自分は《崩月》の身。自分が表の輝かしい日常に居る場所などないのだ。小学校に通ったり、数少ない友達とふざけあって遊んだり、町道場で仲間と困まれながら鍛錬したり、どれもこれもが自分にはすぎた居場所。

化け物が人間と暮らそうなんて、おこがましいってんだよ！

弥彦の胸のうちにある誰かがそう叫ぶ。きっとそうなのだろう。

化け物は化け物らしく生きる道がすでに決まっている。だけど、一度だけでもいい、その道をちよつと踏み外して暗いトンネルから抜け出して外の世界を覗き見ても罰は当たらないと思う。

せめて化け物でも最後はあの小さな幼い少女のために命を張ることが自分への贖罪なのかもしれない。

家族を巻き込んだ、友達を巻き込んだ、大切な少女を巻き込んだ。

きっと自分はもう誰にも許されない。許させるはずがない。許していいはずがない。その身で罪を抱えて更に罪を積み重ねる。

これから進む道はきつと後悔する。これから自分は血で手を染める。これから自分は呪われる、恨まれる、嫉まれる、裏切られる、殺す、殺される。

何人もの屍をこの手で作り、その屍を積み重ね更にその何倍もの屍をまたつくりあげる。屍を積み重ねた先にあるのはなんだろうか。

天国だろうか、それとも地獄だろうか。

いまでもこんなにさえ悩み、痛み、後悔して胸が苦しいのにこの先にあるその暗い暗い真つ暗な光が届かないトンネルを俺はひとりで歩けるのだろうか。

「弥彦君の約言があるとはいえまだ入社が完全に決まったわけではありません。わたしが直接あなたに我が社の契約書にサインをいた

だかないと……」

「俺には時間がないんです。そんな悠長なことをしている暇はありませんよ！」

「そうはいつでもですね。弥彦君を信じていないわけではないんです。しかし、今この場で《鉄腕》の居場所を教えたあとに弥彦君に雲隠れでもされたらわたしの会社での評判はガタ落ち。最悪、命がありません」

「そんな卑怯なことは絶対するもんか。信じてください。必ず、俺の用件が終わり次第契約書にサインでもなんでもしますよ」

弥彦の焦る気持ちと天王寺奉莉へと心配する気持ちが弥彦の心を急かしはやしたてる。

ルーシーは電話越しに「困りましたね」と頭を唸らせる。

そうこうしている間に無駄に時間が刻一刻と過ぎゆく。痺れを切らした弥彦はルーシーにこう提案。

「俺が今からあなたのところに行って悪宇商会入社の証明として契約書にサインするのでは遅すぎる。それならあなたがこちらに契約書を持ってきてその場で俺が契約書にサインをしてからついでに俺を《鉄腕》のところまで運べばいい」

「それはまた随分とわたしの仕事量が増えるんですが……まあいいでしょう。我が社の車で《鉄腕》の仕事場までお送りしましょう。契約書やその他諸々の説明は移動中の車内であればいいことですしね」

「了承してもらい助かります。それで俺がいる現在地は」

トントンと電話ボックスの扉を叩く音が弥彦の耳に聞こえたのでルーシーとの電話を会話の途中で中断させると弥彦は扉の方に振り返った。

そこにいたには見慣れた正義の証である紋章の入った帽子を被りきつちりとした制服に身を包んだ者。扉を叩いた者の正体は深夜の巡回中であつた警察官。公僕。

世間では夜遊びをする子供や家出中で泊まる場所が見つからず街を行く当ても無く彷徨う少女達がごく当たり前のように居る。

現在の弥彦は第三者からみれば深夜に公衆電話ボックスで寒さに身を寄せる小さな男の子といったところか。

警官は深夜の巡回中に公衆電話ボックスで立ち話をしている男の子を発見。これは直ちに保護をせねば、という公僕らしいいたって普通の思考がはたらいたのだろう。

背の低い弥彦を見下ろす形で警官は扉の外に出てくるように弥彦を笑顔で手招き。弥彦は盛大に溜息を吐くと警官の様子を窺いながら受話器に耳を当てる。

「すみません。ちょっと面倒なことになってしまいました。現在地を変更したいんですが……」

「構いませんよ。それで何処なんです？」

「場所は」

ルーシーに新たな合流場所を手早く言い伝えたと受話器を戻しニコニコ顔の警官の笑顔にお返しとばかりに子供らしい幼い笑顔を弥彦は返すとそのままの笑顔で電話ボックスの扉を押し開く。

途端に外気が入れ替わり外の冷たい空気が弥彦を身震いさせた。ペチペチと素足で電話ボックスから出てきた弥彦の姿を見て警官は二

コニコ顔から怪訝そうな表情に切り替わった。

「どうしたの？『ぼく』みたいな小さな男の子がこんな時間帯にこんな場所に居るなんておかしいよ」

「小さな男の子が深夜に電話ボックスにいるのはそんなにおかしいですかね？」

「そりやおかしいさ。お父さんは？お母さんは？『ぼく』はこのあたりに住んでいる子なのかな？」

「俺はこのあたりどころかこの街の住人でもないですよ」

「え？そうなんだ。どつりでこのあたりでは見かけない子のはずだ。『ぼく』は初めて見る顔だもんね」

「まるでこの街に住む子供全員の顔を知っているみたいな口ぶりです。おまわりさん」

弥彦にそう指摘されると警官は嬉しそうに笑った。その顔は正義の警察官というよりも、もっと別の歪んだ何かだった。

「そつだよ、そつだよ。この街のことなら『ぼく』は『わたし』もおれ』も『あかし』もゼーーンぶつ知っているさ」

「へえ、すごいね。おまわりさん」

そつして弥彦はちらりと電話ボックス周辺に偶然あった掲示板に目を向ける。そこには先ほど電話ボックスを利用する前に確認したポスターが掲げられている。

『街内でこどもの誘拐事件多発！！親御さんはお子さんから目を離さないように！！』

なるほど、と弥彦は納得。どつりで子供が街から居なくなるわけだ。

「『ぼく』がこの街の子じゃないなら『ぼく』は『ぼく』を逮捕しないといけない」

そう警官が言うのと制服の懐から警官には馴染み深い鉄の手錠を取り出すと弥彦にブラブラと手錠を見せ付ける。

弥彦はそれを見ることなく無視をして警官に宣言した。

「おまわりさんって、にせものでしょ」

偽者と警察官に指摘する弥彦に警官は激怒した様子で反論。

「『ぼく』が偽者だって！？そんなはずはない。『ぼく』はこの街を子供を『大人』から守っているんだ。『ぼく』も『わたし』もおれ』も『あたし』は偽者なんかじゃないっ！」

「じゃあ証拠を見せてよ。おまわりさんなら拳銃、持っているでしょ？」

「ああ、『ぼく』は持っているさ」

警官は意気揚々と腰に下げたチェーンつきの拳銃を腰のホルダーから抜くと弥彦に手渡した。

手渡された拳銃を弥彦は食い入るように確認。そして、満足した様子で警官に拳銃を返す。

「『ぼく』が本物のおまわりさんだってわかったでしょ。さあ、」

「ぼく』はお縄に頂戴だ！」

「ちょっとまってよ。まだ俺はおまわりさんをほんものだなんていつてないよ」

「『ぼく』は『ぼく』に拳銃を見せてあげたよ。『ぼく』は納得してくれたんじゃないの」

「俺は納得なんてしちゃいない。おまわりさん、それにせものでしよ。おまわりさんと一緒さ」

「な、なんだと！これはれっきとした本物の拳銃だよ。きつと『ぼく』はこの街の子じゃないからわからないんだ」

「じゃあ、そのガラクタが本物だって証明してよ。『ぼく』を拳銃で撃つてさ」

「『ぼく』が『ぼく』に向かって拳銃を撃てたって？そんなのできつこないよ。だって『ぼく』だもの」

「それなら『わたし』でも『おれ』でも『あたし』でもいいよ。さあ、おまわりさんがほんものだっていうなら拳銃を撃つてよ」

弥彦の要求に警官は困った様子でオロオロと怖気出した。その様子に弥彦は付き合っていられない、と警官を無視して歩き出す。

自分を素通りしようとする弥彦を警官は見逃さなかった。弥彦の片腕をしっかりと握り締めると逃げられないように手錠をかけようとしたが弥彦は警官の腕から難なく逃れ後ろに跳躍。

警官は身軽な弥彦の行動に目をむいた。しかし、すぐに制服の懐から刃渡りの長いサバイバルナイフを取り出すとそれを弥彦にチラつ

かせながらじりじりと弥彦との距離を詰める。

「『きみ』は悪い子だ。まるで『大人』みたいに『ぼく』を困らせる。『ぼく』の街にそんな『きみ』はいらない。『きみ』は逮捕しやなくて処刑だ」

「そうやって逮捕と称して子供を誘拐していたんですね。おまわりさんってかなりキマツてるからお薬でもやっているの？」

「お薬なんかじゃないよ。あれは特別な警官にだけ特別に支給される特別なモノなんだ。『ぼく』に正義の力を与えてくれる！」

「正義の味方が子供の誘拐犯じゃ世話無いよ、おまわりさん」

「うるさい！『ぼく』の街の治安を乱す『ぼく』も『わたし』もおれ』も『あたし』は逮捕しないとイケないんだ！そして『ぼく』に逆らう『大人』の『きみ』は処刑だ！」

警官は駆け走り弥彦との間合いを一気に詰める。サバイバルナイフを上下左右に無造作に躊躇無く振り回し弥彦に襲い掛かった。

警官を自称するだけあって体軀はまあまあ成人男性。しかし、ナイフの振り回し方を見るからにコト戦闘に関してはまったくの素人。弥彦は警官のナイフに注意を払い余裕をもって攻撃を避ける。一振り二振りとナイフの切っ先を避けつつ弥彦は偶然にも巻き込まれてしまったこの異常者の処分について思考する。

戦鬼の力を使えば一撃で終わるであろうこの戦闘。だが、生憎と戦鬼の力は無尽蔵に弥彦に力を分け与えてくれるわけではないのだ。

戦鬼の力は諸刃の剣。一度角の力を発動すれば角を抑えるまでの間、とてつもない剛力と身体能力を手に入れる代わりに角を押さえ込んでしまえばその代償として身体に負担をかける。

とてつもない力を制御するためと、その代償としての身体への負担を少しでも和らげるために毎日鍛錬を続けてきている弥彦の一日に使用できる戦鬼化の回数は2回。

崩月の屋敷を抜け出しこの街に移動するのに1回戦鬼化している現状からして今日戦鬼化できるのはあと1回のみ。

貴重な戦鬼の力をこの見ず知らずの異常者相手に使用するのはどうしてもできない。それはなぜか。

この後、ルーシーと合流した後にその足で《鉄腕》のもとに向かい《九鳳院》の近衛隊相手に闘うのだ。未知数の戦力を相手にこちらは持てる力全てを持って闘いたい。

そのためにはこの異常者に戦鬼の力を使用するなんてナンセンスだ。しかし、この異常者を野放しにすることはできない。二律背反する心に弥彦はイライラして頭を掻き毟る。

ふと、手にしたのは違和感。その違和感は頭髪にまだ残っていた細長い針。姉の夕乃が弥彦の治療のために頭にさしていた新陳代謝を促進させるツボに刺していた針。

これだ、と弥彦は頭から最後の一本の針を抜き取るとナイフを振り回し執拗に弥彦を襲う異常者に向けて針を投擲。

スツと異常者の顔に吸い込まれるように細長い針は異常者の振り回す腕をすり抜け彼の片目に直撃。

「う、おあああああああ！……！」

突然の片目の激痛にナイフを放り投げ両手で激痛を発する片目から針を抜き差し怪我をした箇所を押さえ地面に跪く異常者。

その絶好の隙を逃さない弥彦は異常者に接近。彼に追い討ちをかけるが如く手傷を負った片目に拳で殴る。

殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。殴る。

地面を這いずり回る異常者を逃すことなく的確に片目を殴る。

「やめる！やめる！やめてくれえええ！」

阿鼻叫喚する異常者の助けを求める声に弥彦は耳を貸すことは無かった。

それは一方的な暴力だった。それはまさに化け物と人間の対極図であつた。

血肉沸き踊る快樂にも似た高揚感に身体を包まれた弥彦は我が身を忘れつつあつた。興奮する弥彦に影響されるように右肘から戦鬼の角が呼応する。

角に反応した弥彦は殴る拳を留めると片目から血を流しすでに意識を失つた異常者の血の気が引いた顔を見て急に先ほどまでの高揚感が嘘のように消え失せた。

なんだ、これは

弥彦の両手は異常者の返り血の血糊で真っ赤に汚れていた。それを信じられないものを見るように両目を見開き汚れた手を凝視する。なんとなく、なんとなくだ。血で汚れた自分の手を見ていると無性に血を舐め取りたい衝動に駆られた弥彦はためしに舌先で血を舐めてみた。

口の中に甘くとも苦くも無い不思議な味覚が広がりいままで感じたことの無いはじめての味が弥彦の脳髓に衝撃を与えた。そして、それっきり血を舐めるのをやめると自分のシャツで血を拭き取る。そして、まるで死んだように意識を失っている異常者の懐から手錠を拝借。近くにあつた電柱の柱に手錠の鎖を繋ぎ異常者の両手を手錠の輪にかける。これで意識が冷めてもここから逃げることはできないだろう。

弥彦はどこまでも冷え切つた瞳で異常者を観察。まるで興味が失せた様子でその場で踵を返すと深夜の道を静かに走り出した。

公園のベンチで座ったまま空っぽになった缶コーヒーを片手で手首のスナップを利かせてゴミ箱に綺麗な放物線を描くように投げ入れる。カランと甲高い音が静かな公園内に響く。

暖まった身体が徐々にまた冷たい外気に触れて冷たくなる感覚に両目を閉じながら弥彦は二度目の溜息を吐いた。

ルーシー・メイとの待ち合わせ場所に指定した住宅街の一角にある小さな公園。そこを訪れるのは弥彦にとってははじめての経験ではなかった。

この公園は町道場の稽古の帰り道によく横を素通りする場所。たまに帰りの途中で奉莉のやつが「ちよつとだけ遊んでいきましようよ」なんて言い出した時には奉莉と円それに光の三人娘に加え弥彦を交えた四人でよく遊んだものだ。

四人で鬼ごっこをしたときはいつも最初弥彦が鬼だった。だが、すぐに奉莉にタッチして鬼を交代するのは毎度のお約束になっていた。そんなとき奉莉は頬を膨らませて弥彦に「なんでいつもわたしばっかりなのよっ！」とよく拗ねた。

その奉莉の様子に毎回の如く円がくつくつと笑い、光が奉莉を励まそうと近付いたところで奉莉が光にタッチ。すると「奉莉先輩の裏切りものー！」と光が今度は円を追いかける。円は光の追隨を許さずいつも捕まらない。

円の本気の逃亡劇に涙目になっていまにも泣き出しそうな光の様子にいつも弥彦が光と歳の近い妹の散鶴がいるから心揺さぶられ仕方なく鬼を代わってあげるのだった。

そんなことが週一にでしか道場に通えない弥彦にとってはとても大切で温かい時間だった。

そんな思い出にベンチの背もたれに腰を深くあずけ弥彦が浸っていると公園の敷地に一台の自転車が急ブレーキをかけながら滑り込むように入ってきた。

弥彦はブレーキの音に目をむいて驚きベンチから飛び上がると不躰

な自転車の運転手に目をむけた。子供用のスポーツバイクに跨りペダルに足を乗せ急いでいたことを窺わせる様に運転手の息は荒れていた。

自転車の運転手は弥彦の見覚えのある人物。すらりとした長身の身体に武芸をたしなむ者の雰囲気を相手に与える鋭い瞳。男とも女ともとれる中性的な顔立ちではあるが目鼻が整いそれは見るものを魅了させる。

その人物は少女だった。まだ幼い小さな少女。でも侮ってはいけな
い。なぜなら彼女は武人なのだから。

「どうした？そんなに慌てた様子でさ。まるで人でも探しているみたいだぞ」

弥彦の問い掛けに少女は自転車から降りると無言で弥彦に歩み寄る。少女の鋭い瞳は弥彦に逃げることを許さないと訴えていた。その瞳に弥彦は参った様子で頭を掻いた。

「やっと見つけた。あなたのこと町中探したわよ」

少女は頬を伝う汗を拳で拭くと素早い動作で弥彦の胸倉を掴んだ。

「まず最初にあなたに言いたいことがあるわ」

「なんででしょうか」

額に冷や汗を浮かべ引きつった笑顔で答える弥彦に少女は顔を弥彦に近づけてこう宣言した。

「責任、取りなさいよ」

少女の名は円堂円。自称武人にして天王寺奉莉の親友。
奉莉の危機に親友の瞳は怒りと憤りで染まっていた。

第三十一話 選択の時（後書き）

異常者は異常でしたでしょうか？

円堂円さんの久しぶりのご登場で『電波的な彼女』を再度読み返しました。

やっぱり名作です

感想お待ちしております

第三十二話 決戦の狼煙

「責任、取りなさいよ」

腹の底から底冷えするような低い声量と刺々しい鋭い口調で彼女は言った。

弥彦の胸倉を少女とは思えないほどの力を込めて両手で締め上げ、目と鼻の先には弥彦への憤りを露にした円堂えんどうまじかの顔があつた。

円の怒りの理由に心当たりのある弥彦は彼女の顔を直視することができず、真つ直ぐに見つめる彼女の瞳から顔を横に背ける。無言の返事と腑抜けた弥彦の様子に円は両眼を見開くと両手の力加減をなお強めた。

胸倉を掴まれているだけなのにまるで万力で首を絞められている錯覚を覚え、息苦しさゆえに弥彦は大口を開き酸素を求める。肺に出来得るかぎりの空気を体内に取り込むことに必死になる。

「あなた、自分がなにをしてしまったのか理解出来てる？わたしがこんなにも怒りを覚えているのも理解できているの？」

「……あつ、…がああ、…はあ、……っ！」

「自分の置かれている状況が理解できているのかしら？」

「……は」

「は？」

円は両手に込める力を緩めることなく不思議そうな様子で首を傾げた。

「放せ」

言葉より早く弥彦は行動。円の左腕に振り上げた右手で鋭い角度からの手刀を放つ。

手刀が左腕に当たり円は左腕の痺れに堪らずに両手の力を緩めた。その隙に弥彦は円の両手からすり抜けると酸素を求め乱れる息を吐きながら円と距離をとった。

円はまだ痺れの残る左腕を右手で擦りながら眉間に皺をよせて弥彦をねめつける。弥彦は乱れる息を整えつつ円と正面で向かい合うように対峙した。

「酷い事するのね」

「お互い様だろ。いきなり喧嘩腰で胸倉を掴まれば誰だって逃げ出すさ」

「お互い様？それは違うわ。こんなところで優々と油を売っているあなたに思わず言葉より先に手が出てしまっただけよ」

「なおさら性質が悪いわ」

「性質が悪い？自業自得でしょう。あなたは奉莉を危険な目に遭わせた。それだけで万死に値すると思うのだけど……間違っているかしらっ？」

「いや。間違っていない、円が正しいよ。　　そうだ。俺は奉莉を危険な目に遭わせあまつさえ現在も彼女は行方知れずの状態。言い逃れはできないな」

「現状は一応理解しているようなね、よかった。深夜に家を抜け出してあなたを探した甲斐があったわ」

「そんなことを確認するために俺を探して自転車ひとつで隣町まで来たっていいのか？」

「その質問にわたしが答える前にまずは椅子に座らない？ずっと自転車のペダルを漕いでいたからもう両脚がクタクタで疲れているの。ずっと立ち話なんて余計に疲れるわ。男の癖に女の子に気が利かないのね」

「気が利かないって……おまえなあ。人を絞め殺す勢いだった女の子が言う言葉じゃないだろ。わかった、とりあえずそこにあるベンチで大人しく座ってる」

弥彦は先ほどまで自分が座っていた公園のベンチを指差すと円に座るように促す。円は両脚を引きずるようにゆっくりとベンチに向けて前進。

円の疲労の溜まっている様子に弥彦は慌てて彼女の傍に駆け寄る。そしてさきほどのお返しとばかりに円の不意を突いて彼女の後ろから両手でしっかりと彼女の背中と両膝を抱きかかえた。いわゆるお姫様抱っこである。

急な出来事に円は女の子らしい小さな悲鳴を上げて驚き、混乱している様子で弥彦の両腕の揺り籠かごの中から恨めしそうに、そして恥ずかしそうに弥彦の顔を見上げた。

弥彦は悪戯が成功した子供特有の喜びの笑みを浮かべて円の視線を受け止める。

「は、恥ずかしいわ。降ろして」

「降ろして良いのか？」

先ほどとは打って変わって弥彦は円をからかう。弥彦の両腕に抱かれてこそばゆいのか、それとも羞恥心からか円の頬は赤みを帯びていた。

弥彦としては女の子をお姫様抱っこするのは照れくさいのだが脚を引きずる円に肩を貸すよりこうして抱え込んでしまったほうが彼女にとっては身体が楽なのではと判断したから行動に移したのだった。悪戯心が見え隠れしている弥彦の行動に円はやむを得ないと納得すると首を横に振る。

「……やっぱり、このまままでお願い」

「素直でよろしい」

弥彦は微笑み頷くと両腕に円の重みを感じつつベンチに歩み寄る。

円を支える腕を通して彼女の体温が弥彦に伝わる。それはひどく冷たいものだった。

自転車ひとつで隣町からこの公園まで走らせてきた彼女の身体は汗が引いたことでとても冷たく冷めていた。これでは風邪をこじらせてしまう、と弥彦は困惑。

ベンチの上に円の身体をゆっくりと降ろすと弥彦は自分の着ていたコートを脱いで円に手渡す。円は弥彦のコートを受け取るとコートを手渡されたその意図が汲み取れない様子で弥彦を見つめた。

「そんなに冷えた身体でいると風邪ひくぞ。生憎と手持ちで身体を温めてくれるようなモノがなくてな、嫌だと思っけどそれでも着我慢してくれないか。すこしはマシになるはずだからさ」

「ありがとう。着させてもらっわ」

円は弥彦のコートの袖に腕を通す。袖口から円の手が出てこず袖の途中でだらりと袖が地面に向くように下垂れる。一応、男物の洋服だったので女の子の円には一回りサイズが大きかったらしい。余った袖をプラプラと垂らし戸惑った円の様子に弥彦は声を出して笑った。いつもは冷静沈着であり豊かな感情を表情に出すことは無いあの円堂円がこんなにも戸惑う姿は見たことがない。この少女は歳相応の反応をまったくと言っていいほど見せてはくれないのでとても新鮮な光景だと弥彦は思った。

「わたしが困っているのに笑うなんて酷いじゃない」

拗ねた様子で口を尖らせ、しゅしゅと袖を折り捲くりつつそっぽを向いて円が言った。

「わるいわるい。そう口を尖らせて拗ねなさんなって、円の意外な一面が見れてこれでも驚いているんだ」

「驚いている人間はふつつ笑わないわ」

「そうだな。気分を悪くさせたなら謝るよ。ごめんな。それで、少しは身体が温かくなったか」

「……うん。さっきまで弥彦が着ていたから随分と温かい」

「それはなによりだ。ちょっとコートポケットを拝借するぞ」

弥彦はコートポケットから財布を取り出すと自分のズボン後ろポケットにしまう。

「積もる話もあるだろうからすぐそこまで行って何か飲み物でも買ってくるよ。円はコーヒーは飲めるか？」

弥彦の質問に円は首を横に振って否定した。

「わたし、まだ苦いのは苦手なの」

「わかった。何か甘いものでも買って来る。ちょっと待っていてくれ。すぐ戻るから」

弥彦は円を置いてその場で踵を返すと小走りで公園の敷地内から出て行った。公園から出た道は住宅街に面した公道。公園から少し距離を置いた位置にある道端に深夜の暗い道を照らすように自販機が無駄に眩しいばかりの光を灯していた。

自販機の光に寄ってきていた矮小な羽虫が自販機のボタンにこびり付いていたのを弥彦は手で払うとホットコーヒーとホットココアを一本ずつ購入。その場でしゃがみ込み取り出し口から熱々の缶を火傷に注意を払いつつ手に取る。

両手に持った缶の温度を肌で感じつつ弥彦は公園に向けて歩みを進めようと足を踏み出した瞬間、背後に人の気配を感じた弥彦はすぐさま後ろを振り返った。

弥彦の視線先にいたのは厚手のコートに頭にはニット帽、顔には大きめな黒縁の眼鏡。胡散臭い人間、というイメージをそのまま浮き彫りにしたようなやぼったい人物がそこに居た。

「こんばんは、弥彦くん。約束どおり迎えにまいりましたよ」

待ち人きたれり。無意識の内に弥彦は緊張で身体を強張らせる。いま目の前にいる人物は一生怨んでも呪っても許せそうにないほどの極悪人。

「随分と遅いご到着じゃないですか。この寒空の下、待たされる身になってもらいたいくらいだ」

「そう愚痴らないで下さい。会社の支部から大急ぎで車を走らせたいんですがなにぶん、ここまでの来るのに距離がありましたので仕方がなかったんですよ」

苦笑しながら弥彦に弁明したのは悪宇商会人事部副部長ルーシー・メイ。

夏休みの一件以来になる顔合わせ。相変わらず彼女の眼鏡越しに見える瞳は黒く淀み、裏世界の住人独特の雰囲気を全身に纏っていた。

「すぐにでも《鉄腕》の仕事場に移動する手筈は整っていますがどうしますか？」

弥彦の両手に持った二個の缶を見て現状を察したのかルーシーはそう提案した。弥彦としてはすぐにでも移動したいところではあるが公園で円堂円を待たせてしまっているいじょうそれは出来ない。悩み、悩み、弥彦は返事を返す。

「公園で人を待たせているのでしばらくの間、待つていただけませんか。こちらでも大事ですがあちらも大事なので」

「もちろん、構いませんよ。この付近に車を待たせているので弥彦くんの用件が済み次第に出発しましょう」

「助かります。一応、あなたたちのことは公園で待つている人物には秘密にしているので公園には近寄らないようお願いします」

「それは構いませんが……こんな時間帯に公園で談話とはにおいませぬ。もしかして、待たせているお相手は女の子、ですか？」

興味がそそられるモノを見つけた、とルーシーは心浮かれる様子で微笑んだ。その笑みを弥彦は危険なモノだと推察。

この女は油断も隙も無く、例え獲物が女、子供だろうと見境なく狩りにくる。その結果が日高梓という少女の犠牲だ。忘れるものか。

「そんなことはどうでもいいでしょう。まさか、またあなたは俺のプライベートにまで干渉するつもりか　　犠牲者を出すようなことはもうたくさんだ！」

「そう怒鳴らないでください。冗談ですよ、弥彦くんの私生活にまでは我が社はなるべく干渉するつもりはありません。それに犠牲者なんて大袈裟ですよ。たかが『耳』が削がただけでしょう？あの女の子なんて名前でしたっけ、確か……」

ルーシーは懐から革張りの手帳を取り出すとパラパラと手帳のページをめくる。そしてふと手帳をめくる手が止まった。

「ああ、ありました。女の子のお名前は日高梓ちゃん。怪我を負った以降、住み慣れた町を家族共々離れ自然豊かな片田舎に引越し。現在は梓ちゃんのみ家族と離れて障害者支援学校の寄宿舎で生活ですか」

弥彦はルーシーの言葉に耳を疑った。どうして日高梓に関する事細かな詳細情報がルーシーの手元にあるのか。

弥彦はあの少女に対して罪滅ぼしのひとつもできずに、小学校のお別れ会で見送ることもできずにいた。ましてや彼女との最期の思い出が弥彦が奉莉への一方的な暴力の振るった場面しかない。

奉莉を弥彦の暴力から身を挺して守ろうと梓は勇気を振り絞り泣きながら両手を広げて弥彦の前に立ち塞がった。あの時の梓の悲痛な顔は胸に迫るものがあった。

そんな強烈で最悪な最期だったので弥彦は梓の引越し先の住所や彼女がいまどうしているのかも知らない。いや、知ることを恐れていたのかもしれない。

彼女は現在、幸せであるのだろうか？

「なんであんたが梓のことをそんなに詳しいのかは訊かない……だけれどな、もう彼女には関わるな。あの子の人生を狂わせるのはもうやめてくれ」

「人生を狂わせる？とんでもない！弥彦くん。あなたはひとつ勘違いをしていますよ」

「勘違い？」

「そうです。そもそも我が社はあなたにしか興味はありません。あの女の子は『偶然』弥彦くんという大きな台風に巻き込まれただけ。台風の目に、その中心に居るのはあなたなんですよ、弥彦くん。あなたががむしゃらに事態を引つ掻き回せば回すほど、どんどん台風は勢力を上げて周りを巻き込む」

「なにを言っているんだ。あんたは」

まるでルーシーの言葉を理解出来ない弥彦は困惑する。否、理解したら弥彦の中にある大切な何か崩れそうな気がした。この女の言葉に耳をすませてはいけない。

「わかりませんか？それなら弥彦くんにとって最も身近なことで説

明しましょうか。 『今回』の件もあなたが中心に居る、という事ですよ」

「そんなことはずっと前から知ってるんだよ！つまり、あれか。あなたは俺を周りに不幸を、それもとびつきの災厄をもたらす台風だと言いたいんだろ」

ルーシーはその通り、と頷いた。もうこの女には付き合いきれない、と弥彦は留めていた足を踏み出した。

「公園に戻ります。こんなところで油を売りすぎた。彼女が心配する。くれぐれも公園には近付かないで下さい」

「彼女？やっぱり、女の子を待たせているんじゃないですか。それは不味いですよ。弥彦くんに関わった女の子はみんな不幸に遭っちゃいますからね！」

「黙れっ！」

「心配はいりません、大丈夫です。我が社はたとえ災厄を振りまくような人材でも、その実力が確かなら我が社は快くあなたを迎え入れます。その実力に相応しい褒賞を与えます。待遇も地位も金も女もすべて、弥彦くんのモノです！」

「……………」

もう何も言つまい。ケラケラと笑い声をあげるルーシーを無視して弥彦は踵を返し駆け足で公園に向かった。まるでルーシーから逃げ出すように。

俺は悪宇商会に加入するとは言ったがその心まで悪宇商会に捧げるとは言っていない。

胸の中でそう自分にいいきかせ、いいきかせて不愉快な感情を拭い捨てる。

公園の入り口に戻ることに熱々だった缶はすっかりと冷めて生温くなっていた。今から戻ってまた買い直そうか、と躊躇い迷ったが小さい公園の敷地面積ゆえに弥彦の姿を円堂円がしっかりと見つめていることに弥彦は気が付いた。

円の瞳は弥彦を真っ直ぐに見つめどこか哀しげな表情を浮かべていた。そして円は弥彦を手招きをしてこちらに来るように促す。

この際逃げ出してしまうおうかという思考が頭をよぎったがまた逃げ出すのかと弥彦の胸の内誰かが反対した。それはきつと弥彦のかけなしのプライドだったのかもしれない。

弥彦は円の傍にゆっくりと歩み寄りベンチに座る円のすぐ隣に腰を降ろした。なんだかひどく情けない気がした。

「おかえりなさい。遅かったじゃない。飲み物は買えたの？」

「ああ。すっかり冷えてしまったけどな、ごめんな。やっぱり俺、買い直してくるよ」

席を立とうとベンチから立ち上がった弥彦を円が片腕で制してとどめた。その必要は無い、と円は言葉で付け加えた。弥彦は再びベンチの背もたれに背をあずけて腰を降ろすと申し訳無さそうに円に買ってきたホットココアを手渡した。

弥彦からココアを受け取った円は「ありがと」と一言礼を言ってから缶のプルトップに指を引っ掛けて缶のフタを開けた。そして一口飲んでから「おいしい」と言葉を漏らす。

それを横目で見ていた弥彦は無理して飲まなくてもいいのにな、と

思った。余計な気を子供である円につかわせて自分はいつたい何をしているのだろうか。

とても居た堪れない気分になった弥彦は生温いコーヒーに口をつけると天高く頭上で輝く空の星を見上げた。

「あのね、弥彦。実はあなたが自販機に買出しに行っている間にいけないとは思ったのだけれどあなたから借りたコートのポケットからこれを見つけたの」

円から差し出されたモノを頭上からそれへと弥彦は視線を移して目を向けた。そして差し出されたモノを見て口に含んでいたコーヒーを噴出した。

ゴボゴボと咳き込む弥彦の背中を心配そうに円が擦りひとまず弥彦が落ち着くのを待った。弥彦が落ち着くと円は胸を撫で下ろし先ほどの質問の続きをする。

「これって名刺よね？」

「そうだな」

「なんで小学一年生のあなたが名刺なんて持っているの？」

「いいじゃないか、名刺の一枚や二枚ぐらい持っけていても。最近、うちの学校で流行ってんだよ、名刺交換。洒落ているだろ」

とっさに思いついた苦し紛れの嘘を吐く弥彦。どこの小学校で名刺交換なんて大人の社交辞令が流行っているのか弥彦自身が知りたいくらいである。

円はじーっと弥彦の瞳を覗き込むとクスリと微笑み口を開いた。

「嘘ね」

ただの一言で弥彦の嘘を見破り一蹴する。弥彦の背中に冷や汗が流れた。とても珍しい円のニッコリと微笑んだ顔がなんだか怖いと感じる。

「『ルーシー・メイ』なんてカタカナ文字で横文字な名前を書くお友達があなたの学校にいるのかしら？」

「ああ。実はそいつ帰国子女なんだよ。たしか両親がアジア系とアメリカのハーフだったかな……」

「ふーん。じゃあこの『悪宇商会』っていうのはあの『悪宇商会』かしら？」

「そうそうあの悪宇商会って……おまえ、悪宇商会を知っているのか？」

「もちろん。知っているわ」

「まさか、そんなはずがあるわけない」

「どうして？わたしが悪宇商会を知っているのは可笑的い？」

「可笑しいもなにも円は表世界の人間で……あっ！」

「気がついたかしら？わたしとあなたが初めて会ったときからずーっとしていたあなたの勘違いに」

「《円堂》、円か」

「そう、正解。わたしはあなたと同じ裏十三家《円堂》につらなる者よ」

弥彦は乾いた笑い声を漏らし頭を抱えた。

裏十三家《円堂》ここ数年は表世界で活躍する表御三家が栄華を極め、その一方で裏世界で暗躍する裏十三家は衰退の一途を辿るなか唯一表の権力と融和して表世界に躍り出た一族。

この目の前にいる少女が《円堂》だというのなら、表世界だけでなく裏世界の事情にも精通している。そういうことなら合点がいく。彼女の言動にも嘘偽りは無い。

「わたし、最初にあなたに言ったわよね『責任、取りなさいよ』って。その意味をよく汲んでちょうだい。ただの《円堂》ならあなたが奉莉を危険な目に遭わせたことなんて知りえることはないでしょう?」

「どづいづことだ?」

「ただの《円堂》さんの御家おじけは親友である奉莉のご両親からきた連絡の情報でしか知りえない。『うちの娘が行方不明』『弥彦くんという少年と遊んでいた』この二つだけしか情報がないの」

人差し指と中指の二本の指を立てて円は説明を続ける。

「このふたつの情報からどうやったらあなたが奉莉を危険な目に遭わせたなんて確固たる真実を掴めるのかしら?ただ単に奉莉が家出した可能性や弥彦と別れた帰り道に誘拐に巻き込まれた、なんて可能性まで浮き上がってくるでしょう?疑い出したらキリがないわ」

「なるほど。話を続けてくれ」

「つまり、このふたつの情報以外にどうやって他の情報を掴むことができるのか？　はい、崩月弥彦くん。答えて」

「……情報屋、か？」

「そのとおり。わからない問題があるならまず考えることやめて答えを盗めばいい。つまりはその筋の専門家に訊き出したの。お金と
いう代償を支払ってね」

「理にかなっているな」

「まあね。でも、そんなことをしなくても奉莉のご両親が娘の捜索願を警察に提出したのはこちらで確認しているから天王寺奉莉の身辺調査とついでに崩月弥彦の身辺調査をすれば自ずと答えが導かれただけだね。それでも今日のあなたたちの行動記録すべて把握しているのよ」

「怖いことを言うな。それは《円堂》のお家芸みたいなものか？」

「半分正解で半分不正解。正しくは《円堂》と警察の力かしら。警察って世間では無能だとか汚職ばかりの税金泥棒とかいう認識があるけど、それは一部分だけであって実は結構やり手なの」

くすくすと微笑む円につられて弥彦も微笑んだ。つまりはこの円堂円にとっては崩月弥彦の一日の行動はまるで手に取るようにわかるということだ。

これが《円堂》自身の《崩月》とは違いなかなか灰汁あくが濃い一族である。

「訊くのが怖いんだが、俺が悪宇商会に加入する、という情報も持っていたりするのか？」

「もちろん。《崩月》があのお悪宇商会に加入するっていう情報はいちやく《円堂》が手に入れたわ」

「お、おっかねえー」

弥彦は身の毛が総立ちするほどに全身に寒気を感じていた。こつまで個人情報筒抜けであると落ち着いて居られる場所などこの世にはないのではないのかとさえ思ってしまう。

このどこまでも精通した情報網があれば現在の奉莉の居場所がわかるのではないのか？そんな期待を胸に抱きつつ弥彦は円に質問。

「まさか、奉莉のいる居場所まで掴んでいるのか？」

この質問に円は顔を伏せると力なく首を横に振った。それは否定の意味。

「残念だけどそれはわからない。あの《九鳳院》が一枚も二枚も噛んでいるこの件に関してはいくら《円堂》といえど手は出せない」

「そうか。《円堂》も《崩月》と同じか。いったい《九鳳院》ってなんなんだろうな。裏十三家さえ手が出せない存在。まるで神様だよな」

円の答えを聞いてどこか安心していている弥彦がいた。ここで奉莉の情報まで掴んでいるなんて言われてしまえば自分は何のために悪宇商会に身売りしたのかわからなくなってしまふから。

なんて情けないんだ、俺は

そんな愚劣な思考が頭をよぎった自身を呪いたくなった。奉莉の情報が入ることを優先するほうが大切なのに自身の身の保身を優先するとは愚の骨頂ではないのか。

むしろいまは自分だけしか奉莉に関する情報を握っている。そして彼女を《九鳳院》から救い出せるのは自分だけしかないのだと考えるところ。すべての責は弥彦自身ひとりでおうべきだ。

自分の隣で座る小さな存在の少女は暗い表情で俯いたまま口を閉ざしてしまった。ここはひとつ景気づけに気合を入れよう。

「……だけどな、そんな神様だつて間違いを犯した。それも誘拐つていう大罪だ。許せねえ！目の前で獲物を搔つ攫われた鬼の恨みは怖いんだ。俺が一発とはいわずに二発三発おみまいして殴り飛ばしてくるから安心しな」

「まさか、九鳳院家相手に殴り込みをするつもりなの？冗談じゃすまないわよ」

「冗談で済むなら笑い飛ばすさ。けどな、俺は真剣だ」

「奉莉の居場所はわかっているの？」

「そのための悪宇商会だ。幸か不幸か九鳳院の護衛に悪宇商会の戦鬪屋がいてな。実はそいつと顔見知りなんだよ、俺は」

弥彦の真剣な瞳から嘘ではないと円は判断。既に覚悟は決まっている。腹は据えたと彼の瞳が訴えているのだ。

この男は大馬鹿だ。それも気持ちのいいぐらいの救いのない馬鹿。たったひとりでひとりの少女のために命を賭そうとしている。わたしが嫉妬を覚えてしまっぐらいに

「ほんとうに出鱈目で呆れた男ね。コトが出鱈目すぎて笑っちゃうわ。もう一度訊くけど本気？」

「男に二言はない」

「……そっか」

この男は立ち止らない。一度決めた志は揺るがない。逆境の地に立つてこそ真価を発揮する。これが崩月弥彦なのか。

弥彦は腰掛けていたベンチから立ち上がると円を公園に残して歩みだした。

彼の背中とはとても頼りになる男の背中とは言えないけれども円にとってはどこの男よりも誰よりも応援したくなる背中だった。

男の子ってほんとうに馬鹿なんだから格好つけすぎ

円は苦笑すると今にも公園の敷地内から出て行くこととする少年に最期の檄を飛ばす。

「弥彦ッ！わたしの分も殴り飛ばしてこないと承知しないから！絶対！」

少年は振り返ることもせず片手を振って円に応えた。

もしかしたらこれが彼の姿の見納めかもしれないのに円はどこかでアイツならやってくれと強く信じていた。

誰も居なくなつた小さな公園。そこにひとり取り残された少女は帰りの帰路につくために乗つて来た自転車の椅子に跨りペダルに両脚を置いた。

深夜の夜風に身を凍えさせながらコートの際を立てるとハツと思ひ出したように呟いた。

「…………彼のコート、借りたまま返しそびれちゃった」

最期の最期に忘れ物をしていった少年にクスクスと少女は笑うと力強く自転車のペダルを漕ぎ始めた。

少年の残したコートに身体を包みながら。

第三十二話 決戦の狼煙（後書き）

いかがでしたでしょうか。

円堂円というキャラクターが別人すぎて頭を抱えて悶えてしまいました。

『電波的な彼女』の世界をこちらにひきこむのはとても難しいです。『紅』の世界観でさえ崩壊しているのに二つの作品を一緒にするのは冒険のしすぎだったでしょうか。

電波のキャラはやっぱり出演させるのは禁じ手だったような気がします。

そのところの指摘などをご感想でいただけると大変作者が喜びますのでどうかご感想の程をお願いします。

第三十三話 常識の逸脱

時刻は二十四時を回るところ。あと数刻で日付が変わる。

今日という一日でいったいどれほどの暴力を振るわれ、蹴られ、殴られ、蹴り、殴り、血を流したことだろう。

いったいどれほどの自分の尊厳を失くしてしまったのだろう。

流した血は戻らない。失くしたものは二度と返ってはこない。

家族の約束も絆も愛情も今日という二度と忘れられない厄日によって失くしてしまったのだろうか。

寒気に身を凍えさせ震える小さな両肩にはいったいどれほどの責任と罪が押し掛かっているのだろう。

遠い日に交わした、いくつもの約束はすべてが自分には意味をなさず自ら枷となるものを無視して走り出した。

素足の足裏から伝わる冷たくゴツゴツとした肌触りと感触。

身も心も冷酷に冷え切らせてしまう錯覚を覚える。そして、いま自分の胸の内にあるのは抑えることのできない憎しみと殺意。

胸の中にあるものをぶちまける相手はただ、ひとり。

住宅街の横にめんした一本の車道。そこに一台だけ停車している乗用車の助手席のドアを開ける。

車内は暖房が効いていたので内包されていた暖かな空気が外の冷たい外気と混じり外へと逃げ出す。

「随分と早く戻ってきましたね。用事はもう済みましたか？」

「ええ、おかげさまで。お待たせしてすみませんでした」

「いえいえ。こちらは待つている間に晚い夕食をいただいていたので……」

左手でお腹を軽く擦りルーシー・メイは微笑んだ。

「それでは出発しましょうか。時間もあまりないことですし」

「お願いします」

ルーシーに軽く頭を下げてから弥彦は助手席のドアを閉め助手席に腰を下ろす。安全の為にシートベルトを締める。

先ほどドアを開けたときに車内に入れ替わった空気が車の暖房で冷たいものから温かいものへと徐々に侵食されていく。

ドアが閉まったことを確認するとルーシーはアクセルペダルをゆっくりと踏み込む。車は落ち着いた滑らかな動きで進みだす。

住宅街を抜けて大きな国道に車が入ると時間帯が晚いせいか車道はまばらに片手で数えるぐらいの車だけが走行している。

前方のフロントガラスに薄っすらと映る自分の強張った表情をぼんやりと眺めながら弥彦は口を開いた。

「目的地まではどれくらいで着くんですか？」

「だいたい一時間くらいです」

思っていたより短い時間で目的地に到着するようで弥彦は安心する。車内に備え付けられたデジタル表示の時計に弥彦は目を向ける。目的地に到着する頃には日付は変わりそうだ。

「それで《鉄腕》の奴はいつたいてどこにいるんですか」

「ホテルですよ」

「それって《鉄腕》の宿泊地じゃないですよね」

車の進む方角から考えて都心に向かっているので弥彦は焦った。都心には有り余るほどのビジネスホテルから高級ホテル、またはラヴホテルまでの宿泊地が数多の数で存在する。誘拐された天王寺奉莉を追っているのに車の目的地が《鉄腕》の宿泊地では弥彦の求める場所とはまったく違う。

「安心してください。《鉄腕》は現在も護衛の作中中です。これから向かう先はわたしでも足を踏み入れるのは躊躇うような場所ですから」

苦笑するルーシーの横顔に弥彦は首を傾げる。

どうにも腑に落ちないルーシーの様子に焦りよりも疑いの気持ちが高濃厚。

「いったい、この車はどんなホテルに向かっているんですか」

「それはですね。恋人たちが一夜を共にする憩いの場ラヴホテルですよ」

「えっ!?!」

呆れを通り越して弥彦は驚愕する。ラヴホテルならばルーシーが踏み入ることに躊躇う理由も納得できる。

どうしてそんな場違いなところで《鉄腕》はいるのであるだろうか？

現在、護衛の身である彼の主人、九鳳院竜士が居る場所がラヴホテルならば奉莉もその場に居る。これが意味することはなんだろうか？疑問に対する答えを思考のなかで自ら導き出した途端に弥彦の胸の内に胸糞悪い感情が渦巻く。

交差点に差し掛かったところで大きく左にハンドルをきりながら弥

彦の様子をルーシーが笑った。

「……っていうのは冗談です。ほんとうは国内でも屈指の最高級ホテル《オベロン》ですよ」

自分がルーシーにからかわれたことに気付いた弥彦は鋭い瞳で彼女を睨みつける。

「悪い冗談はやめてください」

「弥彦くんが慌てふためく様子がつい可笑しかったものでつい、ね」

「つい、ね。じゃないですよ。だいの大人が子供に対して悪ふざけにも程がある」

「でもあなたがわたしの言ったことには嘘はないんですよ、弥彦くん」

正面を見つめながら運転と会話を器用にこなすルーシー。

車のスピードを緩めながらいつも持ち歩いている分厚い革張りの手帳を右手に携える。もちろん左手でハンドルを握ったままの片手運転だ。

「弥彦くんはご存知ですか？九鳳院家に関するこんな噂話を……」

ルーシーは器用な手さばきで片手で運転しながら手帳に目をやりつつ弥彦に話を語りだす。

「この国のどこかに九鳳院家が管理する秘境があるらしんですよ」

「それはあるでしょう。表御三家の《九鳳院》だ。秘境のひとつやふたつあってもおかしくないでしょ」

国を代表する大財閥ともなればその膨大な資産で秘境ぐらい開拓できるであろう。

九鳳院家の一族しか行くことができないプライベートの未開の地。別にあつてもなんら不思議ではない。

つまらない話に弥彦の興味が失せ始める。その様子にルーシーは慌てて訂正を付け足す。

「そ、それがですね。ただの秘境ではないんです。そこは九鳳院家の女だけが住まう場所。彼女たちは生まれた時から世間から密かに隔離され幽閉される。つまりは牢獄らしいですよ。その名を《奥ノ院》というみたいです」

「おくのいん？」

聞き慣れない単語に弥彦は首を傾げる。

一族の女だけを選別して生まれたときから隔離するなど女たちからしたらいい迷惑だし自由を奪うほかのなにものでもないな、と弥彦は思った。

しかし、ルーシーの話が本当だと仮定するのであれば一族の女だけを世間から密かに隔離する理由が弥彦には浮かばなかった。

「まさかそんなところがあるわけがない。現に俺は九鳳院紫という少女と会っている」

そうなのだ。弥彦は九鳳院家の女。それも少女である九鳳院紫と五月雨荘で会っている。

幽閉されているはずである紫が自分と遭遇していることを踏まえる

と、どうもルーシーの話は疑わしい。まるでオカルトの域での会話だ。そもそも噂話ではあるが。

「まあ、弥彦くんが信じられないというのも頷けます。わたしだって最初は信じられませんでした」

「じゃあルーシーさんは《奥ノ院》が本当に存在するともいえるんですか」

「ええ、断言します。ありますよ《奥ノ院》は」

自信を持って頷き断言するルーシーの様子に弥彦は呆れると視線を流れる外の景色に移した。

車が都心に近付くにつれて車窓から眺める風景は住宅街から一変して眠ることのない高層ビル街。ネオンの煌めく大人の街へと差し掛かっていった。

「あなたが空絵事を信じるような人だとは思っていませんでした。もつと現実的な人かと……」

「その可哀想な人を見る目はやめてください。わたしだって人間です。それも女性なんですから空絵事を信じたりもします」

なんで女性と付け加えたのか理解できないが弥彦はぼんやりと疲れの様子でルーシーに視線を戻す。

「じゃあ仮に《奥ノ院》があると仮定して話まずけど、一族の女だけを隔離する理由はなんなんですか。それも生まれたときから世間から密かに隔離するなんて異常なことに対する理由を説明してくださいよ」

「それは簡単な理由です。九鳳院家の人間は、同族同士でしか子孫を残せないからですよ。《崩月》である弥彦くんもご存知なのではありませんか？」

弥彦は耳を疑った。そんな九鳳院家の秘事など生まれてこのかた聞いた覚えがない。

ルーシーの口ぶりからすると《奥ノ院》の噂話とは違い、この話題は嘘偽りのない真実。

「同族同士でしか子孫が残せないって……つまりは」

「そう、近親相姦ですね。それでしか子孫は繁栄することはできません」

近親相姦。それは親子、兄弟姉妹などの血縁関係の近い男女の間で性的交渉が行われることを意味する。これは禁忌だ。

世間一般の常識では近親相姦は禁忌に指定される。禁忌を犯してまでも子孫繁栄のために行われる九鳳院家の秘事。

自分の想像以上の驚愕に弥彦は頭に強い衝撃を受けた。

倫理、道徳、法律、常識、人間としての尊厳。弥彦の常識で塗り固められた世界が音を立てて崩壊する。

こんなことはおかしい。異常なんだ。九鳳院家は狂っているのか。目頭を左手で押さえて弥彦は目眩を耐える。

「大丈夫ですか。もしかして、ご存知なかった？」

「あ、ああ。生憎と俺は裏世界の事情に疎くてですね。いまあなたから初めて聞きましたよ」

弥彦の様子に今度はルーシーが呆れた。

呆れられてもいい。馬鹿にされてもいい。けどこんなことは間違っているんじゃないのか？

そう思う弥彦だけが間違っているのだろうか。

「物を知らないのは仕方がないですけど、弥彦くんはあの崩月家の人間なんですからそれぐらいは常識で知っているものだと思っただんですが……」

「あなたのなかで常識のものさしを決めな^{おれ}いでくださいよ。崩月だつて知らないことくらいある。むしろ俺の場合は知らされていないといったほうがいいでしょうけどね」

世の中は知らないこと、理解できないもので満ち溢れている。自分の身の周りさえも完全には知覚できないというのに世の中などと有象無象を対象とするならばそれは完全に理解するなど不可能だ。火遊びの過ぎる不肖な息子に祖父と母は危険度の高い知識はわざと教えなかったのだらう。裏世界なんて混沌の秩序しか存在しない世界で生きているのだ。当然の処置であらう。

「まあこれは世間で云う重要機密ですから弥彦くんが存じ上げないのも理解できます。しかし、弥彦くんって親御さんに信用ないんですね。心中お察しします」

「そういうの大きなお世話です」

「これは失礼。さきほどのお話の続きですが九鳳院家はその遺傳的欠陥を抱えているせいで近親相姦でしか子孫を残す術がない。しかし、これは世間一般の道徳や倫理、常識を大きく逸脱する行為です。ここまでは理解できていますか？」

「ちゃんと理解していますよ。子供だからって噛み砕いて説明しなくても問題ありません」

「これまた失礼を」

ルーシーは弥彦に一言謝る。弥彦はそれを受け流し車の助手席側の窓ガラスを下げた。

空いた窓の隙間から外気の冷たい風が吹き込み車内の空気を入れ替えてくれる。それと同時に弥彦はくしゃみをひとつ。

子供相手にそれもまだ小学一年生の七歳児を相手に近親相姦やら道徳やら倫理などを説明をするルーシーの立場からしたら色々と気難しい箇所があるのだろうな、と鼻をすすりながら弥彦は思った。

「世間に国を代表する大財閥の一族が裏で密かに近親相姦なんて禁忌を犯していることが周知の事実となればいくら九鳳院家といえど組織の転覆は逃れられないでしょう」

「でしょうね。とんでもないスキャンダルになってマスコミのいい餌食ですよ」

弥彦の言葉にルーシーは頷き話しを続ける。

「では一族はこのまま衰退するしかないのか、なにか手を打つ手段があるはずだ、と先代の九鳳院家当主たちは思ったのでしょうか。昔なら近親相姦などとそう珍しくもなかった。でも現代は違う。一般大衆は常識を逸脱したものを極端に嫌い排除する」

大通りの交差点にある赤信号につかまり車は一時停止。

「そこで九鳳院家は《奥ノ院》を、自分達だけの世界を創り出した

んです。そこは常識も世間のしがらみもない、九鳳院家だけの特別な聖地を」

信号が赤から青に変わりルーシーはアクセルを踏み車を加速。

「九鳳院家の一族は《奥ノ院》で生を受ける。生まれた子供が男であれば《奥ノ院》から釈放。下界で大財閥《九鳳院》として恥じないように教育されて生活を始めます。そして成人を迎えたらまた《奥ノ院》に舞い戻り自分の姉妹たちと交わり子供を授かる」

それは九鳳院家では当たり前の規律。世間では禁忌でも《奥ノ院》では常識の掟。

掟を破った者はいつたいどうなるのだろうか。九鳳院紫は掟を破ったのだろうか。

弥彦は一日限りの短い間だけ友人あつた少女に思いを馳せる。

「《奥ノ院》で生まれた子供が女であればその子は一生を《奥ノ院》という牢獄で生活をする。いずれ戻ってくる自分の兄弟と交わるためだけに生かされて……」

「そんな馬鹿な話はないですよ！だってそんなのあまりにも理不尽だ。生まれたときの性別だけで自分の運命が既に決まっているなんておかしい！」

《奥ノ院》のあまりにも理解不能な規律に怒りで興奮する弥彦にルーシーは「やさしいですね」と微笑んだ。

「わたしは《奥ノ院》を牢獄と例えましたが、噂によると一種の楽園みたいですよ」

「楽園？」

あまりにも不相応な単語に弥彦の興奮は静まり平常心が戻ってくる。

「弥彦くんは自分が知覚できる、見る、触る、知ることができる範囲を世界だと仮定できると思いませんか？」

「それは……」

「《奥ノ院》で生まれた女は幼少の頃、当たり前ですが赤ん坊の頃から《奥ノ院》で生きることや兄弟に奉仕することを徹底的にそれも疑問すら抱かせないように教育されます。それはいうなれば彼女達の世界は《奥ノ院》という一種のシステムの循環の中でしかない」

その通りだろう。人間という生き物は周りから与えられる様々な知識を蓄えることにより個という自分を確立し、全という自分が知覚できる範囲を世界とする。

例えば、オオカミに育てられた少女の話聞いたことはないだろうか。

赤ん坊の頃から少女は疑問すら抱かずに森の奥でオオカミに育てられ、オオカミとして育った。

もちろん、人間の言葉は発することはできず、四肢を動物のように地に這い四足歩行をする。そして獲物を狩り生肉を貪る。少女は紛れもなくオオカミとして育ったのだ。

生まれた環境が違っただけでこうも個人が世界が変わる。個人で知覚できる世界などそれくらいでしかない。いくらでも塗り替える。

「《奥ノ院》は九鳳院家の禁忌の地。一族の者以外が訪れれば近衛隊に消されます。もちろん、外部に《奥ノ院》の情報を漏洩した者の末路も同様です。ですが、《奥ノ院》で住まう女達は一族にとっ

ての子孫を残すための財産として、とても丁重に扱われます」

「だけど丁重に扱われたぐらいで楽園とはいえないんじゃないんですか」

「そうですね？想像してみてください。完全に統治された争いのない世界を。そこその自由があつて周りは自分を丁重に扱ってくれる。想像してみてください。弥彦くんの世界を。競争し争い、ひとつの物を奪い合い、お互いに殺し合う。さて、どちらの世界が楽園でしょうか？」

「そんなの……」

前者に決まっている。迷う余地すらない。だけどそれは楽園とは呼んでいいのだろうか。

楽園とは楽しい園と書く。楽しいとは幸福と同意義ではないか。個人の主観で幸福が変わるだろう。

人は誰しもが幸福になりたい。もし幸福になる方法が存在するならば実践してもいいだろう。

では奥ノ院で暮らす女たちにとって奥ノ院は楽園たりえるだろうか？

「楽園、なんだろうな」

「理解していただけたようですね」

ルーシーは満足そうに頷くと自分のコートに革張りの手帳を仕舞い右手をハンドルに乗せる。

両手でハンドルを握りルーシーは運転に集中しだした。ルーシーの運転する姿を横目に弥彦は質問。

「あなたは噂話と称したけど《奥ノ院》は本当にある気がします。でも、それがこれからいく目的地とどのような関係があるんですか。あなたは先ほど冗談で高級ホテルをラブホテルと嘘をついた。だけどあなたはあながち嘘ではないと言った。いったいどういう意味なんでしょうか？」

「極論ですけどラブホテルとは男女の性的交渉をする場所だとわたしは思っています」

「まあそうなんでしょうね。行った事ないのでわかりませんが」

弥彦の曖昧な応えにルーシーはふふつと小さく笑う。

「ところで弥彦くんは我が社の《鉄腕》が護衛している人物をご存知ですか？」

「もちろん、忘れるはずがない。九鳳院竜士だったか」

「そのとおり。本来は近衛隊が護衛をしているはずである九鳳院家の御曹司が《悪宇商会》^{わがしや}に護衛の依頼を受注しました。表御三家からのご依頼は初めてだったもので何か裏があるんじゃないか、と冷や汗物でした」

「で、実際は？」

「これといってなにもありませんでした。裏があるどころか大枚の大金をお支払いいただき我が社としてはこれからもご贖戻にしたいただきたいぐらいです」

「それは良かったですね」

「ええ、それはもう。 ですが、実は九鳳院竜士という人物は裏世界の児童買春業界で有名な人物でして」

「児童買春だつて！」

弥彦は身を乗り出してルーシーに詰め寄る。胸にシートベルトが食い込みそれ以上ルーシーに詰め寄るのを阻害する。

「お、落ち着いてください。そんなに強面な顔をなさらずに大人しく席に着いてください。運転の邪魔ですよ」

「すみませんでした」

弥彦はルーシーに促されるように大人しく席に着いた。ルーシーは安心した様子で小さく溜め息を吐くと再び、右手に手帳を携えて話を始める。

「えーっと、九鳳院竜士と。 ああ、ありました」

手帳のページを器用に右手の指を使ってめくる指が止まる。どうやら目的のページを見つけたようだ。

「竜士さんは九鳳院家の次男坊。 13歳の時に飛び級で大学を卒業していますね。容姿端麗、成績優秀、海外の社交界でもとても人気があるお方のようにです」

「へえ、あの男がね」

弥彦は素直に竜士を感嘆する。性格に問題あれど秀才であるのには

変わらない。

「ですが、これは表の世界での話。裏、つまりはわたしたちの評判ではなかなかエグイ性格をしていらっしやる」

「児童買春ですか？」

「そうです。九鳳院家の資産にものをいわせて少女を買い漁り犯しまくる。まだあります、犯すのに飽き足らず子供をなぐるのも大好きみたいです。なかなかの変態っぷりに感服しますよ」

「変態どころかただの強姦魔じゃねえかよッ！子供の両親は竜士になんにもしないのか、警察に相談したりしないのか！」

「警察は黙認です。少女たちの両親は竜士さんから謝礼として大金を貰っているので被害届は提出しません。まあ天下の九鳳院家相手に親たちは文句は言えないと思いますけど、自分達の生活が懸かっていますし黙って大金を戴くのが利口なのではないでしょうか」

「そんなの間違っている！親なら子供を守るのが当然だろ！」

「では訊きますが、なんの権力も力もない一般市民が九鳳院家に敵うとでも？子供の売春を口外すれば社会的に抹殺されて文句さえいふことも叶いません。それでも子供を守れと？」

「そ、それは……」

「今日の生活より明日の生活ですよ。世の中ずる賢く生きた者の勝ちです。強いものに屈服し弱いものはおこぼれにあずかる。それが現代社会です。感情だけではなにも解決できません。行動を伴うに

はそれにもあう力が必要なんですよ」

ルーシーにまったく反論すらできない自分を弥彦は呪った。むしろルーシーが正論すぎて反論の余地すら与えられない。

社会を生き抜くには強いものに頭を下げて、媚を売り、ずる賢く、他者を蹴落とし、生きるのが成功の秘訣。

ほんとうにそれが正しいのか。下げたくもない頭を下げて、周りの様子を伺い愛想を振りまく。そんなことでいいのだろうか。

いや、そんなことをしている人物を身近で知っている。それは自身自身に他ならない。

「弥彦くんのお友達が竜士さんに誘拐されたのはきつと彼に気に入られたのでしょう。今頃はベットの上でなにをされているのか……」

「まさか…そんな、はずは……」

「お友達の命は大丈夫でしょう。よかったですね、弥彦くん。放っておいてもそのうち帰って来ますよ」

「ち、違う……」

「弥彦くんが助けに行かずとも命の危険はなくお友達は帰って来ますよ。嬉しくないんですか」

「嬉しいとか、嬉しくないとか、そういう心の問題じゃないんだ！」

怒鳴り声を上げて横に薙ぎ払った弥彦の左手の拳が車の窓ガラスを粉碎する。

バラバラに砕け散ったガラスの破片が車内に舞い上がりルーシーに襲い掛かる。

突然の弥彦の奇行にルーシーは悲鳴を上げて急ブレーキを踏む。不幸中の幸いか深夜の車道は走行する車の台数が少なく、弥彦たちの車の後続車は突然急停止した弥彦たちにクラクションを鳴らし横を素通り。

「な、なんてことをするんですか！危うく交通事故になるところでしたよ！」

さすがのルーシーも弥彦の暴走に眉を吊り上げ怒鳴る。弥彦はそれを無視して受け流す。

「目的地はホテル《オベロン》でしたよね。俺はもうここで降ります」

「え、ちよつと弥彦くん？」

「送っていただいてありがとうございます。後は自分でなんとかします」

弥彦はドアを開くと地面に降り立った。現在地は高層ビル街の中心地。目的地のホテルまではそう遠くない距離であるはずだ。

道路の中心で立ち往生する乗用車と割れた窓ガラス。車から降りた近寄りがたい雰囲気の少年。

弥彦たちを遠巻きに都会の住人達が物珍しそうに見物している。深夜に夜遊びする若者達が大半で面白半分に弥彦たちを携帯のカメラで撮っている。

車を下車した弥彦を追うようにルーシーも慌てて車を下り弥彦に歩み寄った。

「ま、待って下さい。これを持って行ってください」

そういつてルーシーは弥彦に携帯電話を差し出した。弥彦はそれを受け取るとズボンの後ろポケットにしまう。都会の喧騒は深夜だというのに慌しく煩わしい。すっかり目立ってしまった弥彦とルーシーは最期に言葉を交わす。

「ホテルまではここから一直線です。弥彦さんの足なら3分もしないで辿り着けるでしょう」

「車、壊してしまつてすみませんでした」

「いいんですよ。窓ガラスの一枚や二枚。会社の経費でおろしますから。それよりお気をつけて行つて来てください。相手は九鳳院家。戦闘は間違えないでしょう。やるからには我が社の社員に恥じないようにブツ壊してきてくださいよ」

「もちろん。そのつもりです」

弥彦はルーシーに腰を折り頭を下げた。まさかこの女性にほんとうに感謝する日がくるとは思わなかった。

ルーシーは「お気をつけて」と言葉を付け加えると車に戻る。助手席の窓ガラスが割れてしまったから相当寒いだろうな、と弥彦は苦笑する。

運転席から手を振り別れのあいさつを伝えるルーシーに弥彦も手を振り返す。

あいさつが済んだ後、車は急発進。急加速で前進する車は瞬く間に弥彦の瞳から消え去った。

そして、車が消え去った方角から聞こえる爆発音。立ち昇る黒煙。突然の異常事態に弥彦を遠巻きに見物していた若者達は一斉にそれぞれに視線を向ける。弥彦も彼らにつられるように視線をそちらに向

ける。

弥彦が黒煙を視認するのと同時に後方からけたたましい高音のサイレン音が聞こえた。

とても嫌な胸騒ぎがした弥彦は道路から若者達が闊歩する歩道に駆け出す。

黒煙の立ち昇る場所はいったいどこだろう。いったいなにがあったのだろう。

溢れ出す好奇心と自分達に迫る非日常の体験。くすぶる好奇心に耐えられず若者達は走り出す。

彼女の手を引き走り出す。携帯電話を片手に走り出す。この先に待ち受ける刺激を求めて。

その集団のなかには既に崩月弥彦の姿はなかった。

第三十三話 常識の逸脱（後書き）

ご愛読いただきありがとうございます。
ご感想やご意見などお待ちしております。

第三十四話 父親は子の心を知らず

平和、といわれたら人はまず第一に何を想像するだろうか？

家族や友人または恋人と過ごす憩いの時間。

自分の趣味や好きなことに時間を惜しみなく費やすこと。

心配や揉め事がなく、穏やかに生きること。

戦争や紛争がなく世の中が規則的に循環すること。

人間ひとりの「平和」ひとつとってもいくつもの平和があるであろう。

崩月弥彦が望む平和とは自分のまわりで争いごとのない「普通」の生活があることだった。

朝、雀の鳴き声と共に目を覚まし布団から起床。朝稽古を祖父と行い、流した汗を井戸の水で洗い流す。家族と朝食を囲み家族団欒の時間を過ごす。小学校に登校し僅かな友人たちとのくだらない悪ふざけ。夕日が落ちかける頃、たまに道草をくいながらの下校。家に戻ったらまた稽古に励み汗を流す。一日の疲れを癒すように風呂に入る。そして一日を振り返りながら就寝。

それが弥彦にとっての「平和」。ごく当たり前の日常。普通の生活。穏やかな世界。

始まりあるものにはすべてのものに終わりがある。まさにその言葉のままに弥彦の平和は終わりを告げた。それも呆気なく、理不尽に我が国「日本」という国は小さな島国でありながら治安という基準を世界の他国と比べてみればそれは平和と呼ぶに相応しい穏やかな国だった。

戦争もなければ紛争もない。人々は飢えることを知らず資源も豊富で有り余る。子供たちは国が定めた義務教育で勉強に励む。まさに「平和」だったと思う。

それがいつのころからか国は悪いほうへ傾きだした。社会は歪み、人の心からはゆとりがなくなり、まるで深い深い闇の

淵に躓いて落ちていくように平和の代わりに悪が浮き彫りになったのはいつ頃からの話だろう。

深夜の高層ビル街。その中心地にある最高級ホテル《オベロン》。限られた特権階級の間人しか利用できない特別な土地。一般階級の民を退ける貴族達の宿泊地。争いとは無縁の平和な土地だと誰もが思うだろう。

しかし現実はず違った。ホテルから勢いよく立ち昇る黒煙、人々の助けを求める声と張り上げる甲高い悲鳴、身を震わせる爆発音、激しい雨音にも似た途切れることのない銃声、寒気に響くけたたましいパトカーのサイレン音、野次馬たちの興奮したはやしたてる声。

狂喜と歓声が入り混じり混沌としているその場はまさに戦場だった。テレビ画面の向こう側、映画のスクリーンの中でしかお目にかかることのできない戦争。正義も悪も法律も倫理も道徳などない。そこにあるのは人間たちと人間たちの殺し合い。

地上三十五階の建造物。都会の中心に堂々と天に伸びるように佇むそれは闇に潜む不気味で禍々しい塔にも見える。その一階ロビーで繰り広げられる激しい銃撃戦。

ホテルの周囲半径200メートルを警察の装甲車と警官隊とパトカーが隙間なく立ち並び一般人やマスコミなどの騒ぎを聞きつけ駆けつけた野次馬たちを戦場へと近寄せない。崩月弥彦もその例外ではなかった。

騒ぎを聞きつけた野次馬達のほとんどが深夜に暇を持て余して夜遊びをしている若者達だった。

ひとりの若者からひとりの友人へと連絡が渡り、そのまた友人から友人たちへと連絡が渡りまるで伝言ゲームのように若者達の情報網にこの騒ぎが火種からごうごうと燃え盛る炎が広がる勢いで広まった。

同じ事を繰り返すなにもない日常に暇を持て余し、刺激を求めて深夜の都会にくり出す若者達からしたらこの騒ぎはまさに至高のひととき。暇を潰す絶好の機会。非日常の世界へとくり出すチャンス。

ひとつの若者たちのグループがくすぶる好奇心と欲求に耐えられないのか限界を超えたのか、ホテルを包囲する警官隊に突然、雄叫びを上げながら突貫した。

邪魔だ！道を開ける！と麻薬にも似た高揚感に肉体を支配された若者達は警官隊との激しい殴り、蹴り、揉み合いとなる。

勇ましいというより愚かな行動。自ら望んで戦場におののこうとする若者達の思考が弥彦には理解できなかった。

警官隊に突貫する者達の思考が周りに伝染する。狂気は目に見えずとも人間の内側に必ず備わっているものでちよつと刺激をすれば導火線に火が灯りそれが爆発する。

彼らに続けと見物に決め込んでいた他の若者たちが警官隊に突貫。

ひとりの人間は個として狂気を備えているが、複数の集団となった人間たちは凶器となる。

暴徒と化した若者達に警棒と盾で応戦する警官隊。狂気に身を狂わせ平常心を失くし己自信を失っている若者達。

もうひとつの戦場と化したその場には女性の悲鳴と男達の怒鳴り声がかたまたまする。その様子を遠巻きからテレビカメラで全国に中継するマスコミたち。

憎悪、悲しみ、苦しみ、嫉み、狂気、悪意、人間の裏側にあるもの汚いものすべてがそこにはあった。まるで悪夢を垂れ流しで見せられているかのようにだった。

野次馬たちの真っ只中にいた弥彦は己の身の危険を感じてその場から離れようと行動を開始する。だが動き出すのが遅かった。

暴徒の集団にその身を揉みくちやにされ、素足を冷たくて重い靴で踏まれ、容赦なく突き飛ばされたのだ。

冷たいアスファルトの地面に頭から倒れこみ頬を擦り付けられる。何回も何回も暴徒たちに肉体のあちらこちらを踏みつけられ身動きひとつ取ることの出来ない状態だった。

小さな男の子が地面に横たわっていることが視界に入らないのか、それとも自分達が踏みつけているものをゴミだとも思っているの

か暴徒たちは弥彦にお構い無しにそのまま暴れ続ける。

弥彦はその場で、できるだけ身を屈め、両手で頭を押さえて縮こまる。身動きが取れないならせめてもと肉体を守ることに専念することにしたのだ。

目を閉じれば暴徒の騒がしい怒号のほかにホテルの方角から聞こえてくる鳴りやまない銃声。そしてひとときわ大きい爆発音に続いて何かが崩れ落ちる音。

弥彦はふと顔を上げて視線を音のしたほうに向けたがそれが不味かった。伏せていた頭を顎の下から思いつきり偶然にも暴徒に蹴り上げられたのだ。弥彦の視界はその衝撃に白と黒に点滅したと思っただら真つ暗となった。

自分の身にいつたいなにが起きたのか理解する余裕もなく弥彦の肉体は両手両脚を広げた大の字で空を見上げるように仰向けになる。

その後も容赦なく弥彦の顔に腹に暴徒の足蹴が襲い掛かり弥彦の肉体を容赦なく蝕む。《鉄腕》から受けた深手の手傷が再発して頭が割れそうに痛かった。

あまりの激痛に意識が遠退きそうになり暗転する視界が弥彦の精神を恐怖で埋め尽くす。

…… ああ、もう、疲れた。

なにもかも投げ出して、嫌なことから目を逸らし、逃げ出したくない。弥彦の根源にある一番弱い部分。誰にも触れてもらいたくない汚点。

それが弥彦の表面に表れようとした瞬間、肉体に温かな浮遊感を弥彦は感じた。集団の暴徒たちから誰かが自分を抱えて離れようとしている。

何処の誰だかは知らないが自分をあの悪夢から救ってくれようとしている。自分の服の生地越しに感じる人間の温もり、頭上から聞こえてくる荒い息遣い。遠退く暴徒たちの怒号。

暴徒達から十分に距離をとり安全なところ、ビルとビルの間にある人通りが少ない道路に運び込まれた弥彦はビルの壁を背にゆっくり

と地面に座らせられた。

「大丈夫か？ 意識はあるか？」

弥彦の頬を軽く叩き、意識の有無を確認する声。優しい声。

自分に呼びかける声を聞き、弥彦は目蓋をゆっくりと開いた。暗転していた視界がうつすらと都会の照明の光を捉えて徐々に弥彦の視界に生気の光が灯る。

体中が軋み痛みに悲鳴を上げている。全身のいたるところに青い痣、打撲の証。口内には血の味が広がる。

「……ああ……うあ……ん……」

なんと情けない返事しか返すことのできないほど弥彦は重症だった。

まだ微かに霞む視界に自分を助け出してくれた人物の姿を映す。まず始めに目に付いたのは真っ黒な黒髪、それから鋭く正義感の強そうな眼元、自分を心配する黒い瞳。

弥彦を助けてくれた人物は壮年の男性だった。それもなかなか貫禄のある人物だ。

「……よかった。いまから近場にある病院まで君を運ぶ。もうすこしだけ、頑張れるな？」

男性はゴツゴツとした大きな左手を弥彦の頭にのせて優しく撫でた。とても暖かい、父親のような安心できる優しい手。

ふと弥彦の瞳から一筋の涙が頬を流れた。それは自分の脆弱な心の限界が近付いていることを否応なしに感じさせる。

なんて脆い心。なんて弱い肉体。なんて軟弱な自分。今、此处で頷いてしまえば自分はこの場から逃げ出してしまふ。天王寺奉莉を置

いて、すぐ目の前に彼女がいるというのに逃げ出そうというのか。それは許さない。それだけは許さない。弥彦は自分にそう言い聞かせて弱々しく首を横に振った。

「どうした？ 君はこんなにも傷ついているのになにを嫌がっているんだ。このままじゃ、君は本当に取り返しのつかないことになるんだぞ」

「……だめ……」

「うん？」

男性は弥彦の小さく擦れた声を聞き取るために口元に耳を近づけた。

「……だめ、なんだ」

どうにか喉に力が戻って来た弥彦は途切れ途切れに言葉をつむいだ。

「あそこに、あの場所に、あいつがいるんだ」

「あいつ？」

不思議そうに目で問いかける男性に弥彦は頷く。

「いっぱい、いっぱいの人たちに俺は迷惑をかけた。家族との約束を破って家を飛び出して、いっぱい心配をかけて、それでも、あいつとの約束だけは……」

あいつとの約束。天王寺奉莉との初めて交わした約束。彼女に降り掛かる悪意から守ると二度と傷つけないと誓った。

あの危なっかしくて、口うるさくて、負けず嫌いで、か弱くて、可憐で、笑顔が素敵で、健気な小さな小さな友人。

あの少女を守ると決めた。そう心に誓ったはずなんだ。

「俺、全然だめで、弱くて、弱虫で、たくさん稽古したって守れなくて、いつも、あいつの傍にいる、けど……」

「……けど、なんだ？」

「あいつのこと、なんにもわかっていなかった。わかるうとしなかった……」

冬の寒さのせいか、それとも自分に対しての不甲斐無さのせいか身体が震え、歯が噛み合わない、唇が震える。

「自分のこと、後ろめたい事、うちの家のこと、ぜんぶ、あいつには話していなかった、話すのが怖かった……」

あのと、五月雨荘で突然に打ち明けた秘密。殺しの家系、呪われた一族。化け物の巣窟。

「俺は、あいつに、嫌われたと思った、否定されたと思った、裏切られたと思った。けど、それは俺の弱い心の問題であって、あいつの問題じゃない、関係ないんだ。あいつが、奉莉が、俺のことをどう思おうと俺はいつもどおり彼女に接すればよかったんだ。守ってみせればよかったんだ」

五月雨荘での《鉄腕》との戦闘。何故、弥彦は全力で闘わなかったのか？ 何故、《崩月》の戦鬼の力に頼らなかったのか？

何故ならそれは弥彦自身が戦鬼の力を化け物になることを拒んだか

ら。あの時、あの場所で、自分のすぐ背中の方には彼女が居たから。真実を知ってしまった天王寺奉莉が居たから。でも、それでも《鉄腕》との戦闘にわずかな勝利の可能性があったのなら、奉莉を守ることが出来たのであるのなら迷わずに戦鬼の力に頼ればよかったのだ。

戦鬼の力を使用することに躊躇ったのは弥彦の弱い心、奉莉にこれ以上離れて欲しくないという弥彦の防衛線。

でも、それは弥彦自身の、自分だけの問題であって奉莉の問題ではない。彼女が自分のことを拒絶しようとそれは彼女の心の問題であって弥彦には関係がないのだ。

自分が望む気持ち奉莉が抱いてくれなくてもそれは自分がいつまでも悩むべきことではないのだ。

それが天王寺奉莉に対する崩月弥彦の答え。

自己完結した思考ほど脆いものはない。誰かがそつと、そいつにそれは違うんだよ、と教えてあげればいいのだ。優しく、教えてあげればいい。

弥彦はそれを自分だけで気が付いた。それは違う、自分の思っていることは違うんだと。

「俺は奉莉を信じることにしたんだ。あの子が俺のことをきつと受け入れてくれることを信じている。だって、俺の初めてできた、ともだちなんだから」

自分の導き出した答えはとても単純なもの。

自分にとって大切なものを見つけた。人は大切な人を見つけると強くなれる。それは世界の真理。弥彦が辿り着いた答え。

男性は弥彦の話しに呆けた様子で目を瞬かせると小さく溜め息を吐いてみせた。

「なんだかよく理解のできない話だが、要するに君はその奉莉って

女の子に会いに行きたい、ということか？」

「そのとおりです」

「そんな格好でか？」

呆れた様子で苦笑する男性。視線は弥彦の土と泥で汚れた素足から徐々に上へと移動する。至る所に穴の開いたボロボロの長ズボン、靴の足跡や土埃の付いた薄着のＴシャツ、頬に青い痣を痛々しく残す弥彦の顔。

冬の寒空の下、小さな子供が纏うにはあまりにもみすばらしく不相応な格好。ボロを着た小さなホームレスと間違えられても無理はないだろう。

「悪いことは言わない。そんなことはやめておきなさい。どうせ君はあの暴徒たちと警官隊を突っ切って、その先にあるホテルに行くことでも思っているのだろう」

「そのとおりです」

「やはりな。子供の君が、こんなにも怪我を負っている小さな男の子がそんなことをするのは無理だ。ぼくを殺してください、と言っているようなものだぞ」

「それでも行かないといけないんだ。どんな邪魔があっても奉莉に会いに行きます」

「……とんだ馬鹿者だな。君のような少年は今まで見たことがない。そんなことをしてまでも会いに行っても女の子は君を快く受け容れてはくれるとは限らないんだぞ」

「そんなことは承知の上です。俺を受け容れるかは彼女の御心のままなんだから、あいつに会う前に悩むことはもうやめたんです」

「潔い精神だな、まるで迷いが無い。では訊くが君をそこまで突き動かすものはなんだ？」

男性の真剣な眼差しで問われた弥彦は悩む素振りを見せず即答する。

弥彦の素直でもっともシンプルな答えを男性に返した。

「惚れた女の子に会いに行くのに理由は必要ですか」

驚愕を通り越して絶句した様子で弥彦を見据える男性。祖父の法泉がこれを訊いたら腹を抱えて笑い飛ばすだろう。あの人はそういう人だ。

そして長い沈黙。男性は弥彦にかけるべき言葉を模索するように困惑した様子で沈黙。

ふたりの間に言葉は皆無。深夜の都会の喧騒と爆発音と銃声という騒音の暴力とビル間の冷たい隙間風がふたりを包み込んだ。

最初にその沈黙を破ったのは男性。おもむろに男性は弥彦を見据えて口を開いた。

「……女の子一人のために命を捨てる覚悟があるっていつのか」

「はい」

「こんなにも離れた場所だというのに聞こえてくるだろう、あの銃声が。暴徒たちの先にあるホテルは銃弾が飛び交う戦場だぞ。それでも女の子をひとりに会いに行くために戦場におのこのこというの

か

「もちろんです。身体を引きずってでも、地面を這ってでも奉莉の元へと辿り着いてみせます」

男性はおもわず息を呑んだ。自分の目の前にいる得体の知れない存在に。ただの小さな男の子だと思っていた存在に。

「君、名前はなんというんだ？」

「崩月弥彦」

「では、崩月くん。歳はいくつだ？」

「……七歳です」

改めて自分の歳を答えると弥彦は苦笑する。

あちらの世界で二十年近く生きて通り魔にナイフで刺されて死んでからこちらの世界に生まれてもう七年も月日が流れているのか。

戦場に満身創痍の身体でこれからおののこうとする七歳児。とんだ七歳児がいたものだ、と弥彦は自分自身を自嘲気味に笑ってやった。弥彦の内心の葛藤を知らずに男性は深く顎を引いて下を向いて俯き沈黙。何度も弥彦の顔を見据えて思考の逡巡を繰り返した後

「……驚いたな、うちの息子と同じ歳か」

と、素直な感想を弥彦に言った。

「息子さんがいらっしやるんですか」

「ああ、愚息がひとり、だけな」

自分の息子を愚息と例える男性の目はどこか悲観的なものが見え隠れしていた。

男性の様子に弥彦はこの男性の息子がどんな男の子なのか興味があった。そしてどんな息子なのか訊かずにはいらなかった。

「どんなお子さんなんですか」

弥彦の質問に男性は眉間に皺を寄せて難しそうな顔をしてから表情に嫌悪感を示す。

「何故、そんなことを訊く？」

「同じ歳の男の子だって聞いたからともだちにでもなれたらいいな
っと思ひまして」

「やめておいたほうがいい」

「どうしてですか」

「君と愚息では不釣合いだ。未熟な『アレ』と熟した君とでは友好関係など築けないだろう。父親のわたしがいうのもなんだが『アレ』はきつとこの先もずっと軟弱で未熟なんだろうな」

「……息子さん、お嫌いなんですか」

「そういう簡単な感情を抱けるようなものじゃない。どうもわたしはひとりの父親として欠けている部分が多すぎる。そのことで妻とも言い争いが絶えなくてな、その様子を見て息子はいつも泣き喚く。」

あの子が笑った顔はとんと見た記憶がない」

「失礼だと思いますが、俺も同じ息子という立場で言わせてもらうとそこまで自身の欠点を意識しなくても息子さんにとってはあなたが唯一の父親なんです。もう少しだけ心を開いて息子さんと接してあげてください。息子さんが泣いている時に俺にしてくれたいみたいに優しく頭を撫でてあげるだけで笑顔をみせてくれますよ」

簡単でしょ、と弥彦は微笑んだ。男性は困った様子で「ふむ」と頷く。

「あなたは自分自身に厳しすぎる。こうやって話しているだけでも初対面の俺にでもわかります」

「子供の癖に難しいことを言う。君にわたしのなにがわかるというんだ」

「子供だからこそ、父親がいる同じ息子だからこそわかるんですよ」
父親が息子に与える影響は多大だ。小さな男の子は大きな父親の背中を追いかけて大きく成長する。

いつか父のような立派な男になることを夢見て幼い男の子は成長する。あの遅しく家族を背負う背中に憧れて。

弥彦の父親は現在、海外への出張中で長い間その姿を家族に見せていない。だからその分、弥彦は父親に対しての憧れは人一倍強かった。

父親を思う息子の寂しい気持ち、恋しい気持ち、自分を見て欲しい気持ち、褒めて欲しい気持ち。気付いて欲しいのだ、僕はお父さんのことが大好きなんだと。

「……そこまで言うのなら君の言うとおりなのかもしれないな。わたしは父親として間違っているのだろうか……」

「それを決めるのはあなたじゃない。息子さんですよ」

「……なるほどな、確かにその通りだ」

少しだけ、ほんの少しだけ男性は微笑んだ。それは父親として何かに気が付いた証か。

どこか晴れ晴れとした表情を浮かべた男性は頭を下げた。弥彦に感謝の印を示すように。

「ありがとう。崩月くんとの会話は有意義だったよ。わたしの父親として欠けているもの少しだけ埋まった気がする。なにかお礼でも出来ればいいのだが……」

「お礼なんてとんでもないです。俺の方こそあなたが助けってくれなかつたら今頃どうなっていたか……」

お互いに顔を見合わせてお礼を言い合う二人。その様子が可笑しかったのかどちらからともなくふたりは笑った。

笑うたびに腹部に激痛がはしり弥彦は笑うことをやめると左手で腹を抱えながら男性を見据える。真剣な弥彦の瞳に男性も笑うことをやめた。

「……もし、よろしければ、息子さんのお名前を教えては頂けませんか。これもなにかの縁。あなたとの縁が俺と息子さんを引き合わせるかもしれない。そのときはきつといい友達になれる気がするんです」

「縁……か。そういうまやかしの類は信じてはいないんだがいろいろう。わたしの愚息の名前は『ジユウ』だ。そのときはアレをよろしく頼む」

「ジユウ、くんか……記憶しました」

男性の息子の名前を胸に刻み弥彦は動き出した。右手を動かさしビルの壁に手を付くとそれを支えに肉体を立ち上がらせる。

たったそれだけの動作だけで骨が軋み激痛が全身にはしり弥彦に動くな、じつと座っている、と訴えかけてくる。もちろん弥彦はそれを無視。

どれだけ肉体が痛みで悲鳴を上げようと自分を阻害しようと立ち止るつもりはもうとうない。もう時間がないのだ。

ホテルは戦場と化している。その戦場の何処かに天王寺奉莉が居る。彼女に危険が迫っている。それならば助けなくてはなるまい。

「……そろそろ、あの子のところに行かないと」

ボロボロに成り果てた自分の肉体に鞭を打ち、どうにか身体を立ち上がらせた。

呼吸するたびに痰が喉に絡み息苦しい。吐き出された荒い息が白い霧となり表れては消える。

そつえばいまの気温はいくつなのだろう？

先ほどまで肉体から寒さや暑さを感じていたはずなのにそれが消えた。肉体の限界が近付いている弊害か。それとも戦鬼の力を使用した代償か。

まあこれで薄着の寒さに凍えなくてすむ、と弥彦は前向きな思考で自己完結。指先の感覚も失せはじめ、小刻みに膝が震えその場で立ち続けるのもままならない。

倒れこみそうになる弥彦に男性は慌てて近寄り小さな弥彦の身長に

合わせるように自身はしゃがみ込み弥彦を優しく胸の中で包み込んだ。

「おい、ほんとうに行くつもりか。もうもたないぞ、君の身体が女の子に会う前に力尽きるつもりか」

「……大丈夫、です。裏技。使い、ます」

「裏技？ いったいなんのことだ」

「……ちよつと、だけ。あぶないので、離れて、ください……」

怪訝そうに男性は弥彦の言うとおりに胸から弥彦を開放する。弥彦は一步二歩とつたない足取りで後退。

背中にビルの壁を引っ付けると大きく深呼吸。何度も何度も深呼吸。肉体にできるだけ酸素を取り込んだ。

すこしだけ肉体の血液の循環がよくなり頭が冴える。これで準備は万端。あとは集中するだけ。

目蓋をゆつくりと閉じる。自身の内にある血液の流れを意識しながら集中力を高める。

上半身、右腕、その肘。そこにまるで焼き鑊こてを直接当てられているような火傷するほどの熱い力の源を感じ取る。

捉えた。あとは開放するだけ。集中力を最大限に高めて意識を一点に集中。

不意に右肘の皮膚を突き破るナニかの痛みがはしる。痛みを感じるままにそのまま肉体を精神をソレに委ねる。

ソレは鋭利なナニか。まるで水晶のように都会の光を吸い込んだと思ったら鈍い光で弾き返す。

ソレは角だ。《崩月》の戦鬼。限りなく力を湧き出してくれる与えてくれる鋭利な角。

肉体の頭から足の指先まで隅々に熱いネツを持った力が激流が流れ込むように行き渡る。

溢れんばかりの活力。みなぎる力により弥彦は自身の怪我を吹き飛ばした。もはや肉体には怪我の傷痕はあってもそれが弥彦を阻害することは皆無。

《崩月》の戦鬼となつた弥彦にはこの程度の怪我は意味をなさない。体内に溜まる熱を吐き出すように弥彦は深く息を吐いた。

目蓋をゆっくりと開き右腕を確認。戦鬼の角を確認。これで闘う準備は整つた。あとは行くのみ。

角が皮膚を突き破つた時に流れた血。それが角を伝い地面にちよつとした血池を作っていたので弥彦は右腕を横になぎ払い血を吹き飛ばす。

なぎ払つた血しびきがビルの壁に付着。紅い染みを点々の模様を作つた。それを弥彦はぼんやりとみつめると拳をしっかりと握り締める。

「……………崩月くん……………君は、いったい……………」

弥彦の様子を一通り見守っていた男性は驚愕した様子で視線を弥彦の右肘に留めながらそう訊いた。

男性の様子に弥彦は苦笑しつつ答える。

「裏技です」

角を顕現させる瞬間を一般人に見せてしまったがこれは緊急事態。言い訳はするつもりはないが言い訳をする相手がいない。

男性はまだ弥彦になにかをいたげな様子ではあつたが男性の言葉を発することを邪魔するように不意に頭上から音がした。

音に釣られるように弥彦と男性は頭上を見上げる。

耳障りのするけたたましい不愉快な騒音。ヘリコプターの羽音。プ

オペラの激しい騒動音。

すさまじい速度であつという間に弥彦の視界から消え去つたヘリコプター三機。その行き先の方角はホテル《オベロン》。

弥彦は視線を頭上から男性に移すと最期に別れのあいさつを告げる。

「助けていただいてありがとうございます。 ジュウくん、大事にしてくださいね」

別れのあいさつを男性に告げると弥彦はその場で踵を返してビルの壁に向かって跳躍。

身軽にビルとビルの間壁を交互に器用に飛び交いながら上へ上へと屋上を目指して移動する。

弥彦の姿を呆れた様子で視線で追っていた男性は小さく「鬼じゃなくて忍者の類だったか」と呟いた。そして男性の視界から弥彦が消えた。

男性の視界に映るのは何も無い都会特有の灰色の空。そこには鬼もいなければ忍者もいない。

名残惜しそくに男性は視線を頭上から正面へと移すと都会の喧騒に向けた。そこはまだ騒ぎが収まらない戦場。

男性は肩を竦め、懐から煙草を一本取り出すと口に銜える。ライターで煙草に火をともすと紫煙を吹き出す。

消えていく紫煙に目を細めるとそれを振り切るように脚を踏み出した。視界に映るのは相変わらずの現実と先ほど自分が目の当たりにした非現実。

さて、久しぶりに愚息に土産話でもしてやるか、と男性は自宅に向けて歩みだした。

第三十四話 父親は子の心を知らず（後書き）

ご意見やご感想をお待ちしております

第三十五話 権力と正義

そこはビルの屋上。人口密集地帯である都心のなかに無数に立ち並ぶうちのひとつ。

ビルの点検などでしか立ち入ることのない場所に小さな少年が所在なさげに立ちすくんでいた。

少年は真つ直ぐに正面を眺めている。その視線の先にあるのは周囲にあるビルよりひと際大きい建造物。ホテル《オベロン》。

豪雨のように鳴り止まなかった銃声は少年がビルの屋上に辿り着いた頃には嘘のような静寂を取り戻した。

おそらく騒ぎの対応に遅れた警察の介入があつたのだろう。それとも表世界の権力を牛耳る《円堂》の仕業なのか。

ホテル一階の正面玄関付近は戦場さながらの銃痕と爆発による衝撃で崩れた落ちた大理石の柱やその破片が床に点々と転がり、ホテルの支配人には目も当てられないほどの惨状となっている。

ホテルは人の気配がまるで無く遠目で見た限りではホテルの様子をこれ以上視認するのは難しい。

だが、地上三十五階の屋上にあるヘリポートにヘリコプターが2機着陸したところを少年は確認した。

そのヘリコプターは先ほど少年の頭上を通過した3機あるうちの2機であつた。そして、もう1機のヘリコプターは屋上に着陸するかと思いきや方向転換をしてホテル最上階までゆっくりと巧みなホバリングで移動するとホテルと横並びになった。

眩しいばかりのサーチライトで最上階一室を照らしながらなにをするつもりなのか、と少年が固唾を呑んで観察している。

すると、ヘリコプターからひとつの人影が飛び出した。突拍子も無い事態に啞然とする少年を無視して飛び出した人影はホテル最上階に飛び込んだ。

ホバリングするヘリコプターとホテルまでの距離は目測でおよそ1

0 m といったところ。

その距離を助走もつけず命綱無しで飛び越えてみせた人物に少年は感嘆すると同時に無茶なことをする、と呆れていた。

正体不明の介入者に視線を奪われていた少年はいつの間にか強張っていた肩の力を抜いて溜め息を吐く。

そして自然と下がった視線の先、少年の眼下に広がるのはホテルを中心に包囲網を完成させている警察の群れと騒ぎを聞き付けて暴徒と化した野次馬の群れ。

ビルの屋上には壁などは無く、まるで棒を飲んだように立ちすくむ少年を荒々しい強風が襲うが少年は強風を正面から受けとめ、強風に煽られることを受け流すように岩の如くビクとも動くことは無い。少年とホテルとの間の距離は約300 m といったところ。少年の100 m 先には警察の包囲網があり、その先200 m 間は点々と警察の警官隊が巡回している。巡回する警官隊の中には黒服で屈強な肉体を持つ男の姿も確認できる。

警官隊の重装備とは違い黒服の男達は綺麗に着こなした洒落たスーツ姿。片手に携えた無線らしきもので口々に連絡を取り合っている模様。どこか焦りを感じさせる動きが目についた。だがその立ち振る舞いからして武芸者であることは予想できる。

黒服たちは《九鳳院家》お抱えの私設武装集団《近衛隊》と少年は予想する。銃火器の類の武器を確認することは出来ないが近衛隊で間違いないだろう。警察の警備隊より数段上の戦闘の手練。相手にすると厄介な武装集団。

近衛隊には真の強者は飛び道具を用いない、という独特な思想を心に抱く幹部クラスという者達が存在する。幹部たちは近衛隊の中でも腕利きの戦闘力を所持しており、その顔触れは裏世界でも一流の者達。九鳳院家が資産にモノを言わせた人材の宝庫。

幹部クラスとだけは戦闘は極力避けることを胸に刻み少年はビルの屋上から走り幅跳びをする要領で助走をつけてから躊躇うことなく飛び降りた。

2 m、5 m、10 m、25 m、50 m……、人間離れした跳躍力。先ほどヘリコプターから飛び降りた人影などと比べ物にならない魔性の力。

グングンと飛距離を伸ばしながら眼下で群れる群衆を尻目に少年は笑った。肉体に満ちる己の力に歓喜している。

強烈な勢いでゆくてを遮る向かい風を正面から切り裂き心地の良いほどの浮遊感に身を任せながら眼下に迫る地面を、否、警官隊と暴徒たちの抗争を通り越した先、警察の装甲車の屋根に尋常じゃない勢いを保ったまま落下、着地する。

弾道ミサイルが着弾したかのような衝撃音と地響き。少年が着地した装甲車の頑丈な屋根は見事に凹み小さなクレーターを作る。

装甲車は少年の落下による衝撃を見事に四散させて耐えてみせた。だが、タイヤの軸が衝撃で歪みが生じたので走行することは二度とないだろう。

突然の来訪者に警官隊と暴徒たちが争いをやめて皆が皆、争いを忘れたように固唾を呑み、啞然とした様子で装甲車の屋根に立ち上がった少年の背中を見つめた。無数に眺める瞳には驚愕の色が宿る。

「……おい、あれ！」

「子供、なのか……？」

「嘘だろ……！」

「見る！あいつの右腕を……！」

「……化け物だ」

「なにやってんの！カメラよ！カメラをまわせして！」

口々に少年の異形な姿に驚愕と畏怖におののく声を張り上げる群衆たち。そしてそこに居合わせたテレビ局の取材陣は大急ぎでテレビカメラを少年に向ける。

信じられないモノを眺める無数の視線は少年の背中ではなく彼の右腕、その肘にある鋭利な角のような突起物だけに集中した。

少年の右肘に宿るのは人間など軽がると突き殺してしまいそうなほどの鋭利な角。ほのかに輝く水晶にも似た色彩をしていて見るものを魅了する。

だが、それは荒々しいまでの存在感を周囲に訴えかけ、眺める者には息苦しさを、恐怖を、強制的に与える。それはまるでおとぎ話から出て来た異形の怪物『鬼』そのものだった。

「しつかりしろ、気を散じるな！誰か！照明を！」

啞然とした様子で誰も彼もが少年を眺めて立ち尽くす中、警官隊の隊長が少年の圧倒的な存在感に物怖じすることなく冷静に状況を飲み込み部下達に檄を飛ばす。

隊長の檄に我に返った警官隊の隊員が慌てた様子でサーチライトを両手で携えてからゆつくりと真つ直ぐに少年に向けた。闇を払いのけてライトが辺りを照らし出そうとする。

一直線に伸びる強烈なサーチライトの光線を身体に浴びる前に少年は屋根から跳躍、装甲車から飛び降りた。目標を失った光線は少年の姿を捉えることは適わずになにもない空間をただ浮き彫りに映す。

「なにを呆けている！急ぎ後続に連絡を入れんかッ！」

「……はいッ！了解！」

硬いヘルメット越しに頭が揺れるほどの衝撃で隊長に頭を弾かれ、慌てた様子で無線を使用して後続に連絡を取る準備をする隊員。

隊員の無線を持つ手はガタガタと震えていた。寒さに震えているのではない。恐怖に震えているのだ。現実味の薄い、まるで白昼夢でも見ていたかのような光景の中、その中心に居た異形の姿をした少年。

だがあれは現実だった。隊員の瞳孔が見開き、興奮と驚愕に呂律が空回りして後続に報告する唇も震えていた。

「後続にはなんて報告すればいいんだ」と隊員は気が気じゃない状態で頭を抱えてつつ大きく深呼吸をしてから震える手で無線機のスイッチを押した。

ビルの屋上からの落下による怪我は身体には見当たらない。肉体に影響は無し。このまま直進することに問題は皆無。

崩月弥彦は左右の腕を大きく振り馬車馬のように両脚を慌しく動かしてアスファルトの地面を蹴る。

ホテル《オベロン》までの距離は目測で約200m程。このまま全力で走れば30秒も掛からずにあっという間にホテル正面入り口に辿り着く。

ただし、それは問題がなければの話。邪魔がなければ、障害がなければの仮定。

弥彦の視線の先、前方には先ほどビルの屋上から見下ろした時よりも人数が数倍にも膨れ上がった警官隊の姿があった。

さきほど暴徒たちを食い止めていた警官隊が後続に増援を要請したのでろう。だが弥彦の視線には黒服たちの姿は見当たらない。

近衛隊の姿が見当たらないことに怪訝に思いながらも、弥彦の駆ける両脚は止まる事はない。この脚はもう彼女の元に辿り着くまでは止まることを許しはしない。

もはや時間が無いのだ。先ほどのヘリコプターの奇怪な行動が弥彦の頭を過ぎる。きつと最上階でこの騒ぎを引き起こした火種があるに違いない。

弥彦には火種の火消しに九鳳院家が動いているのは容易に想像がついていた。その火種に天王寺奉莉が巻き込まれている可能性は濃厚。彼女に危険が迫っているというのなら弥彦は鬼にでも悪魔にでもなる。往く手を邪魔するものがあるのなら喉笛を噛み切り殺してでも押し通るのみ。

弥彦は前方に障害を発見。横一列に陣を組み、防弾装備の頑丈な盾を正面に構えてフルフェイスのヘルメットを頭に装備した警官隊の隊員たちが弥彦のゆくてを立ち塞がる。

隙間無く見事な隊列で組まれた防衛線を前に弥彦は怖気付くどころか警官隊たちを哄笑する。

バカが！そんな陣形が今の俺に《戦鬼》の前でなんの役にたつんだ！

警官隊たちを嘲笑うように弥彦は地面を蹴った。ドンッ！という衝撃音が空気を振動させて蹴った箇所はコンクリートの砂塵が舞上がり弥彦の肉体は宙に浮かんだ。

警官隊など造作も無い！

自分の目の前に壁が立ち塞がるというのなら、まずはその壁を飛び越える。自分にはそれを行うことが出来る力が、戦鬼の力がある。

弥彦は十分に余裕を持って警官隊たちの包囲網を飛び越えた。年端もいかない小さな子供ができる跳躍力ではない。まさに怪物。

「そんな、馬鹿な！」と隊員たちの感嘆と悔しさに感情を揺さぶられる声が漏れた。

足音を立てることなく地面に着地した弥彦は後ろを振り返って警官隊たちに悪態をつく余裕もあつたが、そんな状況ではない。

弥彦は更に両脚に力を込めて地面を蹴りホテルを目指して駆け走る。《オベロン》までの距離約100m程度。

もう目的の地は目と鼻の先にある。熱を持った荒い呼吸で興奮する弥彦の胸を鼓動が打った。

もう少し、あと少しで奉莉の元に、あの子の元に辿り着ける！地面を蹴る足は軽い。まるで鳥の羽のようだ。

俺が彼女を助けるんだ、そして自分の気持ちを彼女に伝えるんだ！

歓喜にも似た感情に全身が震え弥彦は満面の笑みを浮かべる。自分の往く道を邪魔するものはもう誰も居ない。後ろから大所帯で追ってくる警官隊の追っ手を振り切ったただひたすらに駆け足。風を切りながらの全速力。

ホテルの正面玄関まであと25m程度だという位置まで走り抜けてきた弥彦は視界の隅に、ビル陰から自分に向けられた赤い点、赤外線をつ捉えた。それは弥彦に向けられた敵意の証。凶器が自分に襲い掛かる前兆。

弥彦は自分に向けられる無数の赤い光線を見無視してでも駆ける足を止めることない。むしろ余力ある力で危険地帯を通り越そうと両脚に力を込めて加速しようと地面を蹴った。

だが弥彦の抵抗を敵は許してはくれなかった。許すはずも無かった。敵は左右から弥彦の脚に腕に胸に鉛球を打ち込んだ。けたたましいまでの発砲音と激しい銃弾の豪雨。

真っ直ぐに弥彦の肉体を目掛けて襲い掛かる銃弾は獲物を逃さない。吸い込まれるように弥彦の肉体に着弾。

弥彦は咄嗟に宙で身をひねり急所は外したものの容赦のない凶器は弥彦の肉体を蹂躪する。血飛沫を上げて肉体の皮膚を貫き、肉をえぐり焼いて突き進み、骨に到達する前に銃弾は体内に留まった。

崩月の稽古で鍛え上げた肉体が銃弾の加速力を押し留めて弥彦の身体を貫くのを防いだ。だが銃弾の豪雨を身体全身に浴びた弥彦は前のめりに倒れこんで地面に滑り込み顔を強打した。

初めての被弾。肉体のあちらこちらを焼き焦がすほどの熱と激痛に苦痛の呻き声をあげて弥彦は地面に這いつくばる。悔しさと激痛に自然と涙が瞳に溢れ弥彦の視界を歪ませた。

クソつたれが！

弥彦は遂にその場で立ち止った。アスファルトに拡がり流れ出る自分の血で肉体を紅色に染め上げて顔を鼻水と涙でグシャグシャに

濡らしながら。

重い目蓋が自然と弥彦の視界を暗転させる。だが、弥彦の意思が、彼を突き動かす感情が、ここで立ち止めることは許さない。

弥彦は左右の両腕を使用。地面を腕の力だけで這ってでも前進。だがその腕を無常にも銃弾が打ち抜いた。

「ああああああっツッ！」

打ち抜かれた激痛に耐え切らず甲高い悲鳴を上げる。打ち抜かれた腕が徐々に力を失い動くことをやめた。弥彦の意思とは関係なく腕が闘うことを拒絶する。

呻き声を上げて身動きが取れない弥彦に近付く無数の足音。足音が自分のすぐ近くで止まったことを耳で確認すると弥彦は虚ろな瞳で顔を見上げた。

自分を見下ろすのは黒服の屈強な男たち。5人の近衛隊。赤外線照準具付の軽機関銃を両手に携帯した武装集団。自分を蜂の巣にした、攻撃した敵。

そしてまもなく、先ほど振り切った警官隊の隊員たちまでもが弥彦に追いつき周囲を取り囲む。銃を所持する近衛隊を黙認しているのか警官隊の隊員たちは誰一人として近衛隊に楯突く様子はない。

近衛隊のひとりの隊員が弥彦に近寄り背中に馬乗りになるとうつ伏せの弥彦の腕を関節をきめて締め上げてから動きを封じる。戦鬼の角に驚く素振りも見せず作業的な手早い動き。

身体から流れ出す血が弥彦から精神力と闘争力と思考力を奪う。肉体の自由を奪われた崩月弥彦にもはや逃げ場ない。

「……あんたら、九鳳院家の近衛隊だろ」

恨み言を呟くように自然と冷酷な声量で弥彦は自分を見下ろす近衛隊たちに問いかけた。しかし誰一人として口を開くものは居ない。

弥彦の胸の内に忘れかけていた感情が呼び起こされる。無視されたことに腹をたてているのではない。

九鳳院家という存在に、九鳳院竜士という男がした非道な行為を思い出して憤怒の炎が戦鬼の肉体に力を、抵抗する圧倒的な暴力を供給する。

「…………おまえら、九鳳院家は、俺の、敵だ…………全員、ミンチにして…………！」

弥彦は動いた。まずは自分の背中に凶々しくも馬乗りになっている近衛隊から片付ける。

関節をきめられ拘束された腕を戦鬼の力に物を言わせて無造作に払いのける。大の大人、屈強な男でも軽々とただその動作だけで弥彦の背中から吹き飛ばされた。

吹き飛ばした近衛隊の人間が周囲の警官隊数人を巻き添えにして将棋倒しの様で地面に倒れこんだ。肉体の自由を奪い取った弥彦はすぐさま立ち上がる。

敵は複数、だが、近衛隊さえ無力化すれば恐れるものはなにもない。近衛隊は弥彦の周囲を囲むように陣形を整えているので銃は味方を巻き添えにするから使用は不可能。その判断から瞬時に銃を捨て懐より刃渡りの長い鋭利な凶器コンバットナイフを取り出した。

余力を隠していた弥彦の行動にも冷静に対処する近衛隊の反応は迅速だった。狼狽する警官隊を押し退けて近衛隊は速攻。

全身に銃弾を浴びても抵抗する余力を残す弥彦の様子から近衛隊は弥彦を殺す覚悟で四方から襲い掛かる。背の低い弥彦を目掛けて四方より近衛隊の伸びる腕が、鋭利に光る凶器が伸びる。

弥彦は前方から伸びる腕目掛けて凄まじい勢いで右足を跳ね上げた。蹴り上げた右脚は空気を切り裂き、残像が見えるほど強烈な勢いでしなる。蹴り上げた脚は近衛隊の腕の肉を潰し、骨を砕き、再起不能にする。

まずはひとり近衛隊が崩れ落ちる。

片足で地面に立つ左脚を基軸に蹴り上げた右足をそのまま右斜めに蹴り落とす。右方向から伸びた近衛隊の腕をその肉ごと削ぎ落とす。肉が裂け血飛沫が舞い弥彦の頬に血糊が付着。折れ枝のようになつた自分の腕を確認する前に近衛隊は気絶。

二人目の近衛隊が崩れ落ちる。

弥彦は背中に伸びる近衛隊の凶器はそのまま背中を受け止めてナイフが深々と突き刺さる様を黙認。その間に左側から伸びる腕を左腕の脇で挟み込み近衛隊の身動きを封じる。

その体勢のまま後ろを振り向きざまに弥彦にナイフを突き刺した低姿勢の近衛隊に裏拳を叩き込む。遠心力と剛力の合わせ技は横殴りで近衛隊の顎を打ち抜いた。顎の骨を砕かれ白目で気絶する近衛隊。三人目の近衛隊が崩れ落ちる。

片腕を挟まれて身動きが取れない近衛隊は懐から拳銃を取り出すと銃口を自分に背中を向ける弥彦の頭に突き付けて引き金を引く。引き金を引かれるより先に弥彦は脇に挟んだ近衛隊の腕を締め上げて骨を砕く。

片腕の骨を砕かれた激痛で狼狽する近衛隊。拳銃の引き金を引くのに隙が生まれた、その一瞬に弥彦は拳銃を持った腕を掴み一本背負いで近衛隊を地面に叩きつける。背中と頭をアスファルトに強打した近衛隊は気絶。

四人目の近衛隊が崩れ落ちる。

4人の近衛隊を打ち伏せた弥彦は最初に薙ぎ払った近衛隊に視線を向ける。そこには仲間がただひとりの子供に為す術も無く崩れ落ちた信じられない光景に驚愕して地面に尻餅をつく近衛隊の顔があった。

近衛隊が軽機関銃の銃口を向けるより速く弥彦は速攻。素早く近衛隊の背後に回り込み首を締め上げる。男は口から泡を吹いて気絶、その場で崩れ落ちる。

最期の近衛隊を打ち伏せてから弥彦は背中に刺さるナイフを引き抜

くと自分の血で刃を染めたナイフを地面に投げ捨てた。

「……まだ、続けますか」

大の大人5人。それも凶器を所持していた屈強な男達を打破した弥彦の様子を一部始終見ていた警官隊たちはお互いに顔を見合わせてから無言で後退。

正義の代弁者である警官隊としてはここで弥彦を捉えるのは道理。だが人間としての本能が弥彦を危険なモノだと判断して自然と身体が脚が恐怖で震え逃げ腰になる。

それは賢い判断。誰だつて自分の命は惜しい。どんなに貧しい命でもたつたひとつのモノだ。それを投げ捨てるような真似は絶対に出来ない。弱者は強者に従うのみ。

弥彦は無言で道を譲る警官隊を笑わなかった。自分が警官隊の立場なら同じ行動をしたはずだからだ。だから弥彦は警官隊を見下すつもりもなければ笑うつもりもない。ましてや蔑むなどもつてのほかだ。

「……くれぐれも、俺を追って来ないで……」

念の為に警官隊に釘を刺す。今の体調で警官隊まで相手にする余裕はもう弥彦には残されていない。

近衛隊との戦闘で力を使い果たしたのか右肘に宿る戦鬼の角は弥彦の腕の中に消えた。

その途端に全身に疲労感と猛烈な痛みが襲い急激な脱力で地面に掌と膝をつき体内にある汚物を口から嘔吐する。

「おええ……うっ……」

アスファルトに臭気が漂う汚物を吐き出す。胃の中にあるもの全部

を吐き出すかの如く吐き気は治まらない。

嘔吐が全部終わる頃には弥彦の体温は急激に下がり自分の意思とは関係なく肉体が痙攣を繰り返す。弥彦には血が足りなかった。

戦鬼の力は弥彦に強大な力を与える変わりに弥彦の体力と精神力、健康な肉体を奪っていった。

いまにも死にそうな弥彦の満身創痍の様子に見るに耐えられない警官隊たちはざわめき、どうしたものかと戸惑い、困惑する。

すると警官隊を代表するようにひとりの隊員が弥彦に歩み寄りヘルメットを脱ぎ捨てて地面に膝をついた。

「……………崩月弥彦くんだね」

自分の名を呼ばれた弥彦は虚ろな目で視線を横に向ける。肉体は首を動かすことさえ出来ないほどに既に限界を迎えていた。

隊員は汚物の付いた弥彦の口元を懐から取り出したハンカチで拭いながら弥彦に話を続ける。

「僕は《円堂》の関係者だ。君を手助けして欲しいと円堂えんたいまごから要請があった」

「……………ま……………か……………？」

「そつだ。円から君の事情は聞かされている。このままこの場で力尽きるのでは、ここまで来た君がつかばれない。僕が君を導こう」

円堂の関係者と名乗る隊員は弥彦をその胸に抱きかかえると立ち上がった。隊員のその行動に周囲がどよめきがひと際大きくなる。

「部隊長！どういっつもりなんですか！？その子供は……………！」

部隊長と隊員から呼ばれた円堂の関係者は弥彦を抱きかかえたままホテルに向かつて前進。その足取りには迷いも躊躇いもない。しかし他の警官隊の隊員たちがふたりの周囲をかこみこみ往く手を立ち塞がる。

「道を開けないか！この子供は自分の命を賭してまで大切な者を取り戻しにここまで来たんだぞ！」

「しかし、九鳳院家のやつらが……！」

「家柄と資産が自慢の奴らなど放っておけ！こちらは国家権力だ！そこらの金持ちなど相手にするな！」

「こんなことをしたら御上が黙っていませんよ！俺たちの首が……！」

「貴様ら！それでも私が鍛え上げた部下達か！自分の保身だけを考えてこの子供の意思を蔑ろにするつもりか！国民の平和を守り維持するのが私たちの存在理念だろう！九鳳院家に怯えてそんなことも忘れたのか！」

部隊長の怒声に隊員たちは皆、己を保身しようとする心と九鳳院家に臆する心が己の心根に宿る正義と葛藤して俯き口を嚙む。

この一連の騒ぎが九鳳院家によるものだと隊員たちはおのずと理解している。御上から圧力がかかり詳しい事情は説明されてはいないがキナ臭い事件だということも理解している。

それでも上には逆らえない。上から守れと謂われればどんな相手だろうと死守しなければならぬ。たとえそれが九鳳院家に齒向かう子供だとしても。

だが本当にそれでいいのか？

本当にいいのか？

警官隊という職にありながら偽りの正義を騙り、子供ひとりを蔑ろにしているものなのか？

正義とは誰かに強要されるものじゃない！

自分の心根に宿る誰かを守りたいという唯一絶対の感情だ！

そんなことも忘れたのか！

隊員たちは我に返り弥彦たちに道を二人を開ける。部隊長の言うとおりだと、九鳳院家に屈するものかと、決意を改めたのだ。

部隊長は弥彦に道をゆずる部下達に頷くと弥彦を胸に抱えてホテルに向けて歩きだした。

正義はまだ警察の手の中にある。悪宇商会にでも表御三家にでもない、まだ一握りの正義が残っている。

弥彦はその腕の揺りかごに身を委ねて安堵した様子で目蓋を閉じた。

第三十五話 権力と正義（後書き）

文章が短いうえに内容の進展はほとんどなしですみません。小説の息抜きに調子にのってもうひと作品投稿したのが間違いでした。

宣伝なんですが『独りの旅路』という作品を投稿中です。

ご興味がおありの方がいらしたらそちらもどうぞお願いします。ご意見・ご感想お待ちしております。

第三十六話 おまじない（前書き）

まるで書きなぐったような拙い文章です

長い間お待たせしたものがこんなもので本当にすみません

先に本文を読まれる前に私から謝罪の意を述べさせていただきます

第三十六話 おまじない

すぐそばで誰かが泣いている。耳元で誰かが泣いていた。

弥彦が手を伸ばせば難なく届く距離で目と鼻のすぐ先で誰かが涙を流して泣いていた。

弥彦の血の気の引いた青ざめた色の頬にぼつり、鼻先にぼつり、と閉じた目蓋の眼元にも生暖かい雨粒のような涙が零れ落ちてくる。

それはきつと弥彦の為に流す悲しみと慈しみの証。傷心の傷口から流れ出す大切なモノ。

悲痛な声で、必死な声で、幼い声で泣きじゃくり、胸の底から込み上げる感情の波が津波となって押寄せて、それが歯止めが利かずに溢れ出す。

弥彦の閉じた目蓋にふたたび誰かの涙が落ちてくる。

ぼつり、ぼつりとまた涙が頬に当たる度に弥彦の胸はいたたまれなくなりズキズキと痛んだ。

閉じた目を開けていったい誰が自分の為に泣いているのか顔を挿んでみようにも重い目蓋は弥彦の意思に従わず閉じたまま視界に暗がり映すだけ。

手足を動かして反応を示そうにもまるで手も足も神経の感覚が断ち切られているように皆無で弥彦の命令を訊いても動こうとしない。

喉に力を入れて声を出そうにも僅かに開いた口の隙間からとても弱々しい吐息を吐き出すだけ。しかも呼吸するたびに喉は焼けるように痛みを訴えて満足に息をすることも難しい状態だ。

自分の意識はある、というはつきりとした自我を持っているにもかかわらずに肉体は弥彦の意思の管理下にはなかった。

それはまるで精神と肉体を切り離されて脳髄だけで生かされているかのように弥彦の体と意識は相容れない状態にあった。

しかし、肉体は動かせずとも弥彦の命と意識はまだはつきりと残っている。心臓の鼓動は自分が生きている証を刻み、まだドクドクと

脈打ち働いている。

そう、崩月弥彦は死んでいるわけではない。ただ安らかに、死んでいるかのように眠っているだけの状態だった。

ふと、意識だけ覚醒している弥彦の胸元にすぐそばで泣いていた誰かが覆いかぶさるように倒れこみ涙で濡れる顔を埋めた。

胸元を感じる自分のモノとは違う他人の熱い吐息と脈打つ心臓の鼓動、そして胸が押し潰されそうで我慢できないほどの悲痛な感情。

弥彦の上半身に覆いかぶさり、彼の服をシワができるくらい強く、強く誰かが握り締める。

ここで弱く握ってしまったら弥彦が二度と目を覚ますことはないんじゃないのかと、まるで弥彦の自我をその場に繋ぎ留めようと必死でいるかのように弥彦の服を強く握る。

涙と鼻水で湿らした顔をグシャグシャにして嗚咽交じりにしゃくりあげて誰かが弥彦に呼びかけてくる。

「おきて……ねえ……ねえ……起きたよう……目をあけてよ……！」

弥彦の目が覚めるように懇願する声。それは弥彦にはとても馴染みがあり親しみがある幼い声。崩月弥彦が大好きな少女の声。

その声は弥彦の深い意識の奥底にすんなりと聞き届けられて否応なしに弥彦の心を激しく動揺させる。

そんなはずがない。

自分の胸元ですすり泣く少女の声に弥彦は狼狽した。そしてまず最初に自分の聴覚を疑ったのだった。

天王寺奉莉てんのうじまつりが、彼女がこんなにも自分のすぐ側に居るはずが無い。ましてや、《化け物》である自分の為に泣いてくれるはずがない。

現状をそう易々とは鵜呑みにすることが出来ない弥彦は再度、自分がこの不思議な状況に立ち会うまでの記憶を呼び起こす。

自分はまだ天王寺奉莉を救ってなどいない。まだなにも成し遂げて

などいない。

ホテル・オベロン前に敷かれた防衛網に苦戦をしいられはしたが警官隊と近衛隊を打ち伏せ、それから《円堂》の関係者の力を借りて彼女の元に馳せ参じるところだったはずだ。

ホテルの最上階でほくそ笑みながら待ち構える九鳳院竜士の仕業によつてきつと酷い目に遭つて泣いているだろう、助けを求めているであろう奉莉をその外道の手から救い出すはずだった。

だからこそ、その彼女が自分の胸元で泣いているこの状況が理解できない。しばらく思考で時間をついやした後にもしや、と弥彦は閃いた。

九鳳院家との激しい戦闘の後遺症で自分の記憶に食い違いがあり、この場に奉莉が居るのは自らの手で奉莉を救い出した結果なのだろうか、と考えてからすぐにその思考を吐き捨てた。

なんて自分に都合の良い妄想。自分の不甲斐無さを無力さを棚に上げたくだらない理想。

近衛隊から受けた手傷と戦鬼の力を使用した代償からくる疲労感と脱力感でそんな妄想を本気で考えてしまうほどに俺のオツムは相当まいっているらしい。

弥彦は不毛な妄想を思考の淵から吐き出してから今度は現実味のある考えを自分に求めた。

しかしいくら考えたところで全ては妄想や妄言の類であり真実の尻尾も掴むことさえも出来ない。そう思った弥彦は考えるのをやめた。現在の夢心地でまったく理解不能な状況を必死になつて考えようとするよりも優先すべき事項がひとつだけあるのだ。

それは《表御三家》筆頭の《九鳳院》が次男、九鳳院家竜士に対する処遇だ。

もうすでに弥彦はその算段を頭の中で練っているのであとは竜士を目の前にして行動をおこすのみ。その弥彦の算段というのはこういうものだ。

まずは竜士の奴を半殺しにする。円堂えんどうまじか円との約束であいつを殴り飛

ばすことは天地が引っくり返っても揺るがない決定事項。

歯という歯を全部へし折ってやってから、あのいけ好かない美形の顔をあいつの返り血で真っ赤に染め上げる。

きつと竜士のやつを攻撃したら彼の護衛である《近衛隊》と悪宇商会のプロの戦闘屋《鉄腕》が黙ってはいまい。そして主を守るために弥彦の前に立ちはだかるだろう。

それは崩月弥彦にとって大きな障害になる。だが、大好きな女の子の前で二度目の失態を晒すつもりはない。

ルーシー・メイと交わした口約束で一応、弥彦は悪宇商会にその身を置くようになった。だからといって同業者が相手だからと弥彦は《鉄腕》に手加減するつもりはもうとうない。もちろん近衛隊にもだ。

竜士を半殺しにした後で同様に手加減無しで《鉄腕》をぶっ飛ばす。五月雨荘でつけた屈辱と舐められた態度は目に焼きつくぐらいに記憶しており忘れてはいない。

あの時とは違う弥彦の《戦鬼》の姿を、《崩月》の本当の闘いというものを目の当たりにして《鉄腕》はきつと目玉をひん剥くぐらい驚くことだろう。

ざまあみろだ。

そして竜士の奴と《鉄腕》をぶっ飛ばしたらすぐに奉莉の元に駆け寄り安否を確認する。

身体に怪我はないか？ 竜士の奴に酷いことをされてはいないか？ などと奉莉に竜士が危害をくわえてないのか本人に確認する。

もし奉莉が竜士に酷い事をされていたら弥彦は竜士を半殺しでは済まなくさせてその場で息の根を止めるだろう。

友人である九鳳院紫の実兄くわふういんむらさだからといっても関係がない。少女の心の底に一生涯残る傷痕を刻み込んだ代償は竜士の命を持って支払ってもらおう。

自分が同種である他の人間を殺す。そう強く思うだけで弥彦の背筋は凍りつき、心は身震いする。

人間が人間を殺してはいけない。それは人の道を外れることになる。殺人は犯罪だ。殺人なんて野蛮な行為だ。禁忌を犯すことになんの意味があるというのだ。

その禁忌がなんだというのだ。こちらは裏十三家の《崩月》だ。崩月は代々、殺しを生業とする生粋の人食い鬼の巣窟だぞ。

長い年月をかけて孫の代まで脈々と受け継がれてきた崩月流の技は人間を壊し殺すためだけの技だ。己の身を守るためだけにある護身術や正々堂々をおもんじる空手などとは次元が違う。

お互いが相手を尊重して試合をするなどとお上品なものではない。

《崩月》は人間を壊すのだ。倫理も法律も道徳も、ましてや殺す相手を尊重するなど言語道断だ。

崩月弥彦は九鳳院竜士を殺すのだ。人間を殺すのだ。脆弱な心を嘔み締めて、弱虫で臆病な自分の心を冷徹な殺意で塗潰す。

この弥彦の殺意は奉莉に酷いことをした竜士に対する『嫉妬』というシンプルで自己中心的で傲慢に偏った一方的に歪んだ負の感情で表現するのが近いのかもしれない。

そうだ、と弥彦は思った。所詮、人間などという生き物は自分のためだけにしか生きていない。

自分に利益のあることしか行動しない。例えば慈善事業など突き詰めればそれは自己が満足を得るためにするものだ。

弥彦が天王寺奉莉を助けようとする行動理念は彼女に対する感情が強く作用しており、そしてそれはもちろん弥彦自身のためにほかならない。

損得勘定で物事を推し量ろうとする卑しい男。損得勘定でしか物事を理解出来ない愚かな男。自分に利得がなければ全てを諦める男。前世より魂が引きずる不純で汚い人間の性さが。崩月弥彦という男の本質。

そして、その男はこんなことを考えているのだ。

もし、天王寺奉莉が酷いことをされて泣いていたらそっと優しく抱きしめてあげて泣き止むのを待とう。

近衛隊の返り血と自分の血で染まった弥彦の姿にきつと彼女は断固として拒絶するだろうがそんなことは知らない。弥彦がそうしたいのだ。

少女の気持ちを考えないで自分の願望だけを優先する弥彦の行いはもちろん最低な行為。これでは九鳳院竜士が密かに裏で幼い子供たちにしてきた行為と変わらない。

竜士がやってきた事に弥彦は意識して同調することになる。自分も竜士となにも変わらない最低で救いのない屑野郎、ということだ。

幼い少女をただの道具のように扱い、傷つけて、泣かせて、自分の思うようにならなければ壊す。治療することが出来ない傷痕を一生、その記憶と共に刻み込む。

奉莉は必ずといって過言ではないほどに嫌がるだろう。無理強いをすることはよくないと理性が理解していても弥彦の自分勝手な感情がそれを拒絶する。

それでも。

弥彦はずっと胸の内に秘めていた自分の気持ちを彼女に伝えたいのだ。

彼女の心が既に壊れていたとしても、崩月弥彦という男を拒絶しても、もう二度と彼女の笑顔を拝むことが出来なくなっても、この気持ちを伝えたい。

好きだ。

ただその一言だけ奉莉に伝えられればいい。ほかに言葉を飾りつけるつもりはない。自分の素直な感情を奉莉のことが大好きだと正面から伝えるのだ。

きつと奉莉は面食らった様子で驚くだろう。なにしろ崩月家が長男、人間の皮を被った化け物からの告白ときたことだ。

いままで友達のように振舞っていた男の子がいきなり助けに来たと思ったら嫌がる自分のことを無理に抱きしめてから不意打ちの告白だ。

奉莉は弥彦の想いを受け止めていきたいどんな気持ちになるのだから。

うか？

弥彦にどんな返事を聞かせてくれるのだろうか？

奉莉は弥彦を受け容れてくれるだろうか？

人間の皮を被った崩月の戦鬼、化け物を慈しみ愛しんでくれるだろうか？

まだ七歳という幼い少女は許容できない現実を突然に押し付けられて本当の意味で彼女は壊れてしまうかもしれない。

それでも弥彦はあの幼い少女を心の底から慈しみ、愛している。この気持ちは自分にも他人にも偽ることは出来ない。

「なに教室の前でひとり突っ立ってんのよ、邪魔」

「ちよっと、待ってよ」

奉莉との初めての出会いは小学校の入学式。友達が出来るか不安の気持ちに駆られ教室の扉を開くのを躊躇っていた弥彦を邪魔者扱いするところから始まったのだった。

お世辞にも最高のものとはいえない出会いではあったがその後、不幸にも巻き込まれた誘拐事件をきっかけに弥彦の主観ではあるが彼女との関係が親密なものとなった。

祖父に無理を言って奉莉が通う空手道場に入門した。大型連休にはテーマパークで偶然鉢合わせた奉莉の為に喧嘩していた仲直りの証としてプレゼントを贈った。空手の全国大会では決勝戦で円と戦う奉莉を精一杯、喉が枯れるほど応援した。

今にして思えばどれもこれも天王寺奉莉の気持ちを自分に向けさせようとして行ったことのように思う。

ただの同級生だと思っていた女の子がいつの間にか弥彦の心の奥底に居座りとても大切な存在となっていた。それは弥彦の命を差し出してでも守りたいほどに愛おしい存在。

異性を想う気持ちを、天王寺奉莉という存在を想う心を誤魔化すこ

となど弥彦には出来るはずもなかった。

「……おきてよう……こんな嫌だよ……いやだよ……弥彦お……」

また不意に聴こえたその声で弥彦の思考は唐突に途切れた。

いくら名前を呼んでも、目を覚ますように身体を揺すり叫んでも、弥彦が目覚ますことはない。その様子に嗚咽交じりの声がだんだんと更に悲しみの色を濃くして力を失っていく。

弥彦は目を閉じ、口を閉じ、耳を澄まして、唯一自分が自由に出来る意識の先を奉莉が顔を埋める胸元に集中させる。

先ほどまで自分の名前を呼んでいた奉莉は泣くのをやめた。弥彦の目が覚めないことで諦めたわけではなく、ただ泣き疲れてしまったので弥彦の胸を枕に吐息をたてて眠ってしまった様子。

耳を澄ませば奉莉の吐息と時折、弥彦の名前をぼつりと呟く寝言が聞こえるだけ。そのほかの雑音はなにも弥彦の耳にはまったく聴こえてはこない。

頭にある柔らかい感触と下腹部を覆う温かみがあり少しだけ重い感覚。頭に当たるものは枕、下腹部に当たるものは毛布。自分は現在、布団かベットにでも寝かされているのだろうか。

そう弥彦は判断しようとするが胸元にある人肌の温度と少女の吐息から、やはりそう易々と弥彦は現実を素直に受け止められなかった。

何故、自分はこんなところで横になっている？ 何故、捜し人である少女が自分の傍で安らかに吐息をたてて眠っている？

疑問の問答を頭のなかで幾度か繰り返し返してから弥彦はひとつの答えを導きだした。

そうか、これは夢なんだ

弥彦は現在の理解しがたい状況を『夢』ということにして納得した。夢は自分が望むものを自分の理想とする幻を夢を見る当人にみせてくれる。

これは弥彦が願った願望。弥彦が望んだ少女を九鳳院竜士から救い出したという現実、その結果。

なんて心地の良い夢なんだろう、と弥彦は思った。

竜士も《鉄腕》もまだこの拳でぶっ飛ばしていかないがそんなことはどうでもよくなる。弥彦が大好きな少女がすぐ傍に存在してくれているという安堵感と幸福感。

これさえあればもう弥彦の目的は達成されたも同然。奉莉が自分の傍に居てくれている。自分の腕が届く先に存在してくれている。

これであれば目蓋を開き上半身を起こして胸元で眠る少女の寝顔を眺めて悦に入り、奉莉が起きないように頬を指先で突き悪戯をするのだ。

そして少女が弥彦の悪戯に気が付いて目を覚ましたら、いつものように奉莉が頬を朱色に染め、それを弥彦が指摘すると怒鳴りつけて自慢の空手で鉄拳制裁をくわえる。

そんなくだらない日常という名の妄想。

夢なら、それくらいのもを俺に見せてくれ

現実ではなくて夢の中でも高望みするのは贅沢を通り越しておこがましい行為だろうか。

せめて夢の中でだって構わないから、あの元気で高飛車で愛おしい少女の笑った笑顔を見たい。この目に焼き付けたい。

そう弥彦が願うのは身の程をわきまえない、愚かな願いだともいいたいのだろうか。

せめて彼女の温もりだけでも

夢の中だというのに自由が利かない肉体に弥彦は活をいれた。額に大量の脂汗を流しつつもどうにか左腕だけを動かすことだけに成功した。

亀が歩くより鈍い動きで左腕を自分の胸元にまで移動させる。たったそれだけの作業で心臓の鼓動は過剰なぐらいに鼓動を打ち続け、息苦しさを感じて呼吸も荒くなる。

視界が暗転しているせいかなかなか距離感がつかめず悪戦苦闘する

弥彦のてのひらが奉莉の滑らかな髪の毛を捉えた。

さらさらと滑る手触りと暖かい温もりを手のひらで感じる。夢だというのに現実味が濃いはずきりとした感触。

胸元で吐息をたてる奉莉の存在が直接触れることでもっと身近に感じられる。

ああ、なんて俺は幸せなんだろう

肉体の軋む痛みも忘れて弥彦は今、此処にあるだけの夢の存在に満足すると忽然と意識を失うのだった。

目を見開いて最初に視界に映ったのは白い天井に取り付けられた蛍光灯の明かりだった。

明るすぎず暗すぎず直視し続けていても痛くない程度に目には優しい光度に調節された人工光をぼんやりと見上げながら弥彦は鼻から空気を吸い込み大きく深呼吸。

吸い込んだ空気から薬品の独特な匂いを感じたので弥彦は現在自分がいる場所は病院だということを実感し先に理解する。

弥彦の現在地はホテル・オベロンから場所が変わり病院のある一室。それがなにを意味しているのかということも弥彦には容易に理解できた。

崩月弥彦は負けたのだ。憎い仇を目前にして力尽きたのだ。

その不条理な現実を理解した途端に弥彦の視界がぼやけた。自然と涙が溢れ出して嗚咽が生じる。歯が噛み合わないほどに口元は振るえた。

泣いて彼女が戻って来るならいくらでも泣き喚こう。けれどもその行動にはなんの意味さえもない。

それはただ自分の行いが何の結果も実らせなかったということを確認させるだけだ。

ひとしきり泣き声を押し殺して泣いてみると疲労感と虚無感しか残らなかった。事態はまだ依然と継続中、こんなところで呑気に寝て

いる場合ではない。

弥彦は身体に力を入れてベットから起き上がるようにしたが動いたのは僅かに浮かんだ上半身だけ。それも数秒もせずに再び背中をベットにあずけてしまいうぐらいに弥彦の肉体は不調をきたしていた。

自分の自由の利かない身体に歯噛みする。とことん自分はなにもできやしないのだと自嘲気味に弥彦は己を笑ってやった。いまはそんなことしか出来ない自分がひどく情けない。

後頭部を優しく包むふかふかの枕に頭を預けて首だけを横にずらし周囲を確認。なんの変哲もない一般的な病室の間取りと寝具と家具。他の入院患者が居ないところをみると待遇の良い個室をあてがわれているようだ。

《円堂》の者が手を回してくれたのだろうか、と推察しつつ弥彦の視線は覆いかぶさるようにかけられた布団の中へ。すると視界に飛び込んできたのは布団に潜るように身をひそめた幼い子供の寝顔。弥彦が横になっっている同じベット内でスヤスヤと吐息をたててお行儀良く眠っている幼子がひとり。その無防備で無邪気な寝顔に弥彦は多少は驚きはしたが自然と微笑むことが出来た。

何故、自分のベットで一緒に眠っているのかという疑問が浮かぶよりちよつとした悪戯心が弥彦のなかで芽生えた。目を覚まして早々にではあるがほかにすることもないので弥彦は行動を開始する。

「……おい、散鶴^{さん}。おまえの大好きな『プリティ・プリンセス』が始まっちゃうぞ。ブラックプリンセスがお寝坊さんにはお仕置きだつてさ」

口元に涎を垂らして幸せそうに眠る妹の頬を指先で突きながら耳元で弥彦は悪戯な笑みを浮かべてそう囁いた。

「……うー。おしおきはだめなのー。痛いのはいやー」

妹が毎週かかさずに観賞しているアニメを引き合いに出して散鶴が目を覚ますように促す。子供というのは自分の大好きなモノに誘惑されたり拒絶されたりすると極端に反応を示してくれる。

そういつた純粹な気持ちでその場を感情で動く弱くて無遠慮で考えたことをすぐに実行する行動力を持つ子供という存在が弥彦には羨ましくも思えた。

弥彦の虚言を疑うこともせず鵜呑みにして本気で信じる妹は期待通り反応を示したので弥彦はクツクツと声を押し殺して笑う。

涙声で眠い目を小さな手で擦りつつベットの上で散鶴はゆっくりと意識を覚醒させる。

まだ完全に覚醒しておらず寝ぼけている散鶴の眼元に残る目脂めやしを弥彦は優しく丁寧な手際で指で払い取ってあげる。

「おはよう、散鶴。ちゃんと起きた良い子にはブラックプリンセスのお仕置きはなしだ」

「むー。きょうは幼稚園があつた日だから『プリティ・プリンセス』はおやすみ……」

今度は完璧に意識が覚醒した散鶴が意識不明の状態であつた弥彦が目を覚ました顔を見た途端に瞳に涙を浮かべる。その様子を目の当たりにして弥彦は悪戯をしたことに後悔した。

「わ、悪かった。さっきのは冗談だよ。散鶴を起こそうと思っておまえの大好きな『プリティ・プリンセス』で嘘を吐いたのは謝るから泣くなよ」

散鶴の顔がどんどんと悲しみの色を濃くするのを自分が嘘を吐いたからと勘違いして的外れの言い訳で言い繕いアタフタとする弥彦を無視して散鶴が弥彦の首元に両腕を回して抱きついた。

咄嗟の出来事に混乱する弥彦を力強く抱き寄せて散鶴は泣いた。幼い妹の鳴き声は弥彦が居る病室内によく響いた。病室の出入り口の扉が閉まっていなければ病院中にきつと響き渡っているだろう。しゃくりあげる妹を安心させるように弥彦は散鶴を抱きしめ返して優しい音色で言葉を紡ぐ。妹がこんなにも感情をあらわにして泣いている原因を作ったのは自分に他ならないからだ。

「ごめんな。散鶴に黙って急に屋敷を出て行ったりして悪かったよ。お祖父ちゃん、お母さん、姉さん、それから散鶴には心配をかけたな。俺が屋敷を抜け出していた間、散鶴は良い子にしていたか？」

「……うん。ちづるはいいこにしてたよ。ずっと弥彦おにいちゃんをまっけてたんだよ」

「そうなのか。偉いな、散鶴は俺の帰りを待っていたのか」

「うん。ずーっとまっけてた。お母さんもお祖父ちゃんもお姉ちゃんも、弥彦おにいちゃんが帰ってくるのをずーっと待ってたんだよ」

「……そうか」

天王寺奉莉をその手で救い出すために弥彦は深夜、崩月の屋敷を家族に黙って抜け出した。

祖父や母親が「九鳳院家に手を出せば家族に危険がおよぶ」と弥彦にあれだけ説明したのにもかかわらずに弥彦は家族の身の安全より大好きな少女の身の安全を取った。

家族と少女を天秤の秤に載せてどちらが自分に取って大切なものなのか、愚かにもはかってしまった。どちらも大切な存在。どちらも弥彦には欠けることを許さない者たち。

けれども俺はこの目の前に居る妹を。大切な家族を見捨てて自分だ

けの身勝手な都合で家族の命を九鳳院家に差し出してた。

奉莉を救い出すためにはそうするしかなかった。そうするしか手立てがなかったのだ。

自分だけの力で九鳳院家に勝てると思っていた。九鳳院竜士から奉莉を救い出せると思っていた。奉莉の情報を手に入れるため悪宇商会に所属することになんの躊躇いもなかった。

しかしその根拠のない慢心が仇となった。結局、崩月弥彦はなにかをなすことなど出来なかった。その証拠に銃痕が全身に残る傷痕を抱えて妹に泣き付かれてベットで横になっているではないか。

たった一人で、馬鹿みたいに青臭い正義を振りかざしてまるで正義の味方にもなった自分の姿に酔っていたのだ。冷静に考えてみればとんだお笑い種だ、反吐が出る。

俺は無力だ。悪宇商会にいいようにいいくるめられて九鳳院家に闘いを挑んだものの、同じ土俵に立つ前に力尽きて病院送り。崩月弥彦に残ったものはただひとつ取り返しのつかない『後悔』だけだ。散鶴は言った。弥彦の帰りを屋敷ですつと待っていたと。家族が自分の帰りを屋敷で待っていた？

いったいどんな顔をして屋敷の門を潜ればいいというのだろうか。どんな言葉で家族に謝罪をすれば許してくれるのだろうか。家族を裏切り自分の戦を優先させた愚かな息子は『家族』とよぶに値する存在なのか？

「どうしたの？ 弥彦おにいちゃん、汗がいつぱいだよ。くるしいの？ 痛いなの？」

不意にかけられた自分を心配する散鶴の言葉に弥彦は我に返り額に流れる汗を服の袖で拭い慌てて不細工な笑顔を繕い応答する。

「なんでもないよ。なんでもないんだ……」

「ほんとうに？ちづるに嘘をついたらダメだよ」

弥彦の濁った瞳を純粹な光が宿る真っ直ぐな散鶴の瞳がしっかりと捕らえる。幼い子供と侮るとなかれ、この幼子も《崩月》の血をひいている立派な一族の端くれ。

弥彦が嘘偽りを言っていることは見抜いているのだ。自分の心の奥底を見透かされている感覚を覚えた弥彦は咄嗟に散鶴の瞳から逃げないように視線を横に逸らして病室の窓際に向けた。

窓際は弥彦の心境をあらわすように紅い夕日の光が窓際に射し込みどこか哀愁を漂わせて暗闇の訪れを予感させる。窓の外に視線を向けると住宅の乏しい街灯の光が暗がりを寄せ付けないように抵抗していた。

病室の天井で明かりを灯す蛍光灯の弱々しい光が迫る夜の暗がりになどだけ抵抗できるのだろうか、などと不毛な思考が弥彦の頭によぎる。

「うー。弥彦おにいちちゃんがちづるを無視するー。うそつきのおにいちちゃんには……」

弥彦の愛想の無い様子に散鶴は頬を膨らませるとベットの中にその身をモゾモゾと器用に潜らせて姿を消した。そして間も無くして弥彦は肉体に違和感を覚える。主に足の裏ではあるが。

足裏からむずむずとするくすぐったい感覚に散鶴がふざけて自分の足裏をくすぐっているのは容易に想像出来た。だから急にベットに潜ったわけだ。

打撃にはめっぽう態勢のある崩月の屈強な肉体はくすぐりにはとても敏感で弱いらしい。足裏をくすぐられる度に弥彦の引きつる笑い声が病室内に木霊する。

まだ肉体の自由が利かない弥彦にはこれ以上に無い拷問の始まりだった。

「やめろつて！ 八八八っ！ 俺を笑い、八八っ！ 殺すつもりなのか、アハハハハ！」

腹筋がよじれる勢いで呼吸を荒くして笑い転げる弥彦は息つく間も無い状態。ある意味では満身創痍であった。

弥彦が知りえる限り妹がこんな積極的に悪戯をすることは初めての経験だ。そうまでするほどに弥彦が嘘を吐くことがお気に召さないらしい。

瞳に笑いの涙を浮かべてつつも弥彦はベットのの中に潜っている散鶴にくすぐるのをやめると懇願を続けるが返ってくる返事は全て足裏に返された。

さすがに弥彦も限界だった。ある種で生命の危機さえも感じさせられた。

「か、か、看護婦さーん！ アハハっ！ そうだ、ナースコール！ 動けよ、俺の腕えあアハハハハっ！」

ベットの脇に備え付けられている緊急時に押すナースコールのボタン。弥彦はそれを視界に捉えると左腕を伸ばそうとするがやはりまだ身体は動いてはくれない。

「いい加減にしないかつ！」

弥彦は言葉を荒げて散鶴に怒鳴った。弥彦の怒気が散鶴には効いたのか足裏をくすぐる手を止めて布団の中から散鶴が顔をひょっこりと覗かせた。

覗かせた顔の表情は反省の色は無し。むしろ不貞腐れた表情を浮かべて弥彦のことを睨むしまつ。珍しい妹の表情と態度に弥彦は息たえたえになんとか言葉を発した。

「おまえを無視して悪かったよ。けどな、これはあんまりなんじゃないのか？」

「……うそつきはどろぼうさんのはじまりなの」

「は？」

「みーんな、おにいちゃんが眠っている間、たくさん、たくさん、おにいちゃんのこと心配していたのに。おにいちゃんは起きてからうそばかり……」

「嘘なんて言っていないさ」

「それも嘘っ！なんでおにいちゃんは平気で嘘を言うの？みんな、みんながおにいちゃんのことずーっと心配して毎日おみまいしてるのに」

「……………」

「今日だってちづるは幼稚園に行つてからお母さんと一緒におみまいにきてるの。はやくおにいちゃんが元気になって一緒にまた遊んでくれるようにって、いーっぱい神様にもお願いだってした！」

「……………」

「おにいちゃんがお家を出て行つてからお母さん、一日だって眠つてないんだよ！お祖父ちゃんはむずかしい顔して毎日いろんなところにお出かけしてるの。お祖父ちゃん、おにいちゃんのおみまいに来てくれないからちづるが『なんでおみまいに来てくれないの？』」

つて訊いたら『馬鹿野郎と家族を守るためだ』つて言ってた！」

「……そんなばかな」

「お姉ちゃんは学校が終わったら毎日真九郎おにいちゃんと弥彦おにいちゃんのおみまいのおみまいをして夜晩くまでお祖父ちゃんのお手伝いをしてる！」

「……なんで」

散鶴の心に迫る迫力と言葉に弥彦は喉が詰まった。この胸の奥底から込み上げる気持ちを上手に整理することが出来ない。

母親は屋敷を抜け出した息子を心配するあまりに一睡もせず息子の帰りを待っていた。息子が無事に帰って来ることを屋敷で待つ母親の気持ちというのはどれほど苦痛だっただろう。

祖父は孫が九鳳院家に喧嘩を売ったことで生じる家族への火の粉を払うために裏世界の重役たちに恥を承知で崩月家当主として頭を下げてまわった。裏十三家の一角《崩月》が歴代の崩月たちが守ってきた誇りを穢すことはどれほどの屈辱だっただろう。

姉は兄弟子と愚弟を毎日のように看病して祖父の負担を少しでも減らそうと崩月家当主代行として祖父と同じように裏世界の重役たちに頭を下げた。あのお淑やかな姉が誰かに頭を下げるなど見たくない。

妹は幼いながらも現在、崩月家が窮地にたたされていることを理解して子供なりに兄が早く目を覚ますように看病。そして薫をも掴む想いで神にも祈りを捧げた。いつもと違う家族の切羽詰る雰囲気にとれだけ不安だっただろう。

そして家族が窮地にたちような原因を作り出した愚息はそんな家族の苦勞も知らず、むしろ蔑ろにして己の心に塞ぎ込んでいるだけ。あまりにも愚かで不甲斐無い姿を晒すだけ。

妹は、散鶴はそんな兄の情けない姿に腹を立てているのだ。家族がおまえのために頑張っているのにその中心にいるおまえはなんて無様な姿をしているのだと。

家族の行いを無碍にする兄の姿に妹は瞳に大粒の涙を浮かべて訴えている。おまえはいつたいたいどこまで愚かなのだと。

そのことに弥彦が気が付くのが遅かった。鈍感で配慮が圧倒的に足りない自分を叱咤する。

家族を裏切り続ける崩月弥彦はこのままずっと卑怯者であり続けるしかないのか？

崩月弥彦は小心者で未熟者で愚か者でもあるが卑怯者だけにはなりたくなかった。それだけにはなりたくなかった。

悪宇商会という裏世界の組織には自分が望んで属した。その過程がどうであれ最期に決断したのは崩月弥彦にほかならない。

囚われた少女を救い出すために九鳳院家に反旗を掲げた。それがどういうことか理解できないほど弥彦は馬鹿ではない。

結局は崩月弥彦がすべて決断したこと。その決断に後悔するもしないも己が決めた道ならば突き進むしかない。

「まつりお姉ちゃんだって……」

散鶴が言葉をすべて発言するより先に突然に病室の扉が開かれた。

新しい来客に散鶴は言いかけた言葉を飲み込むと来客の姿を視認。

すると表情を輝かせてベットから大急ぎで抜け出すと来客に駆け寄り跳びついた。

「こらこら。急に飛び出してくるなんて危ないでしょ？元気なのは感心するけど散鶴ちゃんが怪我したらどうするのよ」

「えへへ。おこられちゃった」

自分の行動に詫びる様子はない散鶴。むしろ来客に注意されることを嬉々として受け容れている。

人見知りが極端に激しい妹は家族や家族同然である兄弟子の真九郎以外には心を開かず、恥ずかしがって物陰に隠れてしまつような少女であつたはずなのにこの身内に振舞う様子はなんだ？

弥彦は怪訝そうに視線を病室の入り口に居る来客に向けた。そして、そのありえない光景に息を呑んだ。

「……………まつり」

信じられない事態に喉が枯れて擦れた小さな声しか出なかつた。視線の先にいた来客は崩月弥彦が血眼になつて探していた少女。弥彦が大好きな少女。

背中には真つ赤なランドセルを背負い、真つ白な長袖のオフネックニットの上にチェック柄のウールのコートを羽織り、下はベージュ色のフリルの付いたミニスカートに細長い脚には黒いストッキングを穿いていた。

長いきめ細やかな黒髪に口元には薄い紅色の張りのある唇。強気な少女の雰囲気を表すような真つ直ぐで鋭い目。まるでジュニアのファッションモデルでも通用しそうな容姿と格好。

息を呑み驚愕の表情を浮かべて少女を凝視する弥彦に少女は気が付くと散鶴の頭を優しく撫でながら顔を弥彦に向けて微笑んだ。

その笑みを見間違えるはずがない。俺が見間違えるはずがない。間違ひなく自分の目の前にいる可憐な少女は天王寺奉莉その人だった。

「ねえ散鶴ちゃん。わたしのママと散鶴ちゃんママが1階の休憩所で散鶴ちゃんのこと待ってるよ。売店でお菓子を買ってくれて」

「ほんとう？」

「うん、本当よ」

「いーっぱいお菓子を買ってもいいの？」

「うーん。いーっぱいだとママたちが困っちゃうから散鶴ちゃんが食べられる分だけにしなさいよ」

「うー。それじゃあ弥彦おにちゃんと奉莉おねえちゃんの方も買ってきてあげる！」

散鶴は少女から離れると元気よく病室から1階の休憩所まで廊下を駆け出した。

その後ろ姿を少女は廊下に出てハラハラとした様子で見つめると「廊下は走らないの！」と散鶴に注意を促すが既に散鶴の姿は階段の方へと消えていた。

少女は苦笑と溜め息交じりに廊下から病室に移動すると病室の扉を閉めた。そして病室の壁際に置かれた鉄パイプの椅子をベットの直ぐ横まで運ぶとパイプ椅子を開いて床に設置。

ミニスカートのお尻部分を両手で伸ばしつつパイプ椅子に腰をおろした。その一部始終を終始黙って凝視していた弥彦の視線に少女は笑った。いつもと変わらない笑みを弥彦に見せて。

「なに幽霊でも見たような顔してんのよ。相変わらずの間抜け面ね、あんたは」

「……は？」

「は、じゃないわよ。目が覚めたのならわたしに連絡のひとつづらいいれるのが礼儀なんじゃないの？」

「いや、あのな……」

「てつきりまだ死んだように眠っているかと思って今日は手土産のひとつも持ってきてないわよ」

「いや、そのな……」

「道場やクラスの皆があんたのこと心配してるわよ。またアイツは事件に巻き込まれたのかって。それもそうよね、あんたは大きな事件が起きるたびに首を突っ込まなくちゃ気が済まないようなはた迷惑な奴だし」

「……………」

「安心しなさい。あんたが学校を休んでいる間の授業のノートはこのわたしが見せてあげる。ありがたーーく、思いなさいよね」

「なあ、あの、ちょっと……」

「あんたが入院したって聞いてひかる光が雨を連れてわざわざお見舞いに来てくれたの覚えてる？ 円の奴はあんたが入院してまじかいることをわたしが教える前から知ってたみたいだし……」

矢継ぎ早に弥彦が発言することを許さないように言葉を発する奉莉の姿に弥彦は安心すると同時に溜め息が漏れた。

自分が探していた少女がいつもと同じ様子で自分に話しかけていることに対する安堵感。そして相変わらずの高飛車な態度とその棘の中にある態度に垣間見える彼女の優しさに弥彦は自然と笑みがこぼれた。

「あんな奉莉。俺は寝ていたから墮花姉妹が見舞いに来てくれたのはもちろん記憶に無いし、円は一応俺の命の恩人だから俺が入院していることを知っているのはそう不思議なことではないさ」

「円があんたの命の恩人ってどういう意味よ？」

それは、と弥彦は言いかけたが裏十三家の《円堂》について奉莉に話さなければいけないのでここは誤魔化すことにした。

「そんなことより……奉莉。おまえが無事で安心したよ。ごめんな、俺が五月雨荘におまえを誘ったばかりに……」

「ちえすとおっ！」

「痛ええっ！」

しんみりとした雰囲気をぶち壊すが如く奉莉が弥彦の脳天に垂直に手刀を叩き込んだ。とても良い角度と力加減で放たれた手刀は弥彦の視界を一瞬ではあるが暗転させるほどの凶器であった。

「なにすんだよ！」

「なにつて奉莉チョップよ。あんたにするのは初めてよね。どう？効いたでしょ」

「ああすげえーっ痛かったぞ。　ってじゃなくてだな……」

「……もうその話はいいの」

「えっ？」

奉莉は顔を伏せてその表情が弥彦には窺えないように俯いた。膝の上で両手の握り拳を作り俯く奉莉の様子に弥彦は困惑するしかない。

「その話はいいつてどういっ……」

「あのね、わたし正直に言つとあなたのことが大嫌いなもの」

「なっ！？」

突然の奉莉の告白に弥彦は狼狽する。そして横になつた身体の肩をさらに落として落ち込んだ。

「五月雨荘で紫のお兄さんが言つていたことが全部嘘か本当かはあの時のあなたの様子を見れば子供のわたしにでもわかる。あなたの家柄が裏十三家とかいう物騒な家柄で人殺しの家系だつていうことは本当のことなんでしょ？」

俯いた顔を上げた奉莉の視線と質問を受け止めて弥彦は正直に答えるべきか迷つた。だがこの少女の前では隠し事はなしであろうと決めた自分の決意を思い出して包み隠さず真実を話すことに決めた。

「……ああそうだよ」

「わたしの前で見せてくれたあなたの右肘にある角は人殺しの家系である《崩月》の証なんでしょ？」

「そのとおりだ」

「弥彦は人を殺したことがあるの？」

「……ない。ないけどおまえを俺の前から連れ去った九鳳院竜士は殺そうと思った。本気で殺してやるうと思った。この血に流れる崩月の戦鬼の力で目を潰して耳を千切って舌をひっこ抜いて顎を砕いて骨を砕いて肉を潰してやるうと思った」

弥彦の殺意と狂気が嘘ではなく真実であることを奉莉は弥彦の目を見つと見据えることで判断した。彼の内に見え隠れする怖気はしる殺意に奉莉は息を呑んだ。

「いまでも九鳳院竜士を殺してやるうって思っているの？」

この質問には弥彦は時間をかけて間を置き現在の自分の気持ちを竜士に対する殺意を推し測る。

「まさかそんなことはないさ。言っただろう？殺そうと思ったって。殺したいじゃなくて過去形さ。こうやって無事な奉莉の様子が拝めただけでそんなもの……」

「わたしが九鳳院竜士に犯されたって言っただらあんたはどう思うの？」

弥彦の鼓動が突然、彼女の言葉によって激しく脈打った。全身の血が沸騰して頭に血がのぼり奉莉が側にいることで忘れていた九鳳院竜士に対する殺意がよみがえる。

奉莉の真つ直ぐで鋭い瞳は弥彦を試すようにしっかりと弥彦の目を捉えていた。その瞳がまるでいまの言葉が嘘では無く真実であるかのように弥彦の心を錯覚させる。

「さつきも言ったがまずは目を潰して……」

「そんなことやめなさいよ！」

弥彦の殺意を奉莉の怒声が蹴散らした。

「ねえ、本気で人を殺そうなんて思っているの？ねえ、なんでそんなに簡単に人間を殺そうなんて思えるのよ！」

「それはもちろん俺がおまえのことがす……」

「だからあんなことが大嫌いだっていうのよ！なんで？ねえ、なんであんな中途半端なクセしてわたしのためだとか言ってる人を殺す覚悟ができるわけ！？」

「俺はおまえのためを思って……」

「そんなのあんたが勝手にひとりで思い込んでいる妄想じゃないの！わたしはあんたに人殺しになんかになってほしくない！わたしがそんなことされて喜ぶと思っているの！？」

「おまえが犯されているのなら竜士の奴を殺すのは俺の……」

「いい加減にしなさいよっ！わたしのためだとか言ってる人殺しを正当化しようとするあんたは殺人鬼と同じよ！そんなに人が殺したいなら戦場でも地獄でも行けばいいじゃないの！」

奉莉の言葉は弥彦の心の奥底に強烈な勢いで流れ込み弥彦の自尊心を傷付ける。

「ねえ、弥彦。ずっと此処で眠っていたあんたは知らないだろうけどわたしは竜士の奴に犯されたときとても辛かった、痛かった、苦しかった、怖かった、泣きたかった」

奉莉は涙ながらに九鳳院竜士に犯されたときのことを語る。

「でもね。きつと弥彦がまたわたしのことを助けに来てくれるって信じていた。こんな最低な男は弥彦がやつつけてくれるって信じてた。わたしは五月雨荘で弥彦の秘密を知ってもそんなもの本当はどうでもよかったの」

「……………」

「崩月弥彦はわたしの初恋の人。わたしの正義の味方。そんな男の子の家柄が殺しの家系だろうと人間じゃない怪物だろうとわたしにはそんなもの関係がなかった」

「……………それじゃあ」

「だけど弥彦はわたしを助けには来てくれなかった。その代わりにわたしを助けてくれたのは九鳳院紫を助けるためにやってきた紅真九郎さんだったの。真九郎さんに助けられてわたしは竜士の横暴な暴力から救ってくれたことに対する安堵と弥彦がいないことに対する失望に泣いたわ」

「待ってくれ！俺はおまえを助けようとした。だけど俺が無力なばかりに俺の力ではおまえを救えなかった。言い訳でしかないが俺はおまえを竜士から助け出す途中だったんだ」

弥彦は必死に自分があの時、あの場に居たことを訴える。それを彼

女に証明できるものがないことが齒痒かった。しかし奉莉は弥彦の言葉に頷いた。

「知ってるわ」

「えっ？」

「弥彦が覚えていないのも無理ないわ。あの時、全身血塗れで意識がない弥彦をホテルの最上階まで連れてきてくれた警官の人がいたの」

弥彦は警官の知り合いで自分をホテル最上階に連れて行けるほどの地位と行動力それから覚悟を持った人間に心当たりがあった。

「《円堂》の関係者か……」

「円堂かどうかはわたしは知らないけど、その警官の人が『きみを助ける為に命を賭してこの少年は必死に九鳳院家に抗っていた』って教えてくれたわ。それを聞いてわたしはなんて馬鹿な女なんだろうと後悔した」

奉莉の顔が後悔の念で曇りとても幼い少女とは思えないほどに自嘲気味な笑みを浮かべていた。

なんて哀しい顔をするのだろう、と弥彦は胸が締め付けられる想いで必死に動かない腕を伸ばそうと努めてみたがやはり無理だった。弥彦の様子に奉莉は彼の動かない片腕を自分の小さな両手で捉えようと優しく包み込むように握った。その手はとても暖かかった。

「弥彦はこんな瀕死の状態になるまで闘ってわたしのために命まで賭けてくれているのに。わたしは弥彦のことを都合のいいときだけ

頼って信じて、勝手に裏切られたと思っただけで失望して、なんて図々しい愚か者なんだろうって思ったの」

「おまえの気持ちを裏切ったのは俺の方だ。失望したって構わない。都合のいいときだけ頼ったっていい。そうやって自分だけを責めるのはやめてくれ。その責任は俺にある」

奉莉は首を横に振り弥彦の言葉を否定する。

「そうやってなんでもかんでも自分が悪いって思う思考はやめなさいよ。これはわたしだけの気持ちの問題であってあんたが共有できるものじゃない。誰かと共有するようなものでもない」

「奉莉はまだ子供なんだ。悲しい時や泣きたい時はその気持ちを誰かと分け合えばその分、そんな不愉快な気持ちを少しでも減らすことが出来る。なあ、俺を頼ってくれよ。俺では役不足か？」

奉莉は複雑そうな表情を浮かべたがすぐに涙を拭いてはにかんだ笑みを弥彦に見せた。

「……ありがとう。でも弥彦、あんたもまだ子供じゃないの？」

「いいんだよ、俺は。もうおっさんの年齢くらいに歳を重ねているからさ。おっさんって言っても無駄に歳を重ねただけの子供だけだな。全然、俺ってダンディっぽくないだろ？」

「ダンディって。それ冗談で言ってるの？あんたには一生似合わない表現よ、それ。あんたにはせいぜい『のび太』がお似合いよ」

「おまえ『のび太』を馬鹿にしすぎだ。のび太の方が俺よりもずー

つとすっかりした人間性があるよ。彼は射撃と昼寝の天才で、人の幸福を願う人の不幸を悲しむことができる人間なんだぞ」

「最後のは映画の台詞でしょ？嫌だなーわたしの好きな人がアニメおたくだなんて笑えないわ」

「国民的なアニメで俺をアニメおたくと称するのは真のアニメおたくに失礼だろ。っていうかおまえもちゃっかり知っているし」

「いいのよ。わたしあのアニメ好きだもの。それにまだわたしは七歳のお子様なんだからアニメを観賞するのは当然の権利よ」

「じゃあもちろん、そのお子様の権利とやらには俺も含まれているんだろ？」

「駄目よ。だってあんた自分で自分のことおっさんだって言ったじゃない。おっさんはもうお子様じゃありませんので権利は剥奪です。残念でした」

「横暴だ。独裁だ。遺憾の意をいまこの場で表明するぞ」

「あははっ！なによそれ総理大臣のモノマネのつもり？」

弥彦のふざけた発言が奉莉の笑いのツボに入ったのか彼女は愉快気に笑った。

幼い子供らしい屈託のない笑いと笑い声。それは弥彦にはとても心地の良い音楽。

奉莉の笑みにつられてわけもわからず弥彦も笑う。子供ふたりの愉快な笑い声が病室に木霊した。

ひとしきり二人で笑い落ち着きを取り戻した後で弥彦はさきほどま

での会話の続きを彼女に促した。

「なあ、俺たちはいつたいなんの話しをしていたんだっけ？」

「あんたがのび太ってことと、あんたには髭は似合わないということと、わたしが馬鹿な奴ってこと」

「俺の髭の話はしてないだろうが。っていつかそんな話だったか？
もっと暗い話をしていたと思うんだが……」

弥彦の横着した様子に奉莉はやれやれと溜め息を小さく吐くと一度深呼吸をして真剣な瞳で弥彦を見据えた。

「大事な話よ。人殺しをしようとする弥彦のことがわたしは大嫌い
ってこと。ちゃんと覚えているでしょ？」

「それは無理な相談だよ。俺は裏世界の住人で悪宇商会にも所属し
てるからいつかは人殺しをすることになると思うから」

裏世界は弱肉強食の世界。勝つか負けるか勝者が敗者が強者が弱者
かのどちらかしかないシンプルな世界。

欲しいものは力で奪い。力が無ければ大金をはたいて悪宇商会など
の非合法的な組織からの刺客を雇い奪い取る。

そんな組織に身を置いている弥彦に「人を殺して欲しい」と殺しの
依頼がくれば断る理由はない。

決して人殺しをすることに正当な理由などありはしない。だが、そ
ういった依頼が弥彦にまいこめば自分の手を血で染めてもやらねば
なるまい。

悪宇商会がどんなに冷酷で残酷で鬼畜な組織でもその組織に自分の
身を売り、その世界で生きることを決めたのは弥彦自身に他ならな

い。
そういつた事情を一般人である幼い少女に話すには気が重いがこの少女には秘密は無しだ。ありのまま話すとしよう。

「ねえ、弥彦。それはどうやっても防げないの？その悪宇商会つてところから逃げられないわけ？」

「たぶんだが逃げたらきつと地球の裏側までしつこく追いかけてきて制裁でぶち殺されるだろうな。それに悪宇商会に所属したのは俺の意思だから『ごめんさい。やっぱり辞めるわ』なんて言ったら家族にも友人にも、もちろん奉莉にだって危険が及ぶかもしれない」

「弥彦がそんな危ないところに決めたっていう理由って人殺しをしたいってこと？」

「それはない。それだけは、ない。出来ることなら人殺しの仕事を避けたいぐらいだ。俺はまだ仮入社した研修期間の新人社員だからそんなこと言える立場ではないだろうけどな」

弥彦の言葉を吟味するように真剣に聞いていた奉莉はベットで横になる弥彦の隣に移動。モゾモゾと布団を押し退けて弥彦の隣で横になった。

突然、奉莉が大胆にも自分のすぐ横に移動してきたので弥彦の心臓は跳ね上がるほどに高鳴り、頬は朱色に染めて恥ずかしくなり視線は彼女ではなく窓の外を眺めることで平常心を努めた。

「わたしと弥彦ではもう住む世界が違うのね。違うわ、最初から別世界の住人だってことね。童話に出てくる王子様に恋する庶民の女の気分だわ」

ずいぶんと抽象的でロマンチックな例えだな、と弥彦は苦笑するとすぐ側で奉莉の吐息を感じつつ視線は窓に向けたまま口を開いた。

「表世界と裏世界の境界線は曖昧なものだよ。奉莉の例えでとらえるなら人がたくさんいて賑わう街とその街にある路地裏ぐらいの違いだろうな。ふたつの世界はほんの少しの好奇心と探究心で足を踏み出せば行き来できてしまうぐらい身近な位置にあるんだ。だから俺みたいな調子に乗った男は痛い目をみる」

「今更だけどあんたつてずいぶんと危ない橋を渡っていたのね。それじゃあ命がいくつあっても足りないわよ」

「そうだな。正直にいうと俺はもう二回程死にかけてる。どうやって生き残ったかという二回とも誰かに助けられたんだな、これがさ」

「そんな軽い調子で言うことでもないでしょうに。二回も死にかけてそのどちらも助けられたって運が良いっていえばいいのかしら？」

運勢などという迷信は弥彦は信じてはいない。風水や陰陽道、もちろん魔法や魔術の類も信じていない。

でも人間の善意だけは信じている。自分が命からがら助かったのは祖父の孫を思う気持ちと見ず知らずの勇敢な男性のおかげなのだ。

「まあこれからも死なない程度に限度をもって事件に人助けに首を突っ込むんだろうな。こればかりはどうにもならない」

「あんたの限度は自分が瀕死になるまで頑張る、ていうことだからわたしには信用ないわよ」

弥彦の行動理念にすっかり呆れ、そしてその行動を止めることを諦めている奉莉はそんな馬鹿な男に微笑んだ。

恥ずかしくがって一度もこちらを視ずに窓の外ばかりに目を向けて自分を見ようとしなない男に奉莉はひとつとっておきの悪戯を閃いた。この悪戯は相手が異性であれば、そしてお互いに相手に好意を寄せているのであればとてつもない効果を発揮する。

奉莉はこれから行う悪戯の結果を想像するだけで自分の心臓の鼓動が早くなるのを感じ、頬が朱色に染まりとても恥ずかしい気分になった。

「ちょっと、弥彦。あなたが絶対に死なないようにとっておきのおまじないを教えてあげるからこっち向きなさいよ」

「なんだよ、それ。本当にそんなおまじないに効果があるんだろう……！」

弥彦は怪訝に思いながらも首を横に、奉莉がそこに添い寝する方向にゆっくりと向けた。

そして奉莉の顔が目と鼻の先にあることに驚くより先に彼女に唇を塞がれた。

視線と視線が重なり合う。唇と唇が重なり合う。気持ちと気持ち为重なり合う。

その瞬間、ふたりのまわりを流れる時間がとてもゆっくりと感じられた。

目を見開いて驚愕するしかない弥彦の唇から奉莉は名残惜しそうに自分の唇を離す。

そして弥彦だけに彼女は最高にはに cand 笑みを見せて言った。

「おまじない成功」

耳の先まで真っ赤に羞恥の色に染めた幼い少女の笑みが弥彦には強烈な衝撃を与えた。

「反則だろ、それ」

少女と同じように耳の先から、はたまた手の指先から足の指先まで全身茹でたタコのように真っ赤にした弥彦はあまりの衝撃に気を失った。

最高の幸せと幸福感に全身を包まれて弥彦はその余韻に浸りながら意識を失った。

第三十六話 おまじない（後書き）

いかがでしたでしょうか。

長文なうえによくわからない展開。

一カ月以上お待たせした結果がこれです。

ご感想などで「この表現はないんじゃないの」と指摘されれば
本文を書き直しますので、どうかご感想を戴きたいです

第三十七話 日常への再帰（前書き）

寒いギャグが多いかと思いますがご愛読のほどよろしく願います
追記 1月26日 本文を大幅に修正

第三十七話 日常への再帰

朝の露が一面を蔽い、てんで先を見通すことが出来ない窓ガラスから射し込む暖かな日光の陽だまり。

点々とガラスの表面にこびり付く水滴にその光が反射してまるで鉱石が輝いているかのように光を反した。

まだ早朝とあれど、しん、と静まり物音ひとつない静寂と緊張が世界を支配する時間帯。

その静寂を機械的で一定のリズムを刻む電子音が断ち切った。その電子音の正体は可愛らしいマスコットキャラクターを模られた目覚まし時計。

ピ、ピピ、ピピピ、ピ、ピピ、ピピイイイ!!!

最初は淡々とゆっくり小刻みにリズムを刻んでいた電子音はある瞬間をきっかけに気にも触れたかそれとも物狂いにでもなったかの如くけたたましいまでの雑音を発した。

この五月蠅いを通り越して騒音にもなりかねない狂詩曲を奏でる目覚ましを昨晚のうちにセットした張本人は布団の上で横になっていた。不愉快なまでに鳴る雑音に眉をしこたまひそめて。

自分の体温で温い布団から出たくないのか、柔らかくちようどよい弾力を備えるお気に入り枕の枕に顔を突っ伏せて身体を覆う布団の毛布を耳元まで引き上げる。

ピピピイイイイイ!!!

目覚まし時計は機械。与えられた仕事を達成するまで己の仕事に徹する憎い奴。布団からまるで起き上がる気配の無い人物と目覚まし時計との徹底抗戦が開戦。

だが、この早朝の寝起き合戦は早々と決着がついた。

「ああ!もうっ!わかった!わかりましたよ!俺の完敗ですよ!...
...まったく毎日、毎日、朝っぱらから元気なやつだよ!!おまえっ

てやつは……」

朝一番に口を開いて出てきたのは目覚まし時計への不平と不満の文句と愚痴。その愚痴を発したのはまだあどけない幼さが前面に押し出される少年だ。

少年は毛布を押し退けて上半身を起こし両手を天に伸ばして伸びをする。ポキポキと肉体のいたる箇所から骨が鳴りっただけ心地よかつた。

だらしなく大口をあけて大きな欠伸をもらしつゝ目頭を左手で擦り、右手で目覚まし時計の頭にあるボタンを押した。

ピッ！

あれほどまでに耳障りだった機械音はボタンを一押ししただけで止まり、再び早朝の静寂と緊張感が舞い戻って来る。

目覚まし時計のボタンを押すときに伸ばした少年の右腕。寝ていた時に寝相が悪かったせいも長袖のパジャマの袖が綺麗に捲くれていた。

日本男児の平均的な腕の細さと肌の色を持ち合わせた少年の右腕ではあったがただひとつだけ平均、つまりは普通とは異なる箇所があった。

それは黒い斑点。骨を砕き、肉を貫かれた証。鮮血を防ぐために自然と血が凝固して出来た風穴の修正箇所。つまりそれは銃痕だった。右腕に残る銃痕はひとつだけではない。まるで蜂の棲家か、それとも新手の不気味なファッシヨンのよう手首から肩にかけて無数に点々と黒点がある。

パジャマのせいで一応は隠れてはいるが実はこのような銃痕が少年の左腕にも右脚にも左脚にもある。幸いといえいいのか顔面と首周り、そして下腹部の急所にはだけは銃痕はない。

少年はその普通とは異なる、自分の異常な腕に興味すら抱かずにとっても慣れた様子でパジャマを上下共に脱いで布団の上で下着一枚の姿になった。

枕元に置かれたあどけなく愛玩動物にも似た愛着さえ湧いてくるであろう目覚まし時計の横にある木製の薬箱を開けると中から小さな箱に入った塗り薬を取り出す。

取り出した塗り薬の箱の蓋を開けて指先にひとすくいすると手馴れた手つきで全身にある銃痕にペタペタと塗りたくる。

この塗り薬はただの市販で売買できるような物ではない。市販で銃痕に効く薬があるかどうかは別として、この薬は代々少年の家に伝わる銃痕用秘伝の良薬らしい。

何故そんなものが少年の手元にあるのかというと少年の家柄が原因なのだが、当の少年は自分の家にこんなものがあることは自分の肉体がこのような姿になるまで知らなかった。

なにしろこの塗り薬は半人前の者に振舞われるモノ。つまり少年は半人前。否、本当はそれ以下なのだ。少年も重々承知していた。

未熟の半端者。まさに自分にとても相応しい言葉だ。

少年の哀れで醜い姿を視て少年の祖父はこう言った「拳銃ごときに遅れを取るとはそれでも崩月家の男児か」と。

孫の肉体の心配をするより家柄を穢した少年に祖父は怒り叱責したのだ。

少年が決起とした一連の重大事件。少年の家族と友人さえも巻き込んだあつてはならない忌避すべきこと。

結果は散々の惨敗。周りの至る所に迷惑と心配と苦勞をおかけした。それでもまた少年の家族は少年を見捨てず、むしろ大切な家族を守ろうと行動をおこして少年が知らぬ所で外堀を埋めていたのだ。

いくら感謝してもしきれないほどの恩義。少年はまた自分を家族として迎え入れてくれた崩月家に報いなければならぬ。これは一生涯を懸けてもせねばならない自分の業だ。

「弥彦おーそろそろ起きなさい。起きてるのぉー？」

「はい。いま起きたとこー！」

独りせつせと身体に塗り薬を塗っている作業をしていた弥彦に自室の入り口である襖ふすまの外から母親である崩月冥理からの起床確認があった。

一通り身体全身に塗り薬を塗り終えた弥彦はパジャマの長ズボンだけを穿いて上半身は裸のまま片手に薬箱を携えて部屋から退出。

日本家屋の崩月邸にある長い渡り廊下。素足で廊下を歩く弥彦の足裏に軋まない床板から冷気が伝わる。それは眠気が残る弥彦の意識を覚醒させるのにいい目覚ましとなった。

廊下を歩き居間に到着した弥彦はそのまま居間を通り抜けて台所へ移動。台所ではエプロン姿の冥理が忙しい様子で朝餉あさげの準備に取り掛かっていた。

「お母さん、おはよう！」

「はい、おはよう。朝から元気がいいじゃないの。さては今日から久しぶりの小学校だから弥彦ったら張り切っているのね？」

まな板の上で野菜を包丁で捌いていた手を止めて冥理は振り返ると弥彦に微笑んだ。

弥彦は事件に首を突っ込んで怪我を負い病院のベットの上で一週間ほどの休養を取っていたので確かに冥理の言うとおり久しぶりの小学校に胸が躍っていた。

だが、この高鳴る胸の鼓動はそれだけが原因ではない。不肖の日本男児、崩月弥彦の遅い春の訪れである。

「そ、そうだよ！あーっ小学生は楽しいなあー」

ぎこちない笑みを浮かべて弥彦は歯切れ悪く返事を返した。その怪訝な息子の様子に冥理は目聡めとくく「ははあーん」と不敵な笑みをみせ

ると左手を弥彦に差し出し小指を立てた。

「弥彦つたらおまーせさん、ね」

「な、な、なんで俺がおませさんなんだよ」

顔の頬を朱色に染めて動揺が隠せない弥彦はみるからに狼狽して母を問い詰める。

弥彦の動揺する様子に冥理は悪戯な笑みを浮かべてその場でしゃがみ込み弥彦と視線の位置を合わせる。

「あら？まさか弥彦つたらお母さんが奉莉ちゃんとあなたとの関係を知らないとも思っていたの？」

冥理の言葉に弥彦の肩がギクリと上下に跳ねた。

「げえっ！？なんでバレてんの！？お母さん誰からそのこと聞いたのさ」

天王寺奉莉と崩月弥彦は恋人同士。それもまだ恋人になってから数日と経っていない初々しい関係。主に初々しいのは彼女に接吻されて気絶した弥彦の方であろうが。

お互いにこのことは両親や友達には秘密にしようとして約束さえた。幼い少女である奉莉としてはこの関係を公のものにはしたくないらしい。

弥彦としては彼女の意見を尊重してその案を呑んだが、彼としては別にやましい事をしていないわけではないのだから二人の関係を別段隠す必要はないのではと疑問に思っている。

そこは恋する乙女心。幼い少女なりになにか弥彦には想像もつかない考えがあるのだろうかその考えは母親には通用しなかったようだ。

「母の勘ってやつよ。その様子だと凶星ってことかしら？わたしの勘もまだまだ捨てたものじゃないわね！」

「……お母さんには敵わないな。あっさり秘密がバレてーら」

「いいじゃないの！二人の関係が恋人同士だろうが敵同士だろうがお母さんは弥彦のこと応援するわよ。もちろん！奉莉ちゃんが弥彦の恋人さんならお母さんは安心して弥彦のことお任せできるし祝福するわ。でも……」

「でも？なに？」

「奉莉ちゃんがいくら可愛いからって押し倒したらダメよ？」

「……押し倒す？なにそれ？」

「もちろん、セックスよ」

「……………」

冥理の爆弾発言に弥彦は手に持った薬箱を落としてしまいそうな程に絶句して言葉を失った。弥彦の意識が一瞬、遠退いたのは気のせいだ。

冥理は冗談で言ったわけではないようで先ほどとは打って変わって真剣な表情で弥彦に言い聞かせる。

「これは大事なことから一応、弥彦にも言っておくけど、いくらわたしとうちのお父さんの貞操概念が低いからってむやみやたらに女の子を押し倒したらダメよ。そういうのはちゃんと女の子を尊重

して尚且つ時間と手順を踏んでからなんだからね」

うちの母親と祖父の貞操概念ってそんなに低かったか？と今更ながらに弥彦は疑問符を浮かべる。

しかし、その疑問は祖父の色恋沙汰優先の生活と母の寛容な姉と兄弟子の肉体関係なんてバツチこいッ！の数々の記憶が呼び起こされたので解消した。そして解消したと同時にひどく頭痛がした。

目頭を指で押さえながら弥彦はいたって平静に常識で物事を考えてから清楚で若い見た目に反して性に寛容な母親に意見する。

「俺と奉莉はいたって健全な関係を築いていくつもりだからお母さんの心配するようなことはないと思うよ。というか、俺たちまだ小学生だから！押し倒すとか性的な意味じゃなくて暴力的な意味だから！」

「あらあら、暴力はダメよ。お母さん、そういうのは感心しないわよ」

「それはお母さんの早とちりの勘違いだよ。奉莉はほら、武藤環むとつたまきさん仕込みの空手を習っているからさ。そこの女子と同列に考えていると急所に強烈な蹴りが叩き込まれるんだ。しかも環さんが余計なことまで教えるから、あいつ寝技まで使うし……痛かったなあ」

天王寺奉莉の組み手の相手をしていた時、彼女が姿勢を低く構えたかと思いきや急に弥彦の両脚を捕まえて彼を押し倒してそのままの勢いで寝技に持ち込まれた時の記憶が鮮明に蘇る。

空手の試合をしていたはずなのに畳の上で関節を極められて逃げ出せずに弥彦は涙目で参ったと降参だというばかりに畳を両手でバンバンと叩いたものだ。

弥彦の無様な姿を視て審判であるはずの環が腹を抱えて大笑いして

「キヤーっ！奉莉ちゃんが弥彦くんを襲ってるーっ！」なんて黄色い声援を送っていたのはいつたいなんの冗談かと思つたほどだ。空手道場の師範である武藤環が奉莉に面白半分で寝技など教えるからいつの間にか彼女は空手から総合格闘技まで扱える武人になっていた。

あの時ほど奉莉のことが怖いと思つたことはない。その後、連続でえんどうまごか おちばなひがる円堂円と墮花光相手に組み手を行つて同じく寝技に持ち込まれて弥彦が惨敗したのは云うまでもない。

空手道場創立以来で未恐ろしい三人娘が誕生してしまったと道場にいた男勢は背筋が寒くなつたと皆が口を揃えて人柱となつた弥彦に劣いの言葉と謝辞を贈つたのは三人娘には内緒だ。

「ああ、そうだ。お母さんに塗り薬を塗るのを手伝ってもらおうと思つていたんだつた」

弥彦は苦い記憶を振り払うと冥理に手に持つた薬箱を差し出した。すると冥理は申し訳ないような顔をして首を横に振るう。

「ごめんなさいね、弥彦。いまお母さん朝食の準備が忙しいから手伝えないわ。わたしの代わりに夕乃かお父さんにでもお願いしてもらえる？たぶんそろそろ夕乃が顔を洗つて来る頃なんだけど」

「わかつた。それじゃあ夕乃お姉ちゃんにお願いしてくるよ」

「そうしてちょうだい。ああ、あとついでに薬が塗り終わってからでいいから散鶴を起こしてきてもらつていいかしら？」

「お安い御用だよ」

冥理に「おねがいね」と念を押されてから弥彦は台所をあとにして

洗面所に向かった。

すると予想どおり洗面所で顔を洗う最中の弥彦の姉である崩月夕乃を発見。いそいそと廊下を進み弥彦は姉に朝の挨拶を交わす。

「夕乃お姉ちゃん、おはよう！」

「その声は弥彦ですか？ちょっと待っていて下さいね」

夕乃は洗面台の蛇口を止めると水で濡れた顔をタオルで拭き水気を取る。

まるで一切の無駄の無い流れるような動作で洗顔を済ませた夕乃は弥彦の姿を視界にしつかりと捉えてから挨拶。

「おはようございます。それで、弥彦がその手に持った塗り薬をあなたの背中に塗ればいいんですよね？」

「うん、そうだよ。お、お願いします」

弥彦が説明せずとも彼が上半身裸で塗り薬を持って横に待機していたことから夕乃は弥彦の頼みを瞬時に汲んでくれた。

本当に他者の気配りが上手な姉である。彼女と弥彦の兄弟子である紅真九郎が通う星領学園での夕乃の評価はとても良くそれは逆に弟として鼻高々で恐縮ものだ。

星領学園きつての学園に咲く一輪の可憐な花。辞書で大和撫子とひいたら夕乃のことだと学園の男子たちのなかではもっぱらの噂だと真九郎から訊いたことがあるほどだ。

弥彦から薬箱を受け取ると自分に背を向けるように促して夕乃はその場でしゃがみ込んだ。歳の差、身長の違いかこういふときはとても不便だ。

優しい手つきで弥彦の背中に残る無数の銃痕に塗り薬を塗る夕乃は

背中越しに口を開いて弥彦に言った。

「本当に痛々しい傷痕ですね。ここまで酷い手傷をわたしの弟に負わせるなんて《九鳳院》の《近衛隊》には一度、わたし直々にご挨拶が必要でしょうね」

「ご挨拶ってそんな大袈裟な……」

崩月夕乃は決してお淑やかで可憐なだけの淑女ではない。その御身には弥彦と同様に裏十三家《崩月》の血が色濃く流れている。

それも崩月弥彦なんて霞むほどの力と技を兼ね備えた崩月の《戦鬼》の力を持っている。

弥彦はこの目で夕乃が戦鬼になった姿を拝んだことはないし彼女が戦鬼になれるのかさえわかっていないが、そこは常日頃の弥彦の経験からそう思わせるのだ。

弥彦は姉の夕乃との組み手で一度だって勝ちをもぎ取ったことはない。兄弟子である真九郎も同様にだ。

夕乃は無駄の無い動作と手数のある技で彼らに隙を作りその隙に渾身の躊躇いなし手加減なしで一撃を叩き込む。

彼女との組み手という名の崩月流の修行でどれほどの怪我を負わされたか弥彦には検討もつかない。それほどまでに崩月夕乃は手強く、硬く、揺るがない。

そんな彼女の上をいく人物があと二人ほど弥彦の身内にいるのだが、本当に《崩月》という家柄は弥彦の想像を軽々と凌駕して彼を突き放していく。

自分には姉のような才能が無いと諦めるのは容易いが弥彦にはどうしても守りたいものがある。その守りたいものを守り抜くには力が必要だ。

だから弥彦はこの家柄に自分の才能に絶望はしない。逆にこれほどまでに差があればこそ喉元に喰らいつく勢いで稽古に鍛錬に励める

というものだ。

「……冗談ですよ。それにこの傷痕は弥彦の戒めです。自分の身に余る行動を取ればその先にあるものがなんであるか、という教訓という名の戒めです」

「戒め……？」

「命の危険を伴った痛い教訓を近衛隊という反面教師と闘うことで学んだはずですよ。これをいい機会に弥彦が一回り大きくなったかと思っていたんですが……」

夕乃言葉が途中で途切れ、ついでに弥彦の背中をから彼女の手が離れたので弥彦は焦れた様子で振り返り夕乃の様子を窺う。

そこにはいつものように綺麗に微笑む姉の姿があった。普段どおりの夕乃の様子が逆に弥彦の不安をよりいっそうに煽る。

「背中の方は全て薬を塗り終えましたよ。もう冬場なんですからいつまでもその格好だと風邪をひきますよ。ほらほら、風邪をひかないうちに早く着替えてらっしゃい」

折っていた膝を伸ばして姿勢を正すと夕乃は洗面台の蛇口を捻り塗り薬が残る手をべた付きが残らないように水でよく洗い流す。

夕乃から薬箱を返された後、背中を押されて自室に戻り着替えてくるよう促された弥彦は渋々とした様子と後ろ髪引かれる思いで洗面所をあとにした。

自室に戻る前に冥理に頼まれたことを思い出して妹の崩月散鶴が眠る寢室に寄り散鶴を起こし顔を洗ってくるように妹を促してから弥彦は自室に戻った。

自室に戻った弥彦は布団を折りたたみパジャマから私服に着替える。

季節が冬のおかげで弥彦の全身にある銃痕を長袖のシャツと長ズボンで隠せるのはとても助かった。

机の上に置かれた教科書と筆記用具を黒いランドセルの中に詰め込んで朝の準備を整えた後で部屋の壁にたて掛けられた時計に視線を移して時刻を確認。

そろそろ朝食の時間帯だったので弥彦は自室の窓を開けて早朝の新鮮な空気を部屋一杯に取り込んでから家族の待つ居間に向かった。

朝の通勤電車に揺られること数分。小学校最寄の駅に到着すると弥彦は背中に背負ったランドセルの位置を正してから学生や会社員と共に電車を下車する。

駅舎から抜け出した弥彦の視界に映るのは自分と同じようにランドセルを背負った小学生の集団と星領学園の制服に身を包んだ高校生たちが意気揚々と通学路を歩き談笑しながら学校に向かう普段通りの日常の場面だ。

このなんともない日常の景色が弥彦にはとても久しく懐かしい思いが込み上げてくるほどに感慨深いものがあつた。

それもそのはず、弥彦はつい先日まで生と死の狭間を彷徨っていたのだ。その前は闘争の中をその身ひとつで駆け巡りたったひとりの少女を捜し求めた。

表の日常という名の世界。裏の非日常という名の世界。表裏一体の生と死の世界を跨ぎ、その結果としては弥彦は裏世界にどっぷりと片足どころか全身を浸かってしまう最悪の結果となってしまうが後悔はもう捨てた。

こうやってまた表世界の日の光りが眩しい日常を謳歌できるほどの余裕がまだ弥彦にはあるからこそ地面を這ってでも生きていける。そしてそのために犠牲にしたもの失ったものに後悔することはやめたのだ。

弥彦は円堂円に貸したままのコートの代わりに眞理が新しく買い与

えてくれたモッズコート（女児用）の両ポケットに前方から吹いて来る寒気を伴った風から凍える身を守るように両手をすっぱり入れると独り小学校に向かって歩きだした。

駅前の商店街を抜けて住宅街を素通りしそれほど時間をかけることなく小学校の校門に到着した弥彦ではあったがその登校途中で気になる噂話を耳にした。それは小学校に程近い位置にある星領学園に通う女学生たちのほんの噂話だ。

なんでも隣の小学校に超VIP待遇の有名人が転入したらしい。

なんでもそれはうちの男子学生の側にすこしでも居たいからとかでの色恋沙汰らしい。

禁断の身分と歳の差を越えた大スペクタクルラブロマンス物語の序章らしい。

などと最後に関しては何か新手的映画の宣伝かまたは決まり文句かと弥彦が思ったほどだ。

所詮は学生の噂話。根も葉もない空想や妄言の類。根拠のない絵空事だ。

噂話を鵜呑みにして本気になるには判断材料が皆無。弥彦がこんな噂を気にする道理はないのだが、ないのだが、その噂の身分と年の差を超えたカップルとやらに心当たりがあるので一概に否定することができない。

そういえば今日の朝食の場で弥彦が九鳳院紫くほういんむらたけについて話題を挙げたのだが姉の夕乃がその名を聞いた途端にどこか不機嫌な様子だったような気がしないでもない。

あの複雑そうに悩んだ姉の顔は弥彦の経験からすると兄弟子の紅真九郎が絡んでいると思われる。それも良い意味ではなくて悪い意味でだ。結局、姉の不機嫌な理由はわからずじまいで朝食はお開きになったが。

そして噂を否定できない要因がもうひとつ。弥彦は通学途中ではとても珍しいモノ、否、初めて目にするものをその目にしたのだ。

それは通学路を逆流するように小学校の方面から駅方面に向かう一

台の黒塗りの高級車。いかにも身分が高そうな裕福な者たちが利用するような庶民には馴染みないもの。

通学路になんとも場違いでそぐわない異物を前に弥彦はおるか周りにいた学生は目を剥いて驚き、小学生の集団にいたっては車を指差す者や車の後を追おうとする者さえいた。

そんな庶民の感覚が拭えない弥彦は高級車にも驚いたが、それ以上に驚いたことがある。それは高級車を運転していたドライバー、その人物。

弥彦がその人物を視界で捉えられたのは車が弥彦の前方から走行してきてフロントガラス越しに視えたほんの数秒間。だが、その数秒間だけで弥彦には十二分過ぎた。

ハンドルを握るドライバーは黒ずくめのスーツで身を固め、黒いソフト帽を被り、髪には白髪がまじる初老の男性でなおかつ左目には眼帯。その風貌は世間的な偏ったイメージではあるがどこかのヤクザの組員そのものだ。

それほどまでの人物がドライバーを務めているのだ、きっと大層な身分のお方が後部座席に乗っているのだらうと弥彦は目を細めたが後部座先はスモークガラスになっていて車内は窺うことが出来なかった。

朝食での姉の怪訝な態度。日常にはなかった異物そして堅気には見えない貫禄のある不審人物。女学生たちの噂話に現実味がだんだんと帯びてくるのが弥彦には堪らなく怖かった。

物思いにふけり校門前で棒立ちになる弥彦を小学校の朝礼の予鈴が気付く薬となり弥彦の意識を強引に現実に戻した。我に返った弥彦は急ぎ駆け足で自分の学び舎に足を踏み入れた。

下駄箱で外履きから上履きに履き替えて廊下を走らずに早歩きで1年3組の教室へと移動していた弥彦の耳にやけに騒がしい子供たちの声が聞こえてきた。

その声が気になり弥彦の足は自然と早歩きから駆け足になる。廊下を走る弥彦の姿を視た教師が「廊下は走らない！」と注意を促すが

弥彦はそれを無視して廊下の角を曲がりそして足を止めた。

弥彦の視線の先には1年3組の教室を前に上級生から下級生までの子供たちがヤンヤ、ヤンヤと騒がしく取り巻き教室の入り口で教室内を覗いていたのだ。

朝礼の予鈴が鳴ったというのに子供たちが自分の教室に戻らないのはそれほどまでに興味がある対象が教室内に居るのか。弥彦は啞然とした様子で取り巻きの集団に歩み寄る。

「ねえ、みんなでなにしてんの？」

ごく自然に弥彦は集団の外堀に居た少年に尋ねた。

「なにって君は知らないの？」

自分と同じように事の次第を知ってここに集ったものだと思っていた少年は弥彦が何も知らない様子なのでどこか自慢気に胸を張り無知な弥彦に教えてくれる。

「転校生だよ」

「転校生？」

「そう、転校生。しかもとびつきり可愛い女の子の！」

転校生が来たくらいでここまでひどい惨状になるものだろうか、と弥彦がその理由を訊こうとする前に少年はその場から駆け足で居なくなってしまうた。

その少年を発端に1年3組を取り巻いていた子供たちは我先にと一目散に散り散りに廊下を駆けて行った。それはまるで狩人から逃げられる小鹿の群れだ。

「まーったく、もう。毎度毎度、逃げ足だけは速いですね」

苦笑交じりの声が弥彦の背後から聞こえたので慌てて弥彦はその場で振り返った。

「なんだ、菅原先生だったか」

そこにいたのは1年3組の担任教諭である菅原。教室を取り巻いていた子供たちは教師に叱られると思って逃げ出したようだ。なんとも子供らしい理由だ。

「なんだ、なんて随分とつれないですね弥彦くんは。それはそうと一週間ぶりの登校ですね。お体の方はもう良いのですか？」

「ええ。おかげさまでこの通り問題ありません」

弥彦の肉体の調子は絶好調。武藤環から習っている空手の型を菅原に行って見せた。その力強い一連の流れる動作に菅原は拍手で応える。

「よかった。一時は弥彦くんがまた事件に巻き込まれたのかと思って肝を冷やしていたんですよ。君は私の受け持った生徒の中で一番手のかかる生徒ですから心配していたんです」

「ご心配をお掛けしてすみませんでした」

弥彦は菅原に頭を下げて謝罪したが菅原は慌てて「そんなことはやめてください」と弥彦に頭を上げるように促す。

「こうやってまた弥彦くんが登校して来てくれたんですからあなたが私に謝る道理はありませんよ。生徒の元気な姿が拝めただけで先生は嬉しいんです。ほら、朝のSHRが始まりますよ。先生と一緒に教室に入りましょう。クラスの皆があなたのことを待っていますよ」

「はい！」

ここ一番の元気の良い返事を弥彦は菅原に返して菅原と一緒に教室の入り口の扉を潜った。

教室内に菅原と一緒にやってきた弥彦にクラスメイトたちが口々に励ましも叱責ともとれる言葉を投げかける。

「崩月が帰ってきたぞ！」

「どうせまーた事件に巻き込まれていたんだろ、まったく…………おかえり崩月！」

「戻って来るのが遅えーんだよ。またお前と一緒にサッカー出来ないかと思っただぜ」

「崩月ーッ！あとで算数の宿題を僕に教えてくれーッ！」

「あ、コラッ！ずるいぞ、俺が先に崩月に教えて貰うんだぞ！」

「いーヤッ！おれが先だね！」

クラスの男子勢が揉みくちやになりながら、ある男子は片手にノートを携えて、ある男子は両手でサッカーボールを携えて我先にと弥彦に怒涛の勢いで詰め寄って来た。

その男子たちの勢いに圧倒されながらも自分の帰りをこんなにも待たせていてくれる友人たちがいることに弥彦は嬉しい涙を瞳から流した。震える弥彦の肩に菅原が優しく手を添えて弥彦を支える。

「はい、そこまでツ！そんなに皆さんがいつぺんに弥彦くんに詰め寄ったら弥彦くんが参ってしまいますよ。ほらほら、自分の席に戻りなさい。あと、算数の宿題は自分の力でやることツ！」

えーッ！と弥彦に宿題を教えて欲しかった男子だけでなくクラスの大抵の女子勢からも不満の声があがり菅原はそれに驚いたように目を瞬かせた。

菅原は「まったくあなたたちは……」と目頭を押さえて自分の受け持った生徒たちに呆れていた。そんなクラスメイトと菅原の様子が弥彦には可笑しくて久しぶりに大声で笑った。

男子たちが自分の席に戻り弥彦の笑いが収まる。眼元に溜まった嬉し涙と笑い涙で歪む視界を拳で拭い、弥彦はすっきりとした視界で教室内を見渡した。

「……えっ？」

不意に自分の視界に映る馴染みのない人物に弥彦の逡巡する視線が留まる。その人物も弥彦のことを真っ直ぐで曇りなき瞳で見据えている。

ふたりの視線が重なり合う。だが最初にその視線を逸らしたのは弥彦であった。弥彦は狼狽した様子で視線の先に居る人物を指差して菅原に問い質す。

「せ、せ、先生ッ！なんであいつがここに居るんですか！？」

「おや？その様子だと弥彦くんはすでに彼女とお知り合いですか？」

ガタツ！と勢い良く座っていた椅子を引いて弥彦が指差す人物が立ち上がった。クラスメイトたちの視線はその人物に一齐に注がれる。

「うむ！弥彦とわたしは友達だ！」

その人物は弥彦と初めて会ったときと同じように顎を引き胸を張り両手を腰に添えて堂々とした威厳ある態度で弥彦と自分は友達であると宣言した。

突然の宣言の後数秒の静寂が教室内を包み込んだ。そして「ええええエエーッ！」と教室が揺れ動くのではないのかと弥彦が思うほどにクラスが絶叫した。

「崩月ッ！おまえってやつは！おまえだけ抜け駆けはするいぞーッ！」

「九鳳院家と親しい崩月くんはもしかして……貴族様？」

「俺は信じているからな！崩月が紫ちゃんとはまだ『お友達』ということを！」

「やっぱり崩月くんは只者ではなかったか……！」

現在の1年3組の教室内を一言で表すなら『阿鼻叫喚』だろう。それほどまでに子供たちは騒ぎ慄いている。一部の男子勢は弥彦に嫉妬の眼差しを向けて泣いているものさえいる。

……なんなんだよ、これ。

朝の登校途中で星領学園の女学生が話していた噂話は真実だったよ
うだ。

さしずめ紫が大好きな真九郎の近くに居たいからという単純な理由

でこの公立の庶民の小学校に転入してきたのであろう。
国を代表する《表御三家》が筆頭《九鳳院》の子女をただの公立の
小学校に通わせるというのは学校側からしたらとても大変なことな
のではないだろうか。

菅原は生徒たちに落ち着くように普段では見ることのできないほど
声を荒げて事態の收拾を図ろうと努めているが被害は拡大する一方
で混乱が続く。

「なんとも賑やかなクラスだな！」

ここ一番の爆弾を投下していった張本人はこの阿鼻叫喚の現場を祭
りとても勘違いしているのかとても楽しそうだ。

九鳳院紫の席はどういうわけか崩月弥彦の隣。そこは日高梓という
名の少女が座っていた席だ。彼女が諸事情により転校した後、ずつ
と空席だった席に九鳳院紫が陣取っている。

いくら梓の席だった場所しか教室内に空席が無いからといって彼女
の代わりに紫が座っているのが弥彦にはどこか複雑で悲しい気持ち
を抱かざる得なかった。

日高梓は悪宇商会あくうしょうかいという裏世界の権化に目をつけられ両耳を奪われ、
聴力を失った被害者だ。彼女が悪宇商会に狙われる原因となったの
は崩月弥彦の友人だったからだった。

なんて理不尽で身勝手に残酷な事か。そのような組織に崩月弥彦が
その身を置くことになったことを日高梓が知ったら彼女はいつたい
どんな気持ちで弥彦を抱くのだろうか？

憎しみ、悲しみ、哀れみ、恐怖、それとも慈悲？それを確かめるた
めに崩月弥彦は日高梓に絶対に会いに行かなければいけない。まだ
彼女には真実を自らの口から話していかないのだから。

日高梓の席でご機嫌でご満悦な九鳳院家の子女の様子を遠巻きに眺
めながら弥彦は今後自分の身にとんでもないことが起こる予感と不
安が入り混じり呆れ半分、不安半分で窓際の席に目を向けた。

そこには苦笑しながら「まあ頑張りなさいよ」と言いたげな天王寺奉莉が弥彦に軽く片手をひらひらとさせて宙を泳がせていた。

……他人事だと思つて楽しんでるな。

川の対岸の火事はとても危険だと聞いたことがある。なんでも火の粉が風に乗つて対岸までやつてくるのだとか。

「弥彦がまた無事に学校に戻つてきて良かったな奉莉！このことを一番に喜んでいるのはおまえだろうに」

「紫ちゃん！それつてどういう意味なのかな？」

紫の前の席に座る林原杏がワクワクとした様子で期待いっぱい、胸いっぱい紫に尋ねた。

杏の質問に紫は「うむ」と大きく一度頷いて間をおいてから口を開いた。

「ふむ。杏よ、なかなかよい質問だ。実はな奉莉は弥彦のことを好いていてだな。しかも最近ではあるがその恋心がなんと！実つたと自慢気に本人から聞いたのだ。それを聞かされてわたしは悔しくてな、わたしも奉莉に続けと積極的に真九郎にアレコレと……」

「ちよつと紫ッ！そのことは言わない約束だつてわたしとあんたで誓つたでしょうが！」

今度は奉莉が勢いよく椅子を引いて立ち上がる。その慌てふためく奉莉の様子にクラスメイトたちは紫の発言が真実であると確信した。……あーあ、自分で地雷踏んでいやがる。というか、誰にも言わない約束は俺ともしたはずだが紫には打ち明けたのか。

弥彦は物見の見物に決め込んでクラスメイトたちの行く末を見守る。やはりというべきか弥彦と奉莉の関係にクラスメイトたちの驚きは

あつたものの紫と弥彦が既に友達であつたことよりも驚きの規模は小さかつた。

「まあ奉莉の様子を見ていれば大体予想は出来たよね」

クラスを代表して林原杏がそう発言するとクラスの皆は「うんうん」と首を縦に振り頷く。

そんなクラスの様子に「な、なんでよッー！」とひとり顔を朱色に染めて狼狽する奉莉。

そんな彼女の困つた顔も弥彦には愛おしいものだ。彼女を見ていると自然と笑みがこぼれるのは一種の「のろけ」というものだろうか。

「こらッー！！！！貴様らしい加減にせんかあッ！」

そんな怒号と共に教室の扉を開け放つたのは小学校では頑固者で堅物の有名人教頭先生だ。頭髪が後退しだした額に怒りの青筋を薄っすらと浮かべて教室に怒鳴り込んできたのだ。

「おまえたち！朝から元気なのは感心するがもう一時間目の授業がとつくに始まつとるんだぞ！」

教頭のあまりの迫力に教室内は水をうつたように静まり返り、菅原は黒板の上にてたて掛けられた時計を確認。生徒のあまりの騒がしさに始業のチャイムが聴こえなかつたらしい。

菅原は慌てて生徒たちに授業の準備に取り掛かるように指示を出してからお怒りの教頭に背広を摘まれたまま教頭と一緒に廊下に出た。行つた。

クドクドと教室の壁越しにでも教頭の説教が聴こえてくるあたりこれは一時間目の授業は潰れたかもしれないな、と1年3組の全員の総意であつた。

菅原が教頭から開放されたのはやはり一時間目の終業5分前だった。どこかげっそりとした顔をして戻って来た菅原の姿に弥彦は机の下で両手を合わせて「ご愁傷様です」と合掌した。

この1年3組はとんでもなく規格外なクラスなのだろう。表御三家の《九鳳院》と裏十三家の《崩月》が同じ学び舎、同じ教室で勉学に励むとは誰が予想できたことだろうか。

そんな規格外のクラスを幸か不幸か運命の悪戯で受け持つことになった担任教諭の菅原に弥彦はただただ胸の中で同情するのであった。

その後、午前中の授業はよどみなくとどこおり無事に昼休みを迎えることとなった。

クラスメイトたちが給食の準備に取り掛かる中、ひとり教室の後ろにあるロッカーから自分のランドセルを取り出してその中から包みを取り出している九鳳院紫の後ろ姿を捉えたので怪訝に思い弥彦は紫に近寄った。

「おい、紫。おまえなにやってんだよ。みんな給食の準備してんだぞ」

ゴソゴソと取り出した包みを片手で携えて自分のランドセルをロッカーに仕舞ってから紫は振り返る。

「これから真九郎のところに行こうと思ってな。ほれ、わたしが真九郎の為に作った弁当だぞ！」

包みを弥彦に差し出して胸を張り自信満々で語る紫に弥彦は溜め息を吐いた。

「あのな、紫。これからみんなで給食を食べる時間なんだぞ。真九

郎さんのところに行けるわけないだろ」

「そ、そんなことはない！わたしは真九郎に逢いたいのだ！わたしの作った弁当を真九郎に食べてもらいたいのだ！だから……！」

「だからって勝手に学校を抜け出そうとするのは不味いんじゃないのか？それじゃあ、仮に学校を抜け出したとしよう。その後、おまえはどうするつもりなんだ？」

「もちろん、真九郎を探す！」

「だから、どうやってだ？ただ闇雲に真九郎さんを探すっていうのか？昼休みの時間は有限だし無限じゃないんだ。その時間以内に真九郎さんを見つけられると思ってるのか？」

「そ、それはだな……」

紫はとても困惑した表情と悲しそうな表情を顔に浮かべる。いまにでも泣き出してしまいそうな紫の様子に弥彦はばつが悪くなり頭を掻いた。

「どうしても真九郎さんに逢いに行きたいのか？」

「逢いにいききたいに決まっている！」

瞳に涙まで浮かべてまで想い人に会いたいという切実な幼い少女の願いに崩月弥彦の決心が揺るぎおれた。

「わかった。おまえに協力するよ」

「それは本当か！？おまえと一緒に来てくれるのは心強い」

先ほどとは打って変わって表情を輝かせる紫に苦笑しつつ弥彦は釘を刺す。

「ただし！こんなことは今日限りの一回きりにしてくれ。おまえは天下の《九鳳院》で何時でも何処でもなにをしても咎められないだろうけどな、生憎ここは小学校だ。小学校にはな小学校のルールつてもんがある」

「……小学校のルール」

「九鳳院でも奥ノ院でも学ばせてはもらえない共同生活を集団で生活するための規律みたいなもんだ」

奥ノ院という単語に紫の肩が強張ったような気がしたが弥彦は言葉を続けた。

「規律つていつでもお前が想像するような堅苦しいものでも痛いものでもない。簡単で単純なもんだ。まだ小学校に通い始めて日が浅いお前には理解出来ないだろうがそういうもんは徐々に慣れていけばいい」

「……うむ」

「なーに。わからないことがあれば俺や奉莉、菅原先生にそれからクラスの皆に遠慮なく訊け。みんな懇切丁寧に教えてくれるさ」

「……そうか。小学校とは勉学を学ぶだけではなく生活の常識を学ぶところなのだな」

「そんな大真面目に考えるほどのもんじゃないと思うが、紫が理解できたのならそれでいいさ。それで、どうするんだ？俺との約束を守ってくれるならおまえに協力するが……」

「よろしく頼む。わたしを真九郎の元に連れて行ってくれ！」

「わかったよ。それなら善は急げだ。時間も限られているからな。おーい、奉莉！ちよつとこっちに来てくれ！」

弥彦は給食の準備を終えて友人と談笑していた奉莉に声をかけて手招きした。

奉莉は友人たちにはやしたてられながら頬を朱色に染めて弥彦と紫に歩みよる。

「なにかわたしに用かしら？それとも紫のことで相談？」

「そうだ。さすがは俺の彼女だ。察しが良くて助かる」

「と、当然じゃない！それで、紫がどうしたっていうの？」

弥彦におだてられて機嫌が良いのか奉莉はとても嬉しそうだ。

「あのな、お前に頼みがある」

「わたしに頼み？」

「俺と紫はこれから昼休みの間、小学校を抜け出して星領学園にのりこんで来る。その間、菅原先生に俺たちが居ないのを不審に気取られたくないから適当に誤魔化しといってくれないか？」

「ちよ、ちよつとなによそれ！滅茶苦茶なお願いじゃないの！」

「そこをなんとか頑張ってみてはくれないか？この通りだ」

弥彦は奉莉に頭を下げて願いを呑んでくれるように頼んだ。もちろん、弥彦の横では紫も頭を下げている。

そんな二人の頼みごとにNOとは断れないのが天王寺奉莉の器の大きいことを証明してくれる。崩月弥彦が彼女の好きなところ、その一箇所目だ。

「わかったわよ。ちゃんと昼休みが終わる前には帰って来るんでしようね？」

「もちろんだ。ありがとう奉莉」

弥彦は奉莉を抱き寄せて優しく抱きしめた。咄嗟の出来事に奉莉はうろたえて耳の先まで顔を真っ赤に染めて恥ずかしがる。

そんな奉莉の様子を愛おしく感じつつ弥彦は彼女の耳元で囁く。

「このお礼はちゃんとする。俺は奉莉のことが大好きだぞ」

奉莉にそう囁いた後、名残惜しそうに彼女を胸の中から解き放ち弥彦は紫と一緒に教室をあとにした。

教室にひとり残された奉莉は周囲のクラスメイトたちからの好奇心な視線と黄色い声援を耳に捉えながらも弥彦の最期に残した言葉を胸の内に反芻はんすうさせて呆然と立ち尽くしていた。

教室から下駄箱までの移動中、廊下で教師に会わないように注意しながら弥彦と紫は壁や階段の陰に隠れるなどして巧みに移動して無事に下駄箱まで辿り着くと外履きに靴を履き替えて校舎を出た。

紫の手を引きながら駆け足で走り小学校の校門を出ると100mほど先の位置にある星領学園へと移動。星領学園前の校門に辿り着きはしたが校門は頑丈な鉄柵で塞がれていて二人の学園への侵入を許さなかった。

弥彦としては崩月の戦鬼の力を使用して紫を抱えて鉄柵を飛び越える案が頭の中にあっただがさすがに真昼間の学校前なので人目につきやすく、そんな目立つことは論外だった。

「これからどうするのだ？」

不安そうな表情を浮かべて弥彦を見つめる紫の瞳を受け止めて弥彦は星領学園の校門前から移動した。

弥彦の後を紫は無言でついていく。弥彦にはきつとなにか策があるに違いないと踏んでいるから紫は弥彦を信じて彼の後を辿る。

学園の外周を弥彦は辿るように進む。学園を取り囲む頑丈な外堀がどこまでも続いていて本当に学園に侵入できる手立てがあるのか、真九郎に逢えるのか紫は不安になりながらも手に持った弁当の包みをしっかりと握り締める。

弥彦の歩む足が止まった。そこは星領学園の校舎裏。しかも校門の入り口からかなり離れている学園の隅端っこに位置していた。

「こんなに学園の入り口から離れた場所に来て大丈夫なのか？」

さすがの紫もこんなヘンピな場所まで案内されて弥彦を怪訝に思わずにはられない。

「大丈夫だ。真九郎さんはな、お昼を食べるときは大体、教室ではなくて新聞部の部屋で食べるんだとさ。夕乃お姉ちゃんからそう聞いたことがあるんだよ」

「新聞部？」

聞き慣れない単語に紫は首を傾げる。

「学生が主体となって活動する組織さ。学園内のことを記事にした新聞を学生が作る組織の総称かな」

「……なるほど。その新聞部とやらの集まりがこの隅っこで行われるのだな」

「ああ。正確には校舎二階の端にある新聞部の部室でだけだな」

ほら、あそこだ。と弥彦は指を指して校舎二階にある新聞部の部室の位置を示した。

紫は喜々とした様子で弥彦の指先にある新聞部の部室を眺めると「おい、真九郎！」と呼びかけた。

さすがに呼びかけては出てこないだろう、と紫の行動に苦笑しつつ弥彦は周囲に視線を配らせる。

「あそこに真九郎が居るのだな。よし！そうとわかればさっそくこの邪魔な塀を……どうやってこの塀を乗り越えるつもりなのだ？」

「もちろん。こうやってだッ！」

弥彦は周囲に人の気配が無いことを確認するとコートを脱いで地面に置き、服の袖を巻くって銃痕が残る右腕を周囲に晒した。

そして右肘に宿る戦鬼の力を解放。全身に溢れ出るほどの余りある力を感じつつ紫を両腕で抱えてその場で地面を蹴り垂直に跳躍した。おお！と紫が驚きとも喜びとも判別がつかない悲鳴を弥彦の胸の中であげる。その様子を弥彦は心地の良い気分で笑い飛ばして学園を

取り囲んでいた外堀を難なく飛び越えることに成功した。

土煙残さずに地面に無事に着地。紫の足を地面につかせて立たせる。

「おまえたち、どうしてここに……」

不意に弥彦の耳に聴こえたのは校舎の陰で昼寝をしていた紅真九郎のものだ。探し人があちら側からこちら側にやってくるとはなんと
いう偶然だろうか。

目を瞬かせて驚いている真九郎に紫は元気良く駆け寄り真九郎に
つぱい話かけていた。ホテル・オベロンの一件以来、紫が真九郎と
再会したのはこれが初めてのようだった。

紫は真九郎に自分が小学生になったことや新しい友達が出来たこと
や真九郎に逢えなくて寂しかったことを気持ちいっぱい溢れる表情
と態度で真九郎に聞かせた。

真九郎は紫の話を親身になって聞いていた。そして紫が手に持って
いた包みを開いて包みの中にあつた手作りの弁当を真九郎に差し出
した。

「厨房を借りてわたしが作ったのだ！真九郎のために作った弁当だ
ぞ！」

真九郎は差し出された弁当を受け取ると紫と一緒に適当な場所に座
って弁当を食べ始めた。

そのふたりの幸せそうな雰囲気と様子に弥彦は羨ましい気持ちとこ
の場に居ずらい気持ちとでふたりを遠巻きに眺めていた。

そんな弥彦に真九郎と紫が手招きをして弁当と一緒に食べようと誘
ってくれたが弥彦は丁重に断り、真九郎に現在の時刻を訊いた。

まだ昼休みが終了するには随分と余裕があつたので弥彦は真九郎に
紫のことを任せて時間が経ったら星領学園の校門に迎えにくると二
人に言い残してその場を去った。

学園の外堀を飛び越えて地面に置いておいた自分のコートを回収すると戦鬼の角をまた体内に戻らせて肉体が落ち着くように一度、深く深く深呼吸。

肉体が落ち着いてからコートを羽織り星領学園をあとにして再び小学校前の校門まで移動する。

小学校前には文房具屋がありそこでは文房具のほかにもラムネや駄菓子なども購入できるのだ。弥彦は文房具店のおばちゃんからラムネと駄菓子数個を購入すると店の前にあるベンチに腰掛けて一服する。

紫を迎えに行くまでまだ時間に余裕がある。ここでゆっくりしているのかな、と駄菓子を食べている弥彦のベンチに来客が訪れた。

サイズの大きい厚手のコートを羽織り、頭にはニット帽、眼元にはサイズの大きな眼鏡。その人物は弥彦にとっては仕事場の上司であり知り合いであった。

「学校をサボタージュしてひとり駄菓子タイムですか優雅ですね子供って……」

「そういつあなたは平日の昼間に小学校前をうろつく不審者じゃないですか」

「えっ！？わたしって不審者に見えるんですか！？」

「それはもう真っ黒ですよ。ほら、後ろを見てください。文房具屋のおばちゃんがルーシーさんのこと胡散臭そうな目で見てますよ」

「嘘っ！？」

ルーシーは慌てた様子で背後を確認するために振り向いたがそこには文房具屋のおばちゃんの姿は無かった。弥彦の会計を済ませた後

でおばちゃんは既に店の奥に引っ込んでいたのだ。

安堵した様子でルーシーは溜め息を吐くとコートのポケットをゴソゴソと漁り始めた。悪宇商会人事部副部長ルーシー・メイはどことなく野暮ったく扱いづらい女性だ。

「それで、ルーシーさんがこんなところになんの御用なんですか？」

ラムネをちびちび飲みながら横目でルーシーの様子を弥彦は窺った。

「酷いですよ弥彦くん。嘘は吐くは、毒は吐くは、態度は冷たいはでわたしのことはお嫌いなんですか？」

「仕事の上司としては好きですよ。でもプライベートではどうでしょうね……」

「なにげにきつい事をさらりと言いますよね弥彦くんって。わたしがこんなところまでわざわざ足を運んだのは忘れ物を弥彦くんに届けるためですよ」

ルーシーは漁っていたポケットから携帯電話を取り出して弥彦に差し出した。その差し出された携帯電話に見覚えがある弥彦はばつが悪そうな顔をして携帯電話を受け取った。

「せっかくわたしがお貸しした携帯電話をあるう事か落とすなんてどうという料簡りょうけんなんですか？」

「いやですね……確かにズボンのポケットにしっかりと仕舞っていた筈なんです、ほら、近衛隊の奴らと警官隊の人たちが俺のこと親の仇みたいに襲ってきたからその時に、こっ、ポロツと……」

「ポロつと、じゃないですよ。それ、我が社の特注品の商品なんて失くされては困るんです。一度目だからこちらとしては目を瞑りますが二度目はありませんよ?」

「……はい。肝に銘じておきます」

よろしい、とルーシーは頷くとベンチの席を立ち弥彦に背中を向けて歩きだした。

弥彦は慌ててルーシーの後を追って横に並び歩く。

「本当に携帯電話を届けに来ただけなんですか?」

「もちろんですよ。そのほかにわたしが弥彦くんに用があるとでも?」

「悪宇商会から仕事がまわされるのかと思っていたんですが、そういうのは……」

弥彦の疑問にルーシーは足を止めると弥彦のことを見下ろして不敵に微笑んだ。

その笑みが最初の頃に会った彼女の笑みと一致する。あの時は友人がひとり耳を削ぎ落とされるといふ惨劇の始まりだったか。

そんなことを思い出した弥彦は拳を握り身構えた。いつでも戦鬼の力を顕現できるように集中力を高める。

「そんなに怖い顔をしないでください。今回はなにもしませんってば」

「正直にいうと俺はあなたのことをまだ信用していませんよ。あなたはここ一番という時に嘘を吐く。それも最悪で最低な嘘だ。」

日高梓の事だつて人間がすることじゃないですよ!」

「腕から角を生やすような子供に言われたくないですね。わたしは人間ですよ?あなたに比べたらそれはもう普通の弱い人間です。嘘もバレなければ真実なんですよ。だから世の中、オツムが弱い人間は騙される。弥彦くんもそうは思いませんか?」

「そんなことは知りませんよ。俺には関係は無い」

「弥彦くんも、まだまだ真贋が足りませんね。まあいいんですけど……先ほどのあなたの質問ですがわたしは人事部の人間なので基本的に我が社に相応しい人材をスカウトするのが仕事なんです。だから、仕事をわたしからご紹介するというのはかなり稀なケースですよ」

「では、今回は本当に仕事の依頼ではないということですか?」

「そうですね、しいていうのであれば……弥彦くんにひとつ質問をしてもよろしいですか?」

「ど、どうぞ」

「東南アジア、ハリウッド、フランス。この三つの国または地域の中で弥彦くんが旅行したいなあと思う場所はどこですか?」

「新手の心理テストかそれとも特に意図などない質問か。質問の内容としては弥彦にはあまり馴染みや興味などない国と地域の名前。」

「ここは自分の直感に従って深く質問の意図を考えずに答えるのが得策か。弥彦はテレビで最近映画を見たのでそれにあやかって旅先を決めた。」

「……ハリウッドですかね」

「そうですか。了解しました」

「えッ？もしかして俺がハリウッドに行くなんてことないですよ？」

「さあて、わたしにはわかりませんよ。それじゃあ弥彦くん、わたしはこれでお暇させていただきます。仕事の依頼は先ほど差し上げた携帯電話でお伝えするかと思いますので今度こそ失くさないようお願いしますよ」

ルーシーは最期にそう言い残して弥彦の前から去っていった。結局、弥彦にはルーシーがした質問の意図がわからずただ頭を悩ませるだけのことでしかなかった。そう、まだこの時までには。

「おい、弥彦！なにを呆けたように突っ立っているのだ。時間が経ったら迎えに来るといつて約束したではないか。いつまで待っても来ないからわたし一人でここまで戻ってきてしまったぞ。もう昼休みが終わってしまうぞ」

いつの間にか弥彦の側まで近付いていた紫にかけられた言葉で我に返り弥彦は慌てて小学校の校舎に備え付けられていた時計に目を向ける。

紫の言う通り昼休みが終了するまでもう5分と無い。そうなれば午後の授業に間に合わなくなるし奉莉との昼休みが終了する前に帰ると約束したことが無下になる。

「おい、紫。時間が無いからこのまま教室まで競争だ」

「うむ。その提案のつたぞ！」

そう言うが早く紫はあつという間に走り出してどんどんその後姿が小さくなるまで弥彦との差を生んだ。

驚いたことに九鳳院紫は俊足だ。弥彦は自分が感心している場合ではないことを思い出してすぐさま紫の後を追った。

ふたりが無事に午後の授業に間に合ったのは言うまでもない。

昨今、現代社会の社会秩序が緩やかに崩壊の一途を辿っている我が国はその現状に危機感を持ちえることはなく、その国民性ゆえに心無い外道の輩たちが野放しになっているのが現状だ。

社会が歪んだ時、その歪んだ先で最初の獲物となる者は弱い人間、つまりは弱者。それは老人であったり、女性であったり、まだ幼い子供たちであったりする。

特に子供の被害に関しては尋常ではないほどに目に見えて酷いものがある。殺人、誘拐、強姦、人身売買といったような非道の行為。それは見ず知らずの人間が手を下すこともあれば、親類の類または子供の両親さえもが愛しいはずであるう子供をその手にかけるなどといった犯罪が現代社会で毎日のようにニュースで報道される。

そんな社会治安の悪化に伴い全国の公立小学校では児童たちの安全を守るために登下校では保護者の送り迎えを強く推奨していた。

そのほかにも低学年の児童たちの目印である黄色い帽子の廃止、一斉集団下校、教員の付き添いなどといった小さな対策を行うことで弱い子供たちを社会の歪みから守ろうとしていた。

それがどれだけの効果と実績をもたらしてくれるのかは不明。だが、なにもしないよりはマシという学校側の犯罪者たちに弱腰な姿勢が目立つのがいただけない。

崩月弥彦が通う小学校も下校の際には保護者の出迎えを推奨してお

り、まばらではあるが続々と校門前で児童たちの保護者が集まっている様子が教室の窓からよく視えた。

時刻は放課後。学校の授業もすべて終わり、1年3組の教室に残るのは日直当番の崩月弥彦と九鳳院紫、それから彼らの当番の仕事が終わるのを待っている天王寺奉莉の以上3名のみ。

日直の日誌を職員室にいた担任の菅原に手渡してからようやく日直の仕事から解放されたところには空が黄昏に染まっていた。カラスの鳴き声が哀愁を漂わせる。

「やーっと終わったよ。くたびれたくたびれた……」

下駄箱で履き替えた靴のつま先で地面をトントンとならしながら弥彦は背負っていたランドセルの位置を正す。

「わたしが日直の仕事を手伝ってあげていなかったらあなたは今頃、飼育小屋で兎と一夜を共にしていたかもね。わたしに感謝しなさいよね」

弥彦の背負っているランドセルを小突いてから奉莉が不機嫌そうな顔をして弥彦の横を通り過ぎる。

前のめりに倒れそうになった弥彦は慌てて崩れた姿勢を正して奉莉の後を追う。

「しかし、兎というものはあんなにも愛くるしい動物なのだ！こ
う、毛並みがモフモフとしていてつぶらな瞳と小さな口がなんとも
可愛いかった」

興奮気味にうっとりとした表情を浮かべて九鳳院紫は愛玩動物の手触りを思い出すように両手を宙でモミモミとして拳を開いては閉じている。

「そつかあ。紫は兎を触ったことがなかったんだもんね」

「うむ。ああやって手にとって兎を触るのはもちろん生まれて初めての経験だったが、わたしは兎という存在の動物がいることをまるで知らなかった」

「えっ！？嘘でしょ！？兎よ、兎。こっ真っ白で耳が長くてニンジンが大好きな動物で……」

紫が兎を知らなかったことに奉莉は信じられないといった様子で兎の耳を模しているつもりなのか自分の頭の上で両手を立ててびよんぴよんと飛び跳ねながら校門に向かって移動。

そんな奉莉の愛らしい姿に弥彦は「かわいい」という言葉を口から発しようとしていたのだが自分の意思とは関係のない笑いのツボが彼の腹をくすぐる。

限界だった。弥彦は奉莉のことを指差しながら腹をかかえて笑った。

「あははっはっは！おまえってそんな面白いことするんだな！アハハハっはっは！今度、空手道場のみんなの前で同じことを……ひいっ！？」

弥彦の前方、数メートル先にいた奉莉がその場でクルリと半回転して弥彦を一直線に目指して怒涛の勢いで飛び跳ねながら迫ってくる。兎の耳が鬼の角に様変わりした。

紫は身の危険を感じ慌てて弥彦から離れて安全確保。紫が安全な位置まで後退する頃には既に、地面に額を擦り付けて奉莉に許しを請う情けない崩月弥彦の姿がそこにはあった。

頭こぶを垂れる弥彦の頭部を目掛けて奉莉はいつの間にか蹴り上げていた左足を凄まじい威力と速度をともなつて垂直直下、つまりは踵を

蹴り落としたのだ。

その直後、アスファルトの地面に硬いものと硬いものがぶつかり合うとても鈍い音と小学校全体に響き渡るような野郎の悲鳴が木霊したのほぼ同時だった。

「……崩月流の稽古をしていなかったら即死だった」

小学校の校門を通過すると同時にそう呟いたのは崩月弥彦。痛みがまだ残る自分の額を優しい手つきで撫でながら涙目で奉莉に抗議する。

「あんたまだ反省していないようね。今度はいくら身体が頑丈なあんなでも堪えるところを蹴り上げてあげましようか？」

「か、勘弁してください」

横目で弥彦の下腹部を流し目する奉莉の冷たい視線に弥彦は両手で股間を隠すと額に大粒の脂汗を浮かべる。

弥彦の奉莉に怯える様子に紫は首を傾げてふと、疑問が浮かんだので馴染みが深い友人ふたりに訊いてみる。

「どうして弥彦はそんなところを隠すのだ？」

純真無垢で性の知識にはまだ疎い紫は弥彦の不可思議な行動の意味が掴めずにいるのだった。

そんな紫の質問に弥彦は答えるべきか誤魔化すべきか迷った。

この少女は長い間、奥ノ院という名の牢獄で暮らしていた。そこから開放されてやっと手に入れた自由と友達そして愛しい人。

弥彦は九鳳院紫という名の少女と友達でいることに一種の誇りのよくなものを抱いている。《崩月》と《九鳳院》などという家柄など

関係なしに純粹に友達として彼女は好きだ。

この奇跡のような繋がりや大事にしたいと思う。だけど天王寺奉莉は九鳳院紫のことをどう思っているのだろうか？

《九鳳院》に奉莉の身体を蹂躪された記憶は彼女にはまだ新しい。そんな誰にも明かすことが出来ない秘密と苦悩を抱えている幼い少女はいつたい九鳳院紫になにを思う？

答えの出ない思考に頭を悩ませながら弥彦は自分の隣を歩く奉莉に目を向けた。

「紫、それはね。男の子がみーんな持っている弱点がアソコなのよ。だから弥彦はこんなにビクビクして弱点を隠して怯えてんの」

視線が弥彦と合った奉莉は不敵な笑みで弥彦に応えると紫の質問に弥彦の代わりとばかりに律儀に返答した。

紫に対する奉莉の態度はごく普段通りのクラスメイトにするような接し方だ。つまりは友達同士の仲。《九鳳院》を恨んでいるような素振りには窺えない。

「なるほど。男の弱点がそんなところに……ん？おかしいぞ、奉莉」

「なにがおかしいのよ？」

「いやな。わたしは真九郎と一緒に風呂を共にするような仲なのだが真九郎のやつ、恥ずかしがっていつも腰にタオルを巻いて隠しているな」

「……真九郎さんと紫が一緒にお風呂？」

奉莉は怪訝そうな表情を浮かべる。たぶんなにか彼女は重大な勘違

いをしているのかもしれない、と弥彦は真九郎の世間体を心配した。

「そうだ。風呂と言っても真九郎の家には風呂場がないのでな、五月雨荘の近くにある銭湯というところに行くのだが、まあその話はいい。でだな、風呂の湯に浸かる時は真九郎は腰に巻いたタオルを取るのだ」

「そりゃあそうだろうな」

弥彦が相槌をうつ。

「その時にわたしは確かに見た！真九郎の股座にある得体の知れないなにかをな。好奇心の強いわたしはその得体の知れないものに興味が湧いた！」

「へ、へえ」

弥彦と奉莉はお互いに苦笑いを浮かべて紫の話を邪魔しないように途中で適度に相槌をうちながら聞くことに優先した。

「わたしは試しに真九郎に股座にあるものを触ってよいか、と頼んだのだが真九郎は『駄目だ』の一点張りだな。そこでわたしは真剣に考えた。どうやったら真九郎にわたしの頼みをきいてもらえるのかと」

「真剣に考えちゃったのか……」

「うむ。湯船に浸かりながら考えていたのでな、のぼせないようにするのに大変だったぞ」

「そ、それは大変だったわね」

「ああ大変だった。そしてわたしは考えた末に、こちらはお願いしている立場なので真九郎にだけこちらの願いをきいてもらうのは不公平だと思ったのだ。そこでな、真九郎にわたしの好きなところをどこでも触れてよいという条件を提示した。これなら文句は有るまい、等価交換というやつだな」

「おいおい。まさか真九郎さんがその条件を呑んだとか言わないでくれよ」

弥彦は兄弟子が誤った事犯していないかすがるような思いで真九郎の良心を信じていた。

奉莉は自分のことを助けてくれた救世主である真九郎に対するイメージが崩壊しないように「あの人はロリコンじゃない」と胸の中で反芻する。

「残念なことにわたしの提案は真九郎に却下されてしまった。だがその後、直ぐに風呂から出て真九郎は風呂上りで喉が渴いていたわたしに牛乳を買ってくれた。真九郎はやっぱり優しい男だ」

紫はながいながい前フリの話の末に自分が大好きな紅真九郎という男がとても優しいことを弥彦と奉莉に自慢したかったようだ。

「……結局、紫のやつはなにがおかしかったんだ？」

話の道筋が横道に大きく逸れたことで紫が言っていた男の弱点のおかしなところは曖昧になってしまった。

真九郎のことを自慢できたことが嬉しいのか上機嫌の紫は先ほどの話など覚えてはいないかのように足取り軽く交差点の角を曲がる。

弥彦と奉莉はお互いに顔を見合わせて肩を竦めてから九鳳院家のお嬢様の後を追って交差点の角を曲がる。

角を曲がった先にあるのは大通りの公道に面した自動車道。そして、その車線上の片隅に一台の黒塗りの高級車が止まっていた。

それは弥彦が朝の通学途中に見かけた不審人物が運転していた車であった。車の脇で煙草を口に啜えてゆったりと紫煙を吐く黒スーツに身を固めた左目に眼帯を着用している初老の男性。

ただのご老人にしては圧倒的なまでの他者を寄せ付けない剥き出しの刃のような、それでいて年配者としての貫禄からか弥彦の祖父、崩月法泉にも似た厳格な雰囲気がある。

そんな近寄りがたい初老の男性に臆することなく九鳳院紫は堂々とした普段どおりの態度で歩み寄る。その姿を遠巻きに眺めていた弥彦は慌てて紫を男性から引き離そうと駆け寄った。

「おい、紫！そこから離れる！」

弥彦は紫の肩を掴んで紫をその場に止めようとして伸ばした左腕をいつの間にか弥彦の背後に移動していた初老の男性に左腕を掴まれて止められていた。

男性につかまれた左腕はピクリとも動かない。大人を振り払うぐらい造作も無い弥彦の力でも動かせない。

弥彦はそれならばと自由に動かせる右腕で身体を捻り裏拳を男性に叩き込もうと地面を蹴り上げようとしたがその瞬間「騎場！その手を離せ！」という紫の男性を咎める言葉で中断された。

紫の命令に従って騎場と呼ばれていた初老の男性は大人しく弥彦の左腕を掴んでいた手を離すと無駄の無い動きで弥彦の背後から紫の横に移動して佇んだ。

「すまない、弥彦。騎場がとんだ粗相をしてしまった……」

紫は本当に申し訳無さそうな態度で弥彦に頭を下げた。そんな紫の態度に弥彦は意味がわからないと頭を掻いて紫の隣で佇む男性を見上げた。

「ちよつと弥彦！急に走ってわたしをおいていかないでよ、びつくりするじゃないの！」

弥彦の後を追って奉莉が弥彦に駆け寄り、おいていかれた仕返しとばかりに弥彦の頭を小突く。

そして頭を下げている紫の姿を怪訝に思いながら彼女の隣で佇む人物に目を向けた。

「なんだ、騎場さんじゃないの。毎日、紫のお出迎えご苦労様です」

「いえ、自分、これが仕事ですから」

騎場は外見どおりのとても渋い声で奉莉に応えた。

騎場が奉莉と会話をしたことに驚いたが奉莉が騎場のことを承知でいることにも驚いて弥彦は怪訝そうに奉莉に尋ねた。

「知り合いなのか？」

「知り合いつてほどのものじゃないけど、小学校ではちよつとした有名人よ。今日から学校に復帰してきた弥彦は知らないのは当然だけれどね。この人は騎場きはだいさく大作さん。紫の護衛と小学校までの送り迎えをするのが仕事なんですって」

「紫の護衛と出迎え？それじゃあ……」

騎場大作に向ける弥彦の視線が自然と鋭く、敵意のこもったものと

なった。その視線を騎場は真つ向から受け止めても堂々とした主を守る守護者の貫禄と態度を貫き動揺など微塵も見せることはない。だが、僅かに老いてもまだ闘志の宿る右目の瞳が鋭いものとなり弥彦を睨み返した。主に仇なす敵だとも思われたのかもしれない。

「騎場はわたしの近衛隊だ」

弥彦と騎場の睨み合いを傍観していた紫が口を開いた。それは騎場に自分の身の安全を任せた主たる貫禄と絶対的な信頼からなる宣言だったのかもしれない。

騎場大作。黒いスーツで身を固めた近衛隊の人間。左目を覆う眼帯と歴戦の兵でも通用するような屈強な肉体と揺るがない主への忠誠。手持ちで飛び道具を所持しているかどうかは弥彦の目では判断できないが、この自然と身体が一步後退してしまいそうな迫力と存在感。弥彦は核心をもった。この男は九鳳院家を守護する近衛隊のなかでも特別な存在。銃火器や飛び道具を扱うことを良しとしない一部の人間。

「騎場さんは幹部クラスとかいう近衛隊の人間なのか？」

「そ、それは……」

弥彦の問いに紫は戸惑うように曖昧な言葉で答えを濁す。

「お嬢様、そろそろお時間です」

車の後部座席の入り口の扉を開いて騎場は紫に話を切り上げるように促した。

いくら武装集団の近衛隊といえど執事の真似事ぐらいはできるらしい。あまりに板についた騎場の執事姿に弥彦は苦笑する。

紫はもうすこしだけ弥彦と奉莉の二人と一緒に居たいように一瞬だけ不満そうな顔をする。まだ友達と遊びたい年頃。だが、そこは九鳳院の子女。公私混同の区別と理解をしており気持ちの切り替えは早い。

騎場に促されるままに紫は車の後部座先に乗車。閉められたドアの窓ガラスを下ろして車内から顔を覗かせる。

「……すまない、弥彦。その質問の答えはまた今度の機会に答えよう。わたしは忙しい身で今日も九鳳院の者として会合に出席せねばならないのだ」

「そうなのか。大変なんだな九鳳院家つてのは……時間をとらせてすまなかつたな」

「いや、よいのだ。わたしは友達と一緒に登下校できることが嬉しい。また明日も一緒にわたしに付き合ってもらってもよいか？」

ドア越しに不安そうな顔を浮かべて紫は弥彦と奉莉の顔を交互に視線を巡らせて二人にお願いした。

いつもは堂々とした気丈な態度が印象に強い紫ではあったが彼女の表裏のない性格からかそんな態度から一変して気弱に振舞われると弥彦は紫に弱い。

弥彦の隣に立ち並ぶ奉莉が力強く弥彦の肩を叩いてから満面の笑みを紫に見せた。それは友人に願いを断られたらどうしよう、という紫の不安な気持ちを吹き飛ばすような屈託のない明るい笑みだ。

「もちろんよ！あたりまえでしょうが。紫がわたしたちと一緒に帰りたいなんて言わなくてもわたしが無理やりにも一緒に帰るわよ！」

「無理やりにもって、おまえな、それじゃあ紫が迷惑するだろうが……」

「……えーっと、もしかして、わたしたち迷惑だった？」

今度は奉莉の表情に暗い影が立ち込める。女の子というのはまるで天気のようにコロコロと表情が様変わりするものだ。

「そんなことはない。むしろ奉莉には感謝しているぞ」

「よかつたあ。『おまえは迷惑だ』なんて言われたらどうしようかと思つたわ。今日はわたしと弥彦の二人だけしかいなかったけど明日は杏も一緒に帰れると思うから期待しといてね」

「うむ。それは明日が楽しみだ。それじゃあ二人ともまたな………
…騎場、出せ！」

紫の合図に従い九鳳院家のお嬢様を乗せた高級車は車道の隅に横付けされた位置から静かに滑らかに出発。

車の赤い色のバックライトが見えなくなるまでその後ろ姿をその場で眺めていた弥彦と奉莉は一度、黄昏色に染まる空を頭上に仰いでからお互いに手を差し伸べて握り合う。

ふたりは手を繋ぎ帰りの電車が待つ駅までお互いに幸せをいっっぱい噛み締め感じながら歩いた。カラスの鳴き声や野良犬の遠吠えや商店街の雑踏は二人には煩わしい雑音のような気がした。

商店街の惣菜屋で主婦とその子供が今夜のオカズについて楽しそうに話している姿を視界に捉えた弥彦はそういえば、と不意に湧いてきた疑問を奉莉に尋ねる。

「あのさ、奉莉んところの親は迎えに来ないのか？おまえんところの

親が迎えに来たところを見た記憶がないんだが」

小学校では昨今の犯罪事情から児童を守るために児童の登下校の際には保護者の送迎を推奨している。

普段は弥彦と奉莉ともうひとり、林原杏の三人で下校しているのだが彼女は保護者の都合がついたので今日に限り親の出迎えがあったのだ。杏が下校時に一緒にいないのはそういった事情があった。

だが、奉莉に関しては別だ。彼女は4月の初頭に弥彦と共に誘拐事件に巻き込まれている災難な経験がある。

奉莉の保護者はそんな経験から二度と自分の娘にそんな過ちが起きないように忌避するために毎日でも下校時には迎えに来てもらいたいだろうに、奉莉の保護者が彼女を学校まで迎えに来たことはただの一度もない。

そんなことを思い出した弥彦は奉莉に尋ねずにはいらなかった。奉莉は弥彦の質問に「なーんだ」といった様子で特に気に留めるような程度のことではないと弥彦に言う。

「うちって両親が共働きなのよね。パパは会社でバリバリの営業マン。ママは幼稚園の先生。二人ともわたしの帰る時間帯にはまだ働いているからどうしたって迎えには来れないわ」

「へえ、なるほどな」

家で一人でいる時間が長かったせいかな奉莉は芯の強い子供に成長したのだろう。彼女が七歳で少々大人びている雰囲気があるのも頷ける。

「それじゃあ、いつも家でなにしてた？」

「そうね……とりあえず学校の宿題を済ませてから適当に暇をつぶ

しているわね」

「ひとりですか？」

「あたりまえじゃないの。そりゃあ、友達の家遊びにちよくちよく行くこともあるけど大体は家で独りで留守番しているわ」

「寂しくないのか？」

弥彦の問いに奉莉が答えるのに少しだけ間があった。それは彼女の気持ちを表しているかのようだ。

「……………慣れてきているから、寂しくはないわ」

いとも簡単に弥彦の嘘を見抜くのは奉莉の得意技だが、彼女自身は嘘を吐くのは苦手のようだ。

奉莉の擦れる小さな声と弥彦と繋いだ手を強く握り返してくる動作に弥彦は決意した。

「決めた！今日は家に来いよ。なんならお母さんに頼んで奉莉の分も夕飯作ってもらうからさ」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！？そんな勝手に……………！」

「なに、心配すんなって。お母さんは奉莉が家に来るなら大歓迎だろっし、お祖父ちゃんも夕食の席に可愛い女の子が増えるなら喜んでくれる。散鶴もなんだか知らないが奉莉には心を開いているし、夕乃お姉ちゃんだって俺の彼女を屋敷から追い出すような真似はしないよ」

「で、でも……！」

「そういえば、奉莉を家に招くのは初めてだったっけか？ 自慢じゃないが家は結構凄いいんだぞ。TVの旅番組で紹介されるような日本家屋より歴史はあるし敷地も広い。裏手には井戸や道場もあるし風呂もデカイぞ。どうだ、興味が湧かないか？ 一度だけでも見てみたくないか？」

弥彦は奉莉を屋敷に招こうと必死だ。とりあえず奉莉が興味を引きそうな屋敷の間取りを説明してみたが彼女は興味を持ってくれるだろうか。

弥彦に手を引かれながら歩いていた奉莉の両脚が止まった。そして彼女は弥彦と繋いでいた手を解いてその場で立ち止る。

弥彦は慌てて振り返りそのまま奉莉に歩み寄る。奉莉はやはり弥彦の急な提案に戸惑っているらしく普段では見ることはない彼女の不安で臆病な顔がそこにはあった。

「……………いの」

「うん？」

「……………いの？」

「いいに決まってるだろ」

「わたしが弥彦の家に行つて迷惑なんかじゃない？」

「迷惑だなんてうちの家族は誰も思わんよ。家族で一番迷惑をかけた俺を許してくれるような気前が良くて温かい人たちだ。きつと奉莉のことを気につてくれるし迎え入れてくれる。絶対だ、約束する」

「……………いきたい」

それはただ一言。天王寺奉莉の寂しい思い出と記憶からなる本心から出た言葉か。

嘘でも真でもどちらでもかまわない。奉莉の口から了承を得た弥彦はその場で小躍りしたくなるぐらい気持ちが良い上がる。

弥彦は奉莉の背後に移動すると彼女が背負うランドセルを無理やり奪い取ってから奪い取ったランドセルを左肩に背負う。そして悲鳴をあげる奉莉を両腕ですくい上げて胸の前で抱きかかえる。

「我が家に一名様、ごあんなーい！」

「えっ！？ちよつと待つてつたら！」

「ちよつとも、すこしも、待たない！」

絶好調な弥彦は軽々と奉莉を抱きかかえたまま商店街を疾走する。前方から歩いてくる人々や前方を歩く人々を巧みに避けながら全力疾走だ。

商店街を利用していた人々は奇妙な子供が可笑しなことをしてかしているぞ、と好きな視線を弥彦と奉莉に向けるがそんなことは弥彦には関係のないもの。

「ちよつと、どこまで行くつもりよ!？」

「もちろん、俺の家までだ！」

「電車に乗らないつもり？」

「乗るに決まってるんだろ！」

「まさか、この状態のまんまなんて……」

「そうだ。そのまさかだ！しっかり腕に掴まっているよ。俺に振り落とされないようにな！」

「恥ずかしいからさすがに駅に着いたら降りなさいよ！」

「えー」

「えーっじゃなくて！」

腕の中でジタバタと暴れだした奉莉に四苦八苦しながらも弥彦は依然と奉莉を腕の中で抱えたまま全力疾走。

商店街を抜けて駅前に辿り着いた弥彦は奉莉の望みどおり名残惜しそうに彼女を地面に降ろした。

左肩にかけていた奉莉の真っ赤なランドセルを彼女に返してから落ち着かない弥彦はどこか興奮気味だ。

「今日は最高の気分だ。なんたって家族に自分の彼女を紹介できるからな！」

「わたしたちの関係は両親にも誰にも秘密だっという話じゃなかったかしら？」

「そりゃあ無理だ。今朝、お母さんにバレた」

「このバカあーッ！」

スパーンツ！と奉莉が弥彦の頭を叩いたとは思えないほど気持ちのいい高音が駅舎内に響く。叩かれた頭を手で擦りながら弥彦は反省

の色が窺えない様子で口を尖らせる。

「いいじゃないかへるもんじゃないんだから」

「そういう問題じゃないの！ああ、今日の教室での紫といい、あんたのママといい、こんなにも早くわたしたちの秘密がバレるなんてあんまりだわ」

落ち込んだ様子で両肩を気落とす奉莉の手を引いて改札口を潜り駅のホームに弥彦たちは移動した。

そして弥彦たちが駅のホームにあらわれたことを合図とするようにタイミングよく駅のホームに帰りの電車が滑り込んでくる。

電車の車両が最後尾で止まる位置で待機していた弥彦と奉莉はホームで走行する電車の横風を頬に受けて目を細める。

すると弥彦は電車の車両に背を向けるように奉莉の前に立ちはだかると彼女の両肩に両手を添えた。落ち込んでいた奉莉はそんな弥彦の行動に心臓が跳ね上がりそうなほどに気持ちを高鳴らせる。

弥彦の添えられた両手は奉莉が羞恥のあまりその場を逃げ出そうとしても逃げることを許さないように彼女をしつかりと捕らえていた。

「俺が悪かった、謝るよ。機嫌を直してはくれないか」

「……弥彦が思っているほどわたしはあんたのことを怒ってはいないわよ。さっきは急に叩いたりしてごめんなさい」

電車が駅のホームに到着してドアが自動で開かれる。開かれたドアから車両を降りるサラリーマンや学生たちが人の波となって流れ出してくる。

その人波に3秒にも満たないとても短い時間の間、弥彦と奉莉は揉みくちやにされながらも弥彦は奉莉を人波から守るようにしつかり

と胸の中で抱きしめて、そして……。

津波にも負けない勢いがあった人波から開放された弥彦は電車の発車のベルがホームに鳴り出したところで車両に乗車した。だが、奉莉はというと心ここに有らずといった様子で呆然と焦点の定まらない瞳を浮かべて駅のホームで立ち尽くしていた。

そんな奉莉の姿を怪訝に思った電車の最後尾に乗車していた駅員が「お譲ちゃん、乗らないのかい？」と彼女に声をかけてると我を取り戻した奉莉は慌てて弥彦が乗る車両に乗車した。

電車のドアが自動で閉まり緩やかに電車は出発。ドアの扉に背中を預けて弥彦は顔を朱色に染めた奉莉に声をかけた。

「このまえはちゃんとできなかったからお返しにな。今度は気絶しなかっただろ？」

悪戯の笑みを浮かべて弥彦はそう言うのと奉莉は「あんなねえ！」と声を荒げようとしたが場所が電車内なので咄嗟に口を自分の両手で塞いだ。

恨めしそうな奉莉の瞳を受けてめて弥彦は微笑み、自分の気持ちを彼女に伝える。これは彼女にとっての確認手段。気持ちの整理のようなものだ。

「俺は奉莉のことが大好きだ。他の誰でもない天王寺奉莉という女の子を愛している。この気持ちに嘘、偽りは無いよ」

弥彦の突然の告白に奉莉は彼を怒鳴ろうとした気持ちが霧が晴れていくように胸の内がすっきりするのを感じていた。

「この気持ちを誰かに公開したところで俺の気持ちが揺らぐことはないし、ましてや変わることもない。それじゃあ訊くが奉莉は誰かに自分の好きな相手を知られたからといって心変わりをするのか？」

弥彦の問いに奉莉は無言で首を横に振った。

「ならいいじゃないか。自分の愛情に他人を気にして嘘を重ねるのは良くないと思う。いつかそれが引鉄しきがねとなってお互いに壊れちまう。それなら、いつそう忘れてしまったほうが何倍もいい。だが、俺たちは違う。もう俺たちは相思相愛だ。お互いに気持ちを通じ合えているのならそれは幸せなことだと俺は思うんだ」

「まるで自分に酔っている男の臭い台詞ね」

「気に入らなかったか？」

また奉莉は無言で首を横に振った。そして今度は口を開く。

「でも、そんな男をわたしは好きになっただし、そういうロマンチックな台詞って結構好きなほうよ。あんた限定でね」

「それはどうも」

飄々とした掴みどころの無い弥彦の態度に奉莉は苦笑すると弥彦の肩を抱き寄せて周囲の乗車客に気取られないようにこっそりと彼の頬にキスをした。

軽い頬へのキスはほんの一瞬だけの間、弥彦の気持ちを動揺させる。彼の頬から顔を離すと奉莉は揺れる電車の振動に身体を左右に揺ら揺らさせて微笑んだ。

「弥彦のママの手料理楽しみだな。期待させてもらっていい？」

「ああ。腹が膨れ上がるほどうちのお母さんの料理は一級品だ。き

つと明日はおまえ相撲取りになつてるかもな」

「それは冗談でも笑えないわね。まあでも弥彦の家にお邪魔するのは初めてだし、とつても緊張するのよな」

「自分の家だと思つてくつろげばいいさ」

「そんなにわたしの神経は凶太くないわよ。そうね、まず最初に弥彦の部屋を拝見しようかしら。男の子の部屋がどんなものか興味があるし、もしかしたらHな本が隠れているかもしれないからね」

「あー。俺の部屋は一番最後の後回しな」

「ぜーったい、嫌」

今日もまた電車はどこまでも続く線路に沿って走り出す。

黄昏の夕日を背に浴びながらふたりの男女を乗せて走り出す。

ふたりの次の目的地はいつたいいどこなのだろうか。

第三十七話 日常への再帰（後書き）

ご感想を心よりお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9594j/>

紅～転生者の話～

2011年1月27日12時43分発行